

— 茨城県土浦市 —

**山川古墳群確認調査  
西谷津遺跡  
北西原遺跡(第6次調査)  
神明遺跡(第4次調査)**

土浦市総合運動公園建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集

2003

土 浦 市  
西谷津遺跡調査会  
土浦市教育委員会

— 茨城県土浦市 —

**山 川 古 墳 群 確 認 調 査  
西 谷 津 遺 跡  
北西原遺跡(第6次調査)  
神 明 遺 跡(第4次調査)**

—— 土浦市総合運動公園建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集 ——

2003

土 浦 市  
西谷津遺跡調査会  
土浦市教育委員会



西谷津遺跡 全景

## 序

土浦市は霞ヶ浦に注ぐ桜川の河口部に位置し、古くから歴史と文化に恵まれた街です。市内各所には、長い歴史をもつ様々な文化財が今なお数多く大切に保存されています。

平成元年度以後、市内西北部の常名地区におきましては、土浦市が計画する新しい総合運動公園の建設が予定されております。この建設予定地内に存在する埋蔵文化財につきましては、関係機関と保存のための協議を行いましたが、遺跡の現状保存が困難な場所に対しては、記録保存のための発掘調査を行うこととなりました。その結果、平成5年度以降、断続的ではありますが発掘調査が継続してとり行われております。

この調査によって発見された多くの資料や成果につきましては、研究者のみならず、これからの土浦市の歴史資料として広く市民の皆様に対しても保存し、活用いただけるよう心掛けて行きたいと存じます。合わせまして、今後も地域に残された貴重な文化財の保護につきましても、皆様の一層のご理解をいただきたいと願うものであります。

最後になりますが、今回の調査にご協力とご指導いただきました関係各位の皆様方に心よりあつく感謝申し上げます、ごあいさついたします。

平成15年3月  
土浦市教育委員会  
教育長 尾見 彰一

## 例 言

1. 本書は、土浦市大字常名字山川2748他所在の山川古墳群の確認調査、同市大字常名字西谷頭3712他所在の西谷津遺跡発掘調査、および同市大字常名字北西原2641他所在の北西原遺跡第6次調査、同市大字常名字神明2757他所在の神明遺跡第4次調査の調査報告書である。
2. これらの発掘調査は、土浦市（担当：都市整備部公園緑地課）から委託を受けた、西谷津遺跡調査会が実施した。調査と報告に当っては、各々が離れた地点にある4つの遺跡を同一年度中に同一の契約内容の下で執り行う必要があったため、山川古墳群と西谷津遺跡を有限会社日考研茨城に、北西原遺跡を駒澤大学考古学研究会に、神明遺跡を市担当職員にと3者へ分担した。調査全体の総務・統括、報告書の編集は比毛君男（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が行った。
3. 第3章山川古墳群の確認調査と第4章西谷津遺跡の発掘調査は、小川和博・大淵淳志〔有日考研茨城〕が担当し、遺物の整理および原稿執筆は小川が行った。調査期間は、山川古墳群確認調査が2002（平成14）年7月17日から7月23日まで、西谷津遺跡発掘調査が2002（平成14）年7月30日から9月21日までである。整理作業は、有日考研茨城にて10月1日から12月15日まで行った。
4. 第5章北西原遺跡第6次調査は、駒澤大学文学部助教授酒井清治が主任調査員となり同教授飯島武次指導の下、2002（平成14）年7月30日から8月24日まで行った。整理作業は10月1日から12月まで駒澤大学で行い、原稿執筆者は文末に記した。
5. 第6章神明遺跡第4次調査は、比毛君男が担当した。発掘期間は2002（平成14）年7月18日から9月26日までで、以後神明遺跡の整理、全体総括や事務を2003（平成15）年3月15日まで行った。執筆分担は、縄文土器と土坑に関する部分を福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）が、石器にかかる部分を窪田恵一（西谷津遺跡調査会調査員）が、第1章、第2章及びそれ以外の部分を比毛が分担して執筆した。
6. 遺跡群の航空写真および全体図の作成は、(株)シン技術コンサルに依頼した。
7. 発掘調査および報告書の作成にあたり、下記の諸氏または諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略・50音順）  
秋山淑子 飯森康弘 池尻篤 石塚宇紀 石橋充 石守晃 稲田義弘  
稲葉昭智 井上巖 茨城県教育委員会 岩松和光 宇留野主税 大塚雅昭 折原覚  
川村満博 元興寺文化財研究所 木暮直隆 工藤朱里 國見徹 越田賢一郎 小林孝秀  
駒澤大学考古学研究会 駒澤大学発掘実習生 近藤壮悟 斎藤新  
嶋田圭吾 高島裕之 高野晶文 高見哲士 立川明子 土浦市都市整備部公園緑地課  
土浦市文化財保護審議会 中島直樹 林純子 日高慎 広瀬季一郎 馬杉麻奈 桃崎祐輔  
吉澤悟
8. 本報告書に関わる出土品および記録図面・写真などは、一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。なお、記録や遺物の整理・保管に際しては、山川古墳群確認調査にUY、西谷津遺跡発掘調査にUN、北西原遺跡第6次調査にUK6、神明遺跡第4次調査にUS4という略号を与えている。

# 凡 例

1. 今年度の土浦市総合運動公園建設事業に伴う発掘調査は、例言2の通り調査主体を三者に分割して発掘調査・報告を行った。そのため、各章ごとに報告の書式は、各調査主体の資料に対する判断基準によって細部に差異が生じている箇所がある。
2. 山川古墳群の確認調査は、基準点と座標を昨年度確認調査に準拠した。第3章挿図中のX/Y値は、この座標に準拠した数値である。確認調査にあたり、トレンチの設定は現地形や土地利用状況などに応じて最低限の変更を行っている。
3. 実測図中の表示は以下の通りである。下記以外は注釈を付し任意の表示を行った。  
確認トレンチ内の遺構：■ 炉：■ 柱痕：■  
繊維混入縄文土器：■ 黒色処理：■ 石器自然面：■
4. 第3章と第4章内の遺構・遺物の記述は以下を原則としている。
  - 1) 図の縮尺については、トレンチ平面図が1/400、トレンチ土層断面図が1/80、遺構平面図が1/60、遺物は1/4を基本としたが、必要に応じてスケールを付して縮尺を変えている。
  - 2) 遺物観察表の法量の項目中、( )内の数値は遺物の残存値を示す。
5. 第5章内の遺構・遺物の記述は以下を原則としている。
  - 1) 実測図中の記号表示は、図中に注釈を付した。
  - 2) 図の縮尺は、土坑が1/10、遺物は1/3を基本としたが、必要に応じてスケールを付して縮尺を変えている。
  - 3) 遺物実測図中、断面黒塗りの遺物は須恵器である。
6. 第6章内の遺構・遺物の記述は以下を原則としている。
  - 1) 縮尺は、掘立柱建物跡が1/60、土坑が1/40、土器が1/3、石器は原寸を基本としたが、必要に応じてスケールを付して縮尺を変えている。
  - 2) ピットの記述については、柱穴一覧表内の名称が発掘現場時に採用した正式な名称である。但し、この中でも掘立柱建物跡を構成する柱穴群については、数値の混乱を避けるために建物の記述内で新たに番号を振り直している。双方の対照は遺構一覧表(P.157)を参照のこと。
  - 3) 遺物観察表中の法量の項目中、( )内の数値は遺物の残存値を示す。
7. 各章ごとに共通する遺構・遺物の記述は以下の通りである。
  - 1) 水系レベルは海拔高度を示す。
  - 2) 遺物番号は本文、挿図、写真図版とも一致する。
  - 3) 遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。  
縦穴住居跡：S I      土坑：S K      溝：S D      掘立柱建物跡：S B  
縦穴状遺構：S X      攪乱：K      柱穴：P      古墳：TM
  - 4) 土層や遺物の色調は、『新版標準土色帖』17版(小川正忠・竹原秀雄編著 1996 日本色研事業株式会社)を使用した。

## 西谷津遺跡調査会組織表

〔役員〕	会 長	須 田 直 之 (土浦市文化財保護審議会会長)
	副 会 長	石 毛 一 美 (土浦市教育委員会教育次長)
	理事 (事務局担当理事)	岩 沢 茂 (土浦市教育委員会文化課長)
	理 事	飯 沼 正 勝 (土浦市都市整備部建築指導課長)
	理 事	大 塚 博 (土浦市文化財保護審議会委員)
	監 事	桜 井 正 広 (土浦市教育委員会教育総務課長)
	監 事	山 本 順 一 (土浦市監査事務局長補佐)
	事務局 長	宇津野利雄 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長)
	事務局次長	三 須 洋 一 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長補佐)
	事務局員	加 藤 寛 治 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場主査)
	事務局員	石 川 功 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長)
	事務局員	黒 澤 春 彦 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹)
	事務局員	関 口 満 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹)
	事務局員	堀 部 猛 (土浦市教育委員会文化課主幹)
	事務局員兼出納員	比 毛 君 男 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹)
〔調査員〕	調査主任 (山川古墳群確認調査・ 西谷津遺跡発掘調査担当)	小 川 和 博 有限会社日考研茨城 大 淵 淳 志 有限会社日考研茨城
	調査主任 (神明遺跡発掘調査担当)	比 毛 君 男 上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員
	調査指導 (北西原遺跡発掘調査担当)	飯 島 武 次 駒澤大学文学部教授
	調査主任 (北西原遺跡発掘調査担当)	酒 井 清 治 駒澤大学文学部助教授

## 調査参加者 (50音順)

### ◎山川古墳群確認調査・西谷津遺跡・神明遺跡第4次調査

〔現地調査〕	主任調査員	大 淵 淳 志 小 川 和 博 比 毛 君 男
	作 業 員	飯 村 二 美 及 川 謙 作 大 久 保 敦 子 岡 田 弘 小 貫 徹 也 小 野 豊 木 村 毅 坂 茂 野 酒 井 悦 子 竹 内 政 江 露 久 保 三 郎 友 部 政 夫 中 野 富 美 子 沼 尻 久 子 長 谷 川 は る み 長 谷 部 裕 子 松 浦 博 子 矢 口 な か 吉 島 は な よ
	事 務 員	鈴 木 ひ と 美
〔整理作業〕	主任調査員	大 淵 淳 志 小 川 和 博 比 毛 君 男
	調 査 員	窪 田 恵 一 福 田 礼 子
	作 業 員	新 井 栄 子 飯 村 二 美 石 山 春 美 大 久 保 敦 子 大 淵 由 紀 子 小 松 崎 廣 子 酒 井 悦 子 坂 寄 さ ち 中 野 富 美 子 長 嶺 道 子 長 谷 部 裕 子 長 谷 川 は る み 浜 田 久 美 子

### ◎北西原遺跡第6次調査

調 査 指 導	飯 島 武 次 (駒澤大学文学部教授)
主 任 調 査 員	酒 井 清 治 (駒澤大学文学部助教授)
調 査 員	浅 見 貴 子 (駒澤大学大学院生) 小 野 寿 美 子 (筑波大学大学院生) 高 野 麻 希 (東京学芸大学大学院生) 竹 内 由 香 里 (東京学芸大学大学院生) 宮 下 晃 (駒澤大学大学院生)
調 査 参 加 者	野 内 智 一 郎 (國學院大学学生) 浅 間 陽 青 木 浩 平 青 木 真 兵 石 丸 あ ゆ み 市 川 健 太 郎 植 田 雄 己 宇 野 祐 介 大 井 和 実 粕 屋 良 介 神 山 武 万 駒 形 友 也 小 堀 幸 子 近 藤 貴 徳 近 内 美 由 紀 坂 井 深 雪 佐 藤 絵 里 奈 千 葉 隼 人 坪 倉 早 智 子 中 田 徹 中 村 慶 子 林 紘 太 郎 平 野 武 文 藤 野 一 之 森 屋 雅 幸 山 下 舞 子 (以上 駒澤大学考古学研究会)

# 目 次

口絵 西谷津遺跡 全景（カラー）

序

例言

凡例

目次（図版・写真目次を含む）

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2章 周辺の環境	3
第1節 地理	3
第2節 歴史	5
第3章 山川古墳群確認調査	7
第1節 調査の方法	7
第2節 確認された遺構について	7
第3節 確認トレンチの成果	7
第4章 西谷津遺跡の調査	12
第1節 調査の方法	12
第2節 遺跡の概要	12
第3節 遺構と遺物	14
1. 竪穴住居跡（S I）	14
2. 掘立柱建物跡（S B）	82
3. 土坑（S K）	84
4. 溝（S D）	87
5. 柱穴状遺構（P）	91
6. その他の遺構（S X）	92
7. 遺構外出土の遺物	92
第4節 まとめ	95
第5章 北西原遺跡第6次調査	97
第1節 調査の方法	97
第2節 調査経過	98
第3節 遺構と遺物	100
1. 4号墳	100
2. 1号土坑	106
3. 2号土坑	109
4. 1号溝	109
5. 遺物出土状況	116
6. 遺構出土遺物	117
第4節 まとめ	118
第6章 神明遺跡第4次調査	119
第1節 調査の方法	119
1. 調査の目的	119
2. 地区設定	119
第2節 遺構と遺物	119
1. 旧石器時代の調査	119
2. 掘立柱建物跡（S B）	135



3. 中世ピット群 (P)	147
4. 土坑 (SK)	151
5. 遺構外出土遺物	154
第3節 まとめ	157
第7章 平成14年度調査のまとめ	168
付編 神明遺跡における中世遺物と遺構の検討	169
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 周辺地形と調査区設定図	4	第37図 第11号住居跡炉址	37
第2図 周辺の遺跡 (山川古墳群)	6	第38図 第12号住居跡カマド	37
第3図 確認トレンチ①	8	第39図 第9・10・11・12号住居跡遺物出土状況	38
第4図 確認トレンチ②	9	第40図 第9号住居跡出土遺物	39
第5図 確認トレンチ出土遺物 (西谷津遺跡)	10	第41図 第10号住居跡出土遺物	39
第6図 西谷津遺跡全体図	13	第42図 第11号住居跡出土遺物	42
第7図 第1号住居跡	14	第43図 第12号住居跡出土遺物	42
第8図 第1号住居跡遺物出土状況	14	第44図 第14・15・16号住居跡(1)	46
第9図 第1号住居跡出土遺物	15	第45図 第14・15・16号住居跡(2)	47
第10図 第2号住居跡	16	第46図 第14号住居跡炉址	47
第11図 第2号住居跡出土遺物	16	第47図 第14号住居跡遺物出土状況	48
第12図 第3・4号住居跡 竪穴状遺構	18	第48図 第14号住居跡出土遺物	48
第13図 第3号住居跡炉址	19	第49図 第17号住居跡	49
第14図 第4号住居跡カマド	19	第50図 第17号住居跡遺物出土状況	50
第15図 第3・4号住居跡遺物出土状況	19	第51図 第17号住居跡出土遺物	51
第16図 第3号住居跡出土遺物	19	第52図 第18号住居跡	55
第17図 第4号住居跡出土遺物	21	第53図 第18号住居跡炉址	55
第18図 第5号住居跡	22	第54図 第19号住居跡	56
第19図 第5号住居跡掘り方	22	第55図 第19号住居跡遺物出土状況	56
第20図 第5号住居跡遺物出土状況	23	第56図 第19号住居跡出土遺物	56
第21図 第5号住居跡出土遺物	23	第57図 第20号住居跡	57
第22図 第6号住居跡	25	第58図 第20号住居跡出土遺物	57
第23図 第6号住居跡カマド	25	第59図 第21・22号住居跡 第6号土坑(1)	59
第24図 第6号住居跡掘り方	25	第60図 第21号住居跡掘り方	60
第25図 第6号住居跡遺物出土状況	26	第61図 第21号住居跡 第6号土坑(2)	61
第26図 第6号住居跡出土遺物(1)	26	第62図 第21号住居跡遺物出土状況	62
第27図 第6号住居跡出土遺物(2)	27	第63図 第21号住居跡出土遺物	63
第28図 第7号住居跡	31	第64図 第23・24号住居跡	67
第29図 第7号住居跡カマド	31	第65図 第23号住居跡出土遺物	68
第30図 第7号住居跡遺物出土状況	32	第66図 第24号住居跡出土遺物	68
第31図 第7号住居跡出土遺物	32	第67図 第25・26号住居跡	70
第32図 第8号住居跡	34	第68図 第25号住居跡カマド	71
第33図 第8号住居跡炉址	34	第69図 第25号住居跡掘り方	71
第34図 第9・10・11・12・13号住居跡	35	第70図 第25号住居跡遺物出土状況	72
第35図 第9号住居跡カマド	37	第71図 第25号住居跡出土遺物	72
第36図 第10号住居跡カマド	37	第72図 第27・29号住居跡	75
		第73図 第27・29号住居跡遺物出土状況	75
		第74図 第27号住居跡出土遺物	76

第75図	第28号住居跡	78	(神明遺跡第4次調査)		
第76図	第28号住居跡遺物出土状況	79	第102図	グリッド設定図	120
第77図	第28号住居跡出土遺物(1)	79	第103図	神明遺跡第4次調査区	121
第78図	第28号住居跡出土遺物(2)	80	第104図	調査区東南部掘立柱建物跡検出状況	123
第79図	第1号掘立柱建物跡	83	第105図	南部調査区と検出した旧石器	125
第80図	第1号掘立柱建物跡出土遺物	83	第106図	器種別分布図	127
第81図	第1～5・7・8号土坑	86	第107図	石材別分布図	127
第82図	第1・3・5号溝	88	第108図	北部調査区検出の旧石器(1)	129
第83図	第2・4・6号溝	90	第109図	北部調査区検出の旧石器(2)	130
第84図	第7号溝	91	第110図	水洗選別サンプル設置図	131
第85図	柱穴状遺構(1)	93	第111図	第1号建物跡	136
第86図	柱穴状遺構(2)	94	第112図	第2号建物跡	137
第87図	遺構外出土遺物	95	第113図	第3号建物跡	137
	(北西原遺跡第6次調査)		第114図	第4号建物跡	138
第88図	遺構全体図	97	第115図	第5・6号建物跡柱穴平面図	139
第89図	遺構平面図・コンター図	99	第116図	第5・6号建物跡	141
第90図	4号墳主体部実測図(1)	102	第117図	第7号建物跡	143
第91図	4号墳主体部実測図(2)	103	第118図	第8号建物跡	144
第92図	玄室及び羨道実測図	105	第119図	第9号建物跡	145
第93図	闕石実測図	105	第120図	第10号建物跡	146
第94図	4号墳・1号溝完掘状況	107	第121図	中世柱穴群密集区	147
第95図	2号土坑実測図	109	第122図	柵列1・2	148
第96図	遺構遺物出土状況	110	第123図	柵列3	148
第97図	主体部遺物出土状況図	111	第124図	中世遺構出土遺物	149
第98図	4号墳出土遺物	112	第125図	土坑出土縄文土器	151
第99図	1号土坑出土遺物	112	第126図	第1～6号土坑	152
第100図	1号溝出土遺物	113	第127図	遺構外出土縄文土器	155
第101図	遺構外出土遺物	113	第128図	遺構外出土石器	157

## 写真図版目次

(山川古墳群確認調査)

PL 1 山川古墳群確認調査区全景

PL 2 調査前遺跡近景 14cトレンチ 15dトレンチ 16bトレンチ

PL 3 17bトレンチ 17cトレンチ 18bトレンチ 18cトレンチ 確認トレンチ出土遺物

(西谷津遺跡)

PL 4 西谷津遺跡全景

PL 5 調査区完掘状況

PL 6 第1号住居跡 第2号住居跡 第1号住居跡遺物出土状況

PL 7 第3号住居跡 第4号住居跡 第4号住居跡掘り方 第4号住居跡遺物出土状況

PL 8 第5号住居跡 第5号住居跡掘り方 第5号住居跡遺物出土状況

PL 9 第6号住居跡 第6号住居跡遺物出土状況 第6号住居跡カマド全景

PL10 第7号住居跡 第8号住居跡 第7号住居跡カマド全景 第7号住居跡遺物出土状況

PL11 第9号住居跡 第10号住居跡 第9号住居跡カマド全景 第10号住居跡カマド全景

PL12 第11・12・13号住居跡 第11号住居跡遺物出土状況 第12号住居跡カマド全景

PL13 第14号住居跡 第15・16号住居跡 第18号住居跡 第19号住居跡

PL14 第17号住居跡 第17号住居跡遺物出土状況

PL15 第20号住居跡 第22号住居跡 第23号住居跡 第23号住居跡遺物出土状況

PL16 第21号住居跡 第21号住居跡遺物出土状況 第21号住居跡断面

- PL17 第24号住居跡 第26号住居跡 第24号住居跡遺物出土状況 第24号住居跡断面
- PL18 第25号住居跡 第25号住居跡遺物出土状況 第25号住居跡カマド全景
- PL19 第27・29号住居跡 第27・29号住居跡遺物出土状況 第27号住居跡遺物出土状況
- PL20 第28号住居跡 第28号住居跡遺物出土状況 第28号住居跡断面 第28号住居跡掘り方
- PL21 第1号掘立柱建物跡 掘立柱建物跡 (P9・10 P4 P5・7 P2)
- PL22 第1号溝 第2・4号溝 第3号溝
- PL23 第6号溝 第7号溝 第6号溝断面
- PL24 第2号土坑 第3号土坑 第4号土坑 第5号土坑 第6号土坑 第7・8号土坑
- PL25 竪穴状遺構 柱穴状遺構 (P6・16・17・18・27・28・29・30 P9・10・11・12・13・14・15)
- PL26 P5 P6 P8 P20 P25・26
- PL27 第1号住居跡出土遺物 第2号住居跡出土遺物 第3号住居跡出土遺物 第4号住居跡出土遺物
- PL28 第5号住居跡出土遺物
- PL29 第6号住居跡出土遺物
- PL30 第6号住居跡出土遺物
- PL31 第9号住居跡出土遺物 第10号住居跡出土遺物
- PL32 第11号住居跡出土遺物 第12号住居跡出土遺物 第14号住居跡出土遺物
- PL33 第17号住居跡出土遺物
- PL34 第17号住居跡出土遺物 第19号住居跡出土遺物
- PL35 第21号住居跡出土遺物
- PL36 第23号住居跡出土遺物 第24号住居跡出土遺物 第25号住居跡出土遺物
- PL37 第25号住居跡出土遺物 第27号住居跡出土遺物
- PL38 第28号住居跡出土遺物 遺構外出土遺物  
(北西原遺跡第6次調査)
- PL39 遺跡全景
- PL40 4号墳確認状況 周溝Aライン土層断面 周溝Bライン土層断面 周溝Cライン土層断面 周溝Dライン土層断面
- PL41 周溝Eライン土層断面 墓道短軸Fライン土層断面 墓道短軸Eライン土層断面 墓道主軸ライン土層断面南部分 墓道主軸ライン土層断面中央部分 墓道主軸ライン土層断面北部分 埋葬施設短軸Cライン土層断面 埋葬施設短軸Dライン土層断面
- PL42 埋葬施設主軸ライン土層断面南部分 埋葬施設主軸ライン土層断面中央部分 埋葬施設主軸ライン土層断面北部分 埋葬施設短軸Cライン裏込土層断面 埋葬施設短軸Dライン裏込土層断面 作業風景 闕石見通し
- PL43 埋葬施設裏込検出状況 埋葬施設完掘状況 作業風景 2号土坑完掘状況
- PL44 主体部完掘状況 4号墳完掘状況
- PL45 4号墳周溝出土遺物 4号墳主体部出土遺物 1号土坑出土遺物
- PL46 1号溝出土遺物 遺構外出土遺物  
(神明遺跡第4次調査)
- PL47 神明遺跡第4次調査区全景
- PL48 掘立柱建物群俯瞰 第1号建物跡 第3・4号建物跡
- PL49 第1・3・5・6号建物跡 第1号建物跡P12断面 第5・6号建物跡 第3号建物跡 体験発掘調査風景
- PL50 中世柱穴群密集区 第7・8・9号建物跡・柵列 体験発掘調査風景
- PL51 旧石器北部調査区
- PL52 出土石器 水洗選別で回収した遺物
- PL53 遺構外出土縄文時代石器 土坑内出土縄文土器 中世土器・陶器片 第1号建物跡出土土器皿 第5・6号建物跡出土土器皿
- PL54 遺構外出土縄文土器

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査の経緯と経過

当調査に至る原因は、土浦市で計画する総合運動公園建設事業に伴うものである。現在土浦駅東口側に土浦港に面して川口運動公園がある。1954(昭和29)年完成以来市民に親しまれて続けてきたこの公園は、今日のスポーツ需要に対応するには用地的に狭小で、周辺の市街化状況からも現在の敷地を拡大して対応するのが困難な状況にある。そのため市は、川口運動公園の機能更新を目的に1987(昭和62)年度に「土浦市総合運動公園基本構想」を、1989(平成元)年度には『土浦市総合運動公園基本計画報告書』を策定した。これらによって市の西部にあたる常名地区に、新しい総合運動公園の建設が予定されることとなったのである。

事業予定地内の遺跡との関わりについては、まず1980～82(昭和55～57)年に土浦市教育委員会が実施した市内遺跡の分布調査により、弁才天遺跡・神明遺跡・北西原遺跡・山川古墳群・西谷津遺跡の5遺跡の存在が明らかになった。次いで公園建設事業の具体化に伴い、建設予定地内の遺跡の広がり等を確認する目的から1991(平成3)年に確認調査を実施した。調査の結果、遺跡群は予定地内の台地上の大半に展開する可能性が高く、工事着手前に大規模な記録保存のための発掘調査が必要であることを市当局と教育委員会の両者が確認することとなった。

発掘調査は1993(平成5)年度より始められ、1997(平成9)年度までに弁才天遺跡の全体及び北西原遺跡の大部分、神明遺跡・山川古墳群の一部に至る合計約70,000㎡の範囲が終了した。その後、市の予算状況と事業地内の土地所有者との交渉問題等から発掘調査は一時中断し、2001(平成13)年度に再開した。平成13年度には、神明遺跡約4,400㎡の本調査と、平成3年度の時点で行えなかった区域の確認調査を行っている。

本年度(平成14年度)も、昨年度に継続して調査を行う旨につき公園緑地課より打診があり、担当者間で具体的に協議を持った。その結果今年度の調査は、①昨年度作付けのために行えなかった山川古墳群の確認調査、②昨年度調査区の南に隣接する神明遺跡(2,500㎡)、③公園部の取付道路にあたる西谷津遺跡(1,100㎡)、④昨年度の確認調査で発見された北西原遺跡の終末期古墳(方墳、600㎡)の本調査を行うことが合意された。従来土浦市の発掘調査体制は、市教育委員会が遺跡調査会を組織してこれにあたっていたが、今次のように複数の遺跡の確認と本調査においても一つの契約下で執り行う必要があった。そのため、今年度の調査会名称は今次調査で予定区域の調査が終了する西谷津遺跡の名を冠し、西谷津遺跡調査会と命名された。

以後の調査の進展は、5月17日付けで公園緑地課長より文化課長に提出された「新運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査について(依頼)」を受け、予算折衝の後の7月4日に市教育委員会側が西谷津遺跡調査会を組織した。それと併行して、今年度の調査区が地点毎に離れていることから、各調査区の調査を駒澤大学考古学研究会と有限会社日考研茨城に依頼し、快諾を得ることができた。7月17日より同地の発掘調査を開始し、8月1日付け土教委発第825号によって文化財保護法第58条の2第1項による「埋蔵文化財発掘調査の報告」を茨城県教育委員会に提出した。

文化財保護法第57条の3第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査通知の進達」は、公園予定地内にあたる遺跡については、平成5年度に提出していた。取付道路にあたる西谷津遺跡については、今年度、平成14年5月31日付け土浦市長助川弘之より茨城県教育委員会に提出された。

今次調査は、4ヶ所の遺跡の調査を3つの調査主体に分担して行った。そのため、調査の経過は各遺跡に

より異なっている。以下に調査毎の経過の概略を記す。

- 平成14年 7月17日(水) 山川古墳群確認調査表土除去開始、神明遺跡仮設トイレ・倉庫設置。
- 7月18日(木) 作業員参加。山川古墳群トレンチ精査開始。神明遺跡表土除去・精査開始。
- 7月23日(火) 山川古墳群トレンチ記録化終了。神明遺跡遺構確認平板測量化。
- 7月26日(金) 北西原遺跡表土除去開始。
- 7月30日(火) 西谷津遺跡表土除去・精査開始。北西原遺跡調査開始(第5章第2節を参照)。
- 7月31日(水) 神明遺跡発掘体験(上高津貝塚ふるさと歴史の広場「夏休みファミリーミュージアム」に伴う親子事業)。西谷津遺跡トイレ・倉庫設置。
- 8月1日(木) 以後、3遺跡とも遺構の検出と記録化が進捗。
- 8月10日(土) 神明・西谷津遺跡はお盆休みのため安全管理を行う(11~19日まで休止)。
- 8月24日(土) 北西原遺跡調査終了。
- 9月13日(金) 神明遺跡、旧石器トレンチ掘削と記録化開始。
- 9月18日(水) 航空撮影に向けた精査開始(~20日まで)。
- 9月20日(金) 正午頃、航空撮影。神明遺跡遺構実測続く。
- 9月21日(土) 午後、資材撤収。西谷津遺跡調査終了。
- 9月26日(水) 神明遺跡資材撤収、調査終了。以後10月から12月まで、駒澤大学にて北西原遺跡、  
有限会社日考研茨城にて西谷津遺跡・山川古墳群の整理作業を行う。  
3月まで、上高津貝塚ふるさと歴史の広場にて神明遺跡の整理作業と全体の取り  
まとめを行う。

## 第2章 周辺の環境

### 第1節 地理

土浦市は、茨城県南地区のほぼ中央に位置する人口約13万5000人、面積約91.5km<sup>2</sup>の市である。茨城県全体の中ではやや南寄りの位置にあり、東を霞ヶ浦に接している。市域は、筑波山地から東南に延びる新治台地、古鬼怒川によって形作られた桜川低地、霞ヶ浦の南西部に接する筑波・稲敷台地の三者から成り立っている。

常名台遺跡群は、桜川左岸の標高約26～28mの新治台地上に立地し、土浦市総合運動公園建設事業に伴う事業地内の遺跡を便宜的に総称したものである。これらは、事業地内東側台地を占める弁才天遺跡、広大な西側台地を占める神明遺跡、北西原遺跡、山川古墳群、北側台地上の西谷津遺跡からなる。西側台地の遺跡は、桜川低地を臨む縁辺部に山川古墳群、事業地内ほぼ中央に入り込む谷の南側に接して神明遺跡、台地の中央部から西側にかけて北西原遺跡がそれぞれ位置する。三者の境界は既存の道路や地籍によるものである。事業予定地は南から北へ大きく貫入するT字状の谷が入るが、現在葦などの生える湿地のこの谷はかつて谷の開口部に在る溜め池とともに一連の池をなしていたと伝えられる。現在台地上は荒地または畑地に、斜面部は杉などの林地となっている。

遺跡群のある常名地区は、土浦市内でも中心市街地から北西方向にあたり、常磐高速道路を境として新治郡新治村と接している。その地形は、土浦市手野・木田余・真鍋・殿里と連続する洪積台地の新治台地と、その南に展開する桜川低地、そして両者の接点である緩斜面を有した開析谷の三者から構成される。現在の集落のうち、比較的古い集落は、台地から低地に移行する緩傾斜地や小支谷の出口に営まれているが、新興の宅地は台地上に多い。近世末期の絵図面を見ると、既存の集落が東西方向の道を軸として台地際に営まれていたことが理解できる。現在は失われたが、初期の調査時には常名地区の集落から西側台地を斜めに北上し、西に向う「藤沢街道」（いわゆる筑波道と同じ）と呼ばれる道がはしっていた。

遺跡の立地する新治台地の地層は、下総層群を基盤とし、その層序は下層から藪層、上泉層、上岩橋層、木下層、常総層、新期火山灰層（いわゆる関東ローム層）と続く(註1)。いずれも第IV紀更新世（洪積世）の堆積層である。このうち常総層は上下二層に分層され、下層は砂・砂利を、上層は粘土・シルトを主な堆積物とする層である。また台地斜面の露頭には、木下層が確認されることもある。木下層は、砂及び泥混じりの砂から形成される堆積層である。谷津部分の地質は、後背湿地性堆積物が主体を占める。新期火山灰層は富士・箱根起源の火山灰が風化したものである。なお今次調査では、昨年度及び過去の調査において、層序の特徴は得られたと判断し、縦型トレンチによる断面観察等は行わなかった。

近在の調査事例を参照する限り、遺構の残存具合は各々異なるが、概して遺構確認面下の掘り込みの深い遺構は良好である。ただしながら、近年まで根菜類の栽培が盛んに行われていたため、トレンチャーと呼ばれる掘削機械による攪乱が見られる箇所が多い。その上、戦後暫くまで養蚕に伴う桑樹栽培も行われていたため、現況では確認できない桑の根が地中に残され、その成長により遺構が傷む箇所も存在した。また、近在の人家の墓所や塵芥の廃棄場など、現在に至る土地利用がなされている。

註1 通商産業省工業技術院地質調査所 1988『特殊地質図23-2 筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図』



※平成14年度調査区のうち、1は西谷津遺跡  
 2は北西原遺跡(第6次調査)、3は神明遺跡(第  
 4次調査)を示す。山川古墳群の今年度試掘  
 調査区は14c、15d、16b、17b、17c、18b、  
 18cトレンチである。

第1図 周辺地形と調査区設定図

## 第2節 歴史

土浦市内における周知の遺跡は、現状で約469ヶ所である。これは、平成13年度に改定された遺跡地図の改定作業に伴い、その所在が確認されたものと、以後に新規登録された遺跡の総計である。これらの遺跡の立地上の傾向は、洪積台地上に多く沖積低地は微高地上を除いて希少である点にある。

常名地区とその周辺には、第2図のとおり、多くの遺跡が確認されている。これらの大まかな傾向としては、縄文時代と古墳時代の遺跡が比較的多く分布する点が指摘できる。その中でも古墳群は、地図上の分布をみる限りでは、桜川を臨む新治台地の南側縁辺部に立地しているものが多い。

以下に、常名地区周辺で発掘調査が行われた例を記す。

- ① 1973(昭和48)年2月、常名町字山川2730番地で開墾中に石棺が発見され、骨片の他鉄製の棒、直刀片が発見された。公図上でこの石棺は、今年度の山川古墳群確認調査区に含まれている(註1)。
- ② 1973(昭和48)年11月、殿里町688の3番地にて造園工事中に偶然古墳の石棺が発見され、内部から複数の人骨と鉄製直刀と金属製鏢が見つかった(註2)。
- ③ 1989(平成元)年、土浦市遺跡調査会が常名地内八幡下遺跡を発掘調査する。古墳後期の竪穴住居跡4軒と奈良・平安時代の住居跡8軒、土坑等が発見された。墨書土器、鉄製品などが出土している(註3)。
- ④ 1993(平成5)～1997(平成9)年度まで、常名地区総合運動公園建設事業に伴い北西原遺跡〔第1次～第5次〕、神明遺跡〔第1・2次〕(註4)、弁才天遺跡、山川古墳群が発掘調査された。
- ⑤ 2001(平成13)年、発掘調査暫時中断の後、神明遺跡第3次調査と常名台遺跡群全体の確認調査を行った。前者では縄文時代中期と古墳時代前期の竪穴住居址等が見つかった(註5)。
- ⑥ なお隣村の例だが、1983(昭和58)年には筑波大学によって武者塚古墳が発掘調査された。古墳時代終末期の円墳で、古墳時代人の頭髮が「みずら」の状態で見つかったことで名高い(註6)。

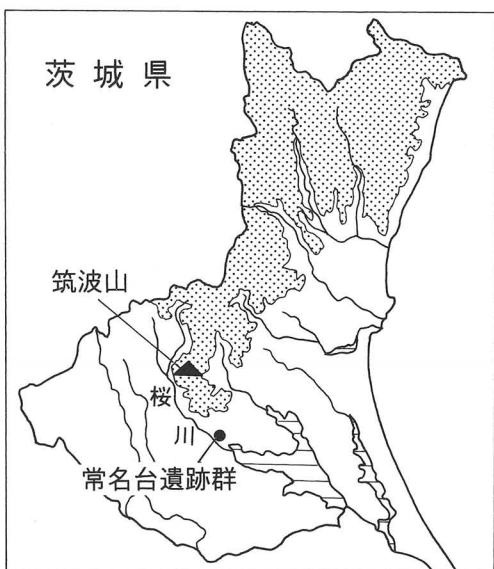
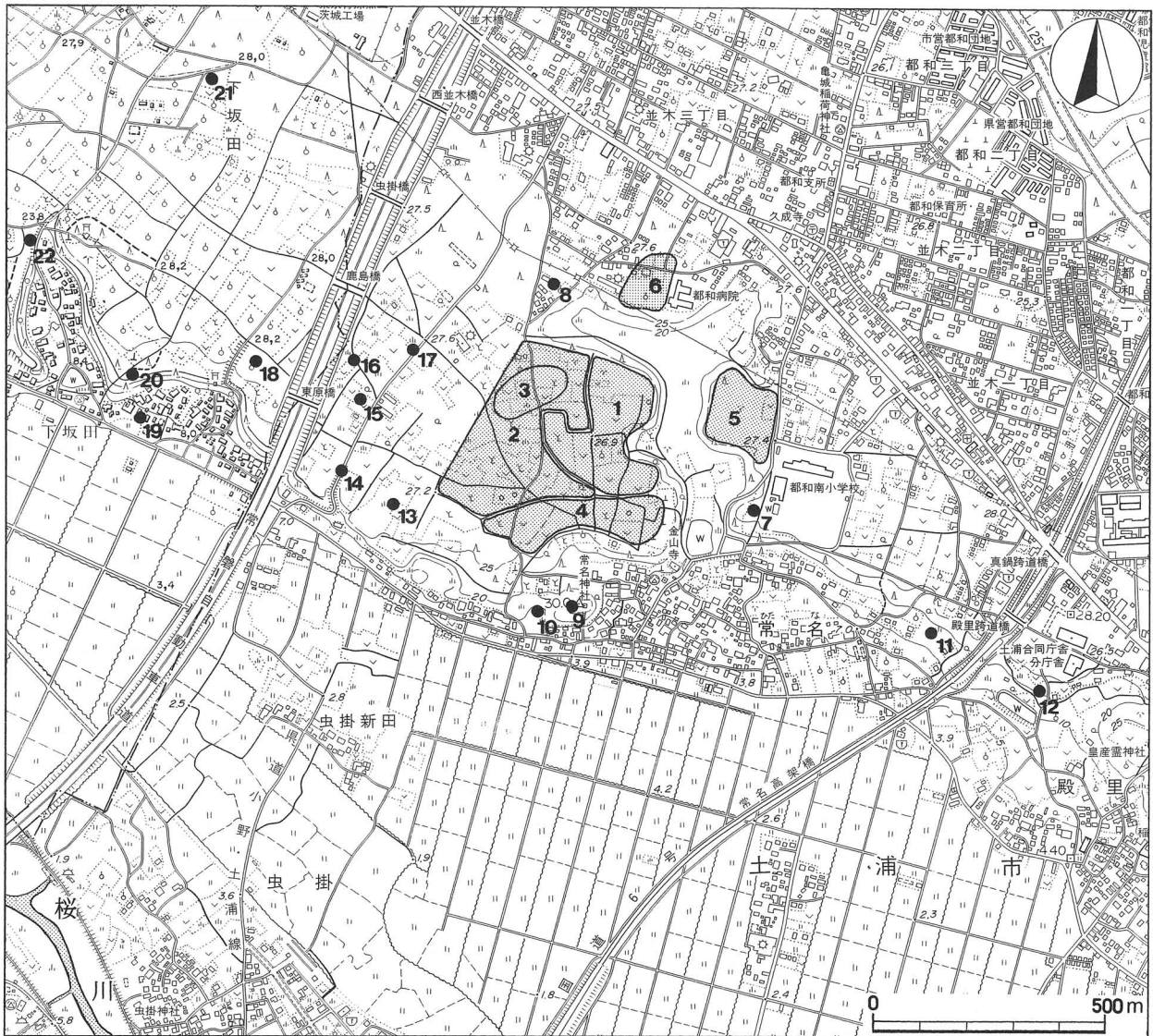
これら過去の事例を紐解く限りでは、古墳時代の遺構の発見例が最も多いことが分かる。これは常名台遺跡群の発掘調査でも同様で、今まで調査された中で最も多い遺構は古墳時代前期の竪穴住居跡で、その数は100軒以上を数える。古墳後期と奈良・平安期の竪穴住居跡も、弁才天遺跡を中心に多数発見されている。古墳については、山川古墳群で古墳前期の方形周溝墓と古墳中期の土師器・須恵器が出土した古墳が、北西原遺跡で終末期の方墳が複数基発見されている。現状では古墳中期の住居が希薄で、後期古墳が未発見であるなど、遺構の連続性に途切れる部分もある。

なお、遺跡地周辺には指定文化財が3件ある。市指定史跡常名天神塚古墳、市指定文化財石造五輪塔と同石造宝篋印塔である。前者は4世紀末から5世紀前半と推定される前方後円墳で位置的に山川古墳群と一連のもの可能性がある。後者は両方とも花崗岩製で、五輪塔は金山寺境内に所在し、室町時代中期のものと推定されている。宝篋印塔の方は、天神塚古墳墳頂にあり安土桃山時代の作に比定されている。

歴史的に見て、遺跡や文化財などの人間の痕跡が多く残っている点と、地理的にも水辺に近く水田化できる低地が広がるなどの点からは、この地が古来比較的人の住みやすい環境にあったことを反映している。

- |    |          |      |                                  |
|----|----------|------|----------------------------------|
| 註1 | 土浦市教育委員会 | 1973 | 『殿里台及び常名台遺跡調査報告書』                |
| 註2 | 土浦市教育委員会 | 1973 | 『殿里台及び常名台遺跡調査報告書』                |
| 註3 | 黒澤春彦他    | 1991 | 『土浦市八幡下遺跡発掘調査報告書』土浦市教育委員会        |
| 註4 | 橋場君男他    | 1998 | 『神明遺跡(第1次・第2次調査)』土浦市教育委員会        |
| 註5 | 吉澤悟他     | 2002 | 『常名台遺跡群確認調査 神明遺跡(第3次調査)』土浦市教育委員会 |
| 註6 | 増田精一他    | 1986 | 『武者塚古墳』新治村教育委員会                  |





番号	遺跡跡	時代
1	神明遺跡 (常名台遺跡群)	旧石器・縄文・古墳・中世
2	北西原遺跡 (常名台遺跡群)	旧石器・縄文・古墳
3	北西原古墳群 (常名台遺跡群)	古墳
4	山川古墳群 (常名台遺跡群)	古墳
5	弁才天遺跡 (常名台遺跡群)	縄文・古墳・奈良平安
6	西谷津遺跡 (常名台遺跡群)	古墳・奈良平安
7	天神脇遺跡	縄文・古墳・奈良平安
8	西谷津西遺跡	古墳
9	常名天神山古墳	古墳
10	瓢箪塚 (挑戦塚) 古墳	古墳 (湮滅)
11	八幡下遺跡	古墳・奈良平安
12	殿里古墳	古墳
13	羽黒後遺跡	縄文
14	坂の上遺跡	縄文
15	小坂の上遺跡	縄文
16	中畑遺跡	縄文
17	アラク遺跡	縄文・中世
18	石橋古墳	古墳
19	下坂田館跡	中世
20	釈迦久保古墳群	古墳
21	坂田稻荷山古墳群	古墳
22	下坂田貝塚	縄文・弥生

第2図 周辺の遺跡

## 第3章 山川古墳群確認調査

### 第1節 調査の方法

今回の調査は常名地区総合運動公園建設造成計画内で、「山川古墳群」として周知されている範囲を対象とした。昨年の本調査を実施した「神明遺跡」の東側にあたり、また同じ遺跡名で確認調査を実施した南西側でも古墳および周溝などが確認されており、さらにその広がりとして当該地内には過去に石棺等が検出されている地点も含まれている。今回の対象地内には部分的に未買収等の箇所もあるものの、当事業予定地内における遺跡の有無およびその性格や範囲などが概ね把握することができた。

確認調査の方法は、昨年と同様トレンチ法により実施した。予め対象地内を網羅するように公共座標に準拠した20mごとにメッシュをかけ、未買収等の状況に合わせて基本杭を設けた。なお確認調査はその基準点から1m南側に離して幅2mのトレンチを設定し調査を行った（第102図 グリット設定図を参照）。

### 第2節 確認された遺構について

前回同様トレンチ法による確認調査は、まず重機により表土層除去および遺構確認面直上まで掘削し、その後人力による遺構確認面までの削平、断面観察のためのトレンチ壁面掘削を行い、今後予想される本調査に対してなるべく遺構の現状維持を図るための処理を考慮しながら実施した。今回の対象地点では遺構の検出面はローム層面に相当するが、重機での掘削はその直上で止めるように努力した。しかし、表土層が薄層でまた耕作が深く及ぶ場合があり、一様の条件下における遺構検出面での確認が不可能なトレンチもあった。

今回の対象地においては20m間隔で5本のトレンチの設定を行った。トレンチの命名については煩雑を避ける意味で前回調査と同様そのままの呼称を踏襲しながら遺構確認を行った。調査の結果、5本のうち4本のトレンチから遺構が検出されている。しかしながら、今回は時期や規模が明確にできる竪穴住居跡や土坑などはなく、溝状を呈した遺構のみの検出となった。

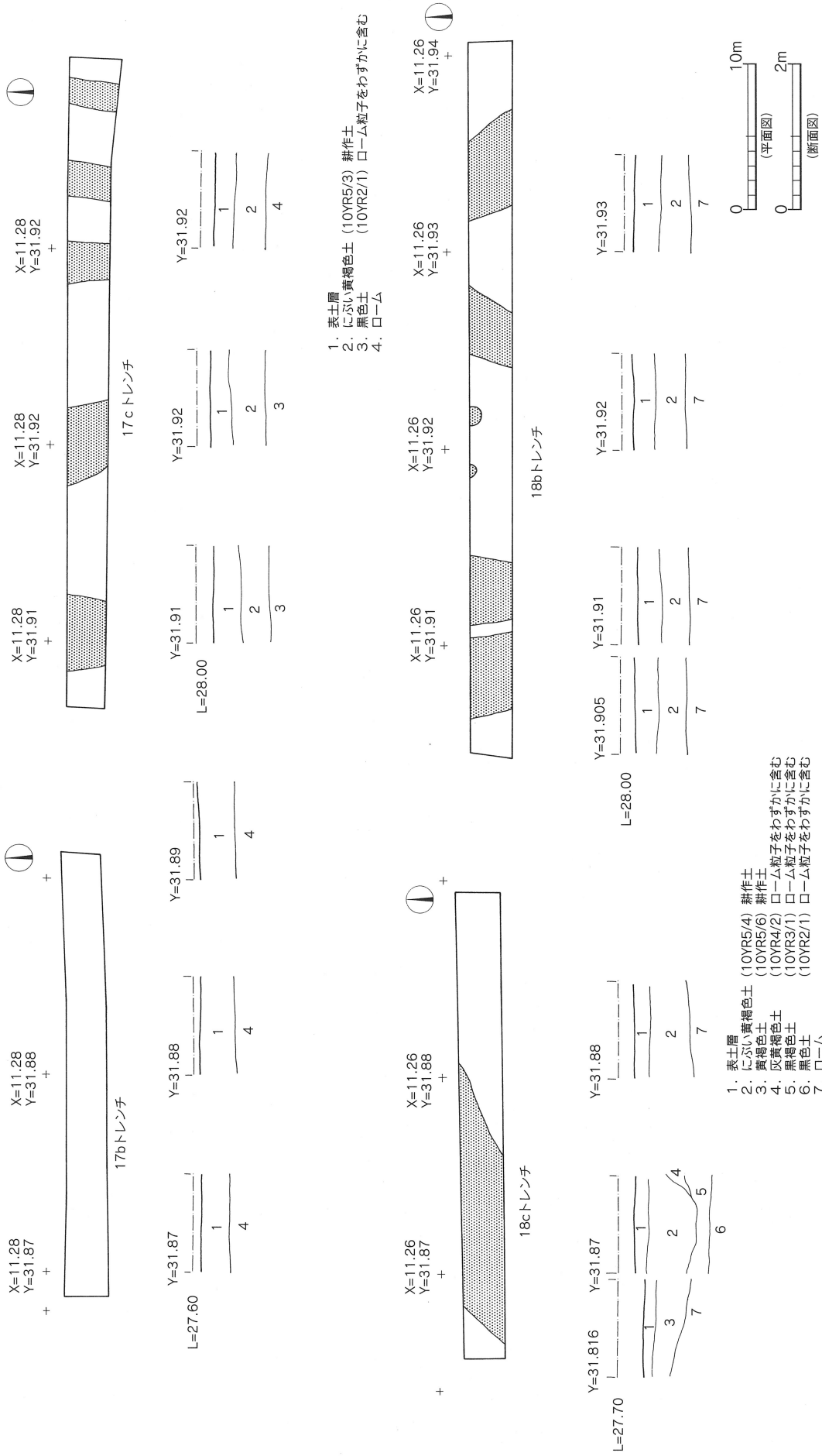
### 第3節 確認トレンチの成果

確認トレンチの番号表記については、前回の命名をそのまま踏襲することになっており、すべて東西方向に設定された14トレンチから18トレンチが対象となり、今回は北側に位置する14トレンチから順次調査をすすめた。幅2mを基本に、長さにおいて長短はあるものの、計7本、総長延べ248.7mにおよび、面積は497.4m<sup>2</sup>を調査した。以下トレンチ毎に調査面積および検出された遺構・遺物等について概観する。

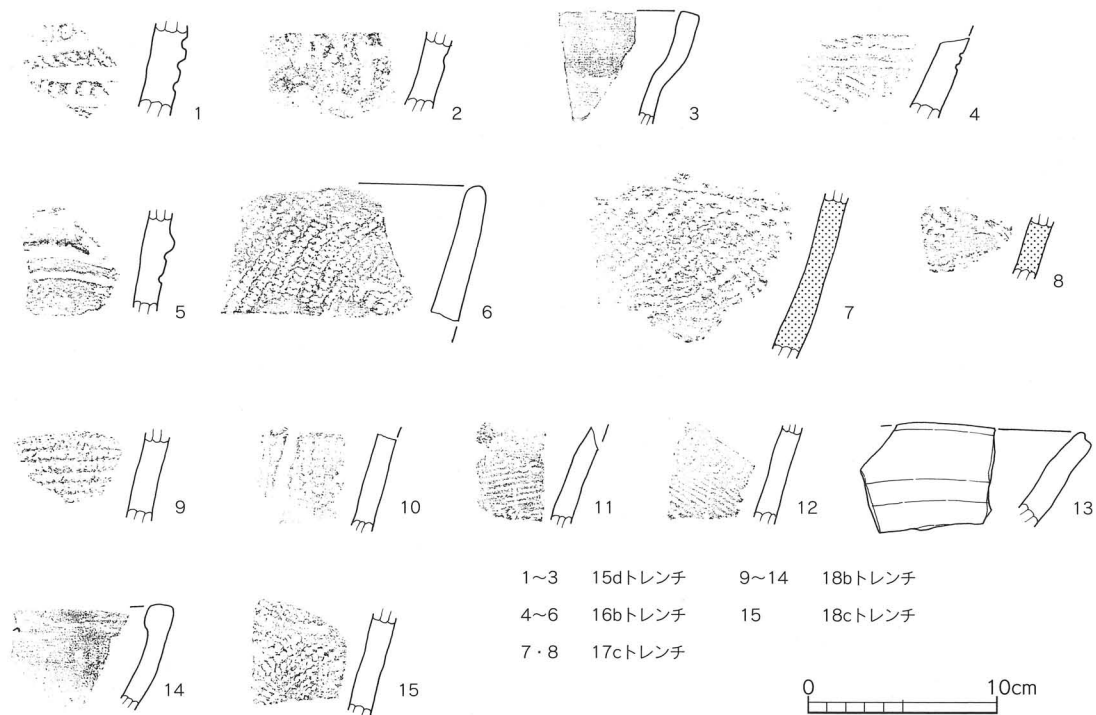
#### 14c トレンチ（第3図、P.L. 2）

先に本調査を実施した神明遺跡の中央部で、桜川低地から入り込む開析谷の南側で台地縁辺部の緩傾斜面に設定されたトレンチである。総長23m、調査面積46m<sup>2</sup>を測る。現況は山林であるが、緩傾斜面のため表土層は薄く、25～30cmでローム層まで達する。また神明遺跡寄りの西側にはぶい黄褐色土の自然堆積層がみら





第4図 確認トレンチ② (17b・c、18b・cトレンチ)



第5図 確認トレンチ出土遺物

れ埋没谷の谷頭部に相当するものと思われる。遺構の検出はなく、遺物の出土もない。

#### 15d トレンチ (第3・5図、P L. 2)

開析谷に向かう先端部付近に設定されたトレンチで、東側が台地縁辺部にあたり、西側も若干低くなる。総長48.2m、調査面積96.4㎡を測る。現況は畑地で、全体の表土層は薄く、西側の大半が20cm、東側の台地縁辺部で32cmである。またトレンチのほぼ全面にローム粒子・ロームブロックを僅かに含み、粘性がなく、締りに欠けるにぶい黄褐色土の落ち込みがみられる。とくに中央部付近では広範囲におよぶ。またこれを中心に溝状遺構あるいは柱穴状遺構などが検出されている。しかし、溝状遺構を除き、明確な形状を呈しておらず、これら落ち込みの性格や時期等の細かな情報は把握できていない。

遺物は縄文土器と土師質土器が出土した。1・2は縄文土器である。1は胴部破片で、3条の隆帯上に単節LR縄文と刺突文を施す。胎土に石英・長石粒を含み、焼成は良好。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。中期中葉・中峠式。2は器面の粗れが著しいが、単節LR縄文を施文する。胎土に雲母・石英粒を含み、色調は明褐色(10YR6/8)を呈する。中期後半・加曾利E1式。3は内耳鍋の口縁部破片。内耳は確認できないが、口縁部が肥厚し、口縁部下に緩い稜を有する。胎土に微細な雲母片を多く含み、色調は外面黒色(10YR2/1)、内面にぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。15世紀前後と推定される。

#### 16b トレンチ (第3・5図、P L. 2)

西側縁が僅かに低く、中央から東側はほぼ平坦な地形上に設定したトレンチである。総長62m、調査面積124㎡を測る。現況は畑地で、全体の表土層は薄く、とくに西側は僅かに20cm前後である。また中央部は30cm前後、東側はやや深く35cmと東側にいくにつれて深くなるものの、表土層下はローム層である。検出された遺構は溝状遺構とピットである。西側にはピット群が集中する。いずれも円形であるが、規則的な配列はみられない。すべて黒色土で覆われている。中央部で溝状遺構が検出され、覆土はにぶい黄褐色土を呈

する。東側は2ヶ所の落ち込みがあり、いずれも覆土は黒色土を呈する。

遺物は縄文土器3点出土している。4は単節LRを地文に平行沈線が幾何学状に施文する。胎土に石英・長石粒を含む。色調は灰黄褐色(10YR5/2)。前期後半浮島式。5も胴部破片で、円形を呈する断面三角形の隆帯を区画し、結節沈線文を隆帯の内側に施す。胎土に金雲母・石英・長石粒を含む。色調は橙色(5YR6/8)。中期中葉阿玉台式。6は深鉢の口縁部破片。小波状口縁を呈し、体部はほぼ直線的に立ち上がる。縄文はLRの縦位回転で施されている。胎土に石英・長石を含み、色調は浅黄橙色(10YR8/4)。中期・加曾利E式。

#### 17b トレンチ(第4図、PL. 3)

調査区の中央部、台地平坦面に設置したトレンチで、比較的短い調査区となった。総長22.5m、調査面積45m<sup>2</sup>を測る。現況は畑地のため、表土層のみで、層厚は25~35cm。遺構・遺物は検出できなかった。

#### 17c トレンチ(第4・5図、PL. 3)

17b トレンチの東側で、台地平坦部から東側縁辺部にかけて設定したトレンチである。総長33m、調査面積66m<sup>2</sup>を測る。現況は山林で、表土層は20~30cmとほぼ平坦である。2層は黒褐色土で、層厚は30cm前後と安定している。3層がソフトロームとなる。検出された遺構は溝状の落ち込みが5条存在する。いずれも覆土は黒色である。ただし、覆土中からの遺物はなく、縄文土器は2層から出土。

遺物として7・8は前期後半・黒浜式である。いずれも胴部破片で単節RL縄文を施すが、7は縦位回転、8は横位回転によって施文されている。胎土に多量の繊維を含み、色調は明赤褐色(2.5YR5/8)を呈する。

#### 18b トレンチ(第4・5図、PL. 3)

平坦面の台地中央部にあたるトレンチで、標高は27.42mを測る。総長23.5m、調査面積47m<sup>2</sup>である。現況は畑地で、深くまで耕作が及び50~70cmまで達している。しかし、部分的に覆土が遺存しており、ローム層上層に層厚15cmのローム粒子を含み、締りのある3層灰黄褐色土が堆積し、下層には遺構の落ち込みであるローム粒子を僅かに含み、締りがある黒褐色土がみられる。

検出された遺構は幅8m前後の溝状を呈し、古墳の周溝の一部と推定される。

遺物は縄文土器2点、弥生土器2点、中世・常滑の片口鉢と土師質土器が出土している。9・10は胴部破片で、9は単節LRを施文し、10は単節RLに沈線による懸垂文を垂下させる。胎土に石英・長石粒を含み、色調は9が暗赤褐色(5YR3/6)。10は浅黄橙色(10YR8/4)。加曾利E式。11・12は弥生土器で、同一個体の胴部破片。単節LRで、S字状結節文が横走る。胎土に大粒の石英粒を含む。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈する。13は常滑系片口鉢の口縁部破片。ロクロ成形で外傾して立ち上がる体部から口縁部は僅かに外反して開く。口唇部に凹帯が巡る。内外面に灰白色の釉が付着し、胎土に石英粒を含む。色調は灰白色(10Y7/1)を呈する。中世。14は内耳鍋の口縁部破片。口唇部は肥厚し、体部は薄手となる。口縁部は内湾気味に立ち上がる。胎土に雲母・石英粒を含む。色調は外面黒褐色(5YR2/1)、内面暗赤褐色(2.5YR3/2)を呈する。

#### 18c トレンチ(第4・5図、PL. 3)

18b トレンチの東側で、台地平坦部から東側縁辺部にかけて設定したトレンチである。総長36.5m、調査面積73m<sup>2</sup>を測る。現況は山林で、表土層は20~25cmとほぼ平坦である。2層は黒褐色土で、層厚は30cm前後と安定している。3層がソフトロームとなる。検出された遺構は溝状の落ち込みが4条とピット1基存在する。いずれも覆土は黒色である。ただし、覆土中からの遺物はなく、1点の縄文土器は2層から出土したものである。

15は前期後半で、単節LRを施文する。胎土に石英・長石粒を含む。色調は灰黄褐色(10YR5/2)である。

(小川和博)

## 第4章 西谷津遺跡の調査

### 第1節 調査の方法

平成13年度の確認調査において第1トレンチとして発掘調査した地点である。既に幅2m、総長91.5m、調査面積183㎡を実施し、トレンチのほぼ全面から遺構が検出された。竪穴住居跡10軒、土坑3基、溝状遺構2条が確認され、時期は古墳時代前期から奈良・平安時代にかけて規模の大きな拠点的な集落跡であることが予想された。本調査はこうした確認調査に基づき、道路建設予定地内を対象に記録保存の処置を講ずることとなった。したがって調査範囲は建設予定の道路幅である15mに限定され、また長さについては確認調査で実施した距離とほぼ同じ99mが対象となった。

まず調査に先立ち、道路建設予定地内に公共座標による基準点を設け、道路工事範囲の杭打ち、樹木の伐採等を実施。さらに発掘機材の搬入など準備完了後発掘調査を開始した。調査区は道路敷地という限定された範囲のため、グリッド設定も変則的になってしまったが、あくまでも常名台遺跡群全体を対象とする調査区設定の関係から踏襲することとなった。そこで座標基準点は図上で操作することとし、調査区内に20m間隔のトラバース杭を設定、それを基準に調査をすすめ、調査後全体図に移動できるように図面作成を行った。

調査区は日本平面直角座標第IX系の $X=11.750\text{m}$ 、 $Y=31.900\text{m}$ の交点を基準点に、10m四方のグリッドを設定し、北東端になる $X=11.750\text{m}$ 、 $Y=31.930\text{m}$ を起点とした。この起点からY軸の東側から数字を、X軸の北側からアルファベットを当て、グリッド名を呼称した。

なお、調査方法をはじめ、遺構の名称、あるいは実測図等の縮尺については、状況において変更する場合もあったが、概ね前回の方法を全面的に踏襲することとした。

### 第2節 遺跡の概要

西谷津遺跡は、常名台遺跡群の北側にあつて、既に本調査が実施されている北西原遺跡、神明遺跡あるいは弁才天遺跡とは占地する台地を異にする。ここは常名台遺跡群全体が共有する桜川低地から入り込む開析谷の最奥部の北側に展開する台地上で、東側にも浅い谷が入り台地を画している。

調査範囲は南面に傾斜する谷奥部の台地上にあたり、標高は27.5mを測り、谷部に向かって緩傾斜しながら低地に移行する。南側約100mの台地には北西原遺跡および神明遺跡が位置する。

今回検出された遺構は、竪穴住居跡29軒、掘立柱建物跡1棟、土坑8基、溝状遺構7条、柱穴状遺構31基、その他の遺構1基である。時期は古墳時代前期、後期、奈良・平安時代である。古墳時代前期は9軒確認された。いずれも覆土は薄く、遺物の出土量は限定されていたが、わずかに第11号住居跡のみが纏まりのある出土を示していた。古墳時代後期は4軒検出された。とくに第6号住居跡は土師器坏の出土量が卓越しており特筆される。奈良時代から平安時代にかけては竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡1棟が検出され、とくに第21号住居跡は青銅製の巡方が出土するなど「和同開珎」が検出された弁才天遺跡との関連で重要度が増した。



第6図 西谷津遺跡全体図



### 第3節 遺構と遺物

#### 1. 竪穴住居跡 (S I)

第1号住居跡 (S I-1) (第7~9図、PL. 6)

**位置** 調査区の南西端部、8 G・8 H区に位置する。住居の大半は調査区外に広がっており、検出面は南壁辺側のみである。

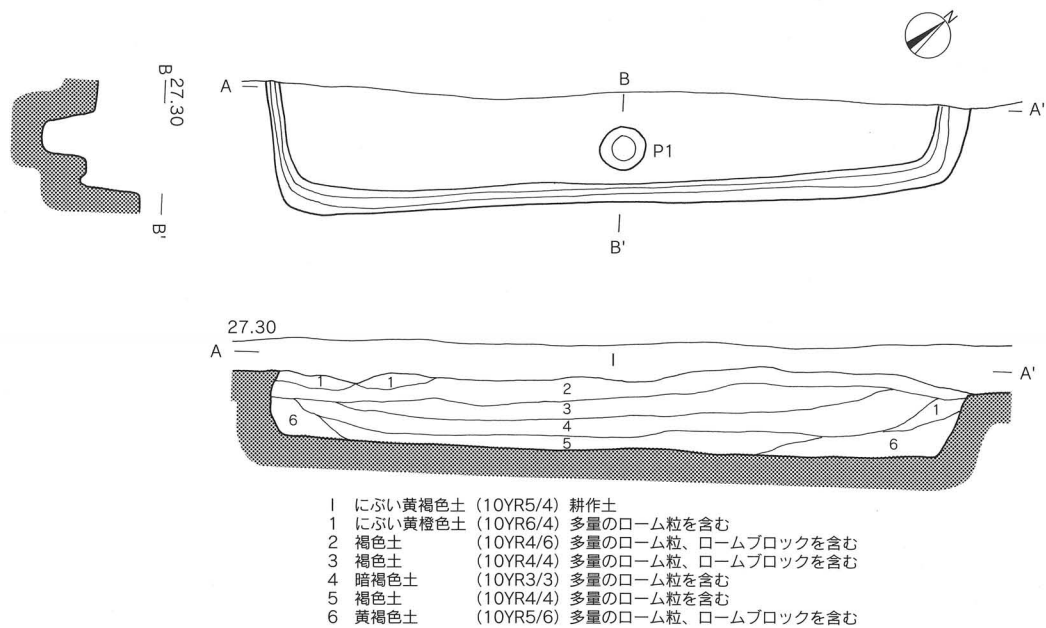
**規模** 検出された南壁辺5.40m、確認幅0.86m。

**主軸方向** カマドの設置位置が確認できないが、北壁に推定するとN-51°-Eを示す。

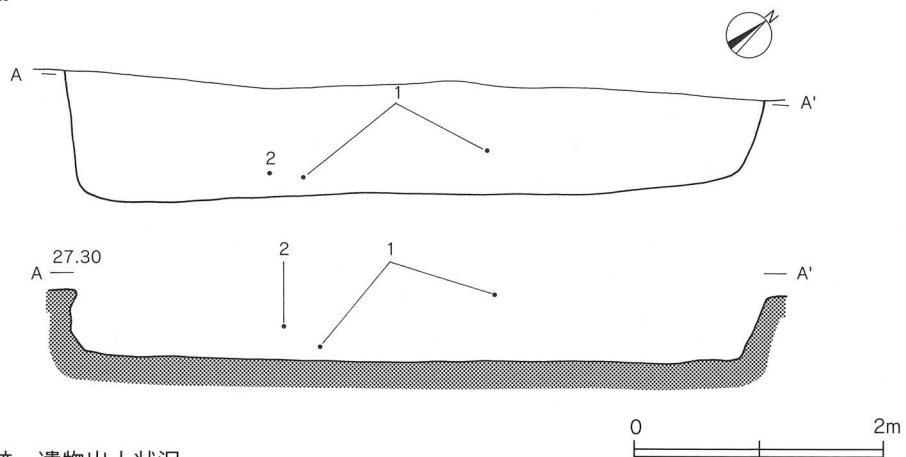
**壁** 確認面からの深さは43cm、ほぼ垂直に立ち上っている。壁溝は検出部で全周する。幅9~21cm、床面からの深さ2~3cm。底面横断面はU字状を呈する。

**床** 確認面はほぼ貼床で、掘り方は15~22cmの深さで掘り込み、ローム粒・褐色土の混合土で貼床を形成している。

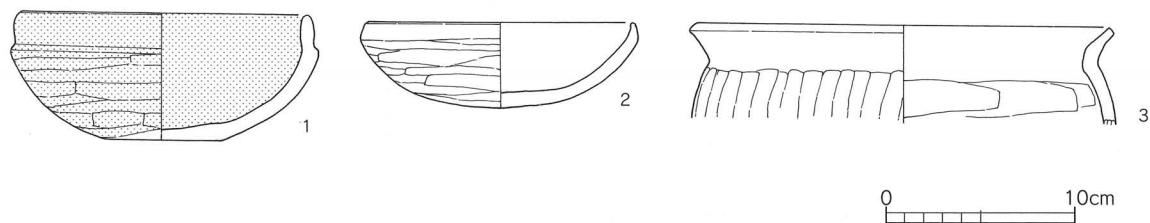
**ピット** 南壁寄り中央に1本検出している。大きさは37×35cm、深さ34cmの円形ピットで、配置から判断して梯子穴であろう。



第7図 第1号住居跡



第8図 第1号住居跡 遺物出土状況



第9図 第1号住居跡出土遺物

カマド 確認できなかった。

覆土 表土層を除き、6層確認された。いずれも埋め戻し土層で、上層の1層は多量のローム粒子を含むにぶい黄橙色土。2層は多量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土。中層3層は多量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土。4層は多量のローム粒子・少量のロームブロックを含む暗褐色土。下層の5層は多量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土が堆積している。また壁際の6層黄褐色土は多量のローム粒子とロームブロックを含む。

遺物 検出面が限定されていたことで、出土遺物は少なく、土師器坏と甕が覆土中より検出された。1の土師器坏は大型の碗形を呈し、平底である。

所見 当住居跡は、出土遺物の様相から古墳時代後期後半に営まれたものと推定される。

#### 第1号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	土師器 坏	口径 15.30 底径 6.00 器高 6.70	平底気味の底部から、体部は内湾気味に立ち上がり口縁部は内傾する。口縁下に明瞭な稜をもつ。	口縁部外面はヨコナデ。体部は横位のヘラケズリの後、ヘラナデ。内面は丁寧なヘラナデ。	石英・長石粒を含む黒色(10YR2/1)良好	体部1/2残内外面黒色処理
第9図 2	土師器 坏	口径 14.35 底径 — 器高 4.48	口縁部下に稜を有し、口縁部は内傾気味に短く立ち上がる。	口縁部ヨコナデ。内面丁寧なナデ。外面体部ヘラケズリ後ヘラナデ。	石英・長石粒を含むにぶい橙(7.5YR7/4)良好	口縁部の一部欠損
第9図 3	土師器 甕	口径 21.80 底径 — 器高 (5.00)	胴長タイプの甕で、頸部から口縁部は弧状に外反する。	口縁部ヨコナデ。胴部内面ハケ状工具によるナデ、外面縦方向のヘラケズリ。	雲母・石英・長石粒を含むにぶい褐色(7.5YR6/3)良好	口縁部のみ1/4残存ススの付着

#### 第2号住居跡(SI-2)(第10・11図、PL. 6)

位置 調査区の南西端、7H区に位置する。住居の西側大半は後世の攪乱により破壊され、北側は第3号住居跡と重複している。

規模 住居跡の大半が攪乱によって破壊され、北壁も明瞭ではないが、東壁コーナーが確認でき、さらに他の壁面も遺存しているため、規模の計測は可能である。長軸である南北軸3.37m 東西軸3.26mの方形を呈する。

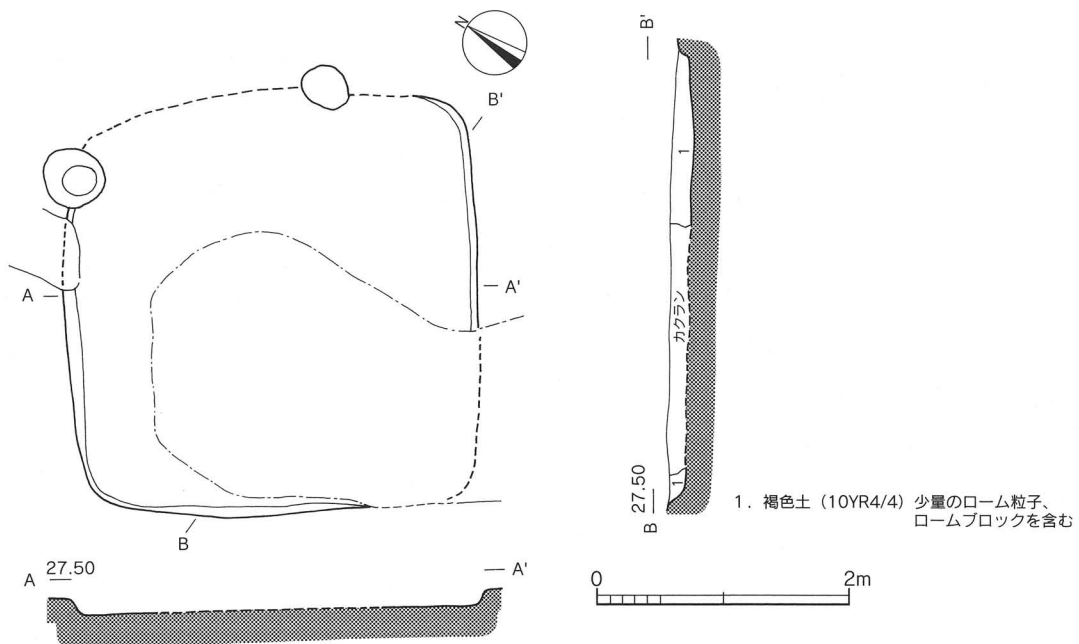
主軸方向 炉址の位置が明確ではないが、北東壁中央に焼土の痕跡がみられ、これを炉と判断し、主軸方向N-61°-Eを示す。

壁 確認面からの深さは5cmと浅く、緩傾斜して立ち上がる。壁溝は構築していない。

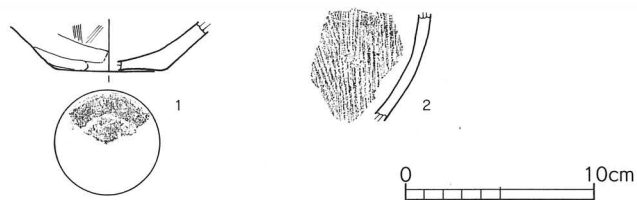
床 起伏はなく、ほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。

ピット 住居の大半が攪乱を受けているため、柱穴の有無を確認できていない。

炉 明確な炉址を確認できていないが、北東壁中央付近に径35cmの焼土の堆積が見られることから、炉址



第10図 第2号住居跡



第11図 第2号住居跡 出土遺物

の痕跡と判断した。

**覆土** 浅い掘り方を残すのみで、少量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土が1層確認されたのみである。

**遺物** 出土した遺物は僅かで、浅い掘り方の床面上に小片が散乱していた。図示できたのは土師器甕のみで、胴部破片と底部である。

**所見** 出土遺物から古墳時代前期に営まれたと推定される。

### 第2号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	土師器 甕	口径 — 底径 6.00 器高 (2.60)	底部周縁は高まりをもつ。	外面体部ハケ目調整の後、ヘラナデ。底部ナデ。内面ヘラナデ	石英・長石粒を含む 橙色 (5YR6/6) 良好	底部1/4 残存

### 第3号住居跡 (S I - 3) (第12・13・15・16図、P L. 7)

**位置** 調査区南東部、7 G・7 H区に位置する。住居跡の西側および北側では新期の遺構によって大きく切られ、南側も住居跡と攪乱が入り、さらに床面も掘立柱建物跡と重複している。まず北西側で第4号住居跡、西側で竪穴状遺構が、北東側は第6号住居跡に、また南側は第2号住居跡によって切られ、全体の

様相は把握しにくい。

**規模** 西側壁面が全面的に破壊され、正確な規模を計測できないが、現存で確認できる長軸である南北軸5.94m、東西軸4.38mを測り、推定ではほぼ方形を呈するものと思われる。

**主軸方向** N-5° - E。

**壁** 確認できる壁辺は、北壁の一部と南壁と東壁の半分で、確認面からの深さは4～4.5cmとごく浅く、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁溝は検出されていない。

**床** わずかに北側が高く、南側が低くその比高差は5cmである。床面はほぼ平坦で、貼床は炉址周囲に部分的に検出されるものの、掘り方は明瞭ではない。

**ピット** 南東隅に1本のみ現存する。径36×32cm、深さ38cmを測る円形ピット（P1）であるが、本跡に伴う柱穴であるか、判断に苦慮した。しかし、覆土の状態から本跡に伴うものとした。

**炉** 住居の主軸上、北壁寄りの位置に南北に長い楕円形に掘り窪めた地床炉で、規模は径70×56cm、深さ20cm。底面は鍋底状を呈し、上層にやや硬化した焼土、下層は粘性にとむ黄褐色の灰質土が堆積していた。

**覆土** 浅い掘り方のため、2層のみ確認された。いずれも埋め戻し土層で、床面上に堆積していた。4層褐色土は多量のローム粒子を含む。5層は少量のローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土である。

**遺物** 出土した遺物は僅かで、浅い掘り方の床面上に小片が散乱していた。図示できたのは土師器埴・甕の口縁部破片と胴部破片である。

**所見** 出土遺物から古墳時代前期に営まれたと考えられる。

### 第3号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	土師器 埴	口径 8.80 — 底径 — 器高 (3.50)	「く」の字状に外反する口縁部を有する。	口縁部外面ハケ目調整の後、入念なヘラミガキ。内面ヘラミガキ。体部ヘラ状工具のナデ。赤彩を施す。	石英・長石粒を含む赤 (10Y R5/8) 良好	口縁部のみ残存
第16図 2	土師器 甕	口径 16.00 — 底径 — 器高 (3.70)	ゆるやかなカーブを描いて外反する口縁部を有する。	口縁部外面ヨコナデ。内面ハケ目調整の後、部分的にヘラナデ。体部内面ヘラナデ。	石英・チャート・長石粒を含むにぶい橙 (5Y R6/4) 良好	口縁部のみ1/4残存

### 第4号住居跡（S I - 4）（第12・14・15・17図、P L. 7）

**位置** 調査区南東部、7G区に位置する。南東側で第3号住居跡、南側で竪穴状遺構を切って構築されている。

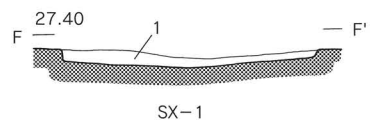
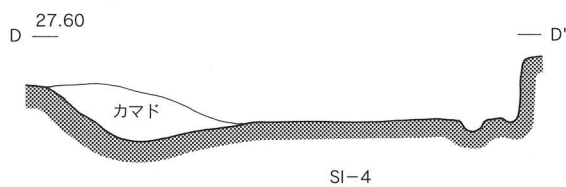
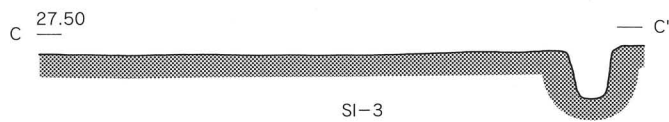
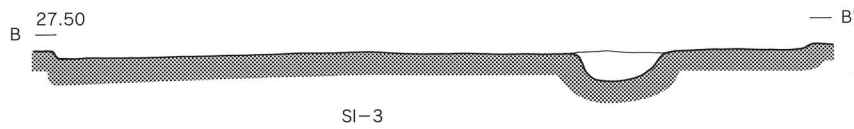
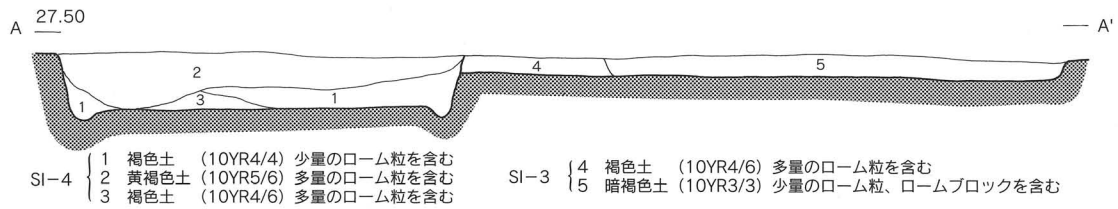
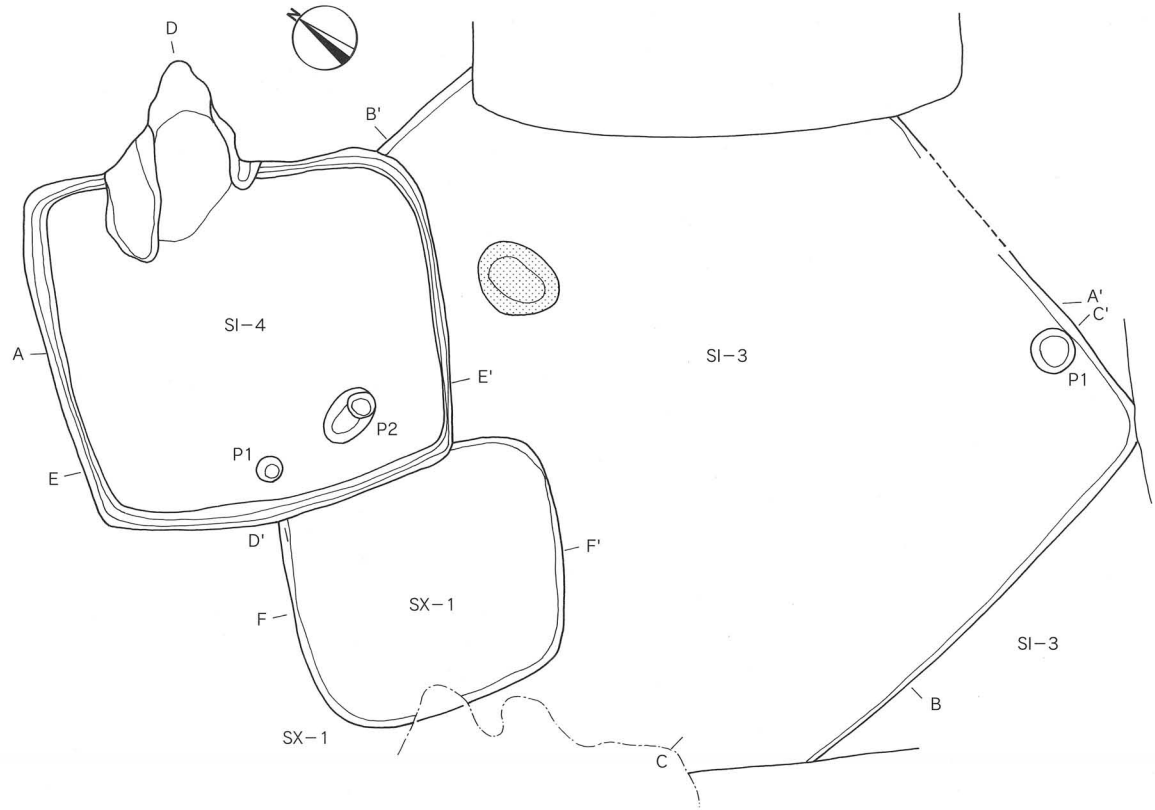
**規模** 長軸は東西軸で3.13m 南北軸2.66mを測り、平面形態は方形を呈する。

**主軸方向** N-53° - W

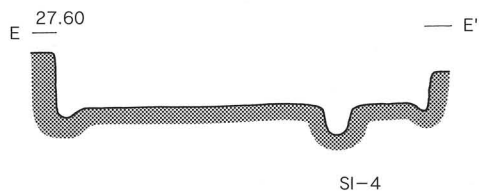
**壁** 確認面からの深さは33～49.5cmで、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝はカマド設置部を除き全周し、幅8～21cm、深さ5cmで、底面横断面形はU字状を呈する。

**床** 西側が高く、東側がわずかに低く、その比高差は4cmである。起伏はなく、ほぼ平坦で、全体的に貼床である。ローム粒と褐色土の混合土による貼床部が厚さ5～12cmほど貼ってある。またカマド前から住居中央部は著しく硬化しているのに対して、カマドの設置してある北壁両端部が極端に軟弱であるが、掘り方の影響であろう。住居中央部は高く掘り残し、逆に住居四隅を比較的深く掘り窪めている。

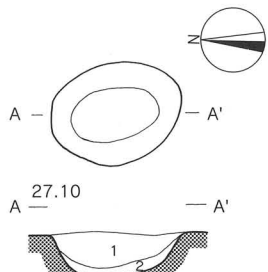
**ピット** 南壁寄りに2本検出されている。主軸上の壁際中央柱穴P1は径22×20cm、深さ19cmを測る円



1. 褐色土 (10YR4/4) 多量のローム粒子、少量のロームブロックを含む

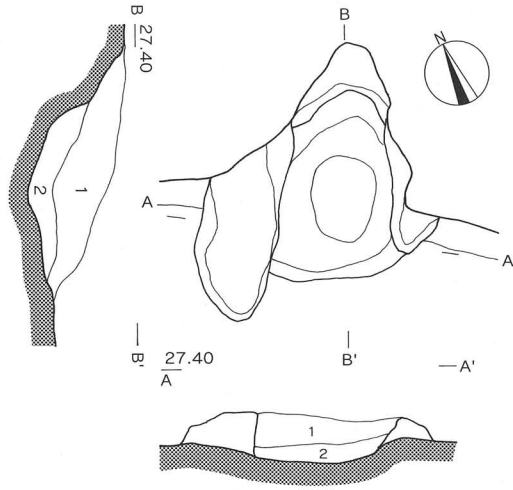


第12図 第3・4号住居跡 竪穴状遺構



- 1 赤褐色土 (2.5YR4/8) 焼土粒子を多く含む
- 2 明赤褐色土 (2.5YR5/8) 焼土粒子を多量に含む

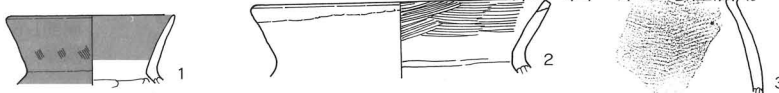
第13図 第3号住居跡 炉址



- 1 褐色土 (10YR4/4) 多量のローム粒、多量の灰白色粘土 少量の焼土粒を斑状に含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 少量の焼土粒を含む



第24図 第6号住居跡 掘り方



第16図 第3号住居跡 出土遺物

形ピット。ここから東寄りに楕円形を呈したP 2が構築されている。2段掘りで、抜き取り穴を伴うピットと思われる。西側が浅く楕円形を呈し、東側は円形である。大きさは径50×34cmで、深度の浅い西側が5cm、東側が19cmを測る。

**カマド** 北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方向は住居跡と一致する。規模は長さ150cm、幅125cmで、袖部は壁面に貼付けられ、灰白色砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃烧部は径65×82cm、深さ8cmの楕円形状に掘り窪められ、火床面は径35×48cmを測る。奥壁は35°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅45cm、奥行80cmを測る。上層の1層褐色土は少量の焼土粒子・構築材である粘土粒子を含む。下層の2層黒褐色土は焼土粒子を少量含む。

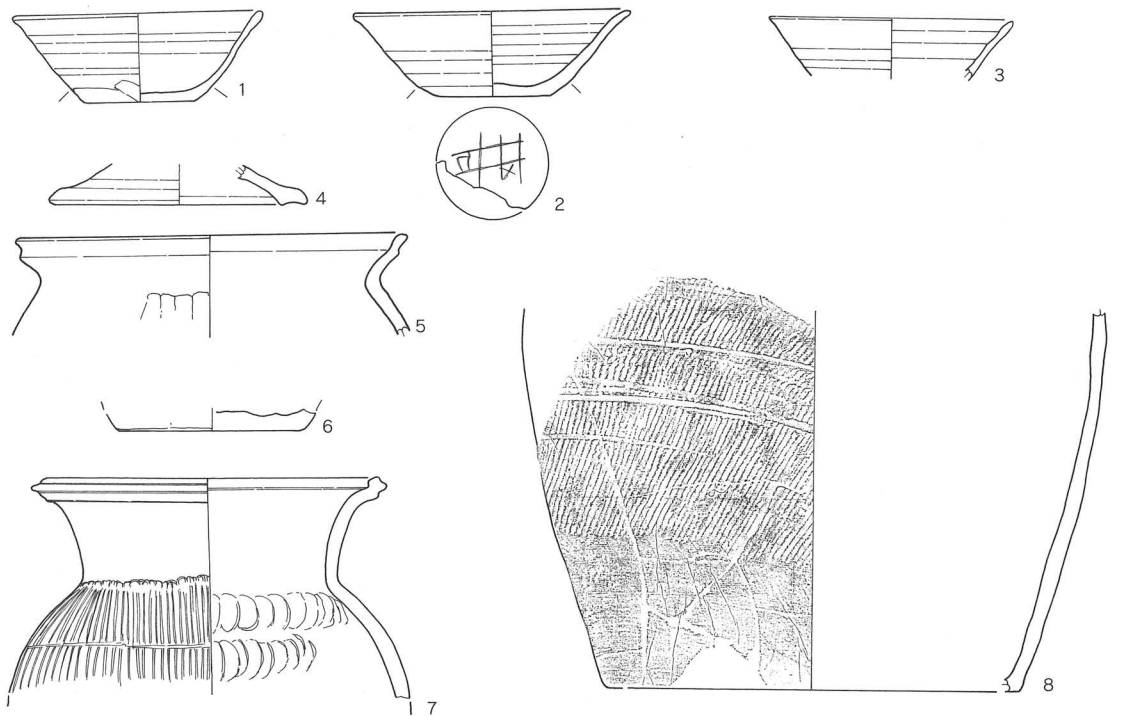
**覆土** 3層が確認された。いずれも埋め戻し土層で、上層の2層は少量のローム粒子を含む黄褐色土。床面を覆う1層は少量のローム粒子を含む褐色土。また3層は多量のローム粒子を含む褐色土である。

**遺物** 土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。1の土師器坏は2次底部をもち、2の須恵器坏底部にヘラ書きがみられる。7の須恵器甕は胴上半部で、タタキ目調整が明瞭である。

**所見** 出土遺物から9世紀中葉と推定される。

#### 第4号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	土師器 坏	口径 13.40 底径 5.80 器高 4.70	ちいさめの底部から、体部は外傾して立ち上がり、口縁部でやや外反する。	右回転ロクロ成形。底部は回転ヘラ切りの後、手持ちヘラケズリ。体部下端部手持ちヘラケズリ。	雲母・石英・長石粒を含む 黒色 (10Y R2/1) 良好	体部1/4 残存
第17図 2	須恵器 坏	口径 14.80 底径 6.10 器高 4.50	平底の底部から体部は下端がやや丸味を持ちながら外傾して、口唇部で外反する。	右回転ロクロ成形。底部は回転ヘラ切りの後、体部下端回転ヘラケズリ。底部ヘラ書きが認められる。	雲母・石英・長石粒を含む 灰黄褐色 (10Y R4/2) 内面におい黄橙色 (10Y R7/4) 良好	1/2残存。 底部ヘラ 書き。
第17図 3	須恵器 坏	口径 13.00 — 器高 (3.10)	体部はほぼ直線的に外傾して開く。	ロクロ成形。内面はロクロ目が明瞭である。	石英・長石粒を含む 灰色 (5Y 6/1) 良好	口縁部1/4 残存
第17図 4	須恵器 蓋	口径 13.80 — 器高 (2.10)	口縁部内面に崩れたカエリをもつ。口縁部端部はやや肥厚し、丸みを有する。	ロクロ成形。	雲母・石英・長石粒を含む 橙色 (7.5Y R6/6) 良好	口縁部1/6 残存
第17図 5	土師器 甕	口径 20.80 — 器高 (5.30)	肩部の張りはなく、口縁部は「く」の状に外傾し、口唇部は摘み上げられる。	口縁部ヨコナデ。外面体部縦位のヘラナデ。内面体部ヘラ状工具によるナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 橙色 (2.5Y R7/8) 良好	口縁部2/3 残存
第17図 6	土師器 甕	口径 — 底径 10.00 器高 (1.10)	平底の底部から体部下端部は丸みをもつ。	外面ヘラケズリ。底部ヘラナデ。内面指頭によるナデ。	雲母・石英・長石粒を含む におい黄橙色 (10Y R6/4) 内面橙色 (5Y R6/6) 良好	底部1/4 残存
第17図 7	須恵器 甕	口径 19.00 — 器高 (11.40)	肩部がやや張り、口縁部は緩く立ち上がり、口唇部付近で大きく外反し、摘み上げられる。	口縁部ヨコナデ。外面体部縦方向の平行タタキ目が施され、横方向のカキ目が認められる。内面体部オサエによるナデ。	石英・長石粒を多く含む 灰色 (10Y 6/1) 良好	上半部 のみ残存
第17図 8	須恵器 甕	口径 — 底径 22.00 器高 (20.2)	大き目の平底の底部から体部は筒状に立ち上がる。	外面体部縦位のタタキ目が認められ、横方向のカキ目が施される。体部下端部横方向のヘラケズリ。内面ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 灰黄褐色 (10Y R4/2) 良好	胴部1/6 残存



第17図 第4号住居跡 出土遺物

0 10cm

第5号住居跡 (S I - 5) (第18~21図、P L. 8)

**位置** 調査区の南西側、7 G・8 G区に位置する。本跡の西側約1/3が調査区外に広がるため、調査不可能である。

**規模** 西壁が調査不可能なため、南北軸3.93mを測るのみで、東西軸は3.08mを確認している。検出面の様相から判断して方形を呈するものと推定される。

**主軸方向** カマドの位置が明確ではないが、北壁に設置されているものと推定するとN-44°-Eを示す。

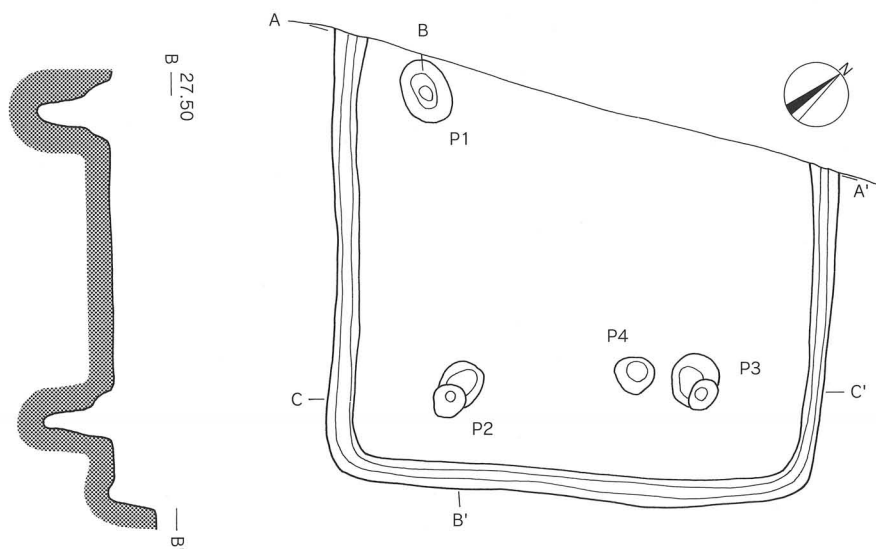
**壁** 検出された確認面からの深さは24~35cmで、壁はほぼ垂直気味に立ち上る。壁溝は検出面で全周する。幅15~20cm、床面からの深さ3~11cmで、平均6cm程である。底面はU字状を呈する。

**床** 南側が2cmほど低くなるものの平坦である。またほぼ全面的に貼床が施されており、とくに住居中

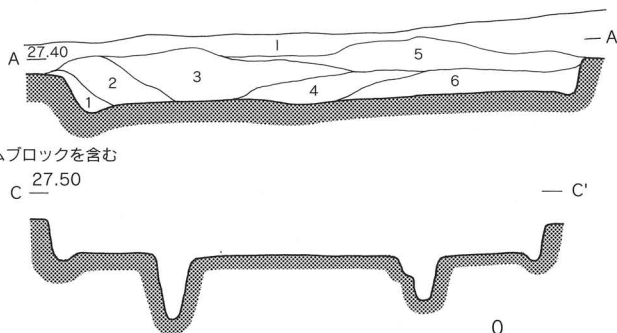
第5号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 1	土師器 坏	口径 15.60 底径 — 器高 (3.50)	口縁部下に張り出す稜を持ち、口縁部は大きく外傾して立ち上がる。	口縁部ヨコナデ。外面体部ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 橙色 (5Y R7/6) 良好	口縁部1/4 残存。内面 に炭化物が 付着。
第21図 2	土師器 坏	口径 15.10 底径 — 器高 5.10	口縁部下にわずかに張り出す稜を持ち、口縁部は大きく外傾して開く。底部は丸みを有する。	外面口縁部ヨコナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む 橙色 (5Y R7/6) 良好	体部1/2 残存
第21図 3	土師器 坏	口径 14.40 底径 — 器高 (3.61)	鉢形を呈し、口縁部は内湾気味に外傾して開く。	外面口縁部横ナデ。体部粗いヘラケズリ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む に黄橙色 (10Y R7/4) 普通	口縁部1/3 残存
第21図 4	須恵器 坏	口径 16.00 底径 12.40 器高 4.60	大きめの平底はやや上げ底で、体部下端はやや丸味を持ち、体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	右回転ロクロ成形。底部は回転ヘラ切り。	石英・長石粒を含む オリーブ黒 (5Y 3/1) 内面灰白色 (10Y R8/2) 良好	口縁部2/3 欠損

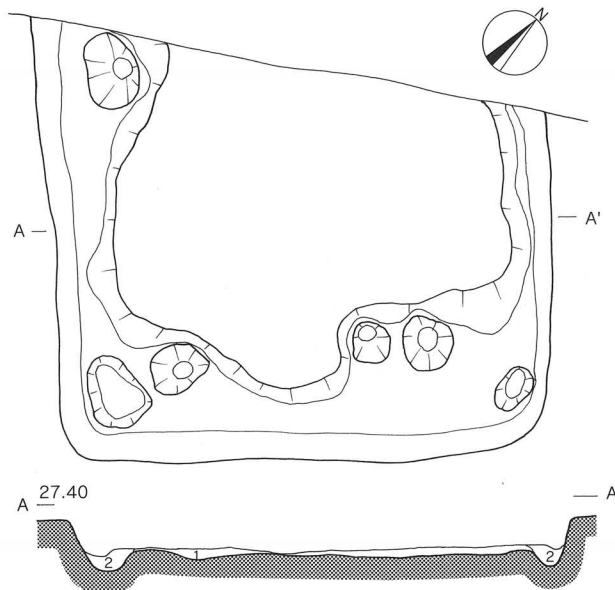




- 1 褐色土 (10YR4/4) 耕作土
- 1 褐色土 (10YR4/4) 少量のローム粒を含む
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 少量のローム粒
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 少量の焼土粒を含む
- 4 暗褐色土 (10YR3/4) 少量のローム粒、ロームブロックを含む
- 5 褐色土 (10YR4/4) 少量のローム粒
- 6 褐色土 (10YR4/4) 多量のローム粒
- 7 黄褐色土 (10YR5/6) 多量のローム粒



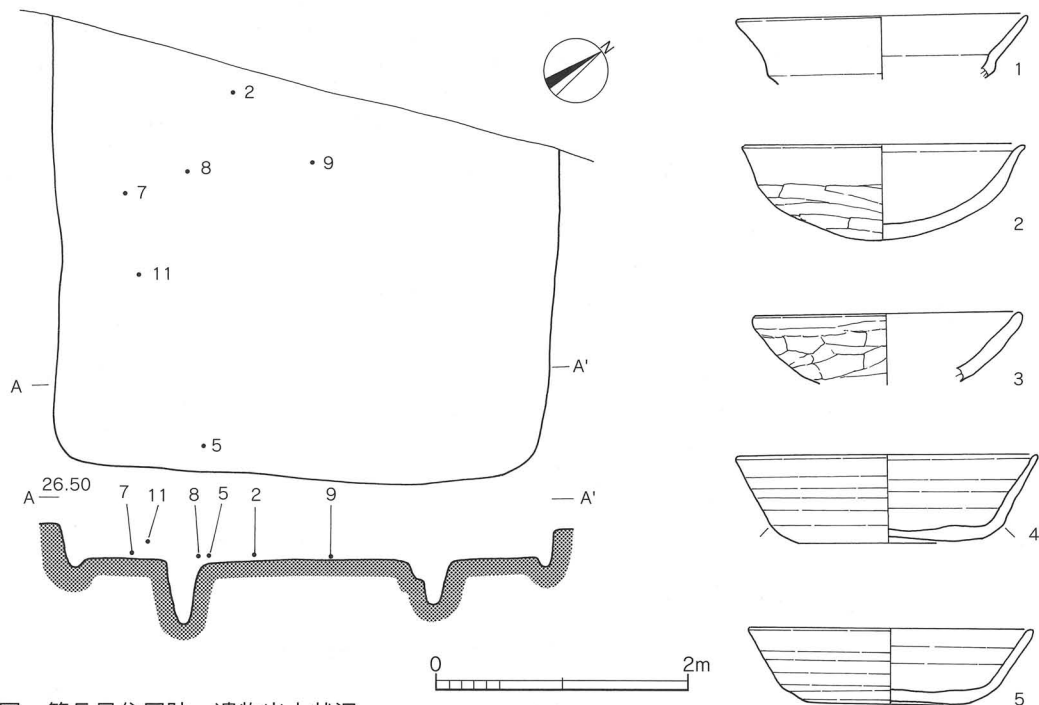
第18図 第5号住居跡



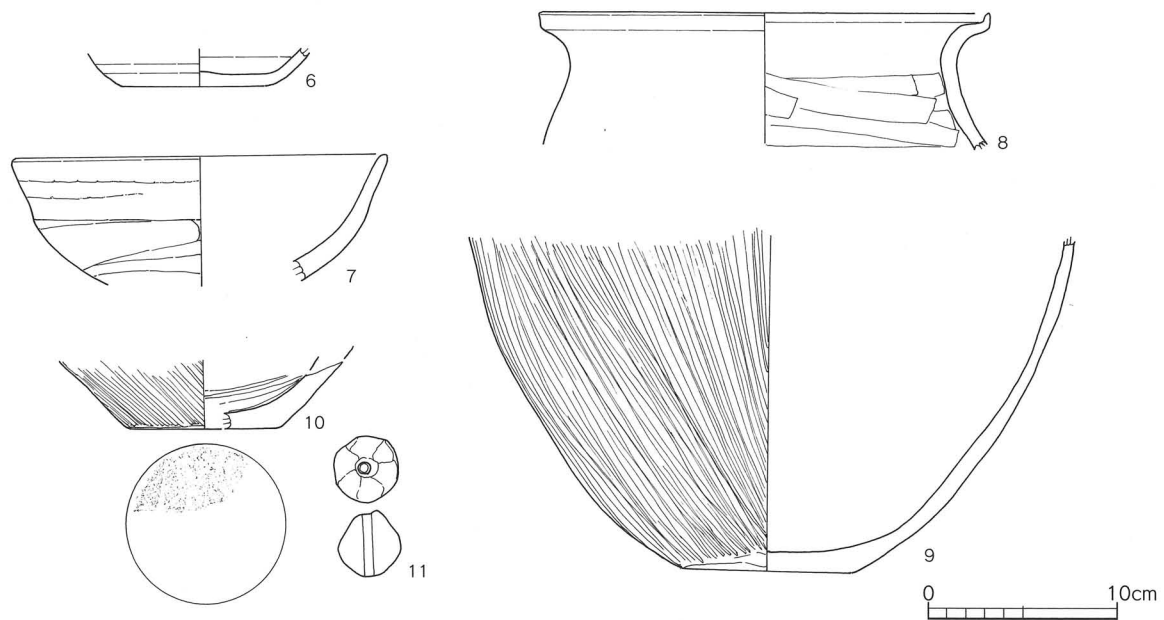
- 1 黄褐色土 (10YR5/6) ローム粒子を多量に含む しまりがあり 堅緻である
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR7/4) ロームブロック、ローム粒子を多く含む しまりがある

第19図 第5号住居跡 掘り方





第20図 第5号住居跡 遺物出土状況



第21図 第5号住居跡 出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 5	須恵器 坏	口径 15.80 底径 8.80 器高 5.00	大きめの平底で、体部下端がやや丸味を持つがほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	右回転ロクロ成形。底部は回転ヘラ切りの後、手持ちヘラケズリ。外面体部下端部手持ちヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 灰白色(5Y5/1) 良好	口縁部1/2 欠損
第21図 6	須恵器 坏	口径 — 底径 9.00 器高 (1.80)	平底で、体部下端がやや丸味を持ち、体部はほぼ直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り。	石英・長石粒を含む 灰白色(10Y R7/1) 良好	底部1/2 残存
第21図 7	土師器 碗	口径 19.90 底径 — 器高 (6.60)	口縁部下部に明瞭な稜を有し、体部は内湾気味に開き、口縁部は大きく外反する。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面ナデ。	角閃石・石英・長石粒を含む 黒褐色土(10Y R3/1) 良好	体部1/6 残存

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 8	土師器 甕	口径 23.80 底径 — 器高 (6.80)	胴の張る丸胴タイプの甕で、口縁部は弧状に外反し、端部は摘み上げて帯状になる。	口縁部ヨコナデ。胴部内面ヘラ状工具によるナデ、外面斜方向のヘラケズリ後ヘラナデ。	雲母・スコリア・石英・長石粒を含む におい黄橙色 (10Y R 6/4) 良好	口縁部1/4 残存
第21図 9	土師器 甕	口径 — 底径 9.00 器高 (17.50)	胴の張る丸胴タイプの甕で、底部は平底。	外面体部縦方向のヘラミガキ。内面ヘラ状工具によるナデ。	雲母・石英・長石粒を含む におい橙色 (7.5Y R 6/4) 良好	胴下半底 部1/2残存
第21図 10	土師器 甕	口径 — 底径 8.00 器高 (3.60)	平底の底部で、体部はほぼ直線的に外傾する。	外面体部縦方向のヘラミガキ。内面ヘラ状工具によるナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 黒褐色 (10Y R 3/1) 良好	底部のみ 1/3残存。 底部に木 葉痕を残 す。

中央縁が顕著な硬化面が広がる。掘り方は壁沿いが深く、中央部が浅く部分的に地山が床面になっているヶ所がみられ、貼床が極端に薄層となっている。

**ピット** 未調査部分の北コーナーを除き、支柱穴3本と貼床下から検出された1本を確認した。本来は4本柱住居であろう。支柱穴3本はそれぞれ壁際コーナーに寄って構築されている。西側のP1は楕円形を呈し、52×35cm、深さ59cm。南側のP2は外側が深い2段掘りピットとなっている。確認面の大きさは50×30cmで、外側の深さは50cm、内側の深さは13cmである。また東側のP3も外側が深い2段掘りピットで、確認面の大きさは42×36cmで、外側の深さは24cm、内側の深さは14cmを測る。このP3の西側に接して貼床下からP4が検出された。円形を呈し、32×30cm、深さ24cmである。

**カマド** 調査区外に位置するため検出できなかった。

**覆土** 表土層を除き、未調査区に接した断面で7層が確認された。いずれも埋め戻し土層で、上層の5層はローム粒子を僅かに含む褐色土。中層の3層は同じくローム粒子・ロームブロックを僅かに含む暗褐色土が堆積し、床面を覆う2・4層はローム粒子・ロームブロックを僅かに含む暗褐色土、同じく6層はローム粒子・ロームブロックを多量に含む褐色土が堆積し、1・7層は壁下に堆積した崩落土層であろう。ローム粒子・ロームブロックを含む。

**遺物** 遺物の出土が集中すると思われるカマド付近が調査区外にかかるため、住居の規模に比して出土遺物はやや貧弱な感がある。土器と土製品である土玉の出土があり、住居西側の床面直上ないし僅かに浮いた状態で散在していた。器種構成は土師器坏・埴・甕、須恵器坏と土玉である。

**所見** 出土した土器群から8世紀前半と推定される。

#### 第6号住居跡 (S I - 6) (第22～27図、P L . 9)

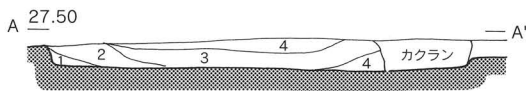
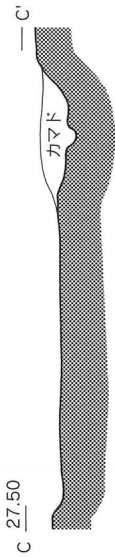
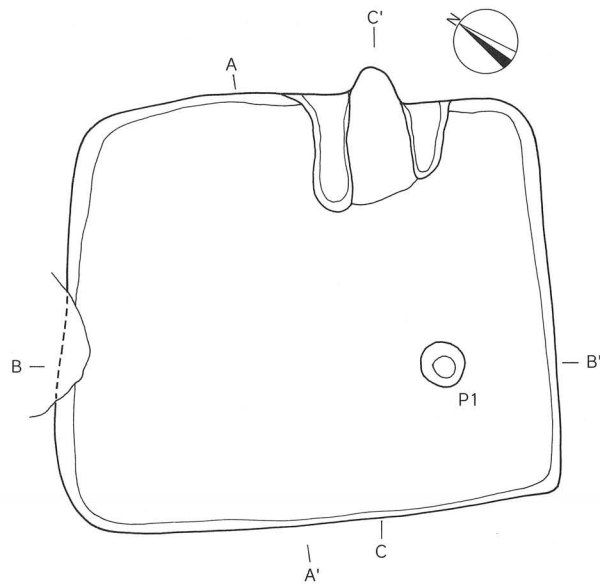
**位置** 調査区の南西側、6G・7G区に位置する。南西壁で第1号掘立柱建物跡の柱穴と北西壁中央付近で攪乱を受けているものの、ほぼ全体の様相が把握することができる住居である。

**規模** 長軸3.70m 短軸3.38mで、若干東西軸が長くなっている方形住居である。

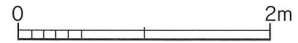
**主軸方向** N-33° -W。

**壁** 確認面からの深さは11～22cmと浅く、壁面はほぼ垂直気味に立ち上る。壁溝は構築されていない。

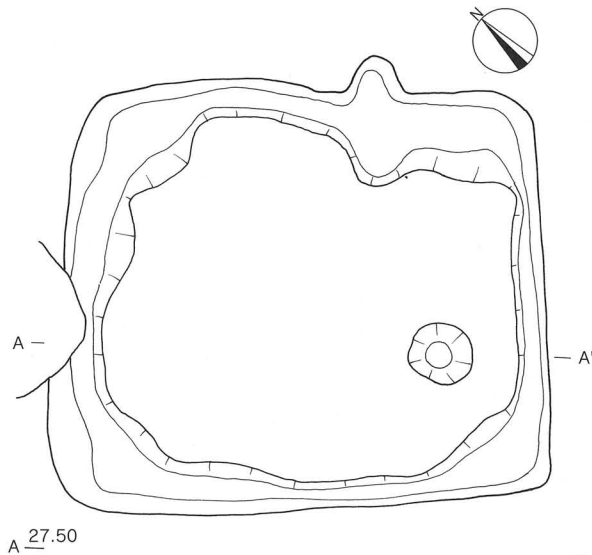
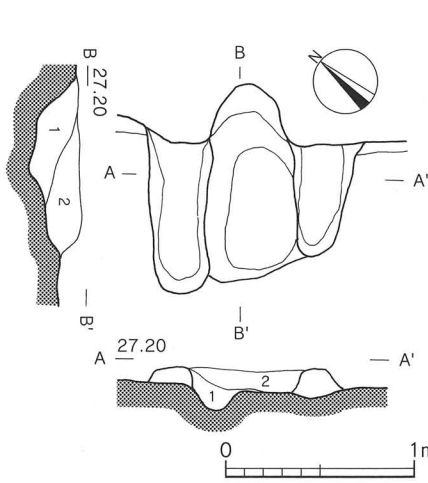
**床** 全体的に東側が高く、西側が低いものの、起伏はなく平坦である。貼床はローム粒と黒色土の混合土で全体的に施されており、またカマド前面から住居中央周縁にかけて顕著な硬化面が広がる。掘り方は壁沿いが深く厚い貼床を構築しているのに対して、中央部が浅く部分的に地山が床面になっているヶ所がみられ、貼床が極端に薄層となっている。



- 1 黄褐色土 (10YR5/6) 少量のローム粒、ロームブロックを含む
- 2 褐色土 (10YR4/6) 少量のローム粒、ロームブロックを含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) 少量のローム粒を含む
- 4 黒褐色土 (10YR2/3) 少量のローム粒を含む
- 5 黒褐色土 (10YR2/3) 少量のローム粒、ロームブロックを含む

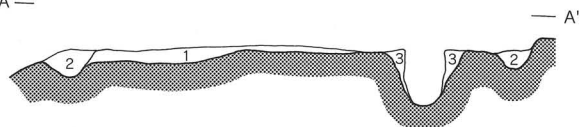


第22図 第6号住居跡



- 1 褐色土 (10YR4/4) 少量のローム粒、焼土粒、灰白色粘土粒を含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 少量のローム粒、多量の焼土粒を含む

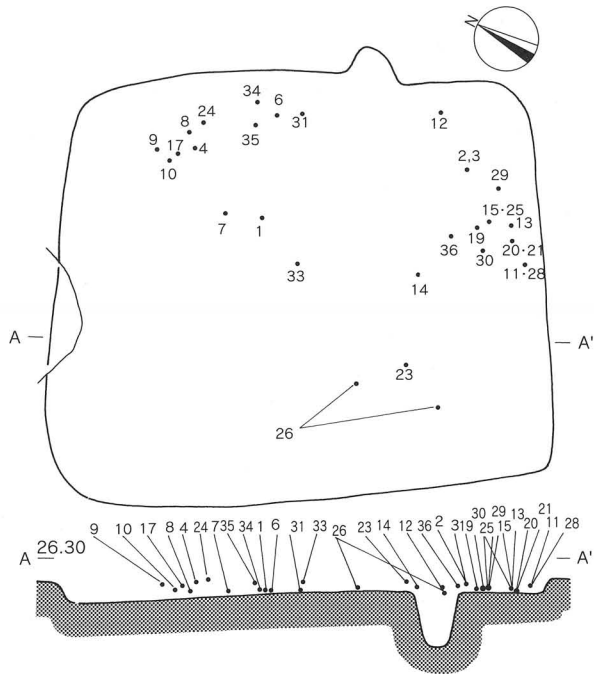
第23図 第6号住居跡 カマド



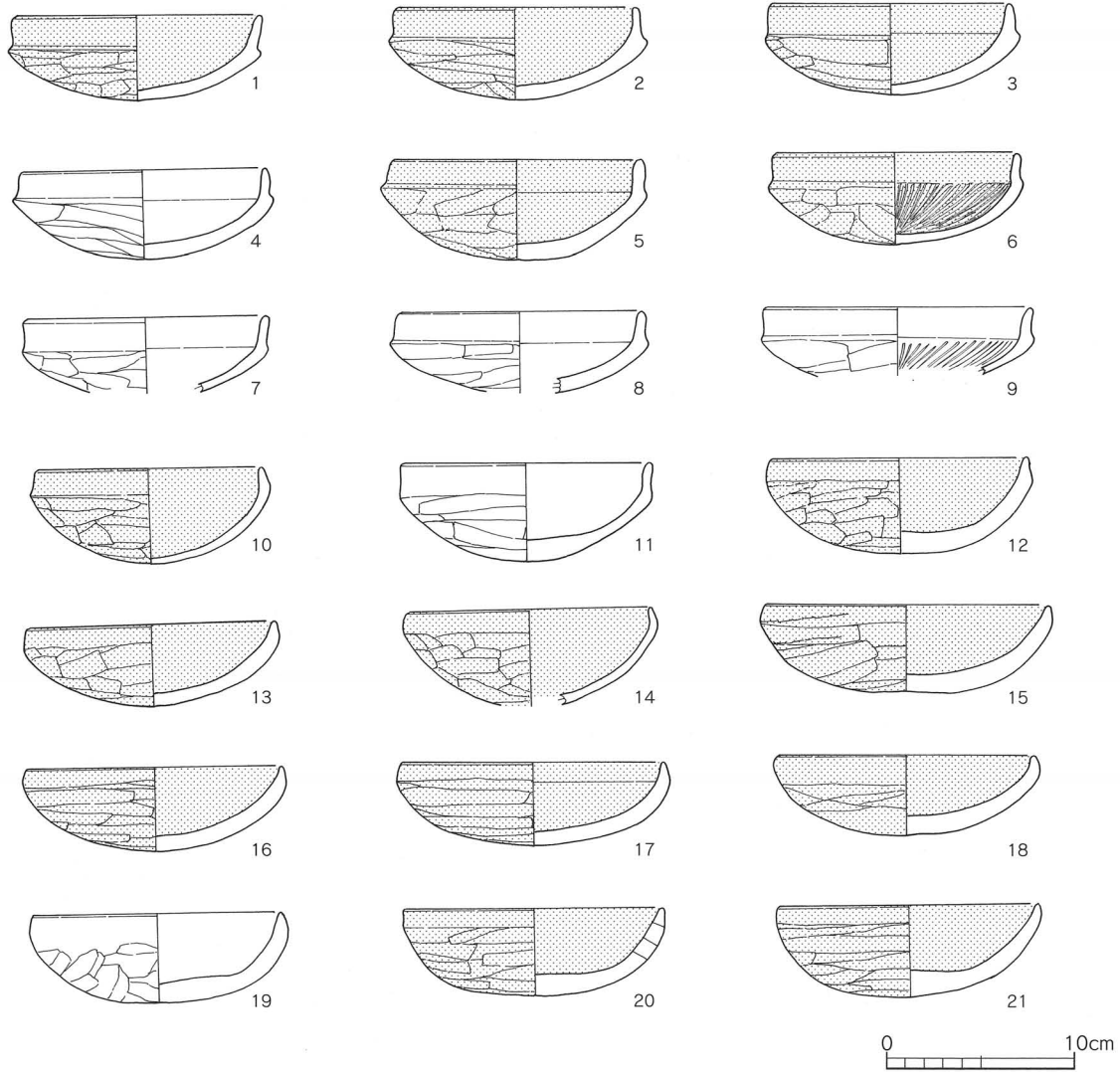
- 1 黄褐色土 (10YR5/6) ローム粒子を多く含む しまりがあり 堅緻である
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR7/4) ローム粒を多く含む しまりがある
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子を多く含む しまりがある



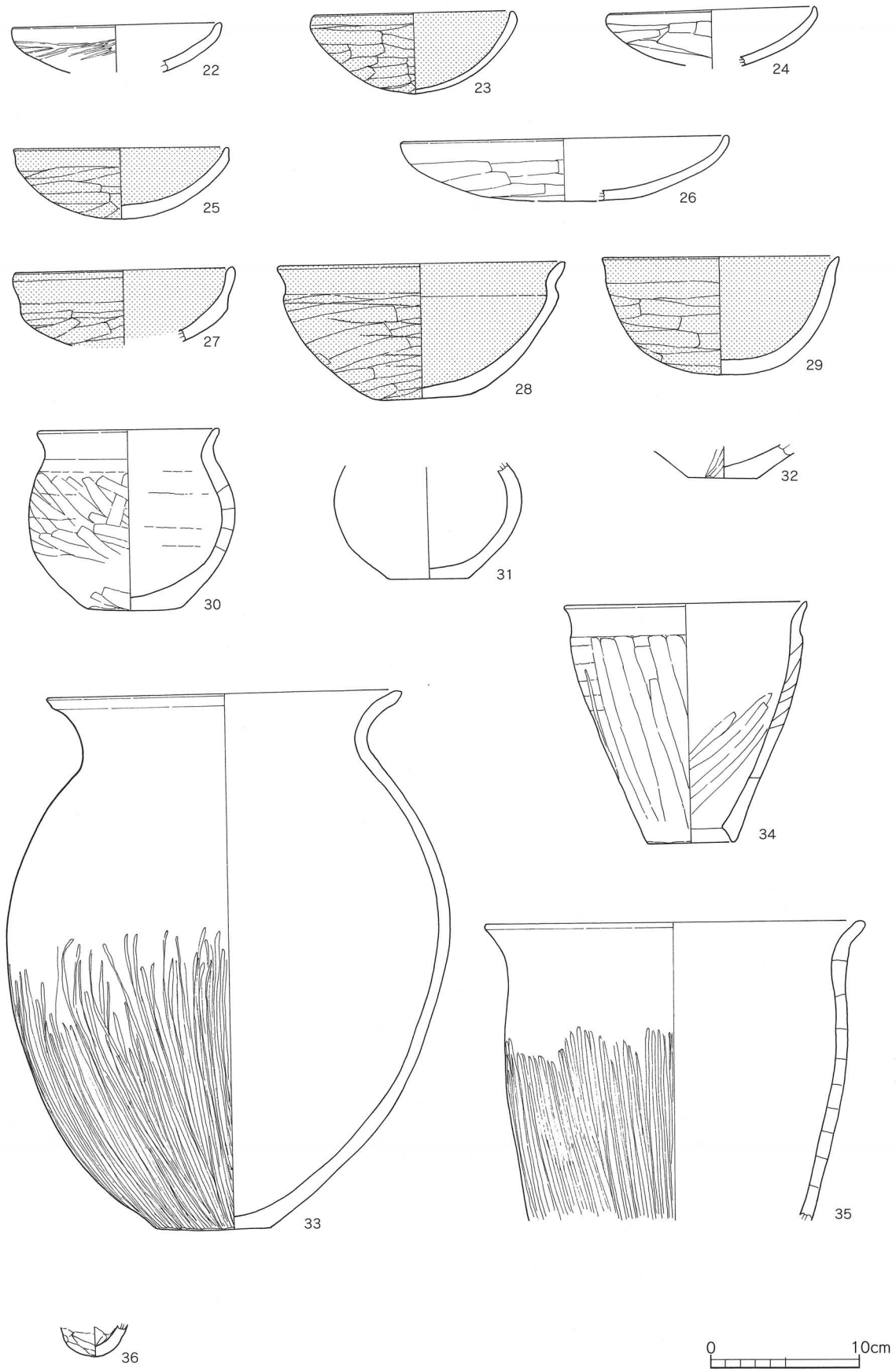
第15図 第3・4号住居跡 遺物出土状況



第25図 第6号住居跡 遺物出土状況



第26図 第6号住居跡 出土遺物 (1)



第27图 第6号住居跡 出土遺物 (2)

第6号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	土師器 坏	口径 13.40 — 底径 4.50 器高	器受け部が強く張り出す稜をもち、口縁部はやや内傾して開く。底部は丸味をもつ。	口縁部は横ナデ、体部は内面横方向のナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	砂粒を含む 黒色 (10Y R2/1) 良好	完形品 黒色処理
第26図 2	土師器 坏	口径 12.85 — 底径 4.80 器高	器受け部が強く張り出す稜をもち、口縁部はやや内傾する。底部は丸味が強い。	口縁部は横ナデ、体部は内面横方向のナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む 黒色 (10Y R2/1) 良好	完形品 黒色処理
第26図 3	土師器 坏	口径 12.50 — 底径 4.90 器高	器受け部が強く張り出す稜をもち、口縁部はほぼ直立する。底部は丸味をもつ。	口縁部は横ナデ、体部は内面横方向のナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む 黒色 (10Y R2/1) 良好	口縁部の 一部欠損。 黒色処理
第26図 4	土師器 坏	口径 12.80 — 底径 4.80 器高	器受け部が強く張り出す稜をもち、口縁部はほぼ直立する。底部は丸味が強い。	口縁部は横ナデ、体部は内面横方向のナデ、外面ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 黒色 (10Y R2/1)・浅黄 橙色 (10Y R8/3) 良好	口縁部の 1/4欠損
第26図 5	土師器 坏	口径 13.40 — 底径 5.30 器高	器受け部がやや強く張り出す稜をもつ、口縁部はほぼ直立する。底部は若干平底気味になる。	口縁部は横ナデ、体部は内面横方向のナデ、外面ヘラケズリ。	砂粒を含む 黒褐色 (10Y R2/3) 良好	完形品 黒色処理
第26図 6	土師器 坏	口径 13.40 — 底径 4.90 器高	器受け部がやや強く張り出す稜をもつ、口縁部はほぼ直立する。底部は若干平底気味になる。	口縁部は横ナデ、体部は内面横方向から縦に粗く放射状にミガキ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	砂粒を含む 黒色 (10Y R2/1) 良好	完形品 黒色処理
第26図 7	土師器 坏	口径 13.20 — 底径 (3.9) 器高	器受け部が若干張り出す外稜として残り、口縁部はほぼ直立する。底部は丸味をもつ。	口縁部は横ナデ、体部内面は横方向のナデ、外面ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 浅黄橙色 (10Y R8/4) 良好	1/3残存
第26図 8	土師器 坏	口径 13.00 — 底径 (4.3) 器高	器受け部がやや強く張り出す稜をもつ、口縁部はほぼ直立する。底部は若干平底気味になる。	口縁部は横ナデ、体部内面は横方向のナデ、外面ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 灰色 (10Y R7/1) 良好	体部1/4 残存
第26図 9	土師器 坏	口径 14.00 — 底径 (3.5) 器高	器受け部が若干張り出す稜をもち、口縁部はやや外傾して開く。底部は丸味をもつ。	口縁部は内外面ヨコナデ。体部内面縦方向のミガキ、外面ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 褐灰色 (10Y R5/1) 良好	口縁部1/4 残存
第26図 10	土師器 坏	口径 12.20 — 底径 3.00 器高 5.10	器受け部が強く張り出す稜をもち、口縁部はやや内傾する。底部は丸味が強い。	口縁部は横ナデ、体部内面は横方向のナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	砂粒を含む 黒褐色 (10Y R3/1) 良好	完形品 黒色処理
第26図 11	土師器 坏	口径 13.40 — 底径 5.25 器高	器受け部が若干張り出す外稜として残り、口縁部はほぼ直立する。底部は丸味をもつ。	口縁部は横ナデ、体部内面は横方向のナデ、外面ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 黒色 (10Y R2/1) 良好	口縁部1/2 欠損。
第26図 12	土師器 坏	口径 13.80 — 底径 5.10 器高	椀形で、口縁部下に稜を有し、口縁部は短く内湾して立ち上がる。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	砂粒を含む 黒褐色 (10Y R3/1) 良好	完形品 黒色処理
第26図 13	土師器 坏	口径 13.40 — 底径 4.40 器高	口縁部端下に僅かに稜を有す。口縁部は、内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	砂粒を含む 黒褐色 (10Y R2/1) 良好	完形品 黒色処理
第26図 14	土師器 坏	口径 13.20 — 底径 (5.1) 器高	口縁部下に稜を有し、口縁部は内傾気味に短く直立する。端部は、器肉が薄くシャープになる。底部の丸みは強い。	口縁部ヨコナデ。体部内面ハケ状工具によるナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	砂粒を含む 黒褐色 (10Y R2/2) 良好	1/2残存 黒色処理

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 15	土師器 坏	口径 15.20 底径 3.80 器高 4.60	口縁部下に僅かに稜を有す。 口縁部は、内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。底部は平底気味を呈し、器肉が肥厚する。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む黒色(10Y R2/1)良好	体部1/3欠損。黒色処理
第26図 16	土師器 坏	口径 13.60 底径 — 器高 4.50	口縁部下に僅かに稜を有す。 口縁部は、内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む黒褐色(10Y R3/1)良好	完形品 黒色処理
第26図 17	土師器 坏	口径 11.80 底径 — 器高 4.50	口縁部部下に稜を有し、口縁部は垂直気味に短く立ち上がる。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む黒色(10R 2/1)良好	完形品 黒色処理
第26図 18	土師器 坏	口径 14.20 底径 — 器高 4.20	口縁部部下に稜を有し、口縁部は垂直気味に短く立ち上がる。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	砂粒を含む黒褐色(5Y R2/1)良好	口縁部・胴部一部欠損。黒色処理
第26図 19	土師器 坏	口径 13.40 底径 4.00 器高 4.80	口縁部下に稜を有し、口縁部は内傾気味に短く直立する。端部は、器肉が薄くなる。底部は丸みをもつ。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む黒褐色(10Y R3/1)良好	完形品
第26図 20	土師器 坏	口径 13.80 底径 — 器高 4.80	口縁部部下に僅かに稜を有す。口縁部は、外傾気味に短く立ち上がり、端部が尖る。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む黒色(10Y R2/1)良好	完形品 黒色処理
第26図 21	土師器 坏	口径 13.80 底径 — 器高 4.80	口縁部下に僅かに稜を有す。口縁部は、垂直気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。底部は丸味を呈し、器肉が肥厚する。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む黒色(10Y R2/1)良好	完形品 黒色処理
第27図 22	土師器 坏	口径 14.20 底径 — 器高 (3.1)	口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立して立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ後ヘラを押し当てたナデで軽くミガキ	砂粒を含む黒褐色(7.5Y R3/2)良好	口縁部1/4残存
第27図 23	土師器 坏	口径 13.60 底径 — 器高 5.40	口縁部部下に僅かに稜を有す。口縁部は、内傾気味に短く立ち上がり、端部が鋭くなる。底部も尖り気味を呈する。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む黒色(10Y R2/1)良好	体部1/4欠損。黒色処理
第27図 24	土師器 坏	口径 13.80 底径 — 器高 (3.7)	口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立して立ち上がる。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。	石英・長石粒を含むにぶい黄褐色(10Y R6/3)良好	口縁部1/4残存
第27図 25	土師器 坏	口径 14.80 底径 — 器高 4.80	口縁部部下に僅かに稜を有す。口縁部は、外傾気味に短く立ち上がり、端部が尖る。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む黒色(10Y R2/1)良好	完形品 黒色処理
第27図 26	土師器 坏	口径 22.00 底径 — 器高 3.20	大型で、底部は丸みをもち、体部は内湾気味に開く、口縁部部下に僅かな稜を有す。口縁部は外傾し、端部は尖る。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。	石英・長石粒を含むにぶい黄褐色(10Y R7/2)良好	体部1/4残存
第27図 27	土師器 坏	口径 14.80 底径 — 器高 (4.9)	口縁部が長く外傾して開き、口縁部端部に稜をもつ。底部は丸みを有する。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む黒褐色(10Y R3/1)良好	体部1/4残存。黒色処理
第27図 28	土師器 鉢	口径 19.50 底径 7.10 器高 9.00	平底気味の底部から体部は大きく外傾し、口縁部端部で明瞭な稜をもち、口縁部は大きく外反する。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	スコリア・石英・長石粒を含む黒褐色(10Y R2/2)良好	完形品 黒色処理
第27図 29	土師器 碗	口径 15.80 底径 — 器高 7.90	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁部下に、僅かに稜を持つ。底部は僅かに丸底を呈する。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む黒色(10Y R2/1)良好	完形品 黒色処理



図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 30	土師器 甕	口径 12.40 底径 6.50 器高 12.20	小型の丸胴タイプの甕で、口縁部は穏やかな弧状に外反する。頸部と胴部の境に稜を有す。	口縁部ヨコナデ、胴部内面丁寧なハケナデ、外面斜位から横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含む浅黄橙色(10Y R8/4)良好	完形品
第27図 31	土師器 壺	口径 — 底径 5.60 器高 (7.70)	小型の丸胴タイプの壺である。	内面ハケ状工具によるナデ、外面縦方向、下端斜方向のヘラケズリ後一部ヘラナデ。	砂粒を含むにおい黄褐色(10Y R6/3)良好	胴部1/2 残存
第27図 32	土師器 甕	口径 — 底径 5.00 器高 (2.3)	平底の底部から体部は大きく外傾して立ち上がる。	外面体部縦方向のヘラナデ。底部ヘラナデ。内面ナデ。	白色粒を含む暗褐色(10Y R3/3)良好	底部1/4 残存
第27図 33	土師器 甕	口径 23.80 底径 7.60 器高 36.10	丸胴形の甕で、口縁部は大きく外反し、端部は僅かに摘み上げられる。	口縁部横ナデ。胴部内面ハケ状工具によるナデ。外面ナデの後、下半縦位のヘラミガキ。	石英・長石粒を含むにおい黄褐色(10Y R5/4)良好	口縁・胴 一部欠損
第27図 34	土師器 甕	口径 16.40 底径 6.10 器高 15.90	小型の単孔式の甕。胴部は僅かに内湾気味に立ち上がり、頸部外面に段差をもつ稜を有す。頸部は緩く外傾して立ち上がり、口縁部も僅かに外反する。	口縁部横ナデ。胴部内面ハケ状工具によるナデ。外面縦位のヘラケズリ。体部上半で接合部に指頭によるオサエが見られる。	石英・長石粒を含むにおい橙色(7.5Y R7/4)良好	体部一部 欠損
第27図 35	土師器 甕	口径 35.60 底径 — 器高 (20.0)	体部は内湾気味に外傾して立ち上がり、口縁部で強く外反する。口縁部端は丸い。	口縁部横ナデ。胴部内面ヘラナデ。外面ヘラナデの後、下方部縦位のヘラミガキ。	白色粒を含む浅黄褐色(10Y R8/3)良好	底部欠損
第27図 36	土師器 手捏土器	口径 — 底径 — 器高 (2.10)	底部は丸底を呈し、体部も丸みを持って立ち上がる。	指頭によるオサエ、ナデ。	石英・長石粒を含むにおい黄褐色(10Y R3/6)良好	体部1/2 残存

**ピット** 南壁コーナー付近に1本確認された。円形ピットで径36×34cm、深さ41.5cmを測る。

**カマド** 北東壁の中央やや右側に構築されている。主軸方向は住居跡とほぼ一致する。規模は長さ110cm、幅104cmで、袖部は壁面に貼付けられ、灰白色砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃烧部は径55×75cm、深さ8cmの楕円形状に掘り窪められ、火床面は径36×65cmを測る。奥壁は45°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅45cm、奥行30cmを測る。覆土は2層確認された。上層の2層黒褐色土は多量の焼土粒子を含む。下層の1層褐色土は構築材である粘土粒子・焼土粒子を多量に含む。

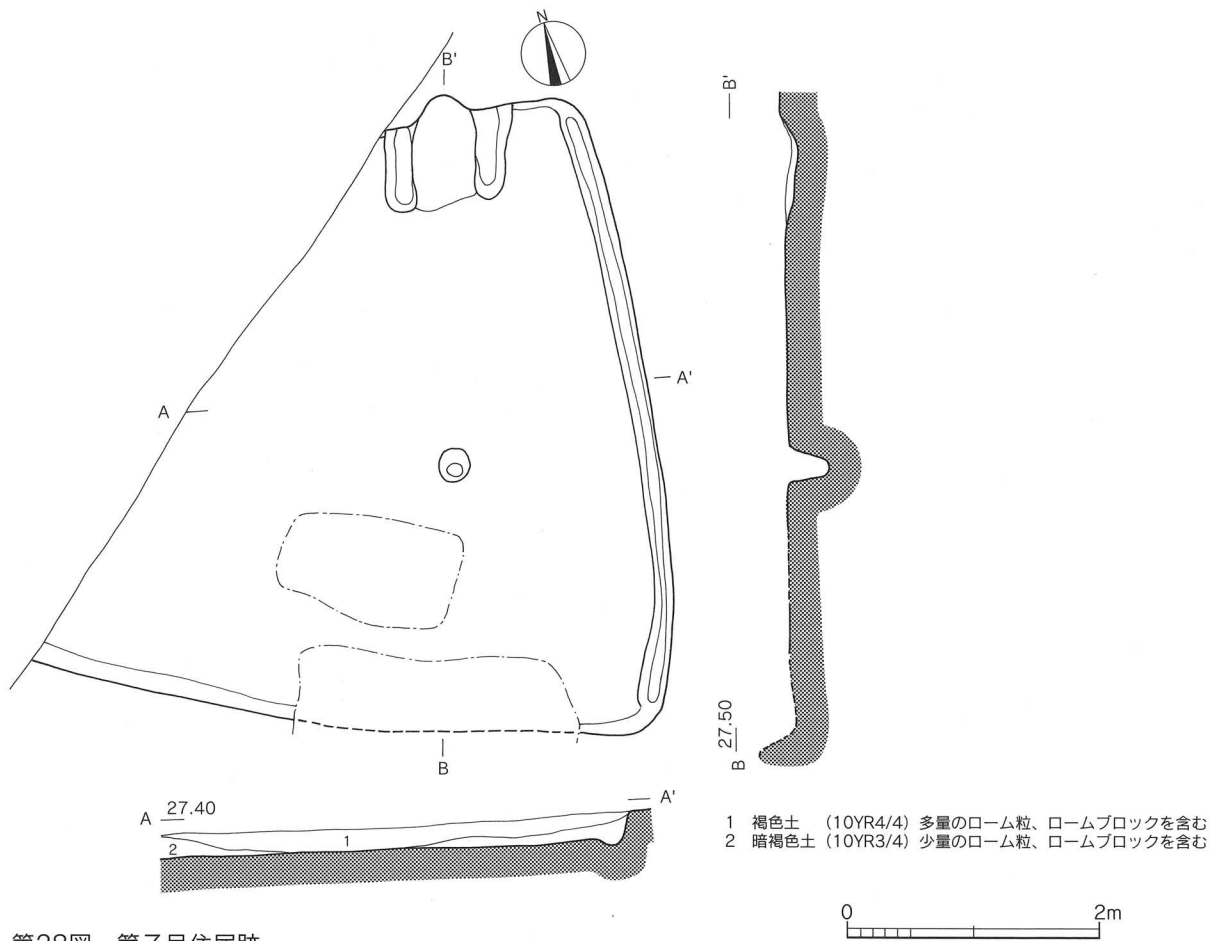
**覆土** 4層が確認された。上層の4層はローム粒子・ロームブロックを僅かに含む黒褐色土。中層の3層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土で自然堆積層である。住居壁際を覆う1・2層はローム粒子・ロームブロックを僅かに含む黄褐色土と褐色土で、埋め戻し土層である。

**遺物** 住居の規模に比して多量の遺物が出土した。とくに土師器は完形品を含め、実測可能なものが27点まとめて出土しており、黒色処理を施したものも多いのが特徴である。その他土師器壺・鉢・甕・甗・手捏土器と器種構成は整っている。なお、多量に出土した土師器は大きく2種に器種分類でき、口縁部下に突き出した明瞭な段状の稜を有する須恵器模倣坏のものと口縁部が短く稜が僅かで碗形を呈するものである。

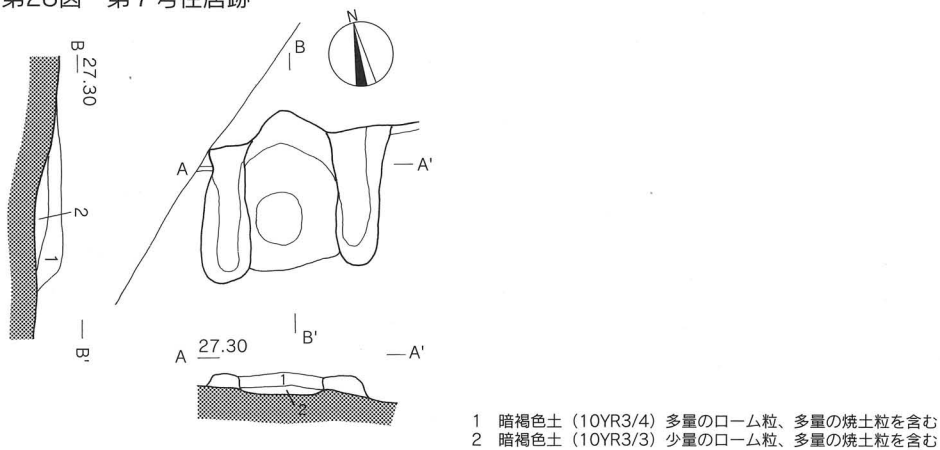
**所見** 出土した土器群は、いずれも古墳時代後期後半期に相当するものである。

第7号住居跡(SI-7)(第28~31図、PL.10)

**位置** 調査区の南西側、7F・7G区に位置する。北西側は調査外域に広がっている。



第28図 第7号住居跡



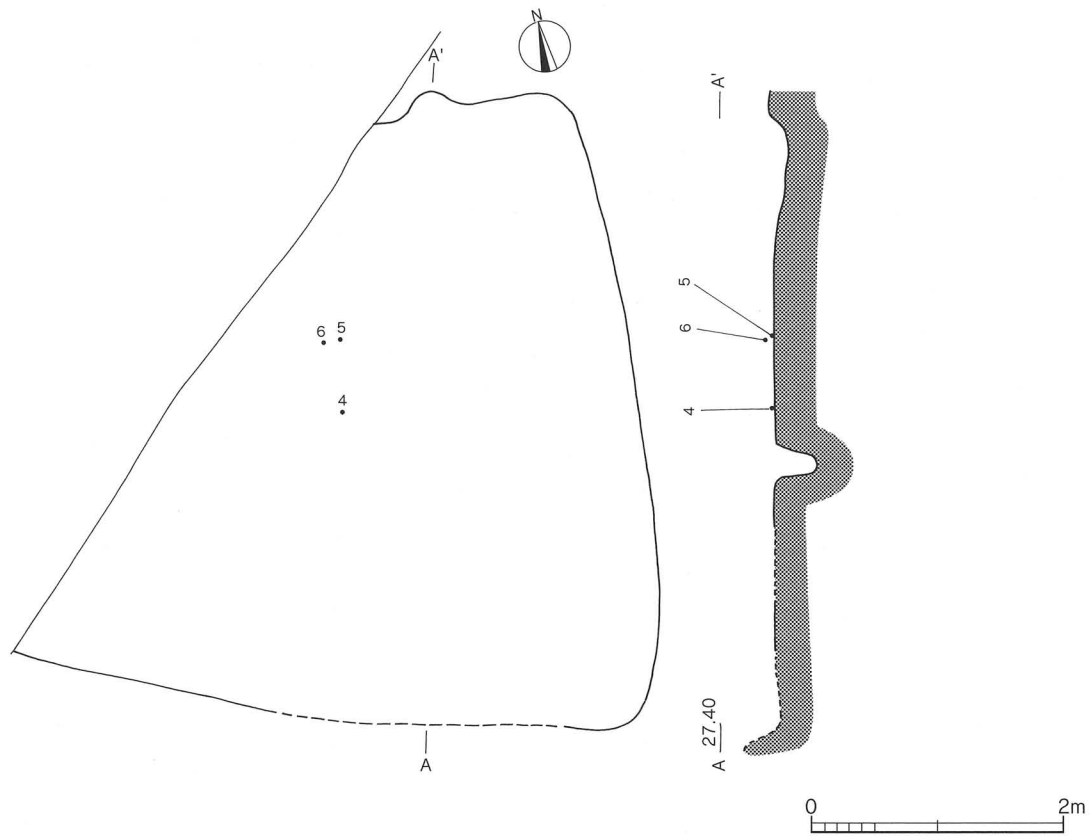
第29図 第7号住居跡 カマド

**規模** 東壁のみが完全に検出されている以外、他の3壁辺は未検出である。また南壁面および南側床面の一部が攪乱を受けている。計測可能なカマドの設置壁と反対の南壁との長さは5.15mであり、最大確認面の西壁と東壁は3.73mを測る。全体の把握はできず、確認面からみると平面形態は台形に近い方形と考えられる。

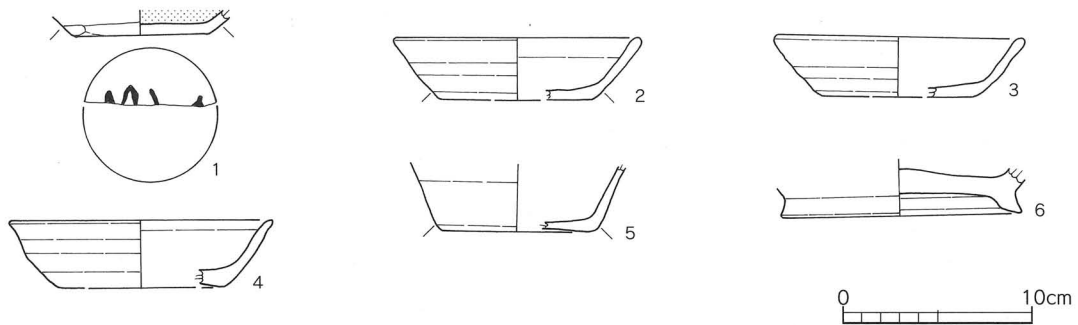
**主軸方向** N-21°-E。

**壁** 確認面からの深さは東壁面で16cm、北壁面で13cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝は東壁のみ構築されており、床面からの深さは4~5cm、幅15~18cmで、断面U字状に掘り込まれていた。

**床** 貼床で、部分的に硬化面を確認した。とくにカマド前面および床面中央付近が顕著であった。掘り方



第30図 第7号住居跡 遺物出土状況



第31図 第7号住居跡 出土遺物

の深さはほぼ均等で、10~15cm前後の掘削で貼床面を構築していた。

**ピット** 柱穴と思われるピットが1本東壁寄りの中央付近で検出された。径25×27cm、深さ30cmの円形を呈する。

**カマド** 北壁東寄りに構築されている。主軸方向は住居跡とほぼ一致する。規模は長さ85cm、幅95cmで、袖部は壁面に貼付けられ、灰白色砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃焼部は径50×62cm、深さ3cmの楕円形状に浅く掘り窪められ、火床面は径24×28cmを測る。奥壁は20°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅46cm、奥行15cmを測る。覆土は2層確認された。上層の1層暗褐色土で多量の焼土粒子を含む。2層暗褐色土も多量の焼土粒子を含む。

**覆土** 2層の覆土を確認した。埋め戻し土層で、1層褐色土層は多量のローム粒子・ロームブロックを含み、若干締りに欠ける。床面直上の2層暗褐色土層は少量のローム粒子を含み、締りがある。

**遺物** 出土遺物は僅かで、須恵器坏、須恵器長頸瓶の底部破片、土師器坏が検出されている。うち、土師器坏の底面に判読不明であるが、墨書が見られた。

**所見** 当住居跡の約4分の1が調査区外に広がっているとはいえ、全体の様相を確認するには十分である。出土遺物から8世紀中葉に相当する。

### 第7号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 1	土師器 坏	口径 — 底径 7.00 器高 (1.30)	平底の底部で、底部外縁部が僅かに肥厚する。底部および体部に墨書が見られるが、判読不明。	ロクロ成形で、底部は手持ちヘラケズリ。体部下端部手持ちヘラケズリ。内面ヘラミガキ。黒色処理。	雲母・石英・長石粒を含む褐色 (7.5Y R4/4) 良好	底部のみ1/2残存。墨書。内黒
第31図 2	須恵器 坏	口径 13.3 底径 7.00 器高 3.30	大きめの底径に比し、器高が浅い。体部は、下端がやや丸味を持つが、ほぼ直線的に外反する。	右回転ロクロ成形で、体部下端部回転ヘラケズリ。底部回転ヘラ切り。	石英・長石粒を含む灰色 (10Y5/1) 良好	底部1/2欠損
第31図 3	須恵器 坏	口径 13.40 底径 8.00 器高 3.20	大きめの底径に比し、器高が浅い。体部は、下端がやや丸味を持つが、ほぼ直線的に外反する。	右回転ロクロ成形で、底部は回転ヘラ切りの後、手持ちヘラケズリ。	石英・長石粒を含む灰色 (10Y5/1) 良好	体部2/3残存 口縁部1/8残存
第31図 4	須恵器 坏	口径 14.00 底径 8.50 器高 3.60	大きめの底径に対して器高が浅い。やや上げ底で、体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口縁端部が僅かに肥厚して反り返る。	右回転ロクロ成形。底部回転ヘラ切り。	雲母・石英・長石粒を含む灰色 (10Y1/7) 良好	体部1/6残存
第31図 5	須恵器 坏	口径 — 底径 8.00 器高 (3.60)	やや上げ底で、体部下端がやや丸味を持つが、ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	右回転ロクロ成形。底部は回転ヘラ切り後、体部下端から底部周縁回転ヘラケズリ。	雲母・石英・長石粒を含む青灰 (5B6/1) 良好	底部1/3残存
第31図 6	須恵器 長頸瓶	口径 — 底径 12.80 器高 (2.30)	高台部は「ハ」の字状に短く開き、端部から内側にやや持ち上がる。底部は平坦で、中央部で肥厚する。	ロクロ成形で、高台部は貼り付け。	石英・長石粒を含む灰色 (10Y7/1) 良好	底部約1/3残存

### 第8号住居跡 (S I - 8) (第32・33図、P L. 10)

**位置** 調査区の南西側、6F・6G区に位置する。全体的に掘り込みは浅く、既に確認面精査の段階では床面および壁は耕作等により削平され、僅かに炉址および柱穴を検出できたに過ぎない。また南側は8世紀代の第1号掘立柱建物跡と重複している。

**規模** 床面・壁面とも既に削平され大きさを確定できないが、僅かに残存している炉址および柱穴の配置から推定して4m前後の方形の住居跡と考えられる。

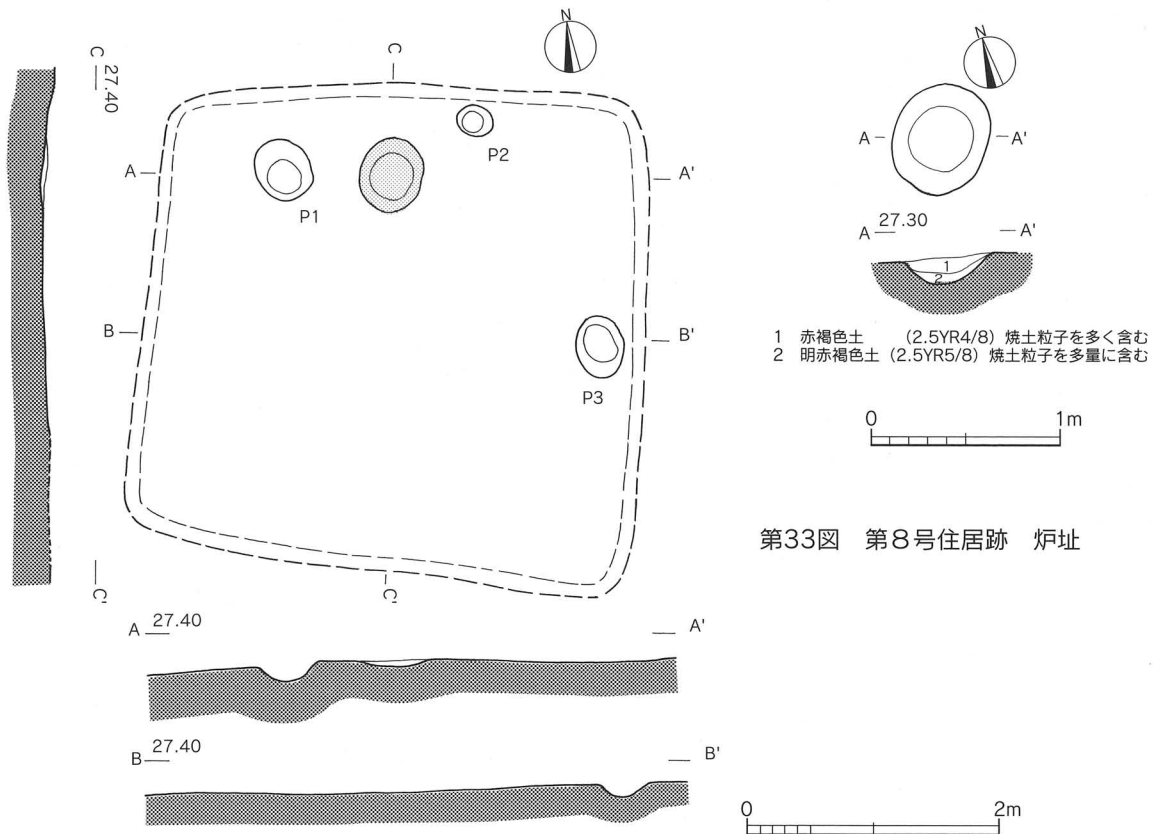
**主軸方向** 残存している炉址および柱穴の配置から主軸方位はN-74°-Wと推定される。

**壁** 削平され検出できていない。

**床** 削平され検出できていない。

**ピット** 炉址の周辺に2本、東壁寄りに1本の計3本の柱穴を検出した。いずれも楕円形を呈し、炉址西側のP1は径41×49cm、深さ14cm。炉址の北東側のP2は径22×30cm、深さ17.5cm。東側よりのP3は径38×47cm、深さ10cmである。

**炉** 北側の壁寄りに位置するものと推定される。長軸59cm、短軸50cm、深さ5cmの楕円形で、炉址底面



第33図 第8号住居跡 炉址

第32図 第8号住居跡

は加熱による赤化が著しい。覆土下層は多量の焼土粒子を含む明赤褐色土が堆積していた。

**覆土** 炉址および柱穴内の覆土しか確認できていない。

**遺物** 炉址内から土師器の小片が出土している。図示はできないが、古墳時代前期の土師器甕破片である。

**所見** 本住居跡は炉址と柱穴以外検出できず、不明な点が多いが、炉址内から出土した遺物から古墳時代前期の所産と考えられる。

#### 第9号住居跡 (S I-9) (第34・35・39・40図、P L. 11)

**位置** 調査区の中央南西側で、6 F 区に位置する。東側に第10号住居跡と重複し、また東西方向に延びる第3号溝が北壁に接して横断しており、壁およびカマドの一部が破壊されている。

**規模** カマドを北壁に設置し、東西軸3.58m、南北軸の短軸3.18mで、ほぼ方形の住居跡である。

**主軸方向** N-80°-W。

**壁** 確認面からは最深部で42.5cm、南壁と西壁の遺存状態は良好である。壁はいずれも外傾気味に立ち上がる。壁溝はカマド東側の攪乱部分を除き、全周する。床面からの深さは6~12cm、幅は平均20cmを測り、底面は断面U字状を呈する。

**床** 貼床で、掘り方は不整形に掘り込むものの、極端に深く掘り窪めることはなく、5~15cm前後とほぼ均等に掘り込んでいる。

**ピット** カマドと対峙するように南壁際中央に1本穿っている。楕円形ピットで径48×29cm、深さ11cm、出入口施設の梯子穴と思われる。

**カマド** 北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方向は住居跡と一致する。煙道部の先端の一部が住居跡の

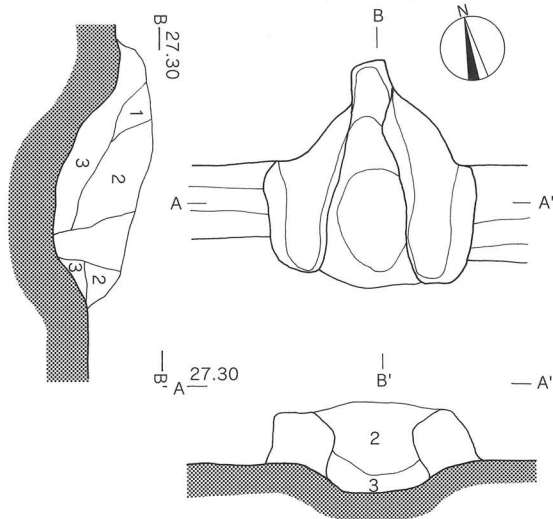


重複によって破壊されている。現存する規模は長さ114cm、幅106cmで、袖部は壁面に貼付けられ、灰白色砂質粘土を構築材に、暗褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃焼部は径58×88cm、深さ16cmの楕円形状に掘り窪められ、火床面は径20×33cmを測る。奥壁は48°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅88cm、奥行55cmを測る。覆土は3層確認された。上層の1・2層は多量のローム粒子と粘土粒子・焼土粒子を含む黄褐色土とにぶい黄褐色土。下層の3層暗褐色土は少量の構築材である粘土・焼土粒子を含む。

**覆土** 東側に位置する第10号住居跡を切って構築しており、覆土は3層に分層される。いずれも埋め戻し土層であるが、いわゆるレンズ状堆積を示す。住居跡の大部分を覆っているのは上層の2層暗褐色土および中層の3層暗褐色土で、ローム粒子・ロームブロックを含み、締まりがある。下層の1層褐色土は壁際に流れ込んだ堆積層であろう。

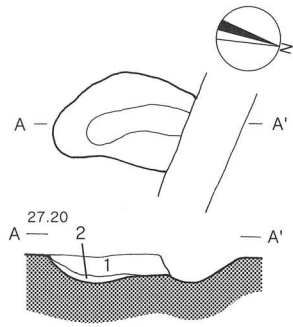
### 第9号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	須恵器 坏	口径 13.40 底径 6.00 器高 4.30	やや上げ底で、体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口縁端部が僅かに肥厚して反り返る。	右回転ロクロ成形。体部下端手持ちヘラケズリ。底部回転ヘラ切りの後、ナデ。	石英・長石粒を含む褐色(7.5Y R4/3)良好	口縁部一部欠損
第40図 2	須恵器 坏	口径 — 底径 5.95 器高 (3.40)	体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がり、底部は平底である。	右回転ロクロ成形。体部下端手持ちヘラケズリ。底部回転ヘラ切りの後、ナデ。	雲母・石英・長石粒を含む灰白色(10Y7/1)良好	体部下半部1/2残存
第40図 3	須恵器 高台付 坏	口径 — 底径 — 器高 (2.70)	丸味を持つ底部から体部は急角度で外傾し、高台端部が外側に引き出される。	右回転ロクロ成形。底部は、回転ヘラ切りで、高台を付した後高台周囲をロクロナデ。	石英・長石粒を含むにぶい赤褐色(5Y R5/4)良好	底部1/4残存
第40図 4	須恵器 高台付 坏	口径 13.40 底径 6.00 器高 4.30	丸味を持つ底部から体部は急角度で外傾し、口縁部は外反して開く。高台端部が外側に引き出される。	右回転ロクロ成形。底部は、回転ヘラ切りで、高台を付した後高台周囲をロクロナデ。	雲母・石英・長石粒を含む灰白色(10Y7/1)良好	底部1/4残存
第40図 5	須恵器 高台付 坏	口径 — 底径 — 器高 (2.80)	丸味を持つ底部から体部は急角度で外傾し、口縁部が外反する。高台端部が外側に引き出される。	右回転ロクロ成形。底部は、回転ヘラ切りで、高台を付した後高台周囲をロクロナデ。	雲母・石英・長石粒を含むにぶい橙色(7.5Y R6/4)内面灰黄褐色(10Y R4/2)良好	底部1/4残存
第40図 6	須恵器 蓋	口径 14.00 底径 — 器高 2.60	天井部は平坦で、斜面はほぼ直線的である。口縁部は若干外反気味に折れ、屈曲部の稜線は明瞭である。ツマミは扁平化した宝珠形で頂部と縁辺部の高さがほぼ同じである。	右回転ロクロ成形。天井部回転ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む灰色(N5/)良好	体部1/2残存
第40図 7	土師器 甕	口径 22.00 底径 — 器高 (12.00)	長胴気味の甕で、頸部から口縁部は弧状に外反し、口縁端部が摘み出されて帯状になる。	口縁部ヨコナデ、胴部内面は横方向のヘラナデ。外面縦位のヘラナデ。	石英・長石粒を含む褐色(7.5Y R4/3)良好	口縁部1/4残存
第40図 8	土師器 甕	口径 22.00 底径 — 器高 (6.70)	長胴気味の甕で、頸部から口縁部は弧状に外反し、口縁端部が摘み出されて帯状になる。	口縁部ヨコナデ、胴部内面は横方向のヘラナデ。外面縦位のヘラナデ。	石英・長石粒を含むにぶい黄褐色(10Y R7/4)良好	口縁部1/4残存
第40図 9	土師器 甕	口径 — 底径 17.60 器高 (4.60)	平底の底部から体部は直線的に外傾して立ち上がる。	胴部内面ハケ状工具によるナデ、外面横方向のヘラケズリ、底部ナデ。	石英・長石粒を含むにぶい黄褐色(10Y R7/4)良好	底部1/4残存
第40図 10	須恵器 甕	口径 — 底径 13.00 器高 (6.40)	体部は直線的に外傾して立ち上がる。底部は5孔式となる。	胴部内面ナデ、外面横方向のヘラケズリ、下端部ヘラケズリによる面取り、底部ナデ。	石英・長石粒を含む橙色(5Y R7/6)良好	底部1/4残存



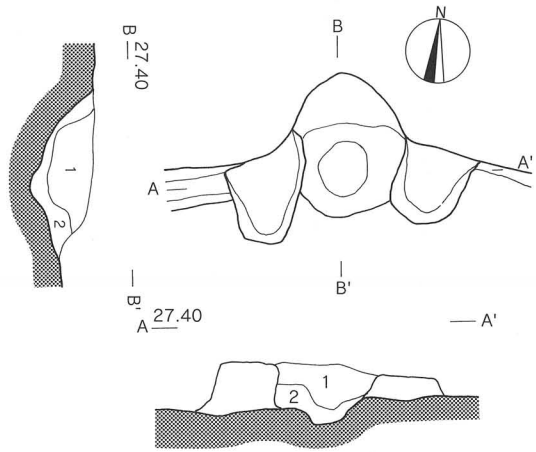
- 1 黄褐色土 (10YR5/6) 多量のローム粒、焼土粒、少量の灰色粘土粒を含む
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 多量のローム粒、少量の焼土粒を含む
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 多量のローム粒、少量の焼土粒を含む

第35図 第9号住居跡 カマド



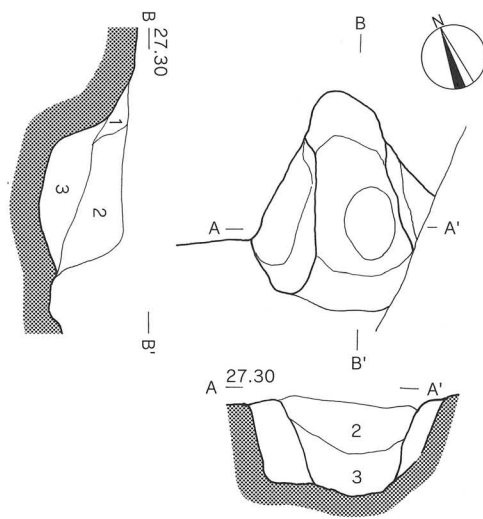
- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土粒を含む
- 2 明赤褐色土 (2.5YR5/8) 焼土粒子を多量に含む

第37図 第11号住居跡 炉址



- 1 褐色土 (10YR4/4) 多量のローム粒、焼土粒、少量の焼土粒、灰色粘土粒を含む
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 少量のローム粒、少量の焼土粒を含む

第36図 第10号住居跡 カマド



- 1 褐色土 (10YR4/6) 多量のローム粒、灰色粘土粒、焼土粒を含む
- 2 褐色土 (10YR4/4) 多量のローム粒、少量の灰色粘土粒、焼土粒を含む
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 多量のローム粒、多量の灰色粘土粒、焼土粒を含む



第38図 第12号住居跡 カマド

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 11	土師器 甕	口径 — 底径 6.00 器高 (1.60)	平底の底部から体部は直線的に外傾して立ち上がる。底部に木葉痕を残す。	胴部内面ナデ、外面横方向のヘラケズリ、底部木葉痕。	石英・長石粒を含む 黒色(7.5Y R2/1) 良好	底部1/4 残存
第40図 12	須恵器 甕	口径 36.40 底径 — 器高 (5.10)	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はくの字状に外反して、端部はつまみ上げられる。	口縁部内外面横ナデ。体部外面縦位の平行タタキ、内面指頭押圧、ナデ。	雲母・石英・長石粒を含む にぶい黄褐色(10Y R5/3) 良好	口縁部1/6 残存
第40図 13	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 (2.70)	体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。底部は5孔式である。	体部外面縦位の平行タタキ、下端部横方向のヘラケズリ、内面指頭による横方向のナデ。	石英・長石粒を含む 灰黄褐色(10Y R5/2) 良好	底部破片





第39図 第9・10・11・12号住居跡 遺物出土状況

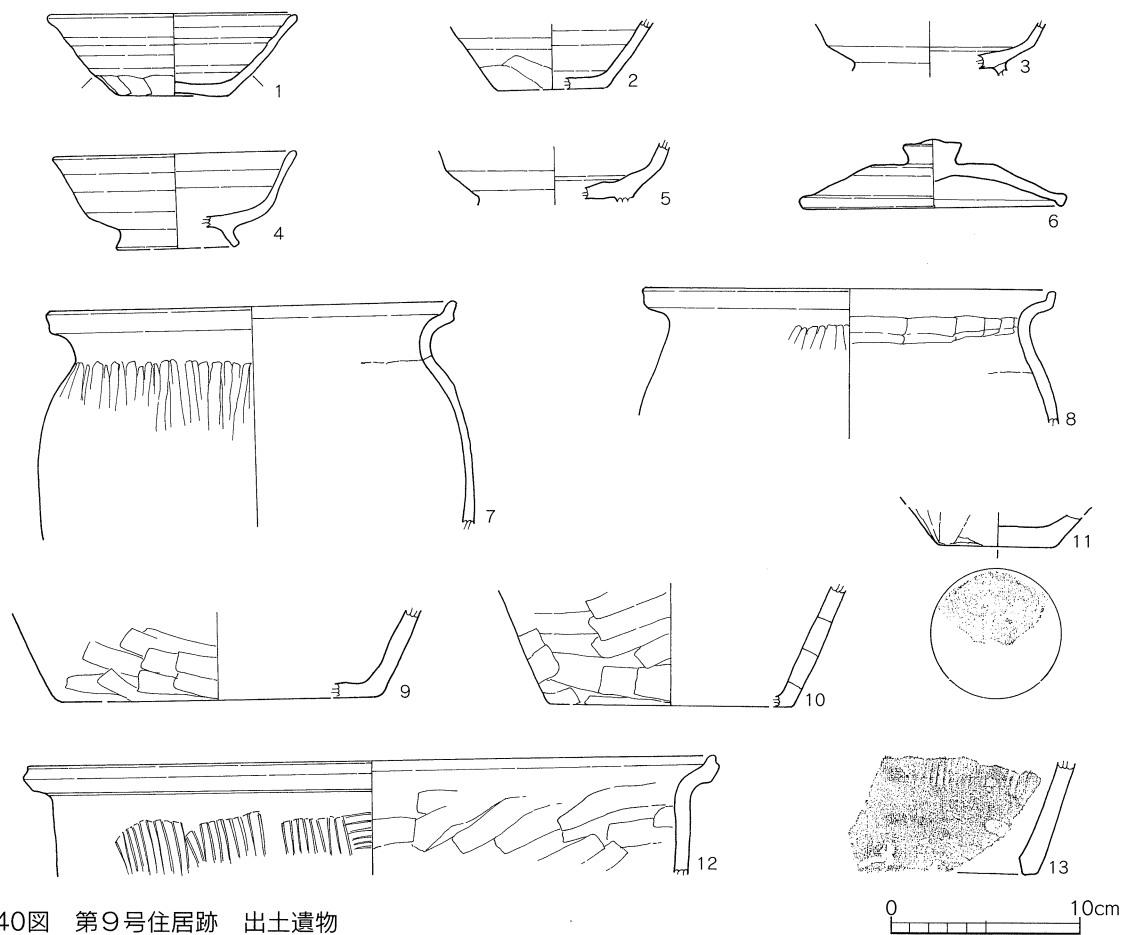
**遺物** 完存する住居にしては遺物の量は少ない。出土遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕・甑と器種は整っている。

**所見** 出土遺物から9世紀中葉に相当するものと思われる。

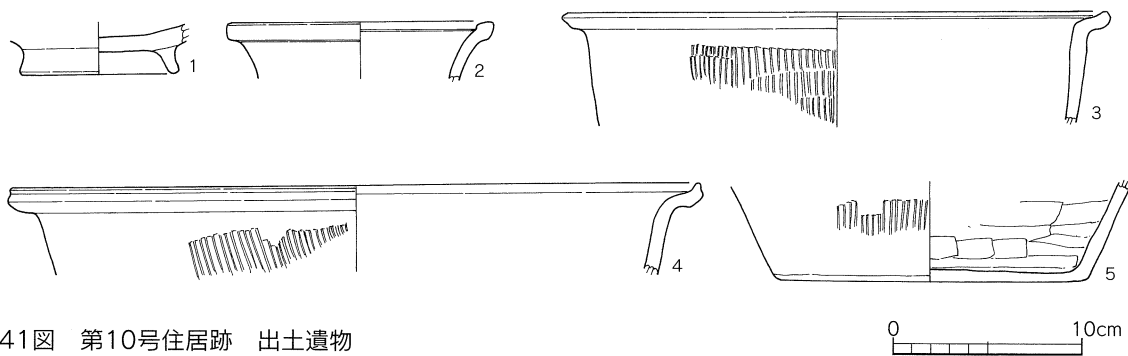
第10号住居跡（S I - 10）（第34・36・39・41図、P L . 11）

**位置** 調査区の中央南西側で、6 F 区に位置する。西側に第9号住居跡と東側に第11号住居跡さらに南側で第13号住居跡と重複し、また東西方向に延びる溝が北壁に平行して横断しており、壁および床面、炉址の一部が破壊されている。

**規模** カマドを北壁に設置し、西側が第9号住居跡によって破壊されているため、全体の様相が把握できないが、それぞれ各壁隅が残存しており、これを起点に計測すると南北軸を長軸とし3.99mを測り、東西軸



第40図 第9号住居跡 出土遺物



第41図 第10号住居跡 出土遺物

の短軸3.32mで、ほぼ方形の住居跡である。

**主軸方向** N-11° - E。

**壁** 遺存している北壁と南壁の確認面からは最深部で22.5cmであり、壁はいずれも外傾気味に立ち上がる。壁溝はカマド西側の北壁と南壁に構築されており、床面からの深さは2.5～5cm、幅は12～20cmを測り、底面は断面U字状を呈する

**床** 貼床で、掘り方は不整形に掘り込むものの、極端に深く掘り窪めることはなく、5～15cm前後とほぼ均等に掘り込んでいる。

**ピット** 床面および掘り方の精査にもかかわらず、柱穴は確認できなかった。

**カマド** 北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方向は住居跡とほぼ一致する。規模は長さ85cm、幅134cmで、袖部は壁面に貼付けられ、灰白色砂質粘土を構築材に、褐色土・ローム粒子を用いて造られている。

燃焼部は径50×62cm、深さ14cmの楕円形状に掘り窪められ、火床面は径26×29cmを測る。奥壁は32°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅60cm、奥行45cmを測る。覆土は2層確認された。上層の1層褐色土は多量のローム粒子に、粘土粒子と焼土粒子を含む。2層暗褐色土は少量の粘土粒子・焼土粒子を含む。

**覆土** 重複する東側の第11号住居跡からの流れ込みがみられ、明らかに本跡が新期にもかかわらず、境界を明確には把握できなかった。ローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土が覆土全体を覆っている。

**遺物** 住居の規模に比して遺物の量は少ない。器種構成も僅かで、土師器高台付坏、須恵器甕である。

**所見** 出土遺物から9世紀代と推定される。

### 第10号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 1	土師器 高台付 坏	口径 — 底径 8.40 器高 (2.7)	高台部分。高台は「ハ」の字状に開く。	内外面クロロナデ。底部回転ヘラ切り。高台貼付。	雲母・石英・長石粒を含む明赤褐色(5Y R5/6)良好	底部1/3 残存
第41図 2	須恵器 甕	口径 14.00 底径 — 器高 (3.10)	口縁部のみ破片で、口縁部は外反し、端部は肥厚し丸みをもつ。	口縁部は横ナデ。端部は折り返した二重口縁である。	雲母・石英・長石粒を含む灰白色(10Y R7/1)良好	口縁部のみ1/2残存
第41図 3	須恵器 甕	口径 36.40 底径 — 器高 (4.5)	口縁部に最大径を持つ長胴気味の甕で、頸部で屈曲して口縁部は外反し、端部は短くつまみ上げられる。	口縁部ヨコナデ、胴部内面下から上に指ナデした後横方向にハケによるナデ、外面縦方向の平行タタキ。	雲母・石英・長石粒を含む褐灰色(7.5Y R4/1)内面褐色(7.5Y R4/2)良好	口縁部1/4 残存
第41図 4	須恵器 甕	口径 29.00 底径 — 器高 (5.80)	口縁部に最大径を持つ長胴気味の甕で、頸部で屈曲して口縁部は外反し、端部は短くつまみ上げられる。	口縁部ヨコナデ、胴部内面下から上に指ナデした後横方向にハケによるナデ、外面縦方向の平行タタキ。	石英・長石粒を含む灰色(N5/1)良好	口縁部1/8 残存
第41図 5	須恵器 甕	口径 — 底径 16.40 器高 (5.30)	底部破片。平底の底部から体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	体部外面縦方向のタタキ、下端部横方向のヘラケズリ。底部ヘラナデ。内面ヘラ状工具による横方向のナデ。底面指頭によるナデ。	雲母・石英・長石粒を含むにぶい赤褐色(5Y R5/4)普通	底部1/2 残存

### 第11号住居跡 (S I-11) (第34・37・39・42図、P L. 12)

**位置** 調査区の中央南西側で、5F・6F区に位置する。西側で第10号住居跡と第13号住居跡、東側で第12号住居跡と重複し、また北壁寄り、東西方向に延びる溝が横断しており、床面および炉址の一部が破壊されている。さらに第12号住居跡と重複する部分は調査区外に広がっている。

**規模** 炉址を北側中央に設置し、南北軸4.32m、東西軸2.46mの長方形の住居跡である。

**主軸方向** 炉址の位置を中心にN-7°-E。

**壁** 確認面からは最深部で18cm、南壁と北壁の遺存状態がやや良好である。両壁はいずれも外傾気味に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。

**床** 貼床で、掘り方は浅く、目立つ掘り込みではない。規模は5～8cm前後とほぼ均等に掘り込んでいる。

**ピット** 床面および掘り方の精査にもかかわらず、柱穴は確認できなかった。

**炉** 住居跡北側中央に位置する。北側は東西に延びる溝によって破壊されている。したがって確認できた範囲は長軸70cm、短軸46cm、深さ10cmの楕円形で、炉址底面は鍋底状を呈し、全体的に加熱による赤化が著しい。覆土下層は多量に焼土粒子を含む明赤褐色土が堆積していた。

**覆土** 西側の第10号住居跡および東側に位置する第12号住居跡によって切られており、覆土は床面レベル

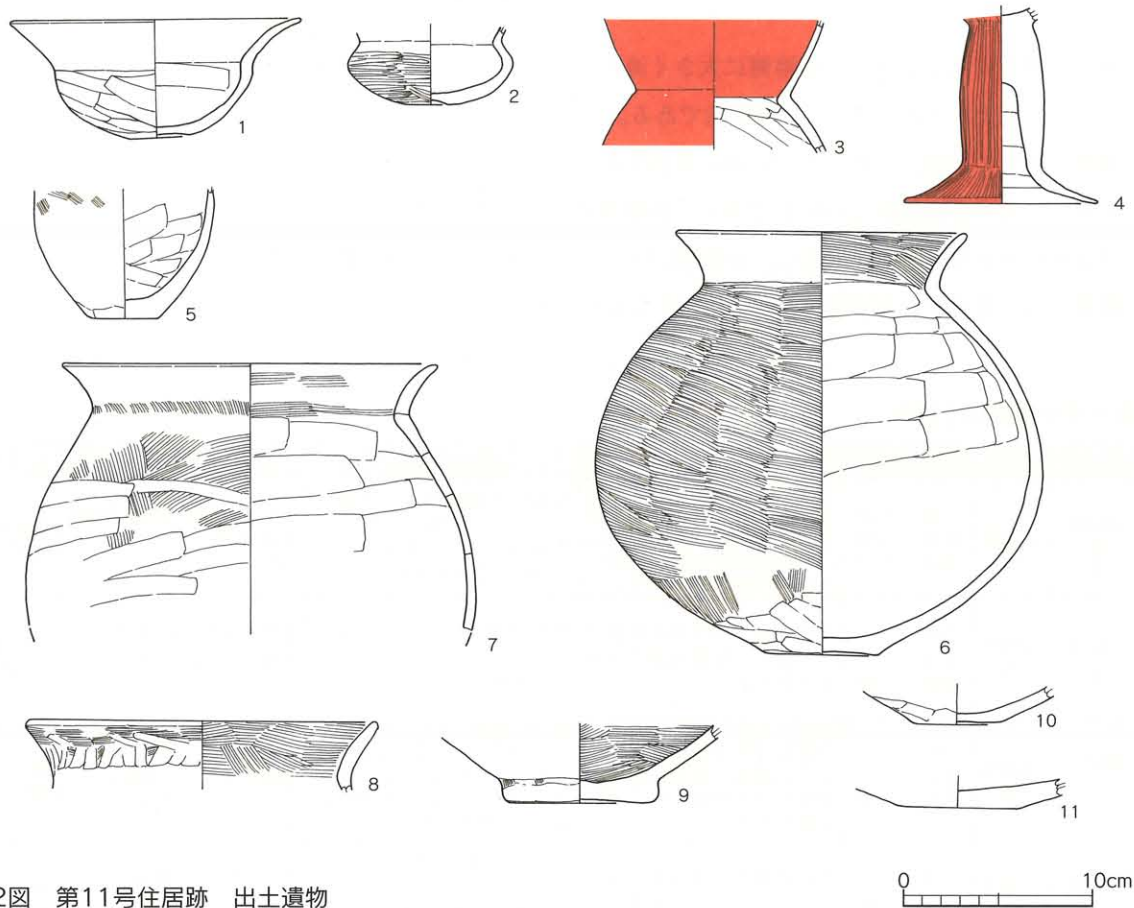
がほぼ同じである第10号住居跡側に大きく流れ込んでいるものの、第12号住居跡との切り合い関係は明瞭である。覆土は大きく3層に分層可能である。

**遺物** 4軒の重複住居群で最も古期に相当する住居に比しては出土遺物が比較的豊富である。住居中央部を中心に大半が床面直上の出土である。器種構成は土師器埴・高坏・甕で、1の口縁部が大きく外反する埴はタール状の炭化物が付着し、6の甕はほぼ完形に近い。当該期で最も遺物がまとまっていた。

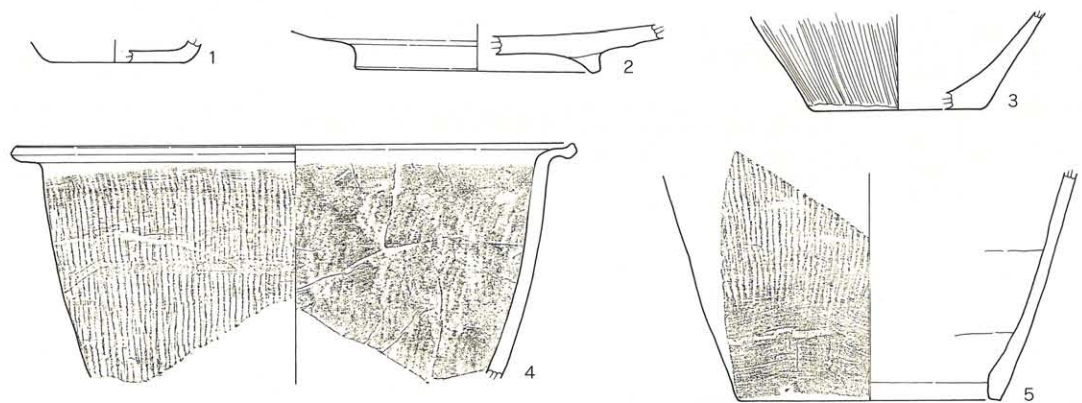
**所見** 出土遺物から古墳時代前期に相当するものである。

### 第11号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	土師器 埴	口径 15.40 底径 4.00 器高 6.50	小さな底部は上げ底を呈し、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁部と体部の境界は括れ、内面は明確な稜を有する。	外面口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。外面にタール状の炭化物が付着。	チャート・石英・長石粒を含む 黒色(10YR2/1) 良好	口縁部1/2 欠損
第42図 2	土師器 埴	口径 — 底径 — 器高 (4.00)	小型の埴。小さな底部は上げ底で、体部は扁平な球形を呈する。	外面体部ヘラケズリの後、ヘラミガキ。底部ヘラケズリ。内面ナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 黄橙色(7.5YR7/84) 良好	口縁部 欠損
第42図 3	土師器 壺	口径 — 底径 — 器高 (6.80)	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は内湾気味に外反する。口縁部と体部の境界に明瞭な括れがみられ、内面に稜を有する。	外面口縁部ヘラミガキ。体部ヘラミガキ。内面口縁部ヘラミガキ、体部横方向のヘラナデ。口縁部内外面と外面体部に赤彩が施されている。	石英・長石粒を含む 暗赤褐色(2.5YR3/4) 胴部内面におい黄褐色 (10YR7/4) 良好	頸部1/4 残存
第42図 4	土師器 高坏	口径 — 底径 10.10 器高 (10.20)	脚柱部破片。脚柱部はエンタシス状を呈し、裾部はなだらかに開く。	外面脚柱部ヘラケズリの後、縦位のヘラミガキ。裾部ヘラミガキ。内面ナデ。外面に赤彩。	雲母・長石・石英粒を含む 赤褐色(2.5YR4/8) 良好	脚部のみ 残存
第42図 5	土師器 壺	口径 — 底径 3.60 器高 (6.80)	小型で、平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	体部外面横方向のヘラケズリ。底部ナデ。内面横方向のヘラナデ。	石英・長石粒を含む におい赤褐色(5YR5/4) 内面におい赤褐色 (5YR4/4) 良好	底部1/3 残存
第42図 6	土師器 甕	口径 15.20 底径 5.80 器高 22.30	上げ底気味の底部から体部は球状を呈する。最大径は体部中位に位置する。口縁部はくの字状に外反する。	口縁部外面横ナデ。体部横方向のハケ目。下端部ヘラケズリ。底部ヘラナデ。内面口縁部横方向のハケ目、体部ヘラ状工具によるナデ。	雲母・長石・石英粒を含む 明赤褐色(2.5YR5/8) 良好	体部上半 部1/2欠損
第42図 7	土師器 甕	口径 40.00 底径 — 器高 (14.00)	体部は球状を呈し、最大径は体部中位に位置する。口縁部はくの字状に外反する。	口縁部外面ハケ目調整の後横ナデ。体部横方向のハケ目調整の後ヘラケズリ。内面口縁部横方向のハケ目の後ヘラナデ、体部ヘラ状工具によるナデ。	角閃石・石英・長石粒を含む におい黄褐色(10YR5/4) 良好	胴上半部 1/4残存
第42図 8	土師器 甕	口径 18.70 底径 — 器高 (3.50)	口縁部のみ破片。口縁部はくの字状に外反する。	外面ハケ目調整の後、ヘラナデ。内面ハケ目調整。	石英・長石粒を含む 褐色(7.5YR4/4) 内面橙色(7.5YR6/8) 良好	口縁部1/3 残存
第42図 9	土師器 甕	口径 — 底径 8.10 器高 (3.40)	底部破片。上げ底で、突出する底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	外面体部ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面ハケ目調整。	石英・長石粒を含む におい黄褐色(10YR6/4) 良好	底部のみ 残存
第42図 10	土師器 甕	口径 — 底径 4.60 器高 (2.00)	底部破片。上げ底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	外面体部ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む におい褐色(7.5YR5/4) 内面におい黄褐色 (10YR6/4) 良好	底部のみ 残存
第42図 11	土師器 甕	口径 — 底径 6.00 器高 (1.70)	底部と体部の境界が明瞭ではない。平底の底部から体部は大きく開く。	外面体部ヘラケズリ。底部ヘラナデ。内面ヘラケズリの後ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 橙色(5YR6/6) 良好	底部3/4 残存



第42図 第11号住居跡 出土遺物



第43図 第12号住居跡 出土遺物

第12号住居跡 (S I - 1 2) (第34・38・39・43図、P L. 12)

**位置** 調査区の中央南西側で、5 F区に位置する。西側に第11号住居跡を切って構築しており、さらに東側の大半は調査区外に広がっている。また東西方向に延びる溝が北壁に平行して横断しており、壁および床面、カマドの一部が破壊されている。

**規模** カマドを北壁に設置し、西側のみの確認のため、全体の様相が把握できない。検出された現存規模は西壁が2.50m、北壁が2.0mを測る。既存の住居跡から推定してほぼ方形の住居跡であろう。

**主軸方向** N - 3° - E。

**壁** 遺存している北壁の確認面からは最深部で18cmであり、検出できた北壁および西壁はいずれも外傾

気味に立ち上がる。壁溝は全周するようで、確認部分の北壁と西壁とも構築されており、床面からの深さは6～7cm、幅は13～30cmを測り、底面は断面U字状を呈する

**床** 貼床で、掘り方は不整形に掘り込むものの、極端に深く掘り窪めることはなく、8～15cm前後とほぼ均等に掘り込んでいる。

**ピット** 床面および掘り方の精査にもかかわらず、柱穴は確認できなかった。

**カマド** カマドが設置されている北壁の大半が調査区外に広がっているため、位置は正確ではないが、ほぼ中央に構築されているものと推定される。主軸方向は住居跡と一致する。規模は長さ108cm、現存する幅95cmで、袖部は壁面に貼付けられ、灰白色砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を用いて造られている。燃烧部は径65×88cm、深さ8cmの楕円形状に掘り窪められ、火床面は径25×30cmを測る。奥壁は66°の急角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅45cm、奥行83cmを測る。覆土は3層確認された。上層の1・2層は多量のローム粒子と粘土粒子・焼土粒子を含む褐色土。下層の3層暗褐色土は多量のカマド構築材である粘土・焼土粒子を含む。

**覆土** 重複する西側の第11号住居跡を切っており、切り合い関係は明瞭である。明らかに本址が新期であり、覆土の土層は大きく2層に分層できる。いずれも埋め戻し土層で、上層の4層暗褐色土はローム粒子・ロームブロックを含み、下層の暗褐色土もローム粒子・ロームブロックを含み住居跡全体を覆っている。

**遺物** 住居の大半が調査区外に広がっているため、遺物の出土は限定されている。検出された遺物は土師器盤・甕、須恵器坏・甑である。

**所見** 出土遺物から8世紀代と思われる。

#### 第12号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 1	須恵器 坏	口径 — 底径 8.00 器高 (1.2)	平底の底部から体部下端は丸みを持ち、外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。底部手持ちヘラケズリ。	雲母・石英・長石粒を含む灰白色(5Y7/2)内面にぶい黄橙色(10YR7/2)良好	底部1/4残存
第43図 2	土師器 盤	口径 — 底径 13.00 器高 (2.40)	高台部のみ、高台は「ハ」の字状に開く。	ロクロ成形。底部内面・外面ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。高台貼り付け後、ロクロナデ。	雲母・石英・長石粒を含むにぶい橙色(7.5YR7/4)良好	底部1/4残存
第43図 3	土師器 甕	口径 — 底径 9.20 器高 (4.80)	底部破片。平底の底部から体部は外傾して立ち上がる。	外面体部縦方向の細かなナデ。底部ナデ。内面横方向のナデ。	雲母・石英・長石粒を含むにぶい赤褐色(5YR4/4)良好	底部のみ1/3残存
第43図 4	須恵器 甑	口径 30.00 底径 — 器高 (12.20)	5と同一個体であろう。口縁部に最大径を持つ長胴気味の甕で、頸部で屈曲して口縁部は外反し、端部は短く摘み上げられる。	口縁部ヨコナデ、胴部内面横方向のナデ、外面縦方向に平行タタキ。	雲母・石英・長石粒を含む黄灰色(2.5Y6/1)良好	口縁部1/4残存
第43図 5	須恵器 甑	口径 — 底径 14.00 器高 (12.10)	4と同一個体であろう。体部はやや内湾気味に外傾して立ち上がる。底部は5孔式である。	体部外面縦方向の平行タタキ、下端部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。底部ヘラ状工具による面取り。	雲母・石英・長石粒を含む灰黄色(2.5Y6/2)良好	底部1/4残存

第13号住居跡（S I - 13）（第34図、P L . 12）

**位置** 調査区の中央南西側で、6 F区に位置する。住居跡の大半は2軒の住居跡によって切られている。北側が第10号住居跡と東側が第12号住居跡と重複している。

**規模** 2軒の住居跡によって切られ、南西壁隅のみが遺存しているものの全体の規模は不明である。僅かに残存する西壁が32cm、南壁が42cmを測るが、壁隅の様相から判断して方形を呈する住居跡であろう。

**主軸方向** 炉址等の位置は不明であるが、重複している住居跡と同じと推定するとN-10°-Eとなる。

**壁** 遺存している南西壁隅の確認面からは最深部で24.5cmを測り、外傾気味に立ち上がる。壁溝は確認できなかつた。

**床** 床面の構築は確認できなかつた。また掘り方は非常に浅く、目立つ掘り込みではない。

**ピット** 床面および掘り方の精査にもかかわらず、柱穴は確認できなかつた。

**炉** 確認できなかつた。

**覆土** 北側の第10号住居跡の切り合い関係は明瞭であったが、東側の第11号住居跡との関係は床面がほぼ同レベルのため明確ではなかつた。なお、ローム粒子・ロームブロックを含む埋め戻し土層である褐色土が1層確認できるだけである。

**遺物** 遺物の出土はなかつた。

**所見** 出土遺物がなく、時期の判断はできなかつた。なお、古墳時代前期の第11号住居跡に切られていることから古墳時代前期もしくはそれ以前と推定する。

第14号住居跡（S I - 14）（第44～48図、P L . 13）

**位置** 調査区の中央南西側で、6 F区に位置する。北西側で第16号住居跡と重複し、また西壁寄りで、第1号土坑が掘り込まれている。

**規模** 炉址を北側中央に設置し、南北軸を長軸とし4.45mを測り、東西軸は短軸で4.12mの方形の住居跡である。

**主軸方向** 炉址の位置を中心にN-15°-E。

**壁** 確認面からは最深部で24cm、東壁と南壁の遺存状態がやや良好である。壁はいずれも外傾気味に立ち上がる。壁溝は東壁のみ構築されており、床面からの深さは4～5cm、幅は15cmを測り、底面は断面U字状を呈する

**床** 貼床で、掘り方は浅く、不整形でありながら目立つ掘り込みではない。規模は5～10cm前後とほぼ均等に掘り込んでいる。

**ピット** 西壁際中央と南東壁隅の計2本の柱穴を検出した。西壁際のP1は円形で、径30×28cm、深さ33cm。南東壁隅のP2は楕円形を呈し、径56×40cm、深さ38cmである。

**炉** 北東壁隅寄りに位置する。長軸86cm、短軸45cm、深さ14cmの楕円形で、炉址底面は加熱による赤化が著しい。覆土は多くの焼土粒子を含む明赤褐色土が堆積していた。

**覆土** 北西側の第16号住居跡を切って構築しており、覆土は2層に分層され、いずれも埋め戻し土層である。下層の1層は少量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土である。上層の2層褐色土層は多量のローム粒子と僅かなロームブロックを含み、住居跡覆土全体を覆っている。

**遺物** 住居床面直上より土師器埴・甕が出土した。図示以外にも土師器甕の小破片が出土している。

**所見** 出土した遺物は僅かであるが、古墳時代前期のものと推定される。

### 第14号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	土師器 埴	口径 — 底径 2.00 器高 (2.80)	体部のみ破片。上げ底気味の小さな底部から体部は扁平の球形を呈する。	外面体部ヘラナデ。内面口縁部ハケ目調整の後、ヘラナデ。体部ナデ。	チャート・石英・長石粒を含む浅黄橙色(10YR8/4)普通	底部のみ残存
第48図 2	土師器 甕	口径 16.60 底径 — 器高 (12.80)	球形の体部から口縁部はくの字状に外反する。端部は幅狭い帯状を呈する。	外面口縁部縦位のハケ目調整の後、横ナデ。体部ヘラナデ。内面口縁部ハケ目調整。体部ナデ。	雲母・石英・長石粒を含む褐色(7.5YR4/3)良好	底部欠損

### 第15号住居跡 (S I-15) (第44・45図、P L. 13)

**位置** 調査区の中央南西側、6 E・6 F区に位置する。本跡の西側約1/2以上が調査区外に広がり、南東側コーナーのみ調査可能であった。なお、南東壁隅には第16号住居跡と重複している。また東壁辺に接して南北方向に走る第3号溝が縦断しており、壁および床面の一部を破壊している。

**規模** 大半が調査不可能なため、確認できたのは東壁辺と南壁辺の部分のみである。東壁が3.60m、南壁が2.85mを確認している。全体的な様相から判断して方形を呈するものと推定される。

**主軸方向** N-20° - E。

**壁** 遺存良好な南壁の確認面からの深さは18cmで、ほぼ垂直気味に立ち上る。壁溝は確認できなかった。

**床** 南側が2cmほど低くなるものの平坦である。またほぼ全面的に貼床が施されているものの、顕著な硬化面は確認できなかった。掘り方は全体的に簡素な素掘で、検出部における貼床が極端に薄層となっている。

**ピット** 貼床面から1本を検出した。P 1は南東隅寄りに位置し、円形を呈し、29×32cm、深さ50cmで支柱穴のひとつと考えられる。

**覆土** 未調査区に接した断面観察で、4層が確認された。いずれも埋め戻し土層で、上層の5層はローム粒子・ロームブロックを僅かに含む褐色土。床面を覆う8層もローム粒子・ロームブロックを僅かに含む暗褐色土である。6・7層は壁下に堆積した崩落土層であろう。とくに7層褐色土は多量のローム粒子・ロームブロックを含む。

**遺物** 出土遺物は土師器坏・甕、須恵器甕の小片が確認されているが、図示していない。

**所見** 図示できない土師器・須恵器の小破片から時期を判断すると、平安時代と推定される。

### 第16号住居跡 (S I-16) (第44・45図、P L. 13)

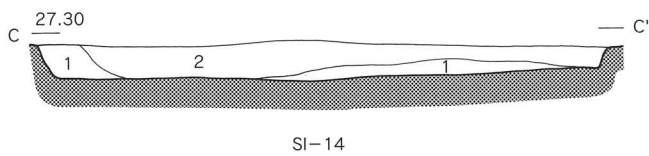
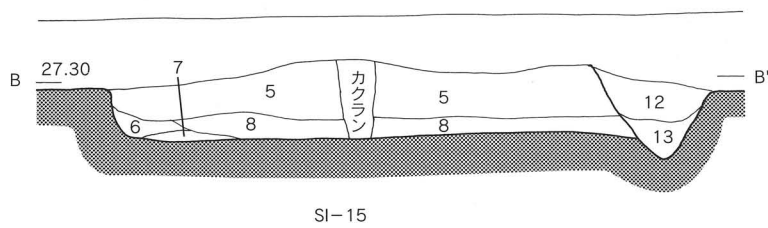
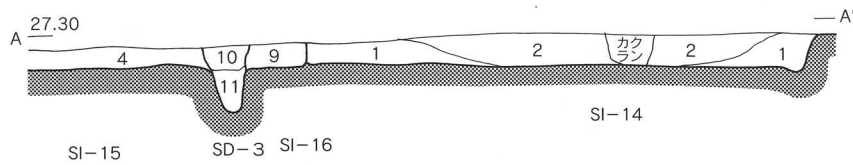
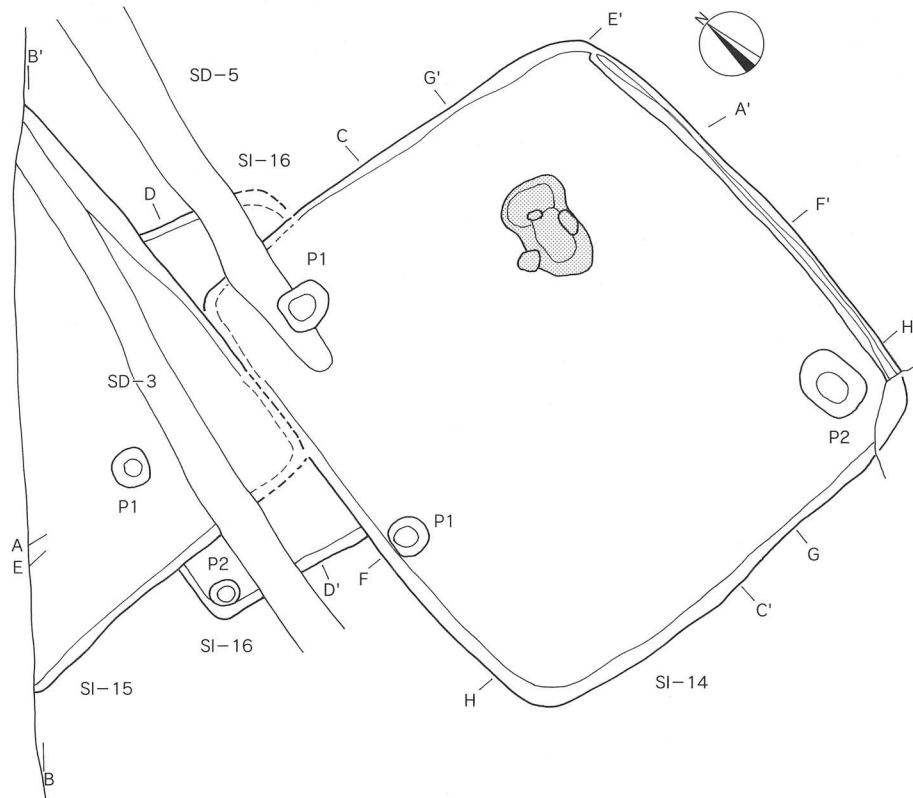
**位置** 調査区の中央南西側、6 E・6 F区に位置する。本跡の大半が東西に位置する2軒の住居跡によって切られている。北壁の半分を僅かに残し、東側は第14号住居跡に、南壁の半分を残し、西側は第15号住居跡と重複している。また東壁辺と反対の西壁辺に接して南北方向に走る第3・5号溝が縦断しており、壁および床面の一部を破壊している。

**規模** 大半が調査不可能なため、確認できたのは北壁辺と南壁辺の一部僅かに南西コーナーで、反対側の北東コーナーから南北軸2.94m、東西軸は2.40mを測る。全体的な様相から判断して方形を呈するものと推定される。

**主軸方向** 炉址の位置は確認できないが、北側に位置するものと推定して主軸方向はN-20° - Eを示す。

**壁** 遺存良好な南壁の確認面からの深さは18cmで、ほぼ垂直気味に立ち上る。壁溝は確認できなかった。





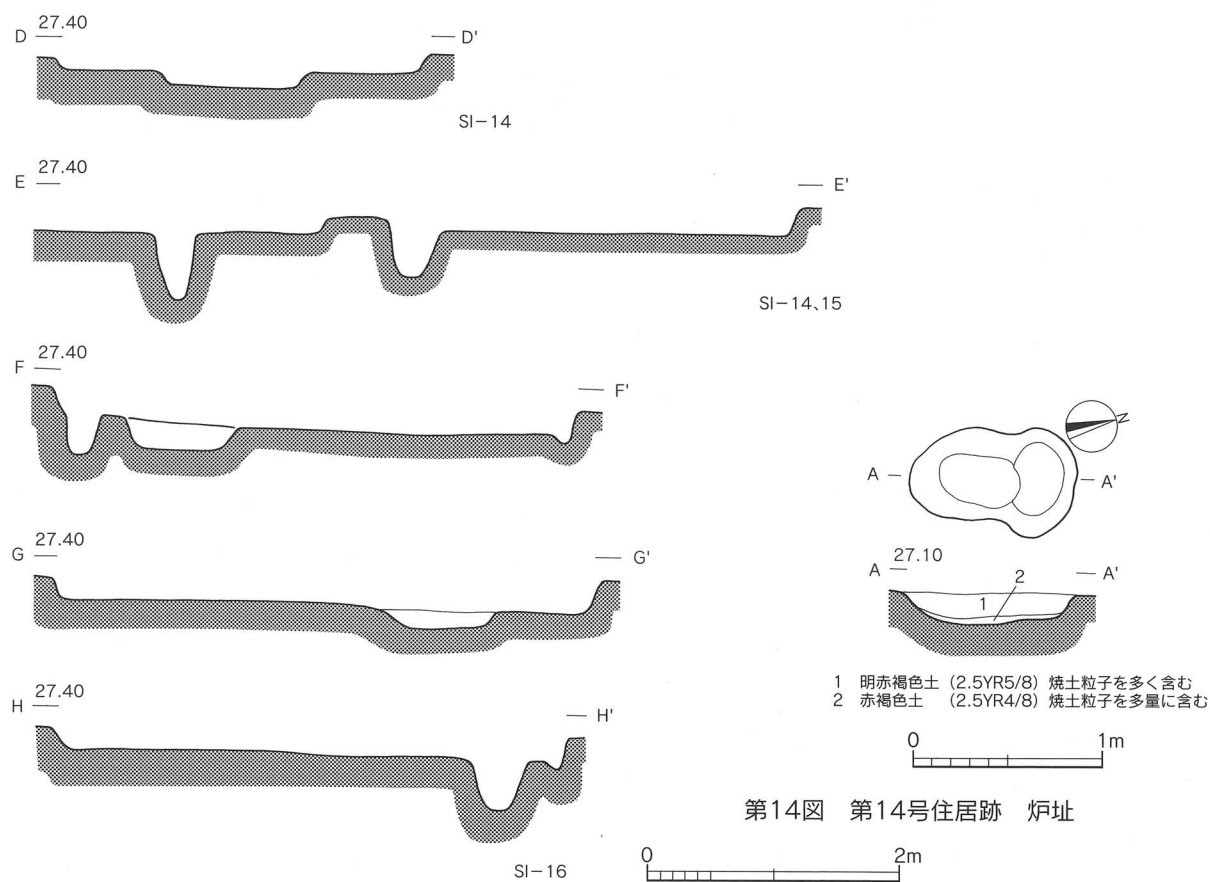
- SI-14 { 1 褐色土 (10YR4/4) 少量のローム粒、ロームブロックを含む  
2 褐色土 (10YR4/6) 多量のローム粒、少量のロームブロックを含む
- SI-15 { 4 暗褐色土 (10YR3/4) 多量のローム粒、少量のロームブロックを含む  
5 褐色土 (10YR4/4) 少量のローム粒、ロームブロックを含む  
6 暗褐色土 (10YR3/3) 少量のローム粒、ロームブロックを含む  
7 褐色土 (10YR4/6) 多量のローム粒、ロームブロックを含む  
8 暗褐色土 (10YR3/4) 少量のローム粒、ロームブロックを含む

SI-16 9 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 多量のローム粒、少量のロームブロックを含む

- SD-3 { 10 褐色土 (10YR4/6) 多量のローム粒、少量のロームブロックを含む  
粘性がない  
11 褐色土 (10YR4/4) 多量のローム粒、少量ロームブロックを含む  
粘性がない  
12 黄褐色土 (10YR5/6) 多量のローム粒、少量ロームブロックを含む  
粘性が弱い  
13 黄褐色土 (10YR5/8) 多量のローム粒、ロームブロックを含む  
粘性が弱い

第44図 第14・15・16号住居跡 (1)





第45図 第14・15・16号住居跡 (2)

**床** ほぼ平坦である。またほぼ全面的に薄い貼床が施されているものの、顕著な硬化面は確認できなかった。掘り方は全体的に簡素な素掘で、検出部における貼床が極端に薄層となっており、厚さは5cm前後である。

**ピット** 北東壁隅側と南西壁隅に2本検出されており、前者のP1は円形を呈し、29×32cm、深さ50cm。後者のP2は径18×22cm、深さ24cmである。

**覆土** 3軒の重複関係を示す断面観察では、1層のみ確認された。埋め戻し土層で、多量のローム粒子、僅かなロームブロックを含むにぶい黄褐色土である。

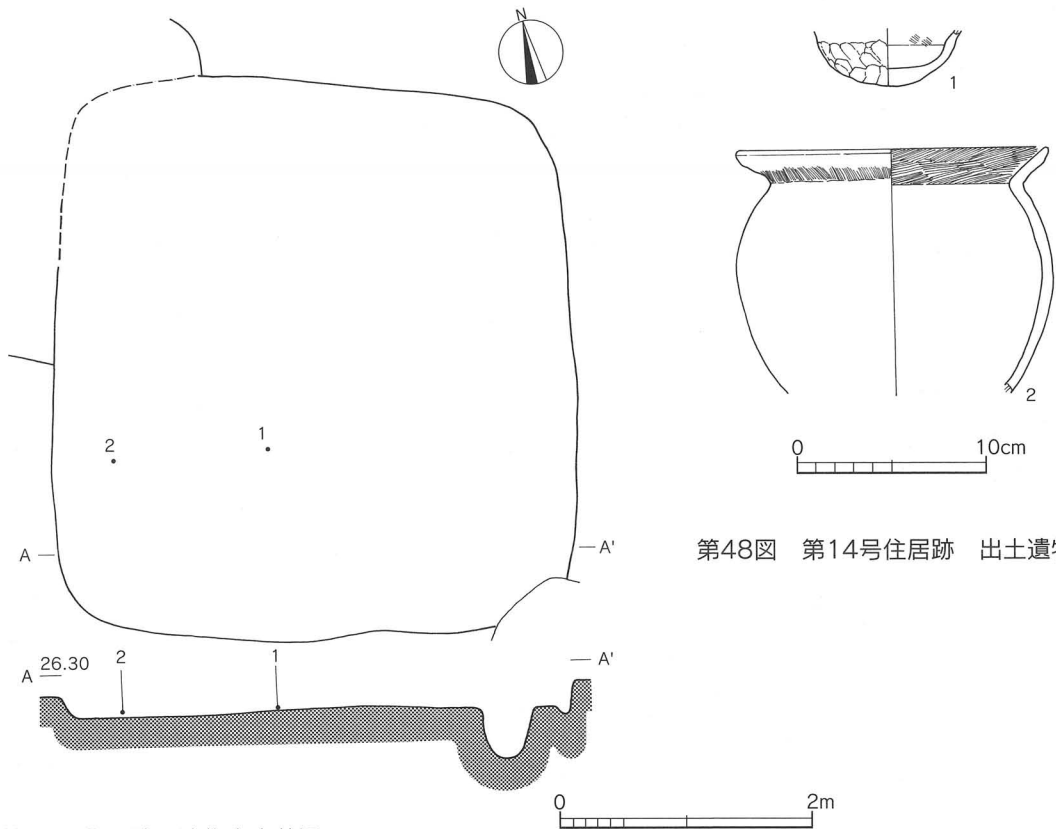
**遺物** 遺物は検出できなかった。

**所見** 出土遺物はなく、時期を判断できるものはないが、古墳時代前期である第14号住居跡に切られていることから、古墳時代前期およびそれ以前のものとする事ができる。

#### 第17号住居跡 (S I-17) (第49~51図、P L. 14)

**位置** 調査区の中央部南西側、5E・6E区に位置する。本跡の北西側約1/3が調査区外に広がり、未調査となっている。なお、東側には南北方向に並行して走る第2・4号溝が壁面の一部を破壊している。

**規模** カマド設置壁面である北壁が未調査区域に入っているため、東壁・西壁の一部が調査不可能で、完存は南壁のみである。確認できる東西軸は5.50m、部分的な南北軸が4.00mを測る。残存部から全体的な様相を判断して方形を呈するものと推定される。



第47図 第14号住居跡 遺物出土状況

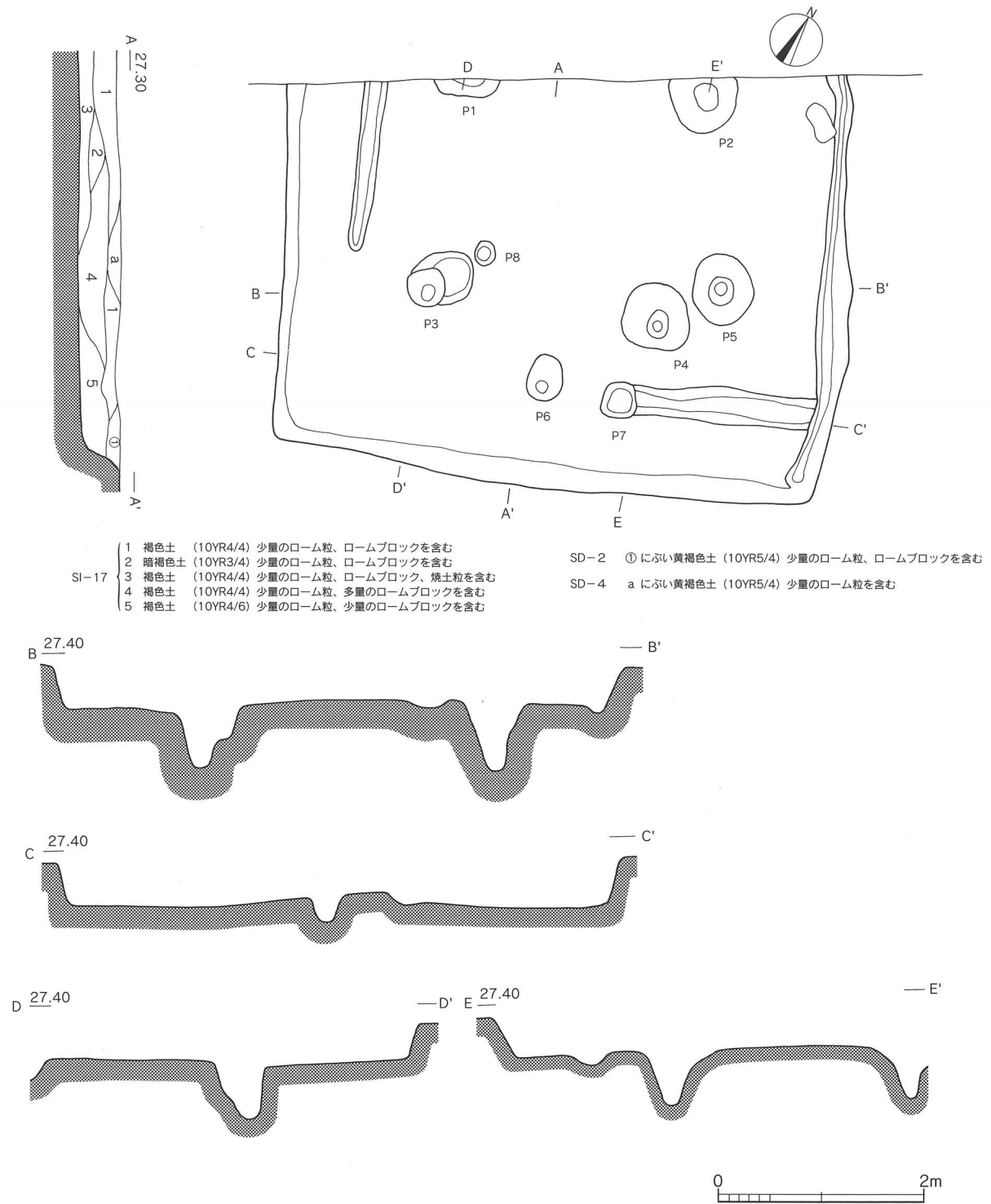
第48図 第14号住居跡 出土遺物

**主軸方向** 北壁にカマドが設置してあると推定して、主軸はN-39°-Wを示す。

**壁** 遺存良好な西壁の確認面からの深さは42cmで、ほぼ垂直気味に立ち上る。壁溝は東壁のみに構築されており、床面からの深さは5~8cm、幅は15~26cmを測り、底面は断面U字状を呈する。

**床** 南側が2cmほど低くなるものの平坦である。またほぼ全面的にロームと褐色土の混合土による貼床が施されているものの、顕著な硬化面は確認できなかった。掘り方は全体的に簡素な素掘で、検出部における貼床が極端に薄層となっている。また「間仕切り溝」が2条検出された。東壁の南側で、南北に走り柱穴P7に連結する。幅25~35cm、長さ170cm、深さ7~11cmを測る。もう1条は西壁に並行して走る南北溝である。北側が未調査区域に延びるため全体の様相は把握できないが、検出部における幅16~22cm、確認の長さ166cm、深さ20cmを測る。

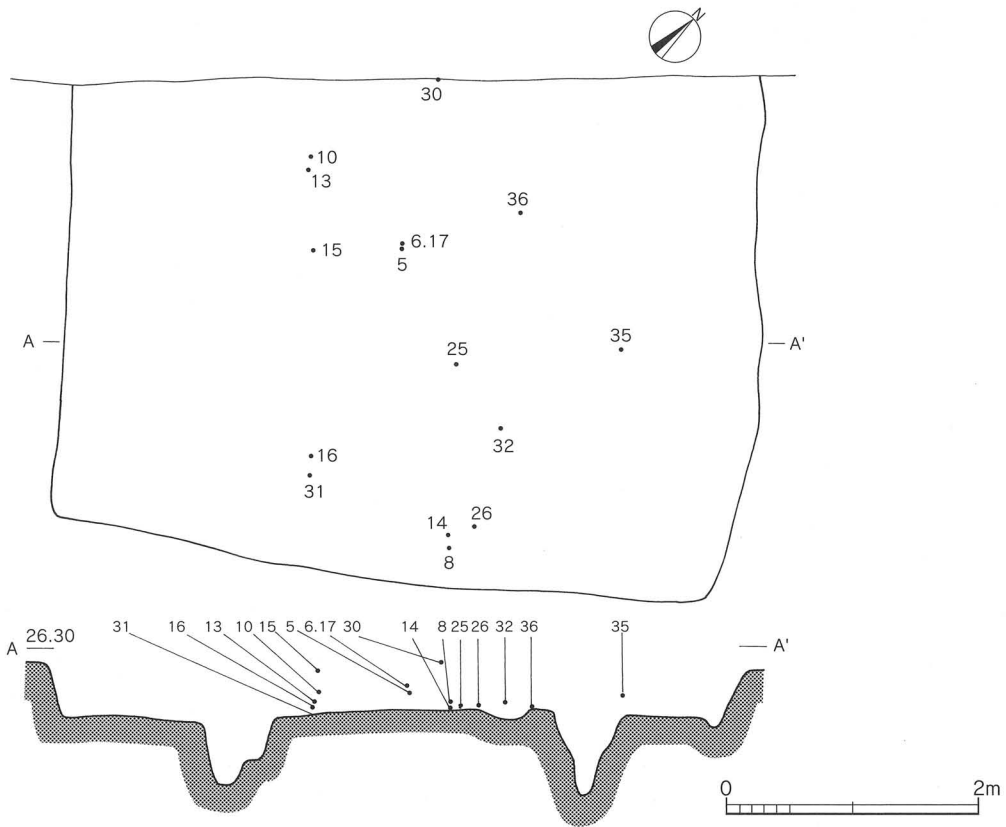
**ピット** 検出部で8本の柱穴を検出した。P1~P5が主柱穴で4本柱住居の構造をもつものと推定され、P6は入口の梯子穴であろう。なお主柱穴P4の東側に接して穿ってあるP5は貼床を除去した後に確認されたもので、建替え柱穴と思われる。おそらくP3も北側に重複しており建替えに関連するものと推定する。P7は間仕切り溝と関連する。P8はP3の北側に接し、P5と同様に貼床除去後検出されたものである。まず検出した主柱穴P1は大半が未調査区域に掛かっており、検出面の形状は楕円形で、径64cm、深さ18cmを測る。P2も一部北側が未調査区域に掛かる。形状は楕円形を呈し、検出面の径66×54cm、深さ56cm。P3は北側にもう一本穿ってある重複柱穴で、南側は円形で、径35×40cm、深さ50cm。北側が楕円形を呈し、径47×50cm、深さ34cm。P4は円形で64×64cm、深さ54cm。貼床下部で検出されたP5は楕円形で、径58×68cm、深さ53cmである。また梯子穴と推定したピットで、楕円形を呈し径32×



第49図 第17号住居跡

47cm、深さ22cm。P 7は間仕切り溝に連結するピットで、円形を呈し径30×36cm、深さ10cm。P 8は円形で径72×94cm、深さ46cmである。その他P 3に接し貼床下から検出されたP 8は径19×22cm、深さ55cmを測る。

**覆土** 5層確認された。いずれも埋め戻し土層で、上層の1層はローム粒子・ロームブロックを僅かに含む褐色土。中層の3・4層はローム粒子・ロームブロックを含む褐色土。床面直上の2・5層はローム粒



第50図 第17号住居跡 遺物出土状況

子・ロームブロックを含む。

**遺物** 土師器坏が纏まって出土している。床面直上および覆土中で、出土状況は集中することなく、住居内に万遍なく散在していた。土師器坏は大きく二種類に分けられ、口縁部下に段状の稜を有するものと碗形を呈するもので、後者の碗形の坏が主体を占める。また須恵器では坏・蓋・長頸瓶が出土している。その他土師器甕、手捏土器がある。

**所見** 本跡はカマド設置部分の北側が未調査となっており、全体の様相を把握できていない。しかし間仕切り溝の設置からみても重要な住居跡のひとつである。なお、出土した土器から古墳時代後期後半と推定される。

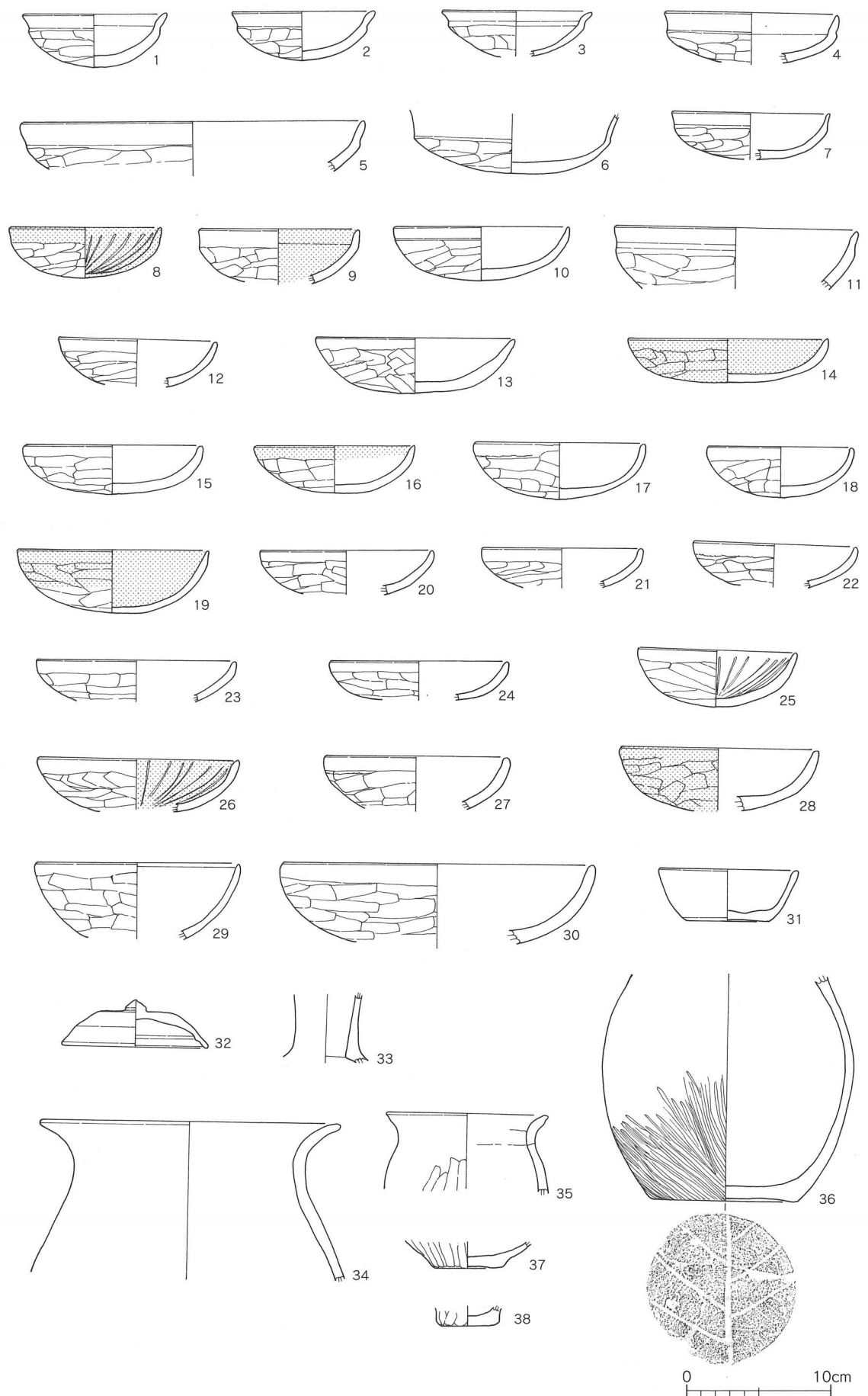
#### 第18号住居跡 (S I-18) (第52・53図、P L. 13)

**位置** 調査区の中央部南西側、5 E・5 F区に位置する。本跡の西側には南北方向に延びる第2号溝と第8号土坑が構築されており西壁全体を破壊している。

**規模** 西側に溝と土坑が構築され、西壁の全部と北壁・南壁の一部が調査不可能である。完存は東壁のみで、確認できる南北軸は3.30m、部分的な東西軸が2.70mを測る。残存部から全体的な様相を判断して方形を呈するものと推定される。

**主軸方向** N-25° - E。

**壁** 全体的な検出面は浅く、遺存良好な東壁の確認面でも深さは僅かに3.5cmである。また壁溝は北壁の一部に欠損部分が確認できるものの検出面ではほぼ全周する。床面からの深さは17~18cm、幅は11~18cm



第51图 第17号住居跡 出土遺物

第17号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 1	土師器 坏	口径 10.00 — 底径 — 器高 3.70	丸底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部は短く外反する。	口縁部内外面横ナデ。底部および体部外面横方向のヘラケズリ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む黄橙色(7.5YR8/8)良好	口縁部2/3欠損
第51図 2	土師器 坏	口径 10.00 — 底径 — 器高 3.30	丸底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部は短く外反する。	口縁部内外面横ナデ。底部および体部外面横方向のヘラケズリ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む黄橙色(7.5YR8/8)良好	体部1/3残存
第51図 3	土師器 坏	口径 10.60 — 底径 — 器高 (3.10)	丸底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部は短く外反する。内面口縁部下に浅い凹帯が巡る。	口縁部内外面横ナデ。底部および体部外面横方向のヘラケズリの後ナデ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む明赤褐色(2.5YR5/6)良好	口縁部1/6残存
第51図 4	土師器 坏	口径 12.40 — 底径 — 器高 (3.50)	丸底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部は短く外反する。	口縁部内外面横ナデ。底部および体部外面横方向のヘラケズリの後ナデ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む橙色(7.5YR7/6)良好	口縁部1/4残存
第51図 5	土師器 坏	口径 24.00 — 底径 — 器高 (2.20)	大型の坏で、丸底から体部は内湾して立ち上がり、口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部は内湾気味に外傾して開く。	口縁部内外面横ナデ。底部および体部外面横方向のヘラケズリ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む外面黒褐色(10YR3/1)内面赤褐色(5YR4/6)良好	口縁部1/4残存
第51図 6	土師器 坏	口径 — 底径 7.00 器高 (4.20)	体部は内湾しながら立ち上がり、稜部で若干直立気味になり、口縁部で外反する。	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含む黒褐色(10YR3/1)良好	底部のみ残存
第51図 7	土師器 坏	口径 11.00 — 底径 — 器高 (3.30)	丸底から体部は内湾して立ち上がり、口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部は内湾気味に外傾して開く。	口縁部内外面横ナデ。底部および体部外面横方向のヘラケズリ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む橙色(5YR6/8)内面橙色(7.5YR7/6)良好	体部1/4残存
第51図 8	土師器 坏	口径 10.60 — 底径 — 器高 3.50	丸底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部は短くほぼ直立する。	口縁部内外面横ナデ。底部および体部外面横方向のヘラケズリ。内面ナデの後、放射状の粗い暗文を施す。内面および外面口縁部に黒色処理が見られる。	石英・長石粒を含む明黄褐色(10YR6/6)良好	完形品 黒色処理
第51図 9	土師器 坏	口径 11.20 — 底径 — 器高 (3.70)	丸底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部は短く外反する。	口縁部内外面横ナデ。底部および体部外面横方向のヘラケズリ。内面ナデ。内面に黒色処理が認められる。	石英・長石粒を含む黒褐色(7.5YR2/3)良好	体部1/4残存 黒色処理
第51図 10	土師器 坏	口径 12.20 — 底径 — 器高 3.70	碗形を呈し、体部は内湾気味に開き、口縁部下に線状の稜を有し、口縁部は短く内湾して立ち上がる。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含む橙色(5YR7/8)良好	体部1/4残存
第51図 11	土師器 坏	口径 17.00 — 底径 — 器高 (4.10)	大型の坏で、丸底から体部は内湾して立ち上がり、口縁部下に明瞭な稜をもち、口縁部は内湾気味に外傾して開く。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリの後、ナデ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含むにぶい橙色(5YR7/4)良好	口縁部1/4残存
第51図 12	土師器 坏	口径 11.20 — 底径 — 器高 (3.10)	碗形を呈し、口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立し、口唇部は面取りされ、内削状を呈する。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含む橙色(5YR6/6)良好	口縁部1/8残存
第51図 13	土師器 坏	口径 14.00 — 底径 — 器高 (5.50) (3.70)	碗形を呈し、口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立し、口唇部は面取りされ、内削状を呈する。器肉が肥厚する。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。外面に接合部が残る。	石英・長石粒を含む橙色(5YR7/8)良好	体部1/2残存
第51図 14	土師器 坏	口径 14.00 — 底径 — 器高 6.00 3.00	碗形を呈し、丸味を持つが、平坦気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は短く直立する。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ、部分的にヘラ状工具のノッキング痕を残す。内面横方向のナデ。内外面に黒色処理がみられる。	石英・長石粒を含む暗褐色(7.5YR3/3)良好	体部1/2欠損 黒色処理

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 15	土師器 坏	口径 12.60 — 底径 — 器高 3.40	碗形を呈し、丸味を持つが、平坦気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は短く直立する。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含む黒褐色(10YR3/1)良好	体部1/4 残存
第51図 16	土師器 坏	口径 11.50 — 底径 — 器高 3.30	碗形を呈し、丸底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は短く直立する。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。内面の一部に黒色処理痕が残る。	石英・長石粒を含む橙色(7.5YR7/6)良好	体部1/2 残存。 黒色処理
第51図 17	土師器 坏	口径 12.00 — 底径 — 器高 3.90	碗形を呈し、丸味を持つが、平坦気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は短く直立する。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。外面に接合部が残る。	石英・長石粒を含む橙色(5YR6/8)良好	体部1/3 残存
第51図 18	土師器 坏	口径 10.20 — 底径 — 器高 3.50	碗形を呈し、丸底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立してシャープになる。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。外面に接合部が残る。	石英・長石粒を含む橙色(5YR6/6)良好	体部1/4 残存
第51図 19	土師器 坏	口径 13.30 — 底径 4.00 器高 4.40	碗形を呈し、丸味を持つが、平坦気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は短く直立する。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。内外面に黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む褐色(7.5YR4/3)良好	体部1/3 欠損。 黒色処理
第51図 20	土師器 坏	口径 12.20 — 底径 — 器高 (3.10)	碗形を呈し、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立してシャープになる。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含むにぶい橙色(7.5YR7/4)良好	口縁部1/4 残存
第51図 21	土師器 坏	口径 11.20 — 底径 — 器高 (2.70)	碗形を呈し、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立してシャープになる。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含む明赤褐色(5YR5/8)良好	体部1/4 残存
第51図 22	土師器 坏	口径 11.60 — 底径 — 器高 (3.00)	碗形を呈し、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立してシャープになる。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含むにぶい橙色(7.5YR7/4)良好	体部1/4 残存
第51図 23	土師器 坏	口径 14.00 — 底径 — 器高 (2.80)	碗形を呈し、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立してシャープになる。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含むにぶい橙色(7.5YR6/4)良好	口縁部1/4 残存
第51図 24	土師器 坏	口径 12.60 — 底径 — 器高 (2.70)	碗形を呈し、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立してシャープになる。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含む橙色(7.5YR6/6)良好	口縁部1/8 残存
第51図 25	土師器 坏	口径 12.20 — 底径 — 器高 3.50	やや深目の碗形を呈す。丸底から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下に僅かに稜を有し、口縁部は短く外反する。	口縁部内外面横ナデ。底部および体部外面横方向のヘラケズリ。内面ナデの後、放射状の粗い暗文を施す。	石英・長石粒を含む橙色(7.5YR6/6)良好	口縁部1/3 残存
第51図 26	土師器 坏	口径 14.00 — 底径 — 器高 (3.60)	碗形を呈し、丸味を持つが、平坦気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は短く直立する。	口縁部内外面横ナデ。底部および体部外面横方向のヘラケズリ。内面ナデの後、放射状の粗い暗文を施す。内面に黒色処理痕が残る。	石英・長石粒を含む橙色(7.5YR6/6)良好	底部1/3 欠損 黒色処理
第51図 27	土師器 坏	口径 13.80 — 底径 — 器高 (3.60)	碗形を呈し、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立してシャープになる。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリの後、ヘラミガキ・ナデ。内面横方向のナデ。外面に接合部が残る。	石英・長石粒を含むにぶい橙色(7.5YR7/4)良好	体部1/4 残存
第51図 28	土師器 坏	口径 13.80 — 底径 — 器高 (4.30)	碗形を呈し、丸味を持つが、平坦気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は短く直立する。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリの後、ヘラミガキ・ナデ。内面横方向のナデ。外面に接合部が残る。内部分的に外面に黒色処理が残る。	石英・長石粒を含む橙色(7.5YR6/6)良好	体部1/4 残存 黒色処理
第51図 29	土師器 坏	口径 14.40 — 底径 — 器高 (5.20)	やや深目の碗形を呈す。丸底から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下に僅かに稜を有し、口縁部は短く外反する。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。口唇部内側に浅く細い沈線が巡る。	石英・長石粒を含む橙色(7.5YR6/6)良好	体部1/6 残存



図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 30	土師器 坏	口径 21.80 底径 — 器高 (5.40)	大型の碗形を呈し、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立してシャープになる。	外面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含む明赤褐色(5YR5/6)良好	口縁部1/4残存
第51図 31	須恵器 坏	口径 9.80 底径 6.00 器高 3.60	小型の坏で、平底の底部から、体部は僅かに内湾気味に外傾して立ち上がる。	ロクロ成形で、底部は回転ヘラ切りののち、ヘラナデ。	雲母・石英・長石粒を含む灰白色(10YR7/1)良好	口縁部一部欠損
第51図 32	須恵器 蓋	口径 10.20 底径 — 器高 3.30	天井部は頂部が平坦で高く、口縁部は急傾して下降する。端部は丸みをもつ。ツマミは擬宝珠状。	ロクロ成形。天井部回転ヘラケズリ。外周部、口縁部ロクロナデ。内面口縁部にカエシ状の稜を有する。ツマミ貼り付け。	石英・長石粒を含む灰色(N6/)良好	体部1/4残存
第51図 33	須恵器 長頸瓶	口径 — 底径 — 器高 (4.60)	頸部付近の破片。肩部から頸部はやや外反気味に立ち上がる。	肩部との接合部で剥離している。内外面ロクロナデ。	石英・長石粒を含む暗灰色(3/)良好	頸部1/2残存
第51図 34	土師器 甕	口径 21.00 底径 — 器高 (11.00)	肩部の張りはなく、口縁部は大きく外反する。端部は丸みをもつ。	外面口縁部横ナデ。胴部横方向のヘラナデ。内面口縁部横ナデ。胴部ヘラ状工具による横方向のナデ。	石英・長石粒を含むにおい黄褐色(10YR6/4)良好	口縁部1/5残存
第51図 35	土師器 甕	口径 11.40 底径 — 器高 (5.30)	小型の甕。肩部の張りは弱く、口縁部はくの字状に外反し、口縁中央で肥厚する。	内面横方向のナデ、外面横方向のナデ。	石英・長石粒を含むにおい赤褐色(5YR5/4)良好	口縁部1/4残存
第51図 36	土師器 甕	口径 — 底径 10.40 器高 (15.50)	平底の底部から体部は内湾して立ち上がる。	外面体部ヘラナデの後、下半部縦方向のヘラミガキ。底部木葉痕を残す。内面ヘラナデ。	雲母・石英・長石粒を含む橙色(7.5YR6/6)良好	底部残存
第51図 37	土師器 甕	口径 — 底径 4.60 器高 (1.30)	底部破片。やや上げ底気味の底部から体部は大きく外傾して立ち上がる。	外面体部縦方向のヘラケズリ、底部ヘラナデ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む橙色(7.5Y R6/6)良好	底部のみ残存
第51図 38	土師器 手捏土器	口径 — 底径 4.60 器高 (1.30)	底部破片。底部から体部は緩く外傾して立ち上がる。	外面体部指頭によるオサエ。底部ナデ、部分的に平行タタキ痕を残す。内面ナデ。	石英・長石粒を含む橙色(5Y R6/6)良好	底部のみ残存

を測り、底面は断面U字状を呈する。

**床** 北側が4cmほど低くなるものの平坦である。またほぼ全面的に貼床が施されているものの、顕著な硬化面は確認できなかった。掘り方は全体的に簡素な素掘で、検出部における貼床が極端に薄層となっている。

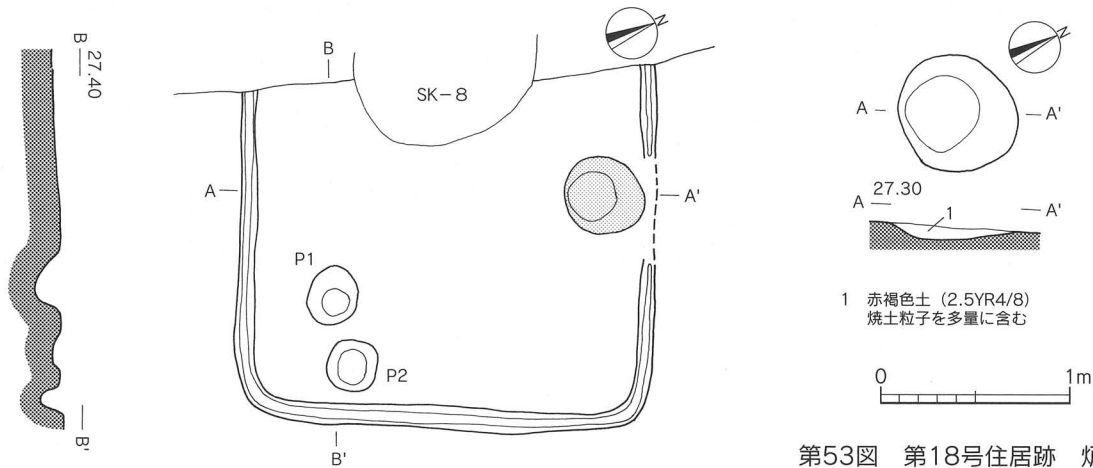
**ピット** 住居内に2本のピットを検出した。いずれも南東コーナーに配置し、P1は西側寄りに位置し、円形を呈し、40×47cm、深さ16cm。P2は東側に隣接し、隅丸方形を呈し、40×40cm、深さ20cmを測る。ただしこれら2本は支柱穴として確認できなかった。

**炉** 北壁際のほぼ中央に設定されていた。円形を呈し、径61×64cm、深さ6cmで鍋底状に掘り込んでいた。覆土には硬化した焼土層が堆積していた。

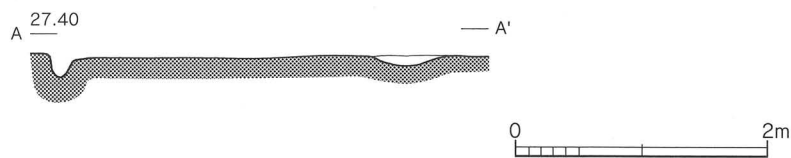
**覆土** 薄層で、覆土として明確な土層を確認できなかった。ただし、床面僅かに覆っていたのはローム粒子を僅かに含む暗褐色土である。

**遺物** 遺物の出土は確認できなかった。

**所見** 遺物がないことから、構築時期を決定することはできないが、確認された住居跡の形態から判断して、古墳時代前期と推定される。



第53図 第18号住居跡 炉址



第52図 第18号住居跡

第19号住居跡 (S I-19) (第54~56図、P L. 13)

**位置** 調査区の中央部南東側、4 E区に位置する。本跡の東側が調査区外に入り込んでおり、正確ではないが、全体約1/5程度の検出であろう。また西壁には3基のピットが重複している。

**規模** 未調査区域に大半が入り込んでおり、北壁と西壁の一部が確認されただけであった。検出できた北壁は2.30m、西壁が2.85mである。残存部から判断して方形を呈するものと推定される。

**主軸方向** 炉址の位置が明確ではないが、北側に設置されたと推定すると $N-4^{\circ}-E$ を示す。

**壁** 遺存良好な北壁の確認面での深さは43cmである。壁はやや外傾して立ち上っている。また壁溝は僅かな検出面ではほぼ全周する。床面からの深さは7~8cm、幅は18~25cmを測り、底面は断面U字状を呈する。

**床** 検出面では概ね平坦である。またほぼ全面的に貼床が施されているものの、顕著な硬化面は確認できなかった。掘り方は全体的に簡素な素掘で、検出部における貼床が極端に薄層となっている。

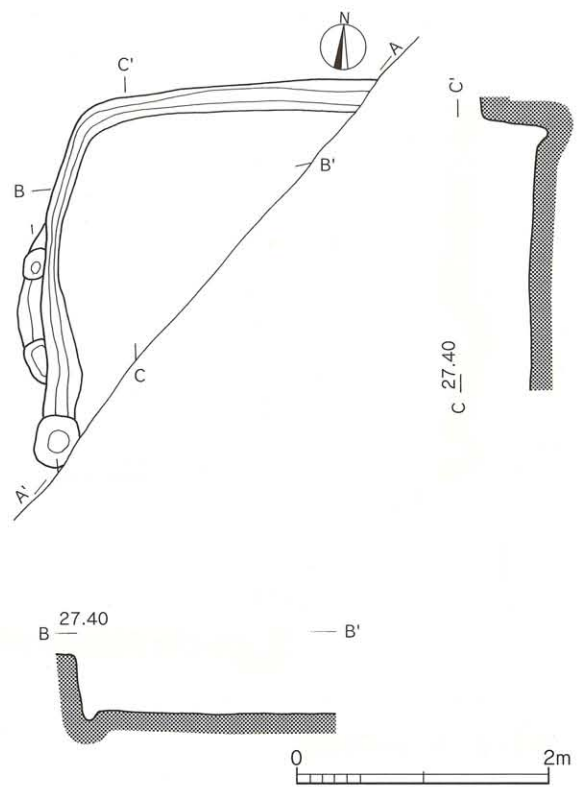
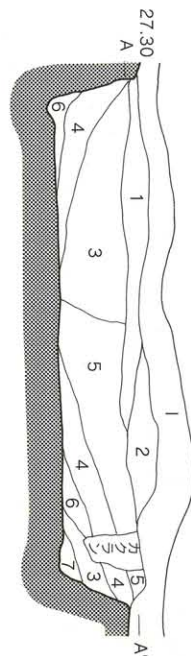
**ピット** 検出面では確認出来なかった。

**覆土** 表土層を除き、7層確認された。いずれも埋め戻し土層で、住居の大半を覆っていた土層は3層少量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土と5層は多量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土層である。また下層には少量の焼土粒子を含む4層暗褐色土が堆積し、壁際には6層焼土粒子を多量に含む橙色土と7層褐色土が覆っている。

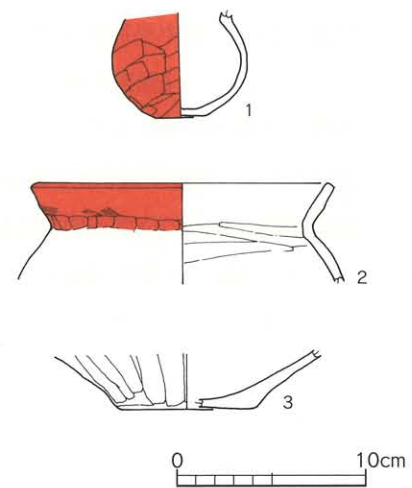
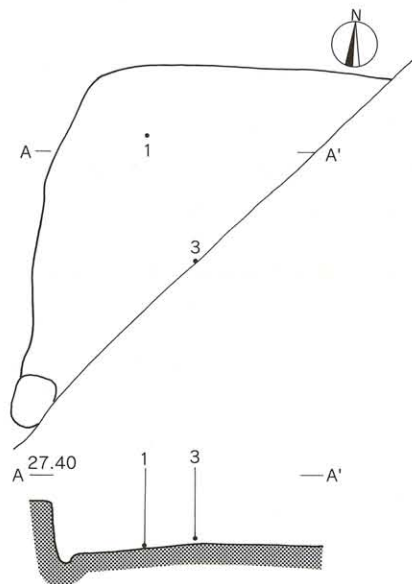
**遺物** 床面直上より土師器埴および甕の口縁部と底部が出土している。いずれも小破片で図示したものがすべてである。

**所見** 確認された部分は住居跡の一部のため、全体の様相は把握できないが、出土した遺物から古墳時代前期のものと推定される。

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 耕作土
- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 少量のローム粒、ロームブロックを含む
- 2 褐色土 (10YR4/4) 少量のローム粒、ロームブロックを含む
- 3 褐色土 (10YR4/4) 少量のローム粒、ロームブロックを含む
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) 少量のローム粒、ロームブロックを含む 少量の焼土粒を含む
- 5 褐色土 (10YR4/6) 少量のローム粒、ロームブロックを含む
- 6 橙色土 (5YR6/8) 少量のローム粒、ロームブロックを含む
- 7 褐色土 (10YR4/6) 少量のローム粒、ロームブロックを含む



第54図 第19号住居跡



第56図 第19号住居跡 出土遺物

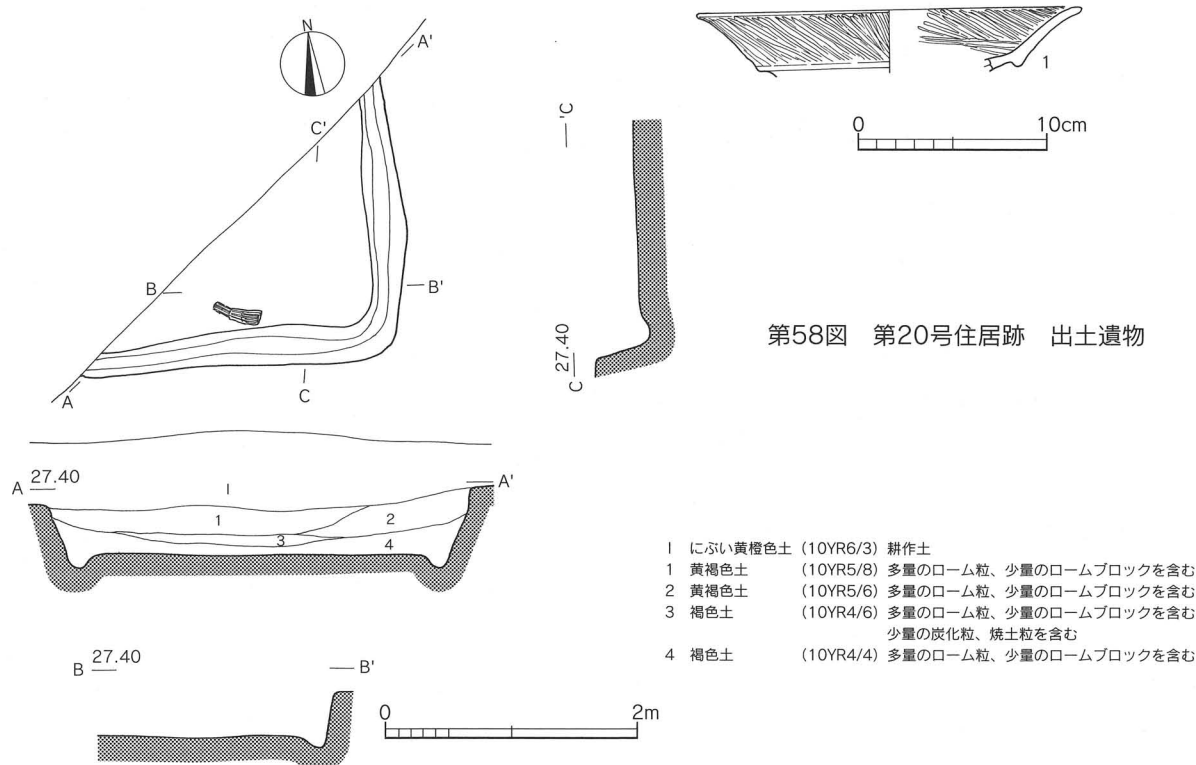
第55図 第19号住居跡 遺物出土状況

第20号住居跡 (S I-20) (第57・58図、P L. 15)

**位置** 調査区の中央南西側、5 D区に位置する。本跡の北側の大半が調査区外に広がり、南東側コーナーのみ調査可能であった。なお、東壁南側に接して東西方向に走る第6号溝が横断しており、壁の一部を破壊している。

**規模** 大半が調査不可能なため、確認できたのは東壁辺と南壁辺の部分のみである。東壁が2.15m、南壁が2.35mを確認している。全体的な様相から判断して方形を呈するものと推定される。

**主軸方向** 炉址の位置が明確ではないが、北側に設置されたと推定するとN-5°-Eをさす。



第58図 第20号住居跡 出土遺物

第57図 第20号住居跡

第19号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	土師器 罎	口径 — 底径 2.80 器高 (4.40)	体部破片。上げ底の小さな底部から体部は球形を呈する。	外面体部はヘラケズリの後、ヘラナデ。底部ヘラナデ。外面に赤彩。	角閃石・石英・長石粒を含む 橙色(7.5YR7/6) 良好	胴部2/3 残存
第56図 2	土師器 甕	口径 15.60 底径 — 器高 (5.10)	球形の体部に口縁部はくの字状に外反する。	外面口縁部ハケ目調整の後、ヘラナデ。内面口縁部横ナデ。体部横方向のヘラナデ。口縁部外面に赤彩。	石英・長石粒を含む 橙色(7.5YR7/6) 良好	口縁部1/4 残存
第56図 3	土師器 甕	口径 — 底径 9.40 器高 (3.10)	平底の底部から体部は外傾して開く。	外面体部は縦位のヘラケズリ。底部ヘラナデ。内面ヘラナデ。	角閃石・石英・長石粒を含む 黒褐色(5YR2/1) 内面橙色(7.5YR6/6) 良好	底部1/2 残存

**壁** 遺存良好な南壁の確認面からの深さは40cmで、ほぼ垂直気味に立ち上る。また壁溝は僅かな検出面でほぼ全周する。床面からの深さは2～5cm、幅は19～33cmを測り、底面は断面U字状を呈する。

**床** 南側が2cmほど低くなるものの平坦である。またほぼ全面的に貼床が施されているものの、顕著な硬化面は確認できなかった。掘り方は全体的に簡素な素掘で、検出部における貼床が極端に薄層となっている。

**ピット** 確認面からは検出できなかった。

**覆土** 表土層を除き、4層確認された。いずれも埋め戻し土層で、上層は多量のローム粒子・少量のロームブロックを含む黄褐色土。中層は多量のローム粒子・少量のロームブロックに炭化物と焼土粒子を含む褐色土。下層には多量のローム粒子と少量のロームブロックを含む褐色土が堆積している。

**遺物** 覆土中より土師器壺の口縁部破片が1点出土したのみである。

**所見** 確認された部分は住居跡の一部のため、全体の様相は把握できないが、出土した遺物から古墳時代

前期のものと推定される。

### 第20号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第58図 1	土師器 壺	口径 20.50 底径 — 器高 (3.30)	外反する複合口縁の壺で、 頸部と口縁部の境界に明瞭 な稜を有する。	外面横方向のヘラナデの後、 縦位のヘラミガキ。内面ヘ ラミガキ。	石英・長石粒を含む 橙色(7.5YR7/6) 良好	口縁部1/4 残存

### 第21号住居跡 (S I-21) (第59~63図、P L. 16)

**位置** 調査区の中央部北東側、4 C・4 D区に位置する。本跡の北側約1/5程が調査区外に広がり、未調査となっている。また、西側は第22号住居跡を切り、北東側では第23号住居跡に切られ、壁と床面が、さらに南側でも第6号土坑に切られ壁の一部を破壊されている。

**規模** カマド設置壁面である北壁と西壁の一部が未調査区域に入り、東壁は第23号住居跡によって切られているため壁の一部が調査不可能である。検出できたのは土坑が重複している南壁のみである。確認できる東西軸は7.83m、部分的な南北軸が6.20mを測る。残存部から全体的な様相を判断して方形を呈するものと推定される。

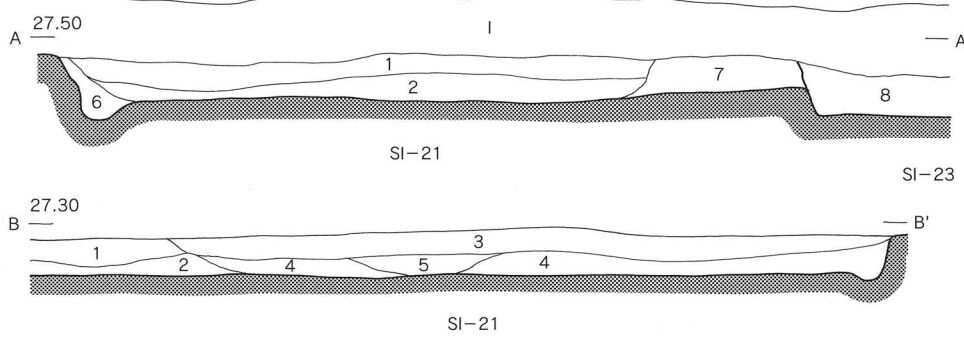
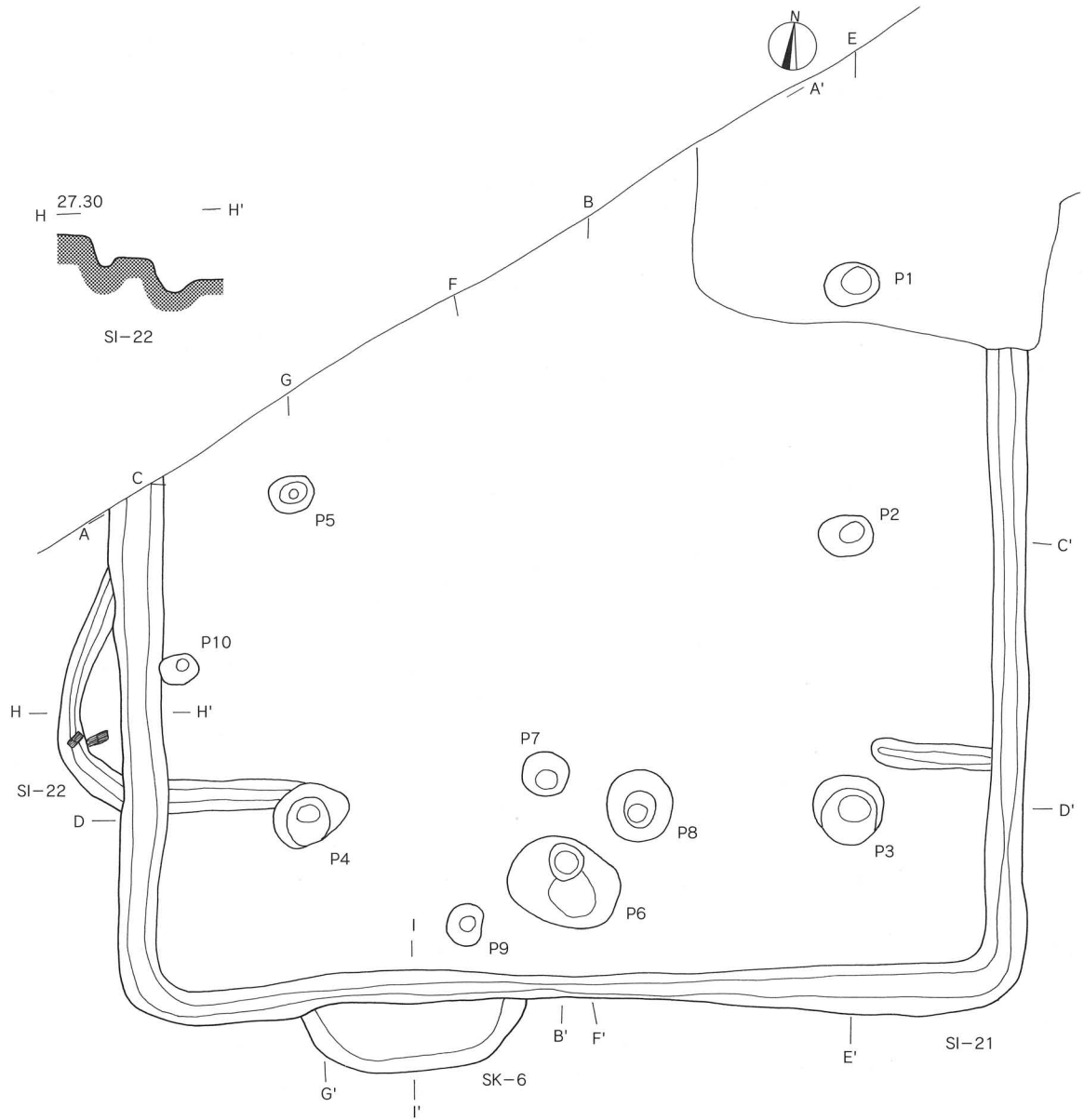
**主軸方向** 確認できない北壁にカマドの構築材の一部が検出されていることから主軸方向はN-7°-Wをとる。

**壁** 重複していない遺存良好な西壁の確認面からの深さは56cmで、ほぼ垂直気味に立ち上る。また壁溝は検出面で全周する。床面からの深さは12~15cm、幅は15~23cmを測り、底面は断面U字状を呈する。

**床** 概ね平坦である。またほぼ全面的に貼床が施されており、柱間内の住居中央は顕著な硬化面が確認できる。掘り方は全体的に認められ、柱穴間内は簡素な素掘で5~8cmと浅いのにに対し、柱穴外の壁際に沿っては一段と深く掘り窪めており18~25cmを測る。また南東コーナーおよび南西コーナーではさらに深く掘り込んでおり、最深では45cmである。また間仕切り溝が2条検出された。東壁の南側でP3に接するように幅19cm、長さ104cm、深さ9cmを測る溝と、これに対峙するように西壁の南側で、P4に連結して幅25cm、長さ104cm、深さ6cmである。

**ピット** P1~P5が支柱穴で6本柱住居の構造をもつものと推定され、P6は入口の梯子穴と推定した。なお支柱穴P3とP4間にP6とP7の2本の柱穴が穿ってあるものの、柱間隔が多少ずれている。検出した支柱穴P1は第23号住居跡の南壁際に位置し、形状は楕円形で、径37×46cm、深さ58cmを測る。P2も楕円形を呈し、径34×47cm、深さ44cm。P3は円形で、径58×60cm、深さ60cm。P4はほぼ円形で50×68cm、深さ62cm。P5は円形で、径32×38cmである。また梯子穴と推定したP6は大型のピットで径72×94cm、深さ46cmを測り、柱穴内には深い掘り込みを有する。P7は円形で径58×60cm、深さ35cm。P8は円形で径72×94cm、深さ46cmである。その他梯子穴に接したP9は径28×34cm、深さ30cm。西壁に接するP10は径25×35cm、深さ18cmを測り、支柱穴のひとつと考えられる。

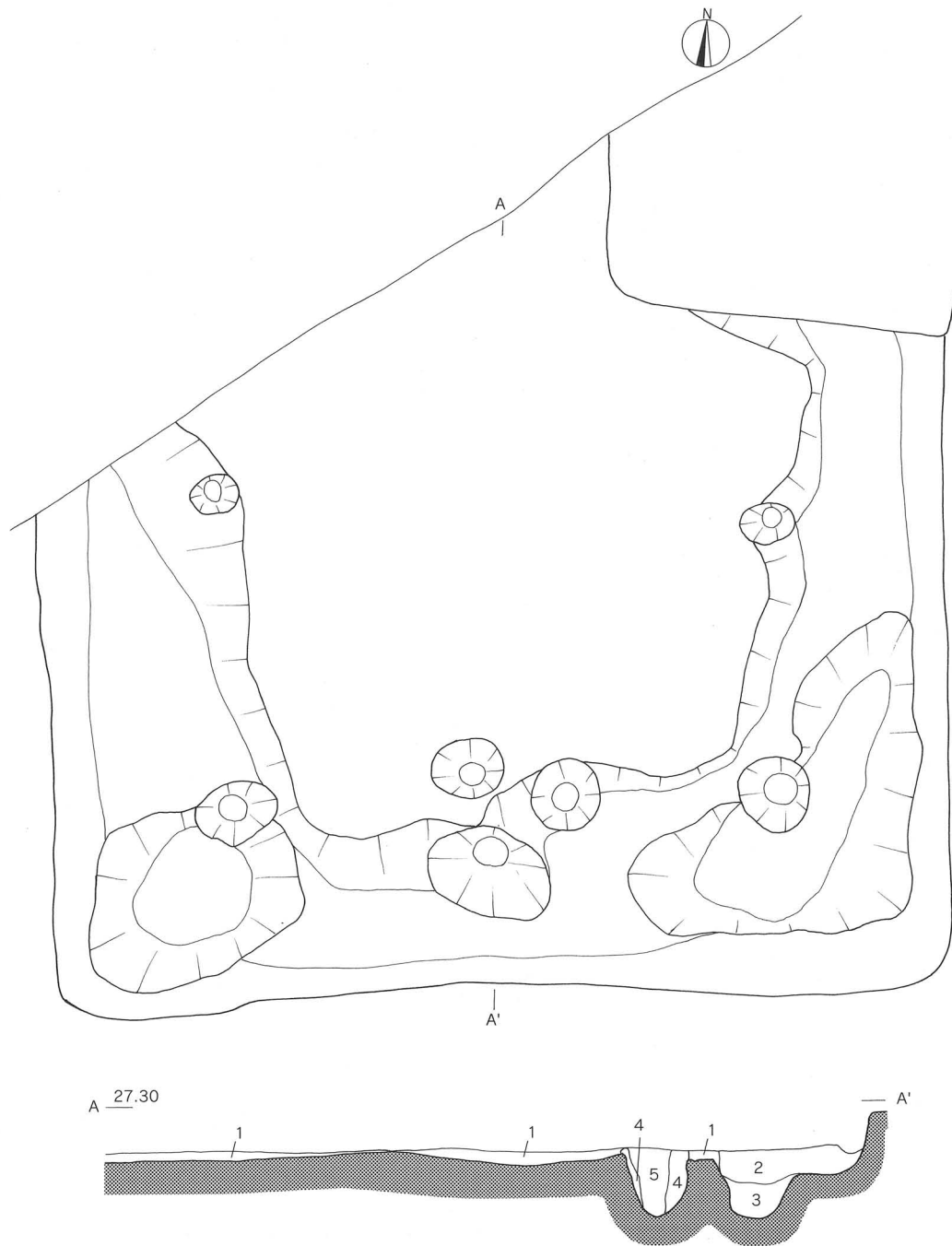
**覆土** 表土層を除き、未調査区に接した断面および住居跡中央で7層が確認された。いずれも埋め戻し土層で、上層の1層はローム粒子・ロームブロックおよび焼土粒子を僅かに含む褐色土と3層同じくローム粒子・ロームブロックおよび焼土粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積し、床面を覆う2・4層もローム粒子・ロームブロックを僅かに含む暗褐色土である。また5層はローム粒子・ロームブロックおよび焼土粒子を僅かに含む黒褐色土が堆積し、6層褐色土は壁下に堆積した崩落土層であろう。多量のローム粒子・



- |       |   |  |
|-------|---|--|
|       | 1 | にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 耕作土                    |
|       | 2 | 褐色土 (10YR4/4) 少量のローム粒、ロームブロック、少量の焼土粒を含む  |
|       | 3 | 暗褐色土 (10YR3/4) 少量のローム粒、ロームブロック、少量の焼土粒を含む |
|       | 4 | 暗褐色土 (10YR3/3) 少量のローム粒、ロームブロック、微量の焼土粒を含む |
|       | 5 | 黒褐色土 (10YR2/3) 少量のローム粒、ロームブロック、微量の焼土粒を含む |
|       | 6 | 褐色土 (10YR4/6) 多量のローム粒、ロームブロックを含む         |
|       | 7 | 灰色粘土 (10YR1/7) 少量のローム粒、灰色粘土粒を含む          |
| SI-21 | 8 | 褐色土 (10YR4/6) 多量のローム粒、ロームブロックを含む         |



第59図 第21・22号住居跡 第6号土坑 (1)

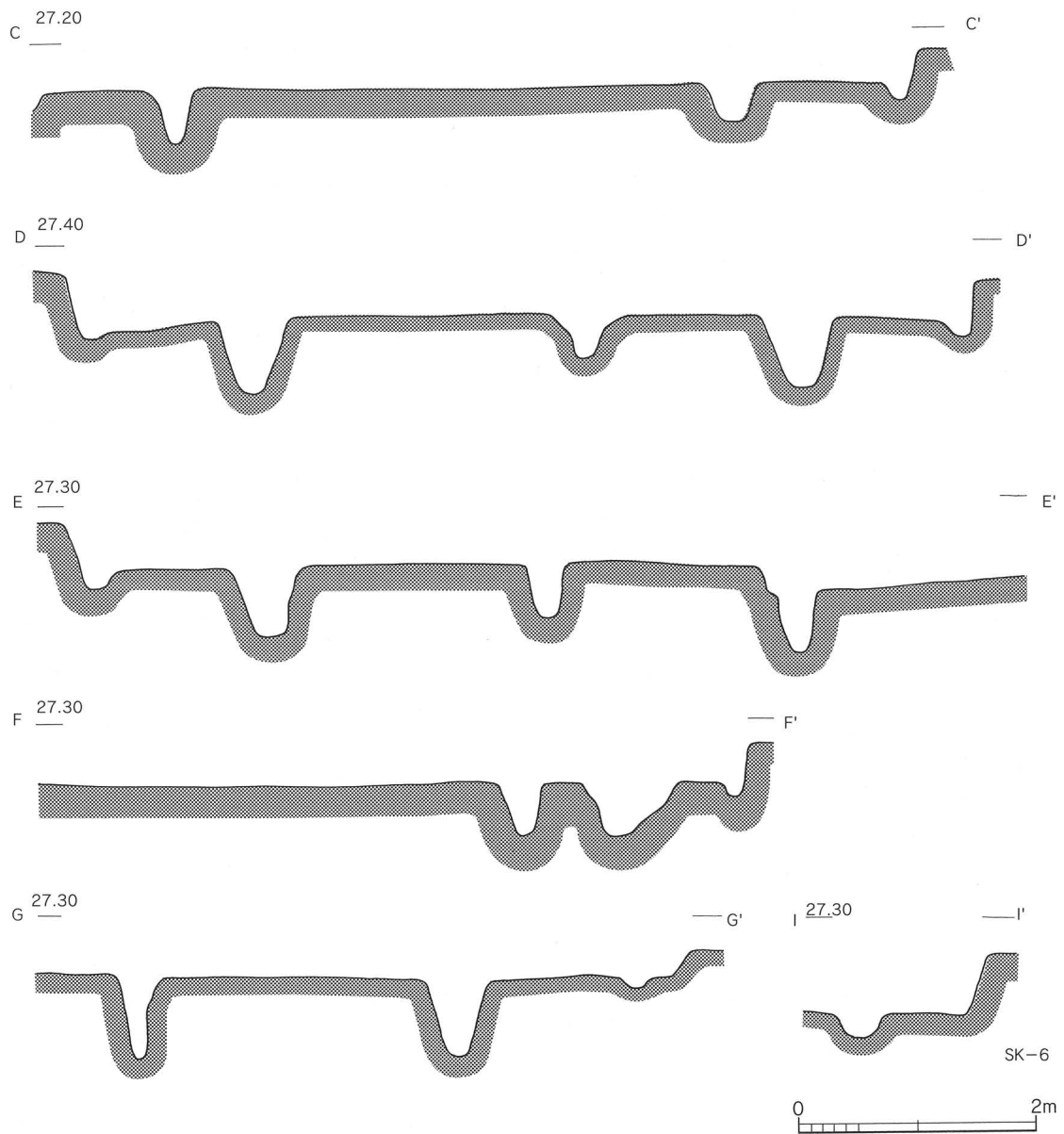


- 1 黄褐色土 (10YR5/6) ローム粒子、ロームブロックを多量に含む しまりがある
- 2 褐色土 (10YR4/4) ローム粒子を多く含む しまりがある
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子、ロームブロックを多く含む しまりがある
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子を多く含む しまりがある
- 5 暗褐色土 (75YR5/6) ロームブロックを多く含む しまりがある

第60図 第21号住居跡 堀り方

ロームブロックを含む。

**遺物** 土器をはじめ、瓦破片、金属製品が出土している。出土状況は床面直上および若干浮いた覆土中から検出されたもので、まとまることはなく、住居跡全体に散在していた。土器は土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・高坏・長頸瓶である。また瓦破片（平瓦）、金属製品として青銅製の巡方、鉄製の刀子・釘の破片がある。

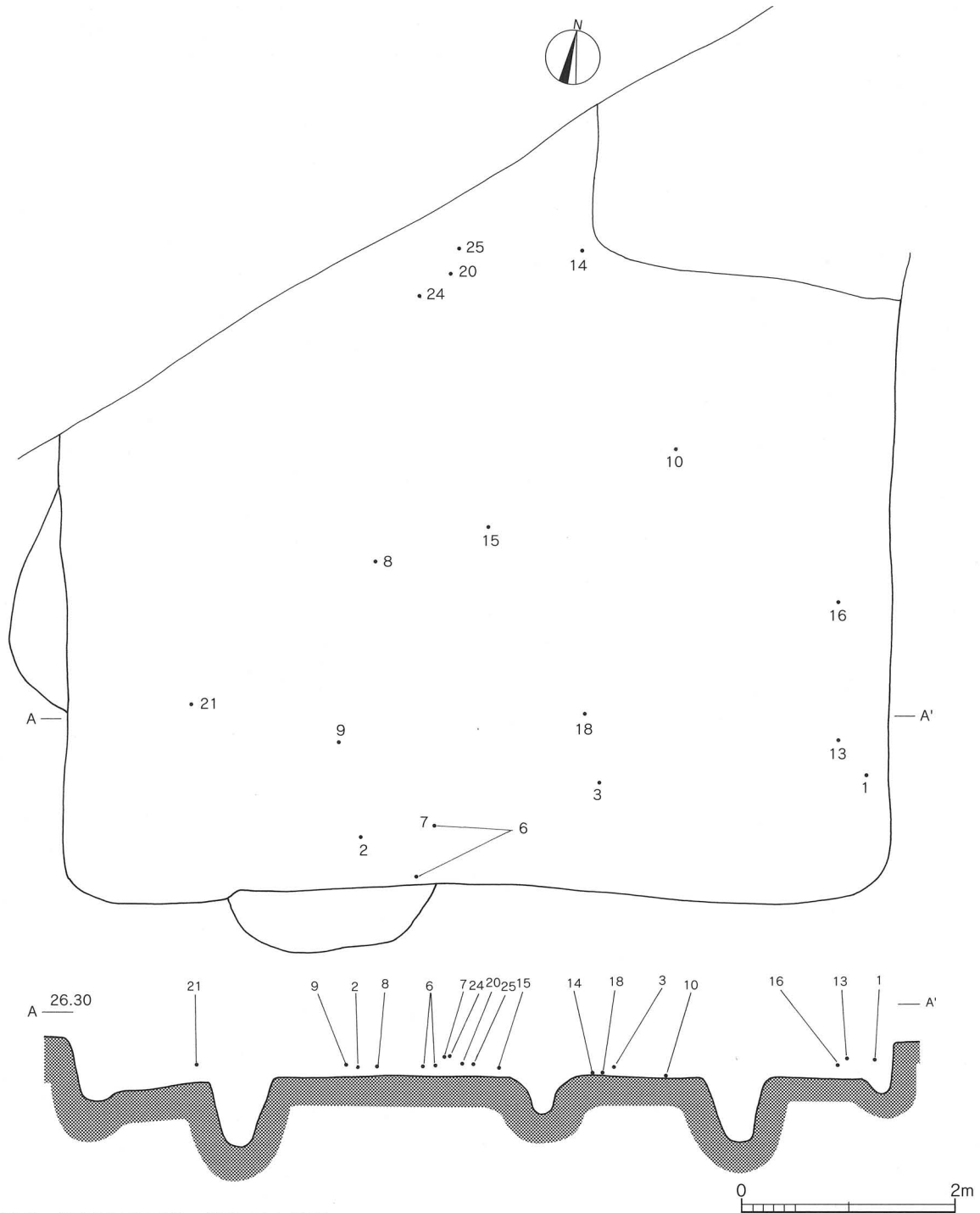


第61図 第21号住居跡 第6号土坑 (2)

23の瓦は凸面縄叩き平瓦の破片である。側面にはほぼ平行した縄叩きで、凹面に布目が一面に認められる。また24は青銅製の巡方で縁辺粹部に欠損する。現存する横の長さ2.61cm、縦の長さ1.79cm、厚さ0.123cm、重さ2.28gを測る。またやや下部に横1.235cm、縦0.37cmの長方形透孔をもち、孔の両脇には径0.28cmの円孔が穿ってある。25は鉄製の刀子で完存品であるが、やや錆化がすすんでいる。全長9.38cmを測り、両関である。刃身長4.16cm、身幅0.82cm、棟幅0.23cm。茎身長5.22cm、身幅0.72cm、棟幅0.23cmである。26は鉄製の釘であろう。両端が欠損し全体の形状は不明である。断面は四角形を呈し、現存する長さ5.67cm、幅0.46×0.60cmを測る。

**所見** 北壁が未調査区域に広がっており、全体の様相は把握できないが、出土した土器の様相から判断して、8世紀前半の時期と推定される。床面上より浮いた覆土中の出土であるが、青銅製の巡方が検出された。その他鉄製の刀子や釘の一部、平瓦の破片が出土しており、今調査区内で最も規模の大きな住居跡であることなどから、当住居は本集落内で特別な位置を占めていたことが予測される。





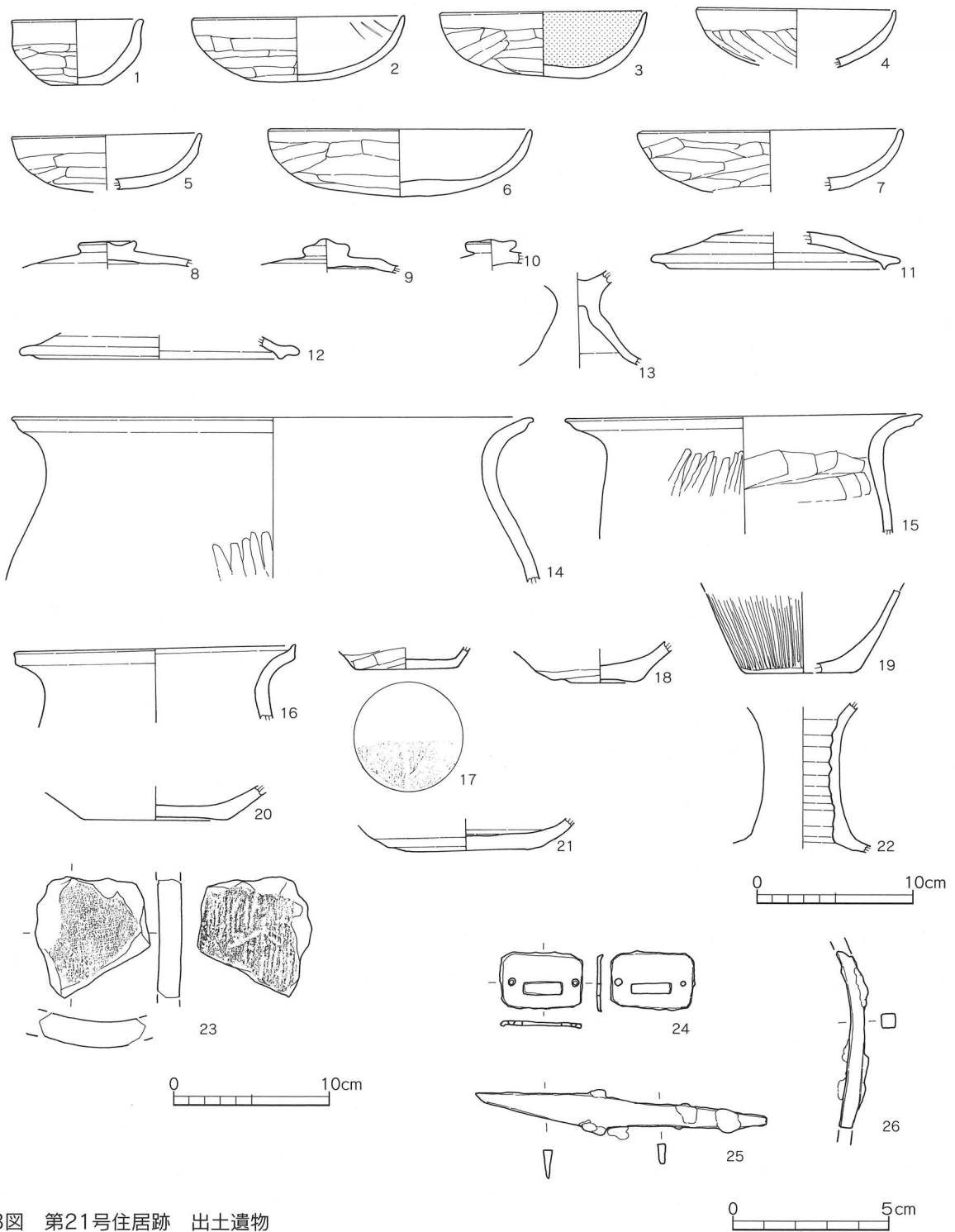
第62図 第21号住居跡 遺物出土状況

第22号住居跡 (S I-22) (第59図、P L. 15)

**位置** 調査区の中央部北東側、4 D区に位置する。本跡の大半は第21号住居跡によって切られ破壊されており、確認できたのは南西コーナーのみである。

**規模** 大半が第21号住居跡によって切られており、南西コーナーのみ確認されただけであった。したがって検出できた西壁は1.10m、南壁が僅かに0.40mである。なお残存部から判断して方形を呈するものと推定される。

**主軸方向** 炉址の位置が不明であるが、北側に設置されたと推定するとN-19°-Eを示す。



第21号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 1	土師器 坏	口径 8.50 底径 4.00 器高 4.20	小型の坏。平底気味の底部から体部は内湾して立ち上がり、口縁部下に僅かな稜をもち、口縁部はほぼ直立して開く。	外面口縁部横ナデ。体部および底部ヘラケズリ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含む 橙色(5YR6/6) 良好	完形品
第63図 2	土師器 坏	口径 13.60 底径 — 器高 4.10	碗形を呈し、底部は丸底で、口縁部下に僅かに稜を有し、口縁部はほぼ直立する。口縁端部はシャープである。	外面口縁部横ナデ。体部および底部ヘラケズリ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含む 橙色(2.5YR7/8) 良好	体部1/4 欠損

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 3	土師器 坏	口径 13.30 底径 — 器高 4.15	碗形を呈し、底部はやや平底で、口縁部下に僅かに稜を有し、口縁部はほぼ直立する。口縁端部はシャープである。	外面口縁部横ナデ。体部および底部ヘラケズリ。内面横方向のナデ。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む 極暗赤褐色(10R2/2) 良好	体部1/5 欠損 黒色処理
第63図 4	土師器 坏	口径 12.80 底径 — 器高 (3.60)	碗形を呈し、底部は丸底で、口縁部下に僅かに稜を有し、口縁部はほぼ直立する。口縁端部はシャープである。外面に接合部を残す。	外面口縁部横ナデ。体部および底部ヘラケズリ。内面横方向のナデ。	石英・長石粒を含む 暗赤褐色(5YR3/4) 良好	体部1/4 残存
第63図 5	土師器 坏	口径 12.00 底径 — 器高 3.40	碗形を呈し、口縁部下に僅かな稜を持ち、口縁部は短く直立してシャープになる。	外面口縁部横ナデ。体部および底部ヘラケズリ。内面斜方向のナデ。	石英・長石粒を含む 橙色(2.5YR6/8) 良好	体部1/4 残存
第63図 6	土師器 坏	口径 17.00 底径 — 器高 4.35	大型の碗形を呈する坏で、底部はやや平底。口縁部下に僅かに稜を有し、口縁部はほぼ直立する。口縁端部はシャープである。	外面口縁部横ナデ。体部および底部ヘラケズリ。内面横方向のナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 褐色(2.5YR6/8) 良好	体部1/3 欠損
第59図 7	土師器 坏	口径 17.00 底径 — 器高 (3.90)	大型の碗形を呈する坏で、底部はやや平底。口縁部下に僅かに稜を有し、口縁部はほぼ直立する。口縁端部はシャープである。	外面口縁部横ナデ。体部および底部ヘラケズリ。内面横方向のナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 明赤褐色(2.5YR5/8) 良好	体部1/3 残存
第63図 8	須恵器 蓋	口径 — 底径 — 器高 (1.80)	天井部の破片。扁平でボタン状のツマミが付く。天井部は皿形である。	ロクロ成形。天井部外面回転ヘラケズリ。内面ロクロナデ。	石英・長石粒を含む オリーブ灰色(10Y5/1) 良好	体部1/6 残存
第63図 9	須恵器 蓋	口径 — 底径 — 器高 (1.70)	天井部の破片。扁平な擬宝珠状のツマミが付く。天井部は皿形である。	ロクロ成形。天井部外面回転ヘラケズリ。内面ロクロナデ。	石英・長石を含む 暗灰黄色(2.5Y5/2) 灰色(7.5Y6/1) 良好	つまみの み
第63図 10	須恵器 蓋	口径 — 底径 — 器高 (2.40)	天井部の破片。扁平でボタン状のツマミが付く。天井部は皿形である。	ロクロ成形。天井部外面回転ヘラケズリ。内面ロクロナデ。	石英・長石粒を含む 暗灰黄色(2.5Y5/2) 良好	口縁部 欠損
第63図 11	須恵器 蓋	口径 16.00 底径 — 器高 (2.30)	天井部から口縁にかけての破片。天井部は笠形を呈する。口縁端部内面に張り出すカエリが付く。	ロクロ成形。天井部外面回転ヘラケズリ。内面ロクロナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 灰白色(7.5Y7/1) 良好	体部1/4 残存
第63図 12	須恵器 蓋	口径 18.00 底径 — 器高 (1.40)	天井部から口縁にかけての破片。天井部は笠形を呈する。口縁端部内面に、崩れて僅かに張り出すカエリが付く。	ロクロ成形。内面ロクロナデ。	石英・長石粒を含む 灰色(N6/) 良好	体部1/8 残存
第63図 13	須恵器 高坏	口径 — 底径 — 器高 (6.00)	脚部破片。脚部はラッパ状に開く	脚部内外面ロクロナデ。	石英・長石粒を含む 灰色(N6/) 普通	脚部1/2 残存
第63図 14	土師器 甕	口径 33.40 底径 — 器高 (10.60)	長胴気味で、肩部の張りが弱い。口縁部は穏やか弧状に外反し、端部は摘み上げられて帯状になる。	口縁部ヨコナデ。胴部内面ハケ状工具によるナデ、外面縦方向のヘラナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 黒褐色(2.5Y3/2) 良好	口縁部2/3 残存
第63図 15	土師器 甕	口径 23.00 底径 — 器高 (7.60)	長胴気味で、肩部の張りが弱い。口縁部は穏やか弧状に外反し、端部は摘み上げられて帯状になる。	口縁部ヨコナデ。胴部内面ハケ状工具によるナデ、外面縦方向のヘラナデ。	石英・長石粒を含む にぶい橙色(7.5YR6/4) 良好	口縁部1/4 残存
第63図 16	土師器 甕	口径 18.10 底径 — 器高 (4.70)	長胴気味で、口縁部は強く外反し、端部は摘み上げられて帯状になる。	口縁部ヨコナデ。胴部内面ハケ状工具によるナデ、外面縦方向のヘラナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 橙色(5YR7/6) 良好	口縁部1/6 残存
第63図 17	土師器 小型甕	口径 — 底径 6.60 器高 (1.20)	底部のみ破片。平底で体部直線的に外傾して立ち上がる。	外面体部下端部横方向のヘラケズリ。底部木葉痕を残す。内面ナデ。	石英・長石粒を含む にぶい赤褐色(2.5YR4/4) 良好	底部1/2 残存

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 18	土師器 甕	口径 — 底径 4.80 器高 (2.00)	やや上げ底気味の底部から 体部は大きく外傾して開く。	外面体部下端部横方向のヘ ラナデ。底部木葉痕の後、 ヘラナデ。内面ヘラナデ。	海綿骨針・石英・長石粒 を含む 黒色(10YR2/1) 良好	底部のみ 残存
第63図 19	土師器 甕	口径 — 底径 6.80 器高 (5.00)	平底の底部から体部は直線 的に外傾して立ち上がる。	外面体部縦位のヘラミガキ。 底部ヘラナデ。内面ヘラナ デ。	石英・長石粒を含む 黒色(10YR2/1) 良好	底部のみ 1/2残存
第63図 20	土師器 甕	口径 — 底径 9.60 器高 (2.10)	やや上げ底気味の底部から 体部は大きく外傾して開く。	外面体部縦位のヘラミガキ。 底部ヘラナデ。内面ヘラナ デ。	石英・長石粒を含む 褐色(7.5YR4/3) 普通	底部完存
第63図 21	須恵器 坏	口径 — 底径 10.40 器高 (2.00)	平底の底部から体部は内湾 気味に外傾して立ち上がる。	右回転ロクロ成形。底部回 転ヘラケズリ。体部内外面 ロクロナデ。	石英・長石粒を含む 灰白色(2.5Y8/1) 良好	底部2/3 残存
第63図 22	須恵器 長頸壺	口径 — 底径 — 器高 (9.60)	頸部破片。頸部は直立気味 に立ち上がり、口縁部付近 で外反する。	頸部内外面ロクロナデ。内 外面に灰釉がかかる。	砂粒を含む 暗オリーブ色(7.5Y4/3) 良好	頸部残存
第63図 23	平瓦	幅 — 長さ — 厚さ (9.60)	両端面及び両側面とも欠損 する部分破片。わずかに凹 面が残存する。	凸面縦位の縄目叩き加わ り、凹面は布目を残す。	石英・長石粒を含む 灰白色(10YR8/1) 良好	部分破片

**壁** 遺存良好な西壁の確認面での深さは21cmである。壁はやや外傾して立ち上がっている。また壁溝は僅かな検出面ではほぼ全周する。床面からの深さは5cm、幅は14cmを測り、底面は断面U字状を呈する。

**床** 検出面では概ね平坦である。また貼床面の確認できなかった。掘り方も明確ではなかった。

**ピット** 検出面では確認出来なかった。

**覆土** 埋め戻し土層で、住居を覆っていた土層は1層のみで少量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土である。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 確認されたのは僅かに南西コーナー部分だけで、住居の全体の様相は把握できない。出土遺物もなく、少なくとも、重複する第21号住居跡に大半が破壊されていることから8世紀以前に構築された住居跡である。

第23号住居跡 (S I-23) (第64・65図、P L. 15)

**位置** 調査区の中央部北東側、4C区に位置する。北側は調査外域に広がり、南側の第21号住居跡および北東側の第24号住居跡を切って構築している。

**規模** 東壁および南壁が完存し、北壁と西壁の約半分が未検出である。規模は南北軸2.82mであり、東西軸3.02mを測る。全体の把握はできていないが、平面形態は方形と考えられる。

**主軸方向** 北壁にカマドが設置されており、主軸はN-1°-Wを示す。

**壁** 確認面からの深さは東壁面で35cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁溝は確認されなかった。

**床** 貼床で、部分的に硬化面を確認した。とくにカマド前面および床面中央付近が顕著であった。掘り方の深さはほぼ均等で、10~15cm前後の掘削で貼床面を構築していた。

**ピット** 柱穴と思われるピットが1本北東コーナー側で検出された。径15×18cm、深さ25cmの円形を呈

する。また南西コーナーに貯蔵穴と思われる長軸63cm、短軸50cm、深さ26.5cmの長方形を呈した土坑が設置されていた。

**カマド** カマドは未調査区域に掛かるため、調査は実施していない。ただし、カマドの構築材が北壁付近に広がっていることから、北壁に設置されているものと思われる。

**覆土** 表土層を除き、未調査区に接した断面で5層が確認された。いずれも埋め戻し土層で、1層褐色土層は多量のローム粒子・ロームブロックを含み、若干締りに欠ける。2層は少量のローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土、3～5層はカマド周辺に堆積した土層である。3・4層とも焼土粒子を含む。

**遺物** 覆土中より土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。比較的整った住居跡に比して遺物は極端に限定されており、小破片は多数出土したものの図示した器種以外の確認はできなかった。

**所見** 出土遺物から判断して、8世紀前半と推定される。

### 第23号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 1	土師器 坏	口径 12.00 底径 — 器高 (2.80)	口縁端部下に僅かに稜を有す。口縁部は、内湾気味に短く直立して端部が尖る。	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラナデ外面ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む にぶい橙色(7.5YR6/4) 良好	口縁部1/8 残存
第65図 2	須恵器 坏	口径 — 底径 7.80 器高 (2.60)	平底で、体部は内湾気味に立ち上がる。	右回転ロクロ成形。体部下 端部手持ちヘラケズリ。底 部ナデ。体部内外面ロクロ ナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 灰白色(10YR7/1) 良好	底部1/5 残存
第65図 3	土師器 甕	口径 — 底径 8.00 器高 (3.20)	平底の底部から体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラナデ。 底面ナデ。内面ナデ。	石英・長石粒を含む 黒褐色(10YR3/1) 普通	底部1/4 残存
第65図 4	土師器 甕	口径 — 底径 8.80 器高 (2.70)	体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は大きく外反し、端部で摘みげられる。	口縁部横ナデ。外面体部ヘ ラナデ。内面ヘラナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 黒褐色(10YR3/1) 良好	底部2/3 残存
第65図 5	土師器 甕	口径 19.40 底径 — 器高 (10.40)	平底の底部から体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラナデ。 底面ナデ。内面ナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 黒褐色(10YR3/1) 良好	口縁部1/4 残存
第65図 6	須恵器 甕	口径 27.80 底径 — 器高 (6.80)	口縁部に最大径を持つ長胴気味の甕で、頸部で屈曲して口縁部は外反し、端部は折り返して粘土を貼り付けた二重口縁になる。	口縁部ヨコナデ、胴部内面 下から上に指ナデした後横 方向にハケによるナデ、外 面縦方向に平行タタキ。	雲母・石英・長石粒を含む 緑灰色(10GY6/1) 良好	口縁部1/8 残存

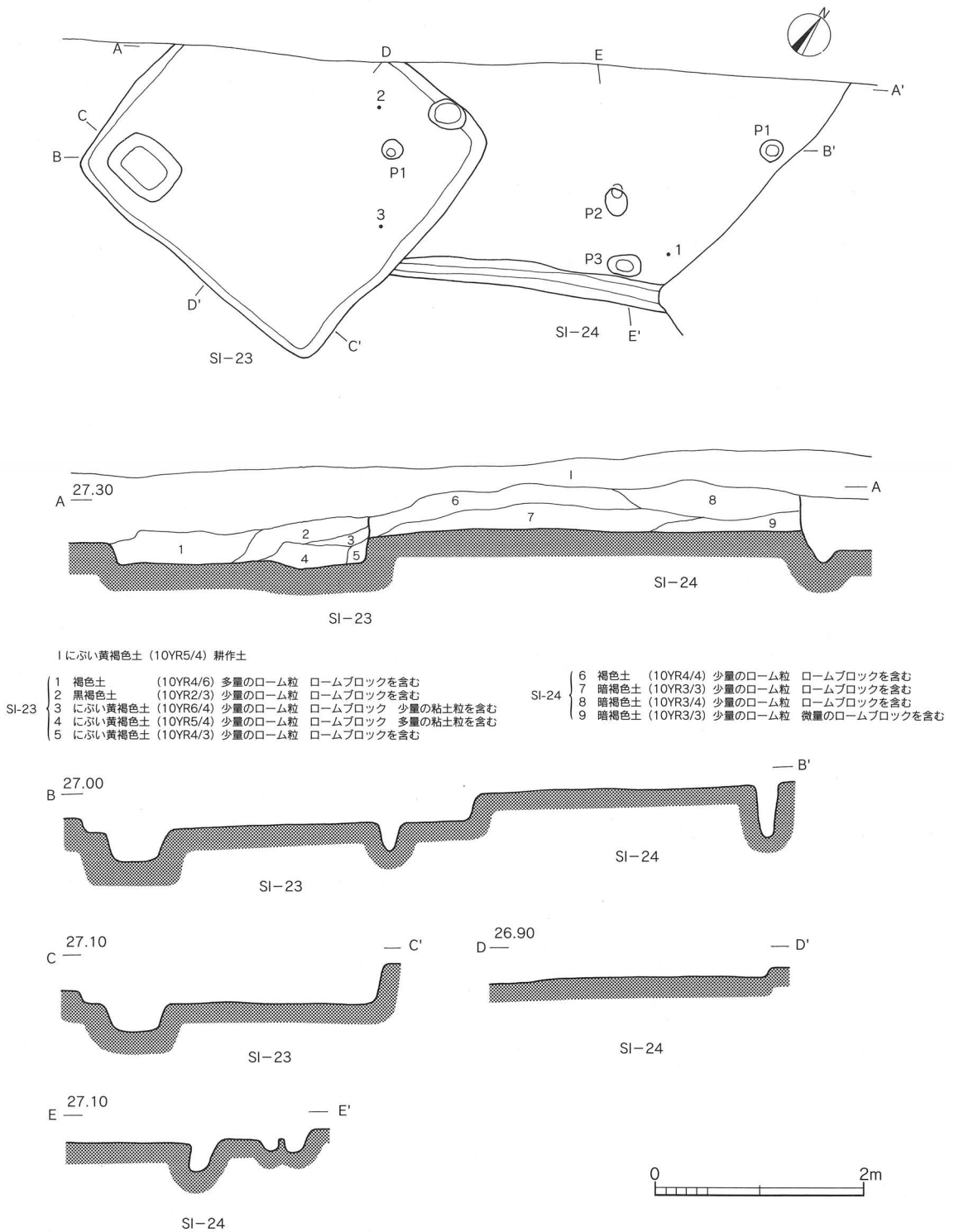
### 第24号住居跡 (S I-24) (第64・66図、P L. 17)

**位置** 調査区の中央部北東側、4C区に位置する。北西側は調査外域に広がり、南西側で第23号住居跡および北東側の第26号住居跡に切られ破壊されている。

**規模** 完存する壁面はなく、僅かに南東壁辺の一部が確認できるだけである。したがって規模については不明であるが、検出された床面は南北3.00m、東西2.24mである。全体の把握はできていないが、南東壁面から判断して平面形態は方形と考えられる。

**主軸方向** 北東壁にカマドが設置されたと推定して、主軸はN-47°-Wを示す。

**壁** 確認面からの深さは南東壁面で11cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。また壁溝は僅かに残存する南東壁で検出され、床面からの深さは10cm、幅は21~25cmを測り、底面は断面U字状を呈する。

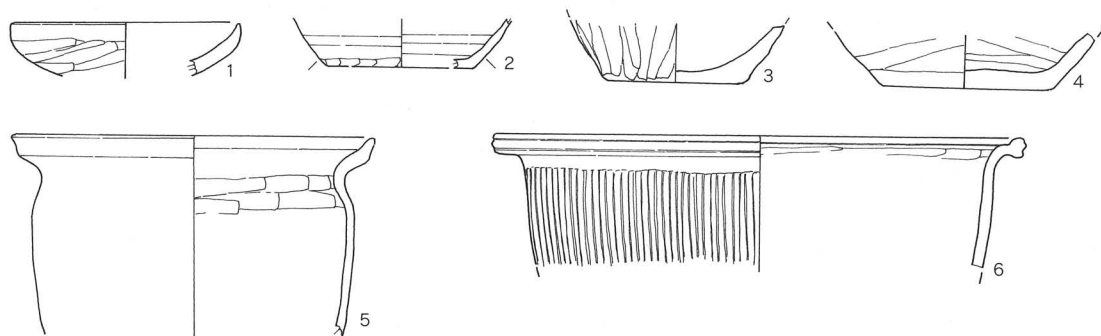


第64図 第23・24号住居跡

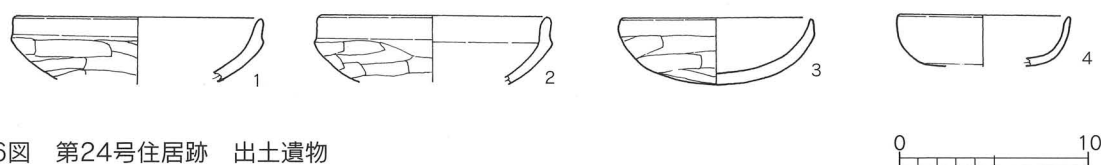
**床** 貼床で、部分的に硬化面を確認した。掘り方の深さはほぼ均等で、10~15cm前後の掘削で貼床面を構築していた。

**ピット** 3本ピットが検出されている。北東側のP1は径21×20cm、深さ47cmの円形を呈し、深さから判断して主柱穴であろう。また南東壁寄りのP2は径22×26cm、深さ28cmの楕円形ピット。同じく壁際のP3は径18×32cm、深さ9cmの楕円形ピットである。

**カマド** カマドの設置してあると思われる北壁が未調査区域に掛かるため不明である。



第65図 第23号住居跡 出土遺物



第66図 第24号住居跡 出土遺物

第24号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 1	土師器 坏	口径 13.00 底径 — 器高 (3.30)	丸底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、器受け部がやや張り出し、口縁部は器肉が薄くほぼ直立する。	口縁部は横ナデ。体部内面はナデ。外面横方向ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10YR5/4) 良好	口縁部1/8 残存
第66図 2	土師器 坏	口径 12.40 底径 — 器高 (3.50)	口縁部下に僅かに稜を有す。口縁部は、内湾気味に短く直立して端部が尖る。	口縁部は横ナデ。体部内面はナデ。外面横方向ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 橙色 (7.5YR7/6) 良好	口縁部1/3 残存
第66図 3	土師器 坏	口径 10.10 底径 — 器高 3.50	碗形を呈し、丸底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下に僅かな稜をもつ。口縁部は短くほぼ直立する。	口縁部は横ナデ。体部内面はナデ。外面横方向ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 橙色 (2.5YR7/6) 良好	体部1/4 残存
第66図 4	須恵器 坏	口径 9.00 底径 — 器高 2.70	小型の坏である。平底の底部から体部下端は丸みもち、体部はほぼ直立気味に立ち上がる。	ロクロ成形で、底部回転ヘラケズリ。体部内外面ロクロナデ。	石英・長石粒を含む 灰色 (N6/) 良好	体部1/8 残存

**覆土** 表土層を除き、未調査区に接した断面で4層が確認された。いずれも埋め戻し土層で、6層褐色土層は少量のローム粒子・ロームブロックを含み、若干締りに欠ける。7層は少量のローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土、8層も少量のローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土、9層は微量なロームブロックを含む暗褐色土である。

**遺物** 土師器坏と須恵器坏が出土している。いずれも破片で、1・2は口縁部下に明瞭な稜を有し、3は碗形を呈する。4の須恵器坏は小型の碗形を呈する。

**所見** 検出された形状から判断して、住居跡の規模は比較的大型であったと推定できる。しかし、覆土中より確認された遺物は限定されたもので、僅かに図示したもの以外土師器甕の胴部破片があるだけである。なお、出土遺物から古墳時代後期後半に属するものと考えられる。

第25号住居跡 (S I-25) (第67~71図、P L. 18)

**位置** 調査区の北東側、3C・4C区に位置する。北西コーナー側が調査外域に広がり、南東側で第26号住居跡を、西側で第24号住居跡を切って構築している。

**規模** 調査区外に広がる北西コーナー部分を除き東壁および南壁が完存し、北壁と西壁の一部が未検出である。規模は南北軸4.20m、東西軸4.10mを測り、平面形態は方形である。

**主軸方向** 北壁にカマドが設置されており、主軸はN-3°-Wを示す。

**壁** 確認面からの深さは東壁面で36cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。また壁溝は検出部で全周する。床面からの深さは3~8cm、幅は15~21cmを測り、底面は断面U字状を呈する。

**床** 貼床で、硬化面はカマド前面および床面中央付近が顕著であった。掘り方は全体的に認められ、柱穴間内は簡素な素掘で5~8cmと浅いのに対し、柱穴外の壁際に沿っては一段と深く掘り窪めており18~25cmを測る。

**ピット** P1~P4が主柱穴で4本柱住居の構造をもつ。P5は入口の梯子穴である。検出した主柱穴P1は北西コーナーに位置し、形状は円形で、径37×43cm、深さ43cmを測る。北東コーナーのP2は楕円形を呈し、径24×40cm、深さ39cm。南西コーナーのP3は円形で、径23×30cm、深さ57cm。南東コーナーのP4は楕円形で27×42cm、深さ24cm。また梯子穴であるP5は南壁中央に位置し、径30×38cm、深さ29cmの楕円形である。

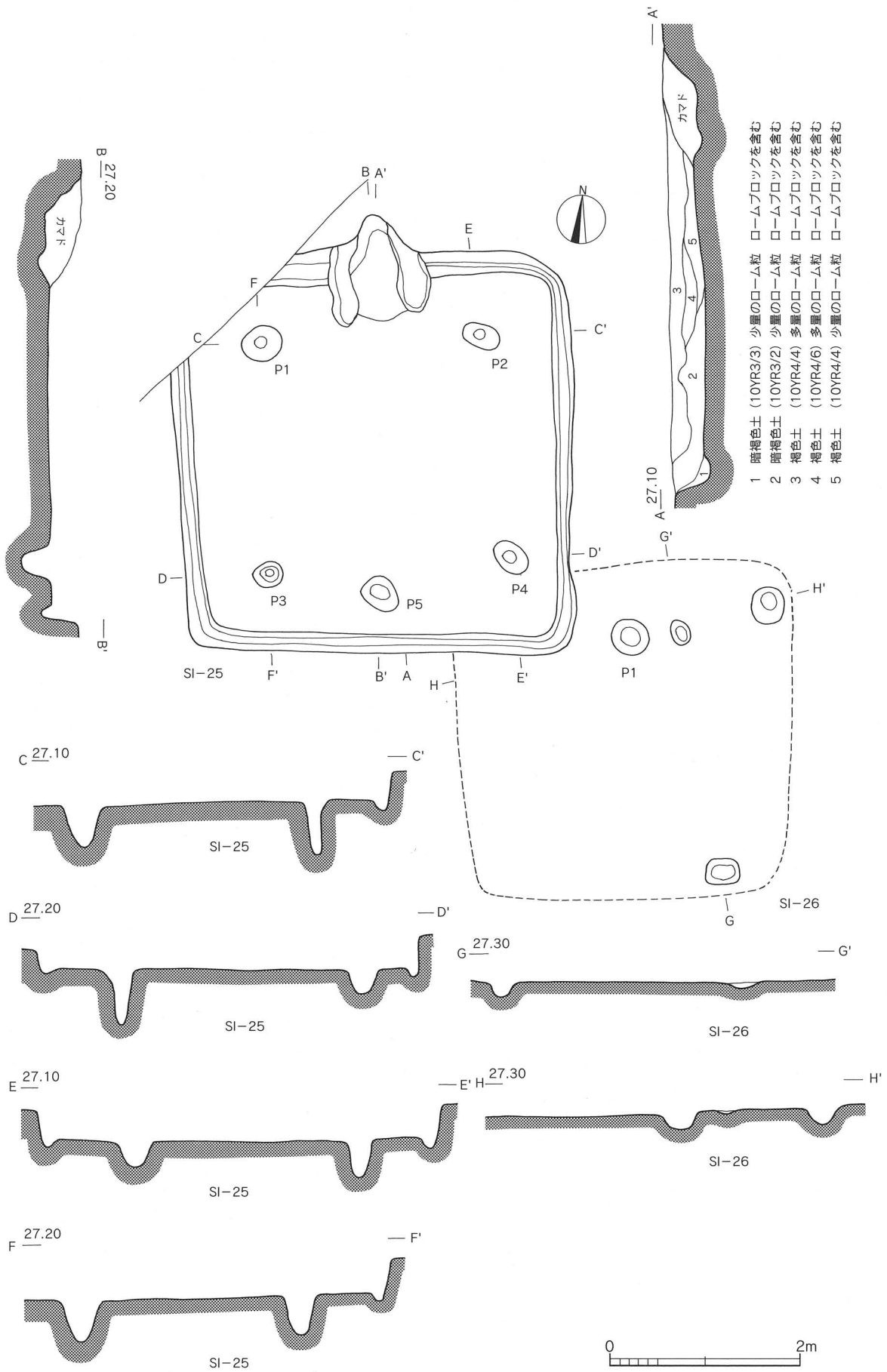
**カマド** 北壁ほぼ中央に構築されている。主軸方向は住居跡と一致する。規模は長さ115cm、幅105cmで、袖部は壁面に貼付けられ、灰白色砂質粘土を構築材に、黒褐色土・ローム粒子を混入して造られている。燃焼部は径58×94cm、深さ13cmの楕円形状に掘り窪められ、火床面は径38×55cmを測る。奥壁は40°の角度で立ち上がり、煙道部へと移行する。煙道部は壁面を掘削して構築されており、幅79cm、奥行34cmを測る。覆土は4層確認された。上層の1層暗褐色土は多量の粘土粒子と焼土粒子を含む。2層および3層黒褐色土は多量の焼土粒子を含む。下層の4層にぶい黄褐色土は構築材である粘土粒子を多量に含む。

**覆土** 5層が確認され、いずれも埋め戻し土層である。上層3層は褐色土層で多量のローム粒子・ローム

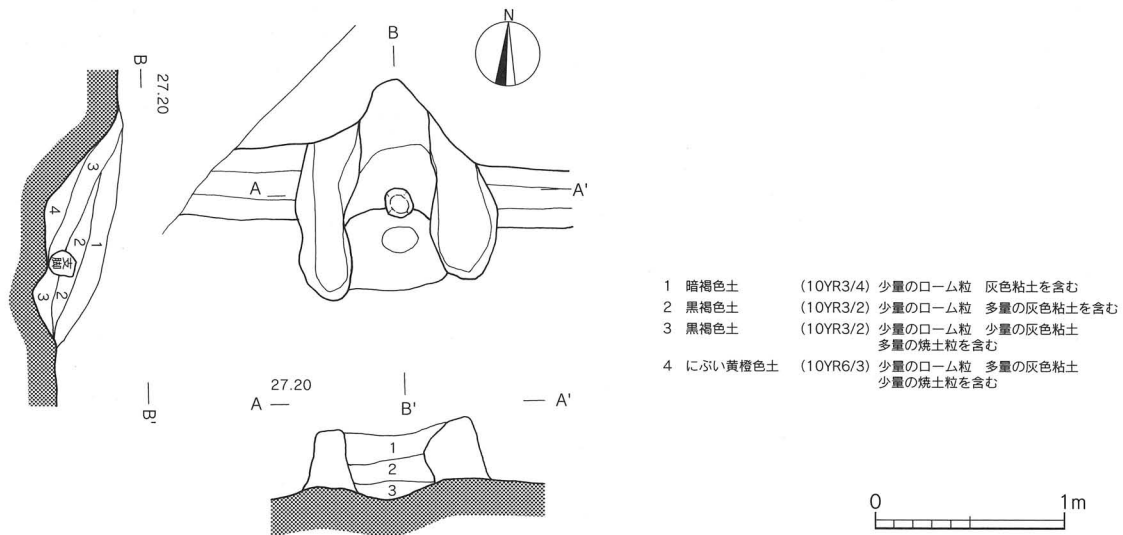
第25号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	土師器 坏	口径 12.50 底径 — 器高 4.60	平底気味の底部から体部は内湾して外傾する。口縁部下に僅かに稜を残し口縁部は直線的に外反する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含むにぶい赤褐色(5YR5/4)良好	口縁部1/2欠損
第71図 2	土師器 坏	口径 14.80 底径 — 器高 4.50	平底気味の底部から体部は内湾して外傾する。口縁部下に明瞭な稜を有し、口縁部は直線的に外反する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含むにぶい褐色(7.5YR5/3)良好	口縁部一部欠損
第71図 3	土師器 坏	口径 15.80 底径 — 器高 5.10	やや深めの坏で、丸底の底部から体部は内湾して外傾する。口縁部下に僅かに稜を残し口縁部は直線的に外反する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。外面に接合部を残す。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含むにぶい褐色(7.5YR5/3)良好	完形品
第71図 4	土師器 坏	口径 12.80 底径 — 器高 (2.60)	丸底気味の底部から体部は内湾して外傾する。口縁部下に僅かに稜を残し口縁部は短く外反する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含むにぶい黄褐色(10YR7/4)良好	口縁部1/8残存
第71図 5	土師器 坏	口径 11.00 底径 6.00 器高 4.00	小型の坏で、底部が平坦化した碗形を呈し。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部下に僅かな稜が見られる。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。外面に接合部を残す。	石英・長石粒を含む明赤褐色(2.5YR5/6)良好	口縁部一部欠損



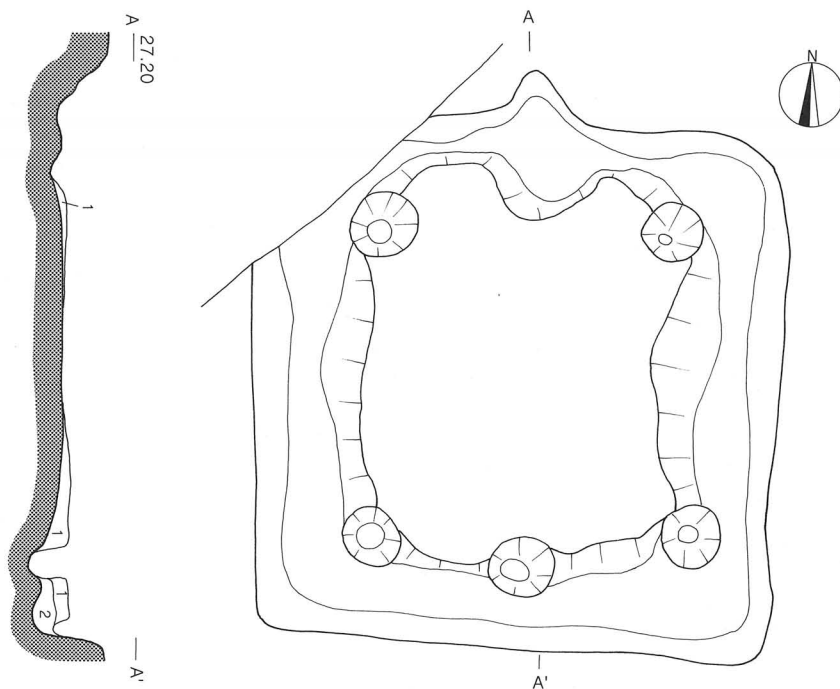


第67図 第25・26号住居跡



- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 少量のローム粒 灰色粘土を含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 少量のローム粒 多量の灰色粘土を含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) 少量のローム粒 少量の灰色粘土 多量の焼土粒を含む
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) 少量のローム粒 多量の灰色粘土 少量の焼土粒を含む

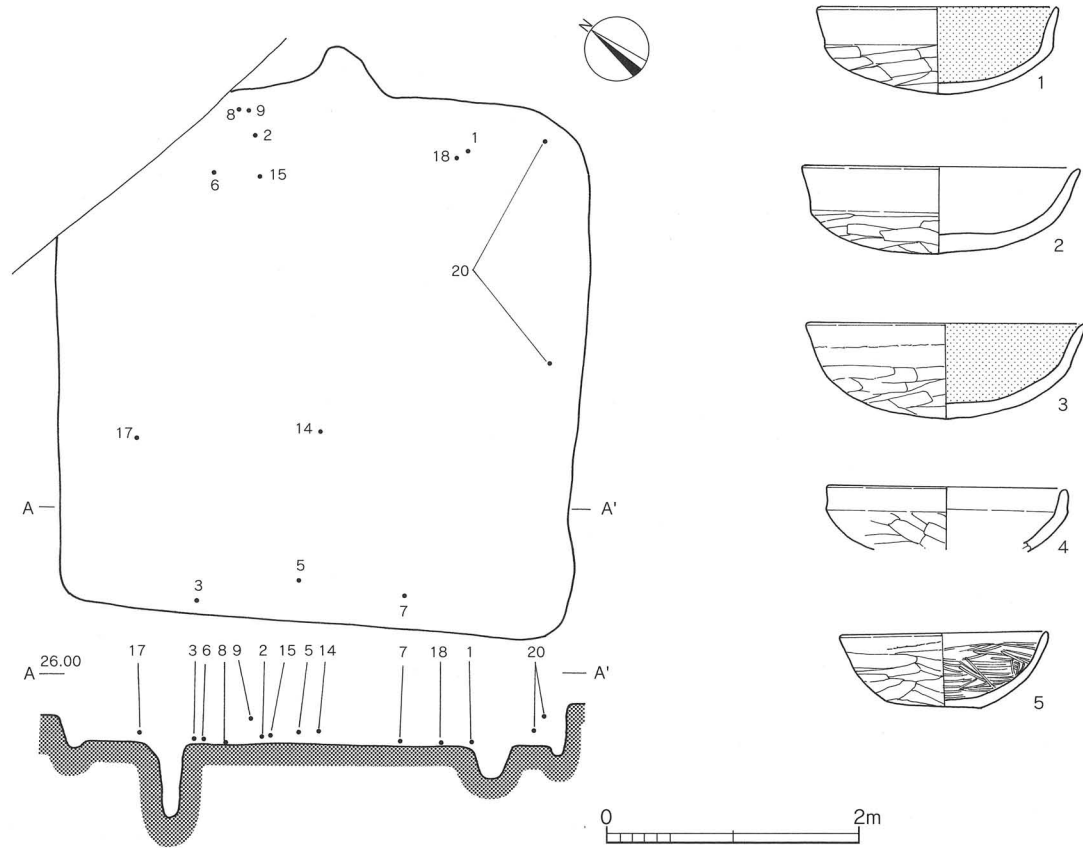
第68図 第25号住居跡 カマド



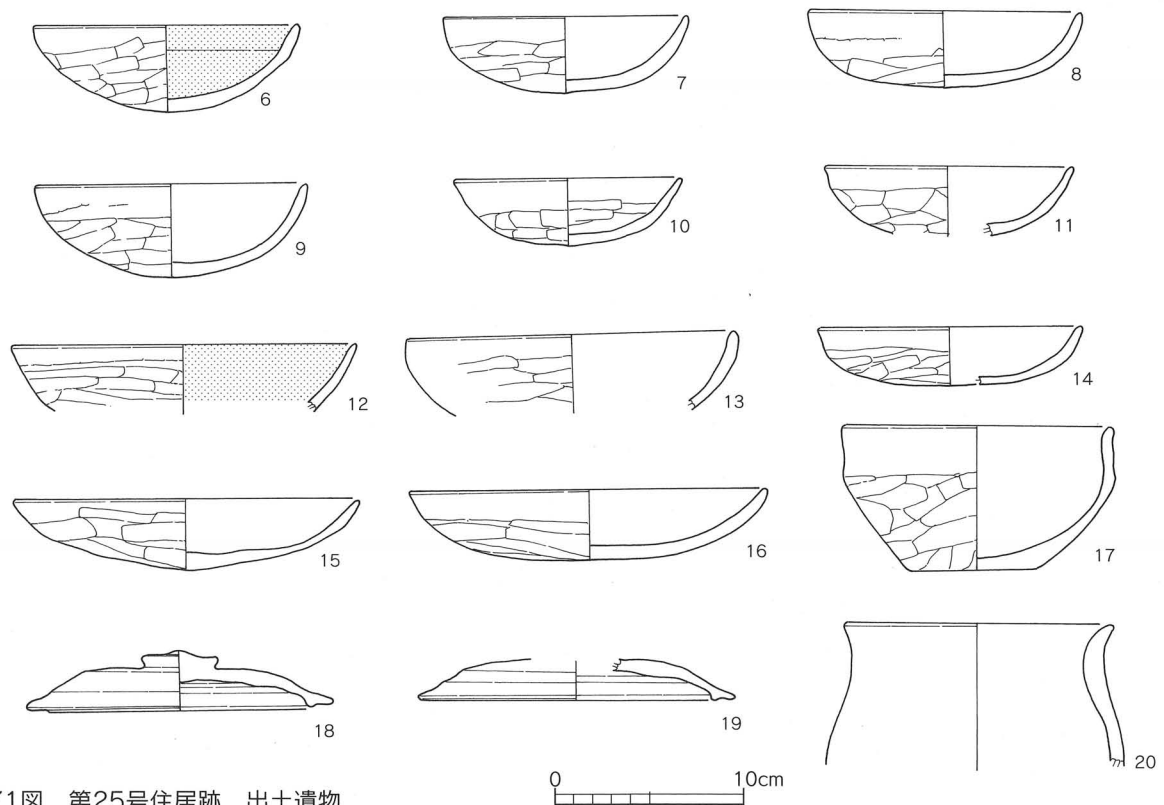
- 1 黄褐色土 (10YR5/6) ローム粒子を多く含む しまりがあり 堅緻である
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子を多く含む しまりがあり 堅緻である

第69図 第25号住居跡 掘り方

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 6	土師器 坏	口径 14.10 底径 — 器高 4.60	丸底気味の底部から体部は内湾して外傾する。口縁部下に明瞭な稜を残し口縁部は短く外反する。	内面ヘラを押し当てたナデ。外面は、口縁部ヨコナデ体部ヘラケズリ後全体にヘラナデ。内面黒色処理。	石英・長石粒を含む 橙色(7.5YR6/6) 良好	口縁部1/4 欠損
第71図 7	土師器 坏	口径 13.00 底径 4.00 器高 4.00	丸底気味の底部から体部は内湾して外傾する。口縁部下に僅かに稜を残し口縁部は短く外反する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 浅黄橙色(7.5YR8/6) 良好	完形品
第71図 8	土師器 坏	口径 14.60 底径 6.00 器高 4.10	平底気味の底部から体部は内湾して外傾する。口縁部下の稜は不明瞭で、口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含む にぶい黄褐色(10YR5/3) 良好	完形品



第70图 第25号住居跡 遺物出土状況



第71图 第25号住居跡 出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 9	土師器 坏	口径 14.40 — 底径 器高 4.90	丸底気味の底部から体部は内湾して外傾する。口縁部下の稜は不明瞭で、口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 橙色(5Y R6/6) 良好	口縁部1/3 欠損
第71図 10	土師器 坏	口径 12.20 — 底径 器高 4.00 3.50	平底気味の底部から体部は内湾して外傾する。口縁部下の稜は不明瞭で、口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 褐色(7.5Y R4/3) 良好	体部1/6 残存
第71図 11	土師器 坏	口径 13.00 — 底径 器高 (3.60)	平底気味の底部から体部は内湾して外傾する。口縁部下の稜は不明瞭で、口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 橙色(7.5Y R7/6) 良好	口縁部1/4 残存
第71図 12	土師器 坏	口径 18.40 — 底径 器高 (3.50)	丸底気味の底部から体部は内湾して外傾する。口縁部下の稜は不明瞭で、口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。外面に接合部を残す。黒色処理を施す。	石英・長石粒を含む 黒褐色(7.5Y R3/1) 良好	口縁部1/4 残存
第71図 13	土師器 坏	口径 17.80 — 底径 器高 (4.10)	体部は内湾して外傾する。口縁部下の稜は不明瞭で、口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 橙色(5YR6/6) 良好	口縁部1/8 残存
第71図 14	土師器 坏	口径 14.00 (7.00) — 底径 器高 (3.10)	平底気味の底部から体部は内湾して外傾する。口縁部下の稜は不明瞭で、口縁部は僅かに外反する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 明赤褐色(5YR5/6) 良好	体部1/4 残存
第71図 15	土師器 坏	口径 18.40 — 底径 器高 4.00 3.70	大振りな坏で、器高の浅い碗形を呈す。平底気味の底部から体部は内湾して開き、口縁部は短く外反する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 明赤褐色(2.5YR5/8) 良好	口縁部1/8 残存
第71図 16	土師器 坏	口径 19.00 — 底径 器高 3.80	大振りな坏で、器高の浅い碗形を呈す。平底気味の底部から体部は内湾して開き、口縁部は短く外反する。	口縁部ヨコナデ。体部内面横方向のナデ、外面横方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含む にぶい橙色(7.5YR6/4) 良好	体部1/3 欠損
第71図 17	土師器 碗	口径 14.40 — 底径 器高 7.00 7.70	平底の底部から体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部下に稜を有し、口縁部は内湾気味に直立する。	口縁部ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ、外面横方向ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 灰褐色(7.5YR4/2) 良好	口縁一部 欠損
第71図 18	須恵器 蓋	口径 16.20 — 底径 器高 3.10	口縁端部内面に明瞭なカエリが付く。天井部は平坦気味で、扁平な擬宝珠状のツマミが付く。	右回転ロクロ成形。天井部外面回転ヘラケズリ、内面はロクロナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 黄灰色(2.5Y6/1) 良好	体部1/3 欠損
第71図 19	須恵器 蓋	口径 16.80 — 底径 器高 (2.20)	口縁端部内面に明瞭なカエリが付く。天井部は平坦である。	右回転ロクロ成形。天井部外面回転ヘラケズリ、内面はロクロナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 灰色(10Y6/1) 良好	体部1/2 残存 つまみ 欠損
第71図 20	土師器 甕	口径 14.40 — 底径 器高 (7.30)	長胴タイプの甕で、肩部の張り弱く、口縁部は穏やかな弧状に外反する。	口縁部ヨコナデ。胴部内面ハケ状工具によるナデ、外面縦方向のヘラケズリ。	石英・長石粒を含む にぶい赤褐色(5YR4/3) 良好	口縁部 残存

ブロックを含み、若干縮りに欠ける。中層の4層も多量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土である。床面に接する2層は少量のローム粒子・ロームブロックを含み、5層は少量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土である。

**遺物** 小型の住居跡に比して土師器坏を主体に多くの土器が検出された。土師器坏は6～14の碗形の坏が最も多く、次いで口縁部下に明瞭な稜を有する1～4の須恵器模倣坏がある。さらに15・16は大型の皿状を呈する坏が検出されている。なお5の土師器坏は内外面にヘラミガキやミガキ的なナデ調整が施され、

平底であり、8世紀前半に比定される土器である。その他須恵器蓋がある。

**所見** 北コーナーが未調査区域に掛かるとはいえ、小型のまとまりある住居跡である。出土遺物も多く、主体を占める土師器および須恵器から8世紀前半と推定される。

#### 第26号住居跡 (S I-26) (第67図、P L. 18)

**位置** 調査区の北東側、3 C区に位置する。本跡の北西側に第25号住居跡が切って構築されており北西コーナーを破壊している。また全体の掘り方が浅く、明瞭な壁面はなく、僅かな床面と、炉址および柱穴を検出している。

**規模** 床面の検出ができず規模は不明であるが、僅かに残存している床面と炉址の位置から推定して、3.50m前後の方形を呈するものと推定される。

**主軸方向** 炉址の位置から推定してN-4°-Wを示す。

**壁** 壁および壁溝は確認できなかった。

**床** 炉址の前面から住居中央部に僅かな貼床が施されているものの、顕著な硬化面は確認できなかった。掘り方は全体的に簡素な素掘で、検出部における貼床が極端に薄層となっている。

**ピット** 3本のピットを検出した。炉址西側に位置するP 1は円形を呈し、38×39cm、深さ17cm。P 2は北東コーナー側に隣接し、隅丸方形を呈し、32×39cm、深さ14cmを測る。ただしこれら2本は主柱穴として確認できなかった。

**炉** 北壁際のほぼ中央に設定されていた。楕円形を呈し、径15×25cm、深さ6cmで鍋底状に掘り込んでいた。覆土には硬化した焼土層が堆積していた。

**覆土** 薄層で、覆土として明確な土層を確認できなかった。ただし、床面を覆っていたのはローム粒子を僅かに含む暗褐色土である。

**遺物** 遺物は出土しなかった。

**所見** 確認されたのは僅かな床面と炉址、柱穴のみで覆土はほとんどなく、したがって遺物を検出できなかった。しかし、炉址および柱穴等から判断して古墳時代前期と推定できる。

#### 第27号住居跡 (S I-27) (第72~74図、P L. 19)

**位置** 調査区の北東端、1 B・2 B区に位置する。本跡の南東側約1/4が調査区外に広がっている。また東側で第29号住居跡を切って構築している。

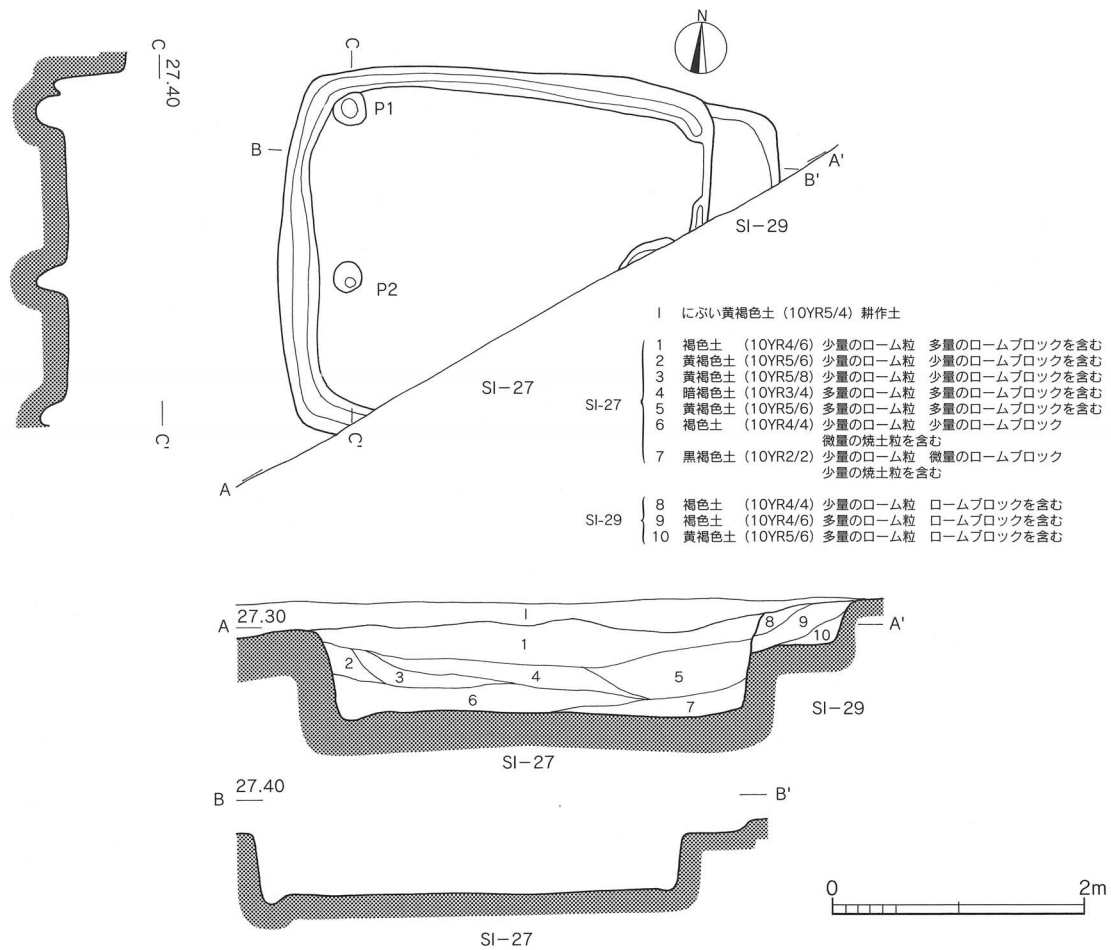
**規模** 南東コーナーが未調査区域に大半が広がっているが、北壁と西壁が完存している。南北軸2.85m、東西軸3.35mで、平面形態は長方形を呈する。

**主軸方向** カマドの位置が明確ではないが、東側に設置されたと推定するとN-83°-Eをさす。

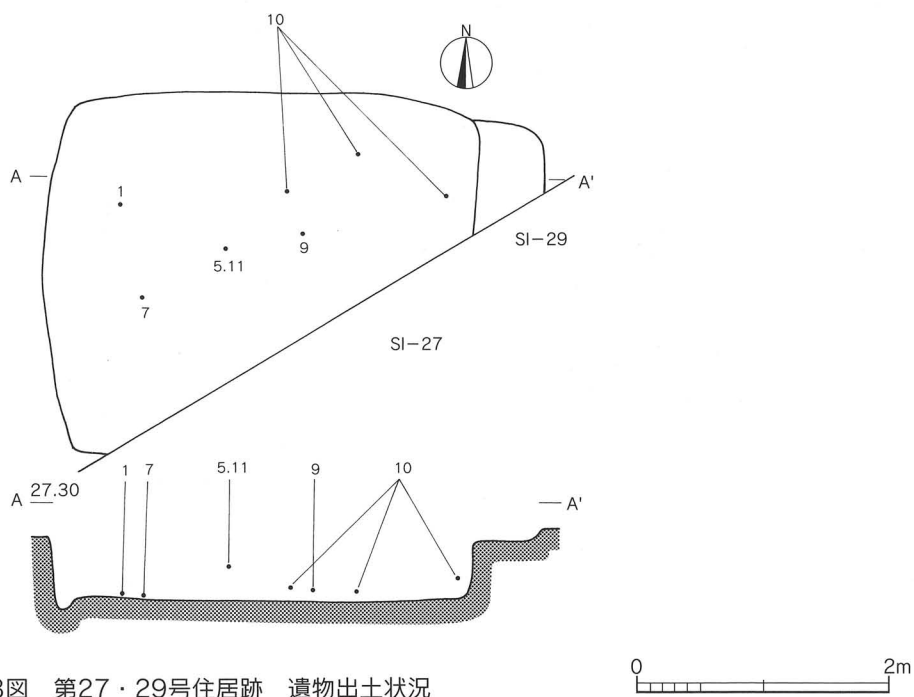
**壁** 確認面からは最深部で56cmである。壁はやや外傾して立ち上がっている。また壁溝は検出部分における北東コーナーで一部途切れるもののほぼ全周する。床面からの深さは4~8cm、幅は17~32cmを測り、底面は断面U字状を呈する。

**床** 検出面では概ね平坦である。またほぼ全面的に貼床が施されているものの、顕著な硬化面は住居跡中央付近のみ確認できた。掘り方は全体的に簡素な素掘で、検出部における貼床が極端に薄層となっている。

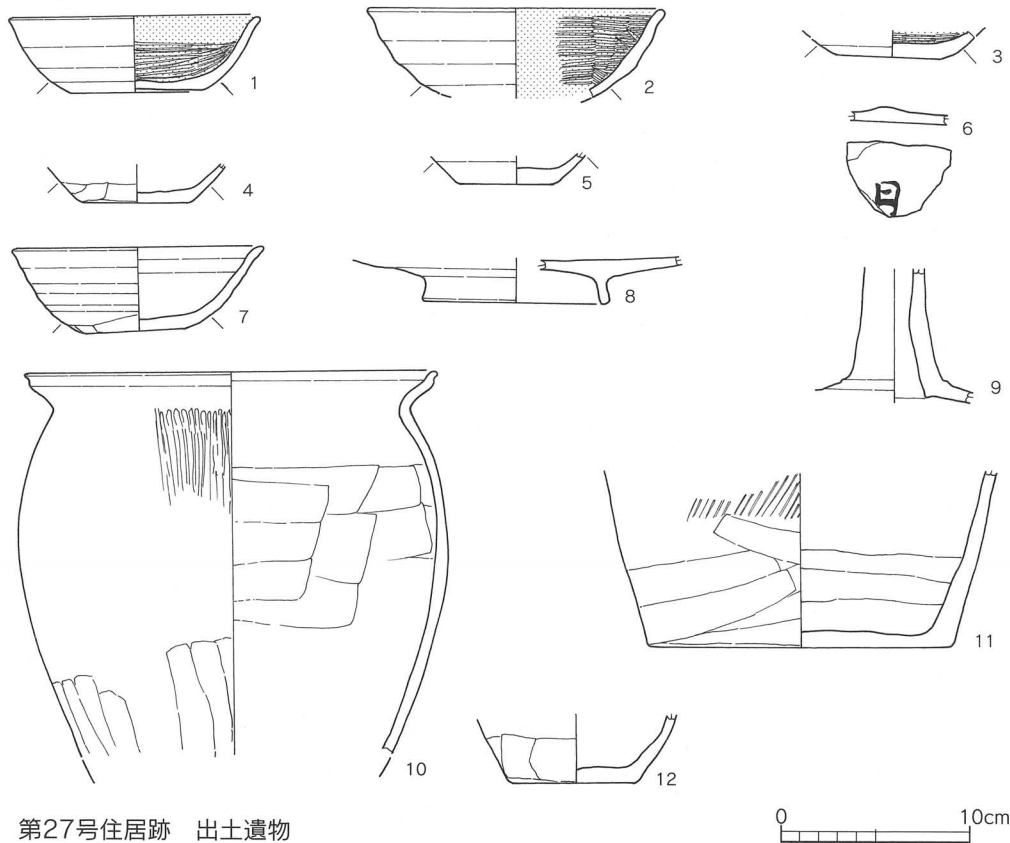
**ピット** 3本のピットを検出した。主柱穴としては確認出来なかった。南西コーナー際のP 1は円形を呈し、25×28cm、深さ20cm。P 2は西壁中央に隣接し、円形を呈し、20×22cm、深さ22cmを測る。また東



第72図 第27・29号住居跡



第73図 第27・29号住居跡 遺物出土状況



第74図 第27号住居跡 出土遺物

壁中央に接して落ち込みが確認できたが柱穴として確認できなかった。

**覆土** 表土層を除き、7層確認された。最下層の7層を除き埋め戻し土層である。上層1層は多量のロームブロックを含み、若干締りに欠ける褐色土。中層は2～5層で、いずれもローム粒子・ロームブロックを含むが、とくに4層暗褐色土および5層黄褐色土は多量のローム粒子・ロームブロックを含む。また住居床面を覆っていた下層の6層は少量のローム粒子・ロームブロックと僅かな焼土粒子を含む褐色土である。最下層である7層は自然堆積層で、ローム粒子・ロームブロックに、僅かな焼土粒子を含む黒褐色土層である。

**遺物** 遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・盤・長頸瓶・甕が出土している。1～3・6は黒色処理が施されている土師器坏で、6は底部に墨書がみられる。部分的で「月カ」と判読されるが明確ではない。

**所見** 第29号住居跡を切って構築している。また約1/3は未調査区域に広がり、カマドの位置など明確ではないが、出土土器からみて9世紀中葉と推定される。

#### 第28号住居跡 (S I-28) (第75～78図、P L. 20)

**位置** 調査区の北東端、2 A・2 B区に位置する。本跡の西側約1/3は後世の攪乱が入り大きく破壊されている。

**規模** 西側が大きく攪乱を受けているが、東壁が完存し、北壁および南壁が残存している。南北軸4.34m、現存する東西軸3.36mで、平面形態は方形を呈する。

**主軸方向** カマドの位置が明確ではないが、北壁に設置されたと推定するとN-15°-Wをさす。

**壁** 確認面からは最深部で54cmである。壁はやや外傾して立ち上がっている。また壁溝は検出部分におけ

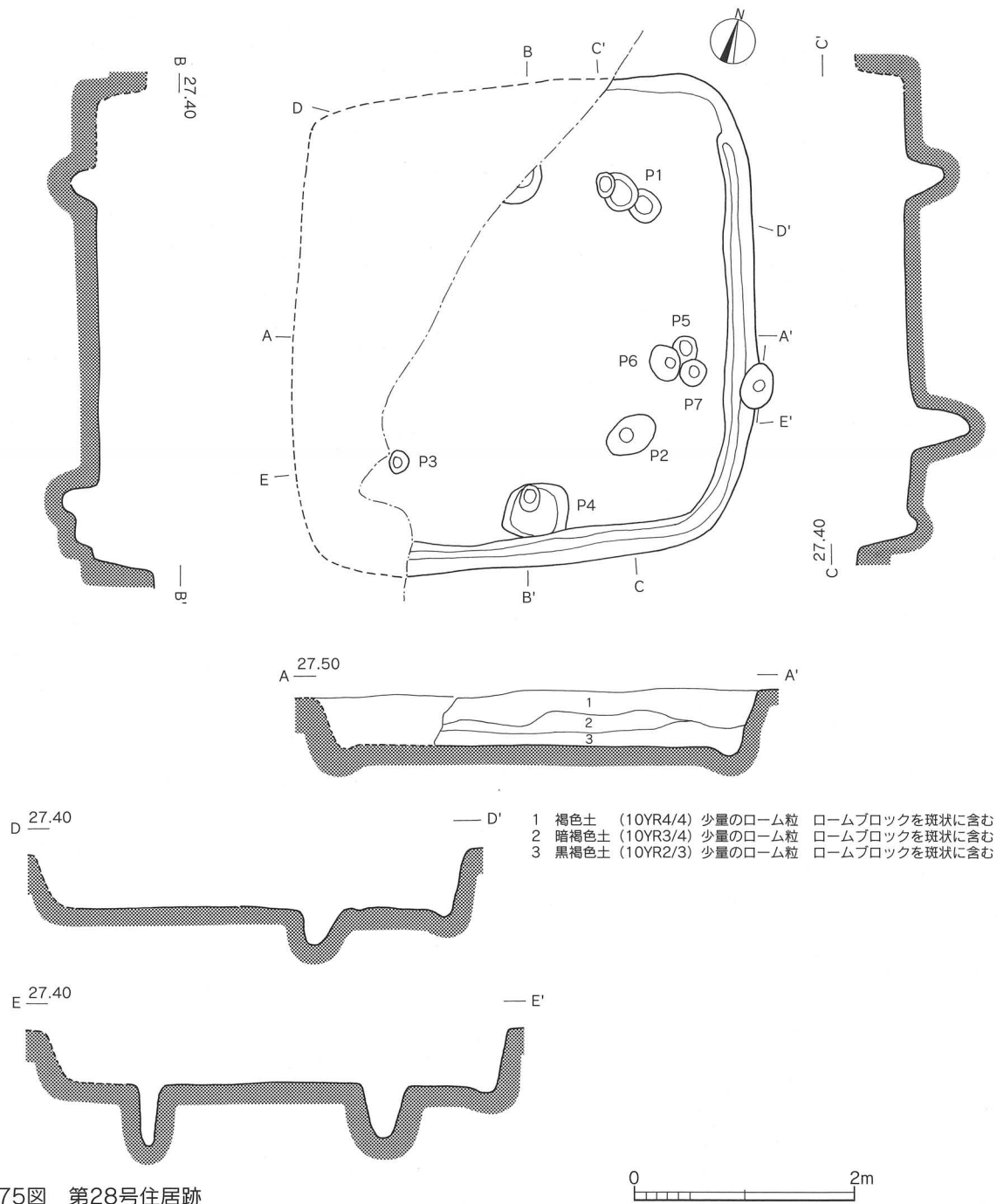
第27号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	土師器 坏	口径 13.50 底径 6.80 器高 4.00	平底上げ底気味の底部で、 体部は内湾気味に立ち上がり、 口縁端部でやや外反する。	ロクロ成形。口縁部・体部 ロクロナデ。体部下端・底 部回転ヘラケズリ。内面ヘ ラミガキの後、黒色処理。	石英・長石粒を含む 明赤褐色 (2.5Y R5/8) 良好	体部1/3 欠損 内黒
第74図 2	土師器 坏	口径 16.00 底径 — 器高 (4.60)	体部は内湾気味に立ち上がり、 口縁端部でやや外反する。	ロクロ成形。口縁部・体部 ロクロナデ。体部下端回転 ヘラケズリ。内面ヘラミガ キの後、黒色処理。	雲母・石英・長石粒を含む にぶい褐色 (7.5Y R5/4) 良好	口縁部 1/10残存 内黒
第74図 3	土師器 坏	口径 — 底径 4.80 器高 (1.10)	平底の底部で、体部は内湾 気味に立ち上がる。	ロクロ成形。体部ロクロナ デ。体部下端・底部手持ち ヘラケズリ。内面ヘラミガ キの後、黒色処理。	雲母・石英・長石粒を含む にぶい褐色 (7.5Y R5/4) 良好	底部のみ 残存 内黒
第74図 4	土師器 坏	口径 — 底径 5.80 器高 (1.80)	平底の底部で、体部は直線 的に外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。体部ロクロナ デ。体部下端手持ちヘラケ ズリ。底部回転ヘラケズリ。 内面ナデ	雲母・石英・長石粒を含む 明赤褐色 (2.5Y R5/6) 良好	底部1/4 残存
第74図 5	土師器 坏	口径 — 底径 6.10 器高 (1.40)	平底の底部で、体部は直線 的に外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。口縁部・体部 ロクロナデ。体部下端回転 ヘラケズリ。内面ナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 黒褐色 (10Y R3/1) 良好	底部のみ 残存
第74図 6	土師器 坏	口径 — 底径 — 器高 —	底部のみの破片。平底の底 部で、中央部が肥厚する。	底部回転ヘラケズリ、内面 ヘラミガキの後、黒色処理 を施す。墨書「月カ」。	石英・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10Y R7/4) 良好	底部破片 墨書土器
第74図 7	須恵器 坏	口径 13.20 底径 5.20 器高 4.50	平底の底部から体部は内湾 しながら立ち上がり、口縁 端部でやや外反する。	右回転ロクロ成形。体部外 内面ロクロナデ。体部下端 底部手持ちヘラケズリ。	雲母・石英・長石粒を含む 灰白色 (10Y R7/1) 良好	体部1/5 欠損
第74図 8	須恵器 盤	口径 — 底径 9.80 器高 (2.50)	体部は大きく開き、高台は 「ハ」の字状に開く。	体部内外面ロクロナデ。底 部回転ヘラケズリの後、高 台貼り付け、ロクロナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 灰色 (N6/) 良好	底部1/4 残存1
第74図 9	須恵器 長頸壺	口径 — 底径 — 器高 (7.00)	頸部破片。肩部から頸部に かけて細身に窄まる。	頸部内外面ロクロナデ。	石英・長石粒を含む 青灰色 (5P B6/1) 良好	頸部のみ 残存
第74図 10	土師器 甕	口径 — 底径 6.50 器高 (3.50)	長胴タイプの甕で体部は内 湾して立ち上がり、外反す る口縁部は端部が摘み出さ れて外傾する帯状を呈す。	口縁部ヨコナデ。胴部内面 ハケ状工具による横方向の ナデ、外面上半部縦位のヘ ラナデ。下半部縦方向のヘ ラケズリ。	雲母・石英・長石粒を含む にぶい黄褐色 (10Y R5/4) 良好	体部1/3 欠損
第74図 11	須恵器 甕	口径 — 底径 16.20 器高 (9.20)	平底の底部から体部は直線 的に外傾して立ち上がる。	体部外面斜位の平行タタキ。 下端部横方向のヘラケズリ。 内面体部・底部ナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 灰白色 (10Y7/1) 良好	底部のみ 1/2残存
第74図 12	須恵器 甕	口径 — 底径 6.50 器高 (3.50)	平底の底部から体部は内湾 気味に外傾して立ち上がる。	体部下端部横方向のヘラケ ズリ。底部木葉痕。内面体 部・底部ナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 黒褐色 (10Y3/1) 良好	底部のみ 1/2残存

る東壁と南壁で検出され、床面からの深さは2～7cm、幅は27～32cmを測り、底面は断面U字状を呈する。  
**床** 検出面では概ね平坦である。またほぼ全面的に貼床が施されており、顕著な硬化面は住居跡中央部を  
 中心に主柱穴付近まで確認できた。掘り方は全体的に簡素な素掘で、深さは6～14cmを測る。

**ピット** 3本の主柱穴と入口部の梯子穴の他、東壁際に3本ピットを検出した。主柱穴としては北東コー  
 ナー際のP1は2個重複しており、内側のピットは楕円形を呈し、29×42cm、深さ33cm。東側のピット

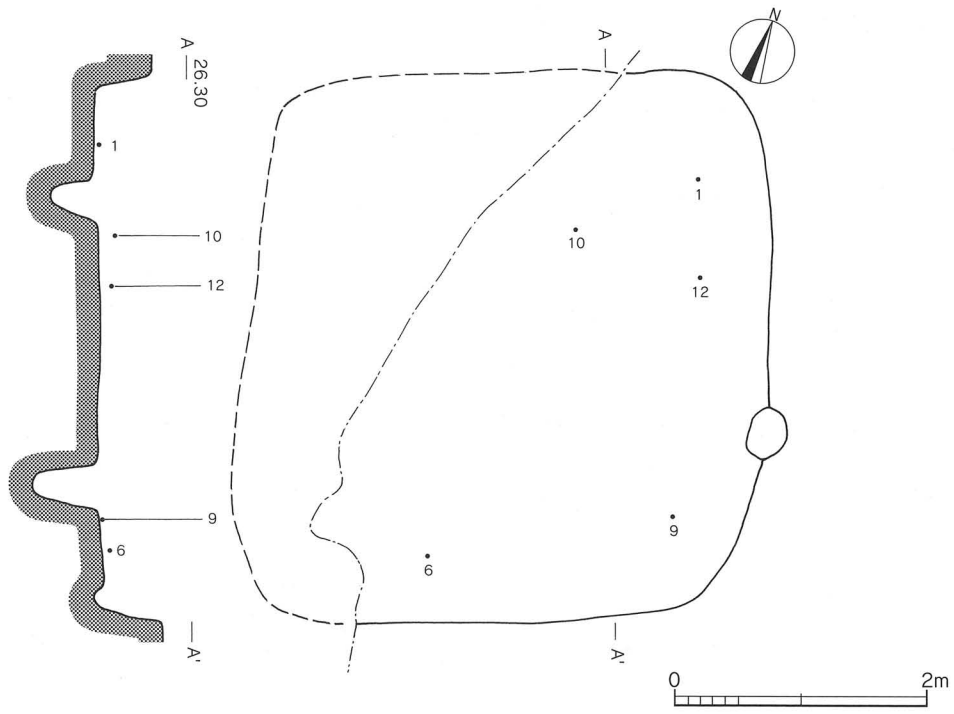




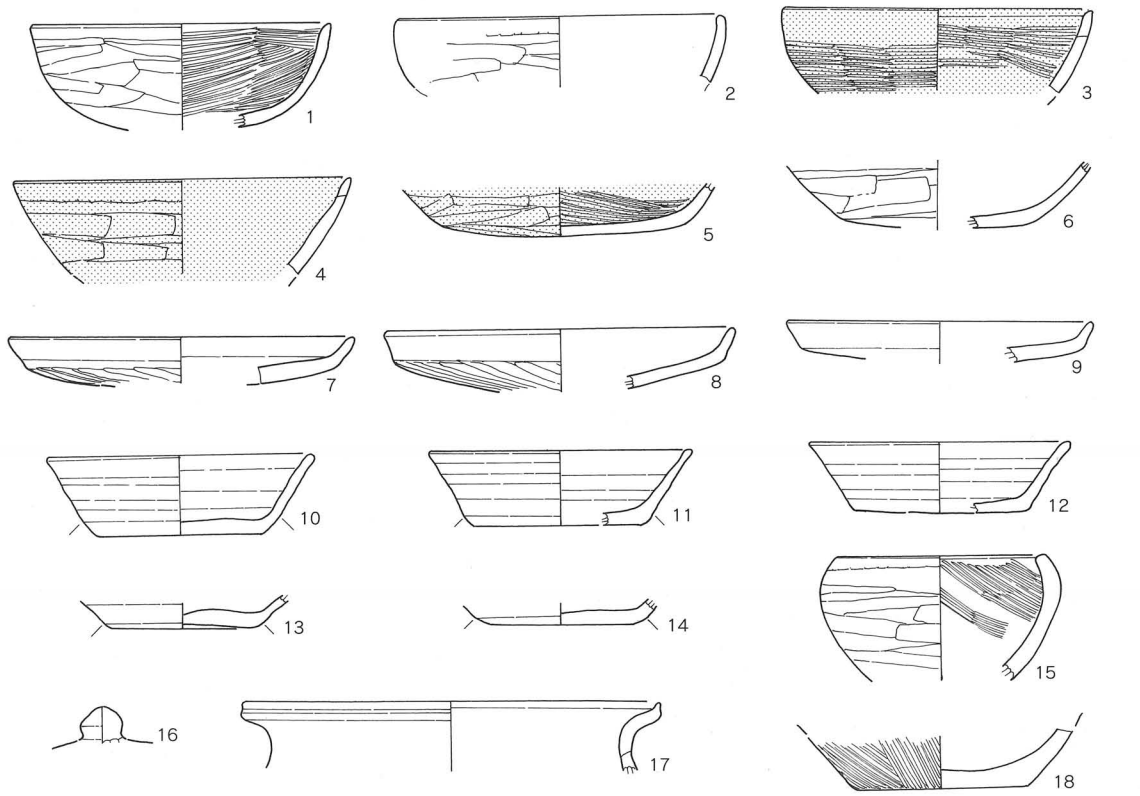
第75図 第28号住居跡

は円形を呈し、 $27 \times 32$ cm、深さ30cm。南東コーナーのP2は楕円形を呈し、 $34 \times 47$ cm、深さ48cm。南西コーナーのP3は円形を呈し、 $16 \times 20$ cm、深さ54cmを測る。また南壁中央に接する梯子穴のP4は $47 \times 55$ cm、深さ10cmの方形ピット内の北端に $18 \times 22$ cm、深さ12cmのピットを伴う。また東壁際中央付近に3本のピットが穿ってある。ピット覆土の状況から判断して本跡周辺で検出されたピット群に関連するものと思われるが、計測のみ記載する。P5は円形を呈し、 $19 \times 22$ cm、深さ11cm。P6は円形を呈し、 $23 \times 24$ cm、深さ10cm。P7は円形を呈し、 $27 \times 35$ cm、深さ18cmである。

**覆土** 3層確認された。いずれも埋め戻し土層である。上層1層は少量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土。中層2層は少量のローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土。下層の3層黒褐色土は少量のローム粒子・ロームブロックを含む。

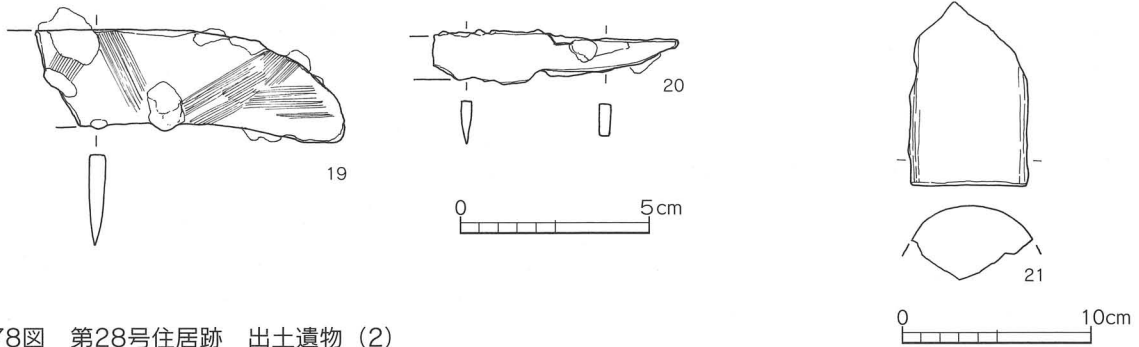


第76図 第28号住居跡 遺物出土状況



第77図 第28号住居跡 出土遺物 (1)





第78図 第28号住居跡 出土遺物(2)

第28号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 1	土師器 坏	口径 15.80 底径 — 器高 (5.40)	丸底の坏で、体部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は内削状を呈する。	外面口縁部横ナデ、体部横方向のヘラケズリの後、軽いミガキ。内面体部ヘラナデ後横方向ミガキ。	石英・長石粒を含む 橙色(2.5YR6/6) 良好	体部1/2 残存
第77図 2	土師器 坏	口径 17.60 底径 — 器高 (3.50)	体部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸みを呈する。	外面口縁部横ナデ、体部横方向のヘラケズリの後、軽いミガキ。内面体部ヘラナデ後横方向ミガキ。	石英・長石粒を含む 浅黄橙色(10YR8/4) 良好	口縁部 破片
第77図 3	土師器 碗	口径 16.50 底径 — 器高 (4.40)	体部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は内削状を呈する。口縁部下に僅かな稜を有する。	外面口縁部横ナデ、体部横方向のヘラケズリの後、軽いミガキ。内面体部ヘラナデ後横方向ミガキ。	石英・長石粒を含む 黒色(10YR2/1) 良好	口縁部1/4 残存 黒色処理
第77図 4	土師器 碗	口径 18.00 底径 — 器高 (5.10)	体部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は内削状を呈する。口縁部外面に接合部が残る。	外面口縁部横ナデ、体部横方向のヘラケズリの後、軽いミガキ。内面体部ヘラナデ後横方向ミガキ。	石英・長石粒を含む にぶい橙色(7.5YR7/4) 良好	口縁部1/2 残存 黒色処理
第77図 5	土師器 坏	口径 — 底径 13.20 器高 (2.40)	丸底気味の平底で、体部は内湾して立ち上がる。	外面体部横方向のヘラケズリ後、ヘラミガキ。底部ヘラケズリの後、ヘラミガキ。内面ナデの後ヘラミガキ。	石英・長石粒を含む 黒色(10YR2/1) 良好	底部1/4 残存 黒色処理
第77図 6	土師器 坏	口径 — 底径 10.20 器高 (3.10)	丸底気味の平底で、体部は内湾して立ち上がる。	外面体部横方向のヘラケズリ。底部ヘラケズリの後、ヘラミガキ。内面ナデの後ヘラミガキ。	石英・長石粒を含む 黒色(10YR2/1) 良好	底部1/8 残存
第77図 7	土師器 盤	口径 18.50 底径 — 器高 (2.40)	体部は直線的に大きく開き、屈曲して口縁部短く外傾する。	外面口縁部横ナデの後ヘラミガキ、体部横方向のヘラケズリの後、ヘラミガキ。内面体部ヘラナデ後横方向ミガキ。	石英・長石粒を含む 赤色(10R5/8) 良好	体部1/6 残存
第77図 8	土師器 盤	口径 18.70 底径 — 器高 (3.20)	体部は直線的に大きく開き、屈曲する口縁部は短く外傾する。口縁部下に稜を有する。	外面口縁部横ナデの後ヘラミガキ、体部横方向のヘラケズリ。内面体部ヘラナデ後口縁部横方向、体部放射状のミガキ。	雲母・石英・長石粒を含む 暗褐色(10YR3/4) 良好	体部1/4 残存
第77図 9	土師器 盤	口径 16.20 底径 — 器高 (2.10)	体部は直線的に大きく開き、屈曲する口縁部は短く外傾する。口縁部下に稜を有する。	外面口縁部横ナデの後ヘラミガキ、体部横方向のヘラケズリの後、軽いヘラミガキ。内面体部ヘラナデ後横方向ミガキ。	石英・長石粒を含む にぶい赤褐色(5YR5/4) 内面橙色(7.5YR6/6) 良好	口縁部1/4 残存
第77図 10	須恵器 坏	口径 14.20 底径 9.20 器高 4.20	平底で、体部下端がやや丸味を持つがほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	右回転ロクロ成形。底部は回転ヘラ削りで、体部下端は左方向へ回転ヘラケズリ。	石英・長石粒を含む 灰色(N5/1) 良好	体部1/2 残存
第77図 11	須恵器 坏	口径 14.00 底径 8.80 器高 4.00	平底で、体部下端がやや丸味を持つがほぼ直線的に外傾して立ち上がる。口縁部端で外反する。	右回転ロクロ成形。底部は手持ちヘラケズリで、内外面体部ロクロナデ。ロクロ目が顕著である。	雲母・石英・長石粒を含む 灰褐色(5YR6/2) 良好	体部1/4 残存

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 12	須恵器 坏	口径 14.00 底径 9.20 器高 (3.80)	平底で、体部下端がやや丸味を持つがほぼ直線的に外傾して立ち上がる。口縁部端で外反する。	右回転ロクロ成形。底部は手持ちヘラケズリで、内外面体部ロクロナデ。ロクロ目が顕著である。	石英・長石粒を含む 灰黄色 (2.5YR7/2) 良好	体部1/3 残存
第77図 13	須恵器 坏	口径 — 底径 7.40 器高 (1.50)	平底で、体部下端がやや丸味を持つがほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。体部外面下端回転ヘラケズリ、底部は手持ちヘラケズリで、内外面体部ロクロナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 灰白色 (10Y7/1) 良好	底部1/2 残存
第77図 14	須恵器 坏	口径 — 底径 7.00 器高 (1.00)	平底で、体部下端がやや丸味を持つがほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。底部は手持ちヘラケズリで、内外面体部ロクロナデ。	石英・長石粒を含む 灰白色 (10Y7/1) 良好	底部1/2 残存
第77図 15	土師器 碗	口径 11.00 底径 — 器高 (6.50)	体部は内湾気味立ち上がる。口縁部下で微かな稜を有する。	口縁部横ナデの後、ヘラミガキ。体部内面ナデの後ヘラミガキ。外面ヘラケズリ後ヘラミガキ。	石英・長石粒を含む 橙色 (2.5YR7/6) 良好	体部1/2 残存
第77図 16	須恵器 蓋	口径 — 底径 — 器高 (1.70)	蓋のツマミ部分の破片。	擬宝珠状のツマミ。ツマミは貼り付けである。	石英・長石粒を含む 灰色 (N6) 良好	つまみの み残存
第77図 17	土師器 甕	口径 22.00 底径 — 器高 (3.60)	長胴気味の甕で、肩部の張りなく、口縁部は強く外反し、端部が斜め上に摘み上げられた帯状になる。	口縁部横ナデ。胴部内面ハケ状工具による横方向のナデ。	雲母・石英・長石粒を含む 暗赤褐色 (2.5YR3/6) 良好	口縁部1/6 残存
第77図 18	土師器 甕	口径 — 底径 9.00 器高 (2.80)	平底の底部から体部ほぼ直線的に外傾し立ち上がる。	外面体部縦位および斜位のヘラミガキ。底部ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 黒褐色 (10YR3/2) 良好	底部のみ 残存

**遺物** 土師器坏・甕・碗・盤、須恵器坏・蓋が出土している。土師器坏は深めの碗形を呈し、2を除きヘラミガキされ、3～5は黒色処理が施されている。また1は赤彩の痕跡がみられる。7～9は土師器盤であるが、7も赤彩の痕跡がある。また15の土師器碗は小型であるが赤彩が施されている。19は鉄製の鎌で、切先部と刃部の破片である。錆化がややすすんでいる。刃部はほぼ直線であるが、背部は緩いカーブをなしている。現存刃長8.57cm、刃幅2.36cm、厚さ0.34cmを測る。20は鉄製の刀子である。刃部の先端を欠損している。両関で、現存する身長6.41cm、茎長3.52cm、茎身幅0.69cm、茎棟幅0.37cmを測る。21は土製支脚である。大半を欠損している。截頭円錐形を呈し、横断面は円形をなす。表面は縦方向のナデ整形で仕上げられている。胎土に石英・長石粒を含む。現存長9.57cm、厚さ6.76cmを測る。

**所見** 約1/3が後世の攪乱によって破壊され、カマドの位置など明確ではないが、出土土器からみて8世紀中葉と推定される。

#### 第29号住居跡 (S I-29) (第72・73図、P L. 19)

**位置** 調査区の北東端、1 B区に位置する。本跡の南東側が調査区外に広がり、しかも西側で第27号住居跡に切られ大きく破壊されている。

**規模** 住居跡の大半が破壊され、僅かに北東コーナーのみ残存している。したがって遺存している北壁は0.50m、東壁0.48mであるが、平面形態は方形を呈するものと推定する。

**主軸方向** 炉址およびカマドの位置が明確ではないが、北側に設置されたと推定するとN-3°-Wをさす。

**壁** 確認面からは最深部で8cmである。壁はやや外傾して立ち上がっている。壁溝は確認面では検出でき

なかった。

**床** 検出面では概ね平坦である。なお貼床は確認できなかった。掘り方は簡素な素掘で、検出部において5cmを測る。

**ピット** 確認できなかった。

**覆土** 表土層を除き、3層確認された。いずれも埋め戻し土層である。上層8層は少量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土。中層9層は多量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土。下層の10層は多量のローム粒子・ロームブロックを含む黄褐色土。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 確認されたのは僅かに北東コーナー部分だけで、住居跡の大半が未調査区域および第27号住居跡によって破壊され、全体の様相は把握できない。出土遺物もなく、少なくとも、重複する第27号住居跡に切られていることから9世紀以前に構築された住居跡である。

## 2. 掘立柱建物跡(SB)

掘立柱建物跡が1棟検出された。3軒の竪穴住居跡と重複しているものの、未調査区域に広がる部分を除き、ほぼ全容が確認された。

第1号掘立柱建物跡(SB-1) (第79・80図、P.L. 21)

**位置** 調査区の南西側、6G・7G・7H区に位置する。本跡の南東コーナーが調査区外に掛かり桁柱跡2本が未調査で、しかも3軒の竪穴住居跡が重複しているものの、他の柱跡は明瞭に残存しており、ほぼ全容が把握できた。

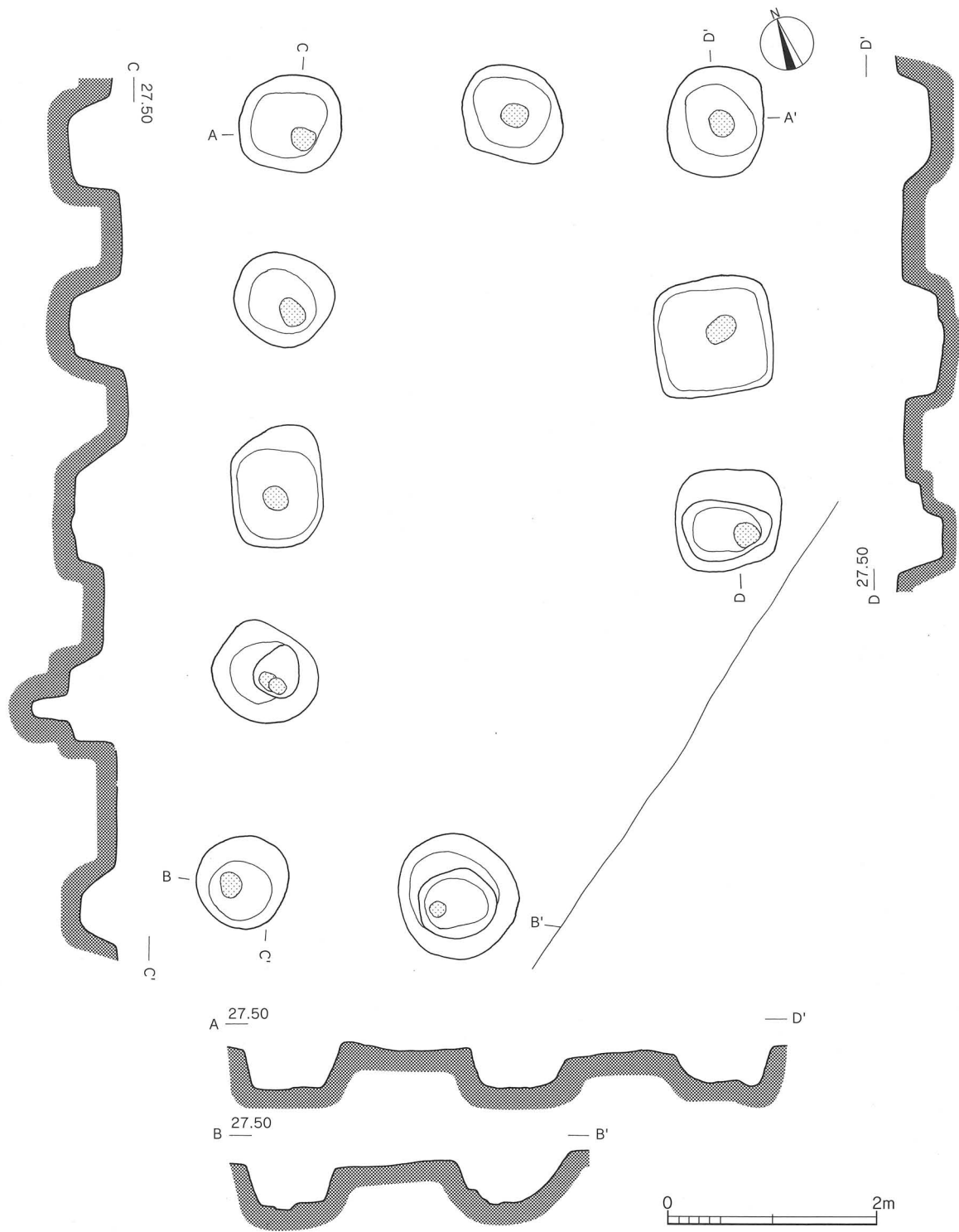
**規模** 南東コーナーが未調査であるが、柱配置は2間×4間で、桁行7.1m、梁行3.95mを測る。

**主軸方向** N-19°-Eを示す。

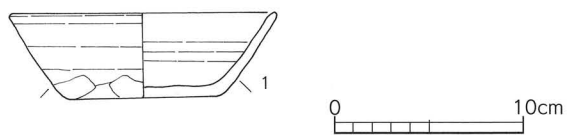
**柱跡** 10本の柱穴が検出された。いずれも径1m前後、深さは29~73cmで、40cm前後のものが主体を占める。検出されたすべてに柱根跡が残存する。北西コーナーのP1は径94×96cmの方形を呈し、深さ41cm、南東寄りに柱根跡がある。北梁行中央柱のP2は径92×108cmの不正方形を呈し、深さ33cm、ほぼ中央に柱根跡がある。北東コーナーのP3は径89×106cmの隅丸長方形を呈し、深さ29cm、ほぼ中央に柱根跡がある。西側桁行北から2本目のP4は径85×90cmの円形を呈し、深さ52cm、南東寄りに柱根跡がある。同じく3本目のP5は径86×113cmの隅丸長方形を呈し、深さ35cm、ほぼ中央に柱根跡がある。同じく4本目のP6は径90×100cmの円形を呈する二段掘りで、深さ73cm、南東寄りに柱根跡がある。南西コーナーのP7は径83×86cmの円形を呈し、深さ44cm、北西寄りに柱根跡がある。東側桁行2本目のP8は径144×144cmの方形を呈し、深さ38cm、中央北寄りに柱根跡がある。東側桁行3本目のP9は径92×100cmの方形を呈する二段掘りで、深さ38cm、南東寄りに柱根跡がある。南梁行中央柱のP10は径110×120cmの円形を呈する二段掘りで、深さ42cm、西寄りに柱根跡がある。いずれの柱穴にも裏込めには暗褐色土とローム主体土が併用されている。

**遺物** P2の覆土から須恵器坏が1点のみ出土した。1の須恵器坏の法量は口径14.1cm、器高4.5cm、底径7.8cmを測り、体部を約1/4程欠損している。ロクロ成形で、体部下端部は手持ちヘラケズリ。底部一方向のヘラケズリ。胎土に石英・長石粒を含み、焼成は良好で、灰色(10Y5/1)を呈する。

**所見** 2間×4間で、柱根跡も残存し、掘り方もしっかり穿っていることなど、当集落における特殊な位置付け可能な建物跡である。柱穴内から須恵器坏が1点のみ出土しており、9世紀中葉と推定される。



第79图 第1号掘立柱建物跡



第80图 第1号掘立柱建物跡 出土遺物

### 3. 土坑 (SK)

土坑は全部で8基検出した。形状は円形、楕円形、長方形があるが、いずれの覆土ローム粒子やロームブロックを含み、締りがいいことから畑耕作に伴うピットで、いわゆる「イモ穴」も含まれる。

#### 第1号土坑 (SK-1) (第81図、PL. 13)

**位置** 調査区中央部北西側、6F区に位置し、第14・16号住居跡を切って構築している。

**規模と平面形** 上面長軸1.13m・短軸1.05m、下面長軸0.99m・短軸0.90mの円形を呈する。確認面からの深さは23cmである。

**長軸方向** ほぼ円形であるが、東西方向に長軸をもち、主軸方向はN-72°-Wを示す。

**壁面** 垂直気味に外傾して立ち上がる。

**底面** ほぼ平坦である。

**覆土** 黒褐色土の単一層である。締りに欠け、ローム粒子・ロームブロックを多く含む。

**遺物** 遺物の出土は確認できなかった。

**所見** 性格、時期とも明確ではないが、覆土の状況から判断して近代以降の耕作に伴うピットであろう。

#### 第2号土坑 (SK-2) (第81図、PL. 24)

**位置** 調査区北東部、3C・3D区に位置する。

**規模と平面形** 上面長軸1.13m・短軸0.76m、下面長軸0.92m・短軸0.65mの楕円形を呈する。確認面からの深さは15cmである。

**長軸方向** N-25°-E。

**壁面** 外傾しながら立ち上がる。

**底面** ほぼ平坦であるが、木根跡が2ヶ所入っている。

**覆土** 黒褐色土の単一層で締りがなく、バサバサしている。

**遺物** 遺物の出土は確認できなかった。

**所見** 性格、時期とも明確ではないが、覆土の状況から判断して近代以降の畑耕作に伴うピットであろう。

#### 第3号土坑 (SK-3) (第81図、PL. 24)

**位置** 調査区北東部、3D区に位置する。

**規模と平面形** 上面長軸2.84m・短軸0.94m、下面長軸2.71m・短軸0.78mの長方形を呈する。確認面からの深さは59cmである。

**長軸方向** N-14°-E。

**壁面** 外傾しながら立ち上がる。

**底面** ほぼ平坦である。

**覆土** 黒褐色土の単一層で、締りに欠け、ロームブロックを多量に含む。

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 時期は明確ではないが、いわゆる近代以降の「イモ穴」である。

#### 第4号土坑 (SK-4) (第81図、PL. 24)

**位置** 調査区中央部、5E区に位置する。

**規模と平面形** 上面長軸0.84m・短軸0.74m、下面長軸0.61m・短軸0.46mの楕円形を呈する。確認面からの深さは10cmである。

**長軸方向** N-58°-W。

**壁面** 緩やかに外傾しながら立ち上がる。

**底面** 平坦面はなく、浅い鍋底状を呈する。

**覆土** 2層確認され、上層の1層暗褐色土はローム粒子と微量の炭化物を含む。下層の2層暗褐色土はローム粒子・ロームブロックを含む。いずれも締りに欠ける。

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 時期及び性格については明確ではなく、覆土の状況から判断して耕作に伴う近代以降のピットである。

#### 第5号土坑（SK-5）（第81図、P.L. 24）

**位置** 調査区中央部、5E区に位置する。

**規模と平面形** 上面長軸0.80m、短軸0.71m・下面長軸0.64m、短軸0.55mの楕円形を呈する。確認面からの深さは16cmである。

**長軸方向** N-30°-E。

**壁面** 緩やかに外傾しながら立ち上がる。

**底面** 平坦面は少なく、浅い鍋底状を呈する。

**覆土** 2層確認され、上層の1層黒褐色土は少量のローム粒子とロームブロックを含む。下層の2層褐色土は多量のロームブロックを含む。いずれも締りに欠ける。

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 時期及び性格については明確ではなく、覆土の状況から判断して耕作に伴う近代以降のピットである。

#### 第6号土坑（SK-6）（第59・61図、P.L. 24）

**位置** 調査区中央北東部、4D区に位置し、第21号住居跡を切って構築している。

**規模と平面形** 第21号住居跡と重複していたため、北側半分は未調査となってしまった。したがって検出できた上面長軸1.82m・短軸0.57m、下面長軸1.50m・短軸0.46mの円形を呈するものと推定できる。確認面からの深さは35cmである。

**長軸方向** 東西方向に長軸をもつものと推定してN-83°-Eを示す。

**壁面** 垂直気味に外傾して立ち上がる。

**底面** ほぼ平坦である。

**覆土** 黒褐色土の単一層で、締りがなく、僅かにローム粒子・ロームブロックを含む

**遺物** 遺物は出土していない。

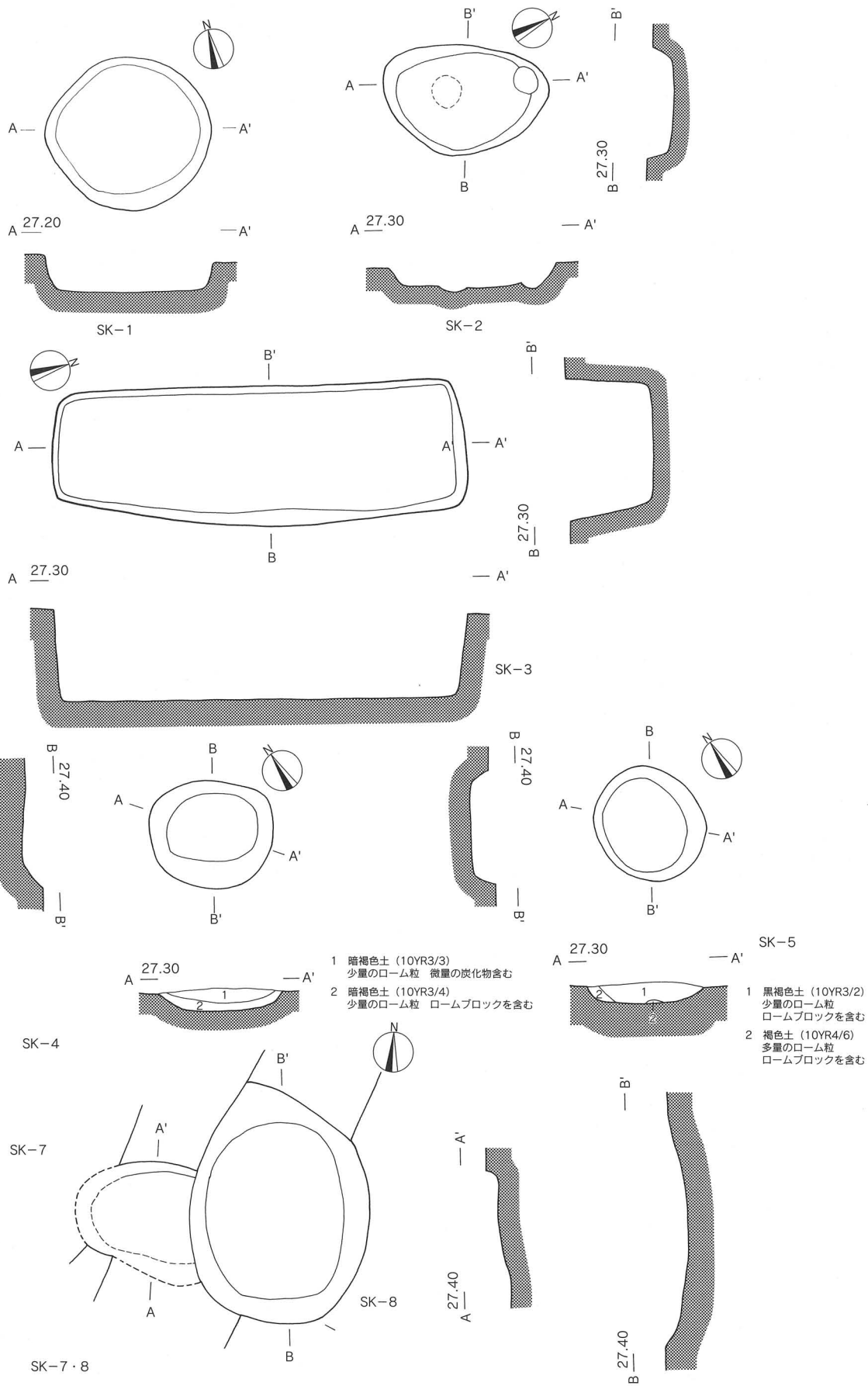
**所見** 時期及び性格については明確ではなく、覆土の状況から判断して耕作に伴う近代以降のピットである。

#### 第7号土坑（SK-7）（第81図、P.L. 24）

**位置** 調査区中央南西部、5F区に位置する。

**規模と平面形** 大半が第2・4号溝と第8号土坑によって破壊されているが、推定の規模は東西に長軸をもち、確認面における上面長軸0.78m・短軸0.78m、下面長軸0.67m・短軸0.60mの楕円形を呈する。確認





第81図 第1~5・7・8号土坑



面からの深さは14cmである。

**長軸方向** N-89° - E

**壁面** 緩く外傾しながら立ち上がる。

**底面** 検出面ではほぼ平坦である。

**覆土** 黒褐色土の単一層で、締りがなく、僅かにローム粒子を含む。

**遺物** 遺物の出土はない。

**所見** 遺物の出土はなく、大半が他の遺構と重複しているため、時期・性格については不明である。

#### 第8号土坑 (SK-8) (第81図、P L. 24)

**位置** 調査区中央南西部、5 F区に位置する。

**規模と平面形** 第7号土坑、第2号溝と第18号住居跡を切って構築している。南北に長軸をもち、確認面における上面長軸1.60m・短軸1.22m、下面長軸1.20m・短軸94mの楕円形を呈する。確認面からの深さは14cmである。

**長軸方向** N-1° - W

**壁面** 緩く外傾しながら立ち上がる。

**底面** 検出面ではほぼ平坦である。

**覆土** 黒褐色土の単一層で、締りがなく、僅かにローム粒子・ロームブロックを含む。

**遺物** 遺物の出土はない。

**所見** 他の遺構と重複からみて、最も新期の構築であるが、時期・性格については不明である。

#### 4. 溝 (SD)

調査区中央部を中心に南北および東西のほぼ主軸方位に沿った溝が検出された。いずれも古代の竪穴住居跡を切って構築し、掘削の幅は狭く、深度が浅いこと、また出土遺物が古墳時代および古代の土師器・須恵器が主体で、中・近世遺物が皆無であること、さらに区画が明瞭であることなどから近世以降の畑地境溝と判断した。

##### 第1号溝 (SD-1) (第82図、P L. 24)

**位置** 調査区の南西、6 Fから7 F・7 G区にかけて南北方向に走り、北側が調査区外に延びる。

**規模** 南縁端からはじまり調査区の北縁までの長さ6.70m、最大幅0.26m、深さ0.10mである。

**断面形** 底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

**主軸方向** N-21° - E。

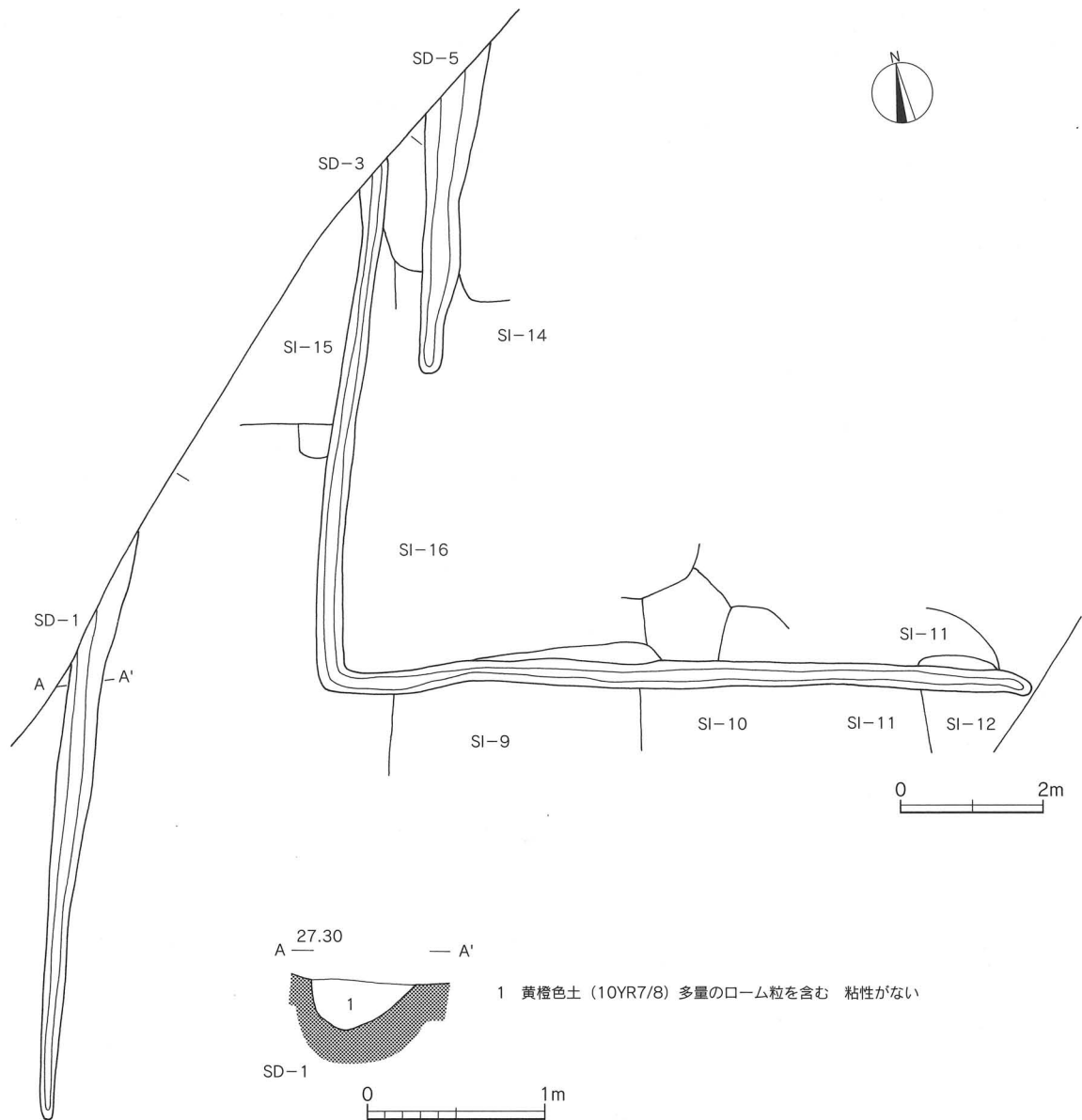
**覆土** 黄橙色土の単一層で、ローム粒子を多く含み、締りに欠ける。

**遺物** 古墳時代前期の土師器甕小破片が1点出土している。

**所見** 覆土の状況から判断して近世以降の地境溝と推定される。

##### 第2号溝 (SD-2) (第83図、P L. 24)

**位置** 調査区の中央部北西側で、5 Eから5 F区にかけて南北方向に走り、南側は第11号住居跡と重複し、さらに南側の調査区外に延びる。途中第17号住居跡、第14号住居跡、第8号土坑の一部を切って構築している。なお、西側に並行して第4号溝が走っている。



第82図 第1・3・5号溝

**規模** 北縁端からはじまり第11号住居跡の南縁までの長さ21.20m、最大幅0.75m、深さ0.08mである。

**断面形** 底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

**主軸方向** N-21° - E。

**覆土** 暗褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含み、締りに欠ける。

**遺物** 土師器および須恵器の小破片が10点出土している。小破片のため図示はしていない。

**所見** 覆土の状況から近世以降の地境溝と推定される。

第3号溝 (SD-3) (第82図、PL. 22)

**位置** 調査区の中央部南西側で、調査区北端の6 Eから6 F区まで南北方向に走り、ここから直角に東方向に曲がり6 F区まで東西に走り、さらに東側の調査区外に延びる。途中南北方向で第15号住居跡と第16

号住居跡、さらに東西方向では第9号住居跡、第10号住居跡、第11号住居跡、第12号住居跡の北側一部を切って構築している。

**規模** 調査区北縁端から直角に東に曲がるまで長さ21.20m、最大幅0.75m、深さ0.45mである。ここから調査区東縁までの長さ21.20m、最大幅0.75m、深さ0.29mで、検出面での全長は21.20mを測る。

**断面形** 底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

**主軸方向** 東西方向N-4°-E。 南北方向N-74°-W。

**覆土** 黒褐色土の単一層で、ローム粒子・ロームブロックを僅かに含み、締りに欠ける。

**遺物** 土師器坏の小破片が1点出土している。小破片のため図示はしていない。

**所見** 覆土の状況から近世以降の地境溝と推定される。

#### 第4号溝 (SD-4) (第83図、PL. 22)

**位置** 調査区の中央部北西側で、5Eから5F・6F区にかけて南北方向に走り、北側で第17号住居跡と重複し、さらに北側の調査区外に延びる。途中第7号土坑の一部を切って構築している。なお、東側に並行して第2号溝が走っている。

**規模** 南縁端からはじまり調査区北縁までの長さ14.25m、最大幅0.60m、深さ0.05mである。

**断面形** 底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

**主軸方向** N-12°-E。

**覆土** 褐色土の単一層で、ローム粒子を少量含み、締りに欠ける。

**遺物** 土師器および須恵器の小破片が9点出土している。小破片のため図示はしていない。

**所見** 覆土の状況から近世以降の地境溝と推定される。

#### 第5号溝 (SD-5) (第82図、PL. 13)

**位置** 調査区の中央部南西側で、6Eから6F区にかけて南北方向に走り、北側は第14および16号住居跡と重複し、さらに北側の調査区外に延びる。なお、西側に並行して第3号溝が走っている。

**規模** 第14・16号住居跡の北側からはじまり調査区北縁までの長さ4.00m、最大幅0.40m、深さ0.10mである。

**断面形** 底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

**主軸方向** N-21°-E。

**覆土** 黒褐色土の単一層で、ローム粒子・ロームブロックを僅かに含み、締りに欠ける。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 覆土の状況から判断して近世以降の畑地境溝と推定される。

#### 第6号溝 (SD-6) (第83図、PL. 23)

**位置** 調査区のほぼ中央、3Dから5D区にかけて東西方向に走り、さらに東及び西側の調査区外に延びる。

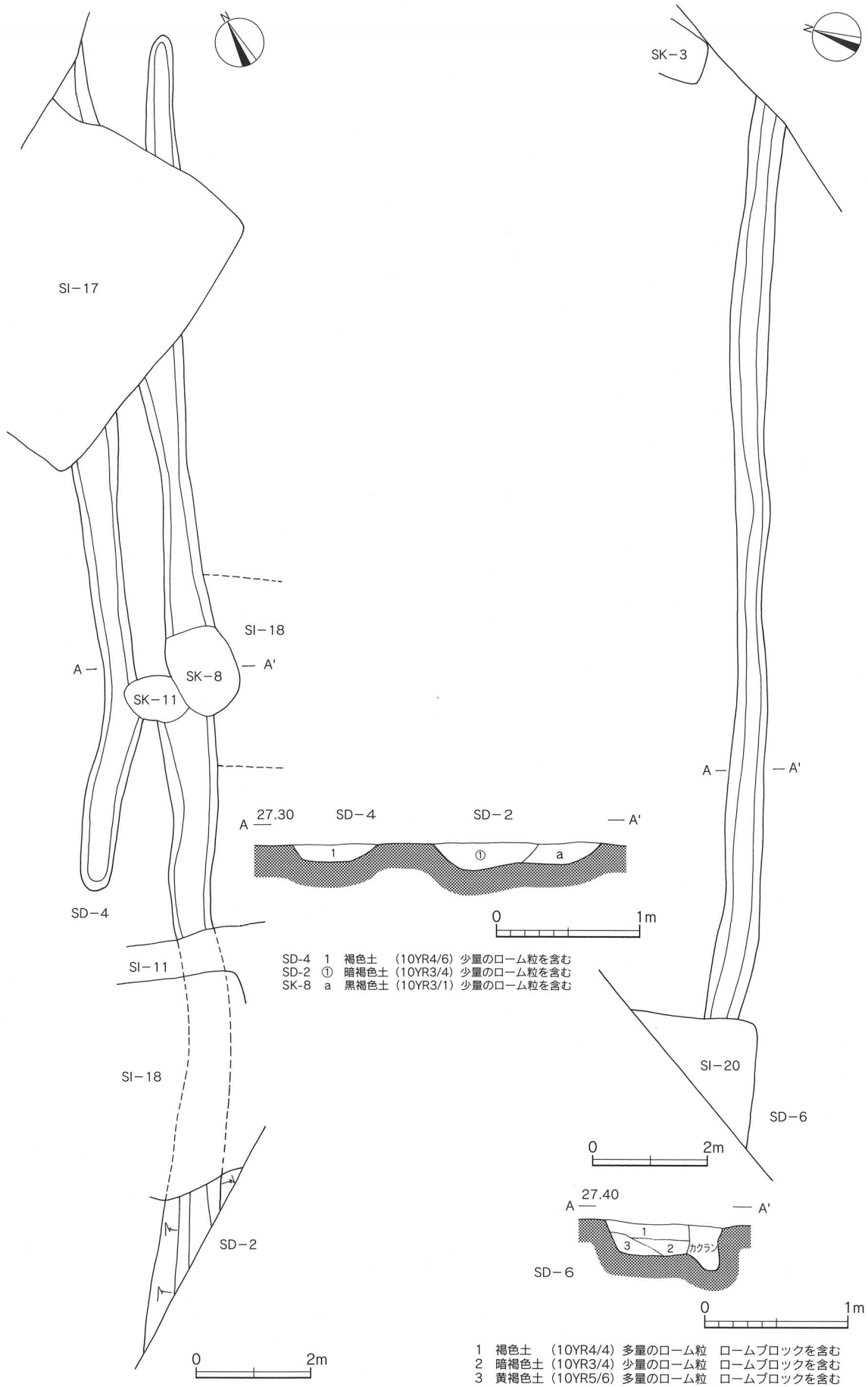
**規模** 調査区東端から西側の第20号住居跡までの長さ15.90m、最大幅0.38m、深さ0.24mである。

**断面形** 底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

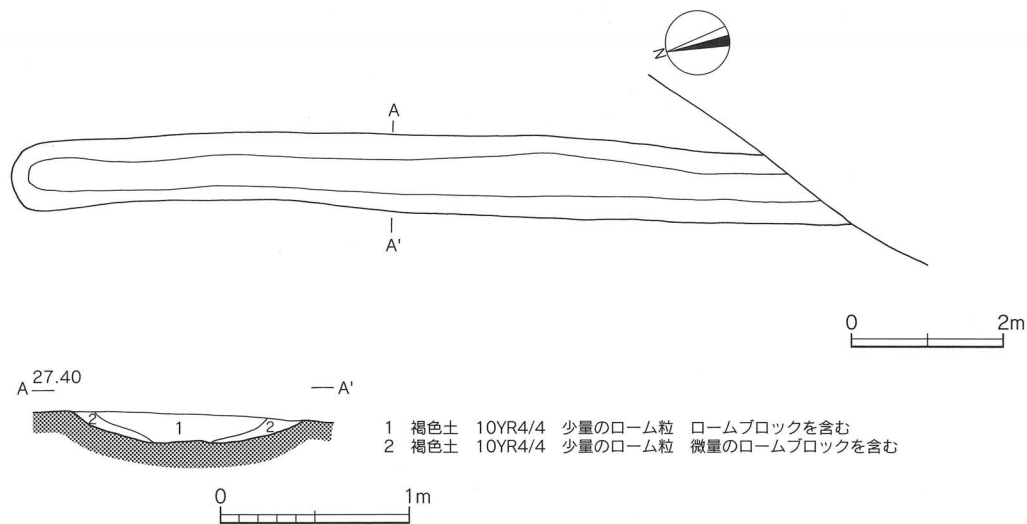
**主軸方向** N-87°-E。

**覆土** 3層確認できる。上層である1層褐色土はローム粒子・ロームブロックを多く含み、締りに欠ける。

2層暗褐色土はローム粒子・ロームブロックを少量含み、締りに欠ける。下層3層黄褐色土は多量のロー



第83図 第2・4・6号溝



第84図 第7号溝

ム粒子・ロームブロックを含み、締りに欠ける。

**遺物** 土師器および須恵器の小破片が19点出土している。小破片のため図示はしていない。

**所見** 覆土の状況から判断して近世以降の地境溝と推定される。

#### 第7号溝 (SD-7) (第84図、P L. 23)

**位置** 調査区の北東、3Cから3D区にかけて南北方向に走り、南側は調査区外に延びる。

**規模** 北縁端からはじまり調査区の南縁までの長さ10.50m、最大幅0.86m、深さ0.15mである。

**断面形** 底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

**主軸方向** N-20° - E。

**覆土** 2層確認できる。1層褐色土は少量のローム粒子・ロームブロックを含み、締りに欠ける。2層褐色土は少量のローム粒子、微量のロームブロックを含み、締りに欠ける。

**遺物** 土師器および須恵器の小破片が4点と磁器皿(19世紀代)が1点出土している。小破片のため図示はできなかった。

**所見** 覆土の状況から判断して近世以降の地境溝と推定される。

#### 5. 柱穴状遺構 (P) (第85・86図、P L. 25・26)

調査区内において、多数の柱穴状遺構(以下ピットと呼称する)が検出されている。本集落の時期に伴うような直線的で間尺のあった明確な上屋構造をもつものは、既に古代の掘立柱建物跡(SB)として記載し、取り扱ったとおりである。したがって、ここでは間尺が合わず配列構造をもたないピットを柱穴状遺構とした。大きくは調査区北東縁側1A・1B・2A・2B・2C・3B・3C区に集中するグループ(1ブロック)、調査区中央の4D・4E・5D・5E・6E・6F区に集中するグループ(2ブロック)、さらに調査区南西端の8G・8H区に集中するグループ(3ブロック)の3群が認められる。いずれも円形を呈し、径は35cm前後の小ピットであり、深さも40cm前後を測るため、建物跡以外の遺構として考える必要がある。また覆土中より古代の土師器・須恵器の小破片が出土している。

## 1 ブロック

番号	大きさ	深さ	形態	グリッド	番号	大きさ	深さ	形態	グリッド
P 1	28×40cm	56cm	楕円形	2 A 区	P 24	24×24cm	28cm	円形	3 B 区
P 2	31×36cm	50cm	円形	2 B 区	P 25	22×44cm	31cm	楕円形	3 C 区
P 3	24×30cm	39cm	円形	2 B 区	P 26	24×48cm	31cm	楕円形	3 C 区
P 4	26×30cm	38cm	円形	2 A 区	P 27	32×46cm	44cm	円形	2 C 区
P 6	35×40cm	59cm	円形	2 B 区	P 28	76×104cm	32cm	円形	2 C 区
P 16	36×66cm	24cm	楕円形	2 C 区	P 29	50×72cm	54cm	円形	2 B 区
P 17	48×70cm	51cm	楕円形	2 B 区	P 30	32×41cm	16cm	楕円形	2 B 区
P 18	26×32cm	48cm	楕円形	2 B 区					

## 2 ブロック

番号	大きさ	深さ	形態	グリッド	番号	大きさ	深さ	形態	グリッド
P 8	34×38cm	44cm	円形	6 F 区	P 15	40×46cm	33cm	円形	6 F 区
P 9	40×42cm	33cm	円形	6 F 区	P 19	34×37cm	13cm	円形	5 E 区
P 10	30×41cm	29cm	円形	6 F 区	P 20	33×40cm	50cm	円形	6 E 区
P 11	35×42cm	29cm	円形	6 F 区	P 21	18×28cm	10cm	円形	4 E 区
P 12	24×28cm	30cm	円形	6 E 区	P 22	18×47cm	10cm	円形	4 E 区
P 13	30×36cm	25cm	円形	6 E 区	P 23	32×40cm	68cm	円形	4 E 区
P 14	25×30cm	28cm	円形	5 E 区					

## 3 ブロック

番号	大きさ	深さ	形態	グリッド	番号	大きさ	深さ	形態	グリッド
P 5	38×38cm	28cm	円形	8 H 区	P 31	46×49cm	46cm	円形	7 H 区
P 7	31×34cm	20cm	円形	8 G 区					

## 6. その他の遺構 (S X)

**縦穴状遺構 (S X - 1)** (第12図、P L. 25)

**位置** 調査区南西部、7 G・7 H区に位置する。第3・4号住居跡を切って構築している。

**規模と平面形** 長軸2.16m、短軸1.94mの方形を呈する。確認面からの深さは6 cmである。

**主軸方向** N-56° -W

**壁面** 壁は僅かに外傾しながら立ち上がっている。

**底面** 平坦で、ほぼ水平である。

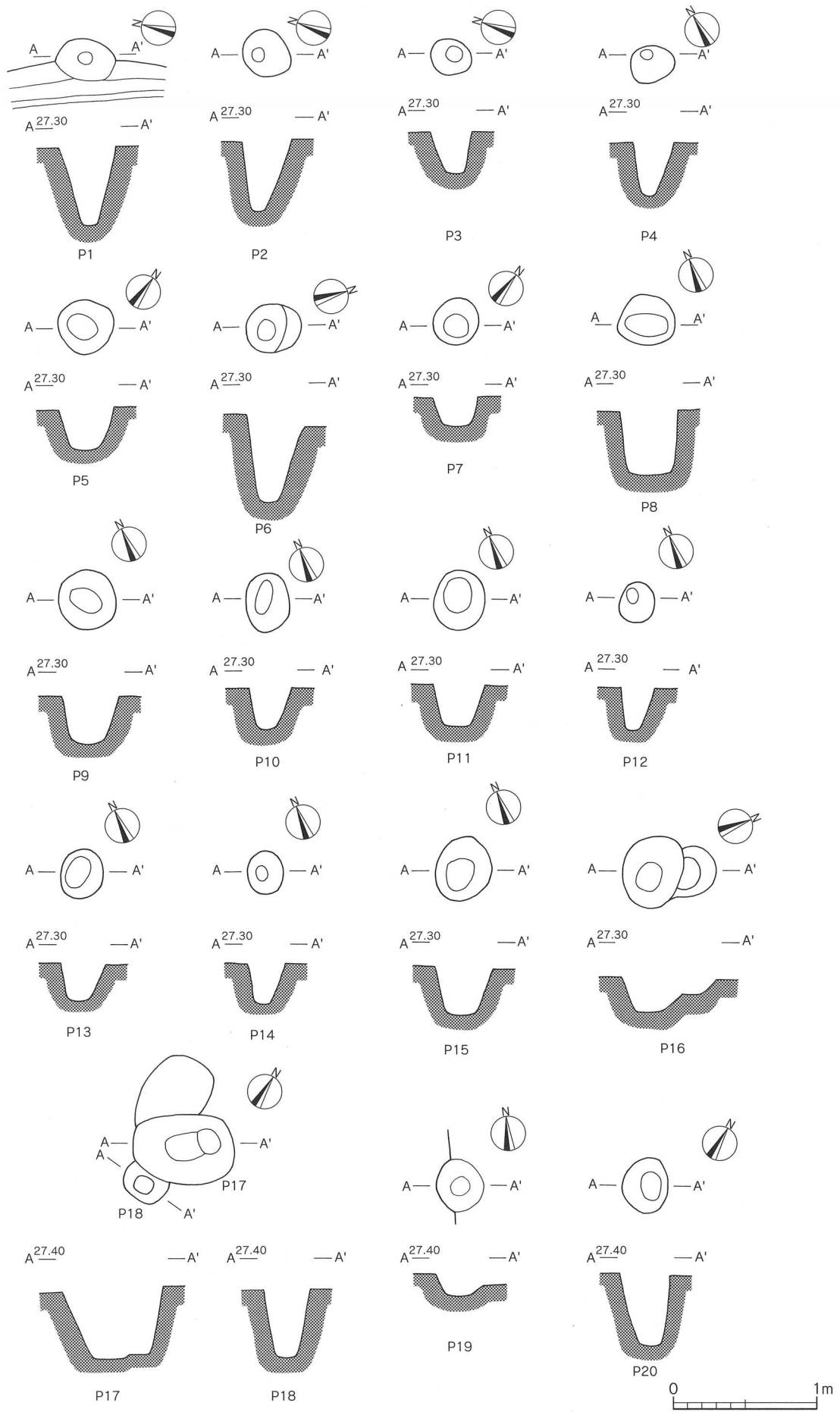
**覆土** 褐色土の単一層で、多量のローム粒子、少量のロームブロックを含み、締りに欠ける。

**遺物** 出土しなかった。

**所見** 覆土の状況から構築時期は近世以降であるが、性格については不明である。

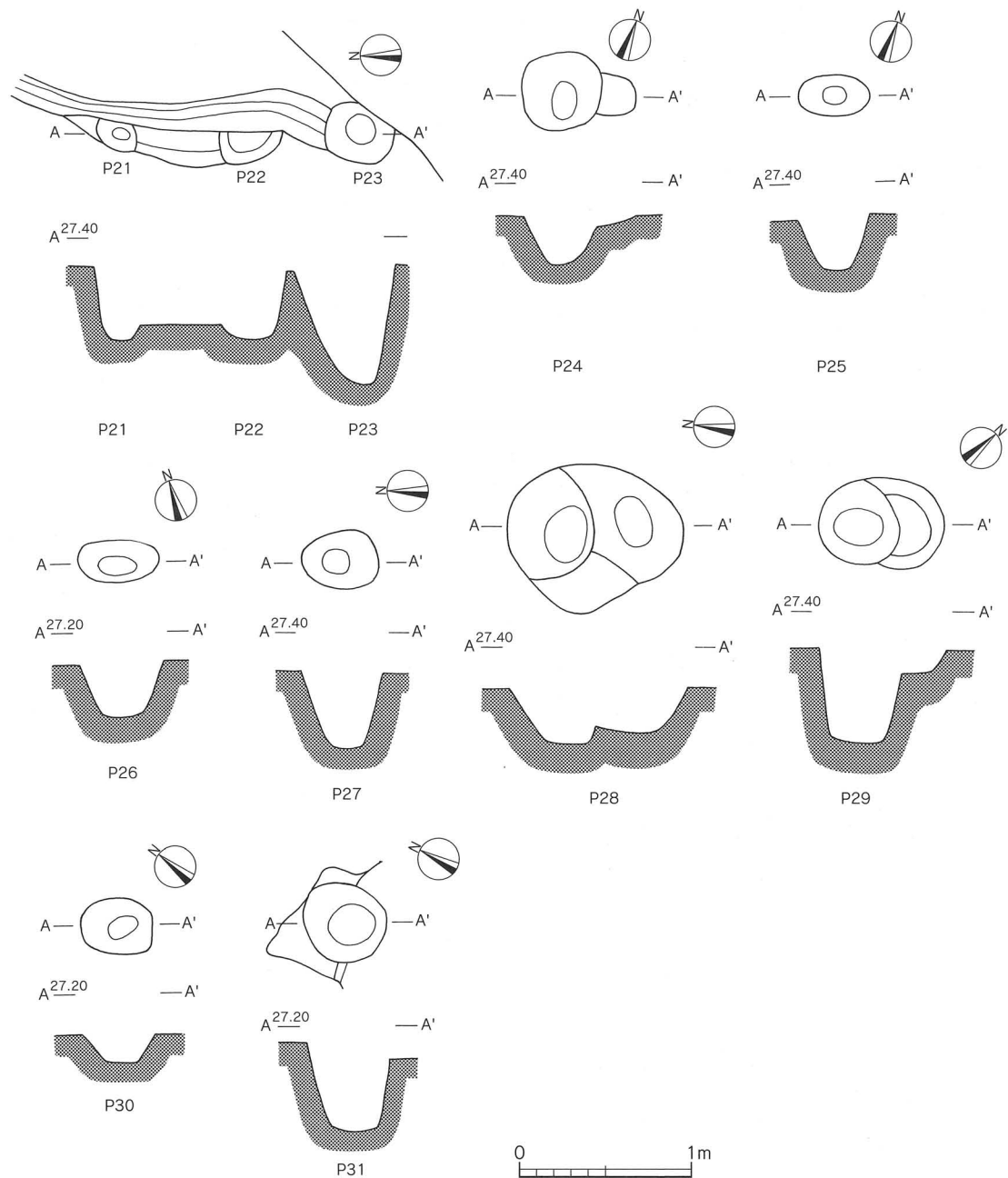
## 7. 遺構外出土の遺物

古墳時代および古代の遺構外から縄文土器と石鏃が出土した。



第85图 柱穴状遺構 (1)



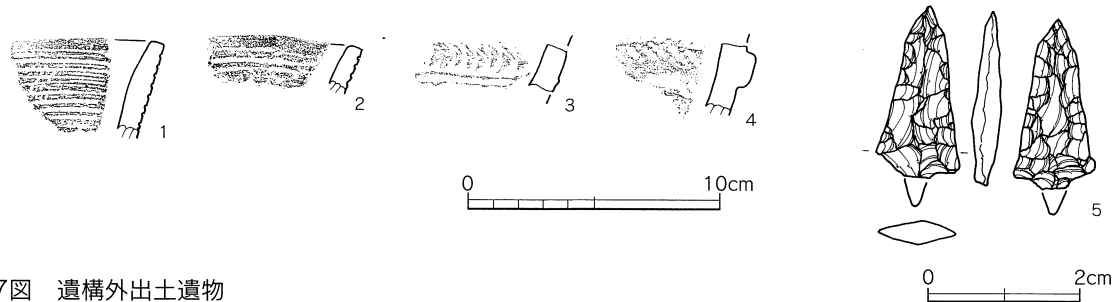


第86図 柱穴状遺構 (2)

(1) 土器 (第87図1~4、P.L. 38)

本遺跡で縄文時代早期・前期・中期の縄文土器が出土した。1・2は早期中葉・三戸式土器である。口縁部破片で、接合はしないが、胎土・焼成具合からみて同一個体の可能性がある。外面には横位の浅い条線が施され、内面は丁寧なナデ調整が加えられている。胎土に微細な石英・長石粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。

3は前期後半・浮島式である。口縁部付近の破片で、外面が横方向の連続爪形文を施す。内面は横位のヘラナデ調整で仕上げられている。胎土に微細な石英・長石粒を含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色(2.5YR5/8)を呈する。4は中期中葉・中峠式である。胴部破片で、隆帯上に単節RLを施し、隆帯下部に並行



第87図 遺構外出土遺物

して連続爪形文を施文する。胎土に雲母・石英・長石粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。

(2)石器(第87図5)

流紋岩製の有茎石鏃である。茎部は欠損している。現存する長さ2.39cm、幅1.10cm、厚さ0.34cm、重さ4.5gを測る。表裏面とも丁寧な押圧剥離が施されている。第15号住居跡覆土中より出土。

第4節 まとめ

西谷津遺跡は常名台遺跡群の北側にあたり、桜川低地からの開析谷がちょうどYの字状に延びていく最奥部に立地している。この常名台上では市内でも有数の遺跡密集地帯を形成しており、現在も調査が進行中でありその成果が大いに期待されているところである。しかし今回の調査は、他の遺跡が面的調査で遺跡構造などの全体像が十分把握できたのに対し、道路敷地内に限定され、幅広いトレンチ調査で終わったことである。これは遺跡群の構成を考えた場合、予測で流れを語ることとなり、将来の調査によっては全く異なる結果になるという危険性がある。しかし、これは考古学というひとつの学問のもつ宿命でもあり、今回より次回の成果によってその展開が変わって行くことは仕方無いことであろう。そうした意味では前回の報告書で吉澤悟氏が当台地上に展開する歴史的な消長について詳細に述べられたことは画期的といえよう。そこでここでは西谷津遺跡の発掘調査で得られた考古学的諸事実についてのみ触れまとめとし、常名台上に営まれた遺跡群の全体を見通した検討については今後の調査を含めて改めて期待したい。

今回の調査では範囲が限られていたものの、古墳時代・古代の遺構に加え、土器と石器のみであるが縄文時代のものも検出されている。まず縄文時代は早期中葉・沈線文系土器である三戸式土器が出土している。出土量は僅かであるが、発見された意義は大きい。とくに常名台上で検出されるいわゆる「陥穴」の時期決定を示唆する意味で重要であろう。また中期中葉・中峠式土器が1点であるが確認された。浅い谷部を越えた南側には当該期の集落跡が存在することから拠点集落を巡る周辺部の遺跡の在り方を検討するには格好の遺跡である。

また竪穴住居跡が29軒検出された。その内訳は古墳時代前期が9軒、後期が4軒、奈良・平安時代が12軒、不明が4軒である。これらは時期別にみても遺構の欠如する段階に幅があるが、大局的にみればある程度の継続性がある。当然今回の調査結果は集落の一部に過ぎず、居住地を若干移動させながら継続して営まれていたことは十分予測されるところである。

まず古墳時代前期と推定される住居跡は第2・3・8・11・14・18・19・20・26号住居跡であるが、報告のとおり住居跡の覆土が検出出来ないものもあり、また出土遺物も極端に限定されていることから、5世紀

まで下がる住居跡も存在するものと思われる。いずれも方形で、北側に炉址を設置する。

次は古墳時代後期と推定される住居跡は第1・6・17・24号住居跡の4軒である。第1号住居跡と第17号住居跡は一辺5.5m前後と後期の住居跡としては中型を呈しているのに対し、第6号住居跡は長軸3.7mの小型である。住居跡を殆ど検出できなかった第1号住居跡および重複の激しい第24号住居跡の2軒を除き、第6・17号住居跡は土師器坏を主体とする遺物量は豊富であった。とくに第6号住居跡は完形品の坏が多量に出土しており、口縁部下に明瞭な段を有するものと幅狭い口縁部に明瞭な稜を持たない碗形の二種が同量出土している。黒色処理が施されたものもあり、7世紀前半と推定される。一方第17号住居跡も土師器坏に二種みられるものの、明瞭な稜を有する坏の割合が少なくなり、碗形が主体となる。須恵器坏・蓋なども共存していることから7世紀後半と推定される。

奈良・平安時代に相当する住居跡は第4・5・7・9・10・12・15・21・23・25・27・28号住居跡の12軒である。いずれも方形で、確認できたカマドの設置位置は北方向であった。また規模は第21号住居跡の長軸7.83mは当該期としては大型住居跡であるが、他は4～5m前後である。なお、古代といっても時間的に幅が広いため、ここでは8世紀前半が第5・21・25号住居跡の3軒が相当し、中葉が第7・23・28号住居跡である。また9世紀前半が第12号住居跡、9世紀中葉が第4・9・10・27号住居跡および第1号掘立柱建物跡が相当するものと推定される。

また古代以後の人びとの営みは継続されていたものと思われるが、遺構としての確認はできなかった。溝あるいは土坑類は比較的新しく大半は近世以降のものとして判断した。しかし、本来西谷津遺跡は常名台遺跡群の中でも規模の大きな集落のひとつとして把握できる。今回の調査によって、その具体的な様相をわずかであるが知ることができ、今後周辺調査を行うにあたっては十分な資料を提供したものと考えている。

(小川和博・大淵淳志)

## 第5章 北西原遺跡第6次調査

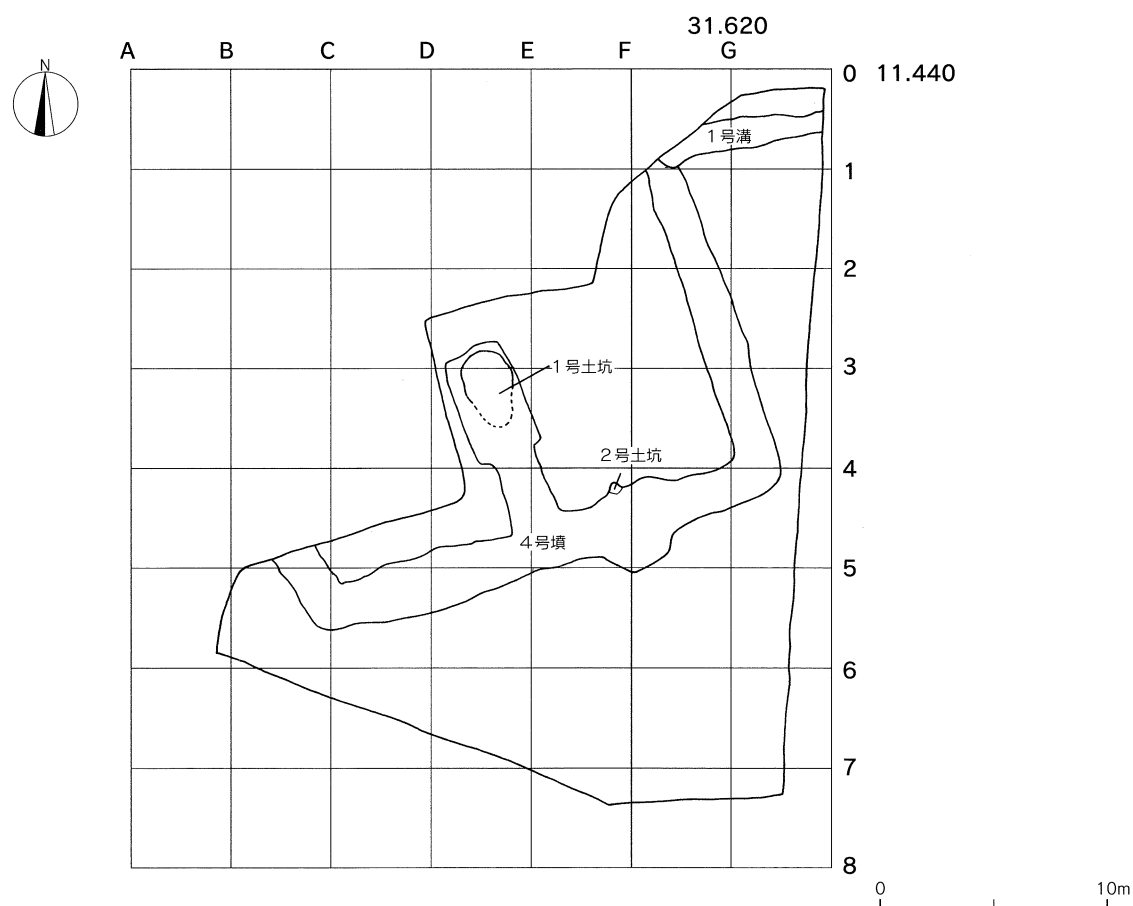
### 第1節 調査の方法

本遺跡は試掘調査の段階（トレンチ調査）で古墳の周溝と主体部が確認されたが、墳丘は確認できなかった。したがって表土を重機により遺構確認面まで掘り下げた。

本調査は遺構確認面を鋤簾がけし、プラン確認することから始まった。プラン確認の結果、古墳1基、土坑2基、溝1条が確認され、それぞれ4号墳、1号土坑、2号土坑、1号溝と名称をつけた。なお、2号土坑の調査時に発見された風倒木痕はこの限りではない。

調査区のグリッド設定にあたっては4号墳を中心に4m×4mグリッドを組み、北から0～7の整数、西からA～Gのアルファベットを振り分けた。グリッドの呼称は北西のグリッドポイントで表現することとし、例えば「A-1グリッド」などとした。ベンチマークの設定は神明遺跡の基準標高を基本とし、レベルを用いて本遺跡の調査区域外、標高27.440mの地点に設定した。

各遺構の掘削にはすべて移植ゴテを使用し、上層から一層一層掘り下げた。4号墳の主体部については主軸方向にベルトを1本設定し、それに直交するベルトを墓道も含めて4本設定し、土層観察を行った。主軸方向に関してはプラン確認の際、墓道と埋葬施設で主軸方向が若干異なった。したがって、墓道と埋葬施設



第88図 遺構全体図

の主軸ベルトをそれぞれ別々に設定した。しかし、調査途中で墓道の主軸方向が埋葬施設のそれと一致することが明らかになり、そのまま墓道から埋葬施設まで1本の主軸ベルトとして扱うこととした。埋葬施設の構築材である闕石は、単体の実測図を作成した。また、平面図・コンター図・セクション図はすべて1/20で作成した。コンターは10cm間隔で作成した。

出土遺物はトータルステーションを用いて平面座標を記録し、レベルを用いて標高を記録して取り上げた。なお、主体部の遺物に関してはふるいがけを行ったが、雲母片岩、須恵器片以外に遺物の出土はなかった。

遺構の記録写真には6×7判・35mm判カメラを使用し、それぞれモノクロームフィルム・カラーポジフィルムを用いて撮影を行った。

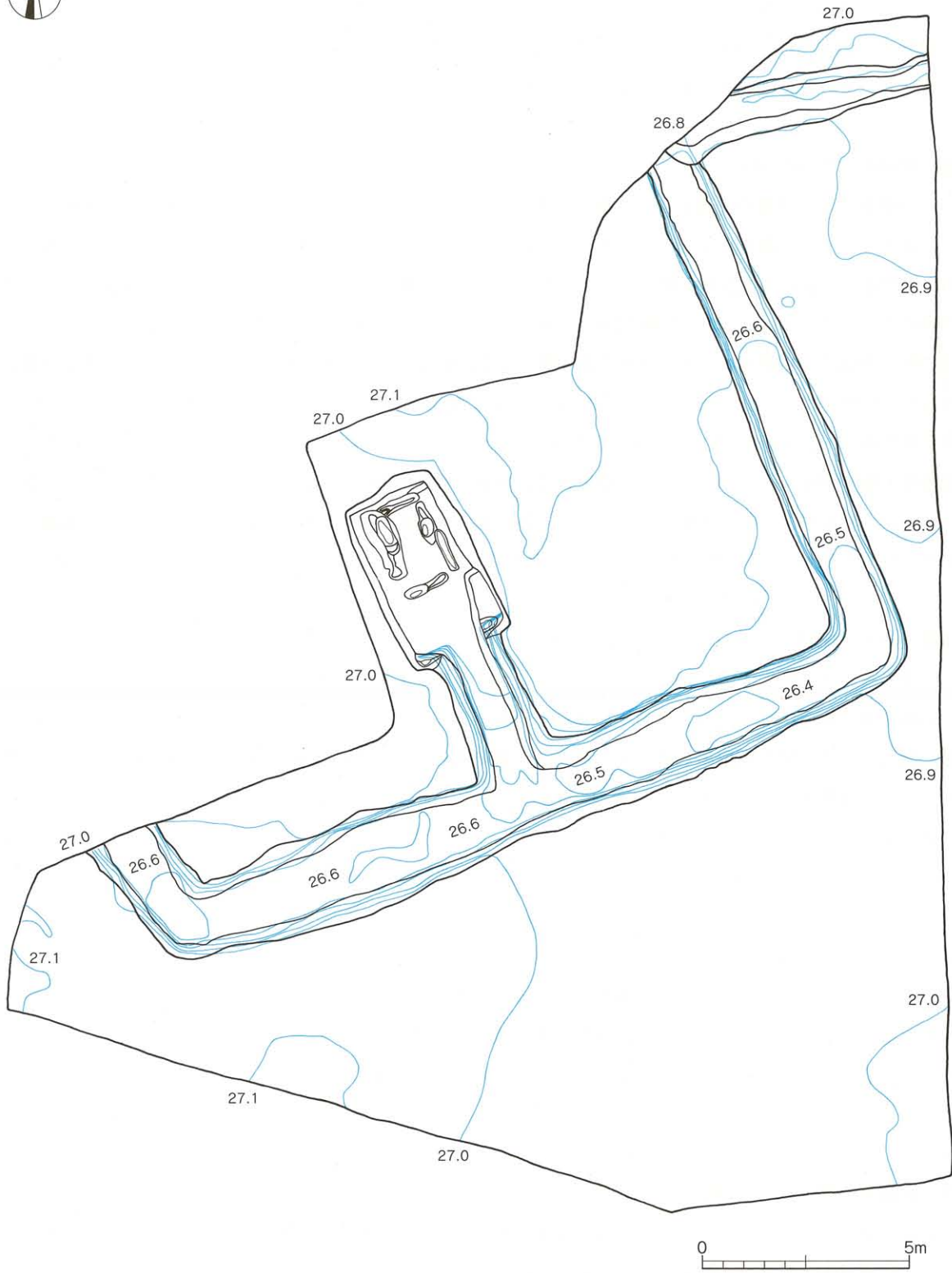
(浅間 陽)

## 第2節 調査経過

本遺跡の調査は、平成14年7月30日～同年8月24日の期間行われた。調査は作業進行とともに、古墳主体部、古墳周溝、その他の遺構に分かれて行った。

7月28日(日)	先発隊が土浦入りし、宿舎を設営
7月30日(火)	作業開始
7月31日(水)	遺構確認状況写真撮影
8月1日(木)	ベンチマーク設定 周溝にベルトを設定し、調査を開始
8月3日(土)	主体部にベルトを設定し、調査を開始
8月5日(月)	グリッド設定
8月7日(水)	1号土坑確認
8月8日(木)	遺構平面図作成開始
8月9日(金)	周溝完掘
8月12日(月)	遺構コンター図作成開始
8月14日(水)	主体部短軸ベルト、断面図作成
8月17日(土)	主体部長軸ベルト、断面図作成
8月19日(月)	雨のため、午前中で作業中止
8月20日(火)	主体部裏込め確認状況の古墳全景写真撮影
8月24日(土)	主体部完掘 古墳完掘状況写真撮影 全遺構図面作成終了 全ての調査終了
8月25日(日)	撤収作業

(駒形 友也)



第89図 遺構平面図・コンター図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1. 4号墳（第89・94図）

4号墳は、ほぼ南北に主軸をもつ方墳で、東西18.60mの周溝を有す。南北の全長については、確認することはできない。埋葬施設は中央南側に位置する。名称については、玄室と羨道を含めた部分を埋葬施設とした。

#### 周溝（第94図、PL.40・41）

今回の調査では、周溝の北側および西側が調査区域外であったため、周溝の東側と南側および南西部コーナーの調査となった。調査区域内は、周溝の確認面が北西から南東方向に緩く傾斜している。周溝は、調査区域外に延びることから、墳丘を全周していると考えられる。周溝の全長は東西18.60m、南北は調査区域外のため計測することはできなかった。上幅は1.66～2.08m、下幅は1.10～1.32mで、墓道入口付近で最も広くなる。深さは0.38～0.64mで、南東部コーナー付近で最も深くなる。断面形はほぼ逆台形状であり、周溝の外側は内側よりも緩やかな傾斜で立ち上がる。周溝内の基本的な堆積土層は、V・VI・VIII・Xの4層に分かれる。III・IV・IX層は周溝土層断面(E-E')のみにみられる層、VII層は主体部から延びる長軸土層断面(B-B')のみにみられる層、XI層は周溝土層断面(C-C')のみにみられる層である。X層は墳丘が残っていないため、土を比較することができなかったが、墳丘側から厚く堆積しているため、墳丘側からの流れ込みと考えられる。したがって、周溝にはまず墳丘の土と考えられるX層が流れ込んだ後、自然に堆積していったと考えられる。（小堀幸子）

#### 主体部（第90・91図、PL.41～44）

4号墳の主体部は、周溝南辺の中央から北に位置し、主軸をN-24°-Wにとる横穴式石室である。石室はローム層を羽子板状に掘り込み、その中に構築されたものである。後世の削平により上部構造は明確ではないが、周辺にある同時代同型の石室から判断すると地下式の石室であると考えられる。埋葬施設は玄室・羨道からなる単室構造である。羨道の前方には墓道があり、周溝につながる。

主体部掘り方の規模は、北辺上端2.36m、下端2.00m、東辺上端4.00m、下端3.81m、西辺上端4.20m、下端4.00m、南辺上端2.60m、下端0.84m、確認面からの深さは北辺付近0.92m、南辺付近0.90mを測る。埋葬施設は玄室中央に礫が残存しており、玄室の床面は礫床であったことが確認できる。後世に盗掘を受けており、奥壁・側壁・袖石を構築していた石材、人骨も発見できなかった。玄室前方部には加工痕のある闕石とその下部に闕石の支えとなっていた板石を確認した。また、奥壁・側壁を据えたと思われる溝があり、溝の形状から板石を使用したと考えられる。各溝の外側には裏込めを確認した。石材及び石片は筑波山系の雲母片岩である。羨道からは礫床、構築石などは出土していない。羨道側壁の裏込めは、後世の攪乱によって明確にできなかった。

#### 玄室（第92・93図、PL.41～43）

玄室より発見された各溝から、玄室の規模は奥壁幅1.10m、闕石付近での幅は1.20m、側壁の長さは東側壁1.84m、西側壁2.00mを測る。各溝の掘り方は、奥壁は直線であり、東側壁は2本の溝が一線につながるように現れている。西側壁は直線状になっているが、東側壁の溝より短く、両端において若干深く掘り込んでいる。各溝の並び方や若干窪んだ位置より各壁の板石の使用枚数が推測でき、奥壁1枚、東西側壁2枚ずつとなる。各溝は抜き取り行為により、側壁沿いの礫床が除去されたため、側壁に沿い玄室中央に向けて広がったとみら

れる。袖石を据えたとみられる溝は確認できなかったが、闕石の加工部分から存在したと考えられる。闕石から玄門の存在を考えられることができるが、玄門を構築した石材は出土していない。床面は礫床であり、その下層にある44層は暗褐色の土であり、玄室の長軸土層断面(A-A')に確認できる。掘り方に現れた土の色と異なることから、玄室は掘り方底面に整地土を敷いて礫を据えたと考えられる。玄室側壁の裏込めは玄室中央の短軸土層断面(C-C')から、全層において褐色系の土である。裏込めの66層・69層・70層は白色粘土ブロックを含んでいる。これは側壁を支えるための補強材として用いたと考えられる。また袖石の裏込めも玄室前方部の短軸土層断面(D-D')に確認できる。この裏込めは、玄室中央を切る短軸土層断面(C-C')と同様に褐色系の土で構成されており、55層、59層に白色粘土ブロックが含まれている。玄室前方部の短軸土層断面(D-D')から羨道側へ、西側のみ同じような堆積が続いており、袖石は羨道側からも裏込めによって支えられていることが確認できる。東側も袖石に関しては同様のことが確認できる。玄室に関わる短軸土層断面(C-C'・D-D')から裏込めの特徴は、ローム層の土にほぼ類似している点、ロームブロック・粒子を含んでいる点、下層部に白色粘土を含むことからしっかりとした造りである。裏込めの全体的な土色から、使用された土は石室掘り方の廃土であるロームの可能性が考えられる。

玄室前方で確認された闕石の構造を述べる。闕石は羨道と玄室の境に位置し、境界を表している。闕石の下には基礎となっている石片を多く含んだ43層があり、その玄室側に支えとなる板石を立たせて据えている。43層直上と支えとなる板石の直上には白色粘土が41層として存在し、その上に闕石を据えるという構造になっている。闕石は、長方形に近い板石の玄室側の両角を内側へほぼ直角に打ち削り取られており、この部分に袖石が組み合わせられたと考えられる。闕石は羨道側の長辺88cm、玄室側の長辺59cm、短辺40cm、最大厚11cmであり平面形は凸形をしている。裏面は玄室側の長辺と側辺の縁を面的に打ち欠かれており、中央は二段の形状になっている。加工痕は明確ではないため加工道具の特定はできない。

#### 羨道（第90図、PL.41～43）

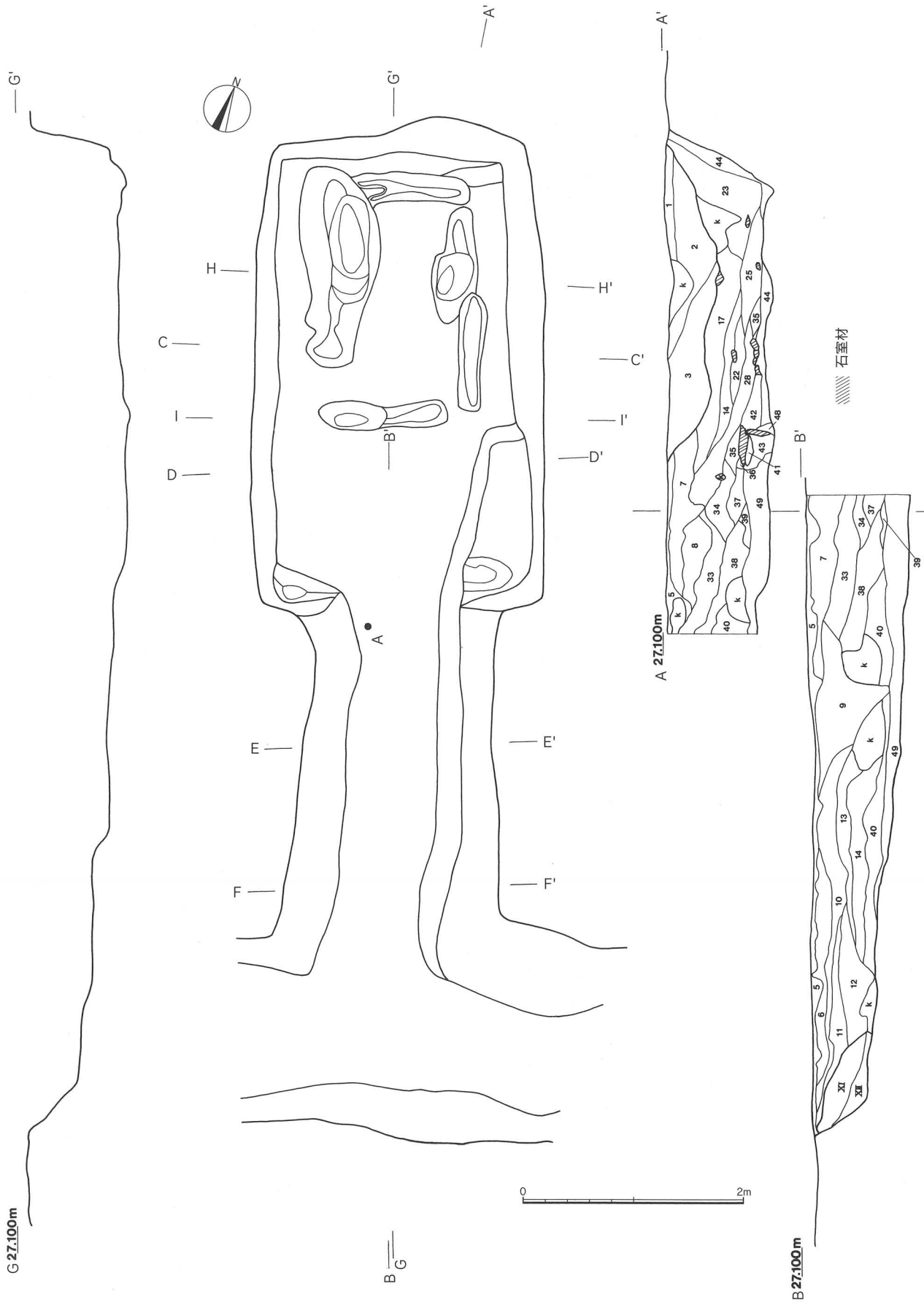
羨道と判断した部分の規模は、主体部の確認状況(第90図)から長軸1.50mを測る。幅は玄室入口付近0.60m、羨道入口付近0.80m、確認面からの深さは闕石付近0.70m、羨道入口付近0.72mを測る。

主体部を確認した段階では、羨道には裏込めと考えられる堆積土が闕石の西側に残存していた。一部は袖石の裏込めであると考えられるが、若干南側に続いていることが確認できた。しかし、後世の攪乱と切り合っているため詳細は明らかではない。後に述べる板石と側壁の関係から、この堆積土は西辺に沿って羨道の南東の角まで続いていたと考えられる。東側は裏込めの存在が袖石部分については確認できる。しかし、羨道部分では後世の攪乱と切り合っているため、明確にすることはできなかった。東側壁付近に径0.25cmほどの窪みが2か所みられ、0.30mの間隔で主軸と平行に並んでいることが確認できた。主体部の掘り方確認面で西側には特に記述することはないが、東側には掘り残しとみられるローム層の高まりが確認された。この高まりが意図して残されたものであるかは不明である。

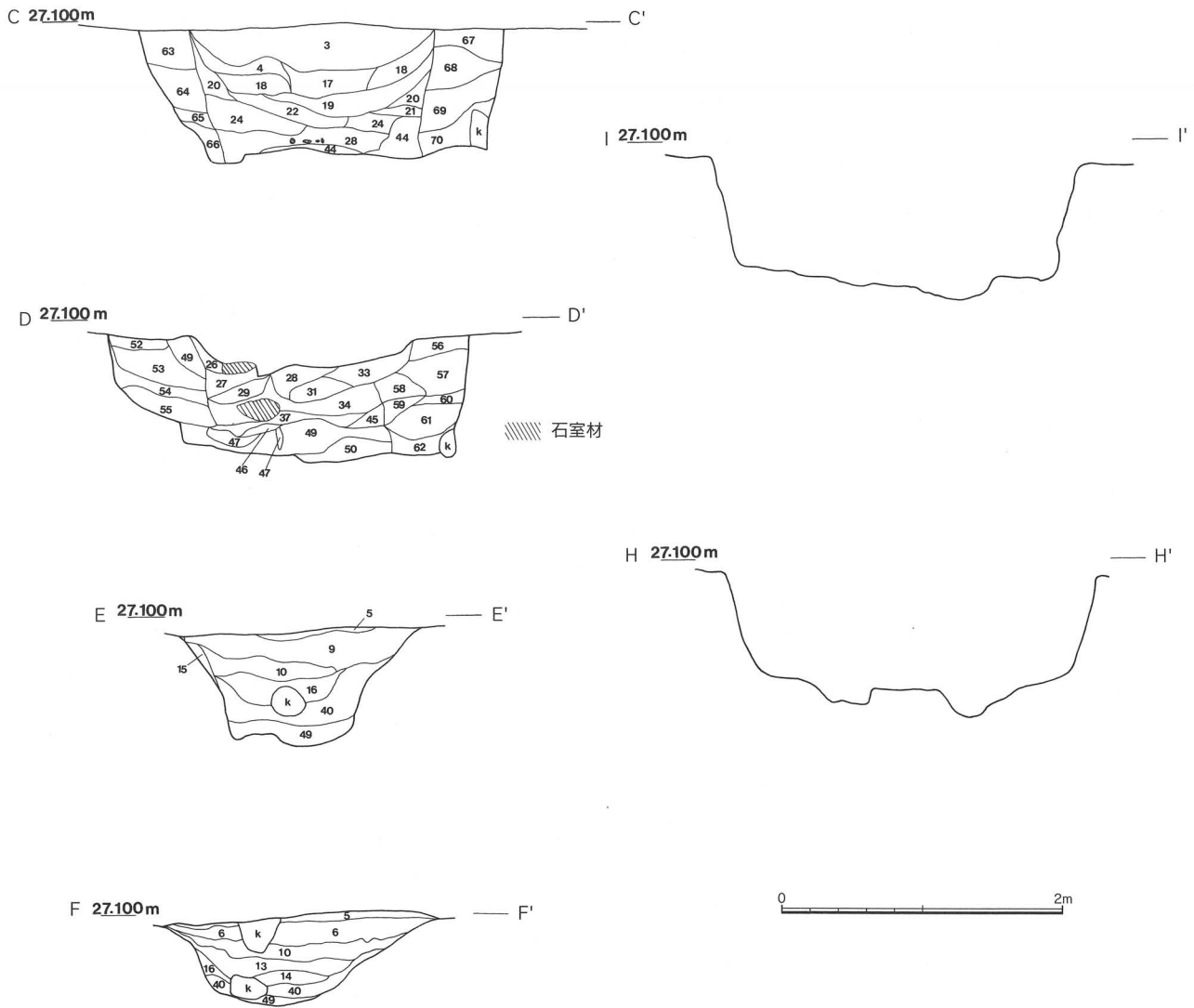
以上のように羨道の東西辺側における構造の違いを述べた。この確認状況から羨道の側壁の様相を推測することができ、羨道西側の裏込めの存在は側壁に板石を使用していたことを窺わせる。2ヶ所の窪みについては、板石を据えた際にできたと推測できる。掘り方確認面の東側の高まりについては、側壁構築部分の一部であるという見解に留めておく。

羨道における底面の整地土は49層である。49層は褐色であり白色粘土、雲母片岩、ロームブロックを含み、締まりのある堆積となっており、掘り方を整地するためであると考えられる。また、49層によって羨道は玄室よりも19cmほど高い位置に構築されており、羨道と玄室の構造の特徴を表現している。





第90图 4号墳主体部実測図(1)



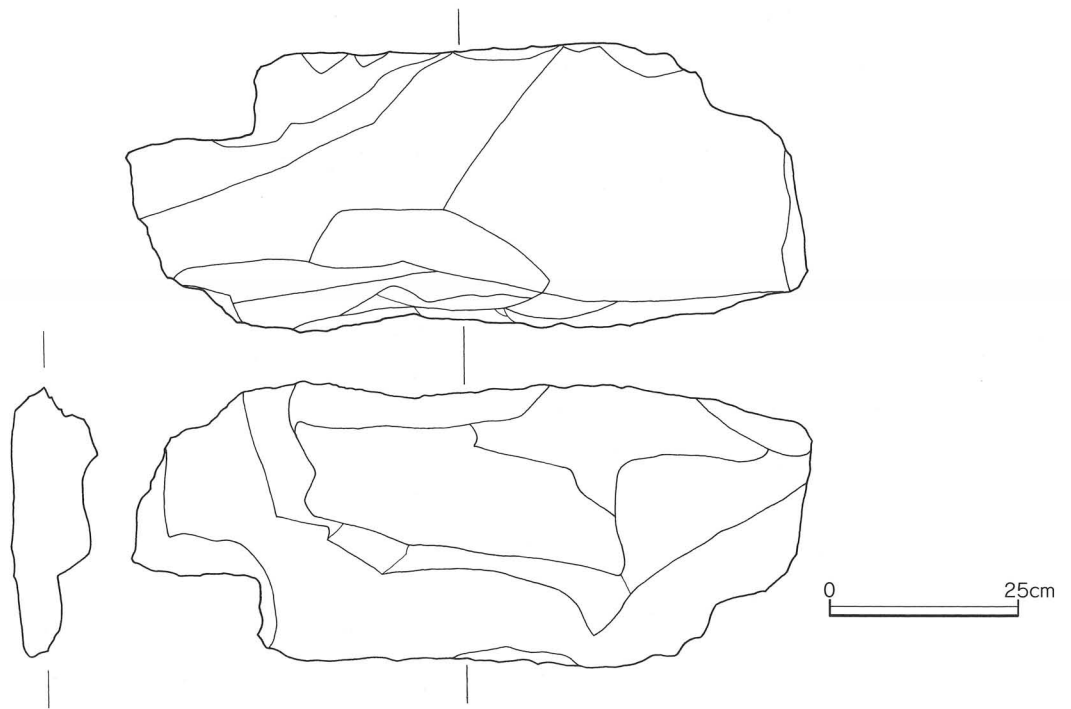
第91図 4号墳主体部実測図(2)

層位	色調	粘性	締まり	備考
1	褐色(7.5YR4/6)	普通	弱い	なし
2	褐色(7.5YR4/4)	普通	やや弱い	1mm以下のローム粒(10YR4/4)を3%含む
3	黄褐色(10YR5/6)	普通	普通	1mm以下のローム粒(10YR4/4)を20%含む
4	暗褐色(10YR3/4)	やや強い	普通	1~2mm以下のローム粒(10YR4/4)を20%含む
5	褐色(7.5YR4/4)	やや強い	普通	なし
6	明褐色(7.5YR5/6)	やや強い	普通	1mm以下の暗褐色土粒子(7.5YR3/4)を5%含む
7	黒褐色(7.5YR3/2)	普通	普通	なし
8	明褐色(7.5YR5/6)	やや弱い	やや弱い	1mm以下の白色粘土粒子(5YR8/1)を10%含む
9	黒褐色(7.5YR3/2)	普通	やや弱い	1~2mm以下のローム粒(10YR4/4)を7%含む
10	極暗褐色(7.5YR2/3)	普通	やや弱い	なし
11	明褐色(7.5YR5/6)	やや弱い	やや弱い	なし
12	黒色(7.5YR2/1)	やや弱い	普通	なし
13	明褐色(7.5YR5/6)	やや弱い	普通	1mm以下の黒褐色土粒子(7.5YR3/4)を5%含む
14	褐色(7.5YR4/4)	やや弱い	やや強い	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を3%含む
15	褐色(10YR4/4)	やや強い	普通	1~2mm以下のローム粒(10YR4/4)を7%含む
16	褐色(10YR4/4)	やや強い	やや強い	なし

層位	色調	粘性	締まり	備考
17	黒褐色(10YR2/2)	普通	やや弱い	1~2mmのローム粒子(10YR4/4)を3%含む
18	暗褐色(10YR3/4)	やや強い	やや強い	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を30%、1~2mmの白色粘土粒子(5YR8/1)を2%含む
19	暗褐色(10YR3/3)	やや強い	普通	1~2mmのローム粒子(10YR4/4)を15%、5~10mmの黒色土ブロック(10YR2/3)を2%含む
20	褐色(10YR4/6)	普通	普通	1~2mmのローム粒子(10YR4/4)を30%、1~2mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)を3%含む
21	暗褐色(10YR3/4)	普通	普通	1~2mmの黒色土ブロック(10YR2/3)を15%、1~2mmのローム粒子(10YR4/4)を10%含む
22	暗褐色(10YR3/4)	普通	やや弱い	1~2mmのローム粒子(10YR4/4)を10%、1~2mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)20%含む
23	明褐色(7.5YR5/8)	やや弱い	やや弱い	なし
24	褐色(10YR4/4)	やや強い	やや強い	1~2mmのローム粒子(10YR4/4)を30%、1~10mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)を7%含む
25	明黄褐色(10YR6/8)	普通	やや弱い	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を3%、1mm以下の白色粘土粒子(5YR8/1)を3%含む
26	黒褐色(7.5YR3/2)	やや弱い	やや弱い	1~3mmの白色粘土粒子(5YR8/1)を1%、1mm以下の白色粘土粒子(5YR8/1)を1%含む
27	褐色(10YR4/6)	やや強い	やや弱い	10~30mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)を1%、1~5mmのロームブロック(10YR4/4)を5%含む
28	褐色(10YR4/6)	普通	やや弱い	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を10%含む
29	黒褐色(10YR2/3)	やや弱い	普通	1~30mmのロームブロック(10YR4/4)を3%含む
30	明赤褐色(5YR3/2)	普通	やや弱い	2~20mmのロームブロック(10YR4/4)を1%、1mm以下の白色粘土粒子(5YR8/1)を1%含む
31	黒褐色(7.5YR3/2)	やや弱い	普通	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を3%含む
32	黄褐色(10YR5/6)	やや強い	やや強い	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を30%含む
33	黒褐色(7.5YR3/1)	やや弱い	やや強い	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を3%含む
34	黒褐色(7.5YR3/1)	普通	普通	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を3%、5~50mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)を15%含む
35	黄褐色(10YR5/6)	普通	やや強い	1mm以下の白色粘土粒子(5YR8/1)を15%含む
36	褐色(7.5YR4/4)	やや強い	強い	5~30mm以下の白色粘土粒子(5YR8/1)を15%含む
37	暗褐色(7.5YR3/3)	普通	普通	1mm以下の白色粘土粒子(5YR8/1)を3%含む
38	暗褐色(7.5YR3/3)	強い	やや強い	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を3%、1mm以下の白色粘土粒子(5YR8/1)を3%含む
39	褐色(7.5YR4/4)	普通	やや強い	1mm以下の白色粘土粒子(5YR8/1)を10%含む
40	赤褐色(5YR4/6)	普通	やや強い	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を1%含む
41	灰白色(5YR8/1)	やや強い	強い	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を25%、2~10mmの雲母片岩を10%含む
42	暗褐色(10YR3/4)	普通	やや強い	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を3%、1~30mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)を10%含む
43	褐色(10YR4/6)	強い	やや強い	5~10mmのロームブロック(10YR4/4)を5%、3~50mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)を15%、2~10mmの雲母片岩を10%含む
44	暗褐色(10YR3/3)	やや強い	普通	なし
45	褐色(7.5YR4/4)	やや強い	やや強い	2~30mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)を5%含む
46	褐色(10YR4/6)	やや強い	やや強い	20~40mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)を5%含む
47	黒褐色(7.5YR3/2)	やや弱い	やや強い	1mm以下のローム粒子(10Y R 4/4)を1%含む
48	暗褐色(10YR3/3)	強い	やや強い	1mm以下のローム粒子(10YR4/4)を3%、1~50mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)を20%含む
49	褐色(10YR4/6)	普通	やや強い	5~10mmのロームブロック(10YR4/4)を5%、3~10mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)を2%、2~9mmの雲母片岩を2%含む
50	褐色(10YR4/6)	やや弱い	やや強い	なし
51	黒褐色(10YR2/3)	やや弱い	やや強い	1mm以下のローム粒子(10Y R 4/4)を7%含む
52	暗褐色(7.5YR5/8)	やや弱い	普通	1mm以下のローム粒子(10Y R 4/4)を5%含む
53	褐色(7.5YR4/6)	やや弱い	やや強い	2~20mmのロームブロック(10Y R 4/4)を10%含む
54	橙色(7.5YR6/8)	やや強い	やや強い	1mm以下のローム粒子(10Y R 4/4)を3%含む
55	明褐色(7.5YR5/8)	やや強い	やや強い	2~50mmの白色粘土ブロック(5Y R 8/1)を3%含む
56	褐色(7.5YR4/4)	普通	やや弱い	1mm以下のローム粒子(10Y R 4/4)を1%含む
57	褐色(10YR4/6)	やや弱い	やや弱い	1mm以下のローム粒子(10Y R 4/4)を1%含む
58	黒褐色(10YR2/2)	普通	普通	1mm以下のローム粒子(10Y R 4/4)を1%含む
59	褐色(10YR4/6)	強い	強い	2~50mmの白色粘土ブロック(5Y R 8/1)を5%含む
60	褐色(7.5YR4/4)	普通	やや強い	1mm以下のローム粒子(10Y R 4/4)を3%含む
61	明褐色(7.5YR5/6)	やや強い	やや強い	なし
62	褐色(10YR4/6)	やや弱い	やや強い	なし
63	褐色(10YR4/6)	やや強い	普通	なし
64	褐色(10YR4/6)	強い	やや強い	なし
65	暗褐色(10YR3/4)	やや強い	普通	なし
66	褐色(7.5YR4/6)	やや強い	普通	5~10mmの白色粘土ブロック(5Y R 8/1)を50%含む
67	褐色(10YR4/6)	普通	普通	1~2mmの黒褐色土ブロック(10Y R 2/3)を10%含む
68	褐色(10YR4/6)	強い	やや強い	なし
69	暗褐色(10YR3/4)	やや強い	普通	1~2mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)を5%、1~2mmの黒褐色土ブロック(10YR2/3)を10%含む
70	褐色(7.5YR4/6)	やや強い	やや強い	1~2mmの白色粘土ブロック(5YR8/1)を5%含む



第92図 玄室及び羨道実測図



第93図 闕石実測図

## 盗掘（第90・91図）

埋葬施設の盗掘について述べる。主体部から延びる長軸土層断面(B-B')には玄室入口における盗掘に関わる層(38層・39層)があり、これらの層は玄室前方の石材を抜き取った際、構築材と考えられる白色粘土を有している。39層は白色粘土の含有率が38層より高いため、玄室前方の石材を抜き取った際に堆積したとみられる。玄室中央の短軸土層断面(C-C')では、東側の底面に側壁の溝が確認でき、その溝に28層が入り込んでいる。よって28層が堆積する以前に東側壁の板石を抜き取ったと考えることができる。玄室入口の盗掘と東側壁の盗掘は、玄室の長軸土層断面の28層と37層の層位的な関係から時間差があるとみられ、玄室入口が先に盗掘されたと考えられる。奥壁および西側壁の抜き取りについては確認できなかった。盗掘の絶対年代については示すことはできない。しかし、玄室上層に確認できる1号土坑が出土遺物より15世紀後半頃の遺構とされており、1号土坑の土層断面(A-A'・C-C')には石材を抜き取った痕跡が見当たらないため、盗掘の時代は古墳構築後から1号土坑成立以前の時代にあたる。

(林 紘太郎)

## 墓道（第90・91図、PL. 41・44）

墓道の全長は羨道入口から周溝入口で340m、幅は上端約1.43m～1.67m、下端0.72m～0.78mを測り、断面形はやや開いたU字形を呈している。墓道の深さは確認面から、最も浅い周溝付近で0.58m、最も深い玄室付近で0.98mと、墓道は周溝から玄室に向かって次第に深くなっていることがわかる。

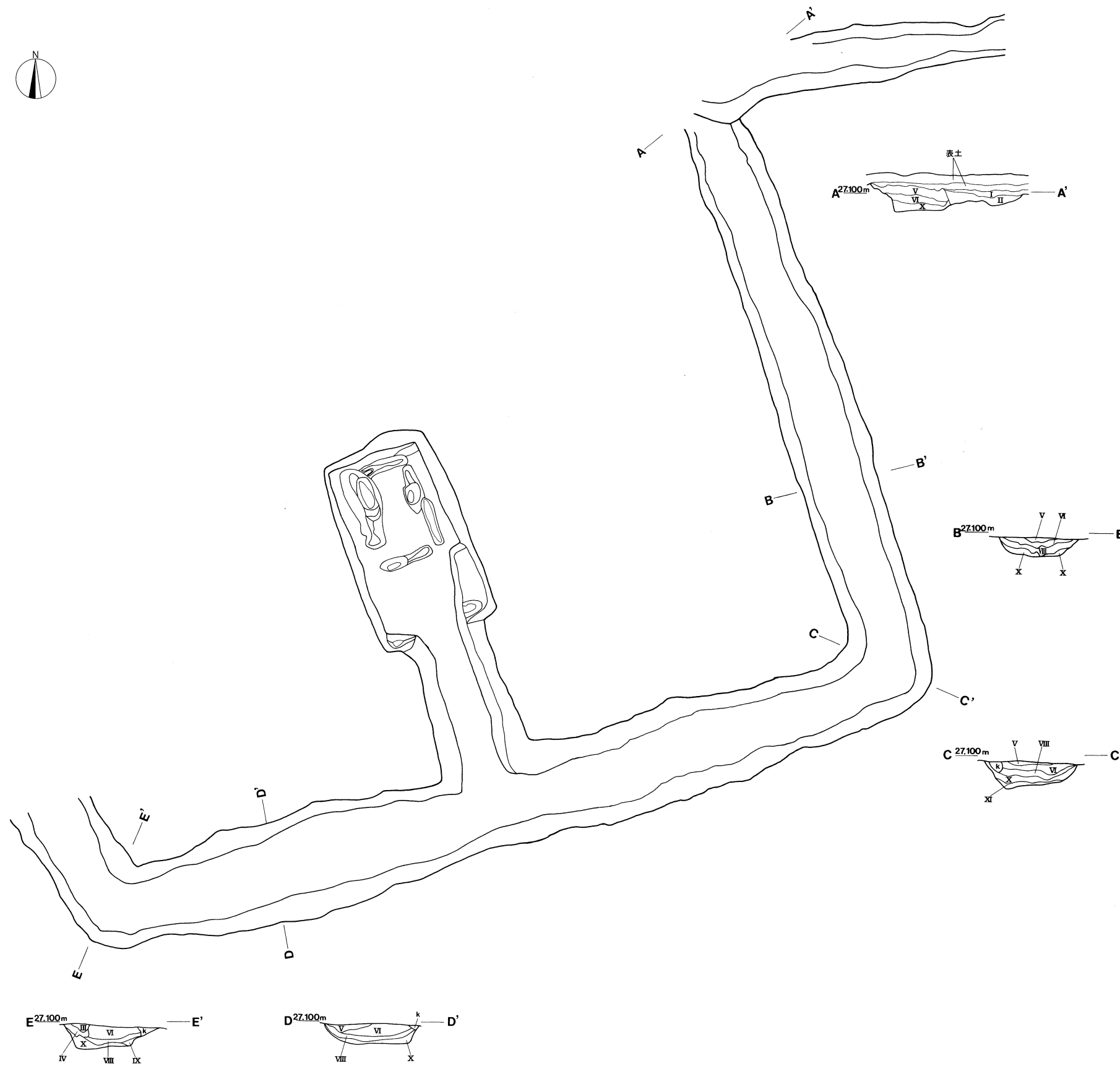
墓道の堆積については、後世の掘り込みが堆積層の大半を占めている。本来の堆積は最下層にあたる40層・49層のみと考えられる。この40層・49層のうち、49層は闕石を支えている層の下部に入り込むように堆積し、標高も闕石と同じ位置にあることから墓道底面としての人為的な堆積であると判断できる。40層は、周溝堆積土のX層と類似しており、墳丘からの流れ込みによる自然堆積が考えられる。この後世の掘り込みの性格については、掘り込みが墓道底面に達していないことや、堆積土上層が後世に耕作利用されていたこと、主体部から延びる長軸(B-B')・短軸(C-C')土層断面から単一の掘り込みではなく複数の掘り込みであること、また、上層付近に固まって出土する遺物から、盗掘によるものではなく、後世の攪乱によるものと考えられる。

(平野 武文)

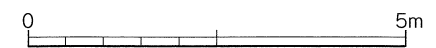
## 2. 1号土坑（第90図）

1号土坑は玄室に重複しており、層位は古墳の層位と一致する。土坑の形状は楕円形を呈しており、長軸2.88m、短軸1.74m、確認面からの深さは0.34mで、壁面はすり鉢状を呈している。堆積土は2層に分かれており、主体部長軸土層断面(A-A')の2層と3層が1号土坑の堆積土である。また、1号土坑の断面は主体部長軸土層断面(A-A')内に太線で表している。1号土坑は当初、玄室の堆積土と考えられており、また、長軸と短軸の長さが玄室の長軸と短軸の長さとも一致することから、1号土坑の存在を確認することは困難であった。しかし、土層と出土遺物から1号土坑の存在を確認した。

長軸土層断面(A-A')の2層は、褐色の層にローム粒子を含んでいる。南側では、黄褐色の層にローム粒子を含む長軸土層断面(A-A')の3層の流れ込みが確認できる。また、長軸土層断面(A-A')の2層と3層からは、15世紀後半頃と考えられる土師質内耳鍋片と陶器平碗片が出土しており、長軸土層断面(A-A')の2層と3層の時代差はほとんどないと考えられる。



層位	色調	粘性	締まり	備考
I	暗褐色 (10YR3/3)	やや強い	やや強い	なし
II	暗褐色 (10YR3/4)	普通	やや弱い	なし
III	黒褐色 (10YR2/3)	やや弱い	やや弱い	なし
IV	暗褐色 (10YR3/4)	弱い	やや強い	なし
V	暗褐色 (10YR3/4)	普通	普通	なし
VI	暗褐色 (10YR3/4)	普通	普通	1mm以下のローム粒子 (10YR4/4) を2%含む
VII	暗褐色 (10YR3/4)	やや強い	普通	1mm以下のローム粒子 (10YR4/4) を5%含む
VIII	暗褐色 (10YR3/3)	やや強い	普通	1mm以下のローム粒子 (10YR4/4) を7%含む
IX	黒褐色 (10YR3/2)	普通	普通	1mm以下のローム粒子 (10YR4/4) を18%含む
X	褐色 (10YR4/6)	普通	やや強い	1mm以下のローム粒子 (10YR4/4) を10%含む
XI	褐色 (10YR4/6)	やや強い	強い	5~10mm以下のロームブロック (10YR4/4) を20%含む



第94図 4号墳・1号溝完掘状況

1号土坑が掘られた年代は、土師質内耳鍋片と陶器平碗片が出土していることから、15世紀後半頃と考えられる。土坑の性格については、楕円形を呈していること、土師質内耳鍋片と陶器平碗片が出土していることから、土壌の可能性が考えられた。しかし、堆積土中に炭化物・灰・焼土・粘土が確認されないこと、1号土坑の断面形がすり鉢状を呈していることから、土壌の可能性は低いと考えられる。

(近藤 貴徳)

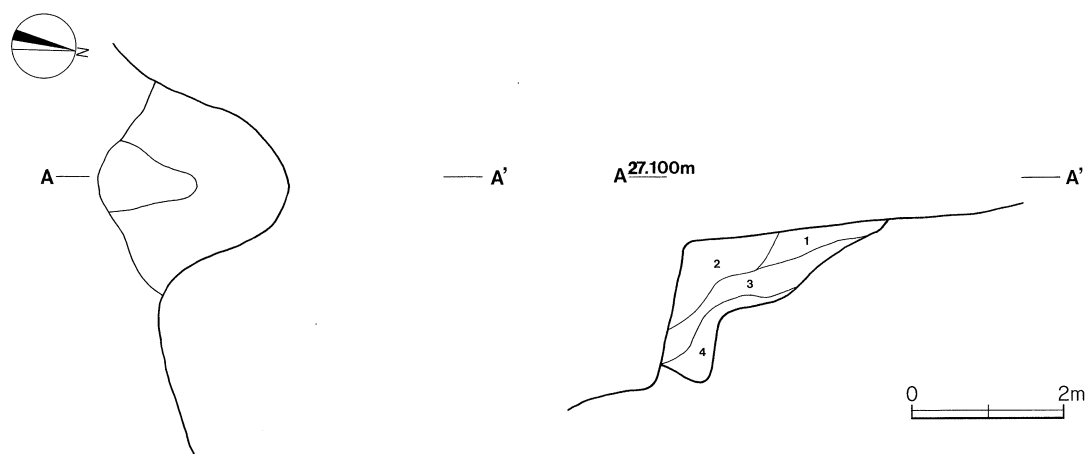
### 3. 2号土坑 (第95図、PL. 43)

2号土坑は4号墳の周溝及び、風倒木痕に南側を切られる形で確認された遺構である。平面形は不定型な楕円を呈し、残存部の直径、深さともに0.40mである。微量ではあるが、全層にわたって焼土が確認された。

遺物は出土していない。本遺跡では縄文時代早期から後期にかけての土器が数点出土しており、縄文早期から前期に見られる屋外炉穴とも考えられるが、位置関係などを見るとそれを特定する根拠は乏しい。したがって、2号土坑の性格は不明である。

なお、風倒木痕のプランは周溝の底面から確認され、その面から風倒木痕ができる際に1号炉穴から流れ込んだと思われる焼土が確認された。しかし、周溝の堆積土中に焼土は確認されなかった。以上の点から、各遺構の構築順は2号土坑、風倒木痕、周溝の順であると考えられる。

(浅間 陽)



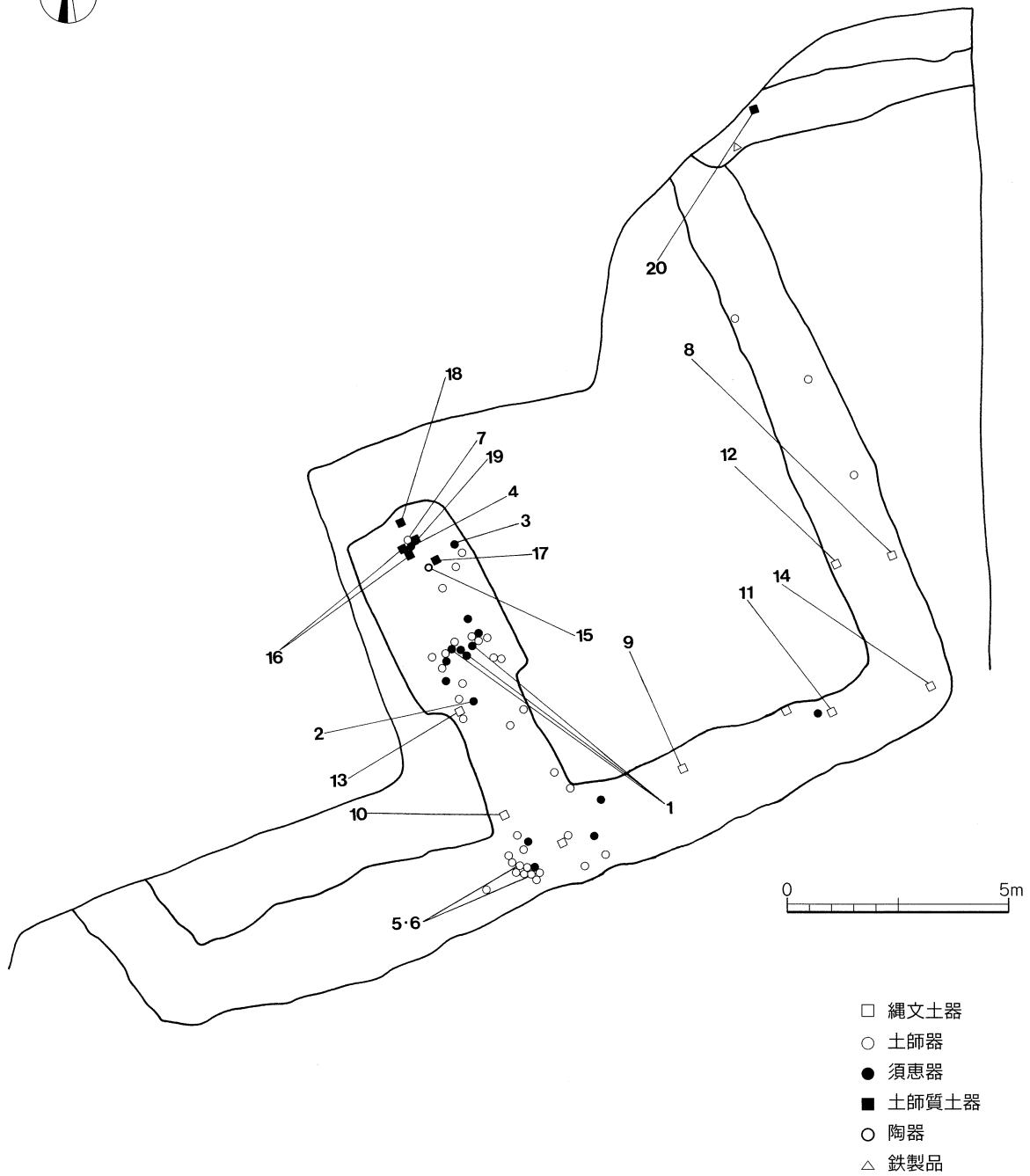
層位	色調	粘性	締まり	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	やや弱い	やや弱い	赤褐色焼土(2.5YR4/8)を1%含む
2	暗褐色(10YR3/3)	やや弱い	普通	赤褐色焼土(2.5YR4/8)を5%含む
3	褐色(10YR4/4)	普通	やや強い	赤褐色焼土(2.5YR4/8)を3%含む
4	褐色(10YR4/6)	やや強い	普通	赤褐色焼土(2.5YR4/8)を3%含む

第95図 2号土坑実測図

### 4. 1号溝 (第89・94図)

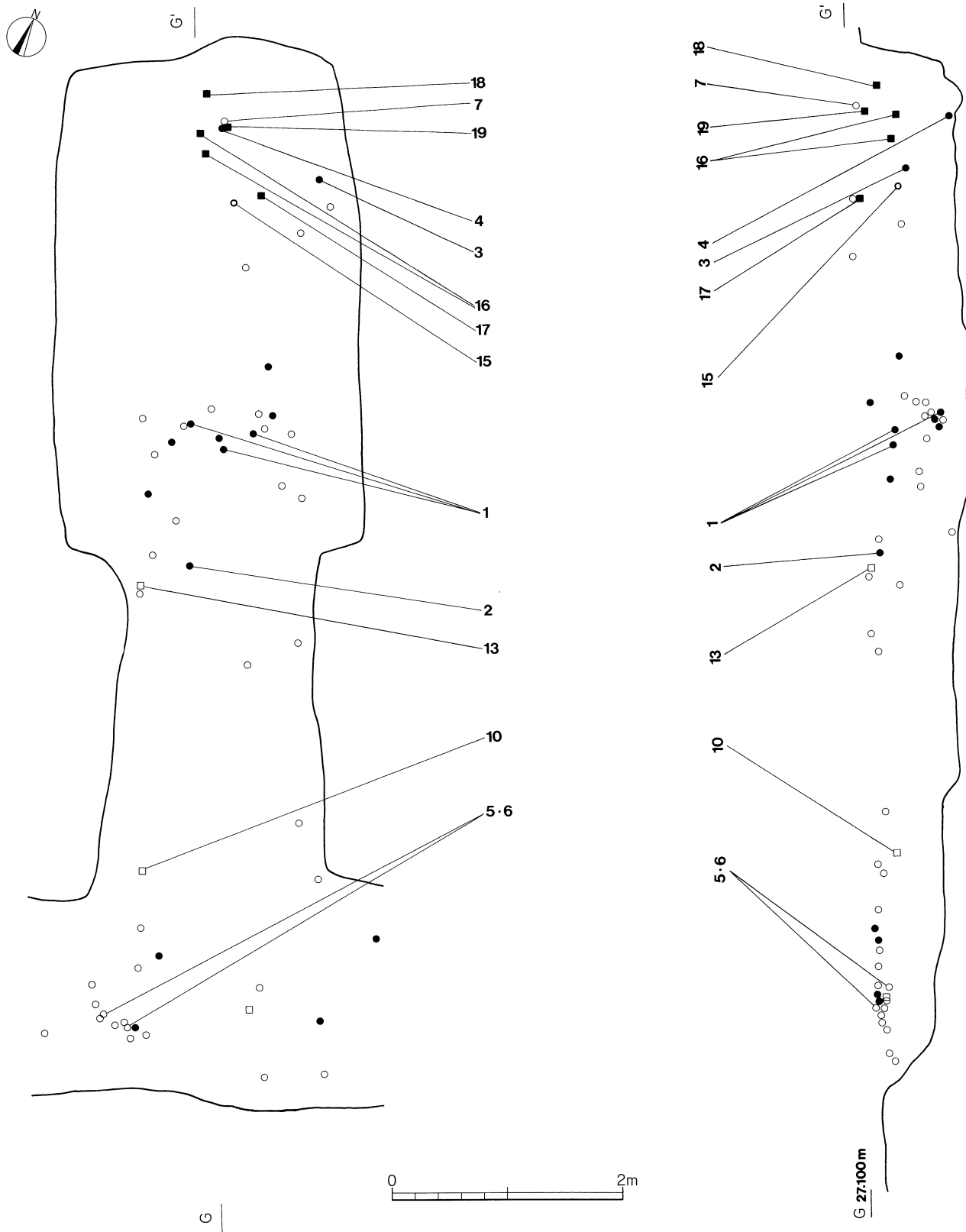
1号溝は、F0グリッド付近で4号墳の周溝を切り、ほぼ東西に延びる形で確認された。西端部は調査区の壁によって確認できないが、調査区外に続いており、遺構の全容は不明である。遺構の規模は計測可能な限り、長さ6.96m、上幅1.20m、下幅0.60m、横断面は浅い皿状であった。なお、周溝土層断面(A-A')のI・II層は周溝を切っている1号溝の層である。遺物は土師質土器の口縁部片と鉄製品片の2点が出土している。

(森屋 雅幸)

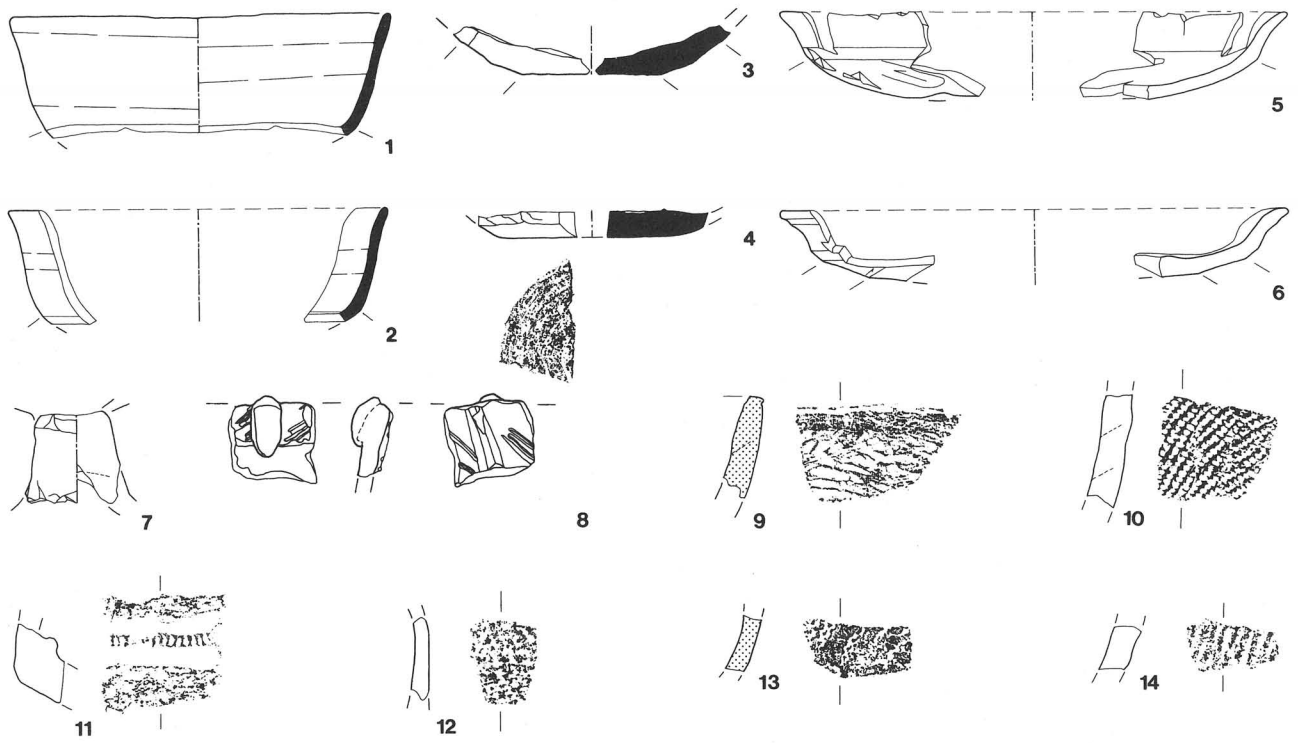


第96図 遺構遺物出土状況

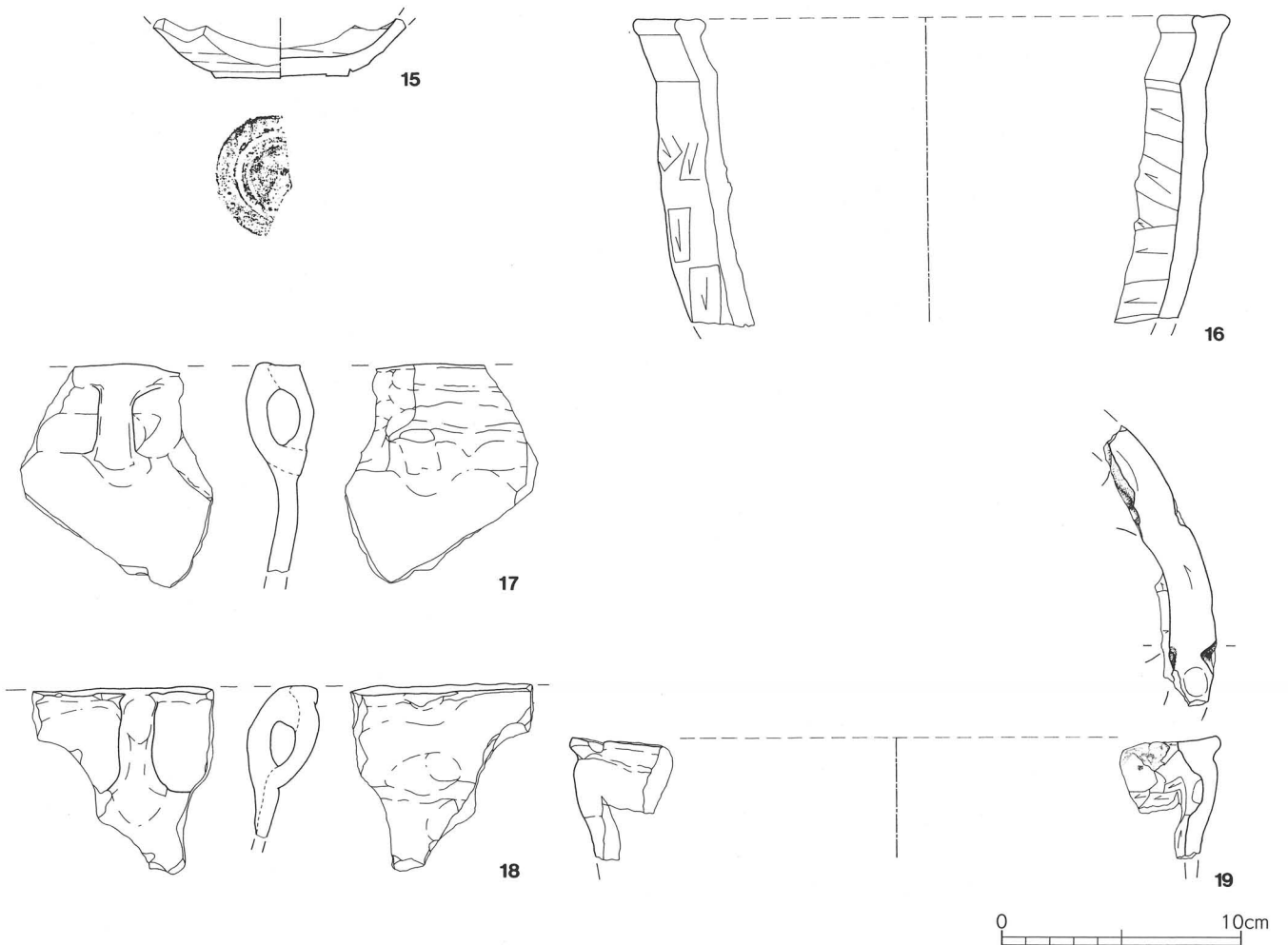




第97図 主体部遺物出土状況図



第98图 4号坑出土遗物

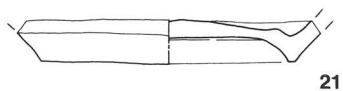


第99图 1号土坑出土遗物

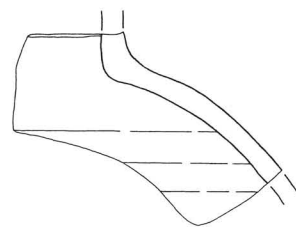
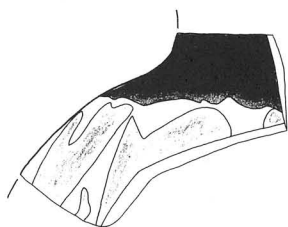


20

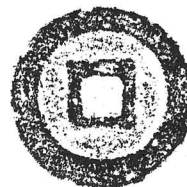
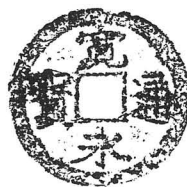
第100图 1号溝出土遺物



21



22



23



第101图 遺構外出土遺物

#### 4号墳出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 1	須恵器 坏身	口径 15cm(推)	須恵器坏身の体部片。底部が欠損している。	左方向のロクロ成形。底部に回転ヘラ削り調整が施されている。体部下位は丸みを帯びる。	色調：5YR6/1灰 焼成：良好 胎土：0.3~2mmの白色粗砂10%含 雲母多量含	
第98図 2	須恵器 坏身	口径 15cm(推)	須恵器坏身の体部片。底部が欠損している。	底部に回転ヘラ削り調整が施されている。体部下位は丸みを帯びる。	色調：2.5YR4/1黄灰 焼成：良好 胎土：0.3~2mmの白色粗砂10%含 雲母多量含	
第98図 3	須恵器 坏身	底径 5.4cm(推)	須恵器坏身底部片。	体部と底部に回転ヘラ削り調整が施されている。	色調：7.5YR7/1灰白 焼成：良好 胎土：良土	
第98図 4	須恵器 坏身	底径 7.2cm(推)	須恵器坏身底部片。底部内面中央が盛り上がっている。	底部に右方向の回転ヘラ削り調整が施されている。	色調：7.5YR8/2灰白 焼成：良好 胎土：1~2mmの白色粗砂を5%含 雲母微量含	
第98図 5	土師器 皿	口径 20cm(推)	口縁部は緩やかに立ち上がる。	体部外面下位に手持ちヘラ削り、口縁部にナデが施されている。体部は手持ちヘラ削り調整が施されている。	色調：10YR7/4にぶい黄橙 焼成：普通 胎土：0.1~2mmの黒色粗砂10%含 雲母少量含	
第98図 6	土師器 皿	口径 20cm(推)	口縁部は緩やかに立ち上がる。口唇部上端にへこみを持つ。	体部外面下位に手持ちヘラ削り、口縁部にナデが施されている。	色調：10YR6/6明黄褐 焼成：普通 胎土：0.1~1mmの黒色粗砂5%含 雲母少量含	
第98図 7	土師器 高坏		高杯脚部片。器受け部・脚部下位を欠損する。穿孔の一部を確認することができる。	粘土紐痕が確認できる。	色調：7.5YR6/4橙 焼成：普通 胎土：0.2~1mmの白色粗砂を3%、0.1~0.5mmの黒色粗砂を7%含	
第98図 8	縄文土器		縄文土器口縁部片。	内面の突帯にナデ。内外面に櫛目文、口縁部内面に貼付文が施されている。	色調：10YR6/6明黄褐 焼成：普通 胎土：0.1~1mmの白色粗砂3%、1mmほどの黒色粗砂2%含	
第98図 9	縄文土器		縄文土器口縁部片。	粘土紐痕が確認できる。体部に無節縄文が施されている。	色調：10YR6/8明黄褐 焼成：普通 胎土：0.1~1mmの白色粗砂7%、1mmほどの白色透明粗砂5%含 繊維含	
第98図 10	縄文土器		縄文土器体部片。体部上位に煤附着。	粘土紐痕が確認できる。体部に複節縄文が施されている。	色調：10YR6/4にぶい黄橙 焼成：普通 胎土：0.2~3mmの白色粗砂3%、0.3~2mmの白色透明粗砂1%含 雲母少量含	
第98図 11	縄文土器		縄文土器頸部片。	頸部に刻みのついた一条の隆帯有り。	色調：5YR赤褐 焼成：普通 胎土：0.3~1mm白色透明粗砂3%、0.1~1mm白色粗砂7%含 雲母少量含	
第98図 12	縄文土器		縄文土器体部片。	体部に貝殻復縁文が施されている。	色調：7.5YR5/6明褐 焼成：普通 胎土：0.2mmほどの白色粗砂5%含 雲母少量含	
第98図 13	縄文土器		縄文土器体部片。	体部に貝殻腹縁文が施されている。	色調：7.5YR4/4褐 焼成：普通 胎土：0.1mmほどの白色粗砂を1%未含 繊維含	
第98図 14	縄文土器		縄文土器体部下位片。	体部に単節縄文が施されている。	色調：7.5YR7/8黄橙 焼成：普通 胎土：1~2mmの白色粗砂5%含 雲母少量含	

### 1号土坑出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 15	陶器 平碗	底径 5.6cm(推)	陶器の底部片。高台の削り出しが浅い。	内面と高台の一部に灰釉が施されている。高台は削り出し高台。	色調：2.5Y7/2灰黄 焼成：良好 胎土：良土	古瀬戸
第99図 16	土師質 土器 内耳鍋	口径 24.4cm(推)	内耳鍋の口縁部から体部にかけての破片。体部から短く外反する口縁を持つ。体部上位に煤付着。	内面は横方向にナデ、外面は縦方向に削りが施されている。	色調：10YR5/3におい黄褐 焼成：良好 胎土：0.1~1mmの白色粗砂 7%含 雲母少量含	
第99図 17	土師質 土器 内耳鍋		耳を持つ口縁部片。口縁部と外面に煤付着。耳内側に指頭痕。	耳接合部、外面全体にナデが施されている。	色調：7.5YR/褐灰 焼成：良好 胎土：0.1~1mmの白色粗砂 3%含 雲母少量含	
第99図 18	土師質 土器 内耳鍋	口径 27.2cm(推)	耳を持つ口縁部片。内面下位に煤付着。	口縁部にナデが施されている。	色調：5YR6/8橙 焼成：良好 胎土：0.1~2mmの白色粗砂 2%含 雲母少量含	
第99図 19	土師質 土器 内耳鍋	口径 27cm(推)	内耳鍋口縁部片。耳上部・口唇部に指頭痕が見られる。内面に耳が付けられていた痕跡が見られる。外面に煤付着。	口縁部に横方向のナデ。体部は縦方向のナデが施されている。	色調：5YR2/2黒褐 焼成：良好 胎土：0.2~1mmの白色粗砂 1%未含 雲母少量含	

### 1号溝出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 20	土師質 土器 焙烙	口径 25.2cm(推)	焙烙の口縁部片。口縁部は緩やかに立ち上がる。底部が欠損している。	口縁部外面にナデが施されている。	色調：5YR6/6橙 焼成：良好 胎土：0.2~0.5mmの黒色粗砂 3%含	

### 遺構外出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第101図 21	土師質 土器	底径 11.4cm(推)	高台片。高台内面中央が盛り上がりしており、体部接合部にへこみ有り。	高台内面にナデが施されている。高台は削り出し高台。	色調：10YR6/4におい黄橙 焼成：良好 胎土：良土	
第101図 22	陶器 壺		壺の頸部から体部にかけての破片。	右方向のロクロ成形。体部内外面全体に釉が施されている。	色調：2.5YR2/1赤黒 2.5GY8/1灰白 焼成：良好 胎土：良土	
第101図 23	錢貨 寛永通寶	長さ2.5cm 幅2.5cm 厚さ1mm 重量2.3g	古寛永。字面は明瞭であるが、寶の字は潰れてしまっている。0.6cmの孔が中心に開けられている。			

(森屋 雅幸)

## 5. 遺物出土状況 (第96・97図)

今回の調査で出土した遺物は、遺構から96点、遺構外から43点出土したが、図示し得たのは23点であった。その内訳は、縄文土器7点・土師器3点・須恵器4点・土師質土器6点・陶器2点・銭貨1点である。また、完形で出土した遺物は銭貨1点のみであり、その他はすべて欠損した状態で出土した。

4号墳から出土した遺物は、奥壁付近・羨道付近・墓道入口付近の3地区に集中している。奥壁付近から出土した遺物の多くは1号土坑に関連する遺物であり、墓道入口付近から出土した多くの遺物は、4号墳構築の時期とは異なる時代の遺物である。また、本主体部は攪乱を受けているため、4号墳に伴う遺物も上層から出土している。

## 4号墳 (第96・98図)

埋葬施設から出土した遺物のうち、図示し得たのは7点である。須恵器坏身片(No.1)は、羨道付近から底面直上と底面から少し浮いた状態で出土した2点と、上層から出土した1点の計3点が接合した。須恵器坏身片(No.2)は、羨道付近の上層から出土している。須恵器坏身片(No.4)は、玄室の奥壁付近から底部を上にして底面からやや浮いた状態で出土した。また、裏込めからは須恵器坏身片(No.3)が出土している。その他、奥壁付近の上層からは、土師器高坏(No.7)の脚部片が出土した。

墓道上層からは縄文土器片(No.10・13)が出土している。この2点以外、図示し得た遺物はなかった。

周溝では、墓道入口付近の上層から多くの遺物が出土した。土師器皿片(No.5・6)は、墓道入口の上層から破片の状態でまとまって出土した。また、周溝南東側から縄文土器片(No.8・9・11・12・14)が、上層から散在して出土した。

## 1号土坑 (第96・97・99図)

1号土坑からは、土師質土器内耳鍋片(No.16・17・18・19)が出土した。この他にも陶器平碗片(No.15)が、土師質土器内耳鍋片とほぼ同じ標高から出土した。

## 1号溝 (第96・100図)

1号溝からは、調査区の北壁付近で焙烙(No.20)の口縁部片が上層から出土した。また、周溝との接点付近から、器形が不明である鉄製品片が上層から出土した。しかし、図示し得ない遺物であるため、実測図には載せなかった。

## 遺構外 (第101図)

遺構外から出土した遺物は、F-5グリッドから土師質土器(No.21)の底部が、G-7グリッドから陶器壺片(No.22)が計4点出土し、接合の結果1個体になった。また、G-3グリッドから寛永通寶(No.23)が完形の状態で出土した。

(藤野 一之)

## 6. 遺構出土遺物（第98～101図、PL.45・46）

今回の調査で出土し、図示し得た23点の遺物のうち、4号墳と1号土坑に伴うと考えられる遺物の年代観などについて示したい。新治産須恵器の年代は赤井博之氏の編年、湖西産須恵器の年代は後藤建一氏の編年、土師器皿の年代は赤熊浩一氏の編年、土師質土器内耳鍋の年代は服部敬史氏の編年、古瀬戸の年代は藤澤良祐氏の編年に従った。

### 4号墳（第98図、PL.45）

4号墳に関連すると思われる遺物は、須恵器坏身片4点と土師器片2点である。

No.1は雲母を大量に含む須恵器坏身片である。焼成は良好で、推定の口径は15cmである。底部は右方向の回転ヘラ削り調整が施されている。体部は丸みを帯び、内外面全体にナデが施されている。ロクロの回転方向は左方向である。年代は、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期頃である。また、No.2はNo.1と口径や技法の特徴から同一個体と考えられるが、接合はしなかった。

No.4は、雲母を微量に含む須恵器坏身の底部から体部下端までの破片である。焼成は良好で、底部は右方向の回転ヘラ削り調整が施されている。推定の底径は7.3cmであり、底部の形状は平底である。年代は8世紀第1四半期頃に位置し、No.1との時代差はあまりない。

No.3は須恵器坏身片である。胎土に石などの含有物はなく、良土である。胎土や器形から、この須恵器は湖西産と考えられる。体部に回転ヘラ削り調整が施されている。器形は、底径や削りの範囲、底部から体部にかけての立ち上がりから坏身と考えられ、時期は後藤編年のⅡ期第3小期（6世紀後半）以降である。また、この須恵器片は裏込めから出土しているため、古墳築造の際に混入したとみられる。

No.5・6は、土師器皿片である。推定の口径は20cmで、口縁部に横ナデ、体部外面下位に手持ちヘラ削り調整が施されている。口縁部は緩やかに立ち上がり、No.6は口唇部上端にへこみをもつ。このような形態の土師器皿は本遺跡周辺での報告例は少ない。器形や技法の特徴から類例を探すならば、埼玉県や群馬県で出土する北武蔵型皿に求められる。年代は、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期頃である。

### 1号土坑（第99図、PL.45）

1号土坑に関連する遺物は、陶器平碗片1点と土師質土器内耳鍋片4点である。

No.15は、陶器平碗の底部から体部にかけての破片である。高台は削り出し高台であり、高台内の削り出しが浅い。釉は灰釉が施されており、一部高台に付着している。このような特徴や高台から体部への立ち上がりの形態、土師質土器内耳鍋片（No.16・17・18・19）と共伴して出土していることから、この遺物の年代は古瀬戸後期（15世紀後半）に位置する。

土師質土器内耳鍋片（No.16・17・18・19）は、4点がすべて口縁部から体部にかけての破片である。口縁部の形態や胎土、口径が4点とも異なる。No.19の口縁部には、耳が2つ貼り付けられていた痕跡が確認できる。No.17・18は耳を1つもつ口縁部片であり、内耳部分の摩滅はみられない。耳はNo.17・18とも口唇部上端から体部上位に張り付けられている。体部上位への耳の貼り付け技法は、No.17は体部に穿孔し、粘土紐を通してしている。No.18は、粘土紐を体部内面に貼り付けていることが、断面や耳の接合部から確認できる。年代は、共伴した陶器平碗や口縁部の形態から15世紀後半頃である。

（藤野 一之）

## 第4節 まとめ

今回の調査は800m<sup>2</sup>の範囲で行われ、古墳1基、土坑2基、溝1条を調査した。遺物は縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、銭貨などが出土している。

4号墳については、周溝の北側については全域、西側についてもほぼ全域が調査範囲外となってしまったため、調査することができなかった。しかし、埋葬施設と周溝東側、南側の調査により、4号墳の構造について、ほぼ明らかにすることができた。4号墳は、断面が逆台形を呈する方形の周溝を有するものである。

墳丘については表土を取り除く段階でベルトを残したが、断面図にもその堆積が見られなかったために削平されたと考えられ、その規模や形などを述べることはできない。主体部については、羨道、墓道を有していたことや玄室の奥壁と側壁を構築していた板石の痕跡と礫床から、形態的には地下式の横穴式石室と考えられ、ほぼ南北を主軸とし、周溝との間を墓道によって連結するタイプである。また玄室の入口には闕石が確認できた。さらに石室に使われた石は、闕石や礫床ならびに主体部堆積土中に見られた、雲母片岩のみと思われる。闕石の周りや礫床の下側からは粘土が検出されているが、これは石を固定するためのものと考えられる。時期については、羨道付近から、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期に位置付けられる新治産の須恵器坏身が出土している。この遺物や3号墳を含めた周辺の古墳の形態から、古墳構築の年代を判断することができる。また盗掘については、第3節で示したように2回以上の盗掘が考えられる。盗掘時期については、1号土坑の成立以前という広い範囲を示すにとどまった。

1号土坑については、覆土から土師質土器内耳鍋・陶器平碗が出土していることや深さが玄室の床まで達していないことから、古墳とは全く関係なく掘られたものであると考えることができる。

2号土坑ならびに1号溝については、第3節で示したとおりである。

最後に、この発掘調査と整理作業には、数多くの方のご協力やご教授、励ましを頂きました。一人一人の芳名を記することはできませんが、ご厚意を賜った方々に心より、御礼を申し上げます。

(駒形 友也)

### 【引用文献】

- 赤井博之 1998 「古代常陸国新治窯跡群の基礎的研究(1)～奈良・平安時代の須恵器編年を中心として～」  
『婆良岐考古』第20号 婆良岐考古同人会
- 赤熊浩一 1991 「古代武蔵の土師器理解のために―北武蔵の7・8世紀の様相―」  
『研究紀要』第8号 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 後藤建一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」  
『静岡県の窯業遺跡』静岡県文化財調査報告書第42集 静岡県教育委員会
- 服部敬史 1997 「内耳土鍋の研究(上)」『土曜考古』第21号 土曜考古学研究会
- 藤澤良祐 1997 「古瀬戸編年表」『研究紀要』第5輯 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター



## 第6章 神明遺跡第4次調査

### 第1節 調査の方法

#### 1. 調査の目的

神明遺跡は、運動公園予定地の中で大半を占める東側台地の縁辺部に位置し、西側に北西原遺跡・南側に山川古墳群と隣接する面積約50,000m<sup>2</sup>の遺跡である。過去3次にわたる調査を行い、縄文時代中期から古墳時代前期の集落、中世の溝や土坑等の存在が明らかにされている。

今年度は、平成13年度当初の公園緑地課との協議によって、昨年度調査区に接する南半部で生活道路に区切られた範囲約2,000m<sup>2</sup>を調査対象とした。昨年度の確認調査によって当調査区には中世の掘立柱建物跡があることが予想されており、矩形に折れた第6号溝との位置関係等の関わりを調べる為、一部昨年度調査の第6号溝も再度掘り上げて、記録した。

#### 2. 地区設定（第102図）

今次調査の調査区の設定は、昨年度第3次調査区の隣接地に当ることから、基準点・グリット単位・呼称についても昨年度のものを継続して用いた。即ち、日本平面直角座標第Ⅸ系を用いた区画のうち、X=11,380m、Y=31,820mの交点を基準点とした。その上で調査区を20m四方の大グリッドに分割し、更に東西南北に5分割して4m四方の小グリッドを設定した。各グリッドの名称は、大グリッドと小グリッドの間の混乱を避けるため、大グリッドにはカタカナ表記を使用し、小グリッドにはアルファベットと算用数字の組み合わせで表記した。大グリッドは北西隅から昨年度に続き、「タGrid」、「チGrid」……、小グリッドは同じく「C21区」、「D21区」……の名称を与えている。

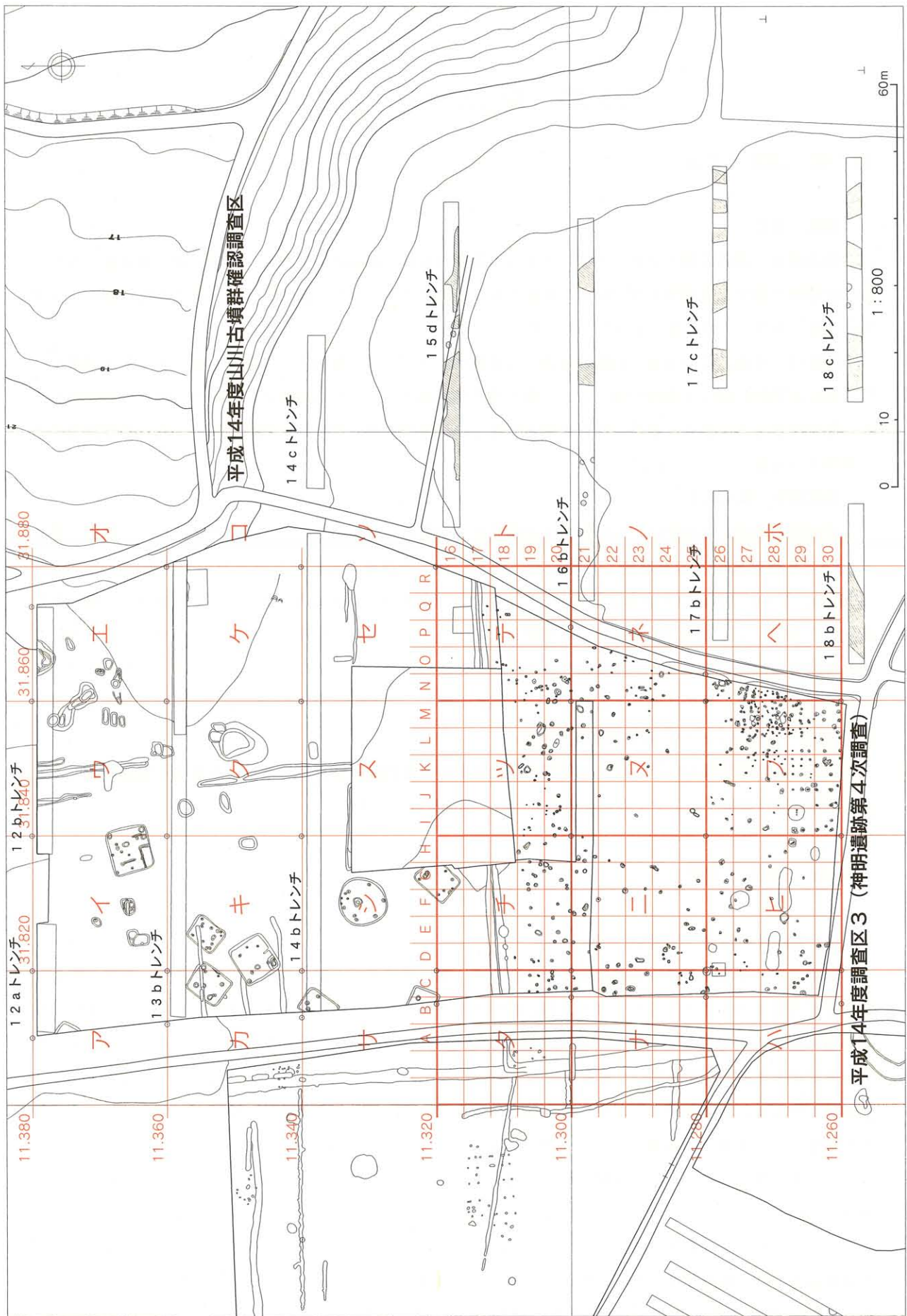
基本層序と地質環境については、今年度の調査区が昨年度調査の隣接地に当り、共通する要素が高いことから新規に層序確認トレンチを設定するのは止め、昨年度成果を準用することとした。

### 第2節 遺構と遺物

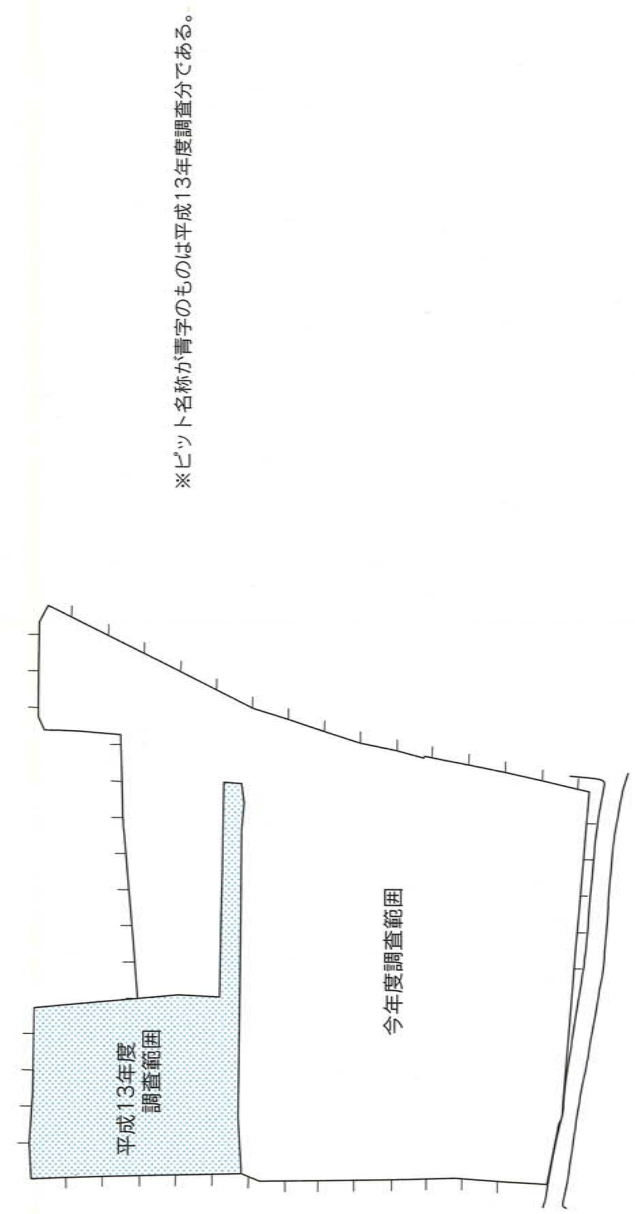
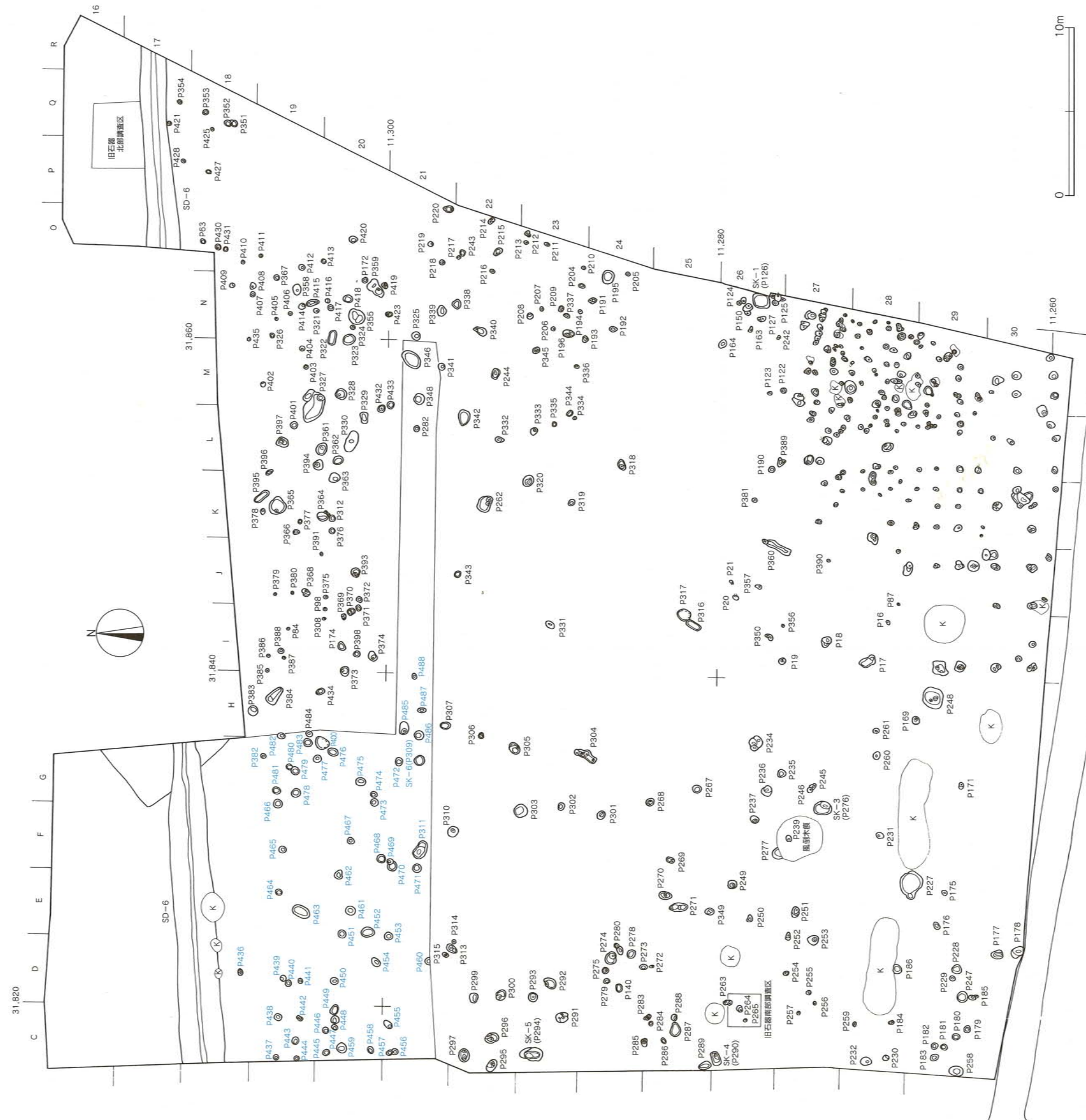
#### 1. 旧石器時代の調査（第105図～第110図）

1) 調査方法 今次調査では遺構確認作業の段階で、北東部でメノウ製の槍先形尖頭器1点、南部の褐色土から硬質頁岩製のナイフ形石器1点と、旧石器時代の資料として判断可能な石器を検出した。調査地点の検討作業の際にも北東部ではさらに4点の石器を採取したことから、北東部にはローム層中に石器の集中埋没ヶ所が存在する可能性が高いと考えられた。

調査工程後半に石器が検出された南北2地点を中心に、2m×2mの調査区を設定して関連資料の検出作業を実施した。掘削では鋤簾を使用して薄く削り下げる作業を行った。作業の結果、南部調査区（C25区）では第5層（硬質ローム）まで掘削したが、関東ローム層中からの関連資料は検出しなかった。一方、北部調査区（P16、P17、Q16、Q17区）では関東ローム層中から石器を検出したため、調査は北部調査区が主体となった。当初の調査範囲を拡張していき、最終的には14m<sup>2</sup>の調査範囲で掘削を行った結果、石器ブロック1基を検出した。検出位置はP17、Q16、Q17の3区に分布する。なお石器ブロックでは検出位置を記録できない微細な遺物の回収も考慮し、水洗選別作業のため中心部の掘削排土を土嚢袋で回収した。

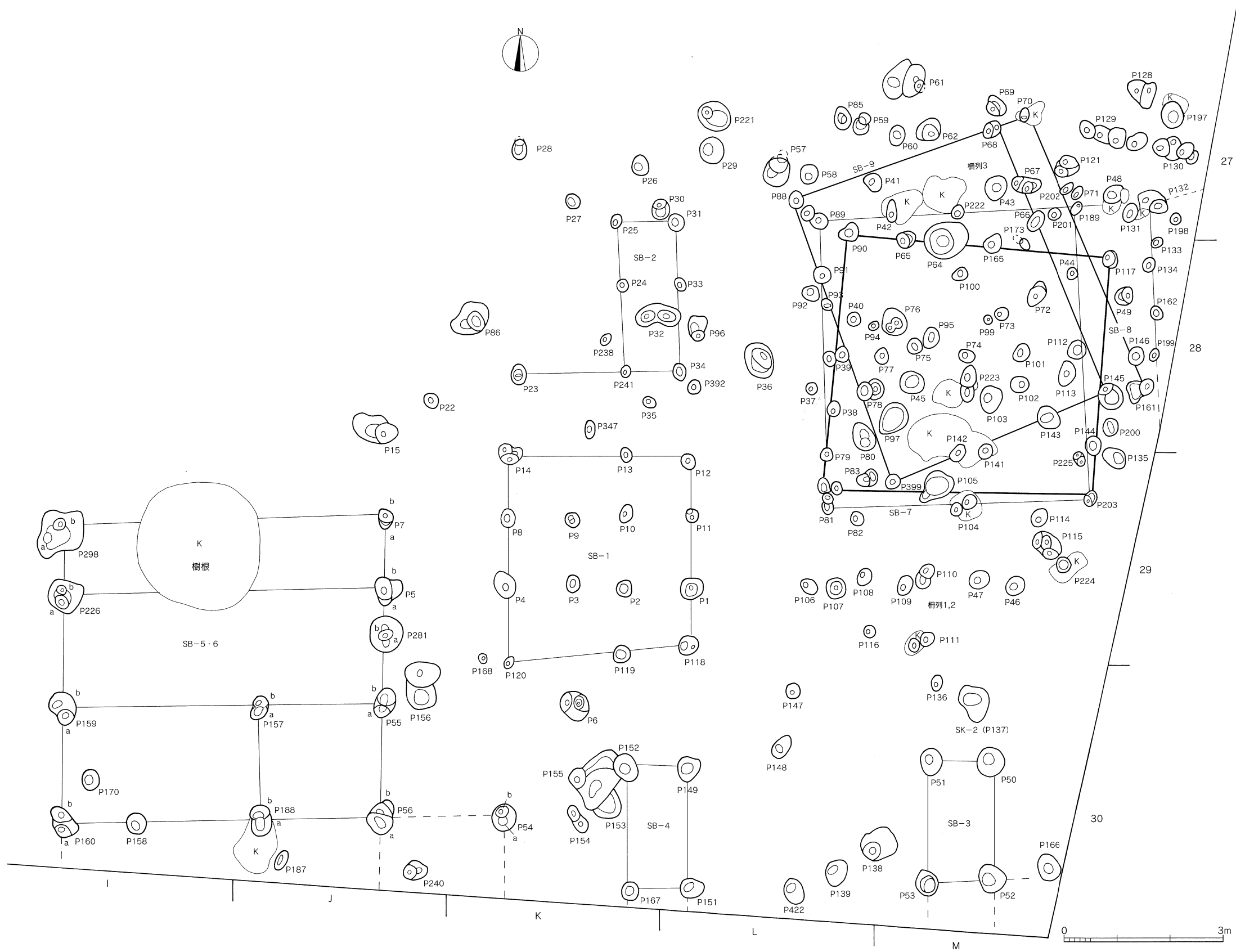


第102図 グリッド設定図



\*ピット名称が青字のものは平成13年度調査分である。

第103図 神明遺跡第4次調査区



第104図 調査区東南部掘立柱建物跡検出状況

室内整理作業では、遺物分布平面図・セクション図作成や石器の実測図と観察表の作成の他に、北部調査区で回収してきた石器ブロック中心部の土嚢袋45袋分の掘削排土を水洗洗浄し、5mmと2.5mmの2種類のサイズの篩を使用して篩い掛けを実施し、現地で検出地点を記録化できなかった微細遺物を回収した。

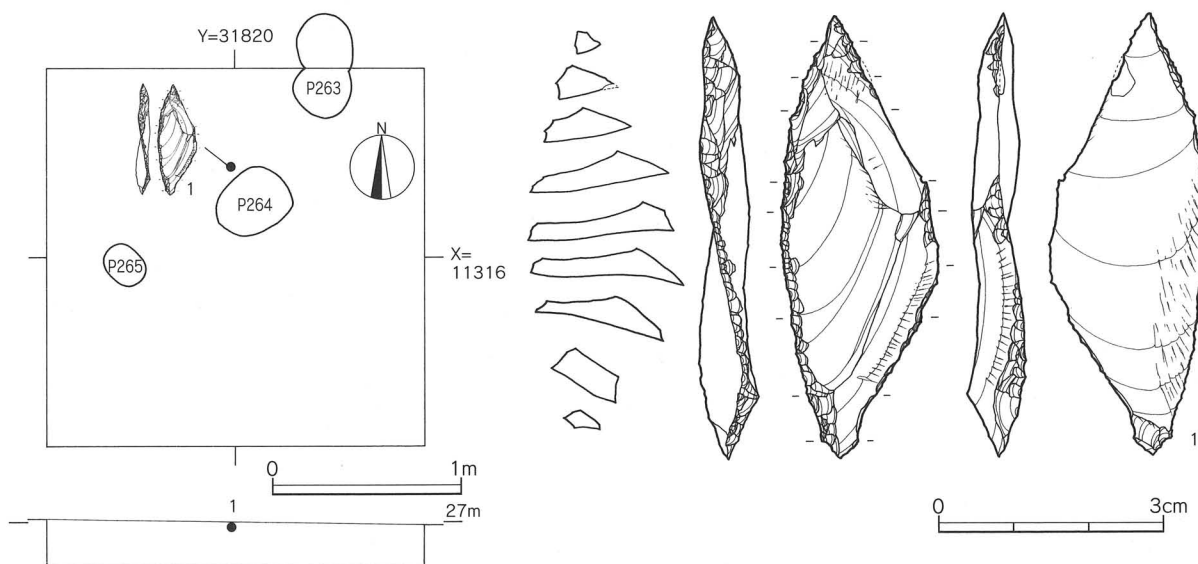
整理作業を開始してから気付いたが、2001年の第3次調査の際に第6号溝の南側でも槍先形尖頭器と同一母岩の剥片を表土中から1点検出していた。しかし、旧石器時代の剥片とは判断できなかったため、調査報告書では実測図を掲載していなかった。今回は石器群の関連資料として扱うことにした。

## 2) 南部調査区 (第105図)

**調査状況** 本調査区は、調査当初に褐色土中よりナイフ形石器1点を検出したことから、2m×2mの調査区を設定して掘削調査を実施した。鋤簾掛けにより第3層から第5層上部の25cmの深さまで掘削作業を実施したが、1cm大のチャート円礫を数点検出したのみで、関連資料の検出には至らなかった。掘削範囲と層位の写真撮影、掘削深度の標高測量を実施し作業を終了した。

**遺存状況** 底面までの掘削深度が第3層中に達する小規模なピット3基 (P263~265) が調査範囲内に分布したが、第3層以下の包含層遺存状況は良好であった。

**検出遺物** ナイフ形石器(1)は褐色土中から検出した。背面構成は90度方向の異なる剥離面から構成されている。素材剥片は剥離方向に向かい左巻きにやや捩れた状態である。全体の形状がかなり湾曲する縦長剥片を素材とする点から、連続した縦長剥片の生産工程ではない打面転移型の剥片剥離により生産された剥片が使用されたと考えられる。打面を先端側に置き二側縁に二次加工を施し、右側縁側がやや張り出す形状に成形している。基部裏面にも器厚調整を目的とした二次加工が施されている。刃部の一部を検出時に損壊してしまった。



第105図 南部調査区と検出した旧石器

### 3) 北部調査区 (第106~110図、PL 51・52)

**遺存状況** 遺物包含層位は第3層 (軟質ローム) 中からのみ石器を検出し、第5層 (硬質ローム) 中からは1点も石器は検出しなかった。この付近は第5層中に第3層が楔状に入り込む状態で軟質化が進行し、第3層の底面は第6層 (第2暗色帯上部) にまで達していた。神明遺跡では第4層 (第1暗色帯) 以下が硬質ロームとして確認可能な場所なので、この状況から本来の包含層位は第3層以上であったと考えられる。なお縄文時代以降の遺構確認面で検出した5点の石器について、遺構確認面そのものがローム層を露出した状態であったことや、石器ブロック検出石器の石材や接合資料の抽出による検討作業の結果、本来石器ブロックを構成する資料だったと判断した。

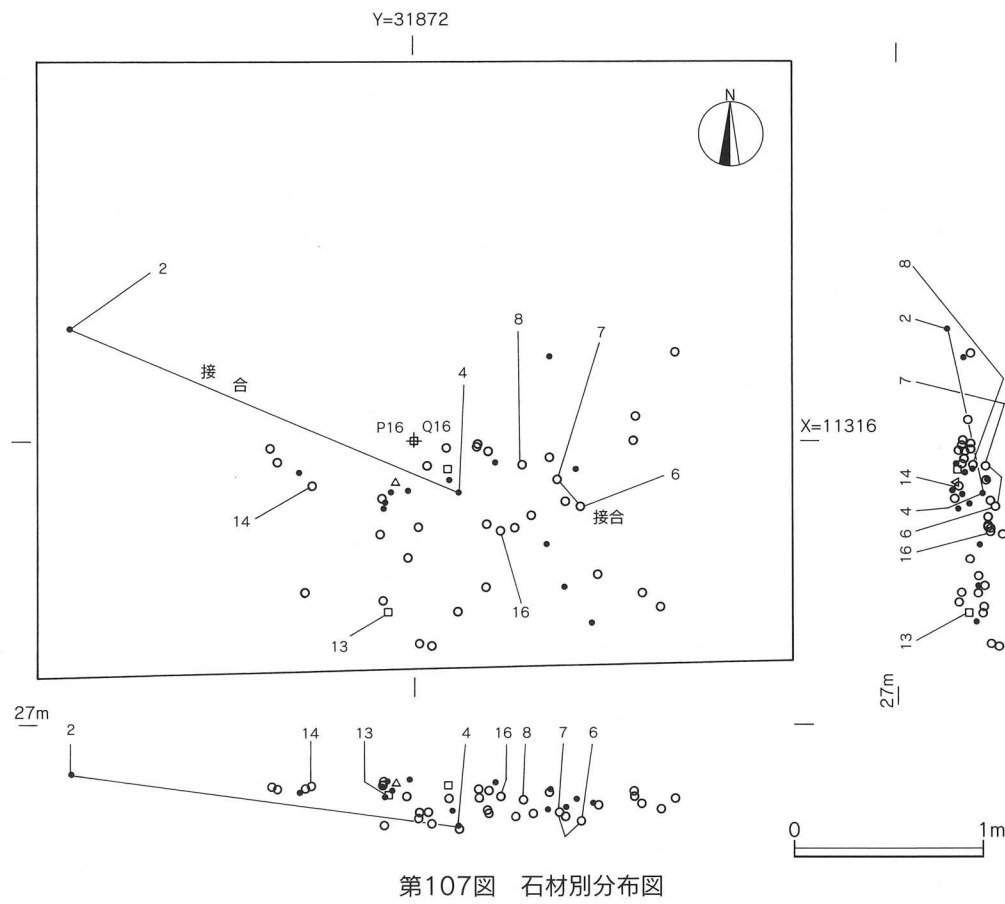
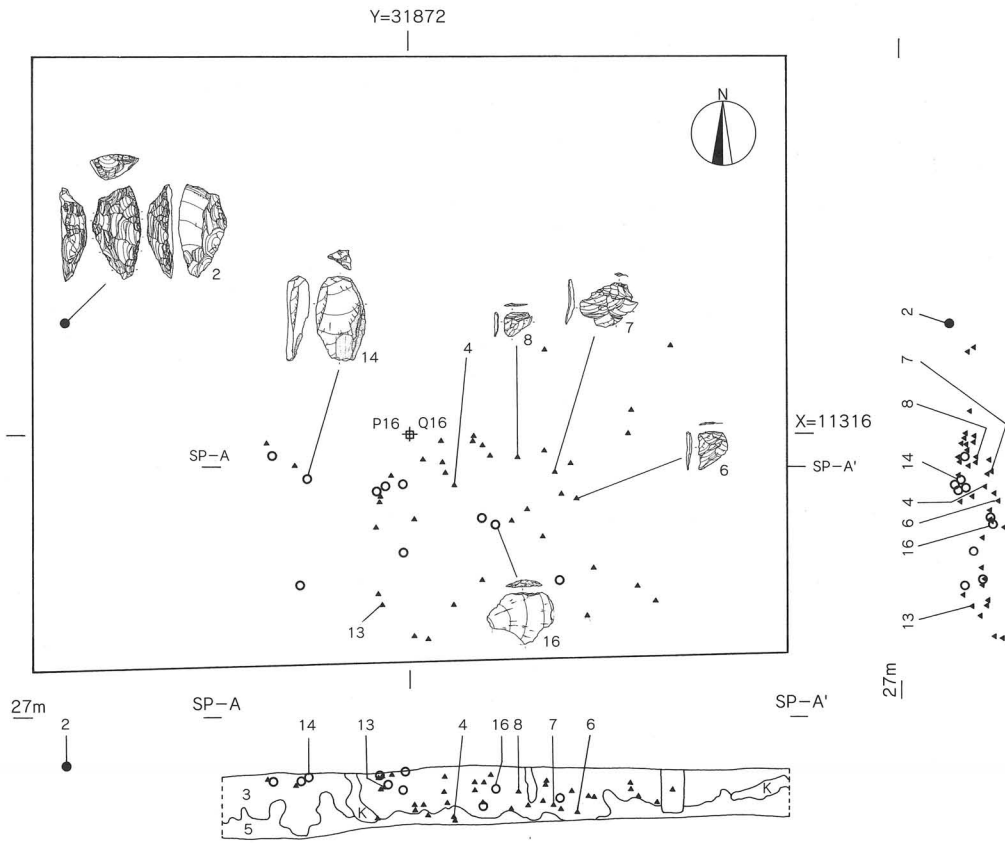
北部調査区は現在標高27mほどだが、石器ブロック検出付近の層位には縄文時代以降の包含層である褐色土が全く認められなかったので、耕地利用時に耕作土が第3層中にまで達する削平を受けていた可能性が高いと判断した。石器ブロックの南側には第6号溝が構築されて第6・7層 (第2暗色帯) 以下まで掘り抜かれている。遺構上面には近代以降の耕作機械使用による溝状の攪乱溝が残っていたが、軟質ローム下部までは達していなかった。以上の点から石器ブロック付近には、溝構築による遺構南側損壊と近年の耕作行為による平面的な削平が及んでいると判断した。また石器の検出状態を観察したが、10mm×10mm以上の剥片の全点で、幅計測軸が垂直方向に立つ状態で埋没していた。よって今回調査により検出した石器が、当時の状態のまま遺存していたとは考えにくい。水洗選別作業によって炭化物片と同時に碎片化した焼土片を多量に回収したことも併せて、現地での検出作業で焼土集中ヶ所を認識できない程に包含層の軟質・土壌化が進行した結果と考えられる。

**検出遺構と遺物 (第106~109図)** 石器ブロックは、第3次調査によって検出した埋没谷に向かって傾斜が始まる平坦地縁辺の傾斜変換線標高27m付近に位置する。平面分布範囲は東西2.2m、南北1.4mで垂直分布範囲は26.7m~26.4mの0.3mの幅である。

検出位置を記録した遺物が50点、動物の生活痕跡で生じた攪乱内検出遺物が1点、調査開始時に地表に露出していた遺物が4点、第3次調査時の未報告遺物が1点、水洗選別作業によって回収した微細遺物が石器71点、礫片2点の合計129点である。検出した全遺物の器種別内訳は槍先形尖頭器1点、剥片19点、調整剥片107点、礫片2点である。石材別内訳はガラス質黒色安山岩76点、メノウ42点、玉髓5点、チャート3点、ホルンフェルス1点、砂岩2点 (礫片) となる (器種・石材関連表参照)。その他に自然遺物として、炭化物片約170点と炭化種子1点、多数の焼土碎片と共に遺物集中ヶ所から5mm×3mm×3mmの灰白色塊を2点検出した。自然遺物はすべて水洗選別作業による回収物である。

槍先形尖頭器 (第108図2~3) は石器ブロック脇で検出した。器体成形のため押圧剥離による調整加工を実施し、正面表示範囲の大半を調整加工面で覆っている。左側縁は中央付近に角を残すように突出していて、突出部分は表裏両面の調整剥離が集中している。上端から突出部にかけて、さらに縁辺が屈折しこの付近の剥離面の状態から、押圧剥離ではなく打撃による剥離面である。一方、右側縁は背面側に集中的に押圧剥離による成形が施され、縁辺は曲線状に成形していて左側縁状の突出部はない。腹面側には調整加工を施していない。まだ完成形状には達しておらず、完成形状は片面の加工程度が高く片側に突出部のある槍先形尖頭器となるだろう。背面調整ヶ所には、成形時に剥離した調整剥片が2点接合した。うち1点は、水洗選別によってサンプル2から一括回収した3mm×4mm規模の調整剥片 (一括資料) である。

調整剥片 (第108図4~第109図13) とした遺物は、数mm単位の線状や点状となる小さな打点を持ち、平面形状が短冊状から扇状まであり、側面形状では剥離が末端方向に進むに従って腹面側に湾曲する。石核に対



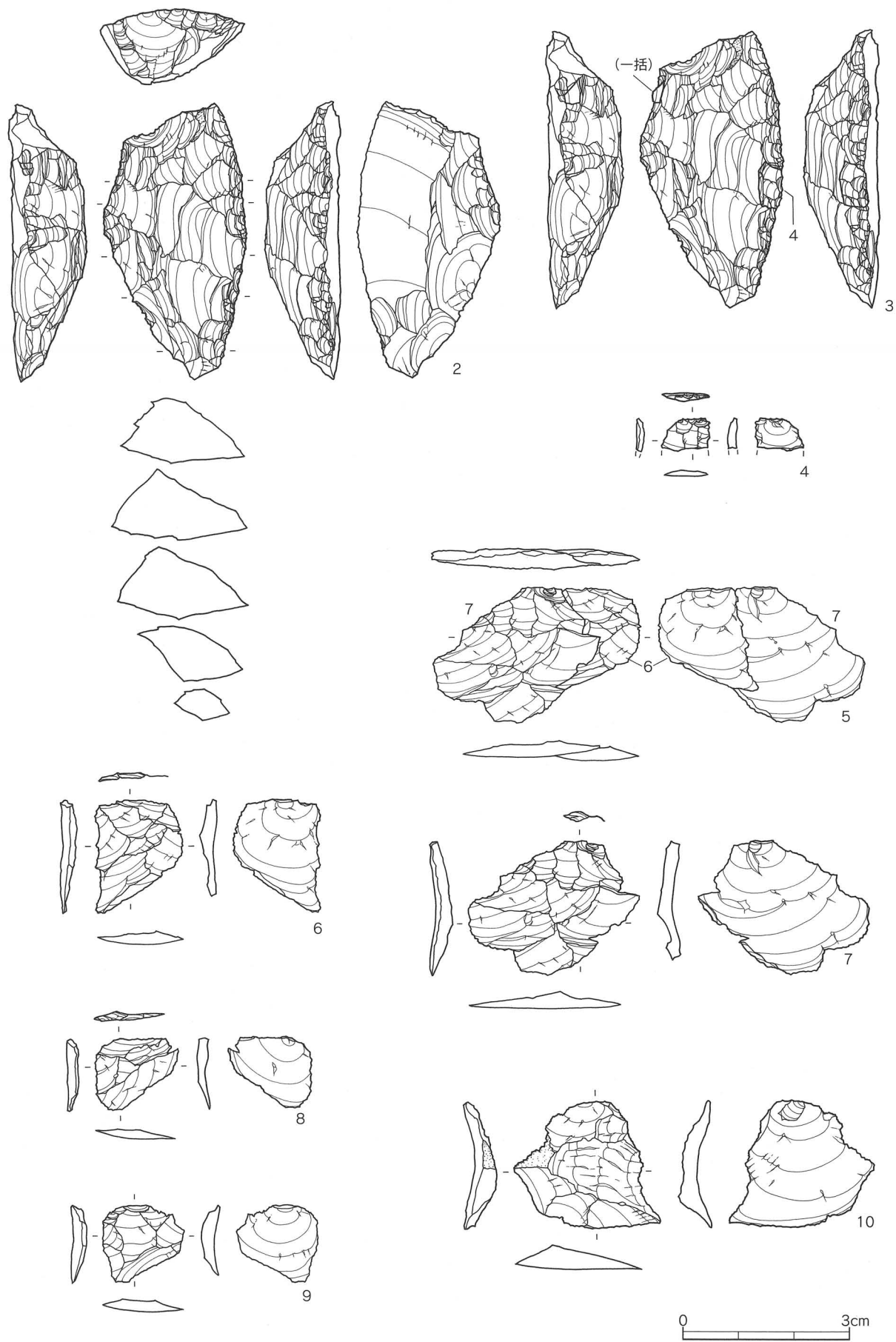
旧石器器種・石材相関表								
器種 \ 石材	硬質頁岩	ガ黒安	メノウ	玉 髓	チャート	ホルンフェルス	砂 岩	小 計
ナイフ形石器	1	0	0	0	0	0	0	1
槍先形尖頭器	0	0	1	0	0	0	0	1
調 整 剥 片	0	63	37	5	3	1	0	109
剥 片	0	13	4	0	0	0	0	17
礫 片	0	0	0	0	0	0	2	2
小 計	1	76	42	5	3	1	2	130

し直接打撃により剥離作業を施した際に多数生じる碎片とは形状が異なることから、ナイフ形石器や槍先形尖頭器を製作するなど素材剥片に調整加工を施した際に生成された調整剥片と判断した。検出地点記録遺物で36点、水洗選別作業による回収した遺物は71点である。遺存形態でA・Bの2種類に細分した。調整剥片Aは点状の打点とバルブが残り剥離方向が確認可能なもの。調整剥片Bは打点部が遺存していない物とした。図示した調整剥片は、すべて調整剥片Aに該当する石器である。

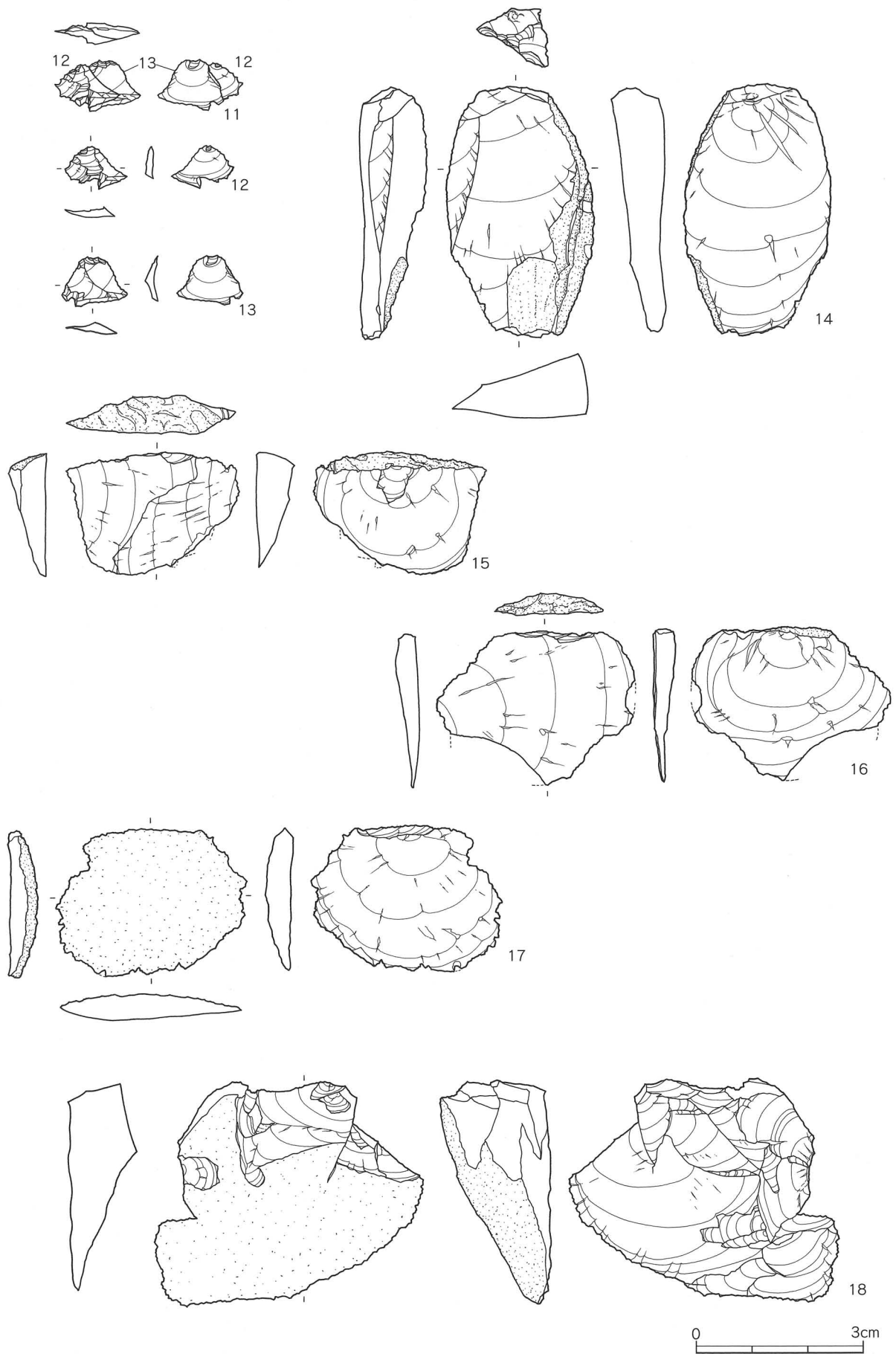
4は2の槍先形尖頭器と接合関係を示す調整剥片で、個別の実測図として掲載しなかった水洗選別によって回収した一括資料と共に、器体成形作業が石器ブロック内で実施されたことを印象付ける資料である。5～7はガラス質黒色安山岩製で調整剥片同士の接合資料である。末端側はステップフラクチャーを生じている。8～10は接合状態が確認できなかった、ガラス質黒色安山岩製の調整剥片である。8、9では腹面の剥離方向と一致する複数の剥離面が背面に認められる。10は背面中央部に剥離方向が集中する複数の剥離面から構成され、器体成形時に調整部分を大きく除去する結果となったものと見られる。11～13は、接合関係を確認した玉髓製の調整剥片である。形状を観察すると剥離面が腹面側に向かい湾曲する形状で、打面が線状や点状で押圧剥離によって生じた物である。メノウ製品と同様に、玉髓を使用して槍先形尖頭器の製作が行われたことを示す資料である。

剥片（第109図14～18）は、器体の側縁や打面に自然面が残り、円礫に対する剥離作業の初期段階に生産された物である。形状が規格的に揃う様相は認められず、縦長・横長と言うよりも「鱗状」と称するような不定形剥片ばかりである。14には打面に剥離時に生じた割れ円錐の上面部が認められる。剥離に使用した工具と石材の接面部分が剥離時の傷として残っているもので、接面の規模が直径1.8mmほどの工具であったと見られる。18は腹面に多数の小規模な剥離面が認められるが、転礫時に生じた衝突痕や潜在化した破砕面が露出したと考えられる。





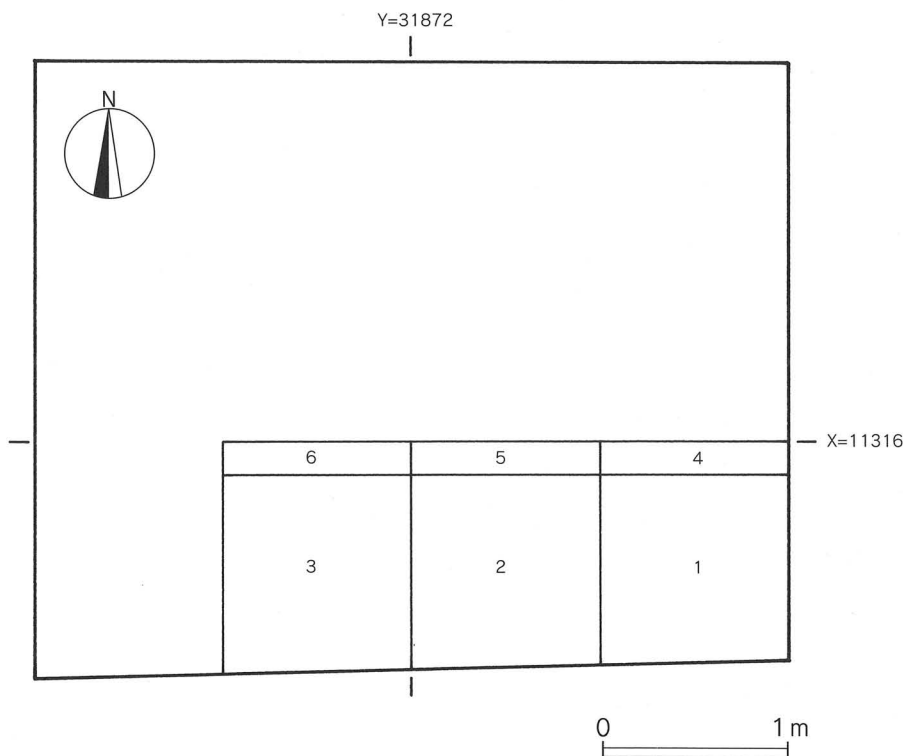
第108図 北部調査区検出の旧石器 (1)



第109図 北部調査区検出の旧石器 (2)

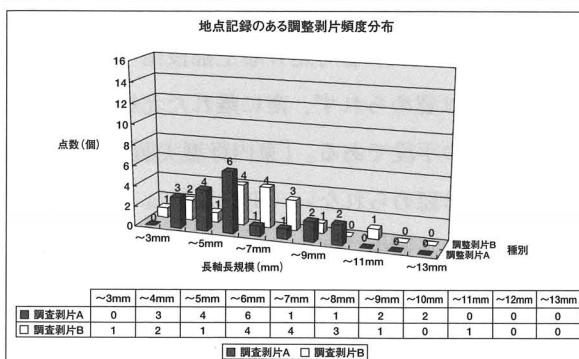
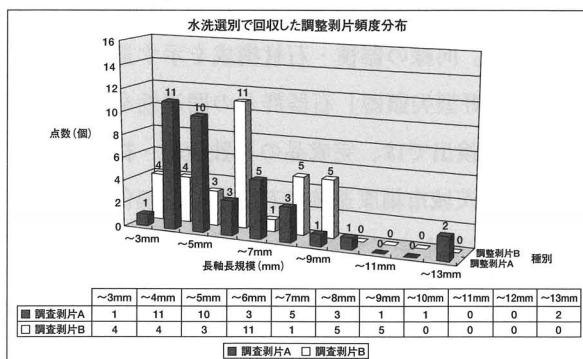
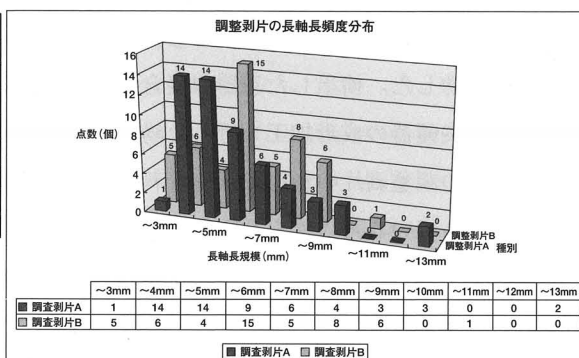
4) 水洗選別・浮遊物質回収作業について (第110図、PL 52)

今回の調査では、現地にて検出地点を記録化できない微細な石器が多数見落とされる可能性は当初から考えていた。特に5mm未満の石器は、包含遺物の3割から4割程度しか検出できないことは以前の発掘調査で経験してきた [窪田1995]。調査着手当初から、検出した遺物の大半が調整加工の施された石器の加工の場で



第110図 水洗選別サンプル設置図

	ガ黒安	メノウ	玉 髄	チャート	ホルン	砂 岩	小 計
サンプル1	4	5	0	1	0	0	10
サンプル2	21	11	1	1	1	1	36
サンプル3	7	5	1	0	0	0	13
サンプル4	1	0	0	0	0	0	1
サンプル5	3	4	0	0	0	1	8
サンプル6	4	1	0	0	0	0	5
小計	40	26	2	2	1	2	73



あるとの見解を持ったため、調査工程の一つとして微細な石器の回収のための作業を実施した。

現地では、掘削作業に着手する際に中心部1m×3mの範囲を1m×0.7m毎に東側から順に1～3区に設定した。セクション設定ヶ所はブロック中を通る状態であったことから、長さ1m×幅0.17m毎に3分割して4～6区とし土壌を回収した。回収した土嚢袋は合計45袋になった。

作業手順は、土嚢袋に回収してきた土壌を5mmと2.5mmの異なる2種類のサイズの篩を通して、水洗作業を実施した。これは見落とした遺物の大きさによる篩い分けを行うと共に、水捌けを考慮したためである。各篩に残った残渣物を新聞紙の上に広げ、一定期間乾燥するのを待って微細遺物の回収作業を実施した。浮遊物質の回収も実施したが、現生植物の細根のみで包含遺物と同時期と判断できる物の回収は無かった。

水洗選別作業の結果、石器は71点、礫片は2点を回収したが、その他にも2mm大の炭化物片を約170点、イネ科と見られる炭化種子1点、縄文土器様に赤く発色した焼土粒子を多数回収した。その他に白色の軟質粒2点がある。分布範囲は、炭化物片・焼土粒子ともに集中ヶ所は石器が多数検出できた範囲と重複する。現地では軟質ロームが硬質ロームヶ所に楔状に入り込む軟質化が進行した状態であり、遺物の遺存状態や垂直分布状況からも当時の地表面が安定していたとは考えられず、炉跡は認識できなかった。しかし、焼土粒子が炭化物片とはほぼ同じ範囲に集中していたことから、石器ブロック付近で火を使用した可能性は高いと考えられる。

回収した人工遺物の主体は調整剥片であるが、検出地点を記録した遺物で器体の一部を検出時に損壊してしまった破片も1点含まれる。類別点数では調整剥片Aが37点、調整剥片Bが33点となる。重量は0.1g未満でしかなく、重量感に乏しい遺物である。長軸規模の様相では、調整剥片Aでは2.3mmから10.0mmの間と12.1mmから13.0mmの範囲に分布し、2.6mmから3.5mmの範囲に22点(59.46%)が集中した。調整剥片Bでは2.5mmから9.0mmの範囲に分布し、5.0mmから6.0mmに11点(33.33%)と弱い集中範囲がある。このうち1区から回収した遺物10点のうち、1点が槍先形尖頭器と接合関係があることを確認した。

## 5) 旧石器時代のまとめ

今次調査では、北部調査区内で常名台遺跡群において初めて、関東ローム層中から石器集中ヶ所を検出することに成功した。検出した石器の接合作業を実施した結果、石器集中ヶ所は少なくともメノウ材を使用して、槍先形尖頭器の成形加工を行った場所であると理解するに足りる資料を得た。また他のガラス質黒色安山岩や玉髓の調整剥片の形態や接合資料の確認が可能であることから、各々の石材を使用した槍先形尖頭器の加工を行っている可能性を推定した。槍先形尖頭器は、器体の成形状況から「東内野型尖頭器」製作の可能性も考えてみたが、最大の特徴を示す「削片」剥離の存在は確認できなかったため、あくまで推定の域を出ないと断っておく。

石器ブロックの形成時期については、第3層がAT降灰期以降であり打面転移型による不定形剥片の生産傾向から、立川ローム層対比IV層上部段階の石器群として理解した。同様の器種・石材構成を示す遺跡は現時点で周辺には認められず、南に離れた北総台地に分布する「東内野型尖頭器」石器群との関連性を考えてみるのも一つの手段である。「東内野型尖頭器」の茨城県内における検出では、完成品の単独検出・採集例ばかりで製作例は認められない[川口 2002a・2002b、窪田 2000]。北茨城市細原遺跡の石器群は、製作工程で両面体の成形から途中で削片を剥離し最終的に尖頭器としての器体成形を完了するという内容を示し、「東内野型尖頭器」と類似するが、完成形状では槍先と見るよりも彫刻刀と見る意見[鈴木 1997]もあり、使用痕も含めた観察が必要である。

南部調査区ではナイフ形石器の完成品を単独で検出した。石器出土地点の周囲を拡張して調査しても関連資料の追加が無く、常名台遺跡群全体では石器の検出事例の大半がこうした単独検出事例である。住居の構築など面積と深度の有る掘削行為を伴う後世の土地利用頻度の高い地区では多く、今次調査のように掘削行為程度の低い場所では少ないように思える。

調査方法の点では、石器集中ヶ所の土壌を移動・廃棄せずに見落としてしまう微細な遺物の回収作業を実施した結果、人工遺物としては検出地点の記録化に成功した50点を越える70点を回収した。遺物の観察や接合関係を示す資料の確認に成功するなど、地点記録遺物の観察から得た石器製作の場である根拠をさらに補強する結果となった。さらに、現地作業では認知できなかった火の使用の痕跡を示す自然遺物を回収し、居住関連の遺構の存在を推測させる情報が得られた。調査に臨む場合、見落とす遺物をいかに少なくするか注意しているが、10mm未満の微細遺物を含めすべての遺物の位置を記録するのは、様々な制約の上での発掘作業であるため現実的には不可能に近い。微細遺物が示す内容は、遺跡の機能をより明らかにすることが可能となるから、状況に応じて遺物集中ヶ所の水洗選別作業事例が増加することを望みたい。

今後の常名台遺跡群の調査において、同様な遺構の検出が継続されることを期待したい。

#### [参考文献]

- 川口武彦 2001 「花室川流域の『砂川期』遺跡」『石器文化研究』10 PP.131-141. 石器文化研究会
- 川口武彦 2002a 「水戸市栗崎町出土の有樋尖頭器—大串貝塚LECセンター所蔵資料の紹介—」『婆良岐考古』24号 PP.73-83. 婆良岐考古同人会
- 川口武彦 2002b 「石器群の様相—ナイフ形石器新段階—」『茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と課題—』発表要旨・資料集 PP.40-48. ひたちなか市教育委員会 茨城県考古学協会
- 窪田恵一 1995 「第三章 縄文時代 第1節 遺構 4. 竪穴状遺構」『東北縦貫自動車道路弘前線（東京外かく環状道路）に係る埋蔵文化財発掘調査報告③ もみじ山遺跡Ⅱ』PP.38-54. 日本道路公団 東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会
- 窪田恵一 2000 「茨城県水海道市中坪遺跡採取の旧石器時代資料—下総台地北縁における樋状剥離を有する槍先形尖頭器—」『常総台地』15 PP.13-20. 常総台地研究会
- 鈴木次郎 1997 「南関東におけるナイフ形石器文化の彫器(3)—いわゆる「細原型彫器」について—」『神奈川考古』33 PP.1-32. 神奈川考古同人会

#### 《分布図・観察表の凡例》

南部調査区・北部調査区器種別分布図 ●：二次加工石器 ▲：調整剥片 ○：剥片

北部調査区石材別分布図 ○：ガラス質黒色安山岩 ●：メノウ □：玉髓 △：チャート

石器観察表 〈測量単位〉X・Y：国家座標第IX系原点からの距離メートル 標高：メートル

〈器種〉ナイフ：ナイフ形石器 調剥：調整剥片 槍尖：槍先形尖頭器

〈石材〉硬頁岩：硬質頁岩 ガ黒安：ガラス質黒色安山岩 チャト：チャート

〈計測単位〉長さ・幅・厚さ・打面長・打面幅：ミリメートル・mm 重量：グラム・g

〈打面形状〉複剥：複剥離面 単剥：単剥離面 自然：自然面

南部調査区の旧石器観察表

図	遺物	X	Y	標高	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	打面	打面長	打面幅	剥離角	接合
1	1	11278.48	31819.72	26.975	ナイ	硬頁岩	58.4	21.1	5.4	5.4	0	0	0	0	

北部調査区の旧石器観察表 (個別資料No.を付記したもの)

図	遺物	X	Y	標高	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	打面	打面長	打面幅	剥離角	接合
14	1	11315.76	31871.45	26.678	剥片	ガ黒安	43.7	26.5	10.8	12.7	複剥	9.9	13.9	134	
	2	11315.20	31871.41	26.662	剥片	ガ黒安	12.0	10.1	3.1	0.2	0	0.0	0.0	0	
	3	11315.69	31871.83	26.700	剥片	ガ黒安	15.1	12.7	1.8	0.4	0	0.0	0.0	0	
	4	11315.63	31871.83	26.682	調剥	メノウ	6.8	7.6	2.4	0.1以下	線状	0.6	5.7	0	
	5	11315.73	31871.96	26.710	剥片	メノウ	8.1	13.6	1.7	0.1	線状	0.2	4.4	0	
	6	11315.50	31871.82	26.443	調剥	ガ黒安	6.1	7.6	0.9	0.1以下	0	0.0	0.0	0	
	7	11315.14	31871.83	26.676	調剥	ガ黒安	8.1	7.9	1.3	0.1以下	線状	0.2	3.8	0	
	8	11315.37	31871.96	26.618	剥片	ガ黒安	20.4	11.5	2.3	0.5	線状	0.0	0.0	0	
	9	11314.92	31872.02	26.507	調剥	ガ黒安	7.2	12.7	1.2	0.1	0	0.0	0.0	0	
	10	11315.54	31872.02	26.535	調剥	ガ黒安	5.3	4.5	0.7	0.1以下	0	0.0	0.0	0	
4	11	11315.72	31872.23	26.557	調剥	メノウ	5.6	8.6	1.5	0.1以下	線状	0.6	4.0	120	52
	12	11315.55	31872.38	26.531	剥片	ガ黒安	12.7	14.1	1.3	0.2	0	0.0	0.0	0	
16	13	11315.51	31872.45	26.615	剥片	ガ黒安	27.4	35.4	4.0	2.7	自然	3.7	18.9	118	
	14	11315.08	31872.23	26.546	調剥	ガ黒安	5.9	8.3	1.2	0.1以下	単剥	0.9	2.8	91	
	15	11315.22	31872.38	26.547	調剥	ガ黒安	3.2	7.1	1.9	0.1以下	単剥	1.7	4.6	94	
	16	11315.53	31872.53	26.510	調剥	ガ黒安	6.6	10.4	1.5	0.1以下	0	0.0	0.0	0	
	17	11315.60	31872.62	26.528	調剥	ガ黒安	4.7	6.7	0.8	0.1以下	線状	0.2	3.1	0	
	18	11315.44	31872.70	26.567	調剥	メノウ	9.6	9.1	1.5	0.1	線状	0.5	2.1	103	
	19	11315.22	31872.79	26.564	剥片	メノウ	16.2	13.7	3.5	0.9	単剥	1.4	4.1	124	
	20	11315.03	31872.94	26.580	調剥	メノウ	5.9	7.0	1.1	0.1以下	0	0.0	0.0	0	
	21	11315.29	31872.97	26.572	調剥	ガ黒安	6.3	12.4	3.1	0.1	0	0.0	0.0	0	
7	22	11315.78	31872.76	26.535	調剥	ガ黒安	20.3	30.1	3.3	1.5	単剥	1.4	3.7	100	23
6	23	11315.65	31872.88	26.485	調剥	ガ黒安	20.4	15.8	2.6	0.8	線状	0.7	12.1	108	22
	24	11315.18	31873.20	26.575	調剥	ガ黒安	4.7	9.4	1.3	0.1以下	単剥	0.8	4.7	134	
	25	11315.11	31873.30	26.545	調剥	ガ黒安	7.1	10.1	1.8	0.1以下	0	0.0	0.0	0	
	26	11316.12	31873.17	26.621	調剥	ガ黒安	10.8	8.7	2.5	0.2	0	0.0	0.0	0	
	27	11316.46	31873.38	26.608	調剥	ガ黒安	8.7	9.7	1.0	0.1以下	線状	0.0	0.0	0	
	28	11316.44	31872.72	26.647	調剥	メノウ	9.8	13.7	4.1	0.4	複剥	4.3	10.6	111	
	29	-	-	-	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	30	-	-	-	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	31	11315.83	31871.38	26.640	調剥	メノウ	5.5	6.7	1.1	0.1以下	単剥	0.5	2.8	104	
	32	11315.78	31871.89	26.687	調剥	チャト	3.4	4.8	0.7	0.1以下	点状	0.0	0.0	0	
	33	11315.72	31871.87	26.651	剥片	メノウ	13.8	10.0	9.7	0.9	0	0.0	0.0	0	
	34	11315.66	31871.83	26.615	調剥	メノウ	5.1	8.3	0.8	0.1以下	線状	0.6	2.3	0	
12	35	11315.09	31871.85	26.625	調剥	玉髓	8.3	11.6	2.2	0.2	0	0.0	0.0	0	一括4
	36	11314.91	31872.09	26.473	調剥	ガ黒安	7.7	12.3	1.3	0.1	0	0.0	0.0	0	
	37	11315.79	31872.18	26.543	調剥	メノウ	4.2	4.1	1.6	0.1以下	点状	0.2	4.2	0	
	38	11315.67	31872.80	26.508	調剥	ガ黒安	6.5	7.5	1.3	0.1以下	0	0.0	0.0	0	
	39	11315.95	31871.23	26.677	調剥	ガ黒安	4.7	5.2	0.8	0.1以下	0	0.0	0.0	0	
	40	11315.88	31871.27	26.660	剥片	ガ黒安	11.3	12.0	2.6	0.3	0	0.0	0.0	0	
	41	11315.85	31872.17	26.681	調剥	玉髓	5.9	6.1	0.9	0.1以下	点状	1.0	6.7	82	
	42	11315.96	31872.16	26.610	調剥	ガ黒安	5.1	5.7	0.9	0.1以下	0	0.0	0.0	0	
	43	11315.98	31872.33	26.610	調剥	ガ黒安	3.7	4.9	1.0	0.1以下	0	0.0	0.0	0	
	44	11315.96	31872.33	26.655	調剥	ガ黒安	3.5	4.8	0.6	0.1以下	0	0.0	0.0	0	
	45	11315.98	31872.33	26.647	調剥	ガ黒安	5.7	4.4	2.3	0.1以下	0	0.0	0.0	0	
	46	11315.88	31872.42	26.693	調剥	メノウ	2.4	4.8	1.3	0.1以下	0	0.0	0.0	0	
8	47	11315.86	31872.86	26.598	調剥	ガ黒安	12.5	15.3	2.1	0.3	複剥	1.4	11.0	110	
	48	11315.90	31872.90	26.643	調剥	ガ黒安	3.5	5.2	1.2	0.1以下	単剥	0.7	3.5	90	
	49	11315.84	31872.85	26.600	調剥	メノウ	5.5	5.4	1.5	0.1以下	単剥	0.3	2.3	115	
	50	11316.00	31873.16	26.645	調剥	ガ黒安	8.0	5.6	0.7	0.1以下	点状	0.5	3.1	95	
	51	11315.86	31872.07	26.534	調剥	ガ黒安	4.9	3.6	0.6	0.1以下	点状	0.6	2.4	95	
2	52	11316.59	31870.18	26.741	槍尖	メノウ	49.4	25.6	12.2	14.8	0	0.0	0.0	0	11・一括

一括扱いの旧石器観察表 (水洗選別により回収した資料は除く。)

図	遺物	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	打面	打面長	打面幅	剥離角	接合
17	一括1	剥片	ガ黒安	26.4	33.9	5.2	4.5	単剥	2.9	15.7	136	
15	一括2	剥片	ガ黒安	21.4	30.7	6.5	3.2	自然	7.3	29.7	110	
10	一括3	剥片	ガ黒安	22.8	26.3	5.3	1.9	線状	1.1	7.5	0	
13	一括4	調剥	玉髓	7.6	10.4	2.4	0.1	線状	0.5	2.0	0	35
	一括5	調剥	メノウ	5.6	7.0	1.3	0.1	線状	1.1	2.0	90	
18	一括6	剥片	メノウ	42.6	47.5	14.9	21.2	単剥	10.8	37.7	122	
9	一括7	調剥	ガ黒安	13.0	14.6	2.6	0.5	単剥	0.9	4.8	98	

## 2. 掘立柱建物跡 (SB)

掘立柱建物跡は全部で10棟を検出した。その時期は、出土遺物、矩形の区画を意識した堀である第6号溝との関わり、軸線の踏襲等からいずれも中世でも前半、鎌倉時代のもと考えられる。特に第6号溝と柱穴からの出土遺物の時代幅は、13世紀代にはほぼ収まる。

第10号以外の9棟の建物は調査区の南東隅(7Grid)に集中し、柱穴の並びがエリア外にかかるものもあるため、建物群の調査区外への広がりが予想される。第5号と第6号、第7・8・9号の建物はそれぞれ切り合い関係を有している。第7・8・9号は、特にピットの密集区域にあたり、調査時には明確なプランが認定できず整理作業の段階で抽出したものである。そのため「残されたピット」が少なからず存在し、解釈が異なる可能性を残す。

建物の認定と柱穴の抽出に当っては、建物に関係する可能性のあるものはなるべく拾い出し図化した。そのため直接には伴わない可能性のあるものも図上には含んでいる。

### 第1号建物跡 (SB-1) [第111図、PL 48・49・53]

**位置** 調査区南東、K29区からL29区(7Grid)にかけて位置する。重複関係はない。

**規模と構造** 桁行3間、梁行1間、南北に下屋が付く。桁行方向をN-89°-Eとする東西棟である。規模は桁行3.50m、梁行1.40m、下屋を含めた梁行は3.80mである。

**柱穴** P1・10間とP5・13間は、注意したが柱穴は見つからなかった。P4は規模の点から、建物に伴わない穴の可能性が有る。P6・9は覆土や形状から生きたピットであるが、位置的に当建物のものにするには不自然さも残る。ただしながら、P14とP9とで同一個体の可能性がある土器皿(第124図5・7)が出土したことから、SB-1に含めて報告した。

**覆土** P7・9・12では、柱の抜き取り痕と思しき堆積が確認された。P11・14・15・16でも注意したが、その痕跡は断面には見られなかった。

**遺物** P3の覆土中から土師質土器小皿(第124図6)が、P8から常滑甕の体部(同図9)、土師質土器平底皿(同図8)、鉄製品片(未実測)が、P14から土師質土器平底小皿(同図7)、P9から土師質土器平底小皿(同図5)がそれぞれ出土した。出土位置的には柱の裏込めと柱痕の境の位置にあたる。

**所見** 当建物跡は、出土遺物から中世(13世紀)に営まれたものと思われる。

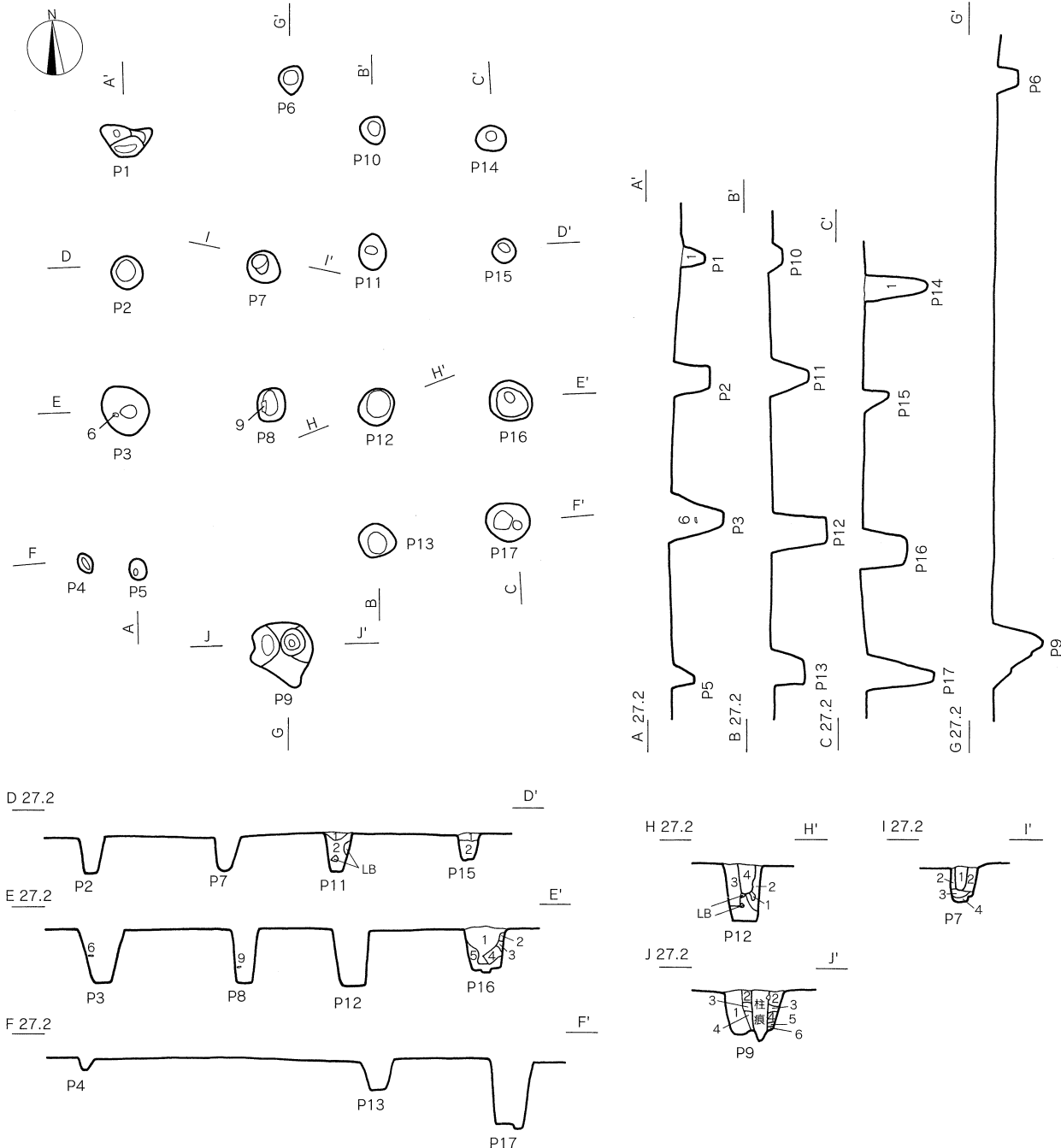
### 第2号建物跡 (SB-2) [第112図]

**位置** SB-1の北1.5m、調査区南東寄りのK28区からL28区(7Grid)にかけて位置。重複関係なし。

**規模と構造** 桁行2間、梁行1間、桁行方向をN-5°-Wとする南北棟。規模は桁行2.90m、梁行1.30m。

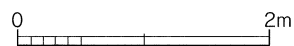
**柱穴** P9は生きた柱穴だが、南北棟との関係は明らかでない。P1・5の東西延長線上とP9の南北延長線上の交差する付近を注意したが、柱穴は見つからなかった。P3・7は位置的に建物に伴わない穴の可能性が有る。覆土の断面観察は行わなかった。柱穴からの出土遺物なし。

**所見** この建物跡に帰属する出土遺物はないが、SB-1と南北の軸線が近くその北側に隣接することから、ほぼ同時期のものと考え、中世(13世紀)に営まれたものとする。



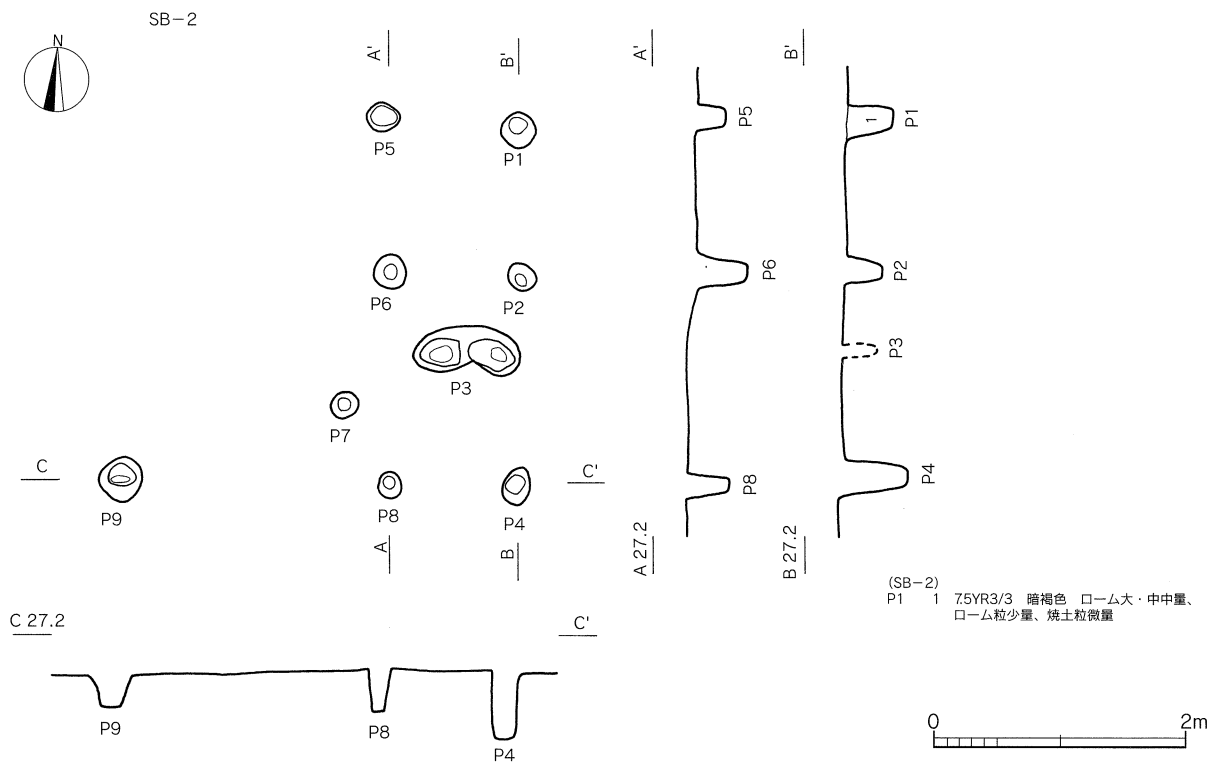
(SB-1)

P1	1	7.5YR4/4	褐色	粘性なし、しまり弱
P7	1	7.5YR3/2	黒褐色	ローム粒少量、ローム小微量、粘性・しまりなし
	2	7.5YR6/3	にぶい褐色	ローム小・粒少量、ローム大微量、粘性なし、しまり弱
	3	7.5YR2/3	極暗褐色	粘性なし、しまり弱
P9	1	7.5YR4/3	褐色	ローム小・粒微量、粘性・しまりなし
	2	7.5YR2/1	黒色	ローム中・粒微量、粘性・しまりなし
	3	7.5YR5/6	明褐色	ローム大～粒多量、粘性なし、しまり普通、ロームがブロック状に混入
	4	7.5YR3/4	暗褐色	ローム粒微量、粘性なし、しまり弱
	5	7.5YR4/4	褐色	ローム大・中・粒、黒色土粒多量、粘性なし、しまり強
	6	7.5YR2/2	黒褐色	ローム粒・黒色土粒微量、粘性なし、しまり強
P11	1	7.5YR3/2	黒褐色	ローム大微量、粘性・しまりなし
	2	7.5YR4/4	褐色	ローム粒微量、粘性なし、しまり弱
P12	1	7.5YR2/3	極暗褐色	ローム小・粒中量、ロームブロック、粘性・しまりなし
	2	7.5YR4/6	褐色	ローム粒中量、黒色土粒微量、粘性なし、しまり弱
	3	7.5YR4/6	褐色	ローム小・粒中量、黒色土粒微量、粘性なし、しまり弱
	4	7.5YR3/2	黒褐色	炭化粒多量、ローム粒中量、粘性・しまりなし、抜き取り痕か
P14	1	7.5YR3/3	暗褐色	ローム大・粒少量、焼土粒・炭化粒微量、粘性・しまりなし
	2	7.5YR2/3	極暗褐色	ローム粒微量、粘性・しまりなし
P15	1	7.5YR4/6	褐色	ローム小・粒多量・粘性なし、しまり弱
	2	7.5YR4/6	褐色	ローム小・粒多量・粘性なし、しまり弱
P16	1	7.5YR3/3	暗褐色	ローム粒少量、ローム中中量、粘性・しまりなし
	2	7.5YR5/8	明褐色	ローム大・粒多量、粘性なし、しまり普通
	3	7.5YR4/4	褐色	ローム小・粒多量、粘性なし、しまり普通
	4	7.5YR5/6	明褐色	ローム中～粒多量、粘性なし、しまり普通



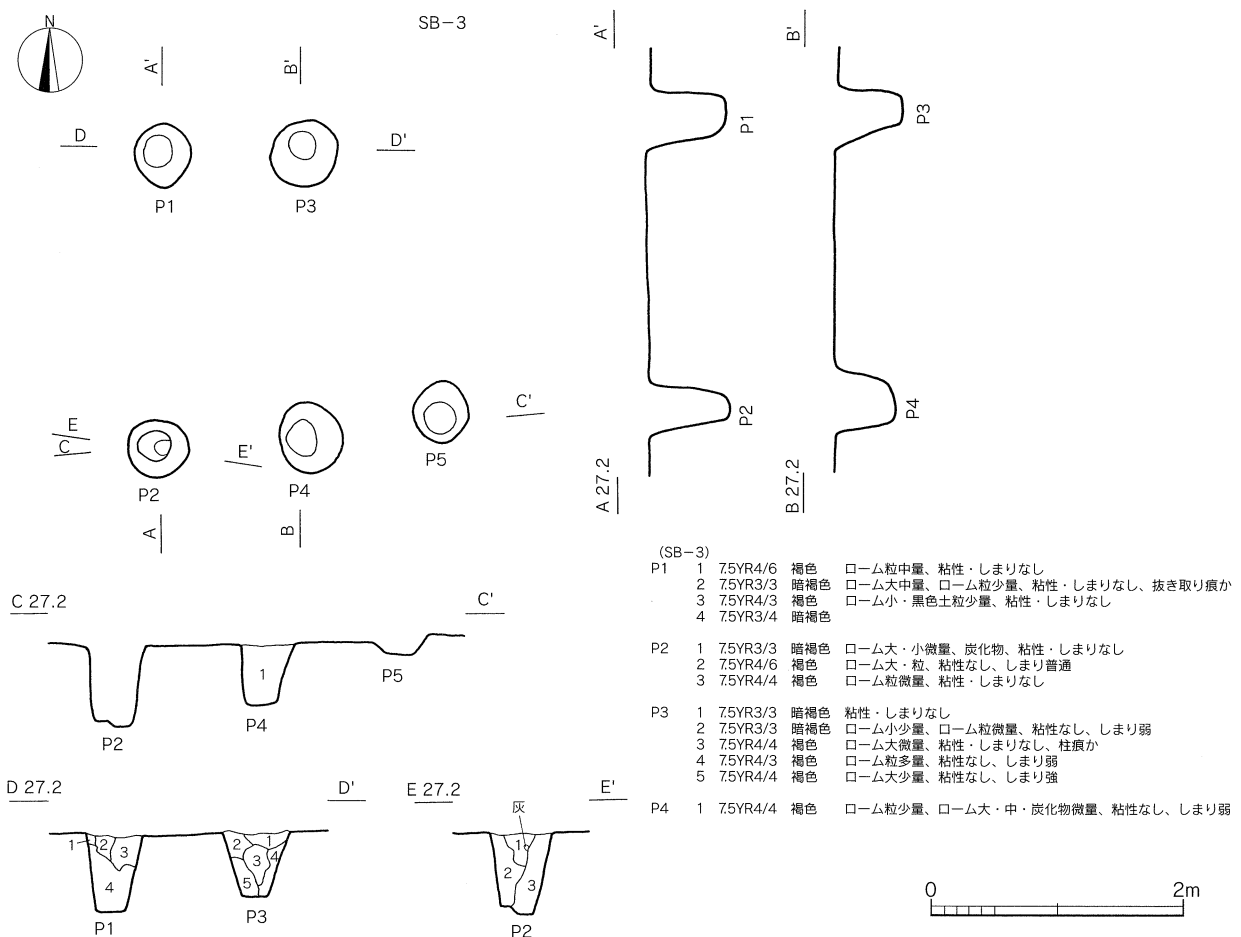
第1111図 第1号建物跡





(SB-2)  
P1 1 75YR3/3 暗褐色 ローム大・中中量、  
ローム粒少量、焼土粒微量

第112図 第2号建物跡



(SB-3)  
P1 1 75YR4/6 褐色 ローム粒中量、粘性・しまりなし  
2 75YR3/3 暗褐色 ローム大中量、ローム粒少量、粘性・しまりなし、抜き取り痕か  
3 75YR4/3 褐色 ローム小・黒色土粒少量、粘性・しまりなし  
4 75YR3/4 暗褐色  
P2 1 75YR3/3 暗褐色 ローム大・小微量、炭化物、粘性・しまりなし  
2 75YR4/6 褐色 ローム大・粒、粘性なし、しまり普通  
3 75YR4/4 褐色 ローム粒微量、粘性・しまりなし  
P3 1 75YR3/3 暗褐色 粘性・しまりなし  
2 75YR3/3 暗褐色 ローム小少量、ローム粒微量、粘性なし、しまり弱  
3 75YR4/4 褐色 ローム大微量、粘性・しまりなし、柱痕か  
4 75YR4/3 褐色 ローム粒多量、粘性なし、しまり弱  
5 75YR4/4 褐色 ローム大少量、粘性なし、しまり強  
P4 1 75YR4/4 褐色 ローム粒少量、ローム大・中・炭化物微量、粘性なし、しまり弱

第113図 第3号建物跡

第3号建物跡 (SB-3) [第113図、PL 48・49]

**位置** 調査区南東隅M30区とM31区 (7Grid) に位置する。重複関係なし。

**規模と構造** 桁行1間、梁行1間、桁行方向を $N-2^{\circ}-W$ とする南北棟である。規模は桁行2.42m (8尺)、梁行1.21m (4尺) である。調査区の南壁以南にも、柱穴の広がりを持つ可能性がある。

**柱穴** P1~4はいずれも深くしっかりした穴で、底面が堅く締るヶ所があった。P5は規模の点から、建物に直接伴わない可能性が強い。

**覆土** P2は底面に約10cm程度の段差があり、断面観察からは柱を1度抜き出して据え直した可能性がある。また、記録を撮らなかったがP4の覆土中から炭化物が出土した。

**遺物** P2から土師質土器小皿 (第124図10) が出土した。

**所見** 当建物跡は、出土遺物から中世 (13世紀) に営まれたものとする。

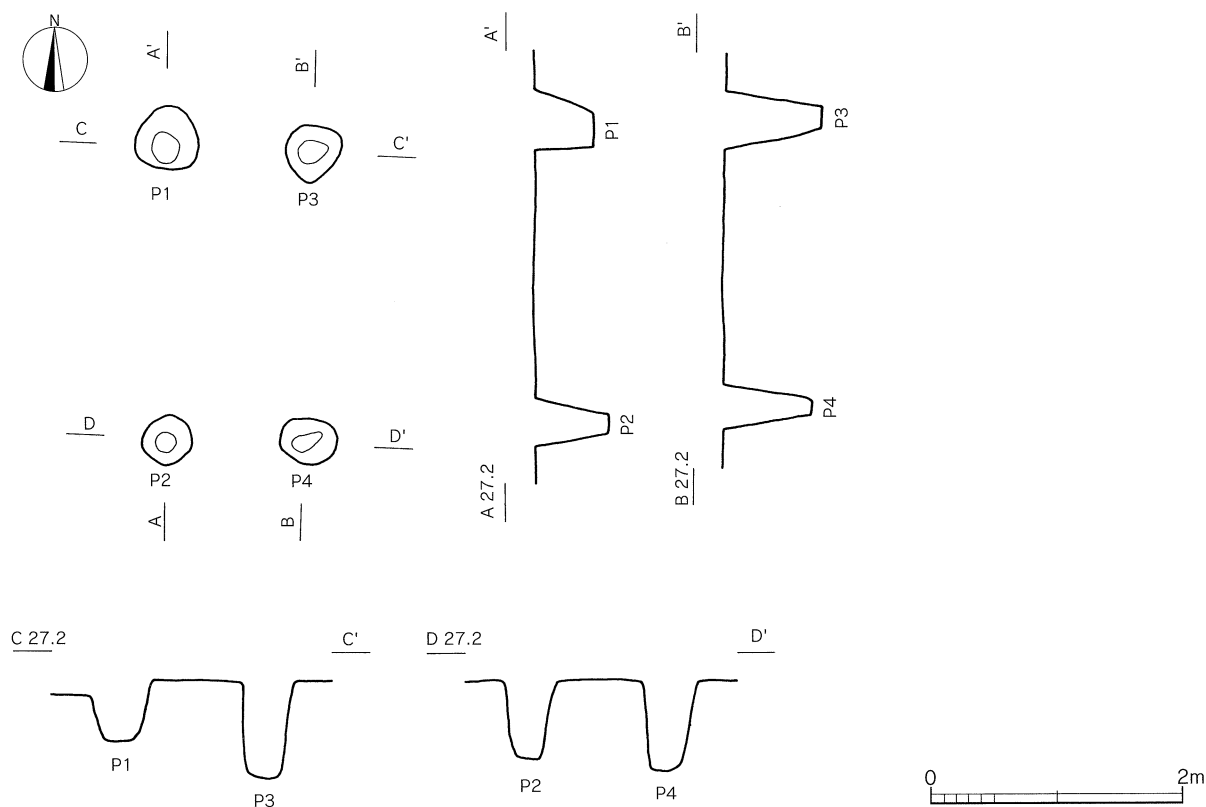
第4号建物跡 (SB-4) [第114図、PL 48]

**位置** SB-1の南約2m、調査区南東隅のK30・31区からL30・31区 (7Grid) にまたがる。重複関係はない。

**規模と構造** 桁行1間、梁行1間、桁行方向を $N-1^{\circ}-E$ とする南北棟である。規模は桁行2.42m (8尺)、梁行1.21m (4尺) である。

**柱穴** P1~4はいずれも深くしっかりした穴で、底面が堅く締るヶ所があった。覆土の断面観察は行わなかった。柱穴からの出土遺物もない。

**所見** 当建物跡からの出土遺物はないが、SB-3・1・5・6との軸線が近似することからほぼ同時期のものと考え、中世 (13世紀) に営まれたものとする。



第114図 第4号建物跡

第5号建物跡 (SB-5) [第115・116図、PL 49・53]

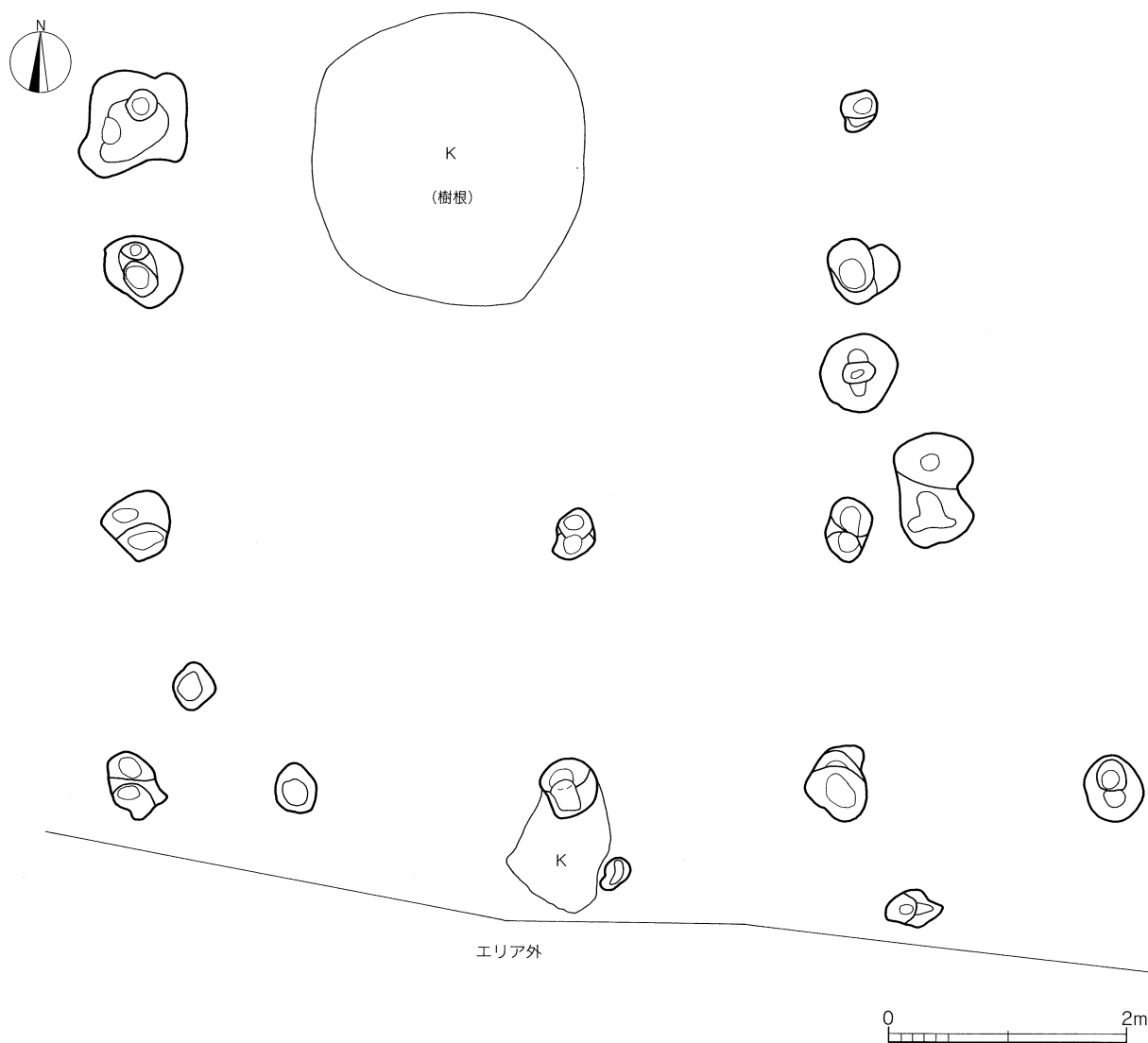
**位置** 調査区南壁際、I29・30区、J29・30区、K30区 (7Grid) にかけて位置する。

**重複関係** SB-6 とほぼ柱穴を重ねて重複する。P 6 覆土の断面観察からSB-5 の方が古いと判断。

**規模と構造** 桁行2間、梁行3間、北側に下屋がつき、桁行方向をN-89° - Eとする東西棟である。攪乱 (ケヤキの樹痕) のため不明だが、恐らくP1・7間、P2・8間の東西方向を結ぶ位置にも柱穴があったものと思われる。規模は桁行6.00m、梁行4.35m、下屋を含めると5.62mである。また南側にも下屋が付く場合、調査区南壁以南にも東西方向に柱穴が並んでいた可能性が高い。

**柱穴** 遺構確認時に柱穴の上面がダルマ形に見えたため、建物の重複の可能性を想定した。実際に掘り進めると底面に段差があるものが多く、重複を裏付ける結果となった。平面形が張出すものもあるが、これら不均一な広がりには抜き取り時のものと考えている。ただし、P1・2・9・12は、夏場の乾燥のために壁が崩落したものである。P13・15・16・17は直接SB-5・6に伴わない可能性が高い。またP9も規模と位置的に建物との関係がやや乏しい。P12は明らかに生きた柱穴であるが、張出した部分なのだろうか。

**覆土** 断面観察をしたP6を見る限り、重複する柱穴の北側の方が切り合い関係は新しい。ただし観察し



第115図 第5・6号建物跡柱穴平面図

得た全ての覆土で切り合いが観察できたわけではなく、層序が不明確なものも多い。

**遺物** 直接遺構に伴うものではないが、P6の南縁にかかる攪乱中から土師質土器丸底皿（第124図4）が出土した。遺物の形状と技法の点から建物群の時期と等しい中世前期のものであることから、SB-5か6のどちらかの時期に伴うものであろう。

**所見** 当建物跡に直接帰属する出土遺物はないが、SB-3・1・5・6と軸線が近いことからほぼ同時期のものと考え、中世（13世紀）に営まれたものとする。

#### 第6号建物跡（SB-6）〔第115・116図、PL 49・53〕

**位置** 調査区南壁際、I29・30区、J29・30区、K30区（F Grid）にかけて位置する。

**重複関係** SB-5とほぼ柱穴を重ねて重複する。P6覆土の断面観察からSB-6の方が新しい。

**規模と構造** 桁行3間、梁行2間、桁行方向をN-89°-Eとする東西棟である。規模は桁行6.00m、梁行4.25m、下屋を含むと5.60mである。

**所見** 当建物跡は、SB-5と同様に中世（13世紀）に営まれたものと思われる。

#### 第7号建物跡（SB-7）〔第117図、PL 50〕

**位置** 調査区南東、東壁沿いの柱穴密集部分、L27・28・29区・M27・28・29区・N27・28・29区（F Grid）にかけて位置する。

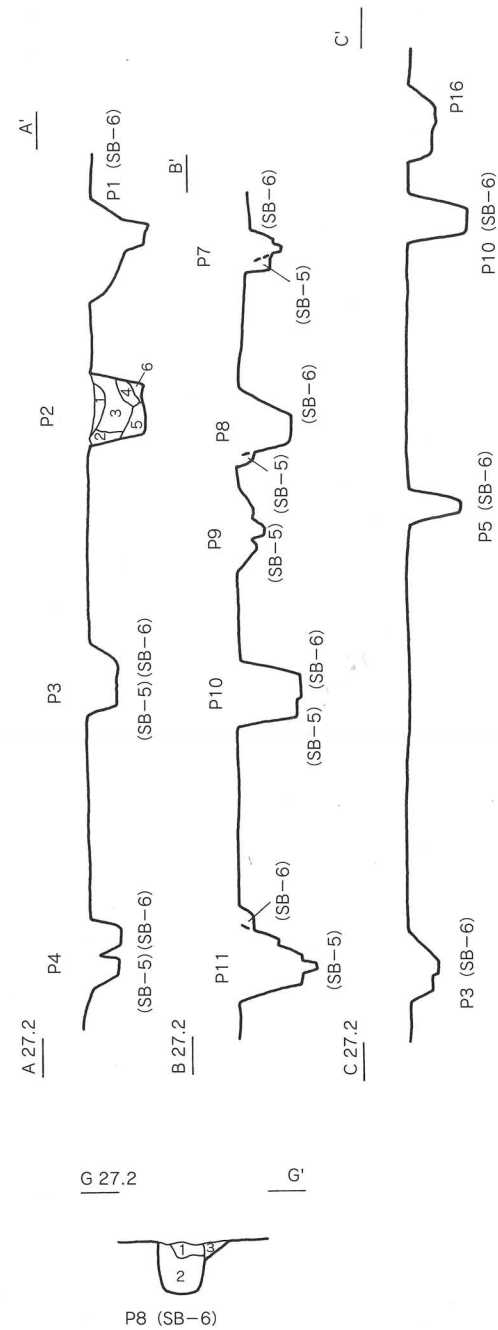
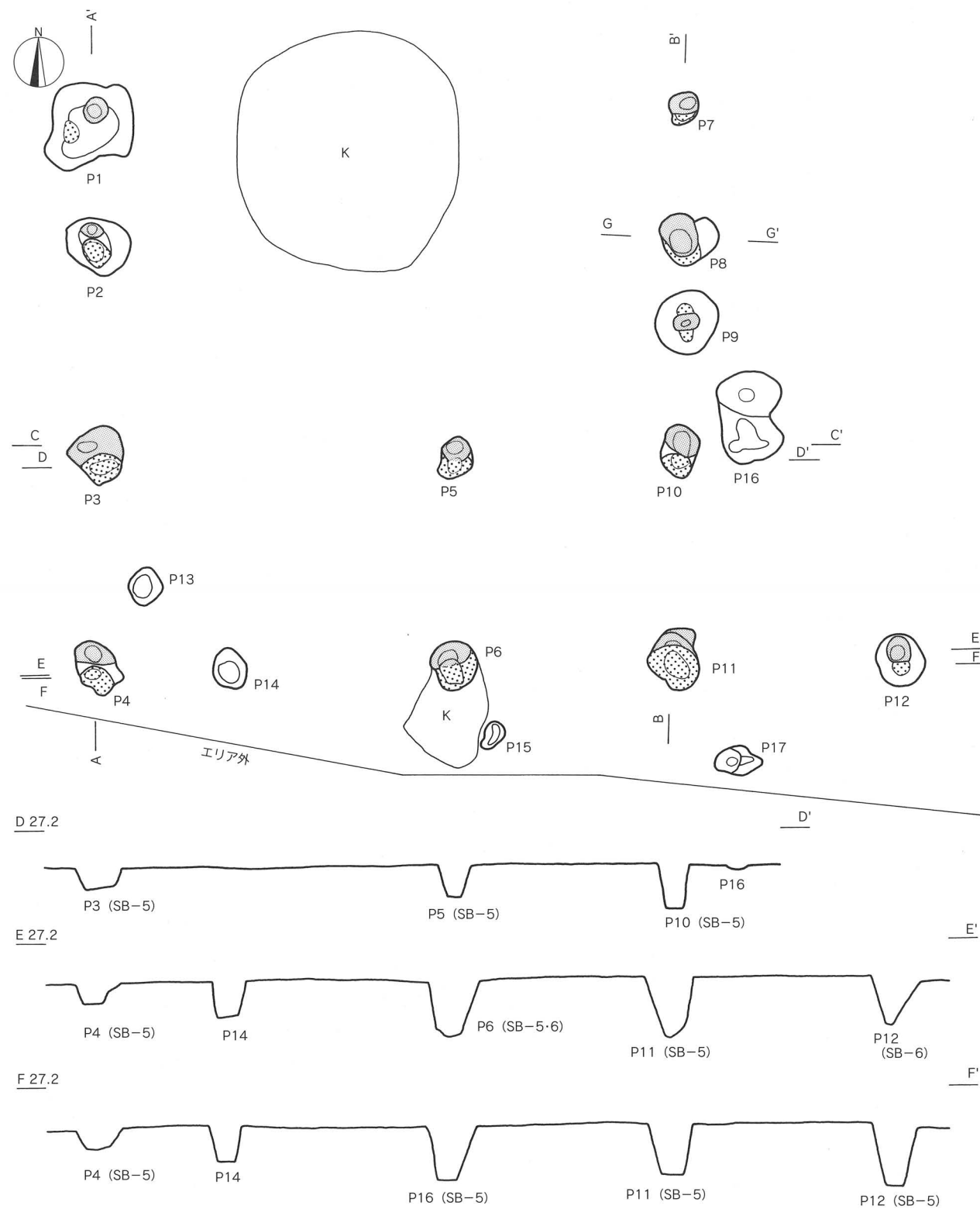
**重複関係** SB-8・9と重複する。柱穴の切り合い関係を確認していないが、SB-9はSB-10と軸線が近いので、先後関係では最も古く、SB-8がそれに次ぐものとする。SB-7は隣接するSB-1・2とも軸線が近いことから、他の建物群と並存していたものとする。

**規模と構造** 桁行（現状で）3間、梁行2間、下屋を南北にもち、桁行方向をN-84°-Eとする東西棟である。規模は桁行6.20m、梁行3.46m、下屋を含めると4.65mである。建物の南東隅はエリア外となり、調査区東壁よりも更に延びる可能性がある。

**柱穴** P7・13は中央主軸上にある柱穴のため掲載したが、直接は伴わない可能性も残る。

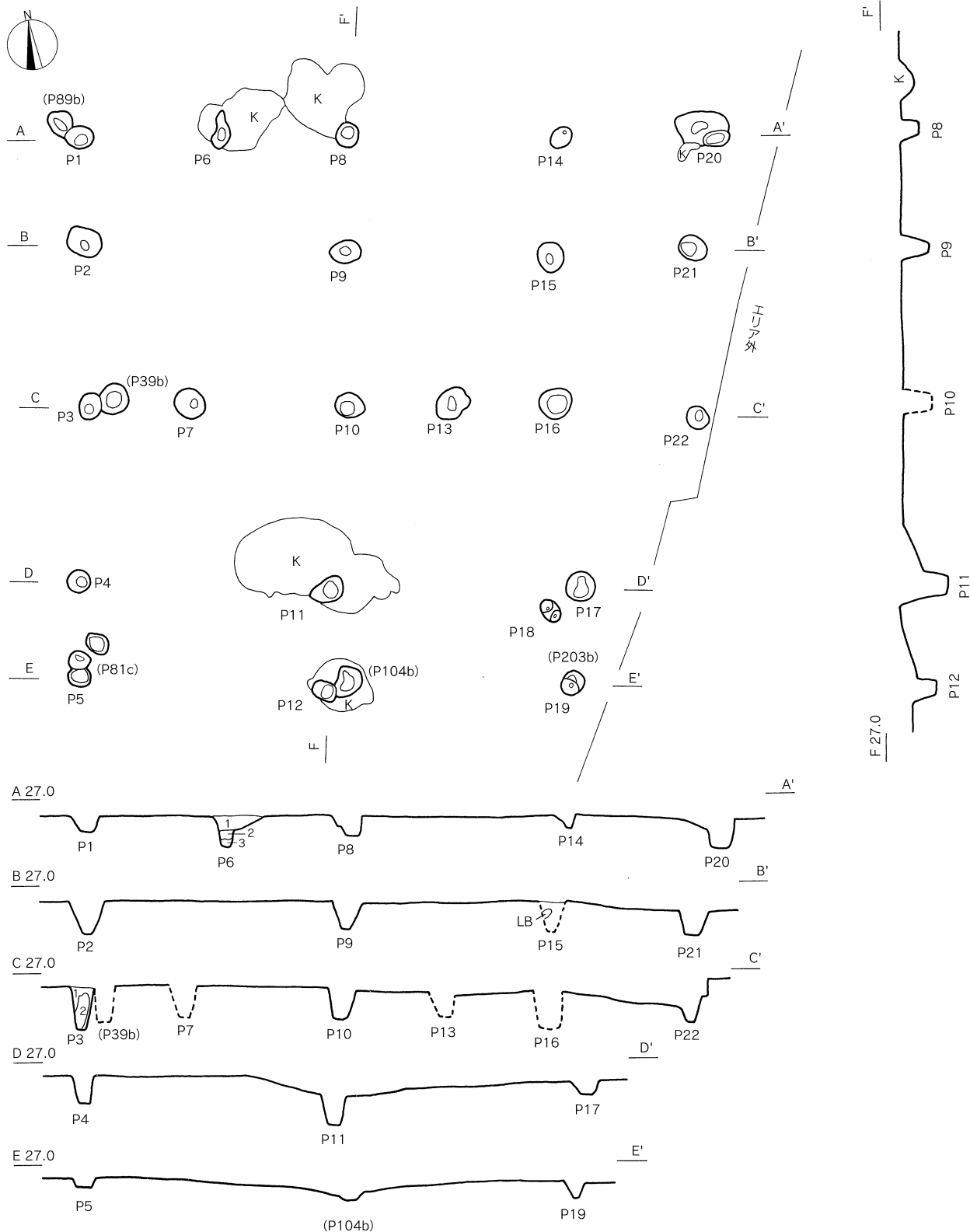
**覆土** 土層の観察をした柱穴が乏しく、上面を植栽痕等で攪乱されたものが少なくない。P3の断面では抜き取り痕らしい痕跡があった。柱穴からの出土遺物はない。

**所見** 当建物跡は、主軸方向が他の掘立柱建物群と近しいため、ほぼ同時期中世（13世紀）に営まれたものとする。



- (SB-5-6)
- |    |   |          |     |                    |
|----|---|----------|-----|--------------------|
| P2 | 1 | 10YR3/4  | 暗褐色 | ローム小・粒少量、粘性なし、しまり弱 |
|    | 2 | 10YR3/4  | 暗褐色 | ローム中少量、粘性なし、しまり弱   |
|    | 3 | 7.5YR3/2 | 黒褐色 | ローム大~中少量、粘性なし、しまり弱 |
|    | 4 | 10YR4/6  | 褐色  | ローム小・粒多量、粘性弱、しまりなし |
|    | 5 | 10YR3/4  | 暗褐色 | ローム小中量、粘性なし、しまり強   |
|    | 6 | 10YR4/6  | 褐色  | 粘性なし、しまり強、ローム質土    |
| P8 | 1 | 7.5YR4/3 | 褐色  | ローム小・粒多量           |
|    | 3 | 7.5YR3/2 | 黒褐色 | ローム粒微量             |
|    | 3 | 7.5YR5/6 | 明褐色 | ローム粒中量             |

第116図 第5・6号建物跡



(SB-7)			
P3	1	7.5YR2/3 極暗褐色	ローム大・小・粒微量、黒色土粒多量、粘性なし、しまり弱
	2	7.5YR4/3 褐色	ローム大・中微量、粘性・しまりなし、フカフカ
P6	1	7.5YR4/3 褐色	ローム中・小少量、黒色土粒、粘性なし、しまり弱
	2	7.5YR3/2 黒褐色	ローム大微量、粘性なし、しまり弱
	3	暗褐色	ロームブロック少量
P15	1	7.5YR4/4 褐色	ローム粒中量、ローム小微量、粘性・しまりなし

第117図 第7号建物跡

第8号建物跡（SB-8）〔第118図、PL 50〕

**位置** 調査区南東、東壁沿いの柱穴密集部分、L27・28・29区・M27・28・29区・N27・28・29区（7Grid）にかけて位置する。

**重複関係** SB-7・9と重複する。SB-9が最も古く、次いでSB-8は柵列1と3を伴っており、SB-7が最終的に他の建物群と並存していたと想定。

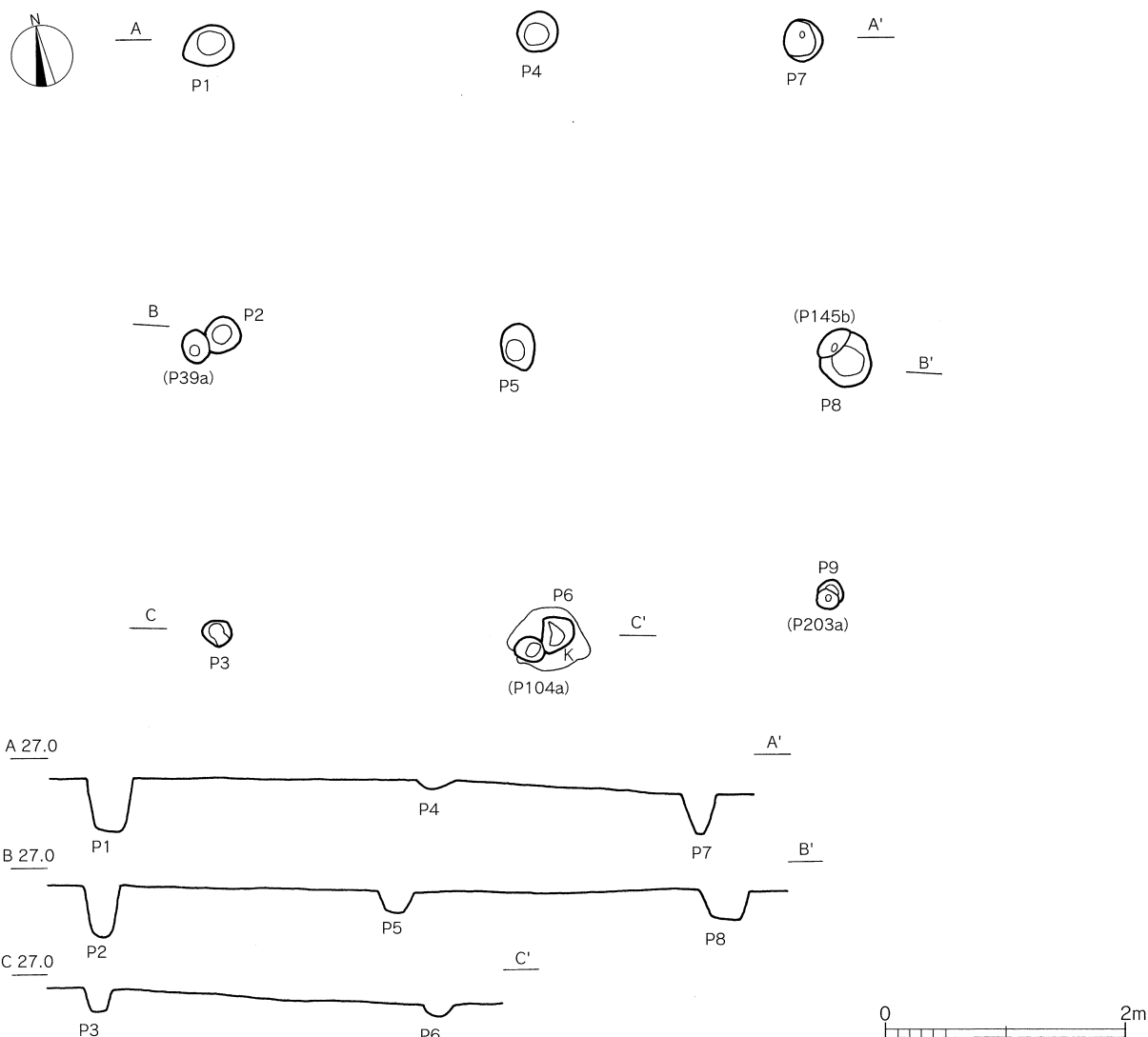
**規模と構造** 桁行1間、梁行1間、桁行方向をN-10°-Eとする南北棟である。規模は桁行4.95m、梁行2.60mである。P7・8も建物に伴う可能性があるが、位置的にやや整合性を欠く。

**柱穴** P9は規模と並びの点からやや疑問も残るが、P7・8の南北延長線上とP3・6の東西延長線上には他に柱穴は確認できなかった。覆土観察は行わなかった。柱穴の出土遺物もない。

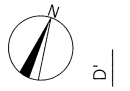
**所見** 当建物跡は、出土遺物は無いが、周辺の柱穴と一連のものとなし中世（13世紀）に営まれたものと思われる。

第9号建物跡（SB-9）〔第119図、PL 50〕

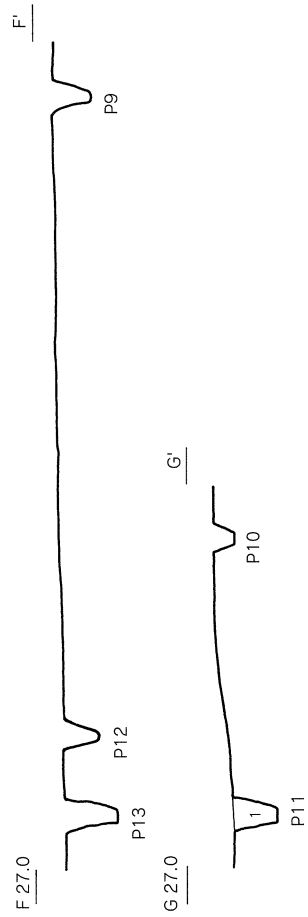
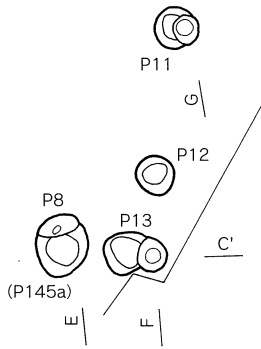
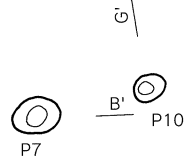
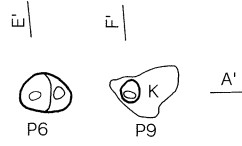
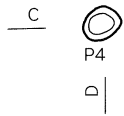
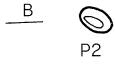
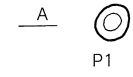
**位置** 調査区南東、東壁沿いの柱穴密集部分、L27・28・29区・M27・28・29区・N27・28・29区（7Grid）にかけて位置する。



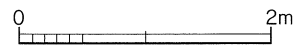
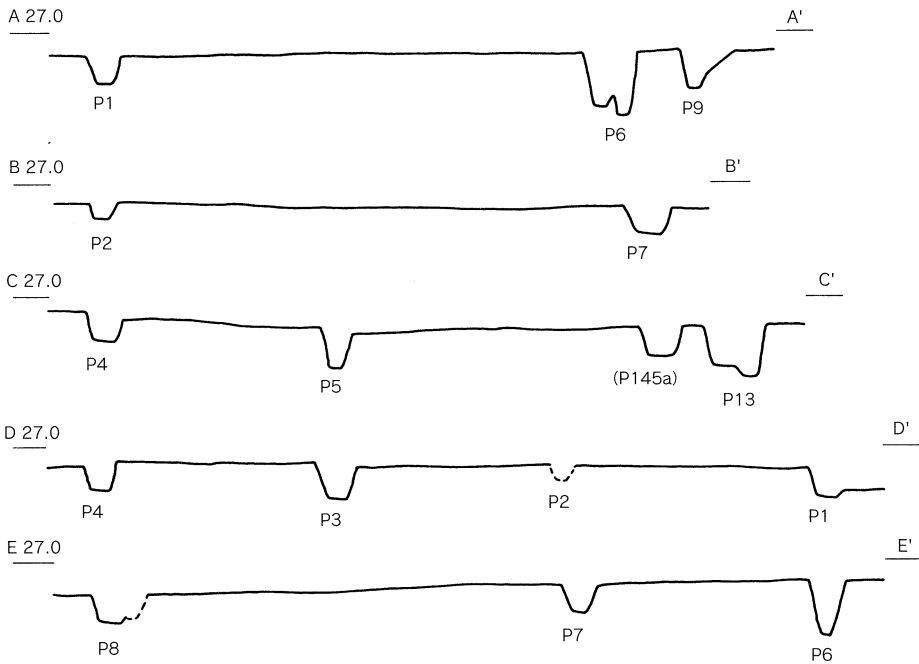
第118図 第8号建物跡



SB-9



(SB-9)  
P11 1 7.5YR4/3 褐色 ローム小・粒微量、粘性・しまりなし



第119図 第9号建物跡



**重複関係** SB-10と軸線が近いことから、切り合い関係の中で最も古いものと想定する。

**規模と構造** 桁行3間、梁行2間、桁行方向をN-21°-Wとする南北棟である。規模は桁行5.71m、梁行4.22mである。東側に下屋が付属した可能性が在る。

**柱穴** P1・6間には、柵列3のP41がある。P41は柵列としての並びを重視して、SB-9からは外した。覆土観察は行わない。

**遺物** P6から土師質土器小皿（第124図1）が、P8から土師質土器皿片（第124図2）が、P9から不明鉄製品（第124図3）が出土した。

**所見** 当建物跡は、出土遺物から中世（13世紀）に営まれたものと思われる。

### 第10号建物跡（SB-10）〔第120図〕

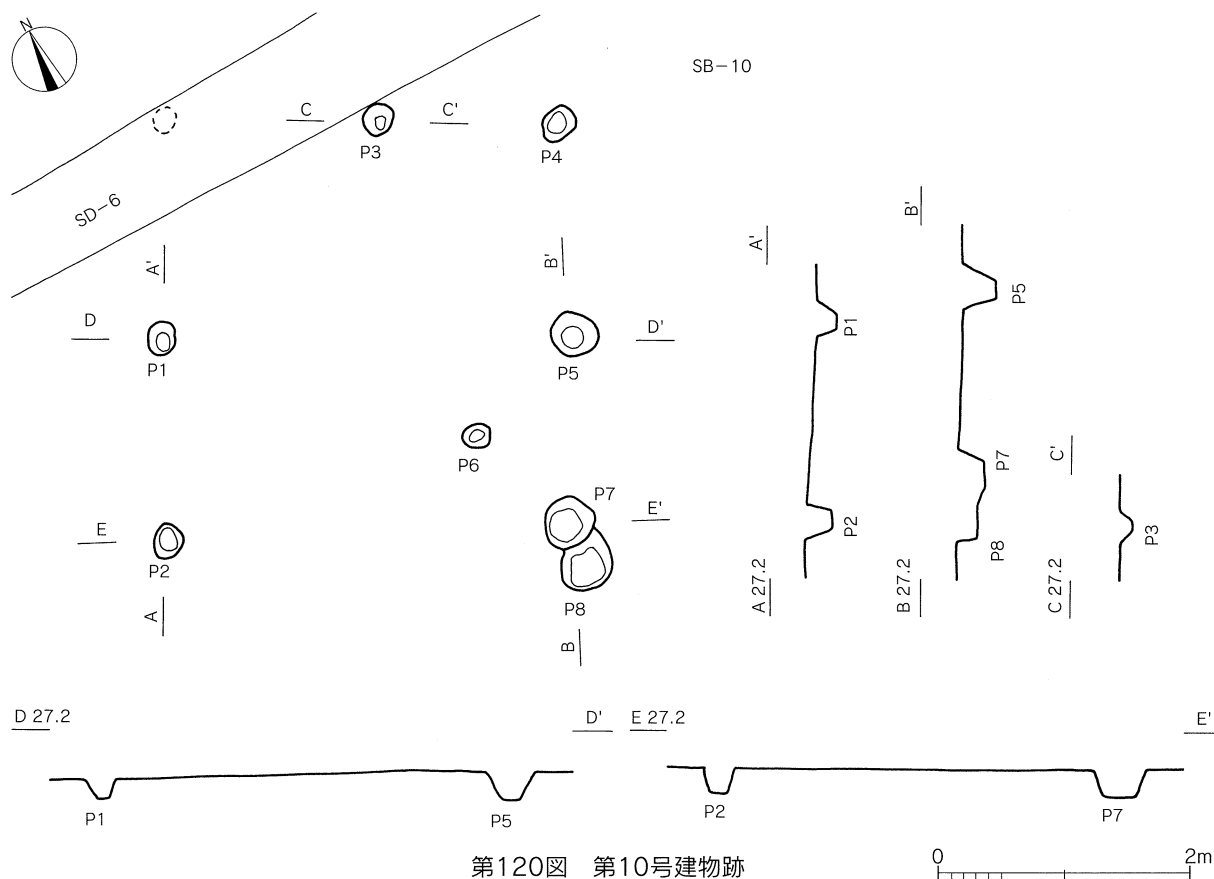
**位置** 調査区の北東隅。重複関係はない。

**重複関係** 昨年度調査の第6号溝と切り合う。溝中にP1・2の北側延長線上と、P3・4の東西延長線上に柱穴の存在を予想し、溝に切られて消失したものと考える。溝と建物の先後関係は、厳密な根拠にはならないが、昨年度調査で確認していないこと、及び溝が自然堆積であるため、溝の堆積後に柱穴を営むには地盤が軟弱となることが想定されることから、建物が古く溝が新しいとみなした。

**規模と構造** 桁行2間、梁行2間、桁行方向をN-21°-Eとする南北棟である。規模は桁行3.30m、梁行3.15mである。

**柱穴** P2・7間は注意したが、柱穴は存在しなかった。覆土の観察は行わなかった。出土遺物もない。

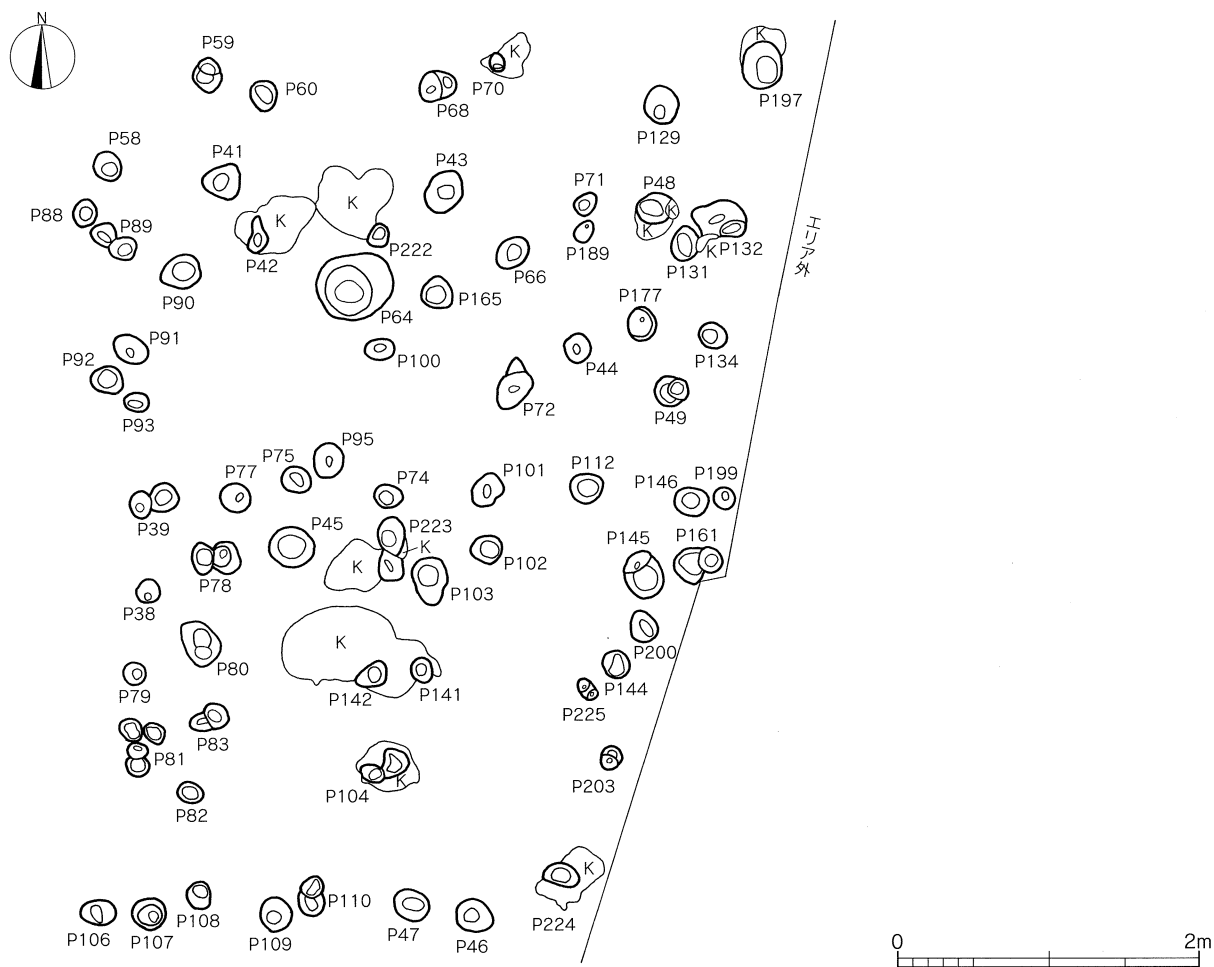
**所見** 当建物跡は、中世（13世紀）に営まれたものと思われる。時期的には、SB-1～7の建物群とは主軸方位を異にしていることから、それらに先行して存在した建物と考える。



### 3. 中世ピット群（P）〔第121図、PL 50〕

当節は、建物と認識できなかった柱穴群を取り上げる。SB-7・8・9がある柱穴の密集区には、拾い切れなかった柱穴が少なくない。別の解釈を検討する為、以下にSB-7・8・9の柱穴を除いた図を提示する。

続いて、明らかに意図のある並びをもった柱穴を、柵列1・2・3として抽出し報告する。



第121図 中世柱穴群密集区

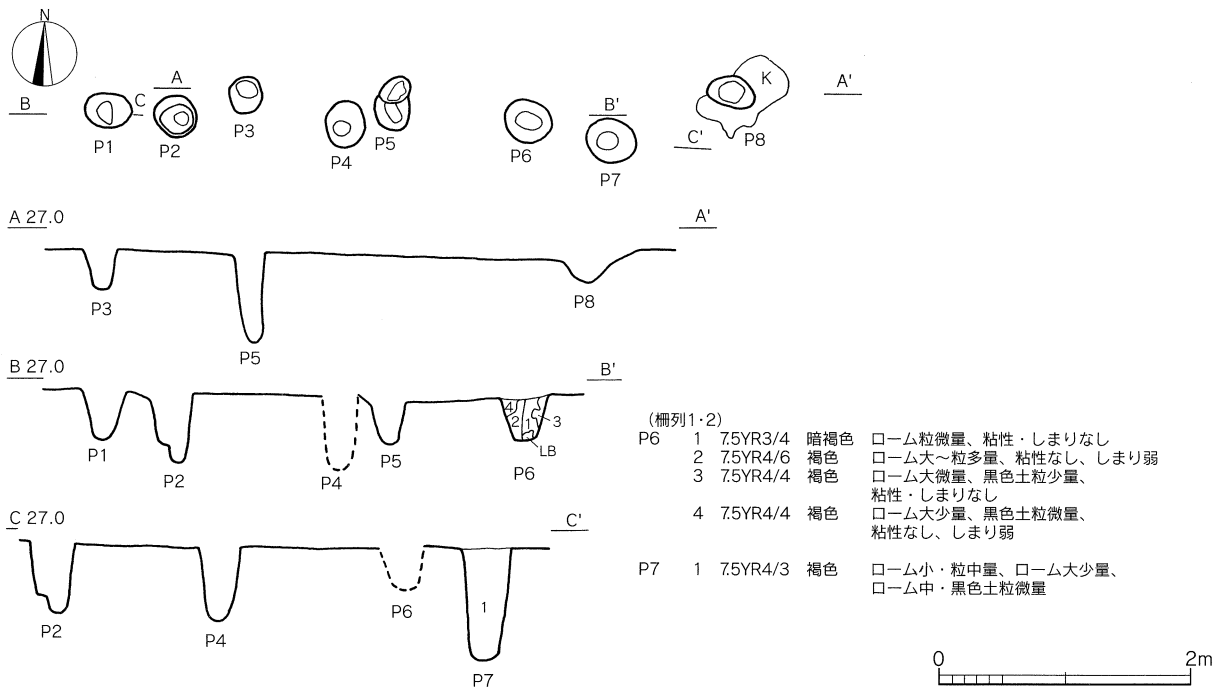
#### 柵列1（SA-1）〔第122図、PL 50〕

**位置** 調査区南東、L29区からM29区（フGrid）にかけて位置する。柵列2と重複。

**規模と構造** P2・4・7の3穴からなる柵列で、調査区東壁以东に続く可能性が残る。軸をN-89°-Wとする東西方向の柱穴列である。規模はP2～7間で3.85mである。

**柱穴** P2・4・7の3穴とも、柵列-2よりも深くしっかりした規模である。P2には底面に中間場があり、1度柱を抜き取り据え直した可能性が残る。P7の観察では抜き取り等の痕跡は確認できなかった。出土遺物なし。

**所見** 調査時に柵列-1・2の柱穴群は明らかに意図のある配置であったため、建物になる可能性を検討していた。北側集中区の柱穴群との間に規則性を見出すことができなかったため、杭等による柵列と認識した。時代は、SB-1・7の柱穴列と軸を近しくさせ、一連の建物群と有機的な関連をもつ遺構と考え、これらとほぼ同じ時期に営まれたものと思われる。



第122図 柵列1・2

柵列2 (S A - 2) [第122図、PL 50]

**位置** 調査区南東、L29区からM29区 (フGrid) にかけて位置する。柵列1と重複。

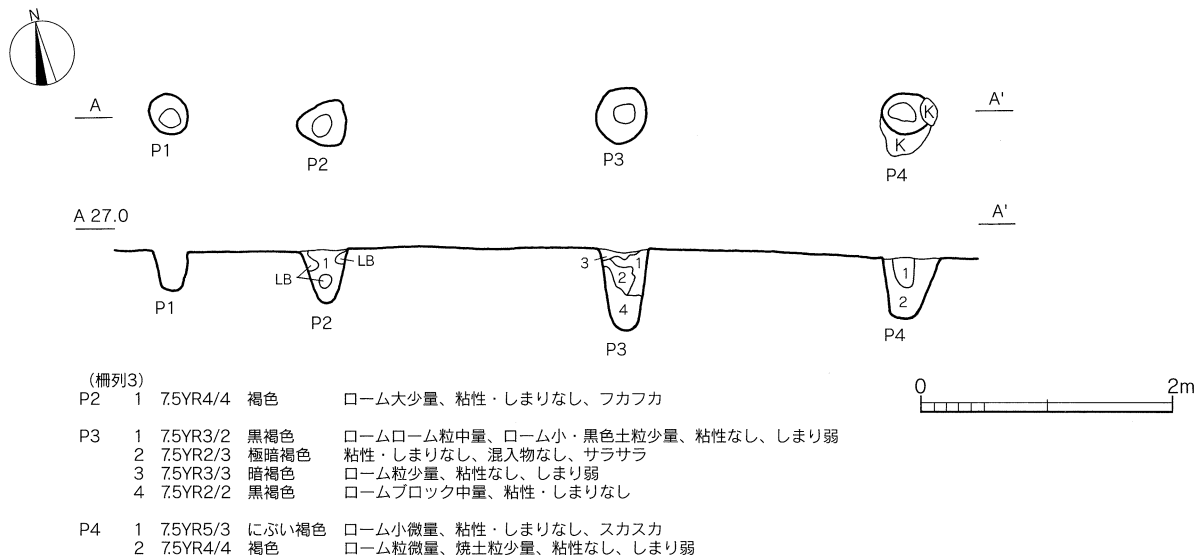
**規模と構造** P1・3・5・6・8の4穴からなり、調査区当壁以東に続く可能性が残る。軸をN-86° - Wとする東西方向の柱穴列である。規模はP1～8間で5.20mである。

**柱穴** 柵列1と比べると、P3を除いて深さはやや浅い。

**覆土** P6では抜き取り痕の跡は断面には見られなかった。

**遺物** P1の覆土中から土師質土器丸底皿底部 (第124図6) が出土した。

**所見** 本跡は、出土遺物から中世 (13世紀) に営まれたものと思われる。柵列1よりもSB-8に軸線が近い  
ため、時期的にはSB-8に伴うものとする。



第123図 柵列3

柵列3 (SA-3) [第123図、PL 50]

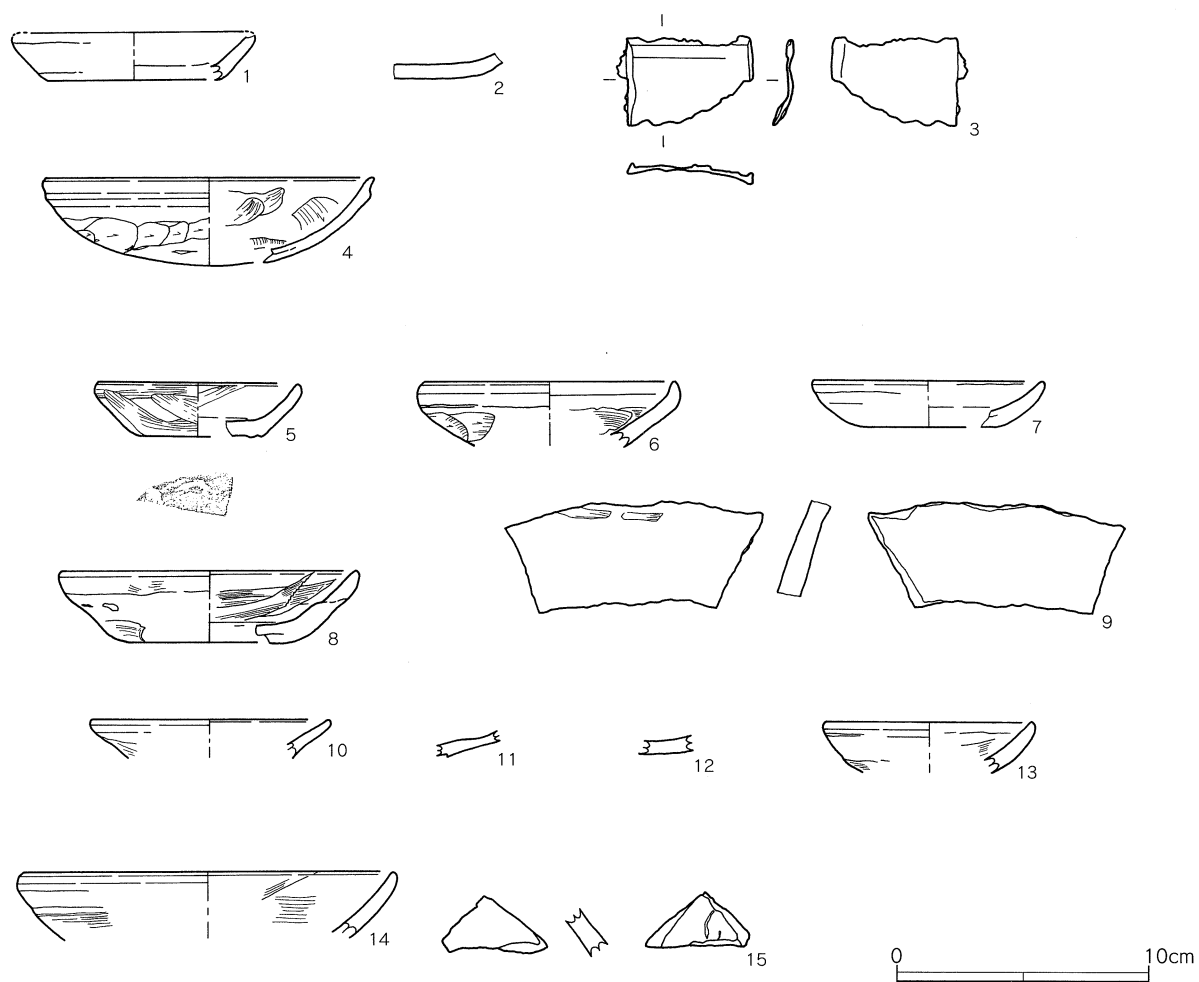
**位置** 調査区南東、L・M・N27区 (フGrid) にかけて位置する。SB-9と重複。

**規模と構造** P1・2・3・4の4穴からなり、調査区東壁以東に続く可能性が残る。軸をN-82°-Wとする東西方向の柱穴列である。規模はP1~4間で6.20mである。

**柱穴** P1~4のいずれも深くしっかりした柱穴である。

**覆土** 抜き取り痕の跡は、断面観察では見られなかった。出土遺物なし。

**所見** 本跡に帰属する遺物はないが、掘立柱建物群と有機的な関連をもつ施設であったとみなし、中世(13世紀)に営まれたものとする。SB-8と軸線が近いので、SB-8に伴うものとする。



第124図 中世遺構出土遺物

神明遺跡出土 中世土器・陶器観察表 (第124図)

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成形技法の特徴	胎土・色調・焼成	出土地点・残存率・その他
1	土師質土器小皿	復元口径:9.6 復元高:1.9	外方に直線的に立ち上がる体部片。底部は平底の可能性はある。	体部は横ナデ。底部寄りには別方向のナデを行った可能性がある。ロクロか非ロクロかは不明。	長石粉粒を微量にぶい褐色普通	P 143(現場名称、以下同じ) S B 9 に伴う 10%
2	土師質土器皿	残存長:4.0 残高:1.0	底部片。平滑な平底で、体部は緩やかに体部に向かって立ち上がる。	内面は、同心円状のナデの後、内底面を一方にナデ。外底面は凹凸のあるナデ。非ロクロ成形。	微量に長石粉粒を交えるも精良な胎土にぶい橙色普通	P 68 S B 9 に伴う 10%
4	土師質土器皿	復元口径:13.0 復元高:3.3	丸底の底部から球状に丸く立ち上がる体部片。	内底面にナデ。内面体部は横ナデで、左斜め上方からナデを始め、右上方に立ちあがってナデが終わる。口唇部外面は2段の横ナデ。体部外面は空隙が多く、左側が右側を切る形で指頭ナデが横位に連続。非ロクロ成形。	微細な長石粉粒を微量に交えるも良土にぶい赤褐色普通	P 188 S B 5・6 に伴う 20%
5	土師質土器小皿	復元口径:8.2 復元底径:5.0 器高:2.1	平底の底部から、直線的に斜め上方に立ち上がる。	底部は回転糸切。外側面は横ナデの後、2度上方に引き上げる形でナデ。	長石粉粒を微量に交えるも良土にぶい橙色普通	P 6 S B 1 に伴う 25%
6	土師質土器皿	復元口径:10.4 残高:2.5	口縁部～体部片。体部は斜め上方に直立し、口唇部が僅かに直立する。底部の形状は不明。	体部～口唇部は横ナデ。体部に横ナデの開始点がある。ロクロ・非ロクロは不明。	精良橙色普通	P 4 S B 1 に伴う 10%
7	土師質土器小皿	復元口径:9.0 復元底径:5.6 器高:1.8	平底の底部から、直線的に斜め上方に立ち上がる。5の資料に類似する。	底部は回転糸切と推定。外側面は横ナデ。口唇部だけで別単位の横ナデ。	長石粉粒を微量に交えるも良土にぶい褐色普通	P 12 S B 1 に伴う 15%
8	土師質土器皿	復元口径:11.8 復元底径:6.3 器高:2.8	平底の底部から微かに内湾気味に開く口縁部片。体部外面がすこし凹んだ後、口唇端部は僅かに直立気味になる。底部は平底だが、ロクロ・非ロクロは不明。	底部は一部に指頭と思しきナデがある。外側面は横ナデで下位に工具状のものと思しき痕跡。内面は横ナデで、ナデの終結点が2ヶ所、斜め右上方に立ち上がる。	やや紛質で精良な胎土に明赤褐色普通	P 3 S B 1 に伴う 20%
9	陶器(常滑)壺・甕類	残存長:10.1	最大径以下の腰部と推定される体部片。	外面に微かに工具の押捺と思しき痕跡。	長石、石英粒を少量交える 外面:にぶい赤褐色 内面:にぶい黄褐色 堅緻	P 3 S B 1 に伴う 100%
10	土師質土器小皿	復元口径:9.4 残存高:1.5	直線的に外方に開く口縁部片。	内外面横ナデ。	良土にぶい褐色普通	P 53 S B 3 に伴う 10%
11	土師質土器皿	残存長:2.5 残高:0.6	非ロクロ成形の底部片。	内底面はナデ。外底面は凹凸のあるナデで沈線状の凹みがある。	良土にぶい褐色普通	P 106 柵列 2 に伴う 10%
12	土師質土器皿	残存長:2.1 残高:0.6	非ロクロ成形の底部片。	内面は、同心円状のナデ。外底面ナデ。	良土にぶい褐色普通	P 45 10%
13	土師質土器小皿	復元口径:8.4 残高:2.0	緩やかに立ち上がる口縁部片。	内外面横ナデ。口唇部のみ別単位のナデ。	良土にぶい黄褐色普通	P 102 20%
14	土師質土器皿	復元口径:15.0 残高:2.6	緩やかに外方に直立する口縁部片。	内外面横ナデ。内面口唇部寄りには横ナデの終結点が右斜め上方に立ち上がる。	良土にぶい褐色普通	K6区出土 10%
15	陶器(常滑)壺・甕類	残存長:3.8	肩部と推定される破片。	外面に自然釉付着。	長石粉粒を微量に交えるも良土 外面:オリブ灰色 胎芯:浅黄色 普通	P 138 100% 同一個体と思しき破片が1次調査の1号溝で出土

神明遺跡出土 鉄製品観察表

番号	器種	法量				特徴	出土位置・残存率・その他
		長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)		
3	不明鉄製品	3.6	5.4	0.2	7.9	左右の縁に1mm程の直立する張り出しを持った、何らかの部材の一部。	P 70出土 断片 S B 9 に伴う

#### 4. 土坑 (SK)

調査時には全てP名称で呼称したが、規模・覆土の様相などから6基を土坑として扱うこととする。土坑名称に続き括弧 ( ) で調査時の名称を記した。

第1号土坑 (SK-1:旧名称P126) [第126図]

**位置** 調査区東側、N26区に位置する。

**規模・平面形** 長径98cm、短径(80)cmの隅丸方形を呈する。東側の一辺は調査区外に広がっている。確認面からの深さは42cmである。

**長軸方向** N-0°-E。

**壁面** ほぼ垂直に立ち上がる。

**底面** 平坦である。

**覆土** 基本層序1層から掘り込まれている。覆土は2層を確認し、下層は褐色土、上層は黒褐色土である。いずれもしまりがなく、ほぼ水平に堆積している。

**遺物** 出土していない。

**所見** 覆土の特徴から、埋め戻し土と考えられる。性格は不明であるが、時期は掘り込み面から比較的新しいと想定される。

第2号土坑 (SK-2:旧名称P137) [第125・126図、PL53]

**位置** 調査区南東側、M30区に位置する。

**規模・平面形** 長径66cm、短径55cmの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは12cmである。

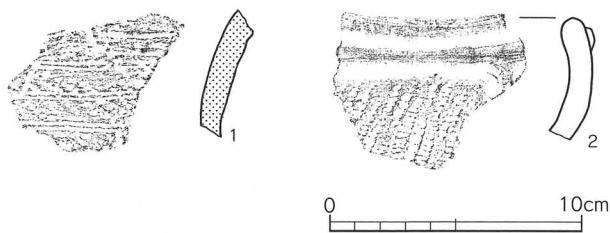
**長軸方向** N-26°-W。

**壁面** 外傾しながら立ち上がる。南側の壁面は他に比べてなだらかに傾斜する。

**底面** 上面と相似形をなさず、北側が底面となる。平坦である。

**遺物** 縄文土器が3点出土している。第125図1は底面中央覆土下位より出土した。深鉢形土器の胴部片である。地文は単節LRで半截竹管状工具により、数条の平行沈線が横位に施文される。色調はにぶい黄褐色で、胎土には繊維を混入していた。前期前半黒浜式に相当する。他2片は小片のため図示していないが、同時期の破片である。

**所見** 性格は不明である。遺物は流れ込みの可能性もあるが、覆土下位から出土していることから、時期は縄文時代前期と推察するに留めたい。



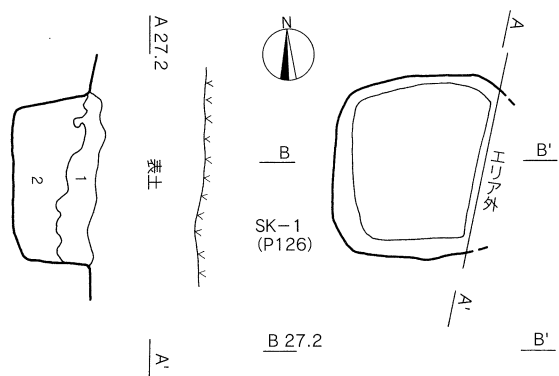
第125図 土坑出土縄文土器

第3号土坑 (SK-3:旧名称P276) [第126図]

**位置** 調査区南側、F27・G27区に位置する。

**規模・平面形** 長径1.05m、短径82cmの楕円形を呈する。確認面からの深さは36cmである。

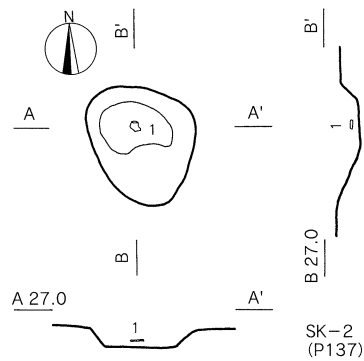
**長軸方向** N-6°-W。



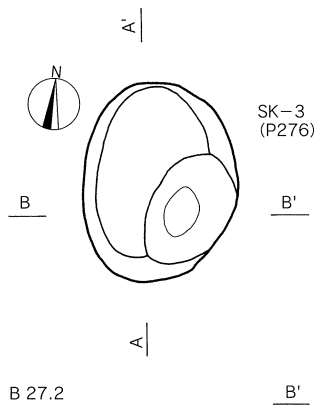
SK-1  
(P126)

B 27.2

SK-1 1 7.5YR3/2 黒褐色 □-ム粒・小中量、粘性なし・しまり弱  
2 7.5YR4/4 褐色 □-ム粒多量、黒色土粒少量、粘性・しまりなし



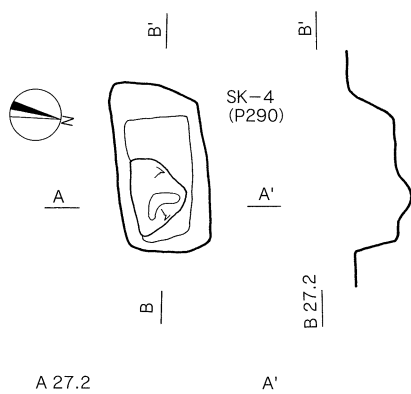
SK-2  
(P137)



SK-3  
(P276)

B 27.2

A 27.2

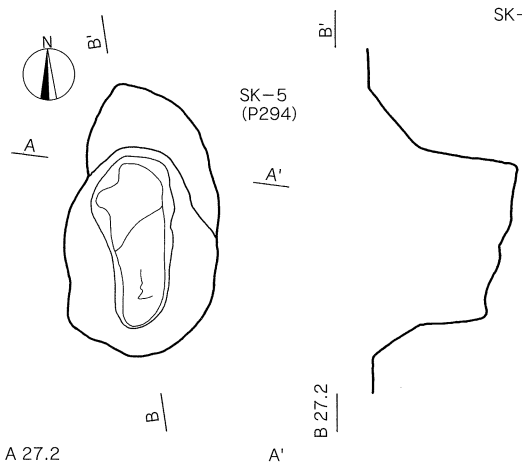


SK-4  
(P290)

A 27.2

B 27.2

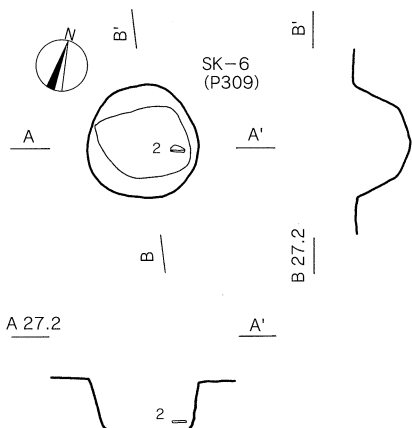
SK-3 1 7.5YR3/2 黒褐色 □-ム粒微量、粘性・しまりなし  
2 7.5YR4/4 褐色 □-ム中・小多量、黒色土粒少量、粘性なし、しまり弱



SK-5  
(P294)

A 27.2

B 27.2

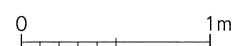


SK-6  
(P309)

A 27.2

B 27.2

SK-5 1 7.5YR2/2 黒褐色 □-ム粒少量、粘性なし、しまり弱  
2 7.5YR2/3 極黒褐色 □-ム粒・小微量、粘性なし、しまり弱  
3 7.5YR4/4 褐色 □-ム粒多量、□-ム小・中中量、粘性・しまりなし  
4 7.5YR3/2 黒褐色 □-ム粒微量、粘性・しまりなし



第126図 第1～6号土坑

**壁面** 外傾しながら立ち上がる。北側・西側は階段状を呈する。  
**底面** 南東側が一段深く掘り込まれている。最深部は平坦である。  
**覆土** 2層を確認した。壁際に褐色土、次いで黒褐色土が堆積している。  
**遺物** 土器皿小片が覆土中より2点出土している。図示していない。  
**所見** 性格・時期ともに不明である。

第4号土坑（SK-4：旧名称P290）〔第126図〕

**位置** 調査区西側、C25・C26区に位置する。  
**規模・平面形** 長径88cm、短径47cmの長方形を呈する。確認面からの深さは37cmである。  
**長軸方向** N-73°-E。  
**壁面** 外傾して立ち上がる。  
**底面** 全体に平坦であるが、中央から西側にかけて一段深く掘り込まれ、この部分は丸底状を呈する。  
**遺物** 出土していない。  
**所見** 性格・時期ともに不明である。

第5号土坑（SK-5：旧名称P294）〔第126図〕

**位置** 調査区西側、C23区に位置する。  
**規模・平面形** 長径1.45m、短径80cmの楕円形を呈する。確認面からの深さは76cmである。  
**長軸方向** N-2°-W。  
**壁面** 底面から中位まで直線的に立ち上がり、その後開口部に向けて外傾して立ち上がる。  
**底面** やや起伏が見られ、南側から北側にかけてゆるやかに傾斜する。  
**覆土** 4層を確認した。概ね水平に堆積しており、部分的にロームブロックの混入が見られた。  
**遺物** 土師器の小片が1点出土している。図示していない。  
**所見** 性格・時期ともに不明である。

第6号土坑（SK-6：旧名称P309）〔第125・126図、PL53〕

**位置** 調査区北側、G21区に位置する。  
**規模・平面形** 直径60cmの円形を呈する。確認面からの深さは27cmである。  
**壁面** 外形して立ち上がる。  
**底面** やや起伏を有する。  
**遺物** 覆土下位より縄文土器が出土している。第125図2は深鉢形土器の口縁部片である。平縁で口縁部に沿い隆帯と沈線により区画文が形成される。区画内は0段多条RLが施文され、外面下半には炭化物が付着していた。色調は灰褐色で、胎土に長石を多量に混入していた。中期後半加曾利EⅡ式に相当する。  
**所見** 性格は不明である。遺物は流れ込みの可能性もあるが、覆土下位から出土していることから、時期は縄文時代中期と推察するに留めたい。



## 5. 遺構外出土遺物〔第127・128図〕

明確な遺構に伴わず、グリッド単位で取り上げた遺物や、明らかに時期の異なる遺構に流れ込んでいた遺物などをこれに含めた。コンテナにして2箱分の遺物があり、そのほとんどは確認面上出土の縄文土器である。以下に、縄文土器と石器の2項に分けて記述する。

### 1. 縄文土器〔第127図、PL54〕

縄文時代の遺物は表土もしくは確認面上での出土が最も多く、次いで中世ピットの覆土中から出土している(第127図9・13・19・21・24・25・27・28・30・35・36・39)。時期は前期前半花積下層式から後期後半安行1式まで途切れながらも確認された。最も量が多い時期は、中期後半加曽利E式でこれは神明遺跡第3次調査(今回の調査区北側)と同様である。

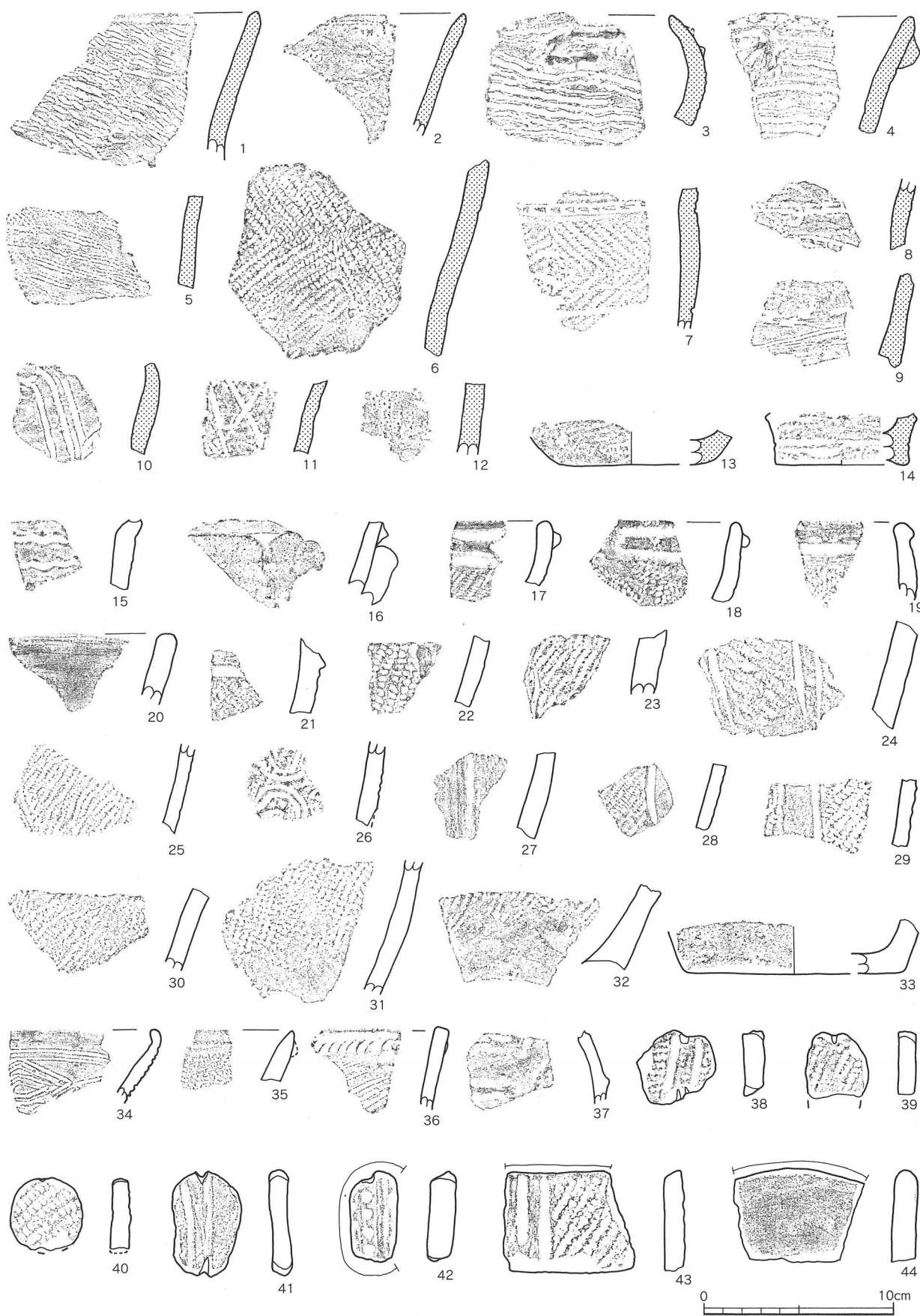
1～14は前期前半に相当する。いずれも深鉢形土器で1～4は口縁部、3は波状縁となる他は平縁である。1はL<sub>1</sub>の直前段反撚、2は無節rである。3は大きく内湾する器形で口縁下に片側が閉じられた隆帯文が貼付られ、隆帯間には竹管による円形刺突が1ヶ所押圧される。地文は4と同様に半截竹管状工具による横位波状沈線文である。4は口唇部に楕円形の押圧が連続し、口縁部に円錐状の貼付がなされる。5～12は胴部片である。5は絡条体にℓとrを一本ずつ巻き付けたもの、6・7は単節の羽状縄文で、7は羽状縄文の上端は半截竹管状工具による「C」状の押し引き文、下端は有節沈線と異なっている。外面には炭化物が付着していた。8～11は竹管による押し引き文や沈線文が施文され、12はアナグラ属系貝類腹縁が押圧される。9は縄文らしき痕跡が見られたが原体は不明である。13・14は底部片である。13は推定径7.4cm、器面が荒れており判然としないが無節ℓが施文されるようである。14は推定径6.8cm、底面は上げ底状を呈し、底面直上に途切れる沈線が2段巡る。1～14はいずれも胎土に繊維を、加えて3・9は長石、4は石英を多量に混入していた。5は花積下層式、他は黒浜式及びその併行期に相当しよう。

15は深鉢形土器胴部片である。1本引き沈線による横位波状文が多段に及ぶ。胎土に石英を多量に混入していた。前期末葉に相当しよう。

16は深鉢形土器胴部片である。断面三角形の貼付が横位に巡り、側面が指で摘れたようなヒダのある隆帯文が垂下する。隆帯の交点は三角状に空間部を有している。胎土に長石・石英・雲母を多量に混入していた。中期前半阿玉台I b式に相当しよう。

17～33は中期後半に相当し、いずれも深鉢形土器である。17～20は平縁の口縁部で、17・18は口縁下に貼付を有し、17は0段多条RL、18は単節RLが施文される。19は沈線が1条巡り、下半は単節LR、20は無文であった。21は口縁部直下の破片で隆帯と沈線が横位に巡り、0段多条RLが施文される。21～31は胴部片である。22は地文単節RLで隆帯が垂下する。23～24は地文縄文上に沈線文が描かれるもので、いずれも沈線間に磨り消しは見られない。23は単節RL、24は0段多条LR、25は0段多条RL、26は単節LRである。27～29は地文縄文、沈線間が磨り消しされるもので、27は単節LR、28は0段多条LR、29は0段多条RLである。30は単節LR、31は複節RLRで下半は無文であった。32は底部直上破片で底面に近いヶ所は無文、上半は単節RLである。33は底部片で推定径11.4cm、縄文が施文されているが器面が荒れており、原体は不明である。胎土に長石を多量に混入する破片は21・23・26～28・30、同様に長石は19・25、雲母は21、他は三種全ての混入が見られた。17～19・21～26は加曽利E I～II式、20・27～29はIII式に相当しよう。

34～37は後期に相当し、37が注口土器となる他は深鉢形を呈する。34～36は平縁の口縁部で34は口縁部に幅の狭い無文帯を介し、沈線により多重の菱形区画文が横位に連続する。地文は無文である。35は口縁下に横位隆帯文が剥落した痕跡が見られ、下半は単節LRが施文される。36は刻みを有する低い隆帯文が巡り、下



第127図 遺構外出土縄文土器

半に斜行する沈線文が描かれる。37は注口土器胴部片である。地文は無文で良好に研磨されており、微隆起線文による曲線文が描かれる。外面の一部に赤彩が見られた。34・36は胎土に長石を多量に混入していた。34・37は堀之内2式、35は堀之内2式以降の粗製土器、36も同様に粗製土器で安行1式に相当しよう。

38～44は土製品で、いずれも中期後半に相当する。38～42は土器片を再利用した錘で、紐掛け部分は全て溝状に研磨される「切り目」整形であった。下端が欠損する39・40を除き、切り目は上下に1ヶ所ずつあるが、38は上端に1ヶ所、下端に2ヶ所の計3ヶ所であった。43・44は土器片を再利用した磨り面のある破片である。これは破片の断面一面のみが磨られており、他の断面部分は加工等の痕跡が見られないことから、器から破損したそのままの部分と判断した。このことから「土製円盤」と呼称するには不適当と考え、用語としての使用は差し控えた。磨り面の様相は、43は内壁に向かい斜めに削がれており、44は丸味を帯びていた。この2点はいずれも①断面1面が研磨、②規格・重量がほぼ等しい、という共通項が見られる。点数が少なく想定域を出ないが、研磨面が1面であること、ほぼ同程度の大きさの破片を用いていることから、任意に破片を取り断面を整形するために研磨したのではなく、意図して破片を選別し、何らかの目的を持って使用した結果により研磨面が生じた、と考えられる。

神明遺跡第4次調査土製品観察表（第127図）

（図中「┆」は研磨部分）

No	種類	長さ×幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	部位	周縁調整	残存(%)	文様	その他	時期	出土地点
38	土器片錘	3.9 × 4.2	1.1	19.4	胴部	全周研磨	完形	0段多条RL、沈線文、磨消一部	切り目上端1ヶ所、下端2ヶ所、雲母多量	加曾利EⅡ	表土
39	土器片錘	(3.5) × 3.3	0.9	(14.8)	胴部	残部全周研磨	70	単節RL、LR	切り目1ヶ所	中期後半	P61
40	土器片錘	(3.8) × 3.9	1.0	(17.3)	胴部	全周研磨	一部欠	単節RL	切り目1ヶ所、長石・石英・雲母多量、円形	中期後半	表土
41	土器片錘	5.6 × 3.7	1.0	27.8	胴部	全周研磨	完形	単節RL、垂下沈線間磨消	切り目1対	加曾利EⅢ	表土
42	土器片錘	4.1 × 2.6	1.4	18.5	胴部	一部研磨	完形	平行沈線間円形刺突	切り目1対、長石多量	加曾利EⅡ～	表土
43	磨り面のある破片	5.3 × 6.9	1.1	57.0	胴部	一部研磨	—	単節LR、垂下沈線間磨消	一面が研磨され、研磨面は斜めの平坦面となる。石英・雲母多量	加曾利EⅡ	表土
44	磨り面のある破片	5.0 × 6.9	1.1	57.4	胴部	一部研磨	—	無文	一面が研磨、長石・石英・雲母多量	中期後半	表土

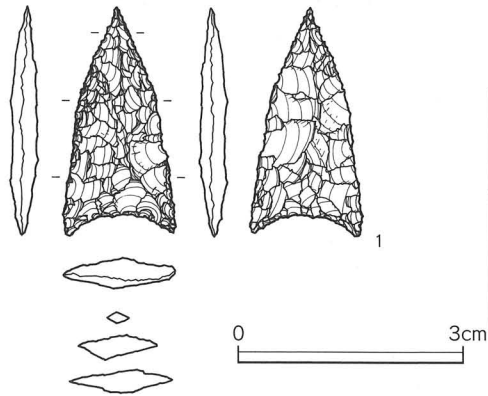
## 2. 縄文時代の石器〔第128図、PL53〕

今次調査では遺構外扱いの石器として石鏃が1点、研磨器が2点、敲打器が1点の合計4点を検出した。剥片類は検出していない。以下説明を記す。

石鏃（1）は表面採取品である。硬質頁岩製で折損ヶ所は見当たらず、完形状態と考えられる。器体長29.9mmに比べ脚部を示す挟りこみ長が2.9mm（対器体長9.7%）と短い、脚両端は尖っている。所属時期としては縄文時代早期後半から前期中葉頃と想定しておく。

敲打器（2）は表面採取品である。棒状のホルンフェルス礫を用いて長軸両端に剥離面を伴う敲打痕が認められる。敲打使用部分には線状に潰れを生じている。

研磨器は2点有り、大型品（3）はE23グリッドから、小型品（4）はピット248内から検出した。大型品は表裏両面を使用しているが、楕円形であり素材礫の形状を大きく変更するような使用状態ではない様だ。やや光沢を持ち微細な線状痕を伴う使用面が認められる。認識可能なくらい赤化をなし、被熱痕かも知れない。節理面部分から破碎を生じている。敲打器・研磨器の所属時期は不明としておく。



神明遺跡第4次調査 縄文時代の石器観察表

遺物No	出土地点	器種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	表 採	石 鏃	珪質頁岩	29.9	14.6	3.8	1.2	
2	表 採	敲打器	ホルンフェルス	130.8	41.8	40.4	266.6	
3	P248	研磨器	砂岩	38.5	24.4	23.1	29.1	被熱赤化
4	E23	研磨器	砂岩	116.2	76.6	57.7	687.3	被熱赤化

(長さ・幅・厚さ：mm 重量：g)



第128図 遺構外出土石器

神明遺跡第4次調査 遺構一覧表

現場名称	グリッド	形 状	最大径(cm)	深 さ(cm)	遺構名	備 考
P1	L 29	不整	39	44	S B1 P16	覆土4層
P2	K29	円	34	52	S B1 P12	覆土4層
P3	K29	楕円	31	49	S B1 P8	覆土1層、土器皿・常滑出土
P4	K29	楕円	50	50	S B1 P3	土器皿出土
P5 a	J 29	楕円	(36)	40	S B5 P8	
P5 b	J 29	楕円	44	42	S B6 P8	覆土3層
P6	K30	不整	63	46	S B1 P9	覆土6層、柱痕
P7a	J 29	楕円	24	19	S B5 P7	
P7b	J 29	楕円	32	25	S B6 P7	
P8	K29	円	30	35	S B1 P2	土器皿出土
P9	K29	円	31	32	S B1 P7	覆土3層
P10	K29	楕円	34	37	S B1 P11	覆土2層
P11	L29	円	24	23	S B1 P15	覆土2層
P12	L29	円	26	58	S B1 P14	覆土1層、土器皿出土
P13	K28・29	円	26	15	S B1 P10	
P14	K28・29	不整	48	24	S B1 P1	覆土1層
P15	J 28	楕円	86	30		
P16	I 28	不整円	28	26		
P17	I 28	不整	99	49		
P18	I 27	楕円	69	24		
P19	I 26・27	楕円	48	24		

現場名称	グリッド	形状	最大径(cm)	深さ(cm)	遺構名	備考
P 20	J 26	円	34	60		覆土2層(暗褐色・褐色)
P 21	J 26	不整	27	61		覆土1層(暗褐色)
P 22	J 28	不整円	34	21		
P 23	K 28	円	35	26	S B 2 P 9	覆土1層
P 24	K 28	円	27	38	S B 2 P 6	
P 25	K 27	円	27	22	S B 2 P 5	
P 26	K 27	円	32	17		
P 27	K 27	円	25	15		
P 28	K 27	円	32	35		
P 29	L 27	円	50	22		
P 30	K・L 27	円	33	19		
P 31	L 27	円	28	39	S B 2 P 1	覆土1層
P 32	K・L 28	楕円	84	28	S B 2 P 3	
P 33	L 28	円	23	30	S B 2 P 2	
P 34	L 28	楕円	29	55	S B 2 P 4	
P 35	K 28	楕円	28	19		
P 36	L 28	楕円	70	28		
P 37	L 28	楕円	23	12		
P 38	L 28	円	25	18		
P 39 a	L 28	円	28	43	S B 7 P 3	覆土2層
P 39 b	L 28	円	30	44	S B 8 P 2	
P 40	L 28	不整円	27	21		
P 41	M 27	不整	40	42	柵列3 P 2	覆土1層
P 42	M 27	不整	38	34	S B 7 P 6	覆土3層
P 43	M 27	円	45	64	柵列3 P 3	覆土4層
P 44	M 28	円	30	30	S B 7 P 15	覆土1層
P 45	M 28	円	49	41		土器皿出土
P 46	M 29	円	40	90	柵列1 P 7	覆土1層
P 47	M 29	円	39	37	柵列2 P 6	覆土4層
P 48	N 27	楕円	(37)	47	柵列3 P 4	覆土2層
P 49	N 28	円	35	36	S B 9 P 11	覆土1層
P 50	M 30	円	53	53	S B 3 P 3	覆土5層
P 51	M 30	楕円	50	60	S B 3 P 1	覆土4層
P 52	M 30・31	楕円	56	49	S B 3 P 4	覆土1層
P 53	M 31	円	48	65	S B 3 P 2	覆土3層、土器皿出土
P 54 a	K 30	円	18	61	S B 5 P 12	炭化物出土
P 54 b	K 30	円	26	48	S B 6 P 12	
P 55 a	J 30	楕円	30	47	S B 5 P 10	
P 55 b	J 30	楕円	36	44	S B 6 P 10	
P 56 a	J 30	楕円	54	62	S B 5 P 11	
P 56 b	J 30	楕円	36	33	S B 6 P 11	
P 57	L 27	不整	55	63		
P 58	L 27	楕円	34	32	柵列3 P 1	
P 59	L・M 27	隅丸方	34	31		
P 60	M 27	円	31	25		
P 61	M 27	不整	83	69		
P 62	M 27	隅丸方	47	20		
P 63	O 18	円	31	31		
P 64	M 27・28	不整円	80	21		
P 65	M 27・28	円	35	16		
P 66	M 27	楕円	38	22	S B 9 P 7	
P 67	M 27	隅丸長方	54	19		
P 68	M 27	楕円	40	45	S B 9 P 6	土器皿出土
P 69	M 27	隅丸方	44	40		
P 70	M 27	円	18	32	S B 9 P 9	鉄製品出土
P 71	M 27	楕円	26	18	S B 9 P 10	
P 72	M 28	不整	56	38		
P 73	M 28	楕円	29	17		
P 74	M 28	楕円	30	34	S B 7 P 10	
P 75	M 28	円	31	28		
P 76	M 28	隅丸方	51	25		
P 77	M 28	円	31	34	S B 7 P 7	
P 78 a	M 28	楕円	34	29	S B 9 P 3	
P 78 b	M 28	円	35	38		
P 79	L 28・29	円	23	30	S B 7 P 4	
P 80	L・M 28	不整	48	36		
P 81 a	L 29	円	23	10	S B 7 P 5	

現場名称	グリッド	形状	最大径(cm)	深さ(cm)	遺構名	備考
P81 b	L29	円	25	20	S B8 P3	
P81 c	L29	円	21	—		
P81 d	L29	楕円	26	18		
P82	L29	円	26	56		
P83	M29	楕円	42	24		
P84	I19	円	17	19		
P85	L27	長方	21	29		
P86	K28	不整	79	28		
P87	J28	円	17	14		
P88	L27	円	30	24	S B9 P1	
P89 a	L27	楕円	31	17	S B7 P1	
P89 b	L27	円	24	16		
P90	L27	楕円	43	45	S B8 P1	
P91	L28	楕円	36	34	S B7 P2	
P92	L28	円	33	43		
P93	L28	楕円	26	13	S B9 P2	
P94	M28	楕円	16	20		
P95	M28	円	39	26		
P96	L28	不整	48	21		
P97	M28	円	60	14		
P98	I20	楕円	22	19		
P99	M28	隅丸三角	19	15		
P100	M28	楕円	32	28	S B7 P9	
P101	M28	不整	36	26	S B7 P13	
P102	M28	円	32	37		土器皿出土
P103	M28	不整楕円	64	43		
P104 a	M29	楕円	25	26	S B7 P12	
P104 b	M29	不整円	30	10	S B8 P6	
P105	M29	楕円	65	18		
P106	L29	楕円	35	40	柵列2 P1	土器皿出土
P107	L29	円	34	55	柵列1 P2	
P108	L・M29	円	28	32	柵列2 P3	
P109	M29	楕円	37	68	柵列1 P4	
P110	M29	楕円	41	70	柵列2 P5	
P111	M29	楕円	55	60		
P112	M28	円	32	40	S B7 P16	
P113	M28	隅丸方	42	18		
P114	M29	円	39	16		
P115	M29	不整楕円	54	22		
P116	M29	楕円	20	13		
P117	N28	円	35	33	S B8 P7	
P118	L29	円	40	64	S B1 P17	
P119	K29	円	34	32	S B1 P13	
P120	K29・30	楕円	21	22	S B1 P5	
P121	M27	不整	42	24		
P122	M26・27	円	36	17		
P123	M26	円	21	13		
P124	N26	楕円	61	78		
P125	N26	円	37	40		
P126	N26	隅丸方	98	42	S K1	覆土2層
P127	N26	不整楕円	45	23		
P128	N27	不整	60	21		
P129 a	N27	円	40	45		
P129 b	N27	楕円	30	15		
P129 c	N27	楕円	43	16		
P129 d	N27	円	35	16		
P130	N27	ひさご	80	25		
P131	N27	隅丸長方	56	19		
P132	N27	楕円	28	29	S B7 P20	
P133	N27・28	円	19	14		
P134	N28	円	30	25	S B7 P21	
P135	N29	不整楕円	48	16		
P136	M30	不整円	25	10		
P137	M30	不整楕円	66	12	S K2	縄文前期片出土
P138	M30	不整	70	24		常滑片出土
P139	L31	隅丸方	47	29		
P140	D24	楕円	51	5		

現場名称	グリッド	形状	最大径(cm)	深さ(cm)	遺構名	備考
P 141	M29	円	26	32	S B9 P 5	
P 142	M29	楕円	34	32	S B7 P 11	
P 143	M28	隅丸方	46	16		土器皿出土
P 144	N28・29	円	29	15	S B7 P 17	
P 145 a	N28	楕円	(32)	24	S B8 P 8	
P 145 b	N28	楕円	33	20	S B9 P 8	
P 146	N28	円	32	29	S B9 P 12	
P 147	L30	円	29	15		
P 148	L30	不整	48	25		
P 149	L30	円	46	77	S B4 P 3	炭化物出土
P 150	N26	不整楕円	61	20		
P 151	L31	楕円	46	70	S B4 P 4	
P 152	K30	円	50	50	S B4 P 1	
P 153	K30	不整	127	28		
P 154	K30	楕円	47	39		
P 155	K30	円	35	29		
P 156	J30	楕円	94	42	S B5・6 P 16	
P 157 a	J30	楕円	34	40	S B5 P 5	
P 157 b	J30	楕円	30	40	S B6 P 5	
P 158	I30	円	42	36	S B5 P 14	
P 159 a	I30	楕円	44	22	S B5 P 3	
P 159 b	I30	楕円	56	22	S B6 P 3	
P 160 a	I30	楕円	32	20	S B5 P 4	
P 160 b	I30	楕円	42	22	S B6 P 4	
P 161	N28	楕円	50	42	S B9 P 13	
P 162	N28	円	25	14		
P 163	N26	楕円	37	18		
P 164	M・N26	不整	49	17		
P 165	M27・28	円	33	7	S B8 P 4	
P 166	M30・31	円	48	16	S B3 P 5	
P 167	K31	円	40	62	S B4 P 2	
P 168	K29	楕円	20	10	S B1 P 4	
P 169	H28・29	円	48	19		
P 170	I30	円	40	13	S B5・6 P 13	
P 171	G29	楕円	40	19		
P 172	N20	楕円	40	24		
P 173	M27・28	楕円	24	25		
P 174	I20	半円	55	25		
P 175	E29	円	31	16		
P 176	E29	楕円	45	16		
P 177	D30	隅丸長方	67	45		
P 178	D30	楕円	79	27		
P 179	C29	楕円	44	20		
P 180	C29	円	46	34		
P 181	C29	楕円	44	16		
P 182	C29	楕円	42	21		
P 183	C29	楕円	49	15		
P 184	C28	楕円	30	17		
P 185	D29・30	不整	66	16		
P 186	D28	隅丸方	53	14		
P 187	J30	楕円	30	20	S B5・6 P 15	
P 188 a	J30	楕円	44	55	S B5 P 6	
P 188 b	J30	楕円	44	60	S B6 P 6	
P 189	M27	楕円	25	16	S B7 P 14	
P 190	L26	隅丸方	37	21		
P 191	N24	不整	43	41		
P 192	N24	楕円	43	17		
P 193	N23	不整	42	26		
P 194	N23	円	34	39		
P 195	N・O24	円	78	16		
P 196	N23	不整楕円	71	37		
P 197	N27	不整楕円	68	27		
P 198	N27	円	24	32		
P 199	N28	円	24	26	S B7 P 22	
P 200	N28	楕円	33	18		
P 201	M27	楕円	20	13		
P 202	M27	楕円	24	18		

現場名称	グリッド	形状	最大径(cm)	深さ(cm)	遺構名	備考
P 203 a	N29	円	20	18	S B7 P19	
P 203 b	N29	円	18	13	S B8 P9	
P 204	N23	楕円	34	19		
P 205	N・O24	円	23	25		
P 206	N23	円	27	25		
P 207	N23	円	25	8		
P 208	N23	円	37	17		
P 209	N23	楕円	38	13		
P 210	O23	円	21	6		
P 211	O23	楕円	33	12		
P 212	O23	不整	37	28		
P 213	O23	半楕円	24	16		
P 214	O22	楕円	47	24		
P 215	O22	楕円	53	14		
P 216	O22	円	33	26		
P 217	O22	円	24	17		
P 218	O21	円	35	20		
P 219	O21	円	30	14		
P 220	O・P21	楕円	52	18		
P 221	L27	不整円	66	17		
P 222	M27	円	24	20	S B7 P8	
P 223 a	M28	楕円	40	19	S B8 P5	
P 223 b	M28	楕円	35	8		
P 224	M29	楕円	37	25	柵列2 P8	
P 225	M・N29	楕円	27	16	S B7 P18	
P 226 a	I 29	楕円	32	41	S B5 P2	覆土6層
P 226 b	I 29	楕円	24	41	S B6 P2	覆土6層
P 227	E・F 28・29	不整円	171	27		
P 228	D29	不整円	63	9		
P 229	D29	円	32	10		
P 230	C28	円	36	34		
P 231	F28	隅丸方	42	69		
P 232	C28	不整楕円	75	101		
P 233	—	—	—	—		欠番
P 234	G・H26	不整	87	29		
P 235	G26・27	円	52	23		
P 236	G26	不整円	65	28		
P 237	F26	不整円	49	43		
P 238	K28	円	21	21	S B2 P7	
P 239	F27	円	36	17		覆土2層(暗褐色・明褐色)
P 240	J 30・31	不整楕円	50	20	S B5・6 P17	
P 241	K28	円	21	34	S B2 P8	
P 242	N26	半円	34	20		
P 243	O22	隅丸方	36	27		
P 244	M22	楕円	67	30		覆土3層(黒褐色・褐色)
P 245	G27	不整	36	66		
P 246	G27	円	27	12		
P 247	D29	円	66	10		
P 248	H29	円	136	31		
P 249	E26	隅丸方	42	26		
P 250	E26	隅丸三角	41	14		
P 251	E27	楕円	65	32		
P 252	E27	楕円	45	65		
P 253	D・E27	円	65	19		
P 254	D27	不整円	31	13		
P 255	D27	円	23	18		
P 256	D27	円	24	15		
P 257	C27	円	27	8		
P 258	C29	楕円	83	39		
P 259	C28	楕円	33	33		
P 260	G28	円	45	28		
P 261	H28	楕円	40	24		
P 262	K22	楕円	100	52		
P 263	D26	不整	60	11		
P 264	C・D26	円	41	10		
P 265	C26	楕円	23	12		
P 266	—	—	—	—		欠番



現場名称	グリッド	形状	最大径(cm)	深さ(cm)	遺構名	備考
P 267	G 25	円	54	22		
P 268	G 24・25	円	53	28		
P 269	F 25	楕円	50	15		
P 270	E 25	楕円	72	19		
P 271	E 25	楕円	112	21		
P 272	D 25	楕円	34	13		
P 273	D 24・25	楕円	44	23		
P 274	D 24	不整円	76	23		
P 275	D 24	円	40	18		
P 276	F・G 27	楕円	105	36	S K 3	覆土2層
P 277	F 26・27	半月	72	24		覆土1層
P 278	D 24	楕円	56	13		
P 279	D 24	隅丸方	40	21		
P 280	D 24	不整	73	22		
P 281 a	J 29	楕円	38	23	S B 5 P 9	
P 281 b	J 29	楕円	28	16	S B 6 P 9	
P 282	L 21	円	40	22		
P 283	C 24・25	不整楕円	45	9		
P 284	C 25	楕円	31	10		
P 285	C 24・25	不整	48	21		
P 286	C 25	楕円	39	8		
P 287	C 25	不整	79	17		
P 288	C 25	円	40	—		深すぎて完掘せず
P 289	C 25	楕円	73	86		
P 290	C 25・26	長方	88	37	S K 4	
P 291	C 23	不整	71	27		
P 292	D 23	楕円	80	20		
P 293	D 23	円	57	26		
P 294	C 23	楕円	145	76	S K 5	覆土4層
P 295	C 22	楕円	80	41		
P 296	C 22	楕円	79	38		
P 297	C 22	楕円	77	30		
P 298 a	I 29	楕円	24	25	S B 5 P 1	
P 298 b	I 29	円	26	42	S B 6 P 1	
P 299	D 22	楕円	64	15		
P 300	D 22	楕円	76	23		
P 301	F 24	円	54	37		
P 302	F・G 23	楕円	50	26		
P 303	F・G 23	円	80	34		覆土2層(暗褐色・褐色)
P 304	G 23・24	不整	139	40		
P 305	G 22・23	楕円	72	42		
P 306	H 22	不整円	40	18		
P 307	H 21	楕円	60	25		
P 308	I 20	楕円	22	18		
P 309	G 21	円	60	27	S K 6	縄文中期片出土
P 310	F 21・22	円	62	40		
P 311	F 21	楕円	113	42		
P 312	K 20	不整	120	31		
P 313	D 21・22	隅丸長方	66	29		
P 314	D 22	楕円	30	26		
P 315	D 21・22	楕円	42	27		
P 316	I 25	隅丸長方	96	23		覆土2層(暗褐色・褐色)
P 317	I 25	不整円	73	54		
P 318	L 24	不整楕円	66	31		
P 319	K 23	円	39	24		
P 320	K 23	円	73	31		
P 321	N 19	楕円	32	24		
P 322	M・N 20	長方	85	17		覆土1層(褐色)
P 323	M・N 20	楕円	77	15		
P 324	N 20	円	26	20		
P 325	M・N 21	円	54	23		
P 326	N 19	不整円	34	9		
P 327	L・M 19	不整	185	19		
P 328	M 20	円	69	28		
P 329	L 20	楕円	68	21		
P 330	L 20	楕円	128	27		覆土2層(褐色)
P 331	I 23	楕円	61	26		

現場名称	グリッド	形状	最大径(cm)	深さ(cm)	遺構名	備考
P 332	L22	円	42	24		
P 333	L23	円	48	23		
P 334	L23	円	25	13		
P 335	L23	隅丸方	28	27		
P 336	M23	円	27	19		
P 337	N23	不整	34	11		
P 338	N21・22	不整	52	24		覆土3層(黒褐色・灰褐色・明褐色)
P 339	N21	不整	69	24		
P 340	N22	不整	75	29		
P 341	M21	円	46	25		
P 342	L22	楕円	97	21		覆土2層(黒褐色・明褐色)
P 343	J22	円	44	24		
P 344	L23	楕円	36	11		
P 345	M23	円	40	25		
P 346	M21	楕円	130	26		覆土3層(極暗褐色・暗褐色・褐色)
P 347	K28	楕円	27	22	S B1 P6	
P 348	M21	円	65	28		
P 349	E25	円	53	28		
P 350	I26	不整	48	12		
P 351	Q18	楕円	(50)	17	S B10 P8	
P 352	Q18	円	42	22	S B10 P7	
P 353	Q18	円	37	27	S B10 P5	
P 354	Q17	楕円	30	—	S B10 P4	
P 355	N20	不整円	105	68		
P 356	I27	楕円	15	16		
P 357	J26	不整	30	16		
P 358	N19	円	46	52		覆土3層(黒褐色・褐色)
P 359	N20	不整	117	52		覆土5層(褐色・暗褐色・極暗褐色・黒褐色)
P 360	J26・27K26	長楕円	185	35		
P 361	L19・20	円	76	22		
P 362	L20	楕円	59	13		
P 363	K20	円	68	31		
P 364	K19・20	不整	121	33		
P 365	K19	円	104	25		
P 366	K19	楕円	65	—		
P 367	N19	円	33	27		
P 368	J19	不整	53	36		
P 369	I20	半円	35	16		
P 370	I20	楕円	48	29		覆土2層(褐色)
P 371	I20	楕円	37	30		
P 372	J20	楕円	44	27		
P 373	H・I20	円	54	21		
P 374	I20	不整円	60	25		
P 375	J20	円	23	15		
P 376	K20	円	35	7		
P 377	K19	円	27	25		
P 378	K19	不整方	35	30		
P 379	J19	円	16	31		
P 380	J19	円	17	28		
P 381	K26	円	27	37		
P 382	G19	円	31	39		
P 383	H18・19	円	61	110		覆土2層(褐色)
P 384	H19	不整	125	70		
P 385	H・I19	円	21	19		
P 386	I19	円	21	29		
P 387	I19	円	15	—		
P 388	I19	円	38	27		
P 389	L26・27	隅丸三角	54	12		
P 390	J27	楕円	15	8		
P 391	J20	円	19	—		
P 392	L28	円	25	55		
P 393	J20	円	54	23		
P 394	L19・20	円	65	28		
P 395	K19	長楕円	98	27		覆土3層(黒褐色・暗褐色)
P 396	K19	楕円	52	—		
P 397	L19	楕円	70	31		
P 398	I20	円	41	33		

現場名称	グリッド	形状	最大径(cm)	深さ(cm)	遺構名	備考
P 399	M29	円	30	25	S B9 P4	
P 400	G・H20	半円	90	14		覆土3層(褐色・極暗褐色)
P 401	L 19	円	45	19		
P 402	M19	楕円	35	45		
P 403	M19	楕円	35	24		
P 404	M19	円	32	30		
P 405	N19	円	22	18		
P 406	N19	円	28	39		
P 407	N18	円	35	60		
P 408	N18	隅丸三角	40	37		
P 409	N18	円	32	28		
P 410	O18	円	23	21		
P 411	O19	円	23	38		
P 412	O19	円	39	47		
P 413	O19・20	円	28	5		
P 414	N19	楕円	44	51		
P 415	N19	長楕円	78	30		
P 416	N20	円	24	47		覆土2層(極暗褐色・褐色)
P 417	N20	隅丸方	38	33		
P 418	N20	楕円	56	23		
P 419	N20	隅丸三角	37	28		
P 420	O20	円	47	21		
P 421	Q17	円	26	10	S B10 P3	
P 422	L 31	楕円	49	17		
P 423	N20・21	円	34	26		
P 424	—	—	—	—		欠番
P 425	Q 18	楕円	25	6	S B10 P6	
P 426	—	—	—	—		欠番
P 427	P 18	円	28	22	S B10 P2	
P 428	P 17	円	26	16	S B10 P1	
P 429	—	—	—	—		欠番
P 430	O18	円	37	19		
P 431	O18	円	27	28		
P 432	L・M20	円	49	27		
P 433	L・M21	円	48	21		
P 434	H19・20	円	49	43		
P 435	M18	円	28	22		
P 436	D18	楕円	44	38		以下は神明第3次調査分(P488まで)
P 437	C19	円	34	—		
P 438	C19	円	42	48		
P 439	D19	隅丸方	38	42		
P 440	D19	楕円	40	11		
P 441	D19	円	31	22		
P 442	C19	ひさご	38	26		
P 443	C19	楕円	48	15		
P 444	C19	円	24	17		
P 445	C20	円	38	22		
P 446	C20	円	36	20		
P 447	C20	楕円	38	14		
P 448	C20	円	48	16		
P 449	C20	楕円	62	17		
P 450	D20	楕円	48	19		
P 451	E20	円	46	13		
P 452	E20	楕円	88	14		
P 453	D・E21	円	44	9		
P 454	D20	楕円	62	18		
P 455	C21	楕円	60	16		
P 456	C21	楕円	38	22		
P 457	C21	不整円	36	18		
P 458	C20	楕円	40	23		
P 459	C20	円	62	19		
P 460	D21	半円	42	18		
P 461	E20	隅丸長方	56	16		
P 462	E・F20	不整	58	17		
P 463	E19	楕円	116	47		
P 464	E19	円	40	12		
P 465	F19	円	40	11		

現場名称	グリッド	形状	最大径(cm)	深さ(cm)	遺構名	備考
P 466	F・G 19	楕円	52	11		
P 467	F 20	楕円	40	15		
P 468	F 20・21	円	54	6		
P 469	F 21	円	38	13		
P 470	F 21	楕円	52	9		
P 471	F 21	円	50	11		
P 472	G 21	楕円	54	21		
P 473	F・G 20	円	42	19		
P 474	G 20	円	38	21		
P 475	G 20	楕円	52	22		
P 476	G 20	楕円	62	9		
P 477	G 19・20	円	47	10		
P 478	G 19	円	56	11		
P 479	G 19	円	46	9		
P 480	G 19	円	32	9		
P 481	G 19	楕円	46	11		
P 482	H 19	楕円	42	43		
P 483	G・H 19	円	46	11		
P 484	H 19	円	34	30		
P 485	H 21	楕円	78	74		
P 486	H 21	楕円	60	13		
P 487	H 21	楕円	46	13		
P 488	H 21	楕円	38	23		

### 第3節 まとめ

平成14年度神明遺跡第4次調査の成果は、以下のとおりである。

旧石器時代北部調査区では、旧石器時代後期の安山岩とメノウの石器集中出土区を1ヶ所発見し、南部調査区では頁岩のナイフ形石器が1点出土した。関東ローム層中から複数の石器が発見されたのは、常名台では今次調査が初めてである。特に北部調査区では微細細片が多く出土した為、掘削土を持ち帰り水洗選別による遺物の回収を行った。その結果、剥片と細片との接合関係も知る事ができた。

中世の掘立柱建物跡は10棟を検出した。建物のほとんどが、軸線を磁北から10°前後の範囲で同じくするものであることから、互いに関連を持った同時期の建物と考えることができる。なお、平成9・13年度に調査した建物群を圍繞する堀の軸、平成9年度検出の第1号掘立柱建物址もこれになっており、一連の時期に機能していたものとなろう。その時期は、平成9年度調査の堀から出土した陶器鉢（常滑）の年代観を参考にすると、鎌倉時代の中でも13世紀中葉から後半にかけてのものとなる。貿易陶磁や古瀬戸の出土がないため年代を補完する材料に乏しいが、出土土器も非ロクロ丸底のものが主体であることは、上記の年代と矛盾するものではない。

土坑は縄文時代の土器を出土するものもあるが、その大部分は性格・時期ともに不明確なものであった。

今後は、隣接する山川古墳群の試掘調査で見つかった溝が、中世の堀か古墳の周溝であるかを明らかにし、今年度検出した柱穴と連続したものがないかを調べる必要があるだろう。また、旧石器のブロックについても今年度と類似したものがないか注意する必要がある。今後の調査の進展に期待したい。

追記：「今年度調査の反省 一中世掘立柱建物跡調査の問題点一」

当調査区に中世の掘立柱建物があることは、昨年調査で明らかになっていたが、実際掘り進めた過程で感じた反省点を以下に記す。

## ① 建物確認時の問題点

まず鋤簾による遺構確認時に平板測量による全体図を作成したが、柱穴の多さから建物や柱穴の並びを確認段階では分別できなかった。そのため掘り下げを進めながら、建物群を検討することに方針を変えたが、各建物群に区切った記録や必要な情報の取得が遅れた。第1・3・4・5・6・10号は現場段階で建物跡と分別できたが、第2・7・8・9号は整理時に認定したものである。

柱穴の掘り下げは、まず全て半截し一見して土層断面に明確な特徴が確認できないものは、記録を採らずに底面まで完掘した。そのため掲載外の柱穴はほとんど覆土の観察をしていない。この理由は、確認時の柱穴上面では柱の痕跡が確認できなかったため、観察や記録には至らないと判断したためである。恐らく柱穴が埋没する過程で、柱穴の上層部には新しい土が入り、それが後世の開墾等で慣らされたことで、各種の痕跡は確認面上では不明確となるのであろう（註1）。

結論からいうと、方法論的に古代の掘立柱建物のように中世の柱穴も確認面から数cm下げて柱の抜き取り痕を探す必要があった（註2）。つまり、完全に掘り下げる前に1度抜き取り痕の確認を行い、良好のものは記録化し、そうでないものは完掘するという掘り下げ時の選択をしてもよかった。ただし遺構確認時と完掘時以外に、柱の状況を平面図化する手間と労力がさけるかという問題も残る。

## ② 掘り上げ時の問題点

中世の柱穴には径が20～30センチ程度の小規模なものがあり、一見して柱穴か自然の根の跡か、また単なる地山の凹凸か確認時では判断がつかないことがある。実際に掘ってみないと分からないのが正直なところである。上面で柱穴と認識しても、底面まで掘り下げると実は樹根だった穴や、複雑な柱穴もある（註3）。植栽痕と柱穴の違いは、底面・側面の形状、当り痕の有無、覆土などの観察が根拠になるものと思われる。

初めから樹痕と見なして掘ることから除外しては、遺漏が生じる恐れがある。そのため調査時には可能性のある痕跡は全て掘り上げて記録する立場をとった。これは遺漏を防ぐのに効果があるが、事後の検討時に混乱が生じることもある。掘り上げ後は、明らかに駄目な穴のチェックを行い、記録化までの間に取舍選択の検討を現場段階でも充分にしておくべきであった。

柱穴の底面では地山が固く締る、所謂当り痕のあるものもあった。しかし今回は作業全体のベースから、それらを記録し硬度を確かめる等のことはしていない。これらに対しては余裕を見て、周辺を掘り下げて平面の様子を観察し、記録化することも必要であろう。

第5号と第6号建物は、確認時に柱穴がダルマ型にみえたため、重複して立てられたことを現場で想定していた。ここでも一部を残して初めから完掘したが、関係する全ての柱穴で確認をすべきであった。今回は、最後に残した柱穴で切り合いの前後関係を観察して重複の根拠としたが、この例のようにほぼ同じ位置の重複関係は、柱穴の切り合い関係しか根拠がない。そのため重複に関係する全てのピットに観察を行わないと、根拠が薄弱になる恐れがある。まして軸線の違う建物は、重複するピットの観察以外、前後関係はまずわからないのだから、柱穴の認識と重複は、掘り下げ前にある程度は見通しを立てておかなければならないのだろう。

ところで、一つの建物でも柱穴の深さにはばらつきがあるので、同じ深さを以って建物の認識基準とすることはできない。また、建物設計の割付時に一定長の尺が用いない場合には、柱と柱の間隔が一定となる可能性は乏しい。このことは建物の抽出にあたって自分はこの基準で建物と見なしたという理由付けをしないと、どのような線も引くことができってしまうことになる。

第7・8・9号建物跡のある中世柱穴の密集区では、切り合いの乏しい他の建物の柱間寸法や軸線から3棟の復原を試みたが、「余った柱穴」もある。これらに対しては、異なる解釈を与える余地が残されており、集中区のみを図を付して読者の検討に給した。

本来ならば、調査者が最も現場を知る立場として、遺構を報告することができるはずである。ただし、やむをえず困難な課題が残る場合は、何が分かって何が不明確かを読者が検討できるだけの情報を掲載することで批判や評価を受けることが、より進んだ遺跡の理解になるだろう。(比毛君男)

註1 なお条件の良い土層断面によっては上面でも柱の抜き取り痕が観察できたものも数例だけがあった。

註2 東北地方の例では抜き取り痕が見られるのは全体の1～2割という指摘もある(東北中世考古学会編 2001『東北中世考古学叢書2 掘立と竪穴 中世遺構論の課題』高志書院)。

註3 例えば明らかに生きた柱穴の中にさえ、樹根が入り込むことがある。それは円形のピットの底面や側面に根による細かな小穴が空いている事から分かる。これは、柱穴の覆土が地山の火山灰土よりも生育に向いているためであろう。また調査区北部の柱穴確認時には、上面を数cm下げたところ、黒色土の中に黄褐色土が輪状に観察できたものがあり、柱穴とみなして平面を記録して掘り進めたところ、底面が平坦でない植栽痕の例もあった。

## 第7章 平成14年度調査のまとめ

平成14年度における、常名台遺跡群の調査成果は下記の通りである。

山川古墳群の確認調査では、古墳と思しき周溝、時期不明の溝、土坑等の存在が確認された。今次および昨年度の確認調査により、その全体の様相は把握が可能となった。つまり山川古墳群は、現存する古墳を二基有し、地中にも周溝等を複数有する古墳群であるという位置付けが確定したのである。このことは、同一台地上で既存の道を遺跡の境界としたにすぎないものでありながら、低地に望む台地縁辺部に墳墓群が、奥まった谷津に面した台地上には集落が位置する土地の住み分けにも似た立地上の特徴が見られる。確認された古墳の時期については、遺物が少なく明確なことは言及出来ないが、今後の調査によって明らかになる。

西谷津遺跡は、道路幅に規制された調査であるため、遺構で完掘できたものは少ないものの、古墳時代前期、および古墳後期から奈良時代の集落跡としての貴重な資料を得ることができた。すなわち、前者では谷津を隔てて南側に隣接する神明・北西原遺跡と同時期の集落が、後者としてはやはり谷津の南東に位置する弁才天遺跡と同時期の集落が展開していたのである。このことは、桜川からT字状に嵌入する谷津を巡って立地する各遺跡が、何の関連も持たない独立した遺跡なのではなく、古墳時代と古代に限っては各々が有機的に関連をもって存在していた集落跡であったことを意味する。またその反面、集落としての活動の乏しい弥生期や古墳中期以降の様相がどうであったか、課題も生じた。出土遺物にも見るべきものが多く、奈良時代の資料群は今後、弁才天遺跡などとの比較が求められるであろう。

北西原遺跡では、過去調査されたものと同様に、古墳時代終末期の方墳一基の調査を行った。ここでも調査範囲の限界から、古墳全体を完掘することができなかったが、貴重な成果を得ることができた。特に玄室の構築状況や、玄室入口部の<sup>しきみいし</sup>闕石を検出するなどの成果は、今後このような終末期方墳の研究を進める上で貴重な資料となるものである。玄室部が盗掘を受け、副葬品その他が失われていたのは残念だが、須恵器など残された資料から古墳の年代を探る手がかりも得ることができた。北西原遺跡内の古墳群と同時期と思しき集落は、谷津を隔てた東側にある弁才天遺跡で確認されている。今後の整理調査の進行に従っては、集落と墓域の関連が明らかになるかもしれない。

神明遺跡では、過去調査された中世の堀の内側にある掘立柱建物群と旧石器時代のメノウ・安山岩のユニットを発見した。前者については付編を参考いただきたい。後者では、過去の常名台の調査でローム層中での遺物を発見できた例が乏しいことから、非常に重要な資料を得ることができた。肉眼で検出できない微細な細片のふるいがけでの検出により、微細な剥片と母岩との接合関係も明らかにすることができた。旧石器の調査については昨今の状況下では困難な条件も少なくないが、存在が確実なものについては調査の手を十分に差し伸べる必要がある。

台地上だけでも14万㎡という調査区をこの常名台遺跡群は有している。土浦市内でこれほど大規模な調査を行うのは、木田余台遺跡群、田村・沖宿遺跡群に続くものである。現代の様々な状況を鑑みると、谷津に面した複数の集落が如何に営まれ続け、変遷を遂げたかを辿ることのできるこれだけの大規模な調査は、この常名台を除き、今後は見られない可能性もある。今後の調査の進展に期待は大きい。

最後に酷暑の中調査に御尽力いただいた、駒澤大学の飯島先生、酒井先生、日考研茨城の小川、大淵両氏と各調査員、学生諸君、地元各作業員の皆さんの協力で当報告をまとめることができた。そして今次調査にあたり、陰に陽にご協力いただいた関係各位の方々に、衷心より御礼申し上げ、報告を終える辞といたしたい。

(比毛 君男)

## 付 編

### 神明遺跡における中世遺物と遺構の検討

—土器皿と堀、建物の県内事例との比較—

比 毛 君 男

#### 1. はじめに —本稿の目的—

本稿は、過去及び本次調査において神明遺跡で検出した中世の遺物と遺構について検討することを目的とする。このうち出土遺物は、市内出土の類例等から年代的な位置付けを行う。検出遺構については、県内既調査の事例との比較により当遺跡の性格を検討する。

#### 2. 出土遺物の検討 —市内出土の中世土器皿の対比—

ここでは神明遺跡の中世出土遺物のうち、その大部を占める土器皿の年代的な位置付けを検討する(註1)。この理由は、土器皿の変化が遺構の年代を考える物差しとして利用しやすい点と、神明遺跡内では少ないながらも最も出土数のある遺物であることによる。その方法は、土浦市内出土事例のうち、遺構内出土の中世土器で陶磁器等を伴出するものを抜き出して、土器を比較して年代毎に変遷を辿るというものである。この際、年代的な位置付けは伴出する陶磁器の編年を援用する。まず、以下に市内遺跡の出土事例を提示する。

#### I 入ノ上遺跡〔窪田他1997〕

- ① 遺構名：SX-13(粘土を一部貼り、焼土を含む浅い落ち込み)[出土状況]皿状の浅い落ち込みに伴い土師器片が出土。レベルや平面的には小皿と高台付椀が共伴する可能性が高い。[出土遺物]土師器(糸切小皿・高台付椀)。[遺物の年代観]11～12世紀。
- ② 遺構名：SX-12(土器溜り)[出土状況]土師器小皿の密集範囲と火床部から構成。火床部全体に小皿の細片が散在。レベル的に高台付椀は共伴しないかもしれない。[出土遺物]土師器(糸切小皿25点、高台付椀1点)[土器の年代観]高台付椀が除外できれば、小皿類は12世紀代と限定できる可能性がある。
- ③ 遺構名：SB-5(第5号掘立柱建物跡)[出土状況]報告では柱穴の並びはP1からP6までと認識。遺物は浅い土坑状のP5から土器皿、P6覆土中から白磁、P2から渥美が出土。[出土遺物]厚手平底土師器小皿(ロクロ糸切とヘラ切)(註2)、白磁椀Ⅷ2類口縁部、渥美大甕胴部。[土器の年代観]伴出する白磁椀と渥美の年代観から、土器小皿もほぼ同じ時期とみなして12世紀中葉～後半代と考える。
- ④ 遺構名：SK-5(墓壇)[出土状況]西向きに葬られた墓壇内に、歯の下から呑口式腰刀1振、足元に土器皿1つが置かれていた。[出土遺物]呑口式腰刀1振、手づくね丸底土器皿1点。[土器の年代観]墓の形態が平安末～鎌倉初期のものであることから12世紀代～13世紀初頭ころか。

#### II 神出遺跡〔黒澤他1999〕

- ① 遺構名：SB8(第8号掘立柱建物跡)[出土状況]掘立柱建物群の中でも切り合い関係から古いと判断できるSB8の確認面上から出土。[出土遺物]非ロクロ平底土器小皿と常滑片口鉢I類の口縁部と古瀬戸卸皿底部。[土器の特徴]神明、般若寺遺跡出土品と類似し、低く外反して端部が肥厚。[年



代観]常滑鉢の年代観は、赤羽・中野編年の5～6a型式期相当(註3)のため、土器も13世紀中葉～後半頃と考える。

- ② 遺構名：SB2 (第2号掘立柱建物跡)[出土状況]掘立柱建物群の中でも切り合い関係から古いと判断できるSB2のピット覆土中から出土。[出土遺物]土器皿と古瀬戸平椀口縁部。[土器の特徴]深めでロクロ糸切のやや大ぶりの皿。色調は赤褐色。[土器の年代観]古瀬戸片の年代は、高台がないが口唇端部が細くなる点から中期Ⅱ～Ⅲ期併行と考え、土器皿も14世紀初頭～中葉頃に収まるものとみなす。
- ③ 遺構名：2号テラス上の遺構【P2、P3、SK15、SK17】[出土状況]台地を削って形成したテラスの上にピットや土坑が掘られる。遺物は各々覆土中から出土するが同じ穴からの一括出土ではない。[出土遺物]テラス上のP3から土器皿が、SK15からは古瀬戸平椀体部と片口鉢Ⅱ類が、SK17からは完形の古瀬戸平椀が、P2からは二次焼成を受けた瓦質土器火鉢片が出土。[土器の特徴]側面は1段ナデの浅めの糸切土器皿。[土器群の年代観]SK15の片口鉢は古瀬戸後Ⅰ期、完形の平椀は後Ⅱ期併行である。土器皿もそれ程後出しない時期とみなすと、14世紀後半～15世紀前葉頃とみなすのが無難かと思われる。
- ④ 遺構名：SK15 [出土状況]覆土中から出土。[出土遺物]土器小皿と古瀬戸折縁中皿・深皿、椀形鉢の各口縁部、瀬戸美濃系天目椀の底部が出土。[土器の特徴]側面に稜をもつ2段ナデで浅めの糸切土器小皿。[土器群の年代観]古瀬戸製品が概ね古瀬戸後期のうちⅢ期からⅣ期新段階併行のため、土器も15世紀中葉～後葉頃と考える。天目は混入とみなし、土器群は古瀬戸の年代に合わせて考えたい。

### Ⅲ 般若寺遺跡〔石川他1987、拙稿1999〕

- ① 遺構名：溝3 [層位と出土状況]調査担当者からの教示では、溝の覆土はロームブロック等を多量に含む人為堆積土で、遺物は覆土下層から中上層にかけてまとまって出土。[出土遺物]土師質土器(内耳鍋・小皿・播鉢等)、古瀬戸、常滑、青磁、瓦等。[土器皿の特徴]内底面に、体部を形成する粘土紐と底板となる粘土との接合部にあたる痕跡(出ベソ状の丸い凹み)が円周状の溝として見られる。土器皿は大型と小型の2種があり、大型はラップ状に外反するものと外側面に2段のナデを持つもの、小型にはやや外反するものと外側面に2段のナデを持つものがある。[土器群の年代観]陶磁器の年代観と覆土の状況から、この出土遺物は大宰期直前からやや遡る程度の頃の一括遺物と考える。古瀬戸後期Ⅳ段階の古相のものが最新遺物であることから、15世紀第3四半期頃の年代観を与えたい。
- ② 遺構名：古墳周溝 [出土状況]中～後期の円墳(又は前方後円墳後円部)の周溝の中から埴輪片・土師器片とともに中世土器群が出土。中世まで残存した周溝に遺物が廃棄・又は流れ込んだものと思われる [出土遺物]土師質土器(小皿・内耳鍋・茶釜片)、古瀬戸、青磁片等が出土。[土器群の年代観]周溝は前述の溝3に一部切られており、内耳鍋・茶釜と古瀬戸の一部は時期的に溝3と同一であることから、15世紀第3四半期頃のものともみなす。周溝底面から出土した古瀬戸水滴と非ロクロ平底土器小皿・丸底皿(註4)は時代が遡り、年代的に幅広い遺物が堆積。

### Ⅳ 神明遺跡(平成9・13年度調査)〔橋場他1998、吉澤他2002〕

- ① 遺構名：1号溝[出土状況]鍵の手状に曲がる溝の覆土中。内側に一部硬化面を伴う。[出土遺物]土器皿、常滑甕体部、山茶碗窯(南部)系こね鉢口縁部等。[土器の特徴]一段ナデの平底非ロクロ土

器皿。[土器の年代観]こね鉢の年代観、赤羽・中野編年でいう常滑5～6a型式期相当であるため、土器皿も13世紀中葉～後半頃と考える。

- ② 遺構名：第7号土坑[出土状況]縄文と中世の土坑が重複。中世遺物は上層の掘りこみから出土。  
[出土遺物]土器皿、常滑甕6b型式口縁・磨り常滑、山茶碗窯(南部系)系こね鉢、土器播鉢(混入)。  
[土器の特徴]一段ナデのやや厚手の非ロクロ土器皿。[土器の年代観]常滑甕の年代は13世紀第4四半期にあたり、土器皿もほぼ同じ頃と考えたい。

#### V 土器小皿の時代を通して見た変遷 [挿図1・2]

以上の資料を操作した結果、土器皿の変化は以下の変遷を遂げると考えられる。

12世紀から13世紀初頭は、立ち上がりの短い平底の小皿(糸切とヘラ切)と手づくね丸底2段ナデの皿がある。前者は、内底面のナデがなく同心円状の回転ナデのままであることから古代以来の製作技法の系譜を引き、後者は畿内の影響のもとに作られたものと考えられる。古代以来の器種である高台付椀が12世紀まで残るか否かが課題として残る。

13世紀中葉～後半にかけては、手づくね非ロクロの土器皿が主体を占める。神明遺跡の今年度出土資料からは、一部糸切平底の小皿の存在も予想される。2段と1段のナデや、丸底と平底の差が、新旧関係か製作側の系統の反映かはよく分からない。

14世紀初頭～中葉頃にはやや深めの糸切土器皿が存在するが、市内で14世紀に限定できる資料は現在までのところ非常に少なく、その様相は今ひとつ明確ではない(註5)。

神出遺跡の例からは、14世紀末～15世紀前葉頃に側面1段ナデの浅めの糸切土器小皿が、15世紀中葉～後葉頃に側面に稜を持つ2段ナデの糸切土器小皿に変わると考える。般若寺遺跡の①からは、15世紀第3四半期以降には2段ナデの土器皿と大きく外反する土器皿の2種が共存するようである(註6)。

#### VI 今年度調査出土資料の位置付け

今次調査の資料は、掘立柱建物群の柱穴から出土したものがほとんどで、年代を反映する陶磁器の出土はない。但し柱穴出土と西側堀(註7)出土の常滑甕片が、未接合だが釉調や色調の点から同一個体の可能性が高いことが注目される。また建物群の軸線と、区画を意識したであろう矩形に折れをもつ堀の軸線はほぼ共通し、その誤差範囲も10°以内に収まる。両者からは、堀と掘立柱建物群は相互に有機的に関連した遺構で、ほぼ同一時期に機能していたと考えることができる。また、昨年次調査の第6号溝以北で発見した中世遺物を伴う遺構や溝の西側にあった掘立柱建物(註8)も一連のものである可能性が極めて高い。

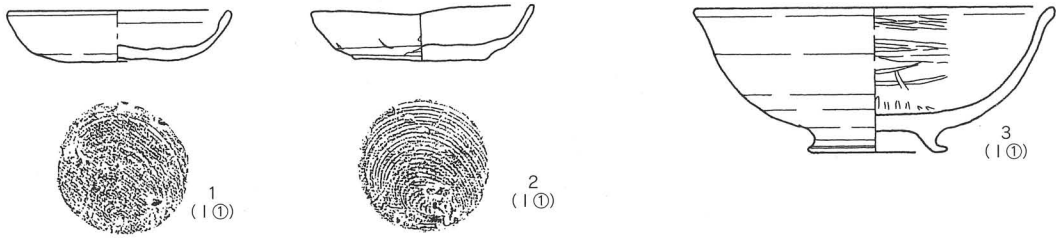
その場合、上記Ⅳの①や②のほか、土坑出土の中世陶器の年代が、常滑窯の編年でⅤ期からⅥ期に収まることは興味深い事実である。建物群の重複も最大でも3回以内で、中世後半以降の資料も極少量であることを含めて考えると、今次調査の遺物群は中世でも鎌倉時代、概ね13世紀中葉～後半代のもの(註9)と限定して考えられるのではないだろうか。

もちろん今後の調査の新出資料によっては、年代の修正が必要になる可能性もある。ただしながら近在の例(註10)を参照する限り、5～6型式期の常滑の甕や鉢の年代観と丸底手づくね土器皿の年代が13世紀中頃から下っても14世紀前葉に収まるものであることは確かであろう。

#### 3. 検出遺構の検討 一 県内の事例との比較一

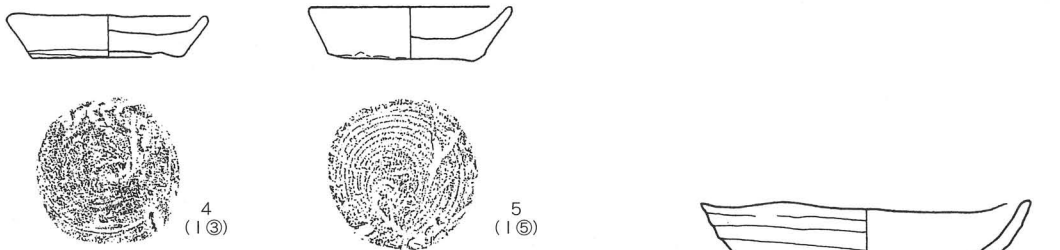
今回の発掘調査では、神明遺跡の南端に堀に囲まれた中世(13世紀代)の掘立柱建物群の存在を明らかにした。ここでは、近年茨城県内で類例の増加する中世遺跡の類例(註11)と比較・検討を行う。まず、ほぼ同

11  
世  
紀



[11世紀代の土器：1～3]

12  
世  
紀



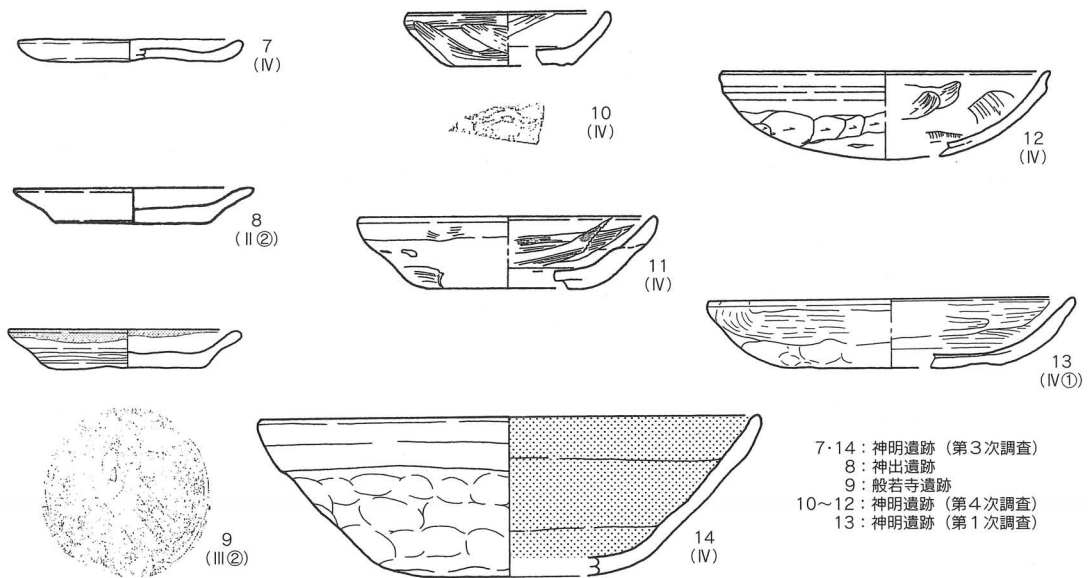
[12世紀中葉以降の土器：4～6]

1～6：入ノ上遺跡

13

世

紀



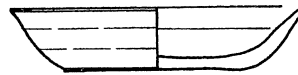
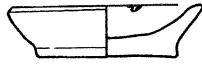
[13世紀中葉から後半代の土器：7～14]

- 7・14：神明遺跡（第3次調査）
- 8：神出遺跡
- 9：般若寺遺跡
- 10～12：神明遺跡（第4次調査）
- 13：神明遺跡（第1次調査）



挿図1 土浦市内出土の中世前期の土器皿(1)

14  
世  
紀



15  
(II②)

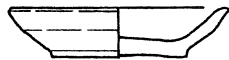
〔14世紀初頭から中葉の土器：15〕

15～17：神出遺跡



16  
(II③)

〔14世紀末から15世紀前葉の土器：16〕



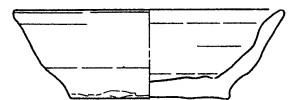
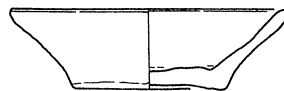
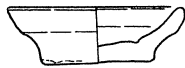
17  
(II④)

〔15世紀中葉から後葉の土器：17〕



15

世



18  
(III①)



19  
(III①)



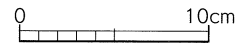
20  
(III①)



21  
(III①)

〔15世紀第3四半期以降の土器：18～21〕

18～21：般若寺遺跡



紀

凡例

- 1 図の出典は、各報告書に拠る。ただし、18～21は拙稿1999より、9・13は調査担当者の承諾の上、著者が再実測したものを掲載した。
- 2 ( )内の数字は、本稿の「2. 出土遺物の検討」でふれた遺跡・遺構番号に対応する

挿図2 土浦市内出土の中世前期の土器皿(2)

時代と考えられる堀(註12)と掘立柱建物の類例を挙げ、各々の事例で堀の構造、掘立柱建物の規模、出土遺物の3点から比較・検討を行い、翻って神明遺跡の特徴を明確にすることとしたい。

#### I 中世前半の溝または堀で囲まれた区画をもつ遺跡

##### ① 鹿嶋市片岡遺跡〔岩松他1997〕

第2調査区(Ⅲ区)にて溝に挟まれた中に掘立柱建物群が存在。南北溝SD1・8(間隔約51m)の中に建替え(最低2回)も含めて6棟ある。SD1の東側にも1棟あり、東西溝をもつ別の屋敷地が東に拡幅する可能性がある。報告によると屋敷地は、「常時3棟以上の建物が2時期に亘って変遷した」とある。溝や柱穴内の出土遺物の中心が13世紀後半から14世紀の初頭辺りに位置付けられることから、鎌倉後期のものとする。

##### ② つくば市島名前野東遺跡〔寺門他2002〕

東西2箇所の方形館跡を確認。西館は堀の出土遺物等から13世紀後葉以前に存在し、14世紀前葉頃に廃絶と推定。南北方向の堀の長さは外周で114m、内周で104m。堀の内側からは、井戸2基、掘立柱建物跡5棟、溝2条、土坑9基の他、柱穴群多数を発見。堀出土の土器皿には相違点があり、土器の形態差は時期差によるものと推定。東館は、溝の南北方向の長さは約49mで2棟の建物跡が建替えられて存在。西館とほぼ同時期に存在。調査は事業の範囲内のみの実施の為、調査区外にも両館の範囲が延びる可能性がある。

##### ③ 水戸市白石遺跡〔樫村1993、樫村1993〕

13世紀から16世紀中葉にかけて営まれた館の跡で、I(13～14世紀前葉)・II(14世紀後葉～15世紀前葉)期は防御面をさほど重視せず、III(15世紀中葉～後葉)・IV(15世紀後葉～16世紀中葉)期に方形の溝を巡らす。本稿ではI期を取り上げる。切り合い関係のせい、I期の溝は余り整然とは巡らされていない。

##### ④ 龍ヶ崎市屋代B遺跡〔根本1986、鈴木1987、佐藤1988・1994〕

遺構は3期の変遷を遂げる。第1期は東西60m×南北80mのほぼ方形の薬研堀が巡り、南側に喰い違いの馬出(虎口)が付随した館跡である(註13)。第2期は館跡を再利用して城郭へと変遷し、第3期には更に大幅な改築を経て城郭として完成する。本稿では第1期(鎌倉時代後半～南北朝期に比定)を取り上げる。第1期の堀の内部には掘立柱建物跡の存在が確実だが、他遺構との切り合いのため詳細は不明。堀の南・西側に土坑群(墓壙群)があり、建物と相互に関連していた可能性が指摘される。

##### ⑤ 総和町羽黒遺跡〔五十嵐他1999〕

標高10m程度の台地平坦部から緩斜面部に当る遺跡で、調査区内から上幅約3.8～5m・下幅約1.5～2m・深さ約1.5mの堀(SD-1)を発見。覆土下層から常滑甕片と古瀬戸瓶子片が出土し、14世紀末～15世紀初頭を下限と想定。堀の内の地名あり。

##### ⑥ 結城市城の内遺跡〔間宮他1997〕

結城氏関連の館と伝えられる方形の館跡で、結城氏初代朝光のものとの指摘もある。現況で幅2m・高さ1～2mの土塁と西・北側に堀の痕跡をもつ。区画内は、東西約178m×南北約128mの長方形を呈する(註14)。発掘調査では、北西角の土塁と堀の折れを検出している。

##### ⑦ 三和町吹上遺跡〔小川他1999〕

調査区東側に方形に溝を配した遺構が館跡として報告されている。平面規模は東西幅が27.0m、

南北幅が25.5m。溝の断面形は逆台形状で、方形の範囲外に張出す可能性がある。耕作等により溝の内側に中世の遺構は確認されなかった。

⑧ 谷和原村前田村遺跡G区〔吹野他1999〕

調査区内から3棟の掘立柱建物跡が確認されている。丸底土器皿が柱穴から出土し、3棟は同一時期で1単位のものとして捉えられている。

参考1 つくば市小田城跡〔石橋1999、石橋他2001〕

鎌倉時代常陸守護であった小田氏の居館で、方形の主郭部に土塁と堀が巡る。史跡整備に伴う発掘調査が進行し、鎌倉時代から戦国時代に至る遺構群が明らかになりつつある。各時代に幾度も改変が加えられ、現状の土塁と堀は15～16世紀の遺構面に伴うものと考えられている。

参考2 明野町堀ノ内遺跡〔茨城県教育委員会1991〕

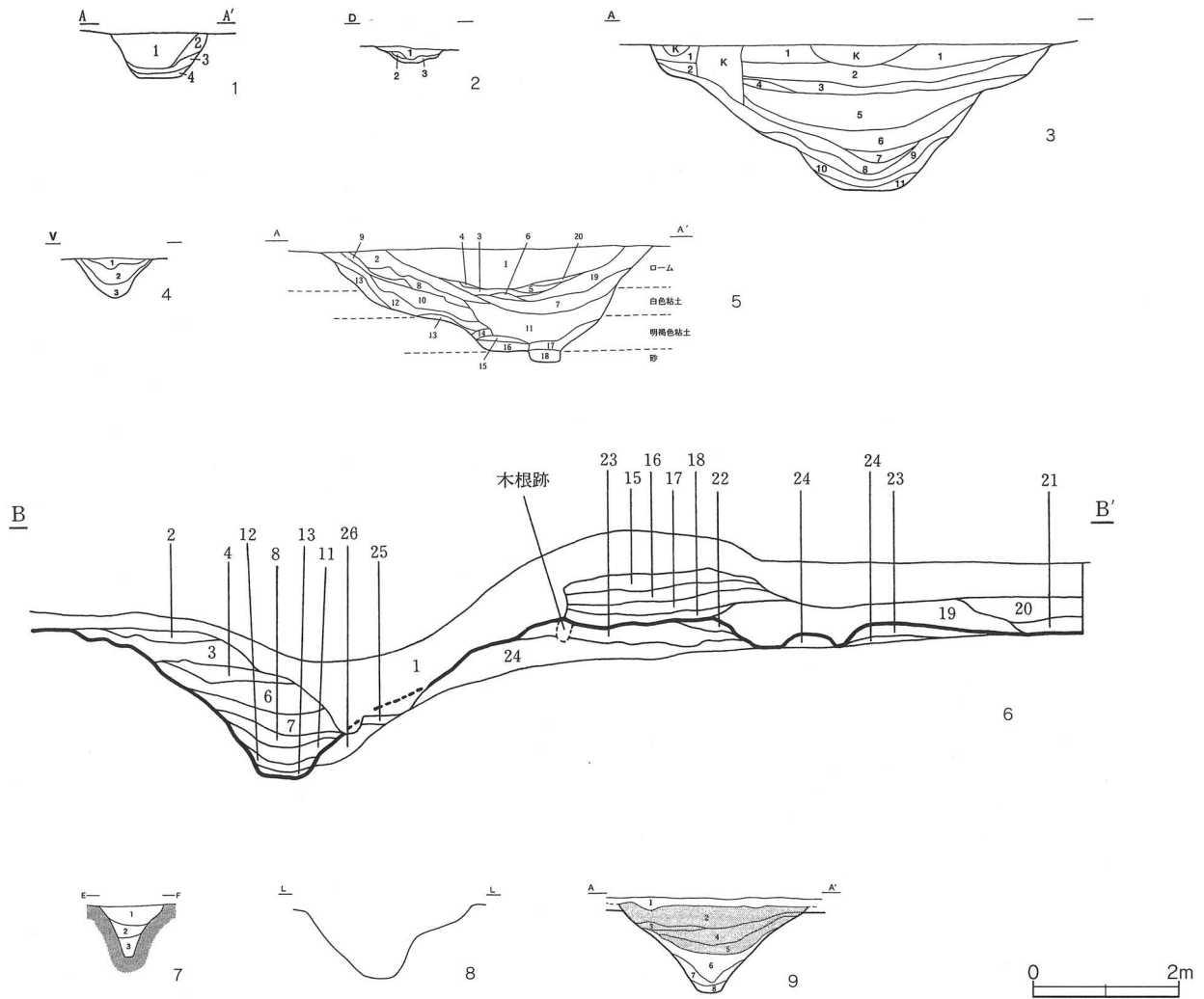
本来寺院跡の伝承の在る遺跡であったが、調査の結果、堀跡等の遺構が発見され、200m四方の館跡であることが確認された。

II 堀の構造

ここでは、各類型間における堀の構造の比較・検討を行う。その過程で大きく分類できる基準が指摘できる場合には、分類と類型化を進める。比較に当たっては、堀の上幅・下幅・深さの最大値・最小値、断面形、計測できるものは囲まれた区画内の内径・外径を検討項目とする。結果を以下に表化する。

表1 遺跡間の堀構造の比較

No	遺跡名	遺構名	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)	確認長(m)	方位	断面形	東西径(m)	南北径(m)	備考
1	片岡	SD1 (南北溝東側)	1.6~0.6	0.6~0.3	22~5	37.4	N-83°-W N-18°-E	逆台形状、 底面平坦	約51m	—	1と2が屋敷の東西を画する溝
2	片岡	SD8 (南北溝西側)	0.4~0.2	0.2~0.1	10~5	6	N-17°-E	皿状、底面平坦	同上	—	同上
3	片岡	SD7 (東西溝)	0.6	0.3~0.2	12	3.2	N-23.5°-E	逆台形状	—	—	1・2の屋敷区画の東隣の区画溝
4	鳥名前野東	第4号溝 (南北溝西側)	1.12~0.2	0.40~0.06	66~20	全長約49		逆台形状	—	約49m	東館跡、溝は東西にも延びる
5	鳥名前野東	第3号溝跡 (方形区画堀跡)	5.0~3.6	1.3	150~120		N-10°-E	外傾した箱薬研状	106~115.5	—	西館跡、堀は東西にも延びる
6	白石	第10号溝 (南北溝西側)	1.2	0.6	60~55	全長90	N-11°-W	U字状、底面皿状		80	溝は東西にも延びる
7	屋代B	SD10 (北辺堀)	2.8~2.3	0.3~0.2	150	約93			60	同上	
8	屋代B	SD22 (土橋付近)	2.0~1.4	0.6~1.0	100	約27		逆台形	同上	—	幅1.5mの土橋
9	羽黒	1号堀 (SD-1)	5.3~3.8	2.0~1.5	145~140	約77	W-9°-N N-8°-E	緩い台形状	—	—	トレンチで部分的に確認された
10	城の内	堀	2.8	0.6~0.3	180	約9.2	N-11°-E	薬研	77m以上	25.5	北西角の部分を確認
11	吹上		2.5~0.8	0.5~0.3	124~41	—	N-18°-E	箱薬研堀	27	12m以上	
12	神明 (第1次)	1・5号溝 (南北堀西側)	2.2~1.7	0.4~0.1	100~80	12.4	N-3.5°-W	薬研	—	—	12と13の堀で館の北・西を区画
13	神明 (第3次)	第6号溝 (東西堀北側)	2.56~1.46	0.42~0.18	120~66	約73	N-87°-E	薬研	73m以上		東に行く程小規模化



1. 片岡遺跡SD7 (東西溝) [表1の3]
2. 島名前野東遺跡 第4号溝 (南北溝西側) [表1の4]
3. 同 第3号溝 (方形区画堀跡) [表1の5]
4. 白石遺跡 第10号溝 (南北溝西側) [表1の6]
5. 羽黒遺跡 1号堀 [表1の9]
6. 城の内遺跡 堀 [表1の10]
7. 吹上遺跡 [表1の11]
8. 神明遺跡第1次調査 1・5号溝 (南北堀西側) [表1の12]
9. 同 第3次調査 第6号溝 (東西堀北側) [表1の13]

挿図3 堀の断面観の比較

堀の検討項目を一覧すると、大まかではあるものの各遺跡が2つの種類に分かれることが指摘できる。まず、片岡・島名前野東(東館)・白石らで括られる一群で、堀の規模が比較的小さいものである。また反して、島名前野東(西館)・城内・羽黒・屋代B等は、堀が深くしっかりしており、区画の範囲も大きい傾向がある。ここでは仮に、前者を片岡タイプ、後者を島名前野東(西館)タイプと呼称し、分化した基準を挙げてみたい。

① 片岡タイプ

- 1 堀の深さが50cm以下である
- 2 堀の下幅が50cm以下である
- 3 区画される内径が、40~60m程度である

② 島名前野東(西館)タイプ

- 1 堀の深さが1mを超えるものが多い
- 2 堀の上幅が1mを超えるものが多い
- 3 区画される内径が100mを前後し、更に規模の大きなものもある

片岡タイプで堀の上幅が1mを超えるものもあり、島名前野東(西館)タイプでも堀の下幅が50cm以下のものがあるため、堀の幅のみを厳密な基準にすることは困難である。しかしながら、深さも含めて堀の大規模なものとしてそうでないものの2者に分かれることは概ね首肯できるのではないだろうか。なお、後者には1町四方以上の方形館跡に該当するものが多く、その規模から所謂中世武士の館に比定されているものが多い(註15)。

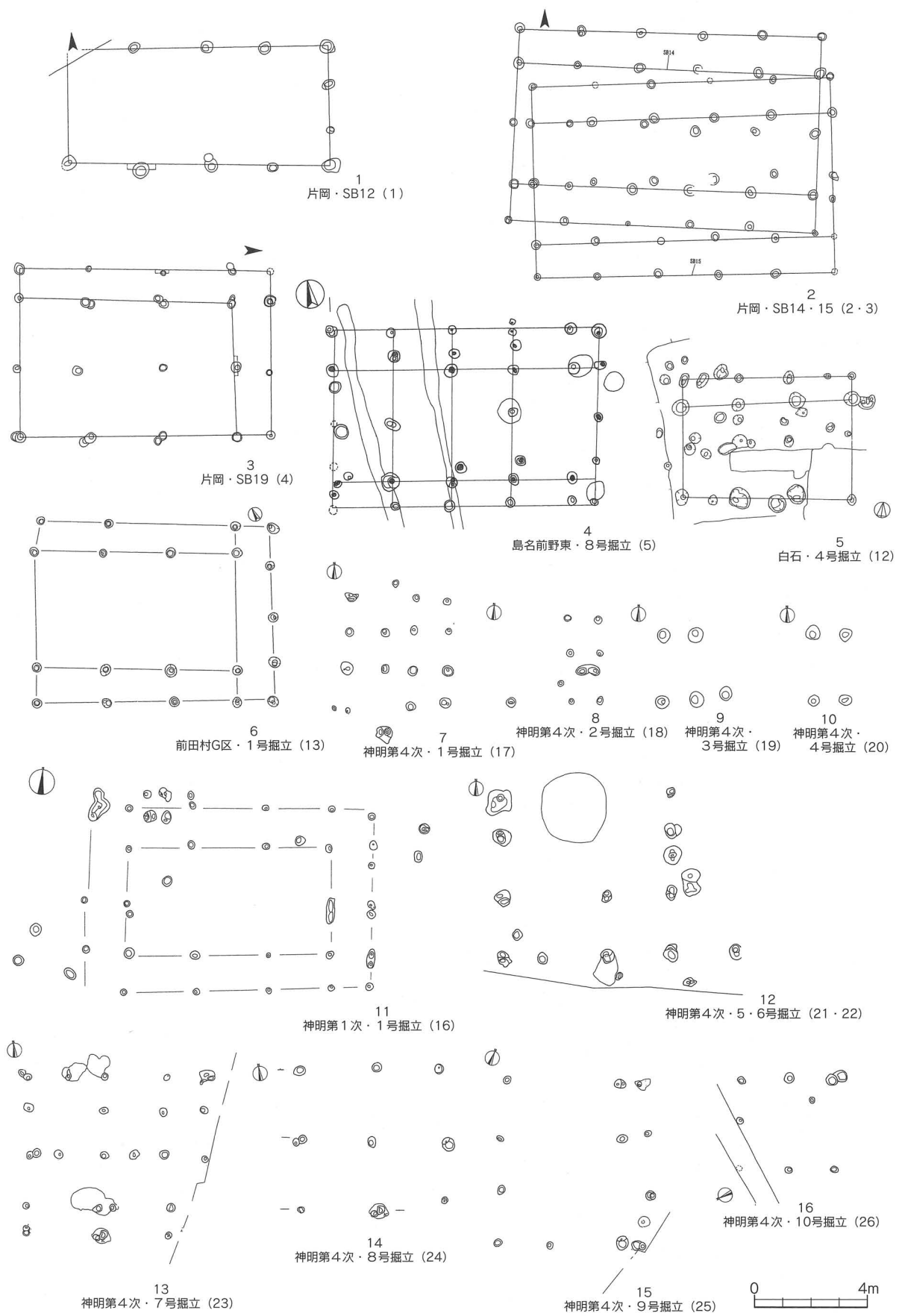
Ⅲ 中世前期の建物の規模

ここでは、各類型間における掘立柱建物の規模の比較・検討を行う。各報告の記述を基本的に採用したが、一部実測図から計測したものや、庇・下屋(註16)と母屋の区別を筆者が行ったものもある。比較の対象は、神明遺跡とはほぼ同時代のもので建物の全容がわかるものに限定し、建物(母屋・庇別)の梁と桁の数、長さ等を算出した。結果を以下に表化する。

表2 遺跡間の建物構造の比較

No	遺跡名	遺構名	主軸方向	母屋 梁×桁	母屋 長さ×幅(m)	母屋面積(m <sup>2</sup> )	全体 梁×桁	全体 長さ×幅(m)	全体 面積(m <sup>2</sup> )	備 考
1	片岡	SB12	N-83.5°-W	3×4	4.20×9.26	38.9	—	—	—	一部調査区外
2	片岡	SB14	N-87.5°-W	2×5	4.3×10.60	45.6	4×5	6.8×10.77	73.2	南北に1×5間の庇、棟東柱
3	片岡	SB15	N-89.5°-W	2×5	4.30×10.60	45.6	4×5	6.8×10.55	71.74	SB14と同構造・規模で切り合いは新
4	片岡	SB19	N-0°-E	2×3	4.85×7.5	36.4	3×4	4.35×6.65	28.9	北西に庇、棟東柱
5	島名前野東	第8号掘立柱建物跡	N-9°-E	3×5	5.6(6.0)×7.8	43.68(46.8)	—	—	—	東館、柱間不均一
6	島名前野東	第9号掘立柱建物跡	N-79°-W	2×4	4.0×8.3	33.2	4×5	6.3×9.4	59.22	西館、東南北に庇か
7	島名前野東	第10号掘立柱建物跡	N-70°-W	—	—	—	—	—	—	西館、柱間不均一
8	島名前野東	第10号掘立柱別棟	N-17.5°-E	1×1	2.4×3.6	8.64	—	—	—	西館
9	島名前野東	第11号掘立柱建物跡	N-75°-E	1×3	2.1×3.6	7.56	—	—	—	西館
10	島名前野東	第12号掘立柱建物跡	N-12°-E	4×4	6.9×9.90(10.20)	68.31(70.38)	—	—	—	西館、東柱と掘り込み事業持つ
11	島名前野東	第13号掘立柱建物跡	N-70°-W	—	—	—	—	—	—	西館、一部調査区外
12	白石	第4号掘立柱建物跡	N-77°-E	2×3	3.4×6.0	20.4	3×3	4.3×6.0	25.8	北に長さ90cmの庇、柱径は18cm
13	前田村G区	第1号掘立柱建物跡	N-56°-W	1×3	4.16×7.08	29.4	3×4	6.4×8.4	53.7	東・南・北に庇
14	前田村G区	第2号掘立柱建物跡	N-55°-E	3×4	4.50×6.72	30.2	—	—	—	柱列不均一
15	前田村G区	第3号掘立柱建物跡	N-54°-W	2×3	5.54×7.46	41.3	—	—	—	柱列不均一
16	神明(第1次)	1号掘立柱建物跡	N-5°-W	2×3	3.8×7.1	26.98	4×5	6.5×10.1	65.65	
17	神明(第4次)	第1号掘立柱建物跡	N-89°-E	1×3	1.4×3.5	4.9	—	3.80×3.5	13.3	
18	神明(第4次)	第2号掘立柱建物跡	N-5°-W	1×2	1.3×2.9	3.77	—	—	—	
19	神明(第4次)	第3号掘立柱建物跡	N-2°-W	1×1	1.21×2.42	2.92	—	—	—	
20	神明(第4次)	第4号掘立柱建物跡	N-1°-E	1×1	1.21×2.42	2.92	—	—	—	
21	神明(第4次)	第5号掘立柱建物跡	N-89°-E	2×3	4.35×6.00	26.1	—	5.62×6.00	33.72	
22	神明(第4次)	第6号掘立柱建物跡	N-89°-E	2×3	4.25×6.00	25.5	—	5.60×6.00	30	
23	神明(第4次)	第7号掘立柱建物跡	N-84°-E	2×3	3.46×6.2	21.45	—	4.65×6.20	28.83	
24	神明(第4次)	第8号掘立柱建物跡	N-10°-E	1×1	2.60×4.95	12.87	—	—	—	
25	神明(第4次)	第9号掘立柱建物跡	N-21°-W	2×3	4.22×5.71	24.09	—	—	—	
26	神明(第4次)	第10号掘立柱建物跡	N-21°-E	2×2	3.15×3.30	10.39	—	—	—	





挿図4 中世前期の建物の規模〔( )内の数字は表2に対応〕

資料を操作した結果、資料群全体を通じた確たる基準や規模を導くには至らなかった。大まかな傾向として、梁間が1～2間の建物が比較的多く(註17)、それらには1方か対照的な2方に庇を伴うことがあるという程度のことは指摘できるようだ。また、各遺跡に複数ある建物群は概ね主軸が近く、相互に関連を持った遺構であることも分かる。ただしながらこれらの事例は、統計的に信頼の置ける事例数が集まったわけではなく、今後の事例の蓄積と県外の類例をも集成して再度検討するべきものとする。

神明遺跡の建物に限って言えば、母屋面積が5㎡以下のもの(第1・2・3・4号掘立柱建物跡)は、常時人が住むには狭すぎる印象が強い。どちらかというところらは付属屋的な性格の建物であろうか。それに対して人が住むのに適した規模の建物は、第5・6・7号掘立柱建物跡や第1次調査(平成9年度)の1号掘立柱建物址の方であろう。付言すると、今次調査で建物規模が確定できるのは第1・2号掘立柱建物跡のみで、他はエリア外の様相も考慮しないと断言ができない。これらに対しては今後の調査の進展により判断が待たれる(註18)。

#### IV 遺跡内の出土遺物

ここでは、各遺跡内からの出土遺物の傾向を比較・検討する。部分的な調査範囲の場合には、出土遺物の傾向も無い場合もある。混入による明らかに時期の異なる遺物は割愛した。以下に報告を抜粋する。

##### ① 鹿嶋市片岡遺跡

SD1から羽口片・椀形滓・台石片・古瀬戸灰釉卸皿片等が、SD8から古瀬戸灰釉瓶子片・常滑片口鉢Ⅱ類片・土器製埴塙等が出土。SD7からはロクロ糸切土器皿(註19)・小皿と鉄滓が一括廃棄の状態で出土。また掘立柱建物の柱穴からは土器小皿・銅製水滴が、区画内のP50からは蔵骨器として用いた常滑甕が出土した。遺構外に貿易陶磁あり。鉄滓や羽口等の遺物から、屋敷の役割の一つが鉄生産に関わる可能性がある。なお銅製の水滴は、一般庶民が用いるとは考えにくいものである。

##### ② つくば市島名前野東遺跡

東館では、掘立柱建物跡の柱穴から開元通寶や土器片が出土。

西館では、堀中から丸底土器皿・小皿、竜泉窯系青磁椀、常滑甕・片口鉢、硯が出土。掘立柱建物の柱穴や土坑から土器皿・小皿が、井戸から土器皿・小皿、硯が出土。

##### ③ 水戸市白石遺跡

該期の土壌から龍泉窯系青磁坏Ⅲ類片、グリットから龍泉窯系青磁椀Ⅰ-5類片が出土。遺跡は室町期以降も利用されているため、後代の遺構に遺物が混入する可能性がある。

##### ④ 龍ヶ崎市屋代B遺跡

遺構に伴い、明確な遺物の出土はない。遺跡は室町期以降も利用されているため、後代の遺構に遺物が混入する可能性がある。

##### ⑤ 総和町羽黒遺跡

堀中から、古瀬戸瓶子片と常滑甕片が出土。確認調査である。

##### ⑥ 結城市城の内遺跡

確認調査のため、出土遺物なし。

##### ⑦ 三和町吹上遺跡

中世遺物の出土なし。

##### ⑧ 谷和原村前田村遺跡G区

柱穴内から丸底土器皿が出土。建物に近接する土壌墓の副葬品に、鉄刀と青銅製水草飛鳥鏡がある。

#### ⑨ 神明遺跡

堀中や区画外の土坑から丸底土器皿、常滑甕・片口鉢片、開元通寶が、柱穴から土器皿・小皿、常滑、鉄製品の破片が各々出土。

##### 参考1 つくば市小田城跡

低地の遺跡のため、各時期のものが面的に累重して堆積している。下層の出土遺物には丸底と平底の土器皿がある。上層の遺物に古式の製品も混入している。確認調査。

##### 参考2 明野町堀ノ内遺跡

土器皿や青磁椀、常滑甕等が出土している。

上記の例からは遺跡毎の相違点が判明しにくく、堀構造の差異が遺物に反映する結果とはならなかった。この原因は主に調査範囲の制約によるものと考えられる。強いて言う、土器皿・常滑の甕・東海産片口鉢・龍泉窯系の青磁などが比較的共通する遺物として認められる程度であろうか。なお遺物の伴う遺構には、堀と建物の付近に見つかる墓壇、溝に一括廃棄された土器皿群、廃絶時に遺物が捨てられた井戸等がある。

#### V 神明遺跡中世遺構の位置付け

上記の検討を参考にすると、過去および今次調査で明らかになった神明遺跡の遺構は、つくば市島名前野東遺跡の西館が最も類例として近い関係にある。すなわち、本例も方形に堀を巡らせた中世前期の館跡となる蓋然性が高いのである。

まず堀構造では、深さが1m以上ある箇所が多いことと上幅が1m以上あることから、しっかりした堀をもつ島名前野東(西館)タイプに属することがわかる。現状で調査の終了した堀の長さは北側堀の東西が73m、西側堀の南北が12.4mである。堀の南北長は不明だが、今次調査の建物群の位置からすると少なくとも50m以上は確実に延びるだろう。

また今回山川古墳群の確認調査により、15bトレンチ中央部で確認された落ち込みが溝北東部の屈曲点に当る(註20)とすると、北側溝の東西方向の延長が、約100m(約1町)となる可能性が指摘できる(註21)。その上、その屈曲点以南のトレンチでも溝が南北方向に走ることが確認できる。15bトレンチ出土遺物に、1号溝出土と同じ常滑片口鉢I類(註22)があることは、その可能性を補完するものとなる。堀の規模が1町四方である場合、掘立柱建物が区画の中央付近に集まる位置関係、及び出土遺物に丸底土器皿・小皿、常滑甕・片口鉢がみられる点は島名前野東遺跡と共通している。

東と南の堀の存在等、今後の調査の検証は不可欠だが、当遺跡の中世遺構が堀を巡らした館跡であるという位置付けは今次調査によりほぼ確定したものと見えよう。県内でも当例の類例は近年増加しつつあり、それらとの比較・検討も今後期待されるところである。

#### 4. おわりに

ここでは、神明遺跡の中世遺物と遺構の位置付けを、県内各例を参考にして鎌倉時代でも13世紀中葉から後半を中心にする方形館跡であることを検証した。論を終えるに当たり、今回触れ得なかった問題点をあげ、今後の課題としたい。

まず遺物の点では、遺跡の性格による遺物の傾向差と、遺跡の継続期間と遺物量の関係が明らかでない。前者では、片岡遺跡の如く鉄生産に伴う遺物等があれば分かりやすいが、それが無い場合には遺跡に拘らずどこでも同じ遺物相であるか、それとも遺跡毎による違いがあるかが現状ではよく分からない。後者については、2～3回の建替えを行った、換言すると数十年間そこで確実に生活が営まれた遺跡にしては、

出土する遺物が少ないという感想を筆者は持っている(註23)。

遺構の点では、3.Ⅱで想定した2タイプの堀の検証が残る。しっかりした堀で広い区画を囲む島名前野東遺跡(西館)のようなタイプと、浅い溝で比較的小規模を囲む片岡遺跡のようなタイプの2者に本当に分けられるのか、また別の範疇があるのか。またもしそうなった場合、その原因となるものは何であるのかまでは考察できなかつた。

土塁の有無にも課題は残る。現地表面の観察でも存在が確認できる遺跡がある一方、発掘調査で見つかる館跡の事例は溝・堀と柵列等を伴うに過ぎないという指摘もある(橋口1987)。中世前半に土塁が廻り得るか否かは、地域性の問題もあるようである(中井1991)。

掘立柱建物の様式、柱間間隔、掘立柱建物群と区画内の空間構成も重要な検討項目である。これらは検出した建物相互の機能分化も含めて、検討しなければならない項目だろう。

最後にこれらの遺跡を営んだ人々の、社会階層的な位置付けが残る。方1町の方形館跡を中世武士層のものと想定するのが最も妥当と思われるが、考古資料的に当時の社会階層と直結するには、現状ではやや資料的な不足が認められる(註24)。

先学の指摘を敷衍するだけで問題点の残る論考となったが、学兄諸氏の御教示、御叱正を頂ければ幸いである。

#### 註

- 註1 在地産と思しき土器群の年代観は、近年研究と事例の集積が進みつつある。代表的な論考に、常陸南部を中心に土器群の変遷を追った桃崎氏(桃崎1999)やつくば市内の遺跡の分析を行った川村氏(川村2001)のもの等がある。先行研究以後、市内出土資料でもある程度まとまりが得られたため本節ではその集成を行ったが、あくまで土浦市内という現代の一行政単位内の資料だけを操作したにすぎない。
- 註2 報告書内では両者とも糸切扱いだいが、実物を観察したところ1はヘラ切である。これは報告者に相談を受けた際、比毛(旧姓橋場)が両者とも糸切の判断を下したもので、誤りは比毛の責任によるものである。
- 註3 報告書では7型式の扱いであるが、口縁部の形状からして6型式以前であろう。
- 註4 上記Ⅱ①も常滑鉢の年代から神明遺跡とほぼ同時期のものと考えることができる。低く外反して端部が肥厚する非ロクロの土器小皿は、神明遺跡や般若寺遺跡の例(Ⅲ②)と非常によく類似している。
- 註5 桃崎氏によると、龍ヶ崎市など県南部の例からは14世紀代は非ロクロ丸底の製品が主体を占めているという指摘がある(桃崎1999)。つくば市小田城下層の例などもこれを支持する結果となっている。
- 註6 この他に土浦市内では、地下式壙を有する遺跡(寄居遺跡、念代遺跡)、戦国期から近世まで継続する城跡(土浦城跡：櫓門・東櫓土塁・本丸の調査)等、中世後半期(15～16世紀)の遺跡〔宮脇B遺跡、井戸山遺跡、般若寺遺跡、真木ノ内遺跡等〕がある。これらの遺跡出土の土器群については後考を待ちたい。
- 註7 平成9年度報告の1号溝と5号溝をさす。報告時には遺構の時期や性格は不明としたが、出土遺物に非ロクロ土器皿や常滑があり、建物を広範囲に区画する規模の大きな堀があることから中世の遺構である。ただしながら、方形の堀と西側堀の延長上の溝との関係は課題として残されている。
- 註8 平成9年度報告の1号掘立柱建物址をさす。報告時には、帰属時期は不明ながらも表採品から近現代の可能性を指摘した。柱穴や建物の規模、軸線の共通点等から今次調査の建物群と一連のものであろう。
- 註9 後段のとおり、14世紀前半まで下降する可能性はあるが、現状で14世紀代に明確に帰属する遺物が出土していないことから、報告と論考内では13世紀代とする。

- 註10 つくば市の事例で、明石遺跡第15号土坑、熊の山遺跡第15号井戸、柴崎遺跡1号・6号井戸、島名前野東遺跡等がある。
- 註11 各事例の集成は、筆者の管見の限りで明確に鎌倉時代頃の遺物が伴出している遺構に限った。また、遺漏の生じていることをご寛恕願いたい。
- 註12 堀と溝の差について厳密に分化する基準の設定は難しい。一つの考え方として、断面幅1間(1.8m)以上のもは堀、半間以下のものを溝とするものがあり、本稿の記述もこれに従う。石守晃氏御教示。
- 註13 第1期の復原プランでは堀の南辺に折れがあり、純粋な方形ではない。
- 註14 区画の北辺については現存の範囲よりも、北に延長する意見もある。
- 註15 その意味では、遺跡を営んだ中世武士層の比定が求められるが、実は片岡・島名前野東・羽黒・吹上・神明の各遺跡周辺には、在地領主に関しての詳しい所伝が無く、在地の武士層に直結することが困難である。そのため、本稿では遺構論以上の言及を控えた。
- 註16 庇と下屋の違いは、宮本長二郎氏の説(宮本2002)の通り、母屋から1.5m程度以上の間隔のものを庇、1.5m以内の間隔のものを下屋と考える。石守晃氏御教示。
- 註17 これらの事象については、既に佐々木義則氏によって指摘されている(佐々木1998)。
- 註18 他の遺跡も含めて、鹿嶋市内の遺跡で丸底土器皿の出土が希少な点は注目される。
- 註19 なお建物群の柱と柱の間隔を算出し比較を行うことも試みたが、規則的な間隔の数値を得ることはできなかった。調査時に筆者も痛感したことだが、建物としての認識が困難な場合は報告に反映しにくく、柱穴群の切り合いが複雑な場合には建物に矛盾の余地が生じてしまうのであろう。
- 註20 15bトレンチ中央部の落ち込みを堀の角と想定すると、それ以南に幅約2mの溝が南に向って16b・17c・18bトレンチまで堀が延びることを確認できる。この長さは確認部分の最南部までで約60mを測る。
- 註21 方1町の規模になる点は、昨年度の報告でも予見されている(吉澤2001)。
- 註22 この片口鉢も常滑5～6a型式期に相当する。
- 註23 鎌倉等消費都市以外の東国の遺跡では、概ね似た傾向にあることが指摘されている(河野1998)。
- 註24 これらに対しては、出土遺物にみる中世在地領主層の基準的なセット関係の設定や、土器・陶磁器の器種・器形毎の偏重性の検討等が求められるだろう。

後記 本稿脱稿後、財団法人茨城県教育財団より梶内向山遺跡の報告書(『茨城県教育財団文化財調査報告第199集 梶内向山遺跡』)が刊行された。報告者の川村満博氏によると、同遺跡では神明遺跡とほぼ同時期の掘立柱建物群が溝を伴って変遷する過程が調査されている。本稿では触れ得なかったが、遺構や遺物等に中世前期に不可欠な資料が含まれており、その検討とともに合わせてご参照頂きたい。

#### 参考文献(敬称略・50音順)

- 五十嵐隆・藤田実・村上慈朗 1999 『羽黒・日下部遺跡発掘調査報告書』総和町教育委員会
- 石川功・塩谷修ほか 1987 『般若寺遺跡(西屋敷地内)・竜王山古墳 般若寺遺跡(宍塚小学校地内)発掘調査概報』土浦市教育委員会
- 石橋充 1999 『史跡小田城跡―第29・31次調査(本丸跡確認調査Ⅰ)概要報告―』つくば市教育委員会
- 石橋充・広瀬季一郎・関口友紀 2001 『史跡小田城跡―第38次調査(本丸跡確認調査Ⅲ)概要報告―』つくば市教育委員会
- 石守晃 2002 『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第298集 中内村前遺跡(1)―1～4区―』財団法人

人群馬県埋蔵文化財調査事業団

茨城県教育委員会 1991『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書Ⅵ(昭和62～平成元年度)』

岩松和光・風間和秀・宮崎美和子 1997『片岡遺跡発掘調査報告書Ⅲ』鹿嶋市の文化財第98集 財団法人鹿嶋市文化スポーツ振興事業団

小川和博・大淵淳志 1999『広町遺跡・宮前遺跡・吹上遺跡・血止塚遺跡・広町・塚ノ下古墳』三和町教育委員会

樫村宣行 1993『茨城県教育財団文化財調査報告第82集 白石遺跡』財団法人茨城県教育財団

樫村宣行 1993「白石遺跡で検出された遺構について」『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団

河野眞二郎 1995『中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都』講談社新書メチエ49

川村満博 2001「つくば市小泉館跡出土の非ロクロ成形かわらけについて」『研究ノート』10号

桐谷優・高野浩之・土生朗治・長谷川秀久・黒澤春彦 1999『東出・神出・中居遺跡』土浦市教育委員会

窪田恵一・黒田友紀・黒澤春彦 1997『茨城県土浦市入ノ上遺跡』土浦市教育委員会

国立歴史民俗博物館 1994『国立歴史民俗博物館資料調査報告書5 日本出土の貿易陶磁東日本編』

佐々木義則 1998「茨城における掘立柱建物跡の概観」『常総台地』14

佐藤正好 1988『茨城県教育財団文化財調査報告第45集 屋代B遺跡Ⅲ』財団法人茨城県教育財団

佐藤正好 1994「茨城県内における中世の城・館跡について—外八代城と屋代城の概要—」『茨城県立歴史館報』20

鈴木美治 1987『茨城県教育財団文化財調査報告第40集 屋代B遺跡Ⅱ』財団法人茨城県教育財団

高原勇 1989『茨城県教育財団文化財調査報告第54集 柴崎遺跡Ⅰ・Ⅱ-1区』財団法人茨城県教育財団

中・近世研究班 1995～1999「茨城の常滑Ⅰ～Ⅴ」『研究ノート』5～9号 財団法人茨城県教育財団

寺門千勝・大関武 2000『茨城県教育財団文化財調査報告第164集 明石遺跡 明石北原遺跡 上白畑遺跡』財団法人茨城県教育財団

寺門千勝・田原康司・梅澤貴司 2002『茨城県教育財団文化財調査報告第191集 上巻 島名前野東遺跡』財団法人茨城県教育財団

東北中世考古学会編 2001『東北中世考古学叢書2 掘立と竪穴 中世遺構論の課題』高志書院

中井均 1991「中世の居間・寺そして村落—西国を中心に—」『中世の城と考古学』新人物往来社

中野晴久 1994「赤羽・中野 生産地における編年について」『全国シンポジウム「常滑焼を追って」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

根本康弘 1986『茨城県教育財団文化財調査報告第33集 屋代B遺跡Ⅰ』財団法人茨城県教育財団

橋口定志 1987「中世居館の再検討」『東京考古』5

橋場君男他 1998『土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 神明遺跡(第1次・第2次調査)』土浦市教育委員会

拙稿 1999「般若寺遺跡出土瓦について」『土浦市立博物館紀要』9号

吹野富美夫・宮崎修士・柴田博行 1999『茨城県教育財団文化財調査報告第146集 前田村遺跡G・H・I区』財団法人茨城県教育財団

福島県考古学会中近世部会 2001「東北南部における中近世集落の諸問題—掘立柱建物跡を中心として—」『福島考古』42号

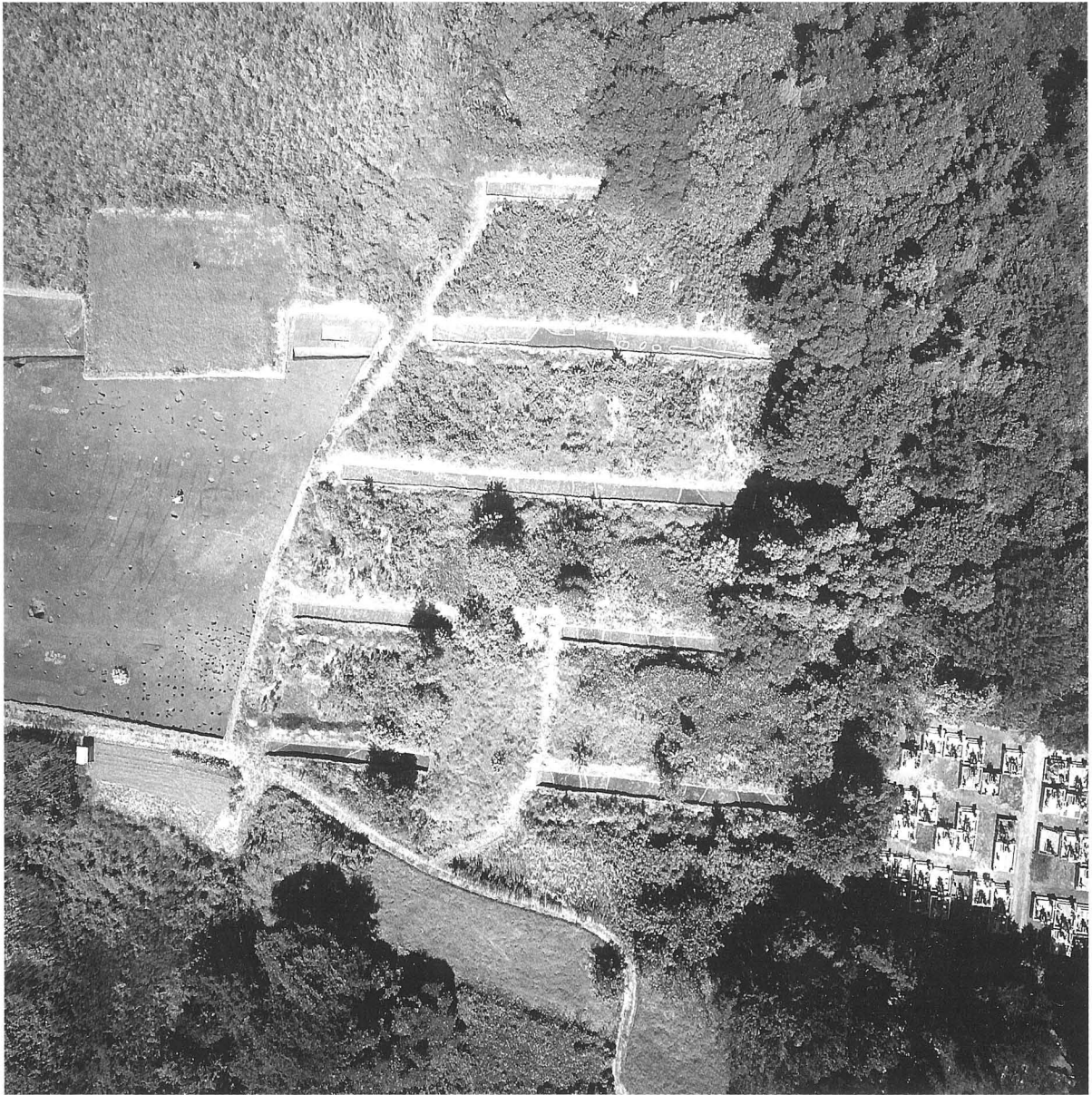
福島県考古学会中近世部会いわき事務局 2000『福島県考古学会中近世部会平成12年度研究セミナー 東北地方南部における中近世集落の諸問題—掘立柱建物跡を中心として—』資料集 福島県考古学会

藤沢良祐 1982「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第8号

- 藤沢良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X
- 間宮政光・斉藤伸明 1997『城の内遺跡』結城市教育委員会
- 宮本長二郎 2000「第5章第3節中村村前遺跡の建築」『発掘調査報告第298集 中内村前遺跡(1)－I～4区－』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 桃崎祐輔 1999「常総地域の中世陶磁器と土器－中世びとのくらしとうつわ－」『焼きものにみる中世の世界』上高津貝塚ふるさと歴史の広場
- 横田賢二郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』
- 吉澤悟他 2002『土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集常名台遺跡群確認調査 神明遺跡(第3次調査)』土浦市教育委員会
- 吉原作平・原信田政夫1999『茨城県教育財団文化財調査報告第149集 熊の山遺跡Ⅲ』財団法人茨城県教育財団

# 写 真 图 版





山川古墳群確認調査区 全景

PL 2 山川古墳群



1. 調査前遺跡近景



2. 14cトレンチ



3. 15dトレンチ



4. 16bトレンチ



1. 17bトレンチ



3. 18bトレンチ

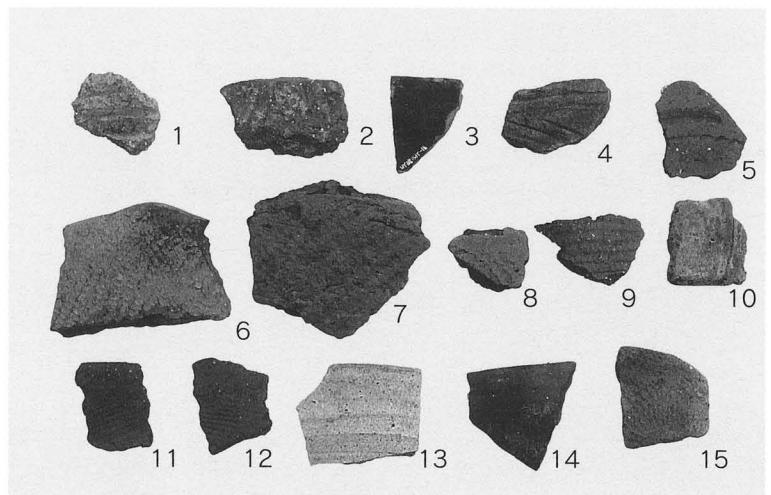


2. 17cトレンチ



4. 18cトレンチ

1~3 15dトレンチ 9~14 18bトレンチ  
4~6 16bトレンチ 15 18cトレンチ  
7・8 17cトレンチ



5. 確認トレンチ出土遺物

PL 4 西谷津遺跡



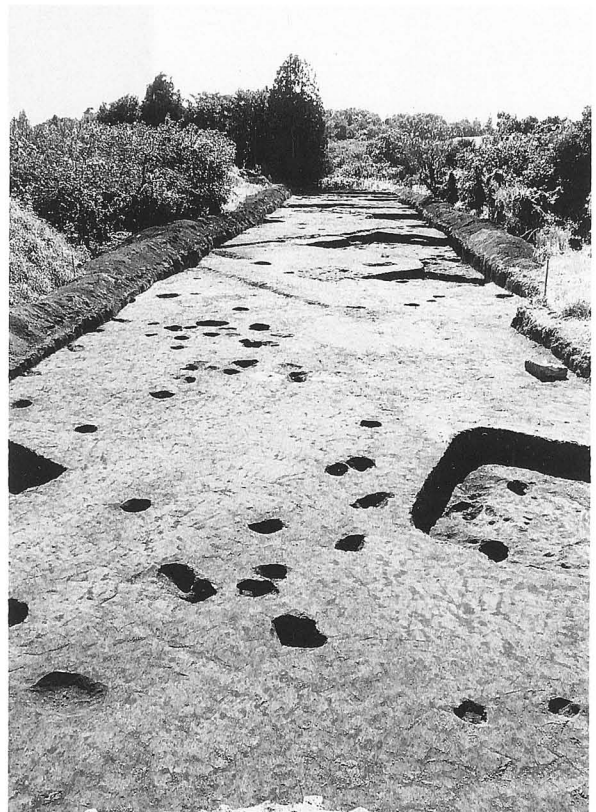
西谷津遺跡 全景



1. 調査区完掘状況

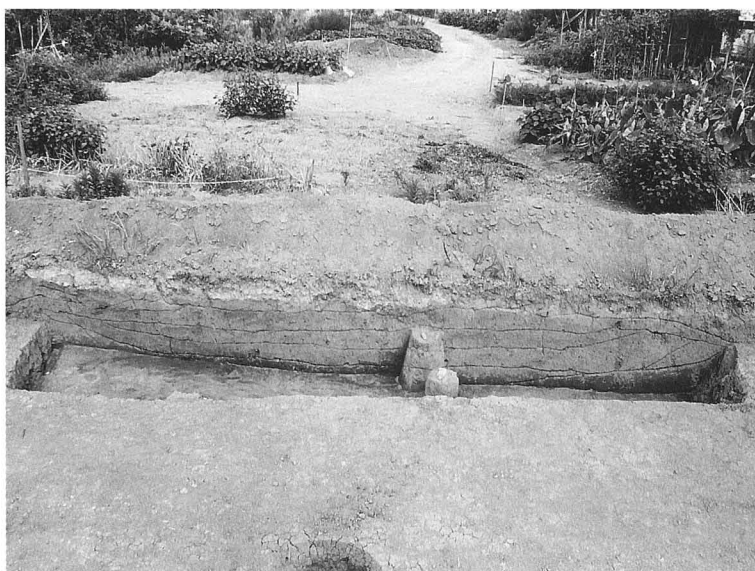


2. 調査区完掘状況



3. 調査区完掘状況

PL 6 西谷津遺跡



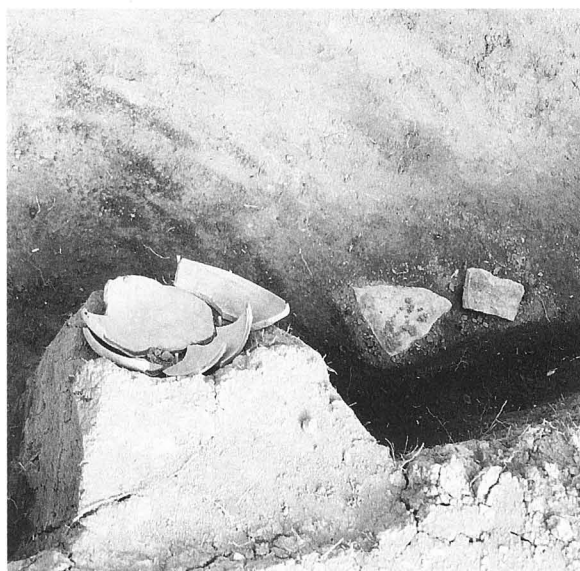
1. 第1号住居跡



2. 第2号住居跡



3. 第1号住居跡遺物出土状況



4. 第1号住居跡遺物出土状況



1. 第3号住居跡



2. 第4号住居跡



3. 第4号住居跡掘り方



4. 第4号住居跡遺物出土状況

PL 8 西谷津遺跡



1. 第5号住居跡



2. 第5号住居跡掘り方



3. 第5号住居跡遺物出土状況



4. 第5号住居跡遺物出土状況





1. 第6号住居跡



2. 第6号住居跡遺物出土状況



3. 第6号住居跡遺物出土状況



4. 第6号住居跡カマド全景

PL 10 西谷津遺跡



1. 第7号住居跡



2. 第8号住居跡



3. 第7号住居跡カマド全景



4. 第7号住居跡遺物出土状況



1. 第9号住居跡



2. 第10号住居跡



3. 第9号住居跡カマド全景



4. 第10号住居跡カマド全景

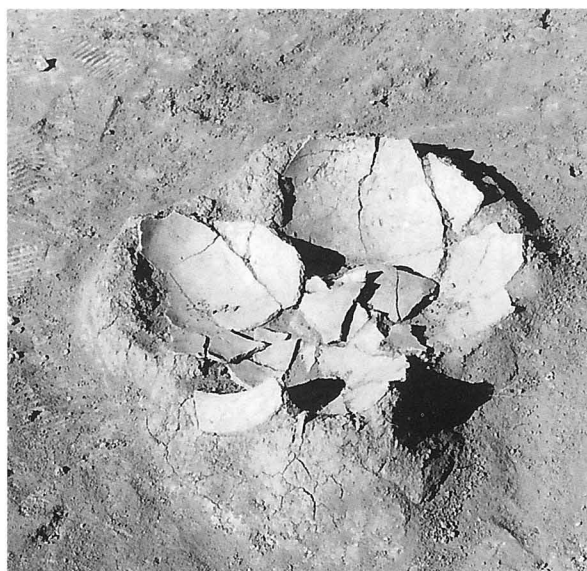
PL 12 西谷津遺跡



1. 第11・12・13号住居跡



2. 第11号住居跡遺物出土状況



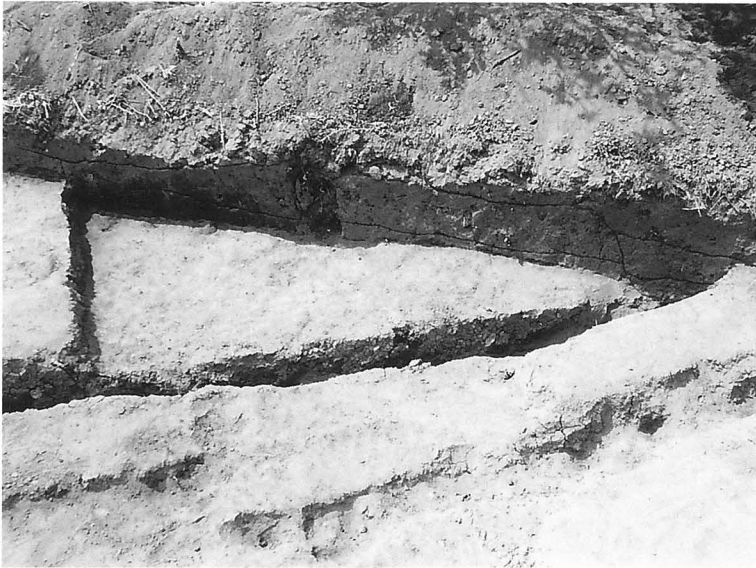
3. 第11号住居跡遺物出土状況



4. 第12号住居跡カマド全景



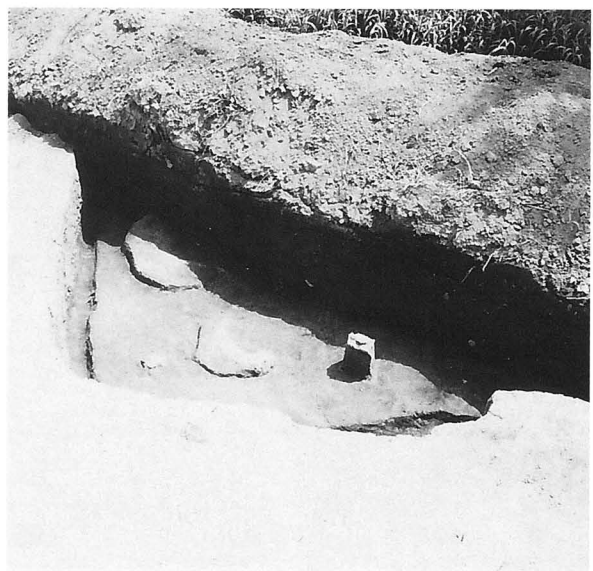
1. 第14号住居跡



2. 第15・16号住居跡



3. 第18号住居跡



4. 第19号住居跡

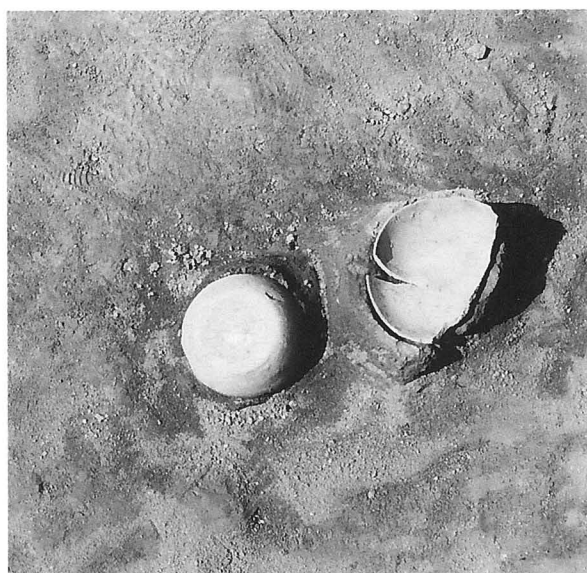
PL 14 西谷津遺跡



1. 第17号住居跡



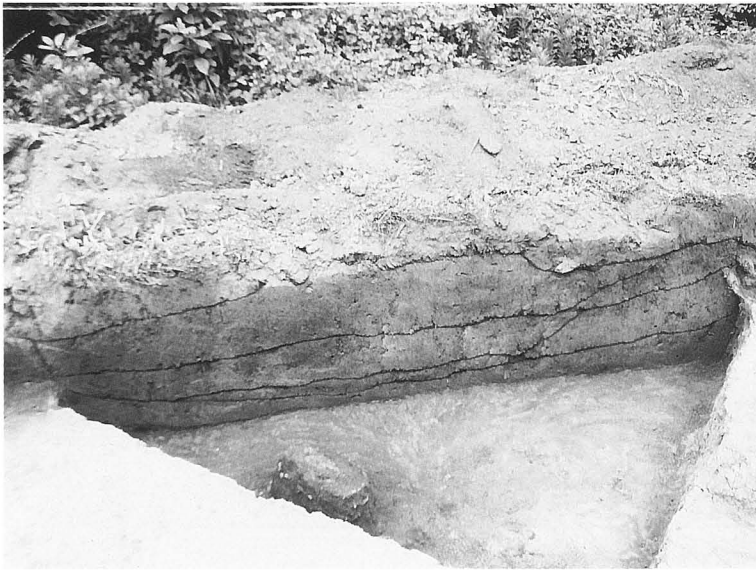
2. 第17号住居跡遺物出土狀況



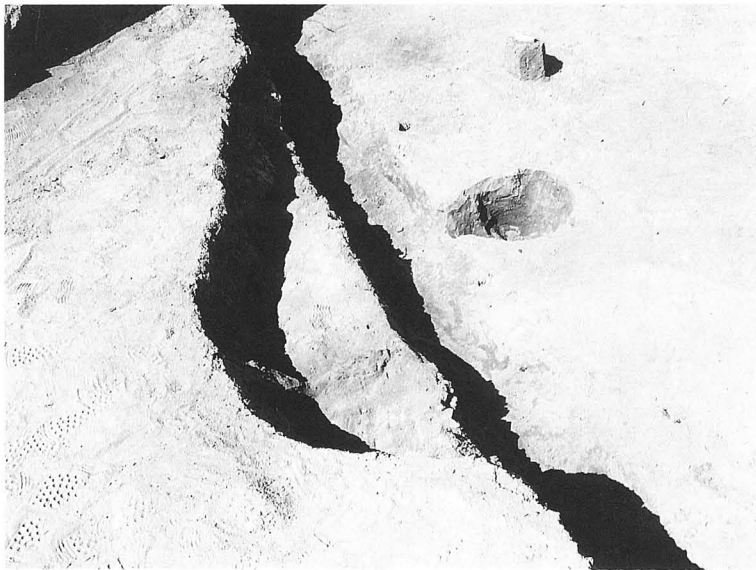
3. 第17号住居跡遺物出土狀況



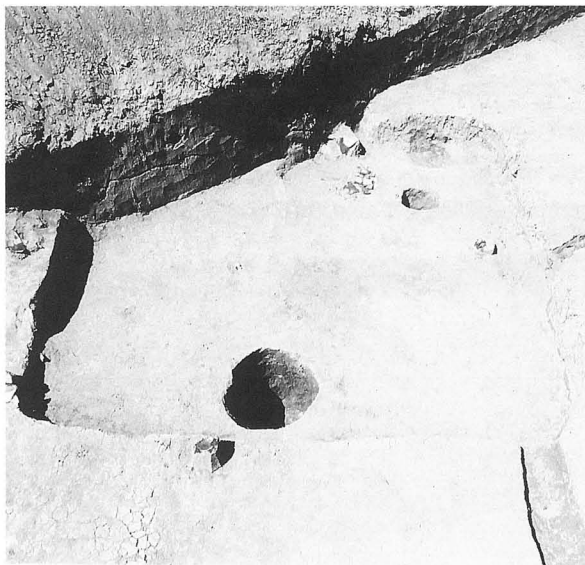
4. 第17号住居跡遺物出土狀況



1. 第20号住居跡



2. 第22号住居跡



3. 第23号住居跡



4. 第23号住居跡遺物出土状況



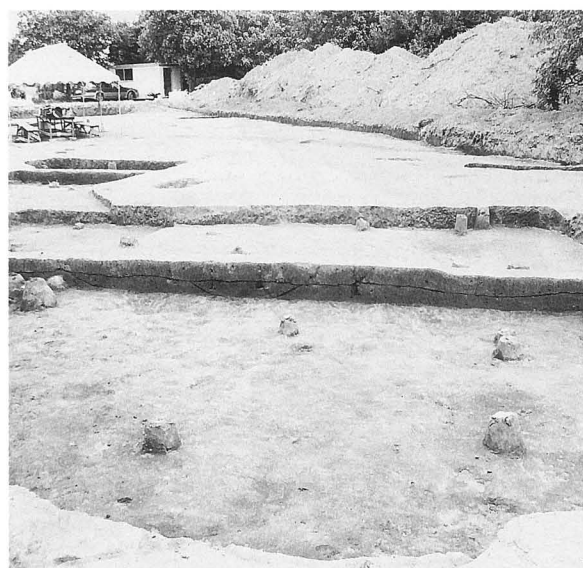
1. 第21号住居跡



2. 第21号住居跡遺物出土状況



3. 第21号住居跡遺物出土状況

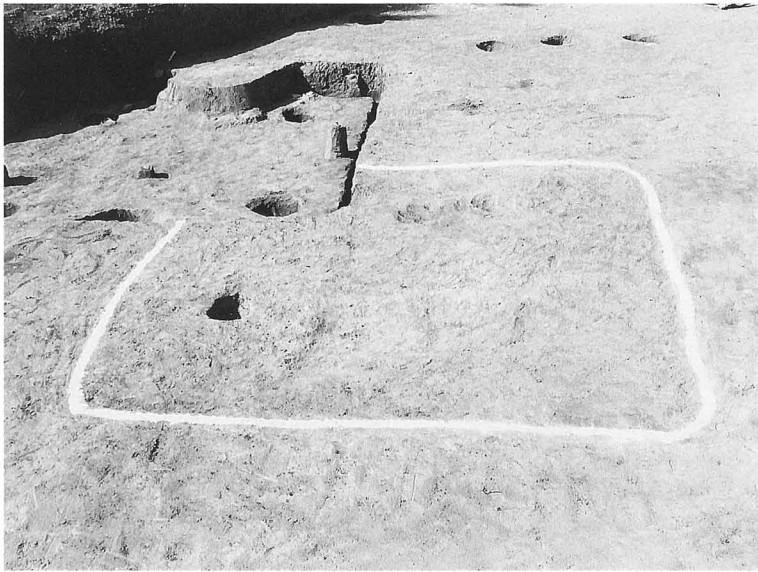


4. 第21号住居跡断面





1. 第24号住居跡



2. 第26号住居跡



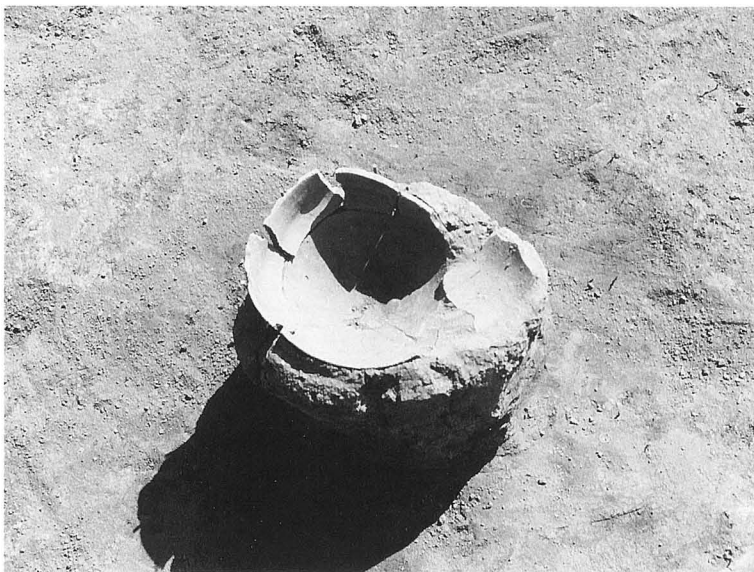
3. 第24号住居跡遺物出土状況



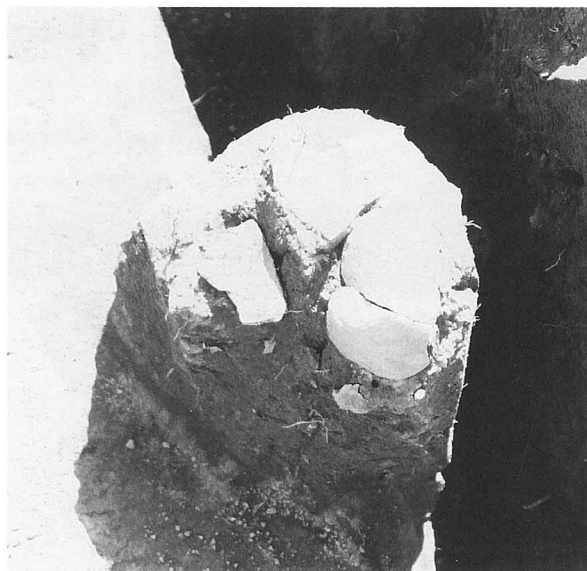
4. 第24号住居跡断面



1. 第25号住居跡



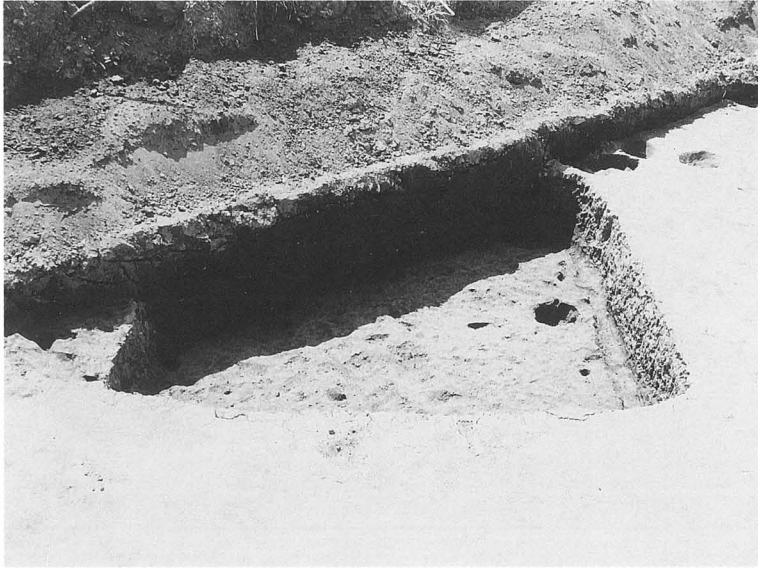
2. 第25号住居跡遺物出土状況



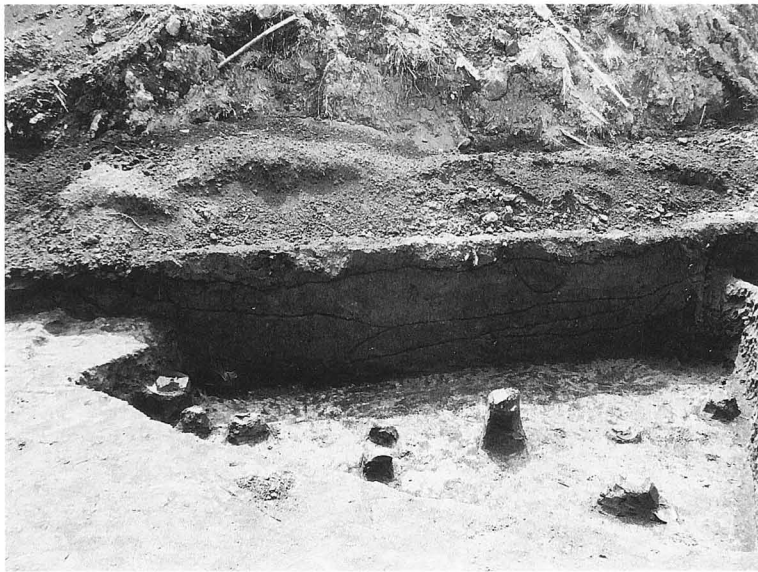
3. 第25号住居跡遺物出土状況



4. 第25号住居跡カマド全景



1. 第27・29号住居跡



2. 第27・29号住居跡遺物出土状況



3. 第27号住居跡遺物出土状況



4. 第27号住居跡遺物出土状況



1. 第28号住居跡



2. 第28号住居跡遺物出土状況



3. 第28号住居跡断面



4. 第28号住居跡掘り方



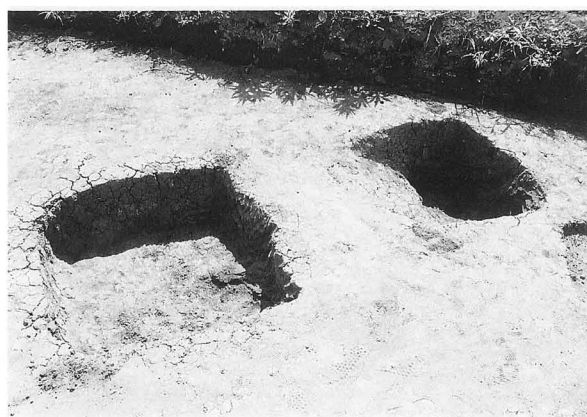
1. 第1号掘立柱建物跡



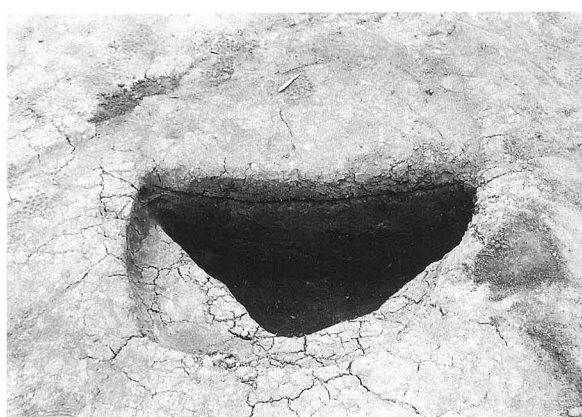
2. 掘立柱建物跡 (P9・10)



3. 掘立柱建物跡 (P4)



4. 掘立柱建物跡 (P5・7)



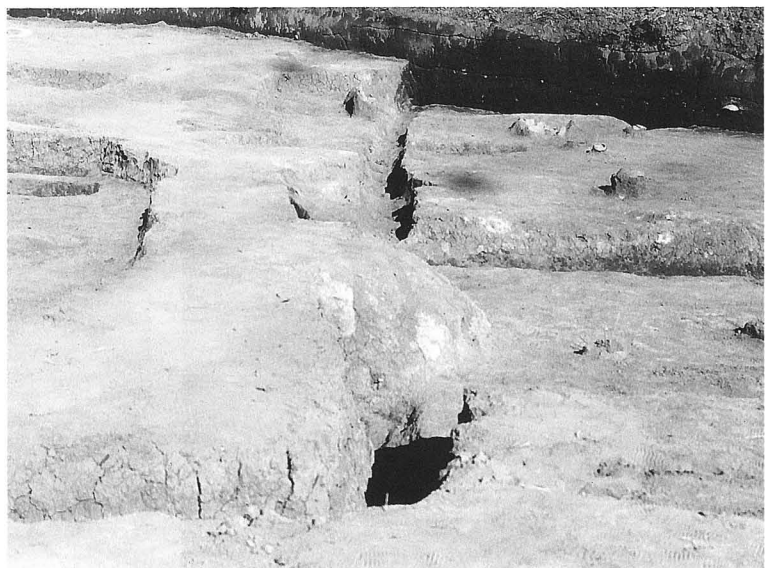
5. 掘立柱建物跡 (P2)



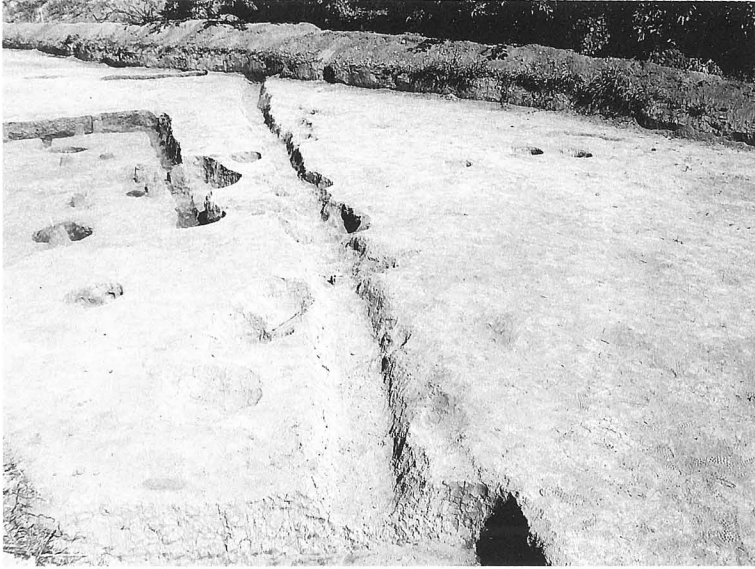
1. 第1号溝



2. 第2・4号溝



3. 第3号溝



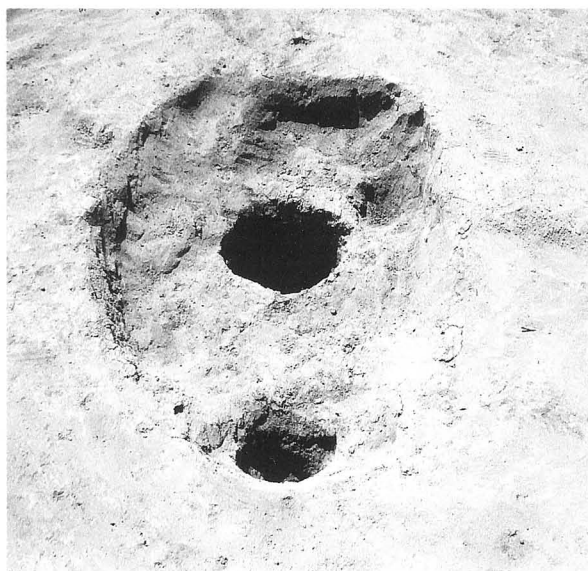
1. 第6号溝



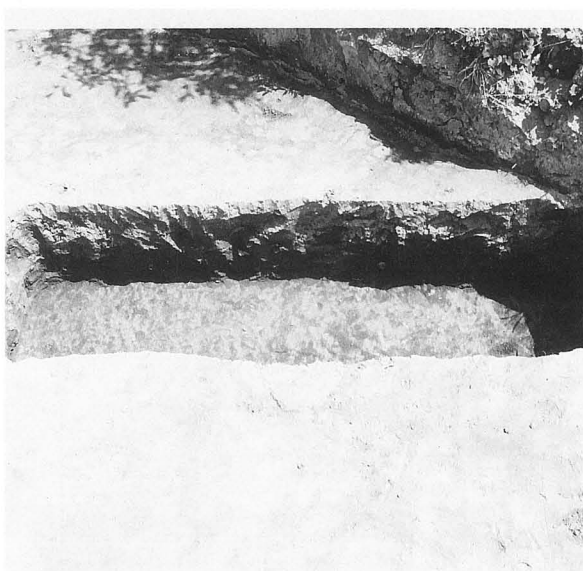
2. 第7号溝



3. 第6号溝断面



1. 第2号土坑



2. 第3号土坑



3. 第4号土坑



4. 第5号土坑

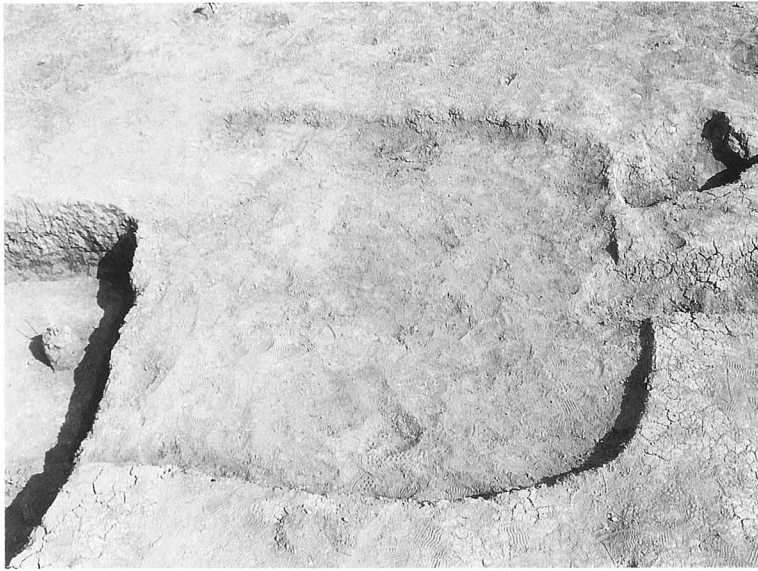


5. 第6号土坑



6. 第7・8号土坑





1. 竪穴状遺構



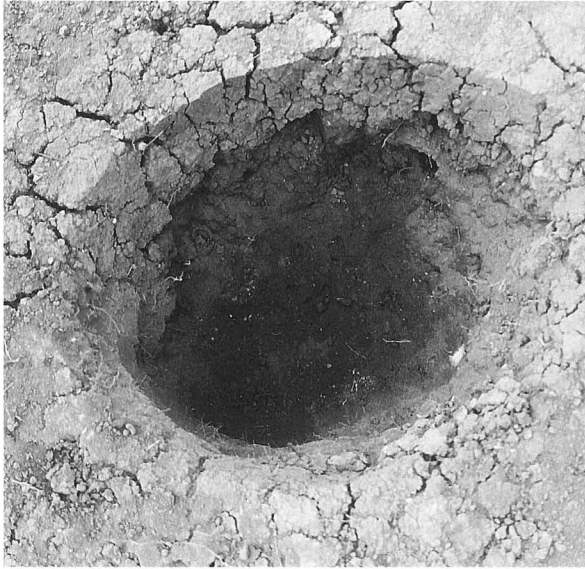
2. 柱穴状遺構

P6・16・17・18・27・28・29・30



3. 柱穴状遺構

P9・10・11・12・13・14・15



1



2



3

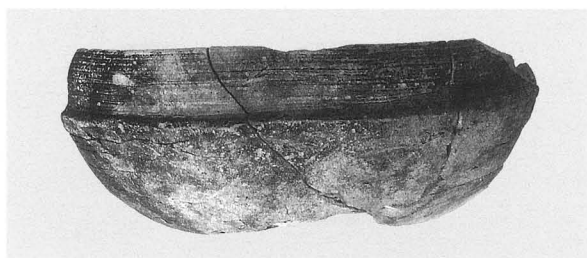


4

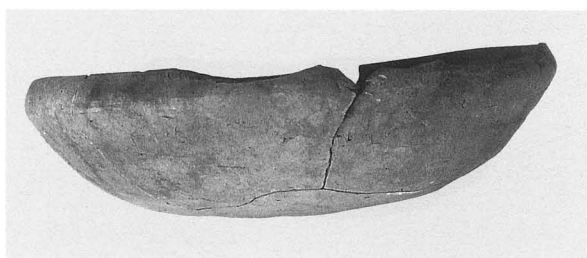


5

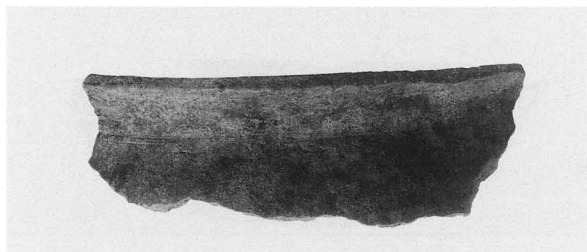
- 1. P5
- 2. P6
- 3. P8
- 4. P20
- 5. P25・26



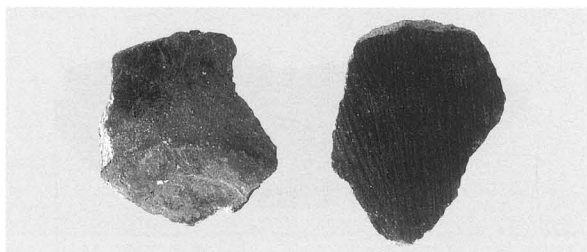
1. SI-1-1



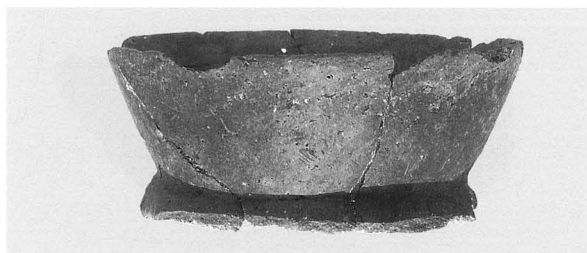
2. SI-1-2



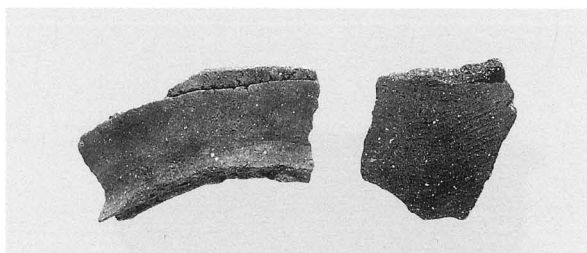
3. SI-1-3



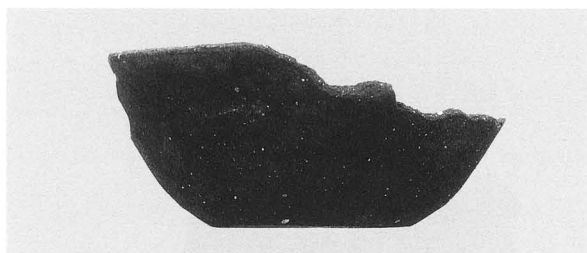
4. SI-2



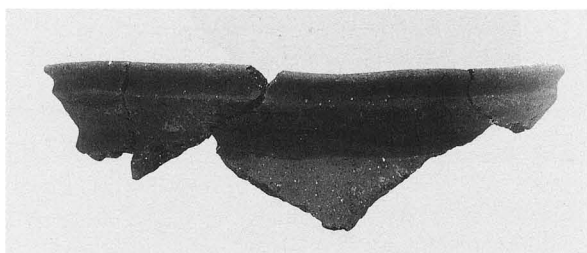
5. SI-3-1



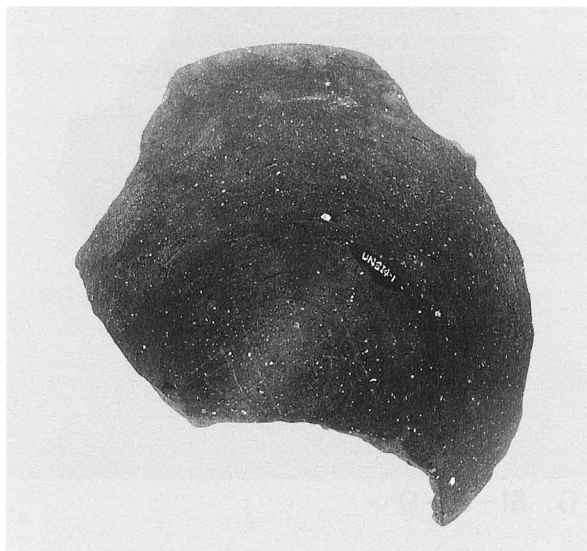
6. SI-3-2・3



7. SI-4-1



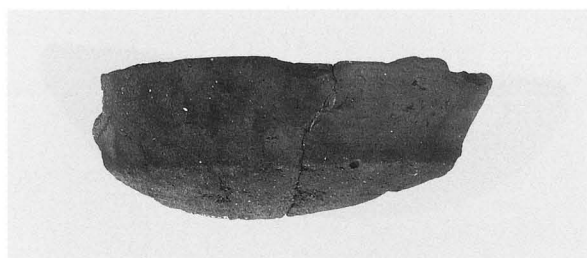
9. SI-4-5



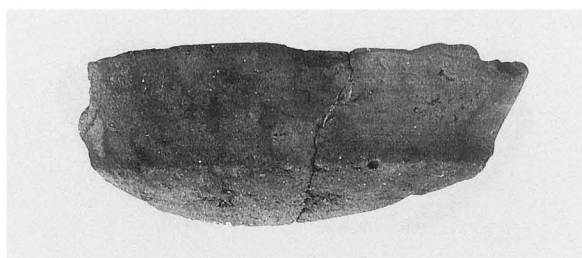
8. SI-4-2



10. SI-4-7



1. SI-5-1



2. SI-5-2



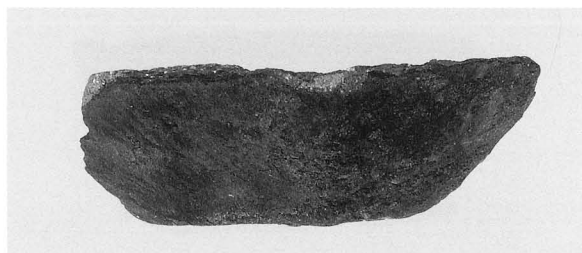
3. SI-5-3



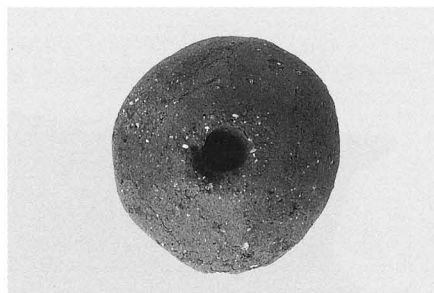
4. SI-5-4



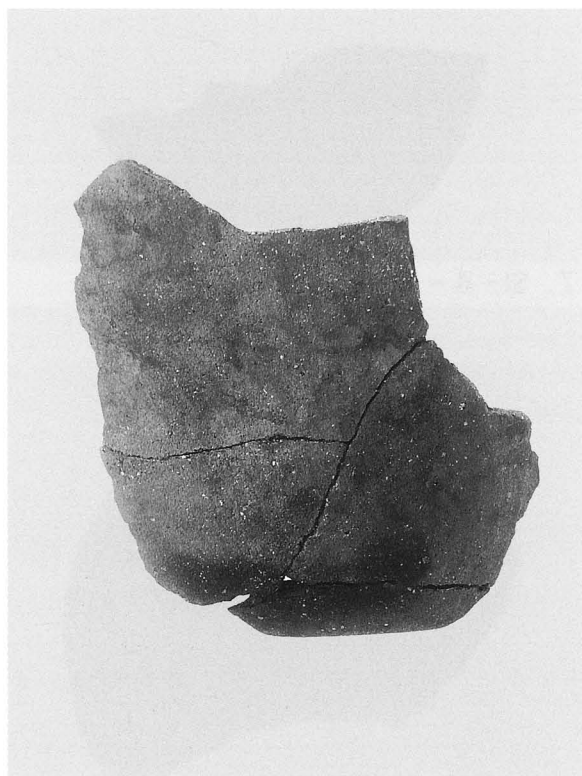
5. SI-5-8



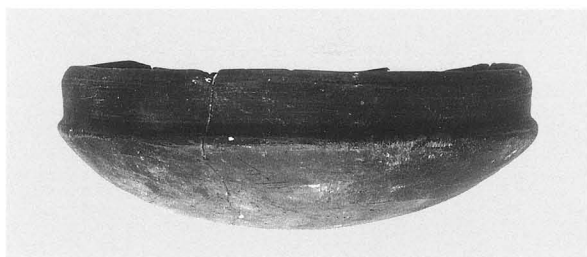
6. SI-5-10



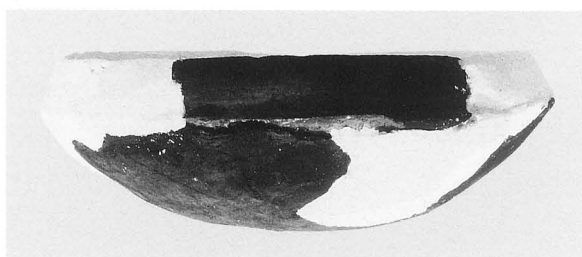
7. SI-5-11



8. SI-5-9



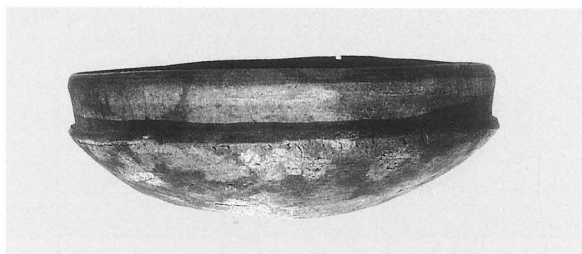
1. SI-6-1



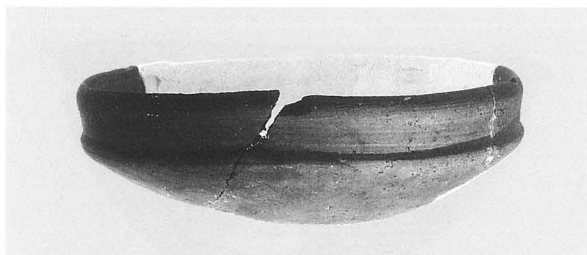
2. SI-6-2



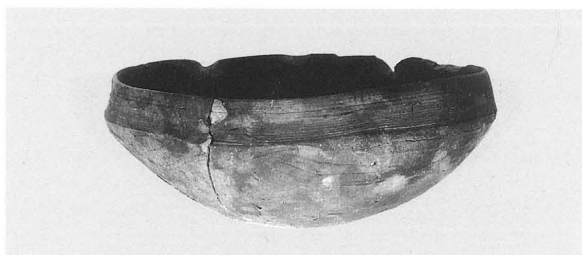
3. SI-6-3



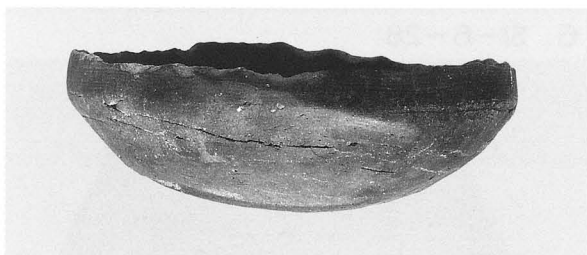
4. SI-6-5



5. SI-6-8



6. SI-6-10



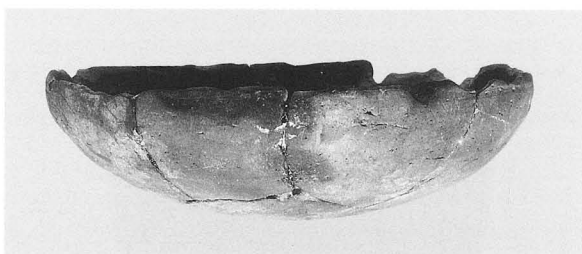
7. SI-6-12



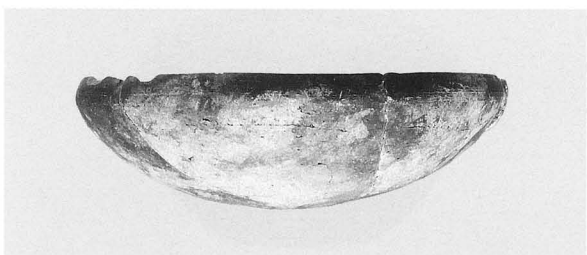
8. SI-6-13



9. SI-6-14



10. SI-6-15



11. SI-6-16

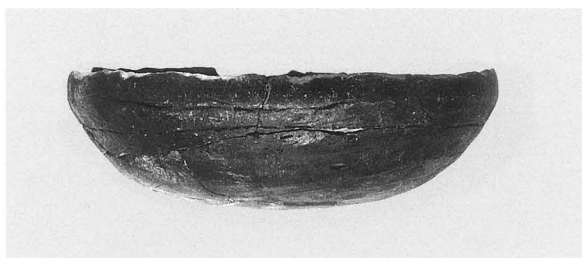


12. SI-6-17

PL 30 西谷津遺跡



1. SI-6-18



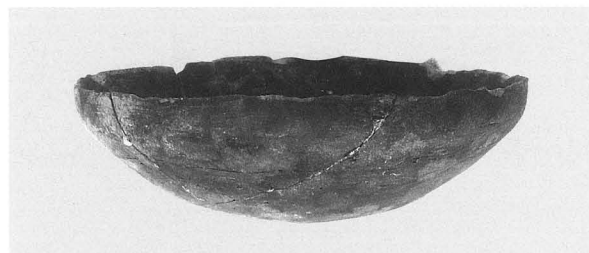
2. SI-6-19



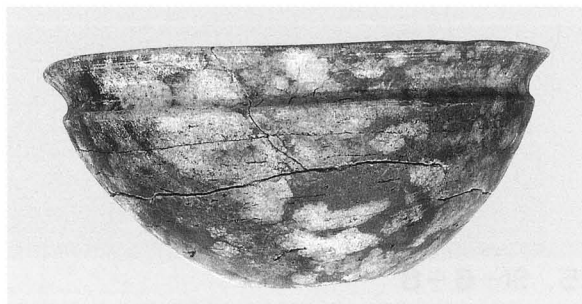
3. SI-6-20



4. SI-6-23



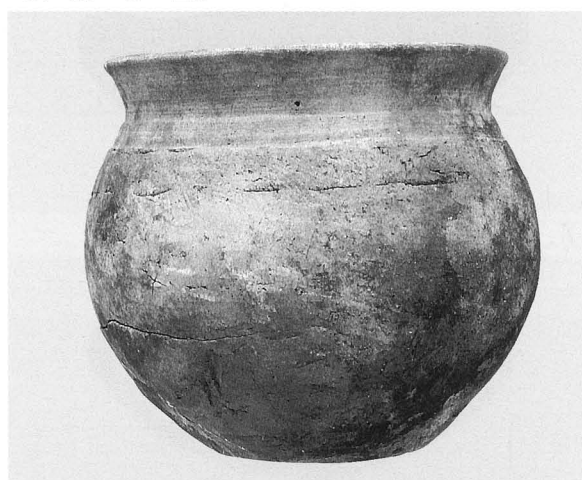
5. SI-6-25



6. SI-6-28



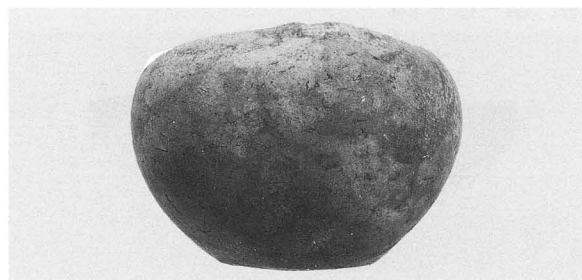
7. SI-6-29



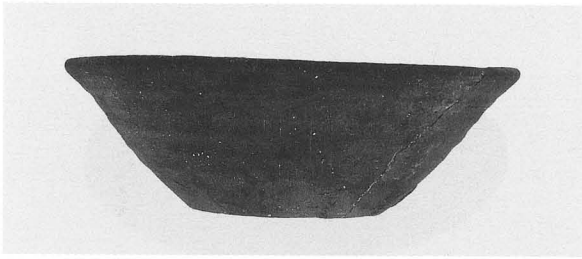
8. SI-6-30



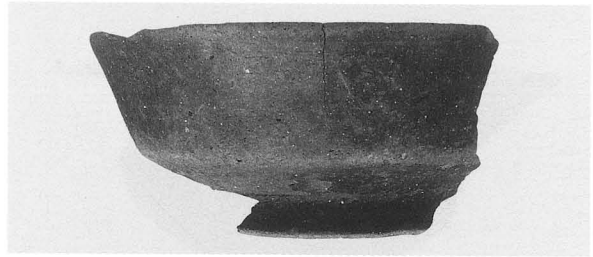
7. SI-6-34



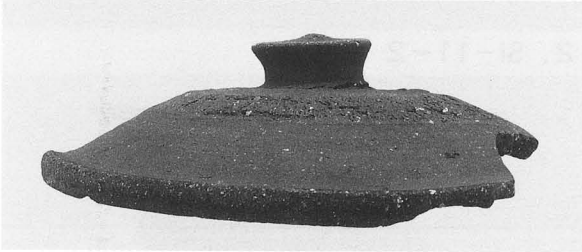
9. SI-6-31



1. SI-9-1



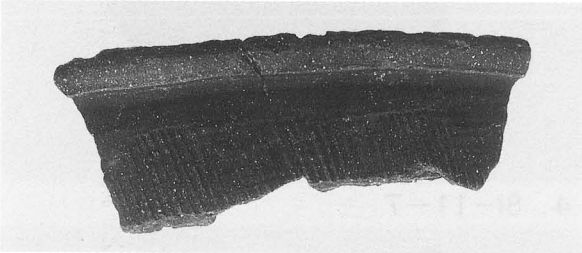
2. SI-9-4



3. SI-9-6



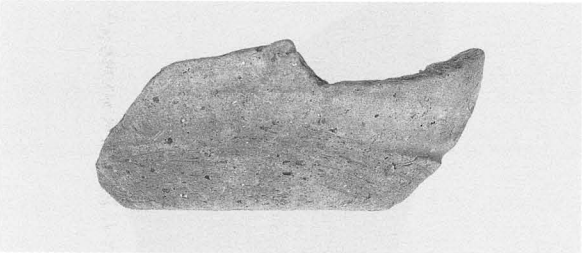
4. SI-9-7



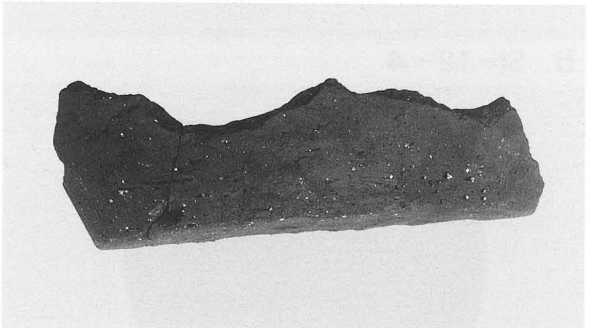
5. SI-9-12



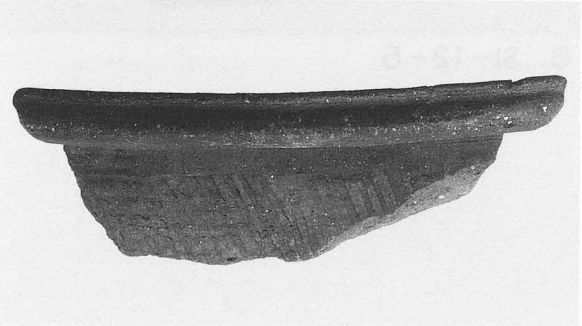
7. SI-9-8



6. SI-9-9

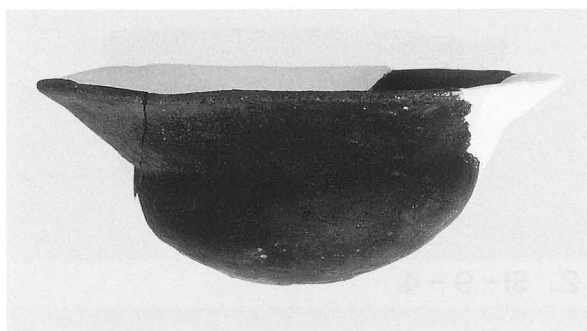


9. SI-10-5



8. SI-10-4

PL 32 西谷津遺跡



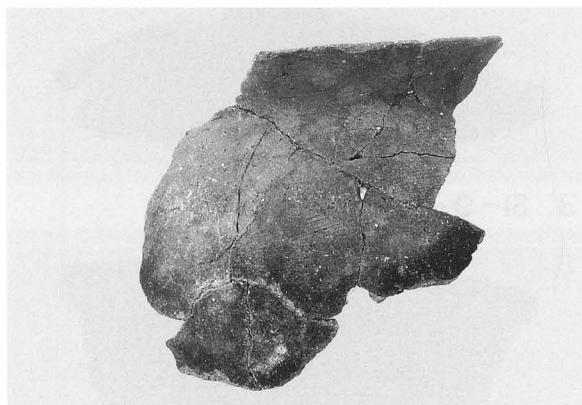
1. SI-11-1



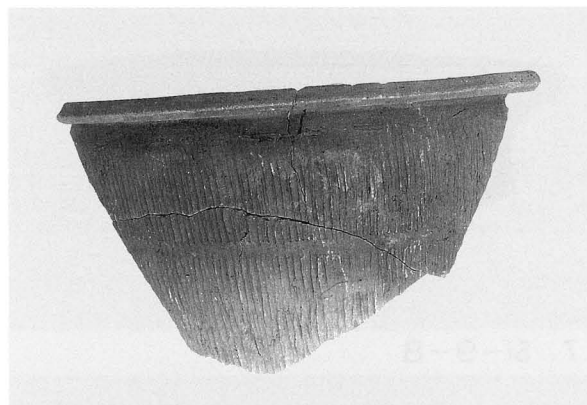
2. SI-11-2



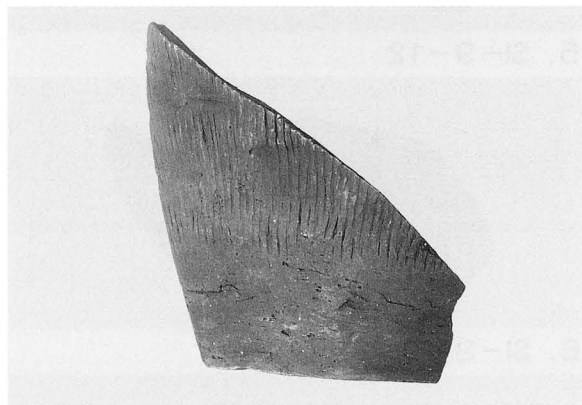
3. SI-11-4



4. SI-11-7



5. SI-12-4

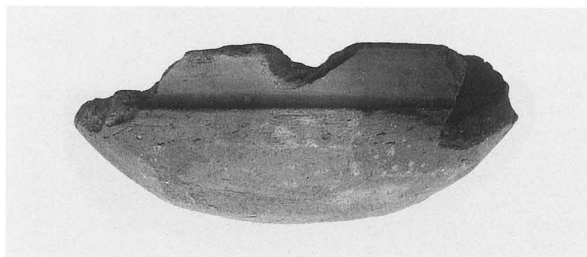


6. SI-12-5



7. SI-14-2

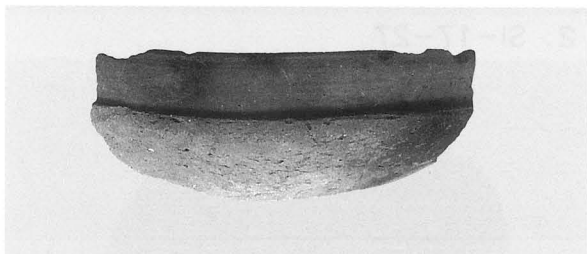




1. SI-17-1



2. SI-17-2



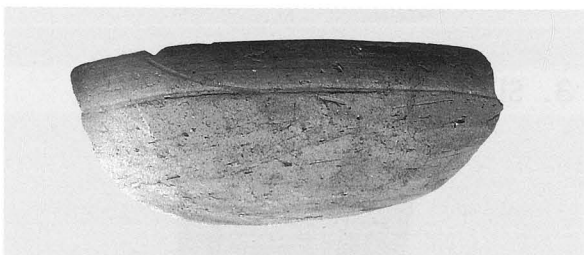
3. SI-17-4



4. SI-17-8



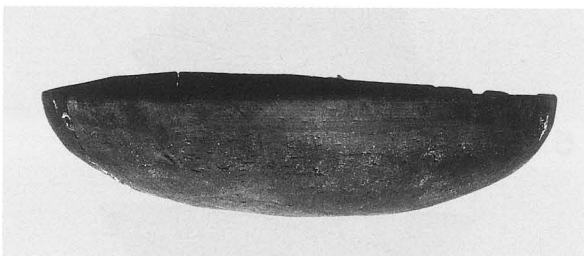
5. SI-17-9



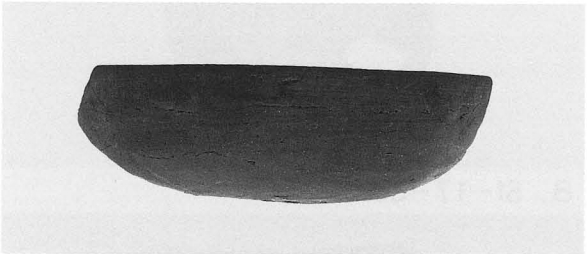
6. SI-17-10



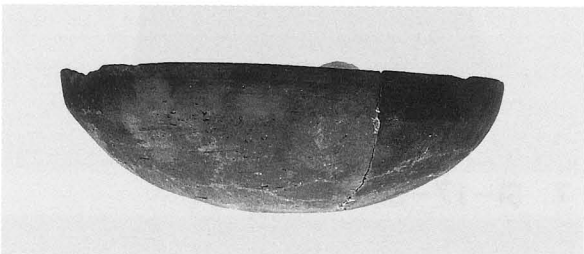
7. SI-17-14



8. SI-17-16



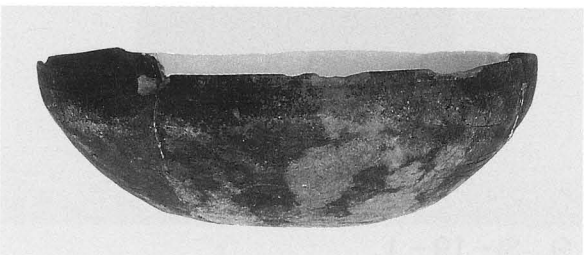
9. SI-17-18



10. SI-17-19

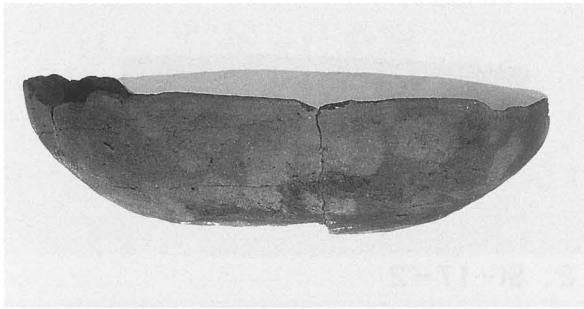


11. SI-17-5

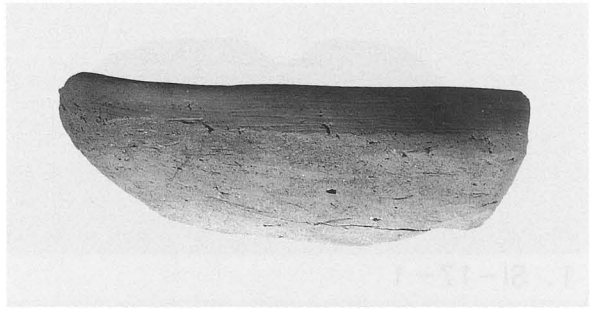


12. SI-17-30

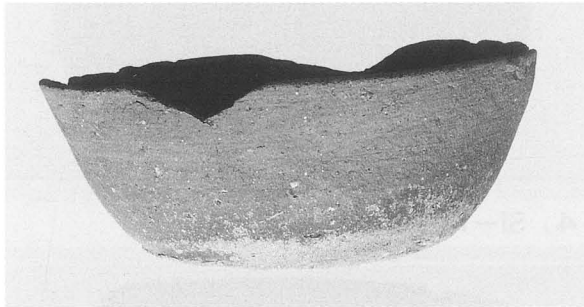
PL 34 西谷津遺跡



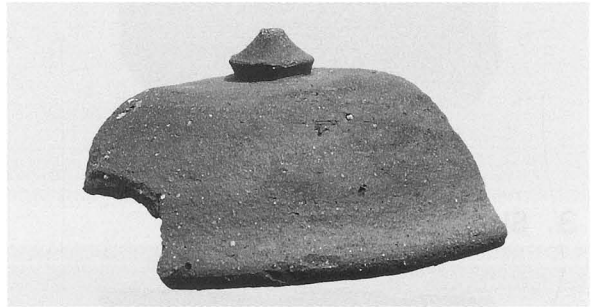
1. SI-17-25



2. SI-17-27



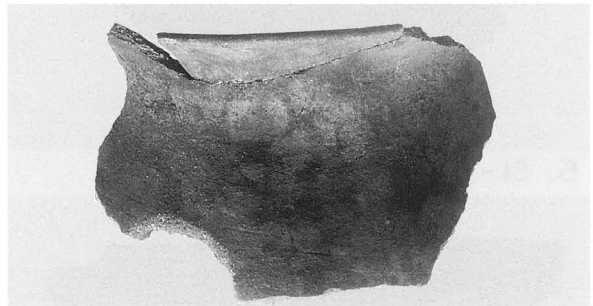
3. SI-17-31



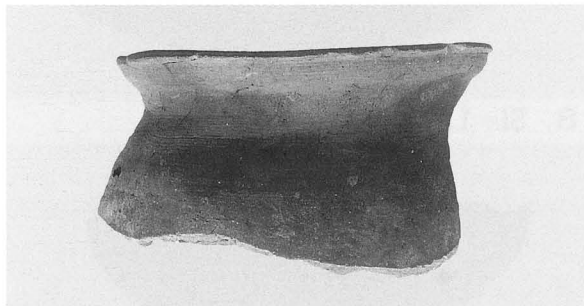
4. SI-17-32



5. SI-17-33



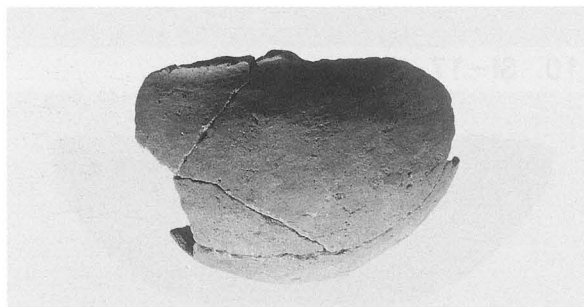
6. SI-17-34



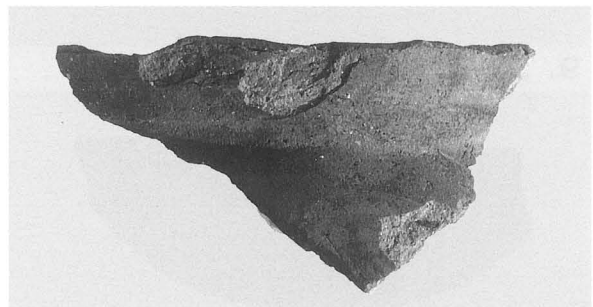
7. SI-17-35



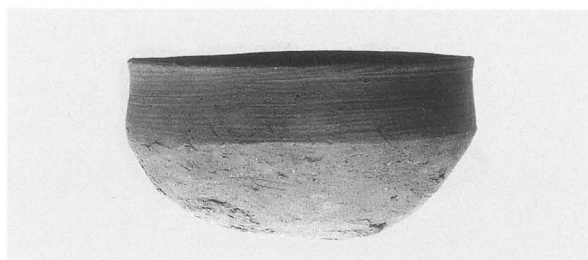
8. SI-17-36



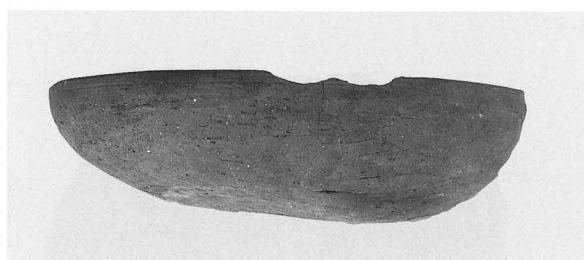
9. SI-19-1



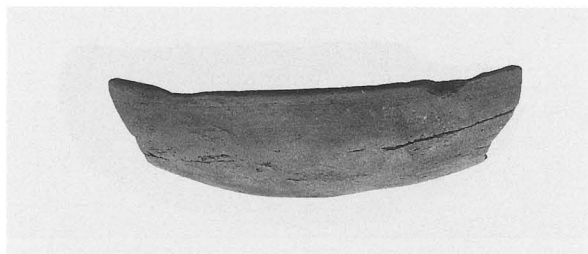
10. SI-19-2



1. SI-21-1



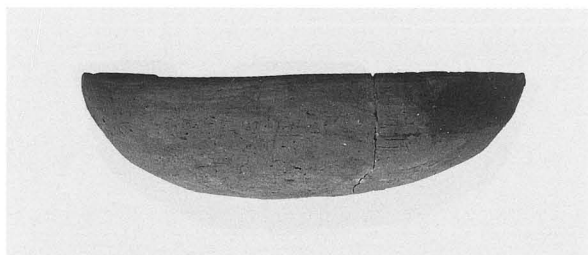
2. SI-21-2



3. SI-21-3



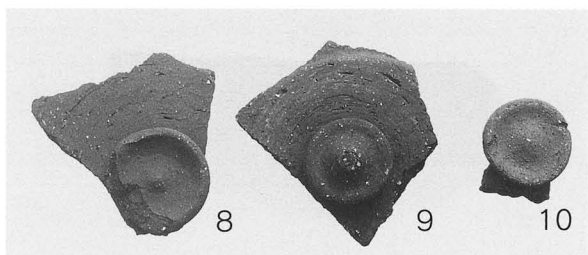
4. SI-21-4



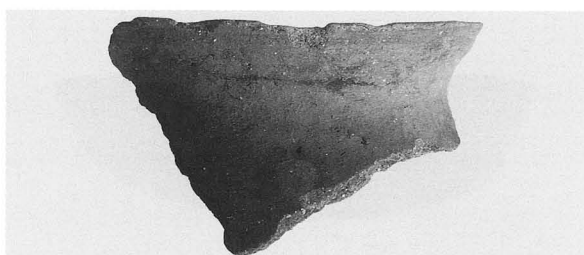
5. SI-21-6



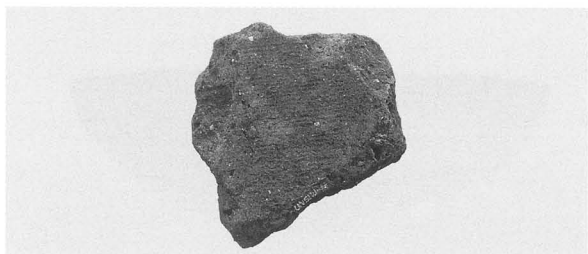
6. SI-21-14



7. SI-21-8・9・10



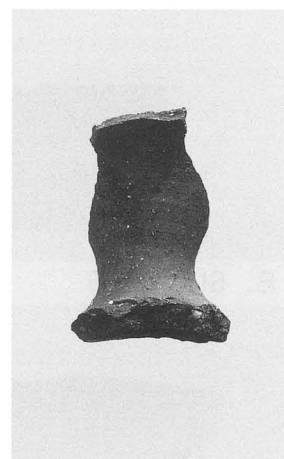
8. SI-21-15



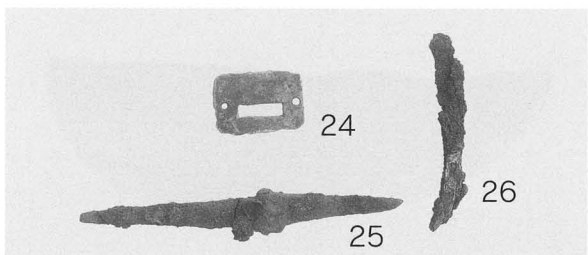
9. SI-21-23



10. SI-21-22



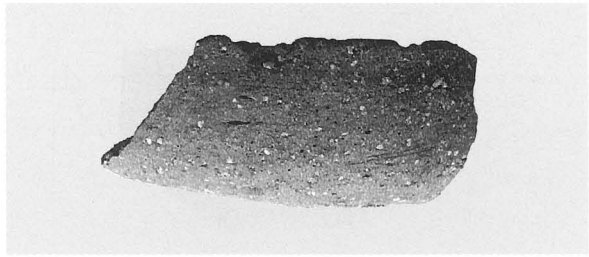
11. SI-21-13



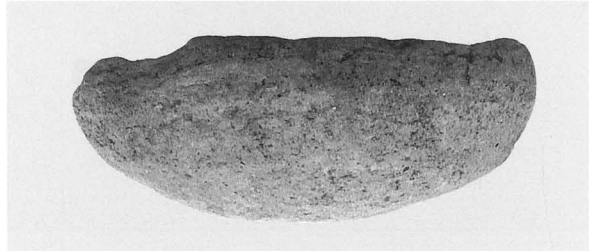
12. SI-21-24・25・26



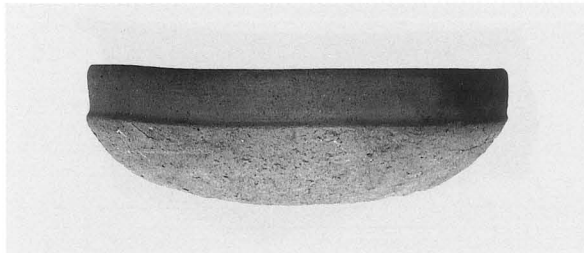
1. SI-23-5



2. SI-24-4



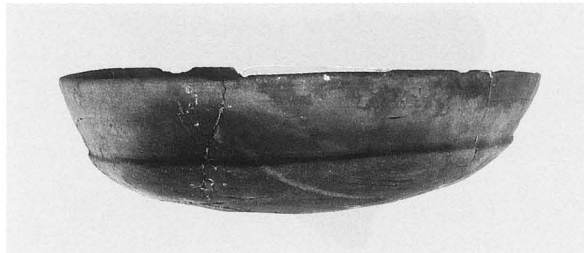
3. SI-24-3



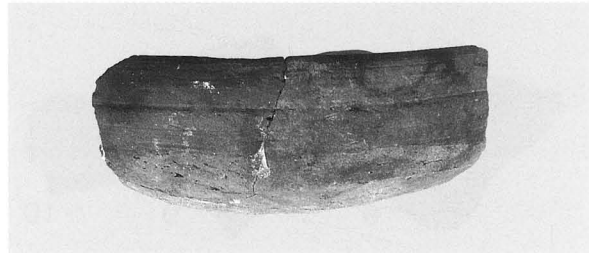
4. SI-24-1



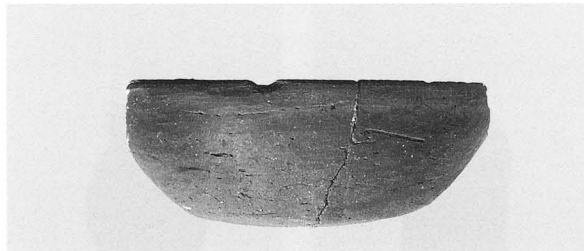
5. SI-25-1



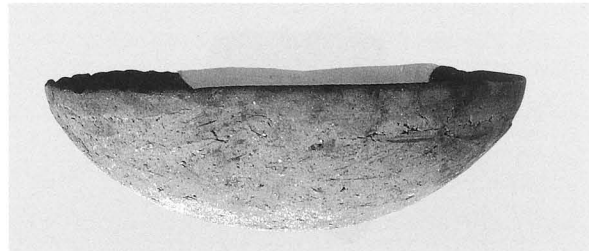
6. SI-25-2



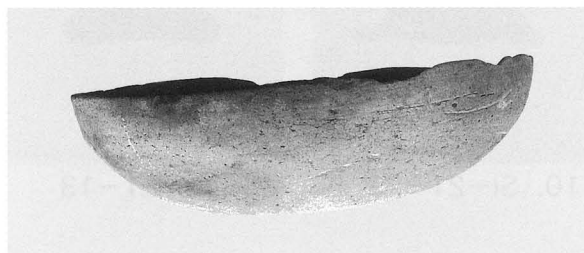
7. SI-25-3



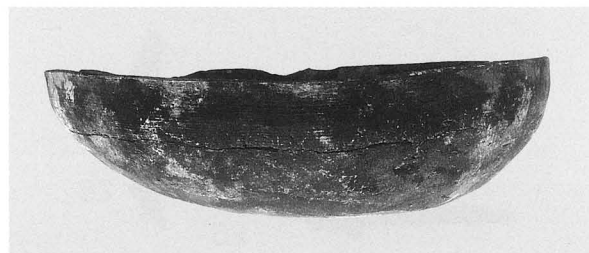
8. SI-25-5



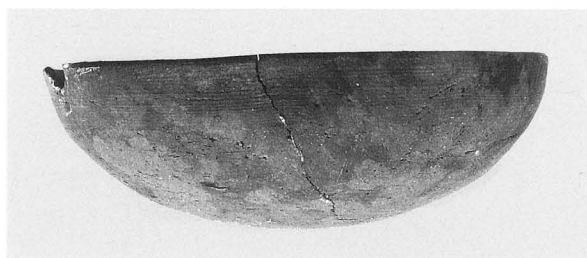
9. SI-25-6



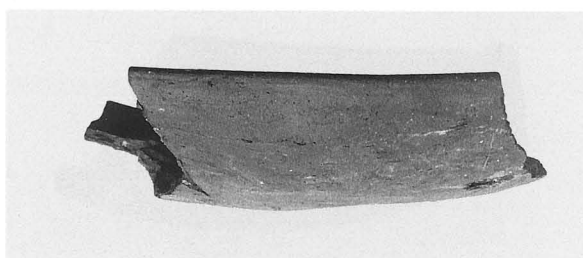
10. SI-25-7



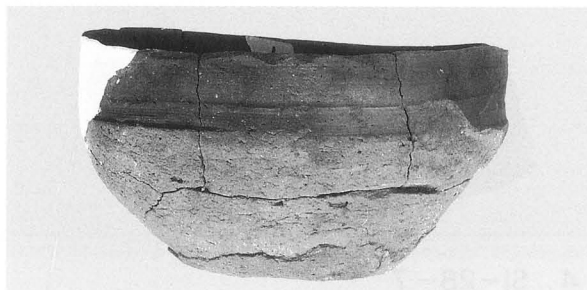
11. SI-25-8



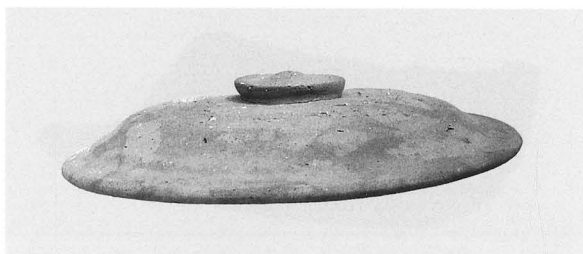
1. SI-25-9



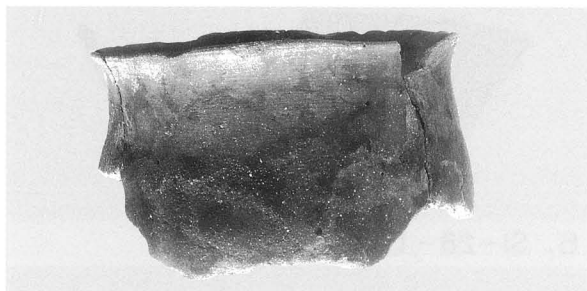
2. SI-25-16



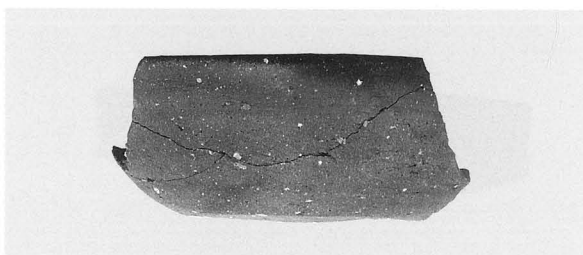
3. SI-25-17



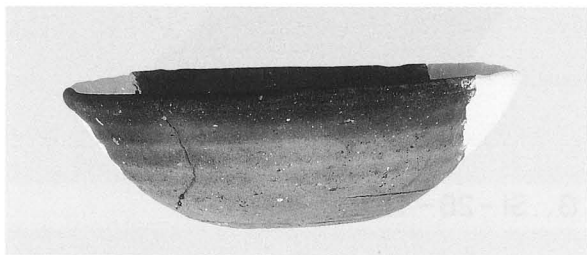
4. SI-25-18



5. SI-25-20



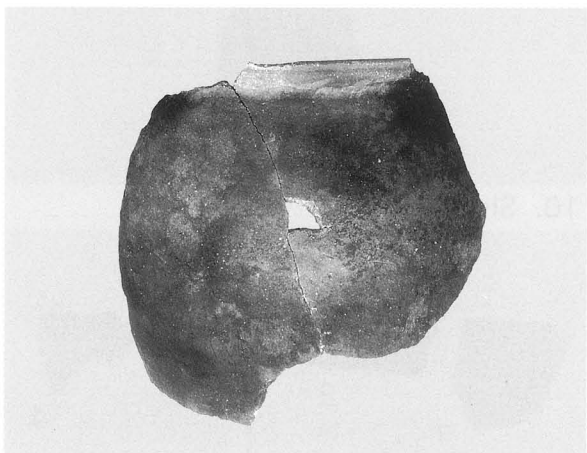
6. SI-27-2



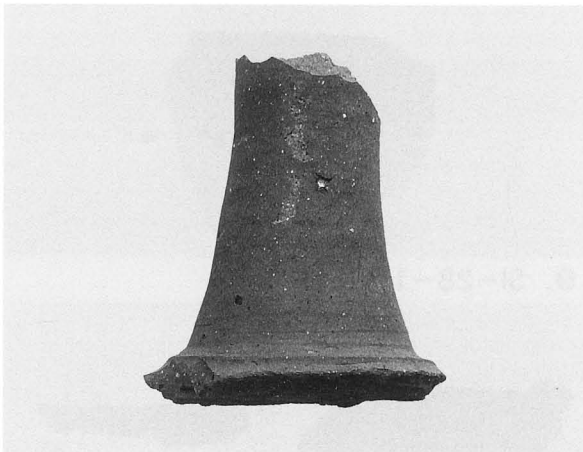
8. SI-27-1



7. SI-27-6



10. SI-27-10



9. SI-27-9

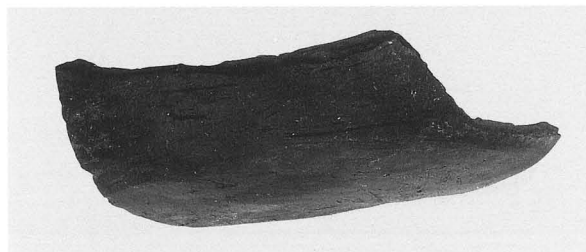
PL 38 西谷津遺跡



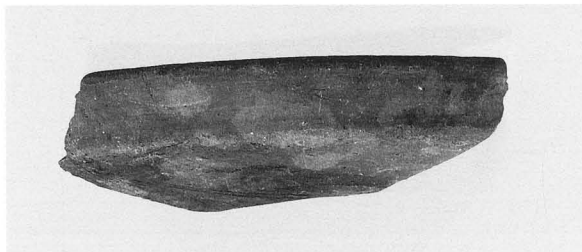
1. SI-28-1



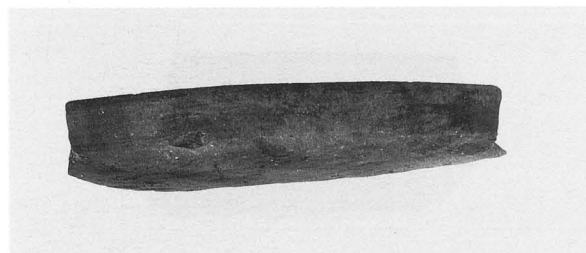
2. SI-28-2



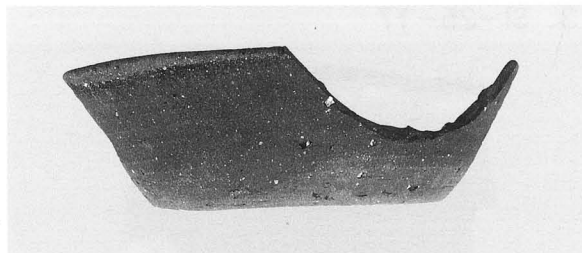
3. SI-28-5



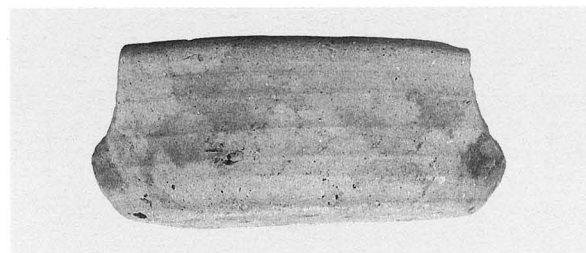
4. SI-28-7



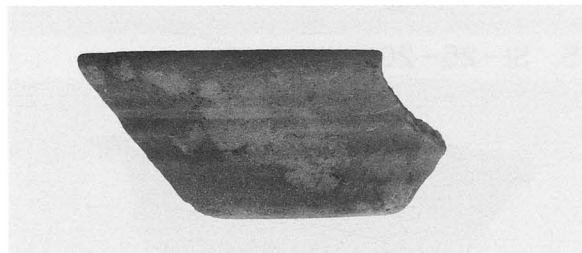
5. SI-28-8



6. SI-28-10



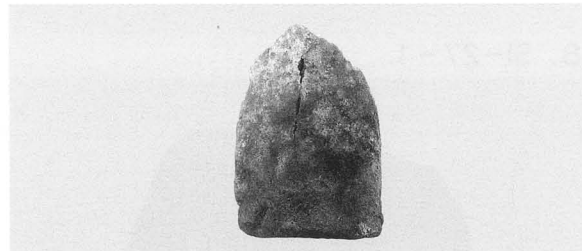
7. SI-28-11



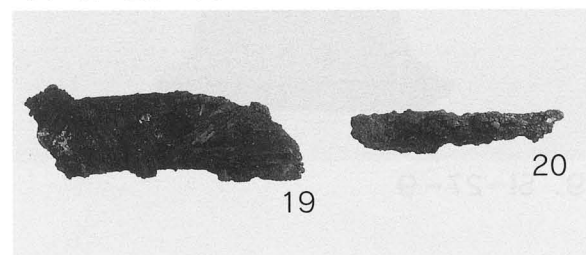
8. SI-28-12



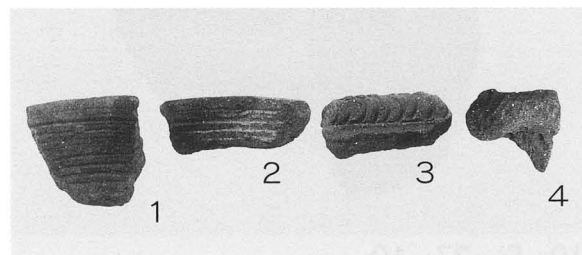
9. SI-28-15



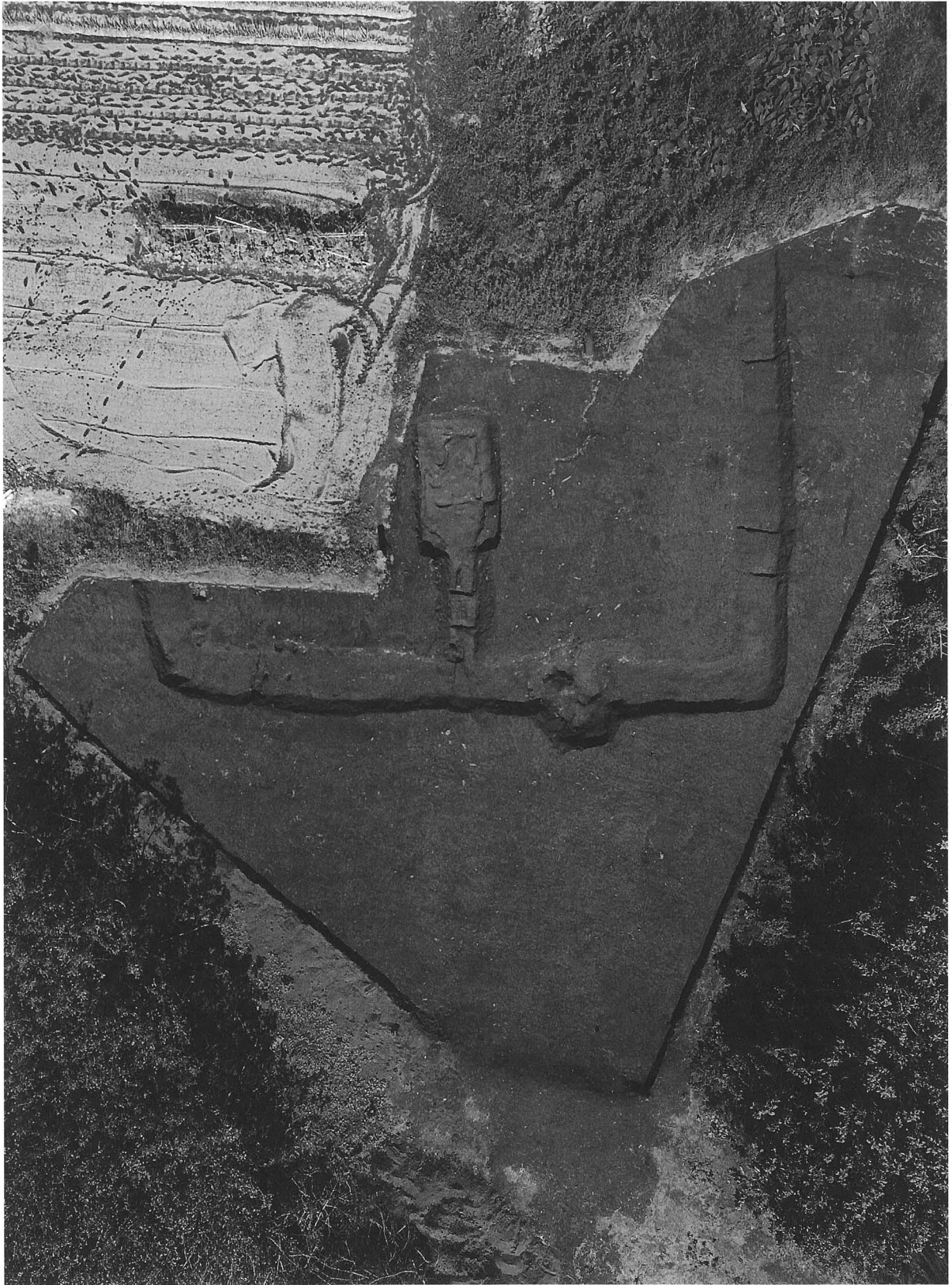
10. SI-28-21



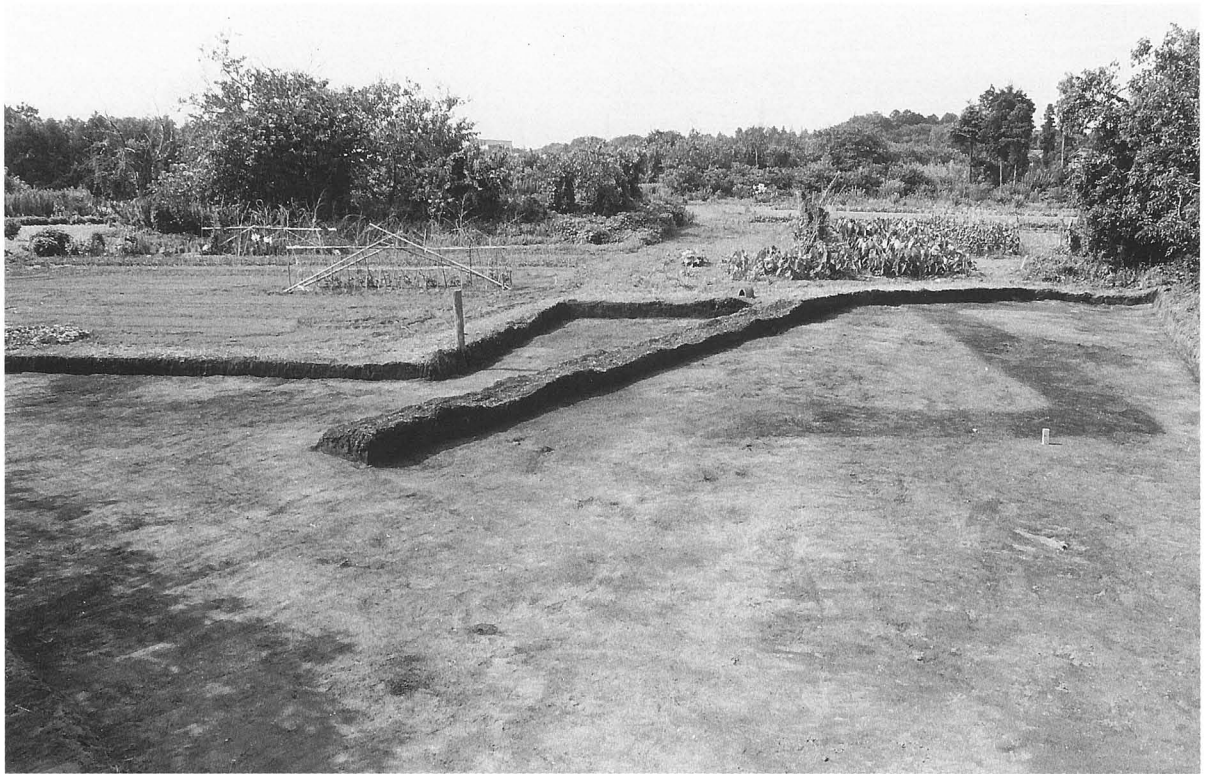
11. SI-28-19-20



12. 遺構外出土遺物



遺跡全景



1. 4号墳 確認状況 (南から)



2. 周溝Aライン 土層断面 (南から)



3. 周溝Bライン 土層断面 (南から)



4. 周溝Cライン 土層断面 (南西から)

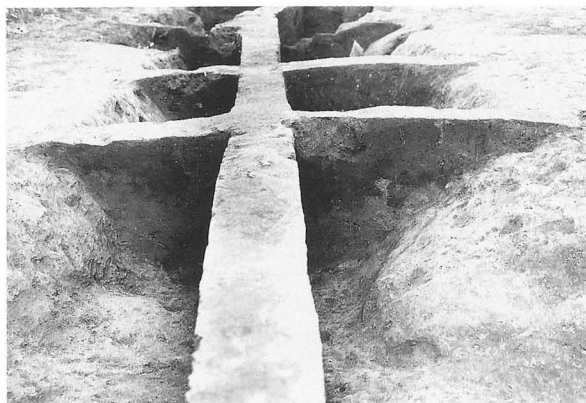


5. 周溝Dライン 土層断面 (東から)





1. 周溝Eライン 土層断面 (南東から)



2. 墓道短軸Fライン 土層断面 (南から)



3. 墓道短軸Eライン 土層断面 (南から)



4. 墓道主軸ライン 土層断面南部分 (東から)



5. 墓道主軸ライン 土層断面中央部分 (東から)



6. 墓道主軸ライン 土層断面北部分 (東から)



7. 埋葬施設短軸Cライン 土層断面 (北から)



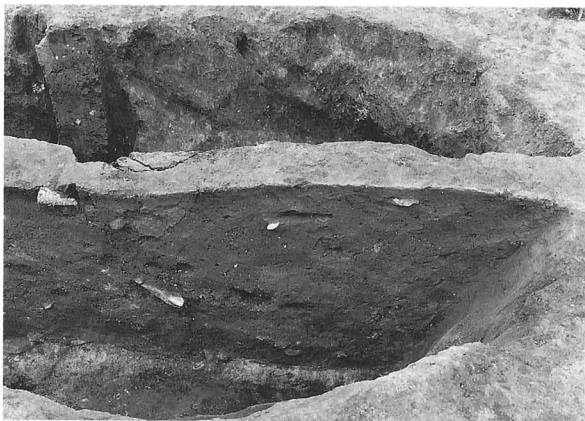
8. 埋葬施設短軸Dライン 土層断面 (北から)



1. 埋葬施設主軸ライン 土層断面南部分 (東から)



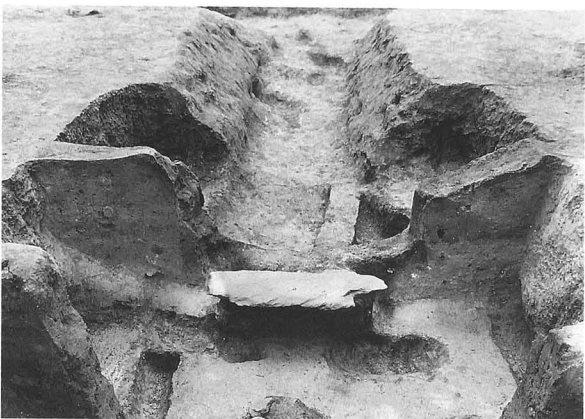
2. 埋葬施設主軸ライン 土層断面中央部分 (東から)



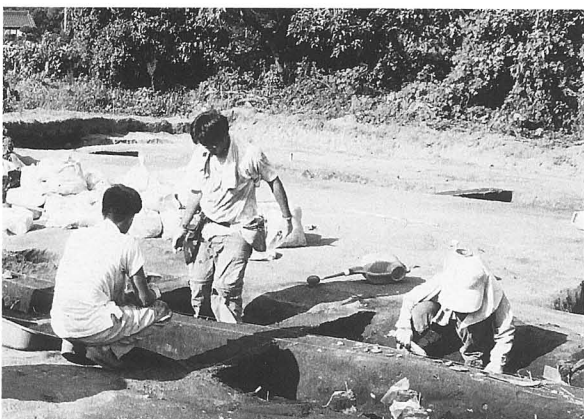
3. 埋葬施設主軸ライン 土層断面北部分 (東から)



4. 埋葬施設短軸Cライン裏込 土層断面 (北から)



5. 埋葬施設短軸Dライン裏込 土層断面 (北から)



6. 作業風景



7. 闕石見通し (北から)



1. 埋葬施設裏込  
検出状況 (南から)



2. 埋葬施設  
完掘状況 (南から)



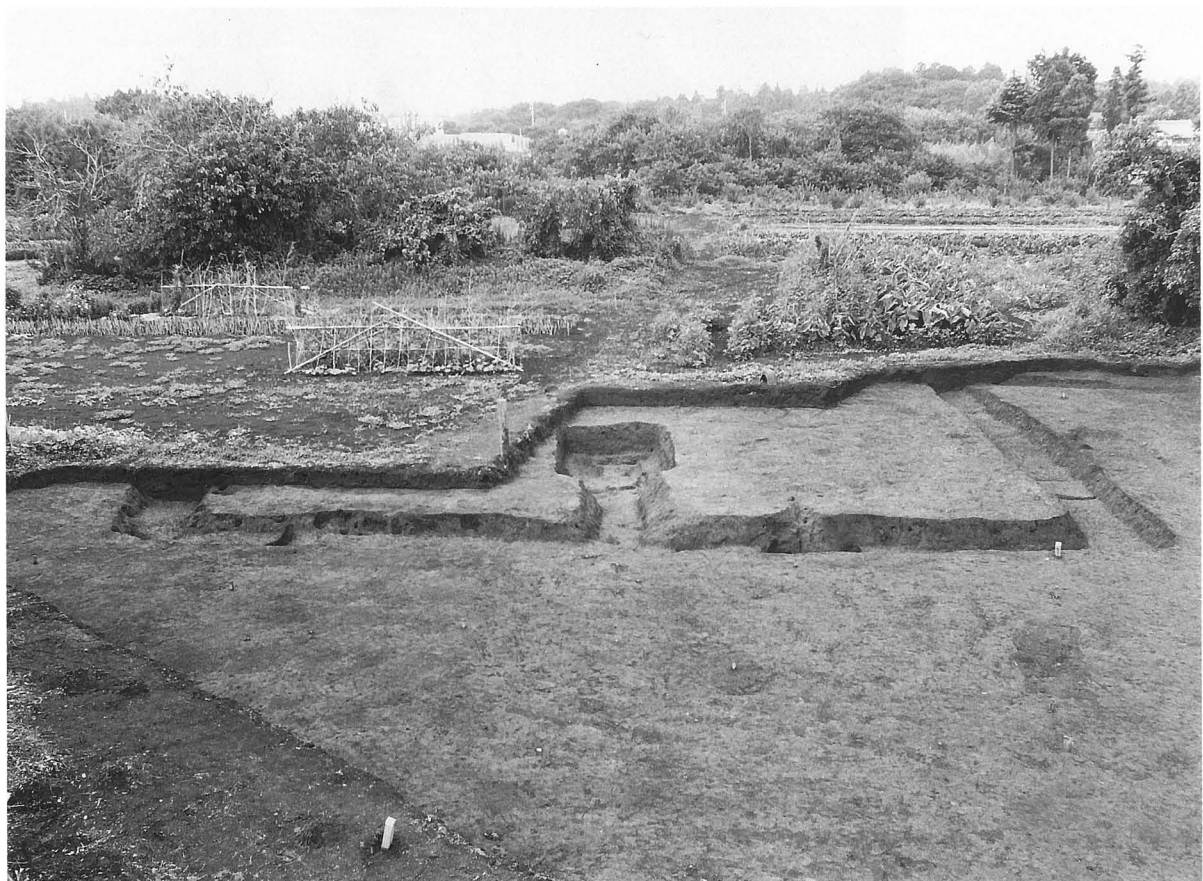
3. 作業風景



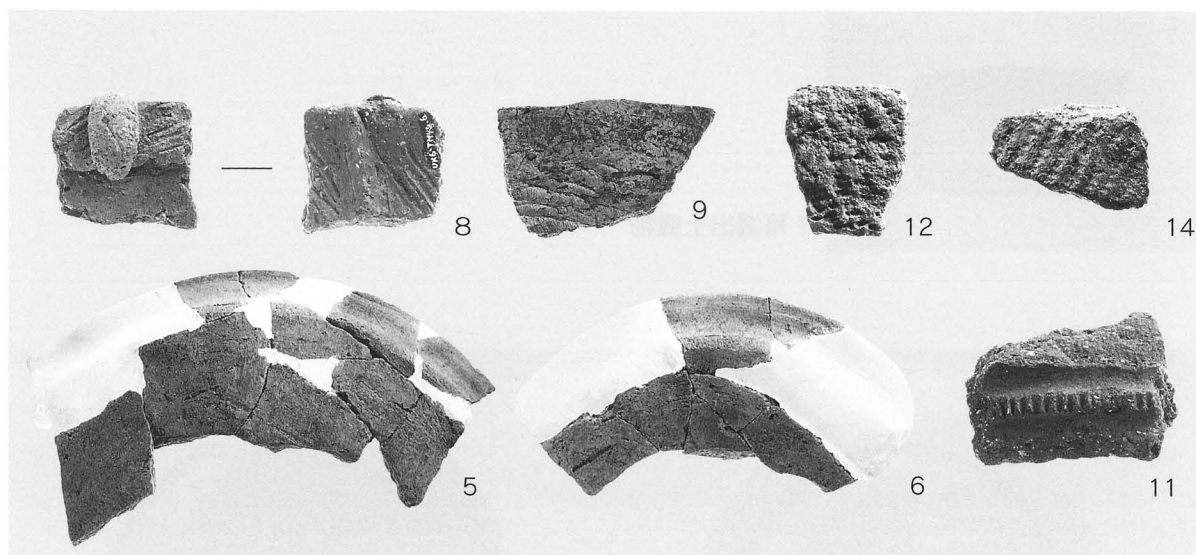
4. 2号土坑完掘状況 (北から)



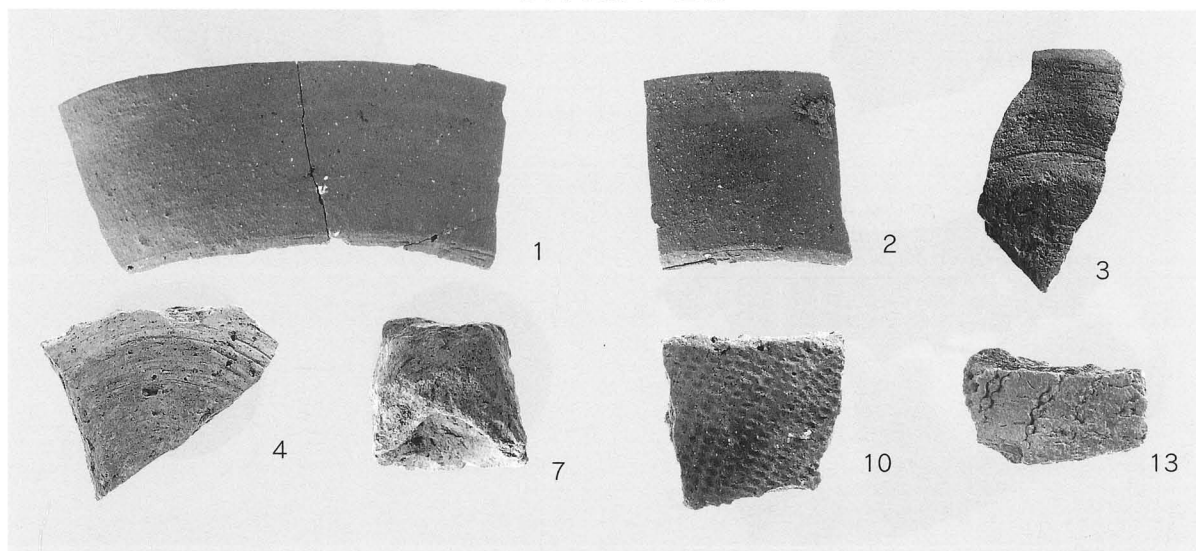
1. 主体部 完掘状況 (南から)



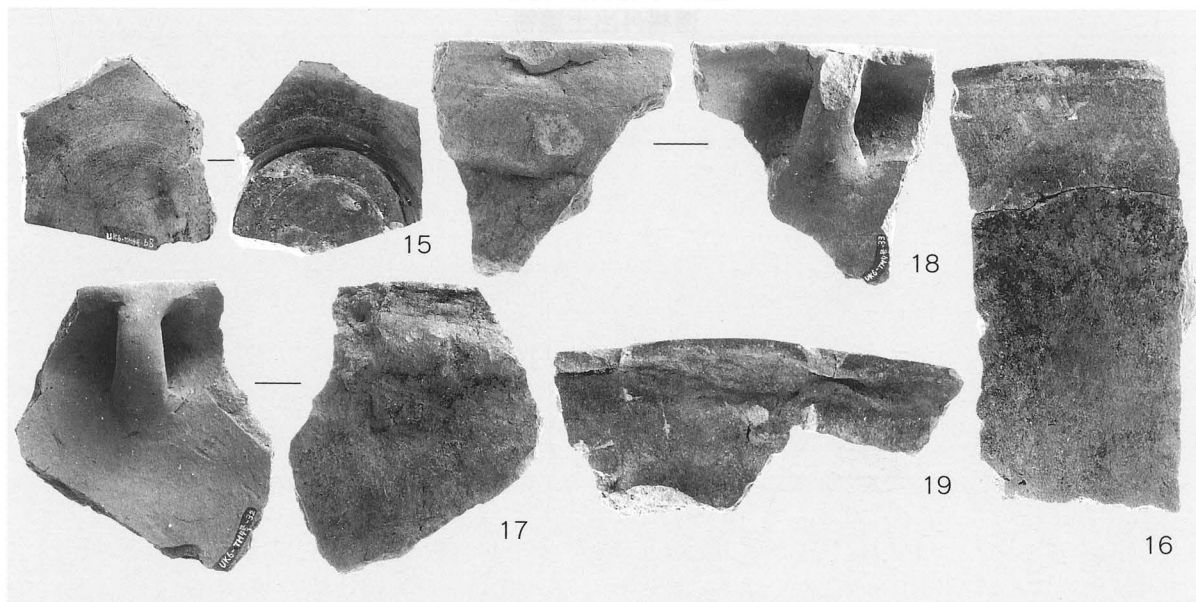
2. 4号墳 完掘状況 (南から)



4号墳周溝出土遺物

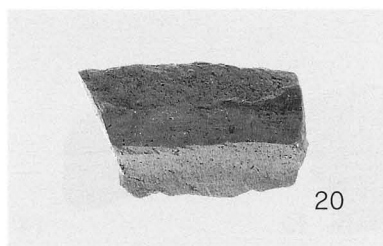


4号墳主体部出土遺物

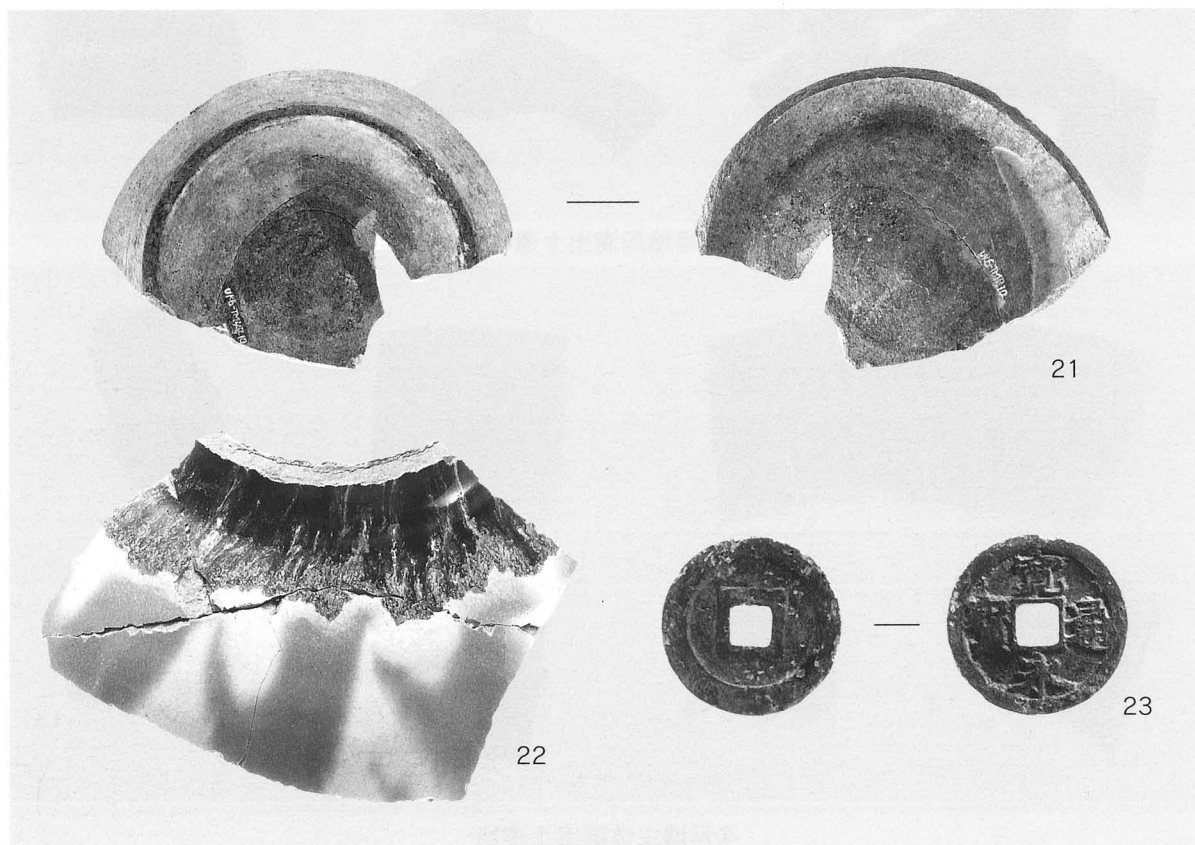


1号土坑出土遺物

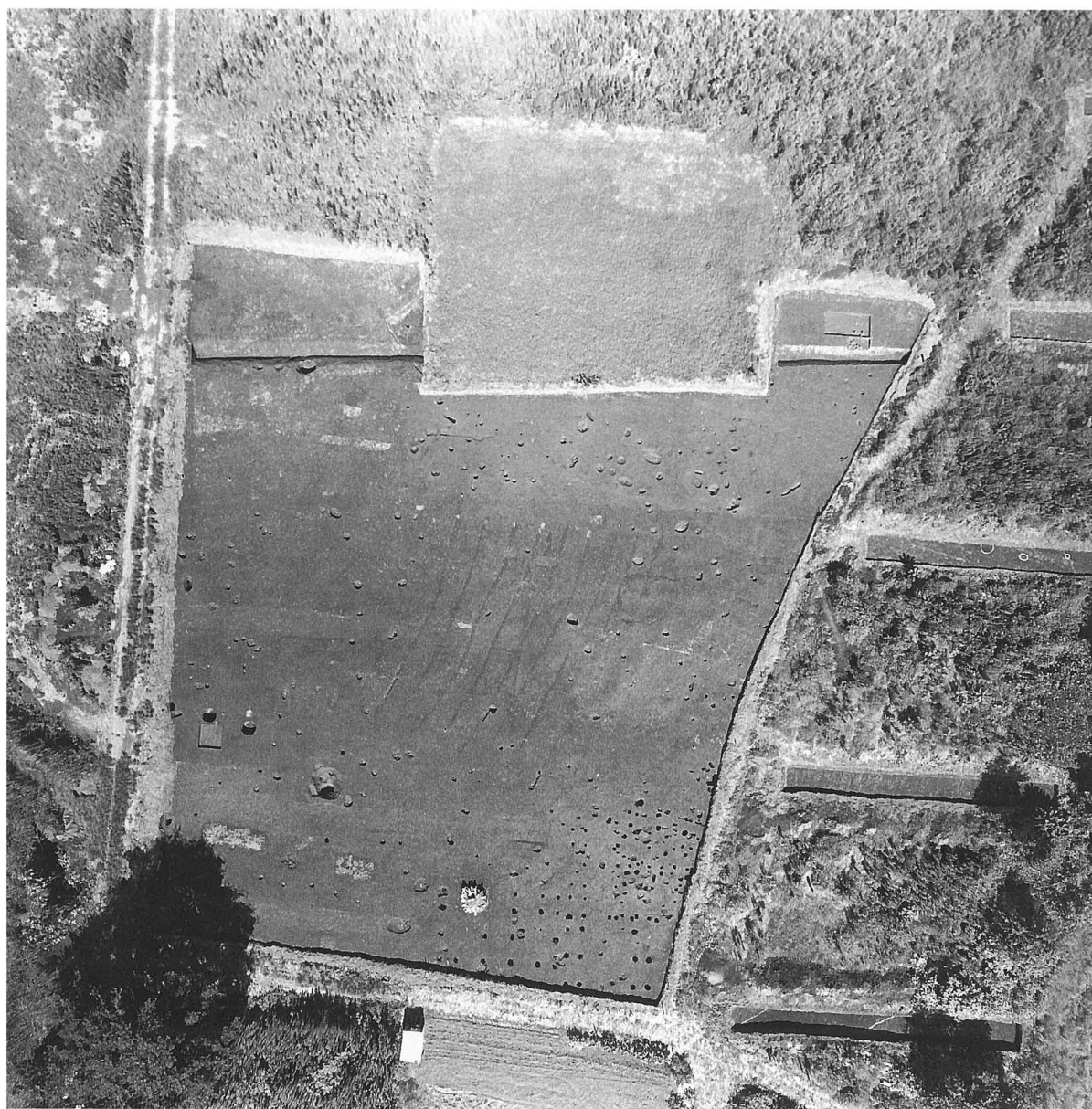
PL 46 北西原遺跡



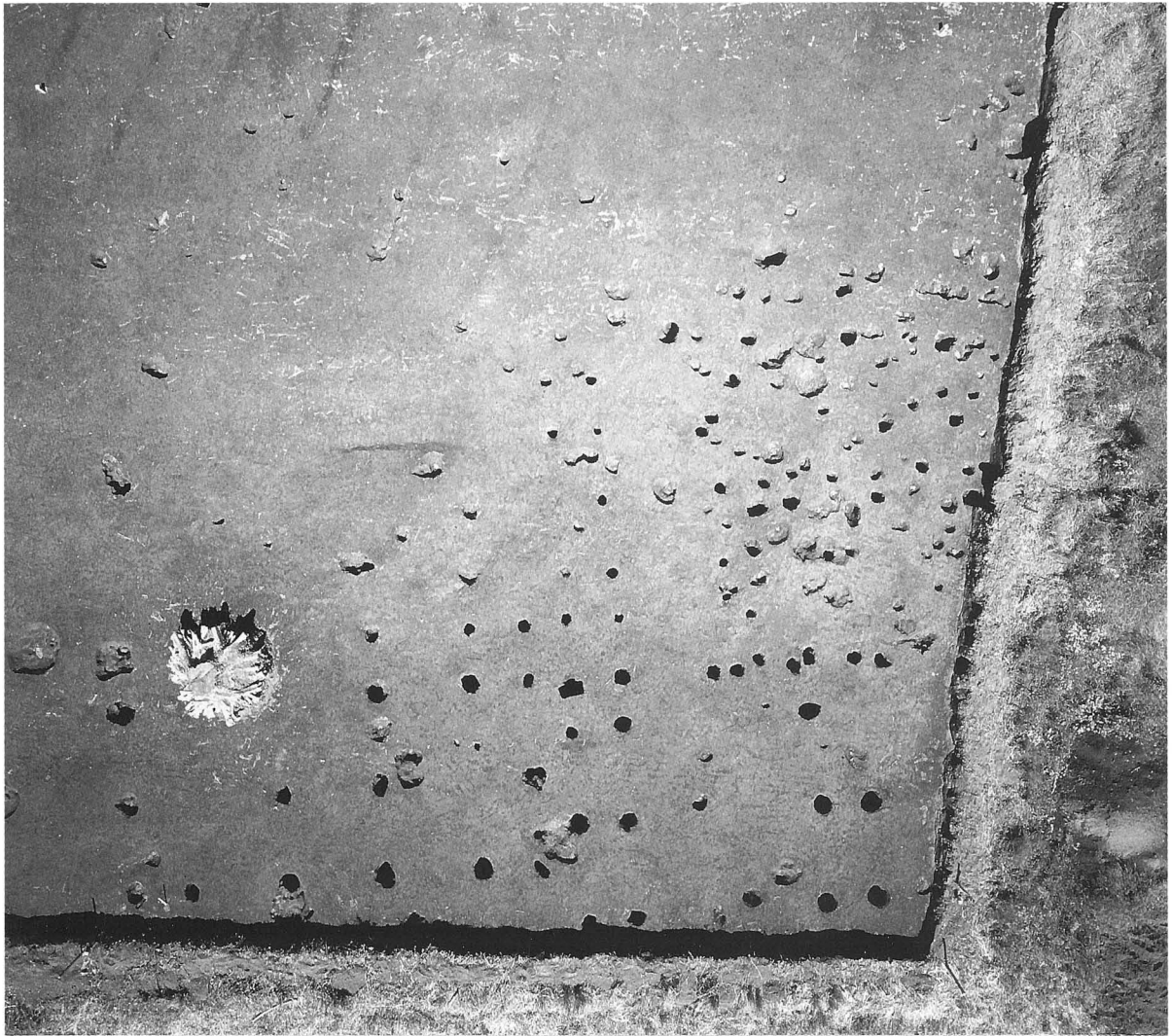
1号溝出土遺物



遺構外出土遺物



神明遺跡第4次調査区 全景



掘立柱建物群 俯瞰



第1号建物跡 (南から)



第3・4号建物跡 (東壁から)





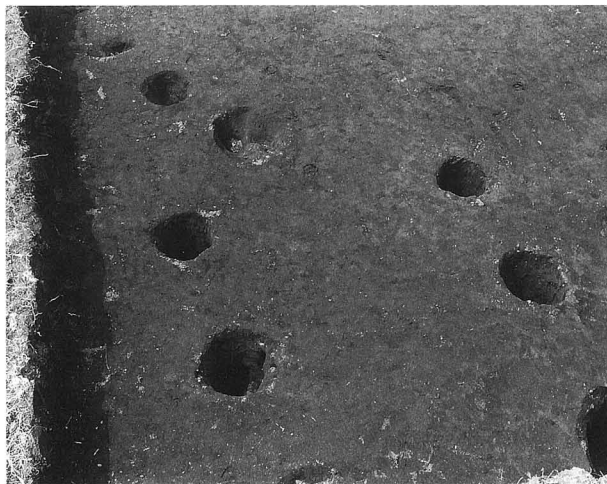
第1・3・5・6号建物跡（東から）



第1号建物跡 P12断面



第5・6号建物跡（南から）



第3号建物跡（東から）



体験発掘調査風景



中世柱穴群密集区 (南東から)



第7・8・9号建物跡・柵列 (東から)



体験発掘調査風景

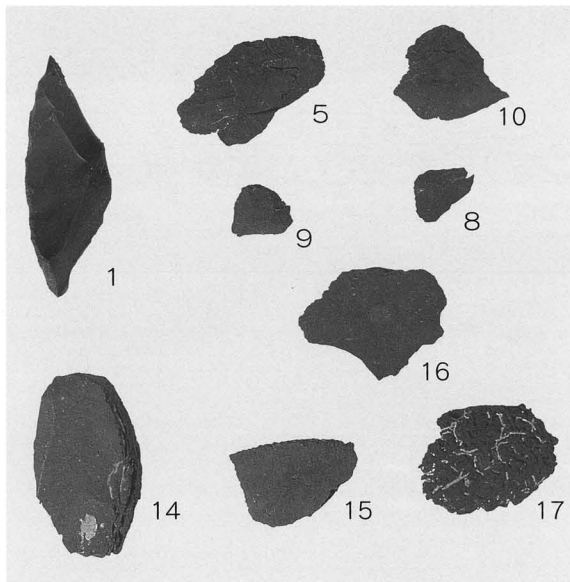


旧石器北部調査区（南から）

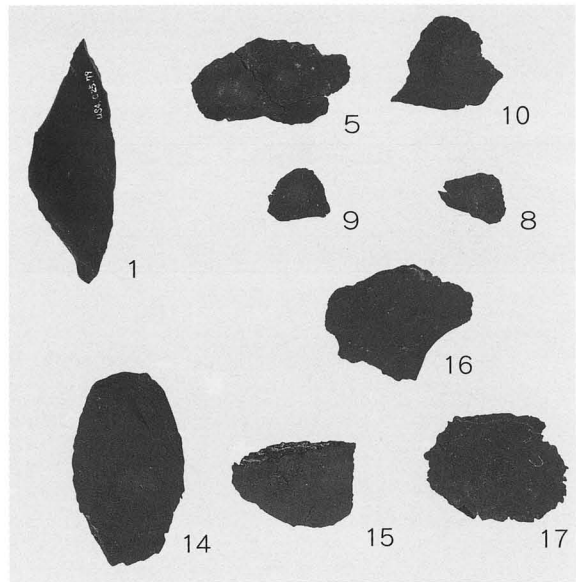


旧石器北部調査区（西から）

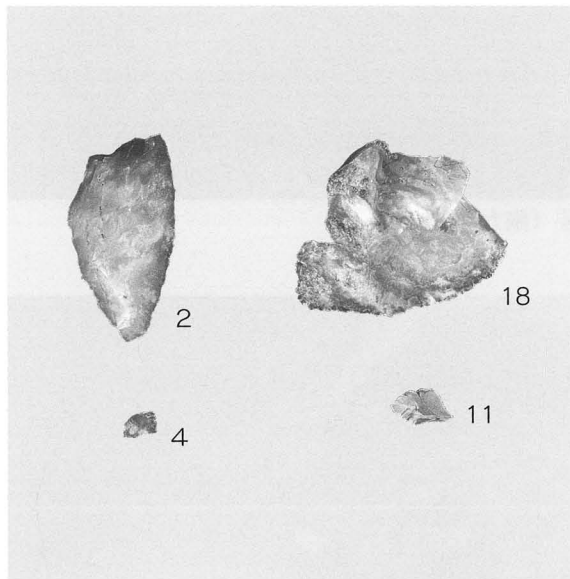
PL 52 神明遺跡



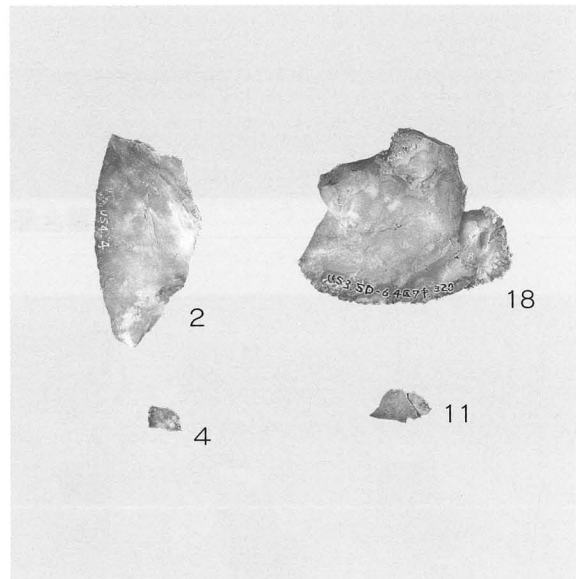
硬質頁岩(1)・安山岩(5・8~10、14~17)製石器 (表側)



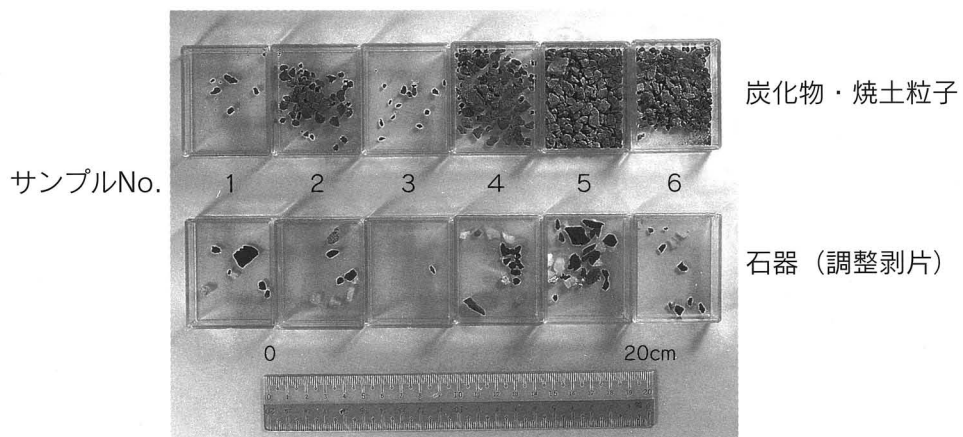
硬質頁岩・安山岩製石器 (裏側)



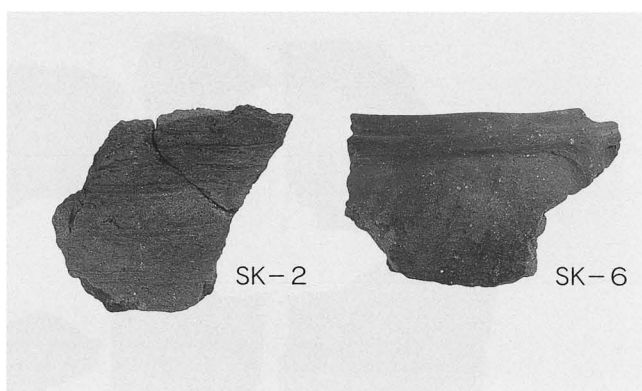
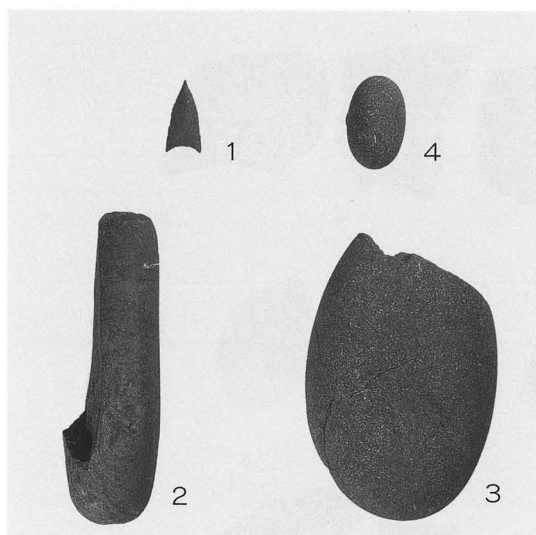
メノウ(2・4・18)・玉髄(11)製石器 (表側)



メノウ・玉髄製石器 (裏側)

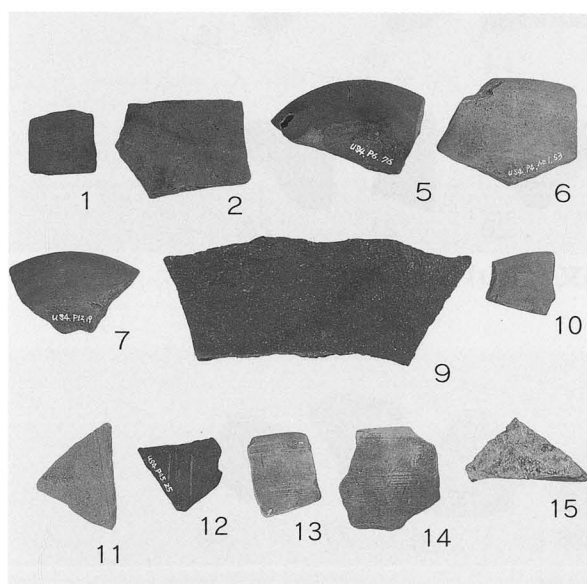


水洗選別で回収した遺物

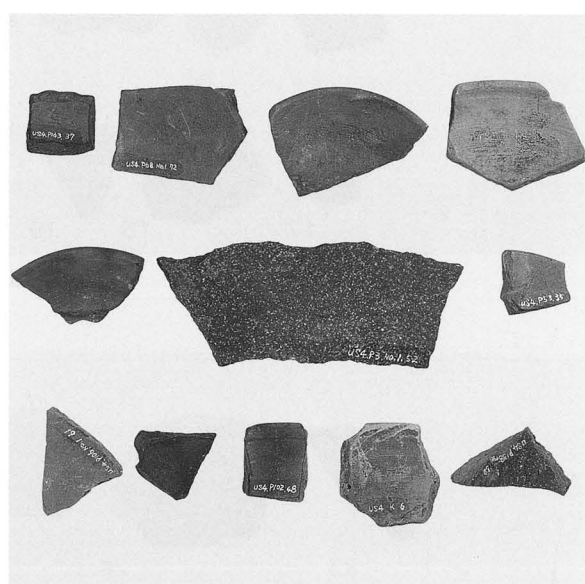


土坑内出土縄文土器

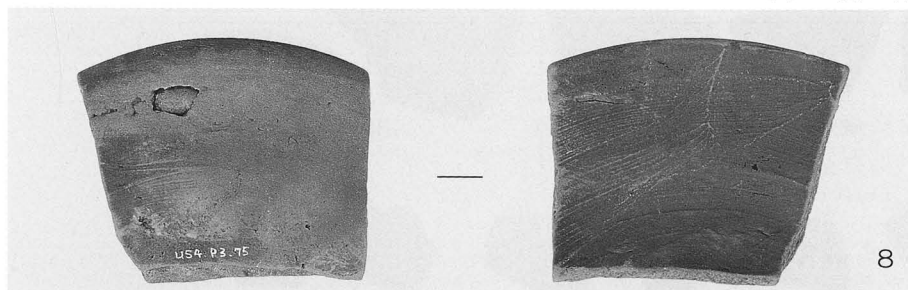
遺構外出土縄文時代石器



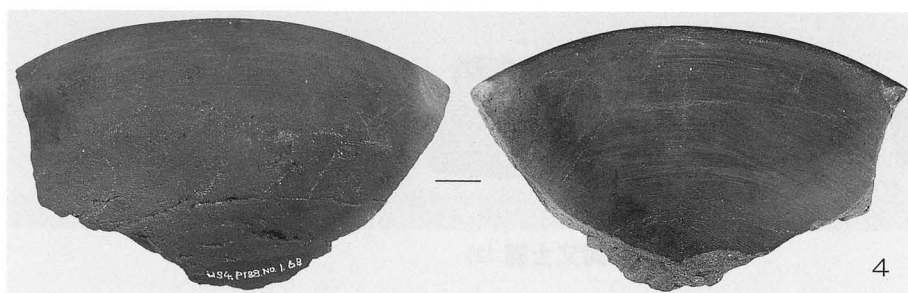
中世土器・陶器片 (外面)



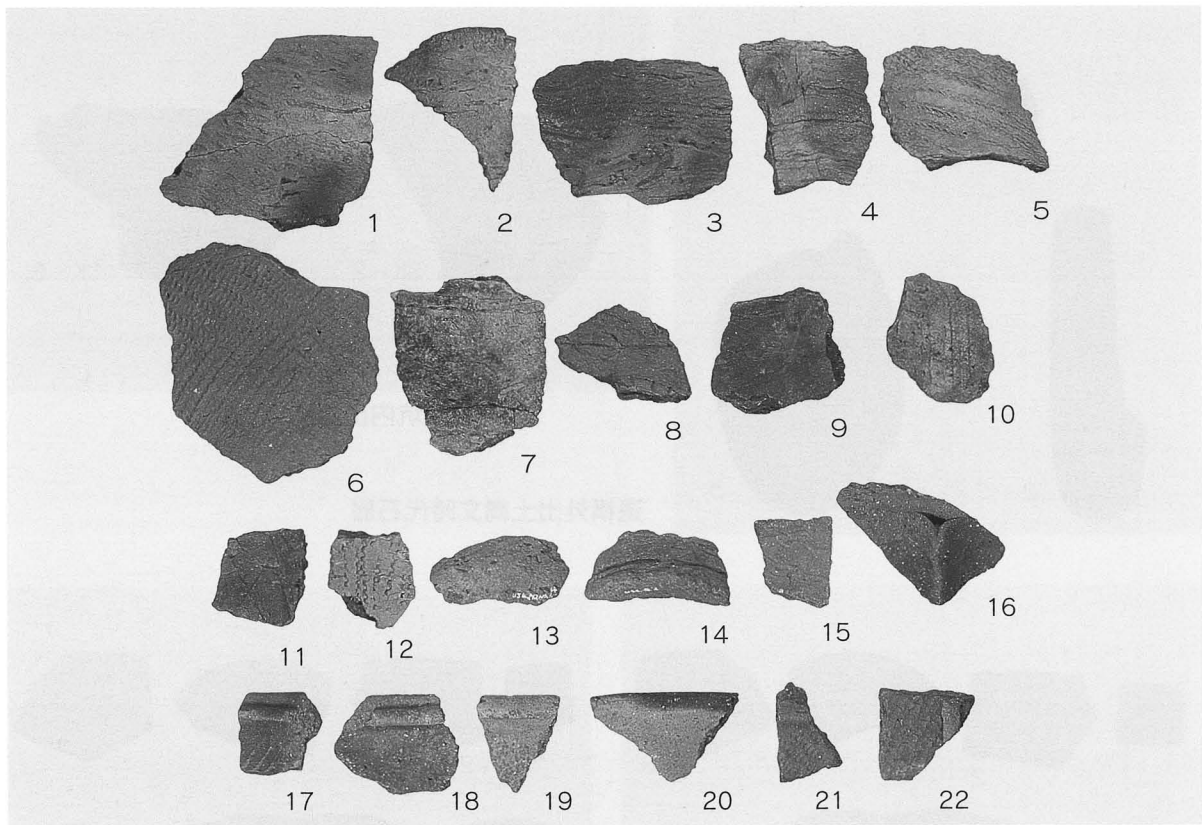
中世土器・陶器片 (内面)



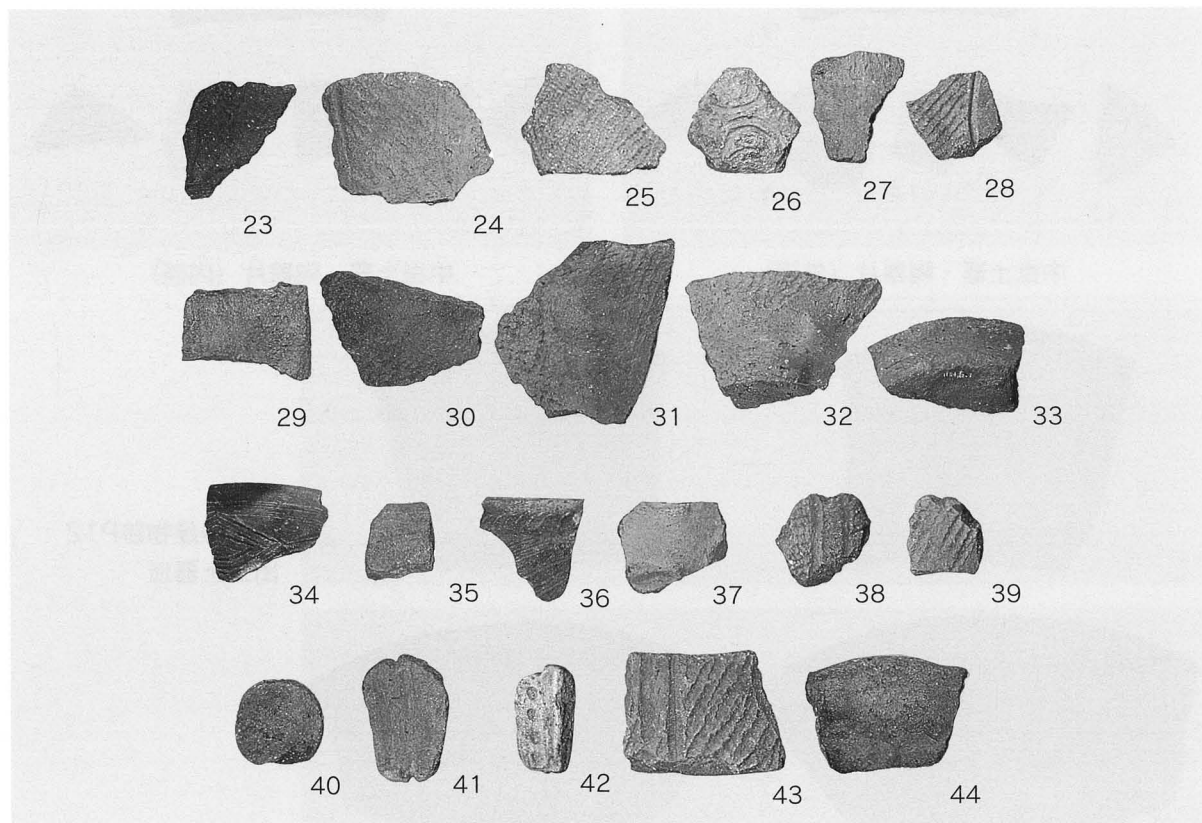
第1号建物跡P12  
出土土器皿



第5・6号建物跡P6  
出土土器皿



遺構外出土縄文土器 (1)



遺構外出土縄文土器 (2)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな		やまかわこふんぐん にしやついせき きたにしはらいせき しんめいいせき						
書名		山川古墳群確認調査・西谷津遺跡・北西原遺跡第6次調査・神明遺跡第4次調査						
副書名		土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次		第7集						
編者名		比毛君男	著者名	小川和博 窪田恵一 比毛君男 福田礼子 駒澤大学考古学研究会				
編集機関		西谷津遺跡調査会						
所在地		〒300-0811 Tel 029-826-7111 茨城県土浦市上高津1843 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内						
発行年月日		西暦2003年3月15日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまかわこふんぐん 山川古墳群	つちうらしおおあぎ 土浦市大学 ひたなあぎやまかわ 常名字山川	08203	235	36° 6' 1"	140° 11' 12"	2002(平成14)年 7月17日～7月23日	トレンチ総面積 248.7m <sup>2</sup>	市総合運動公園 建設事業
にしやついせき 西谷津遺跡	つちうらしおおあぎ 土浦市大学 ひたなあぎにしなにがしら 常名字西谷頭	08203	245	36° 6' 20"	140° 11' 20"	2002(平成14)年 7月30日～9月21日	1,485m <sup>2</sup>	市総合運動公園 建設事業
きたにしはらいせき 北西原遺跡	つちうらしおおあぎ 土浦市大学 ひたなあぎきたにしはら 常名字北西原	08203	238	36° 6' 9"	140° 11' 5"	2002(平成14)年 7月30日～8月24日	600m <sup>2</sup>	市総合運動公園 建設事業
しんめいいせき 神明遺跡	つちうらしおおあぎ 土浦市大学 ひたなあぎしんめい 常名字神明	08203	237	36° 6' 5"	140° 11' 10"	2002(平成14)年 7月18日～9月26日	2,500m <sup>2</sup>	市総合運動公園 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山川古墳群 確認調査	古墳群	古墳時代 中世	古墳周溝 溝	縄文土器 弥生土器 陶器(常滑) 土師質土器		昨年度確認調査の隣接地に、 7本のトレンチを設定し、 古墳の周溝や溝状遺構を発 見した。		
西谷津遺跡	集落跡	古墳時代 奈良・平安 時代	竪穴住居跡13軒 竪穴住居跡12軒 掘立柱建物跡1棟	土師器・須恵器 土師器・青銅製帯金具 須恵器等		第21号住居跡(奈良時代) から、青銅製帯金具が出土 した。		
北西原遺跡 第6次調査	古墳	古墳時代 (終末期)	方墳 1基	須恵器・土師器		横穴式石室を有する1辺約 18.6mの終末期古墳。		
神明遺跡 第4次調査	石器製作跡 館跡	旧石器時代 縄文時代 中世	石器製作跡1基 掘立柱建物跡10棟	メノウ製石器 安山岩製剥片・頁岩製ナイフ 土師質土器・鉄製品		メノウと安山岩の石器製作跡。 13世紀を中心とする方形館跡。		

**山川古墳群確認調査  
西谷津遺跡  
北西原遺跡(第6次調査)  
神明遺跡(第4次調査)**

土浦市総合運動公園建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集

発行日 2003年3月15日  
編集 西谷津遺跡調査会  
問い合わせ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場  
〒300-0811  
茨城県土浦市上高津1843  
TEL 029 (826) 7111  
印刷 株式会社 横山印刷